

名バ列伝『グレートエ スケープ』【完結】

伊良部ビガロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

XX93年4月1日、とあるサラブレッドがこの世に生を受けた。

後に競争馬として名付けられるその馬の名は「グレートエスケープ」

この物語は、そんな1頭のサラブレッドによつて紡がれる物語……と！

思っていたが……どうやら賢さにバグがあるようです。アプリを再インストールしてみましよう。

そんな競走馬に憑依し、さらに気づいたら可愛いウマ娘に!?

夢か現か、人かウマか。

どちらかわからなくともレースがあるならばレースを駆けるのみ。

目指すぜ最強のサラブレッド／ウマ娘！

※我慢できず気が向いてしまったので勢いだけで書いたウマ娘なのか競馬なのかよくわからん二次創作です。独自設定、史実改変、オリウマ娘登場注意。好きな人はぜひ読んでいってください。

目次

本編

第1話 グレートエスケープ(大脱走)

2

第2話 脱走名人

23

第3話 走れ!グレートエスケープ

40

第4話 Make debut!

58

第5話 走り出す思い

91

第6話 Fight Song!!

114

第7話 勝利と暗雲

141

第8話 焦燥と憧憬

155

第9話 ダービーへようこそ

193

第10話 winning the

soul 213

第11話 再始動、そして停止

251

第12話 継承

275

第13話 咲き誇る

301

第14話 夢、想い、そして勝利

330

第15話 グレートエスケープの世界

351

第16話 休息

388

第17話 UNLIMITED IM

PACT

第26話 手が届きそうで 670

第18話 臨戦態勢

第27話 指先が触れるには遠く

第19話 NEXT FRONTIER

722

R

第28話 それでも手を伸ばす星の名

第20話 スペシャルな出会い

は

755

487

第29話

786

第21話 踏み出す恐怖

第29話 EX Silent Star

511

第22話 誰かのために、自分のため

r

805

に

第30話 蹄跡を刻んで

818

第23話 Get back

第31話 飛び立つための翼

861

第24話 覚醒

第32話 Never Look in

642

第25話 シューティングスター

g Back

888

第33話 翼を広げて | 918

第34話 LEGEND 4 U

968

最終話 Special Record

d! | 997

エピローグ グレートエスケープ(偉

大なる逃亡者) | 1036

エンドクレジット 夢は続いていく

1048

名バ列伝

名バ列伝 その1 | 1067

名バ列伝 その2 | 1221

名バ列伝 その3 | 1148

名バ列伝 その4 | 1163

名バ列伝 その5 | 1191

名バ列伝 その6 | 1226

名種牡バ列伝『グレートエスケープ』

第1話 喪失、それでも前へ | 1264

第2話 調子乗ってすみませんでし

た。 | 1282

本編

第1話 グレートエスケープ（大脱走）

——時はトウインクル歴2208年。

ウマ娘と人類が宇宙へ進出して既に2000年以上が経過していた。だが、宇宙へ歩みを進めても人類はお互いの利益、宗教、イデオロギーのために争い、血を流すことをやめはしなかった。

そして地球トレセン学園連邦に対して反旗を翻したシャダイ公国が引き起こしたタカラヅカⅡキネン戦争の趨勢が、今決まろうとしていた……

「ゴールドシップ！ なぜわからないんですの!?! こんなものを地球に落とせばにんじん一本食べられない惑星になるんですのよ!?!」

「地球にいるやつらは自分のことだけ考えてるやつが多すぎるんだよ……だから全員ブリーにしてやると宣言した!」

マックイーンの駆けるウマ娘スーツ『オーロラ』とゴールドシップの操る『ポイントフラッグ』が火花を、エネルギーを、刃をぶつけ合う。漆黒の宇宙に瞬きほどの光が生まれては消えていく。

「ウマ娘がウマ娘を罰しようなどと……!!」

「このゴールドシツプ様が肅清しようというのだよ!」

「エゴですわそれは!」

「地球が持たねえ時が来てるんだよ!」

刹那、『ポイントフラッグ』が構える。

——それはライフルというにはあまりに大きすぎた。大きく、分厚く、重く、そして大雑把過ぎた。それはまさに核兵器だった。

「こいつでまとめて吹っ飛ばしてやるぜえええーっ!」

「くっ、受け止めなければスイーツ、いえ地球が……生けるものすべてが全部ブリになっ
てしまいます!」

砲口から放たれる黄金色の砲撃。

ヒシアケボノ級戦艦だろうと一撃で飲み込む極太の光線を今更かわすことは不可能、
マックイーンは冷静に判断した。

ならば、防ぐまでのこと。核兵器の熱量すらも受け止められるはずの、防具で——

「おばあさま……私に力を——ッ!」

「なにいつ?!」 そいつはメジロ共和国に伝わるという天皇賞・春の盾!」

「うおおおおつ、スイーツ、いえ地球はきつと、守って見せますわ——ッ!」

永遠にも感じられるほど、引き伸ばされる時間。

メジロマックイーンが渾身の力で受け止めた黄金の輝きは徐々に宇宙の漆黒へ散っていく。

「はああああつー！」

「馬鹿な、このゴルシ様のネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲が……貫けねえだとツ！ ジャスタつ、ジャスタウェイ反応しろ！ どういうことだ！」

「ミスタータイ……ヴィクトリーズのユタカのように、華麗にかっ飛ばしますわああー！！」

盾から弾かれる一筋の光。互いの信念をぶつけあうマックイーンとゴールドシツプは共に気づかなかったが、ウマムスキー粒子で構成された残滓は圧倒的なエネルギーの余波で生まれたワームホールに吸い込まれていった。

そしてワームホールの出口には、同じ地球——だが遙か過去、それもパラレルと呼ばれる時間軸の違う地球の 대기圏に吐き出されたのだ。

ウマムスキー粒子は次第にエネルギーを失っていく。そしてその残滓が、日本の北海道、とある牧場に降り注いだ。

たづなさんはその現象により生み出される世界を思い描く。

「人の域に留めておいたウマ娘が本来の姿を取り戻していく。人の掛けた呪縛を解いて、人を超えた神に近い存在へと変わっていく。天と地と万物を紡ぎ、相補性の巨大なうねりの中で、自らをエネルギーの凝縮態に変身させているんだわ。純粋に人の願いを叶える、ただそれだけの為に……」

それによつて、多くの競走馬の運命が大きく変わるのだった……

——つまりゴルシちゃんのせいだから仕方ない！

〇〇〇

「だいぶ熱が下がったな……」

「先生も峠は越した、と。しかししばらく様子は見ないと……大丈夫ですかね」

「臆病な気質で、さらに肺炎の重症化。馬としてはしんどいだろうから、走る気を出してくれるかどうか」

「ウチとしては待望の大作になりそうな馬だったのに」

誰かが話す声がある。なんでだ。俺は家の布団で寝ていたはずだ。肺炎？ 家で倒れて救急搬送でもされたというのか？

体が重い……腕が持ち上がらない。声も出づらい。

『ブルルウ……』

馬みたいな変な声が出た。意識を失うほどの肺炎で救急搬送されたなら酸素マスクとかもしていたのだろう。喉もカラカラになっているはずだ。

少しずつ慣らしていこう。

「馬体はいいんだが元々臆病なのがな。病弱でもあったから、競走馬になれるかは怪しいぞ」

「元気な時はよく走って見えるのに」

「生き物だから、ままならんものさ。とにかくこの後も気を抜かずに見ていくぞ」

この人たちはドクターだろうか。重い瞼を開けるとジャージ姿のおっちゃんとおんちやんだった。

どう見ても医者じゃない。面会する部屋を間違えてそのまま馬の話？　おいおい

こつちは重症患者だぞ。看護師さんになんとかしてもらおう。

ナスコールはどこだ……これかな。藁だ。笑、じゃないが。いや待て。なんで藁？　いやそもそも、何だこの手は。

……馬の手というか、脚……？

「競走馬としての買い手がつくかなあ……見栄えはいいとはいえ、ひ弱だと意味がないからなあ」

「一応見に來たいという方はいますけどね。ほら、こいつの母親のシルバーパートの馬主さんが」

「ああ、あの人は馬主を引退するつてさ。ちよつと本業が大変だから趣味はやめるつて。それにしてもあの母親は丈夫だったんだがな……父馬に似たのかなあ」

「父に似てるならダービー馬の素質があるつてことじゃないですか」

「そこまではいわんけどな。体型とかは似てると思うんだよな……」

二人がこつちを見ながら話をしている。これはアレだ。夢だ。俺が馬になんてなるはずがない。

確かにとても眠い。きつと疲れて変な夢を見ているのだろう。

俺はもう一度瞼を閉じた。うまうまうみやうにや……。

夢じゃないやんけえ!!

「うわつ、なんか病気になる前よりお前元気になったなあ……」

夢じゃない! 馬になつてる! 脚が地面に着く度蹄の音がして楽しいよわあいなんで言つてる暇ないわ!

どうしてですか? どうして……

「本当に大丈夫か? とりあえず元の場所に戻つてこい」

かばかば、蹄を鳴らして失意の只中にいる俺を牧場のあんちゃんが行ってこいよなんて気楽そうに言う。

その中は柵でおおわれているものの、広大な草原が広がっていた。そこにはちらほら、ほかの馬もいる。

「ぶるるっ、ぶるるっ！（行けるわけねーだろ！ 無理だよ！）」

「うおお、嫌がるのは相変わらずだな……そうそう、落ち着け落ち着け、ちよ、やめ、やめろって！ 力強くない!！」

騒ぐ俺を見つめるほかの馬たち。やだ、言葉通じない……多分。注目を集めてしまいい牧场デビューはさらに難しくなってしまった。

もう行きたくねえ。

「ぶあつ！（嫌だア!）」

「うおっ、あぶねえ!!」

暴れるあまり、俺は二足歩行を獲得した。ごめん、立っただけだ。

しかしその弾みであんちゃんが尻餅を着いてしまった。このままでは前脚で踏みつけてしまう。

慌てて体をひねると同時に、あんちゃんも転がるように俺から離れた。

「あぶねえな……本当に。ったく、元気になるのはいいんだけどさあ」

いてて、と腰を擦りながらあんちゃんは立ち上がる。なんてこともなさそうな振る舞いだが、避けようと必死な姿はそれだけ馬の巨体が危険だとわかっているからだろう。もう俺は人間じゃない——無意識のうちにそれを否定していたのだろうが、俺は観念した。

謝るつもりで頭を下げる。するとあんちゃんは笑いながら俺を撫でた。

「謝ってるのか？ おいおい、賢くまでなつちまつたな……病気で少しおかしくなったか？」

少しむかついたので頭でぐい、と軽く押してから草原に歩き出した。まだ、人間だった頃の気持ちと折り合いはつけられそうにない。まずは芝生を歩き回って頭を冷やすところから始めるべきだと、俺は思った。

イエエエエ!! ヒヤツハアアアア!!

超☆サイコー!! 走るのたのちいいひやつほおおおお!!

「うーん、大丈夫かな。元気すぎやしないか？ 骨折とかしそうだ」

「頭おかしくなったりとか？」

「ない……と思うんだがなあ」

走り回る俺を見ながら語る牧場主と思われるおつちちゃんと従業員のあんちゃん。

こうして走ってわかったのは、俺は馬として走ることを気に入ってしまったということ。どうせ考えたところで人間に戻れるわけもなし。

馬として人生、いや馬生を楽しまにや、暗い人生になってしまいうだろう。

おつちゃんやあんちゃんは競走馬といていた。つまり品種はサラブレッド、超がつくほどの経済動物だ。

当然、人間より遥かに過酷な末路が待っているかもしれない。ならばこそ、悩んでいないでこの生き残るかを考えなければなるまいッ！

いくぜえええ!! 私の競走馬生活はここからスタートするのだアッ!!

「あんだけ元気なら競走馬でもやっていけそうだがなあ」

「あの臆病なあいつが? 人を乗せられますかねえ」

うおおおお!! 坂道楽しい!! 蹄の音が最高に面白い!! ん? これは芝じやないな……くんくんくん。ヴォエッ!! うんこじゃねえかッ!! くせえッ!!

頭が冷えた。何をあんなにはしやぎまわっていたのだろう。1週間も走り回れば、放牧地に目新しいものはなくなる。そうなると暇で仕方がない。

テレビ、ゲーム、漫画……そういうものが欲しくて仕方がない。

とはいえ、だ。あの時考えたところ競走馬として生きることには嘘ではない。デビューー

すらできないければ、デビューしても勝てなければよくて乗馬や観光業で働くことになり、最悪馬肉や実験動物だ。

誰だってそれは嫌だ。やる気を出さなくてはなるまい。人間だった俺はもういない。ここにいるのはサラブレッド（牧場のみんなからは黒鹿毛なためか『クロスケ』ととりあえず呼ばれてる）の俺だ。

と、気合いを入れても暇なものは暇だ。牧場にいるみんなが来ると楽しいが仕事をし
てるからそんなに会えない。

同じ放牧地の1歳馬たちは最初こそいじめっ子キャラなのか、追いかけて回してきたから適当に逃げて遊んでいたが、バテて諦めてしまっている。

「おいおいクロスケ、また端っこにいるのかよ。虐められっぱなしだなあお前は」

は？ 違うが？ あいつらと遊んでやっただけだが？ 今も端っこで「なんだアイツ……なんで追いつけねえ！」「逃げてばかりの弱虫が……あんなに速かったっけ？」「むりり……！」とか言ってるぞ？ マジだぞ？ 馬語わかるんだぞ？

抗議とばかりに頭を押し付けるが「よしよし」とあんちゃんに撫でられてしまう。むむむ、くるしゆうないぞ……俺、男のはずだったんだけど。なんで撫でられて喜んでるの？

冷静になって頭を引っ込めると同時に、車のエンジン音が聞こえてくる。おっちゃん

たちが使う車とは違う車種だ。

「お客さんかな。……見学に来るって言うってたような……あつ、出迎えの準備してなかったわ！」

それはまずいだろう。あんちゃんよ、はよ行け。

俺は背中を押すように頭を押し付けた。それにしてもなんかもつといい感情表現とか、仕草はないだろうか。いつも頭を押し付けてばかりだ。

慌てて走り出したあんちゃんを見送りながら、車から出てくる人影を見つめる。

俺は気に入ってるが決して観光名所になるような大きな牧場ではない。親戚だろうか。そうして見つめていると、車から出てきたのはぱっちりとした目が可愛いお嬢さんだった。

「おお、美人だな……これは乗馬にでも来たかな？」

うちで乗馬をやつてるところは見たことがないが、あのおつちゃんのことだ。乗つてみるか？　なんて言い出すのかもしれない。

うーん、良い尻だ。俺に乗って欲しい。おつとこれは下ネタじゃないぞ？

しかし言葉も喋れない俺が立候補など出来るはずもない。だからといって諦めるには惜しいが……そこで俺は放牧地の出入口の南京錠がかかっていないことに気がついた。

南京錠だけでなく門もあるのだが……俺にとつてはこんなもの知恵の輪よりも簡単だ。

手を伸ばして弄って……はい開いた。扉が空くとほかの馬たちがこちらに気がつくが、流石にあいつらは大人しく柵の中に帰るようなお利口さんではない。

南京錠を口と舌で動かし、軽く噛んで……カチツとハマる音。

出入口の施錠、ヨシ！ あんちゃんには現場猫シリーズのオアシスの言葉を贈ろう。

「よっしや、美人のもとへエスケープだぜえ！」

かほかほと足取り軽く、歩みを進める。

今生で初めての脱走は俺のバ生を大きく変えるきっかけになったのだった。

○○○

私は競馬が好きだった。幼い頃、父に見せてもらった日本ダービーの熱狂と歓喜は今でも思い出せる。そのころから私は競馬があればレースを見るようになった。

そして大人になった私は父の事業を引き継ぐと、馬主になりたいという想いを抑えきれなくなった。馬主資格取得のための審査を受け、調教師や生産者との交流の場では積極的に話を聴く。

そしてここ、懇備式（コンビニ）牧場の牧場主である天長（アマナガ）さんから競走馬の購入の話を受けた。

当然、買った馬が勝つどころかデビューするかどうかともわからない、厳しい世界ということは理解している。だが、いざ馬を選ぶ段階になるとダービー、有馬記念といった大レースで勝つ自分の馬と、馬主として表彰される自分をつい妄想してしまう。

「では橘（タチバナ）さん。じゃあとりあえず一歳馬から見いきましようか」
「よろしくお願いします」

「とりあえず準備はしてくるので、お待ちください。建物を見ても大丈夫ですから。とはいえ、あまり見るものもありませんが……」

牧場の従業員の方——慌てて出迎えてくれた姿に驚かされたが——の苦笑いに対してこちらも笑みを返す。部屋の中で待とうか悩んだが、どうせなら北海道の大自然の空気を吸いたくなかった。

私は外に出て周囲を見回した。まず第一に出てくる感想は『広い』という一言だ。放牧地の方だろうか、馬が数頭寝転んでいる姿が見える。

懇備式牧場は大きくはないが、馬たちは和やかに過ごしているように見える。これから馬を購入する鼻目もあるのかもしれないが、広大な牧場でのびのびと過ごさせているおかげなのかもしれない。

「んんっ……はー、やっぱ北海道でつかいどーって感じでアがるわ。というか肩凝るわあ……ウチやっぱりああいいう堅苦しい場面苦手だわこれからも会社でやると思うと

つらたにえん……」

牧場関係者がいないところで伸びをしながら思いを吐き出した。

仕事だから、社会人だから他人の目を気にした振る舞いをしているが、本来そういうことはとても苦手だ。結局、道楽の世界だろうと人付き合いからは逃げられない。

「どんな子かなー、トニービンとかブライアンズタイムの子かなー、ダービー馬になっちゃうかなー。やつバマジアガってきた。黒鹿毛とかがいいなあ……あと、頭が良くて人懐っこい馬。そんな子がいいなあ……」

段々居ても立ってもいられなくなり、放牧地の方を向いた瞬間、目の前に一頭の馬がいた。

「ぶるるるっ、ぶるっ……（うおお、美人……お姉さん乗ってかない？）」

黒鹿毛の馬体に、すらつと伸びた前脚と首。見下ろす眼差しは値踏みしているかのように見える。

「なんでこんなところに……従業員の人？ 一頭だけ？」

目の前の馬は興奮した様子もなく、ぱかぱかと私の周りを歩き始めた。そして鼻を鳴らして私の臭いを嗅いだり、身体を近付けてくる。

私は驚きのあまり動けなかった。後から思えば、自分より大きな動物が無造作に近づいてくるなんてかなり危ない状況だった。けど、この時は、目の前の馬に見惚れていた。

「おおい、橘さん大丈夫ですかあー!？」

従業員の方が慌てて走ってくる。くるくると回っていた馬は従業員から隠れるように私の背中に回った。凜々しきを感じさせた馬体が一転して可愛らしく見える。

「この子は……」

「どうやってか脱走したみたいですよ。なんてこった……怪我がなけりやいいんですが」
「貴方脱走してきたの？」

驚きのあまり見つめると馬は鼻息を鳴らした。どうだといわんばかりの反応。従業員の方はため息をついた。こいつはいつも悪戯をするんですよ、と。

脱走するくらい頭が良くて、こんなにも人懐っこい黒鹿毛の馬――

「チョー最高じゃん！ バイブス半端ねえ、つてかパネえ！ え、何この子マジありえないんだけどこの子しか有り得ねーってこれ！」

「た、橘さん？」

「この子にします！ 絶対この子！ この子でお願いします！」

我に戻るまで、しばらくの時間を要した。そして自分の無礼を詫びながらも、この子を買いたいという気持ちを話すと従業員さんも、牧場主さんも快諾してくれた。

もちろん、引退後の面倒も含めて見ることを契約に盛り込んで。

「ちなみに名前とかはあるんですか？」

「クロスケと呼んでましたが幼名のようなもので。是非競走馬として名前をつけていただけたら」

「……この子、脱走してきたんだよね。もしかしたら会いに来てくれたりして……うーん、なら、名前は……『グレートエスケープ』！ うん、これに決めた！ よろしくね！」

私の初めての馬。私が名前を付けると、クロスケことグレートエスケープは大きく嘶いた。

少しテンションが上がってしまったが、冗談ではなくこの子は素晴らしい景色のもとへ連れ出してくれるという確信があった。

×××

桜の匂いが立ち込めて、期待と不安で胸をいっばいにしながら門をくぐる。

きつとここを歩いているウマ娘たちはほとんどがそんな心持ちなのだろう。大半は周囲を気にしながら1人で歩いているが、気づけば既に仲良くなっている2人組も見かけた。

少し羨ましくなる社交性の良さだ。昔からコミュニケーションでは失敗したっけな

……なんて鼻の下を擦る。

「立ち止まってどうした。入学生に何か用があるのか」

「邪魔だったか？ それは失礼した」

振り向くとトレセン学園の生徒会副会長である、エアグルーヴがいた。腕章に生徒会と描かれたものを装着している。入学生に対する案内をしていたのだろう。

「大体なぜ貴様がここにいます」

「私もトレセン学園の生徒だ。トレセン学園にいておかしくはあるまい」

「貴様は補習の対象だったと記憶しているが？」

「……やれやれ。仕方ない。潔く教室へ戻ることにするよ」

「そっちは補習の教室ではないぞ」

「くそア！ あばよとつつあ、違ったエアグルーヴ！」

「待て！ 脱走ウマ娘あり、脱走ウマ娘あり！ 者共であえであえ！ 脱走ウマ娘の名

は——」

——グレートエスケープ！

後方で叫ぶエアグルーヴから私は逃げる。その名前を表すように、跳ねるようにして。デビューはもうすぐなのだから。補習なんてしてられない。そんなことよりト

レーニングだ。

走る途中でアイネスフウジンを見つけた。よく世話を焼かれて、それでいてなんだか他人の気がしなくて、『アイネス姉さん』と慕わせてもらっている。

「アイネス姉さん、おはよう！ バイトで疲れてないかな」

「おはようなのエツちゃん！ 制服姿で走るなんてやる気満々だね……これからトレーニングなの？」

「今もトレーニングの一環かな。アイネス姉さんはどうだい？」

「私もこれからトレーニングなの。一緒に走る？」

「あとでよろしく！」

後ろから私を追いかける声がある。アイネス姉さんに挨拶をして慌てて駆け出した。

3女神像の傍を通ると今度はマヤノトップガンと鉢合わせる。

「おつはよー！ エツちゃんどしたのー？ ……さては補習から脱走したなー？」

「大正解！ 流石マヤだな。大人なオンナは鋭い」

「わかるもん。エツちゃんいつも脱走してるし」

「あれ……そうかな。そうかも。というわけでマヤ、私は別方向に行つたと伝えておいてくれないか」

「アイ・コピィー！ まっかせて！」

「ありがとうマヤ！ 頼りになるオンナ！」

マヤを置いて捕獲部隊から姿を消すべく再び逃げ出した。近くの茂みに飛び込んで様子を窺っている、ほどなくしてエアグルーヴが生徒会所属のウマ娘を引きつれてやってきた。

「マヤノトップガン。ここにあのバカ……エスケープは来てないか？」

「あー、副会長さんが追ってたんだ。えつとねー、エツちゃんは……向こうに行った、と言つてと頼んでその茂みに隠れてるよ」

「は、謀ったなマヤ！」

「ごめんねエツちゃん。ネイチヤちゃんが『大人のオンナの嘘はアクセサリー』って言うてたから」

「あいつ余計なことを！」

「神妙に縄につけ、エスケープ！」

「げえつ、エアグルーヴ！」

エアグルーヴが追いかけてくるのを私は一目散に逃げ出した。流石エアグルーヴ、ほかのウマ娘たちよりも鋭く、それでいて素晴らしい瞬発力で捕らえんとばかりに迫ってくる。

だが私は捕まらない。なぜなら我が名は『グレートエスケープ』。私は煩わしいモノ、

しがらみ、そして勝利を求める全てのウマ娘たちからも、逃げ切ってみせる。

そして栄光を掴んだ暁に、私は高らかに宣言するのだ。

「私は何者にも囚われない」

まずはトレーナーの元へ、脱獄を果たしてみせる。

校門付近からチームの部室へ向けて駆ける途中で、歩いている男の人の影。私のトレーナーさんだ。

「トレーナー！ はやくトレーニングしよう！」

減速しつつ、トレーナーの前に躍り出る。AKIRAのバイクシーンを意識しながら、かっこよく。

トレーナーは苦笑いしながら、やけにやる気だな、と言。

「もちろん。メイクデビューを目指す日々はもう始まっているからね。まずは補習から逃げ切ってみせないか」

ここからだ。トレーナーと私、グレートエスケープの日々はここから始まるのだ。

ちなみにこの後トレーナーの手によってエアグルーヴ率いる『脱獄ウマ娘捕獲部隊』に引き渡された。

裏切り者ー！ という私のトレーナーへの声が春のトレセン学園の青空に響き渡った。

だがこの走りでなんとなく、レースに使えそうな技法が思い浮かんだような気がした。

第2話 脱走名人

私が所属している栗東寮には門限がある。それを破れば奉仕活動とか、寮の掃除を命じられてしまい、満足に外で遊ぶこともできなくなる。

とはいえ、我々は年ごろのウマ娘。時には規則に縛られず、夜の街で遊びまわりたいし、なんなら夜のコースを思い切り駆けまわりたいという想いは止められない。

寮で過ごすウマ娘にとって如何にして門限破りをするか、そしてバレないかどうか、罰をどう回避するかという問題は大きなものだった。

「だからお願いします！ グレートエスケープさんは脱獄名人とお聞きしました……今日だけは、今夜だけは外せないのです……！」

そこで多くのウマ娘が助けを求めるのは、脱走の名人たる私、『グレートエスケープ』その人である。

「ふむ。何故私に助けを求めるのかね。脱走の罰を知らないわけではないだろう？ アグネスデジタルくん」

「ひよあ、クールな低音ボイスにニヒルな口調……こんな催眠音声やん……ハッ！ それもそうなのですが！ 今夜は栄光のウマ娘100人全集の初回限定版ブルーレイ

発売日なのですッ……なので絶対に、絶対手に入れなくてはならないんです……！
美浦のホワイトストーンさん、栗東のグレートエスケープさん……トレセン学園を代表する脱獄名人であるならば！ 私めの欲望を叶えてくださると信じているのですッ
！」

「……いいだろう。デジタルくん、キミは自由を求めている。自由へ進むことで地獄を見るのがわかっていても、自分の背中を押すというのなら——協力しよう」

「うああ……顔が良いのに悪い顔尊さが半端ないですうう……！ で、でも、どのようにして……？」

「屋外に繋がるトンネルを掘る。何もトレセン学園は収容所ではない。出入口の警備員さえなんとかすればどうとでもなる」

「でっ、でもトンネルなんて一晩じゃ」

「私の部屋のベッドの下にありますのは、あらかじめ用意していたトンネルでございます。トンネルの名前はトムだ」

「て、手際が良い！ 技術のホワイトストーンさんならば策略のグレートエスケープさん！ 流石です！」

私はベッドを動かしてカーペットに隠した出入口を開いた。同室者は協力者の一人であるため、慣れたもので今ではぐっすり眠っている。

アグネスデジタルが通れることを確認すると私はメモ用紙を渡した。

「余裕があつたらポテチとコーラを頼む。トレーナーに没収されてしまったからな……」

「意外と不摂生！ でも好き！ 行つてきますね！」

親指を立てながら穴に沈んでいくアグネスデジタル。彼女もまた、自由へ突き進む戦士（オタク）であり、その衝動を抑えることは誰にもできないことだった。

翌日、栗東寮で授業前に緊急会議が開催された。

議題は脱獄犯に告ぐ！ というもので、タイトルを聞いた時から嫌な予感はしていた。適当な理由をつけて集会から逃げることはできたが、かえって怪しまれると思ひ、参加した。

そして集められた栗東寮の集会所ではフジキセキ寮長と、その隣には椅子に座った姿勢でマジックテープに囚われているアグネスデジタルの姿が。

「みんな聞いてくれ。昨日、アグネスデジタルちゃんも栗東寮から脱走した。罰として3日間の寮のトイレ掃除が決定したが……どうやら協力者の存在があるようですね。ここで今、彼女には尋問を行う！」

集まったウマ娘たち、それもちよつと脱走を繰り返した悪い子たちは顔色を青くしている。

彼女たちはわかつているのだ。『協力者』が誰なのか。そして、その人が見つかったしまえば規則を破って飛び出す背徳感、そして門限を破ってもこっそり入ることでバレないようにできる安心感——それが失われてしまう、と。

近くのウマ娘たちは動揺のあまり、キョロキョロしている。だがそれは反射的に私を見てしまったことを誤魔化す水草だ。

「名乗り出るならば罰は3日間のトイレ掃除で手を打とうじゃないか。だが、もしも出てこないのであれば……1週間、栗東寮特製おやつ抜きだ」

関係ないウマ娘まで悲鳴を上げた。私も動揺を隠すので必死だった。フジ寮長はまるでサディストだ……あんな恐ろしい仕打ちを考えつくなんて。

だが恐怖はここで終わりではなかった。

「アグネスデジタルちゃん。どうしても言わないのかい？」

「協力者なんていません！ デジたん一人の犯行なんです！ 処罰はデジたん一人でお願います！ あと耳に嘔くときはもう少し意地悪するような口調で！」

「ふうん……なら仕方ないね。心苦しいが……ヒシアマ！ 頼むよ」

「アンタ、なんでそんなノリノリなんだい……まあいいか。デジタル！ ここにあるのはなにか、わかるかい？」

「ニンジン……いや、ただのニンジンじゃない、愛媛県産の凄まじい糖度を誇るというニ

ンジン!？」

「そう……このニンジンは今から美味しく料理する」

「料理……ま、まさか」

「気づいたかい？ 恐怖したかい？ 流石のヒシアマ姐さんもフジの考えることには度肝を抜かれたね……そうさ！ 料理したニンジン料理を、今この場全員に振る舞う！

デジタル、アンタだけは食べられないがね！」

「なっ……!？」

フジキセキ以外の全員が声を上げた。なんてむごいことを考えつくんだ……流石は栗東寮の支配者、人の心を攻める術も身につけている。

これにデジタルは耐えられるとは思えない。バレてしまえば全ての脱走ウマ娘の希望が断たれてしまう。

沈黙を選択する私、そしてその他のウマ娘たちに朝食代わりにニンジン料理が振る舞われる。

「お、美味しい……！ 甘みがあつて、特製ソースで旨みが口の中に広がって……いくらでも食べられちゃいそうです！」

「スぺちゃん、朝ごはんさつきたくさん食べてたわよね……？」

「さつきのは腹ごなしです！」

「ウソでしょ!？」

最悪なことにスペシャルウィークという大食いかつ、美味しそうにご飯を食べるウマ娘がいることで羨ましい気持ちは倍増されてしまう。

こんなの、耐えられるはずがない。

「どうしたんだい、エツちゃん、せつかくヒシアマが作ってくれたんだ。是非食べてあげてくれないかい」

「私は——」

「それとも、食べられないかな? ……朝ごはんはもう済ませたかな」

反射的に同意しようとして、フジキセキの視線に気がついた。これはカマかけだ。

嘘をついてまで食べない時点で少なくとも疑いの深いウマ娘ということになる。

しかしここで食べるということは、アグネスデジタルを見捨てるということ。チラ、とフジキセキの肩越しに彼女の姿を確認する。

「フジ寮長とヒシアマ寮長から焦らしプレイだなんて……はあ……はあ……やば……新刊書けちゃう……あの優しい寮長の裏の顔……うお……これは……やばいつ……はあ、はあ……鎮まれデジさんのリビドー……!」

顔を真っ赤にして息を切らしてるデジタル。恐らく夜中に捕まってからは食事も睡眠も無しで過ごしているはずだ。

明らかに限界に近い。

動揺は顔に出さず、さりげなく。

「彼女が可哀想だな……お腹も空いているだろう」

なんだかんだウマ娘みたいな寮長のことだ。本気で私がクロだと思っっているなら、他人事な対応になにか素振りを見せるはずだ。

しかし寮長は気にした様子もなく「彼女も強情だね」とだけ言った。すると、私に渡されるはずのニンジンステーキの皿をそつとデジタルの前に見せた。

「誰がキミを手助けしたのか、教えてくれないかい？」

「いいえ、デジたん一人がやったことです！」

「じゃあ、取引をしよう。もし協力者を言えば……ニンジンステーキはもちろん、今回の罰も取り消そう」

「えっ……本当ですか？」

「もし断るならニンジンステーキは……捨てるしか」

「はいッ！ はいっ、はいっ！ 私が代わりに食べます！」

「ス、スペちゃん……！」

「スペちゃんのお腹の中だろうね。さ、言ってみないかい？ もう君は充分に義理は果たしたよ」

まずい、デジタルの心が揺れている。空腹に睡眠不足、もう彼女は限界だ。こうなれば最終手段、対エアグルーヴ用にとっておくつもりだったフラッシュボムで目をくらました隙にデジタルの口封じをするしかない……！

「本当に……デジタルの罰は帳消しに……？」

「もちろん、約束するよ。脱獄の主犯の情報とのギブアンドテイクだ……言っただよ」

「だが断る」

全員が声を上げた。しかしデジタルは動揺することなく、気高い意志を感じさせる光を瞳に宿していた。

「このアグネスデジタルが最も好きなことのひとつは愛するウマ娘ちゃんのために意志を貫き通すことです」

……私は目が覚めた。ほかのウマ娘の希望を掲げながら、結局は保身しか考えていなかった。

希望を私に託すウマ娘たちの中に、アグネスデジタルも含まれていたというのに。

「フジ寮長、彼女にニンジンステーキを」

「おや？」

「協力者は私だ。グレートエスケープが手を貸した。デジタルくん……済まなかった。

私は君を見捨てようとした……信じてくれていたというのにな。彼女の罰も共に受けよう」

「そ、そんな！ ならば非一緒に！ 私にもごほ……処罰を！」

フジキセキ寮長はにつこりと笑った。

「じゃあ反省文から書こうか」

割と容赦がなかった。

後日、デジタルとトイレ掃除をしながら、私は再び、トムに代わるトンネル、ドイツクを作ろうと計画を練り直すのだった。

真の脱獄失敗は、諦めることだ。であるならば、私はまだ失敗していない。脱獄する私を止めることは、だれにもできないのだから！

×××

橘という美人なギャル（本来ギャルは若い女を差す言葉だが）の馬主に引き取られた俺は、馴致をするため育成牧場で過ごすことになった。その育成牧場で俺は他の若駒たちに絡まれたのだった。

曰く「テメーどこ牧場出身だよオオオン？」と。

俺は売られたんだよ！

と言いたいところですがサラブレッドだもの、当然売られる。むしろ売られることがステータスらしい。学歴みたいなものだろう。

「ラビくんはなアー！ セレクトセールに出たんだぜすげーだろお！」

「お前舐めてつとマジでポコすかな！ マジ舐めんなよ！」

「おいおいやめろよ新入りが泣いちゃうぜ？ ギャハハハ！」

やだなー、馬でもこういうのあるんだ。

ちなみにセレクトセールに出るのは実際すごい良血馬でないと出ることができない。

そもそも0歳である当歳馬は不確定要素が多く、リスクが高いため世界的にも1歳馬のセリ市が中心だ。しかしセレクトセールのメインは当歳馬のセリ市で、そこに出てくる幼駒は世界各国の重賞を制したサラブレッドの子孫が出品される。世界最高級のセリ市だ、出るだけですごい。

「で、落札価格は？」

「て、てめつ、それを聞くんじゃないやねえ！」

「お前いじめるのも大概にしるよ！ マジやめろよ！」

「おいおいやめろよ泣いちゃうぜ？ オレが。ふふふ……」

どうやら主取り（落札ナシ）らしい。それでもGI何勝もしてる馬とかいるからよ！

元氣出せよ！

「励ましが逆につれえ！ クソツ、俺だつて本氣出せばダービーを……いや函館記念とか勝てるんだよ！」

「て、てめえつ、覚えてろよこのアホ!! アホオ!!」

励まして絡んできた馬たちが走り去る。

ちなみに日本では競走馬の売買は庭先取引が8割で俺も1500万円で取引された。これが安いかどうかは、今後の活躍次第というやつだ。

そんなこんなで馴致が始まる。最初こそあれこれつけられるのは気持ち悪かったが、暴れるほどではない。

「イヤアアアツ！ なにこれえええつ！ やだ、やだあつ！ とつてええええツ！」

大暴れする同期を見ると、逆に冷静になるつてものだ。

「お前はおとなしいなあ……楽で助かる」

「痛くしないなら暴れないよ」

「ん？ なんだ？ くすぐったいのか？」

「話を通じないから五十音表持つてきてくれない？」

とはいえ人間と話を通じるわけもなく。ただ、流石にプロだけあつて俺が頭のいい馬だとはすぐに気づいたらしい。時々話しかけてくれるが、その言葉も他の馬たちと少し

違う。

「消費税つてどう思う?」

「罰金」

「お前も反対だよなあ?」

誰だつてそう思うだろうよ。俺の嘶きを賛同と受け取った育成牧場のスタッフは俺の額を撫でながら新聞を捲っていた。

その新聞を見るに、今は90年代らしかった。

俺が生まれた頃と同じくらいといえど、サブレットになったことを考えると寿命が短くなったことになる。

畜生道に落ちたのだろうか。

とはいえ今更人間になど戻れそうもない。クソはそのへんでするし、飯も人間の飯と全然違うことに慣れきってしまった。

これが地獄の罰というには少し甘いような気もするから、やはり数奇な運命とでもいえばいいのだろうか。

しかしここはやはり地獄だと思ふときもある。坂路を走る時だ。

ただ走るだけではなく、上に人を乗せて走るのだ。

きついつたらありやしない。その癖、ほかの馬たちはすすい登る上に煽ってきやが

る。

そして張り切つてさらにバテる。時には縦列、併せながらでやっていくからさらに大変だ。

「へいへーい！ 遅いぜ芋野郎！」

「バテたのか？ 畑を耕す方が向いてるんじゃないやねえのかあ？」

前の2頭が煽つてくる。芋野郎というのは俺の蔑称だ。父が内国産馬だから、ということらしい。

顔も知らない父だが、父もまた素晴らしい戦績の持ち主だという。俺が活躍しなければ父母までバカにされる世界——馬の両親といえど、親は親だ。

バカにされて黙つていられるような玉無しじゃない。

「待てよ……このヤンキー（アメリカ野郎）どもがああああ！」

「こら速いぞ、だめだつてば！ だめ！ ダメッ！」

手綱が引かれてスピードを出させてくれない。

これは追い抜く練習ではないとはいえ……あんちゃんどいて！ そいつ抜けない！ そんなこんなで調教を積んで過ごしていく中で気づいたことがある。

別に人間の言うこと聞けるほど頭良くても、大したメリットにならないことだ。

レースは自分一人で行うものではない。騎手がいて初めて成立する。

そして基本的に判断するのは騎手だ。馬自身よりも騎手の方が周囲のペースや位置取りを確認できるからな。

そうなると、騎手の言うことをきちんと聞いて、その上で速く走れないと意味が無い。言うことをいくら聞こうと最後の直線で脚が遅ければ意味が無い。

そして、騎手の言うことを聞ける賢い馬なんていくらでもいる。

「ヤバいな……俺、勝てないかもしれん」

馬房で一人呟く。ここ最近、モチベーションが上がらなくなってしまっている。シンブルに自分が優れているものが見えなくて、自信がなくなってしまうのだ。

かといって調教をするあんちゃんたちが励ましてくれるわけではない。時々ゲートが上手いと褒めてくれるが、流石にそこがダメだと人間の知能を持っている意味が無い。

集中して、開いた瞬間に走り出す。

基本はこれだ。ゲートそのものにビビってる連中に比べたら流石に速い。

しかし、走りとなるとトップスピードに乗るのが早い外国産馬を父に持つ奴らに分がある。直線でよいいドンになれば恐らく負ける。

「どうしたもんかな……」

気分転換でもしたいなあ。

俺は前脚で馬房の壁をこつこつと叩いた。リズム良く、一定の間隔で。

近くにいた厩務員のおっちゃんがどうしたのか覗き込む。

「ウワー、前脚がいてーなー、めっちゃ痛いわ。これは折れてるかもしれないわ」

脚を床につけないような仕草を見せる。厩務員のおっちゃんは慌てて中に入ってきた。

大丈夫か？ と心配してくれる。痛いよ、痛いよと言わんばかりにくるくる回りながら入口側へ身を寄せて——外に出ます。

そして有無を言わず足で鋼鉄製のドアを閉めます。さーらーに、しっぽで門を叩き落としてロック完了！

「えっ」

おっちゃん、悪いな。見回りの時間には帰ってくるから留守番頼むわ。

「あ、は、え？ おい！ 誰かグレートエスケープが脱走したぞー」

既に周囲に誰もいないことは音で確認してるんだ。

さて、どこに行こうかな……大脱走のマーチを頭の中で流しながら育成牧場をばかばかと歩いていく。

事務所の方に行くと、部屋の中から大声が聞こえてくる。耳を済ませば、競馬を見ているらしい。

おいおい真昼間から競馬かよ。という冗談は置いといて、声を聞く限り育成牧場で育成された馬が重賞レースで走っているようだ。

覗くと、最後の直線に入っている。

「残せ！ そのまま！」

「いけ、いけえ！ あと少し！」

「これは勝つただろう！」

先頭を走る馬がここで育つたらしい。併せていた馬が脱落していき、その馬が抜け出した。

そのままゴールし、重賞制覇を飾った。

スタツフたちが歓声を上げる。

……競走馬に携わる人達が多い。馬主や騎手だけではない、調教師に厩務員、牧場スタツフたち。

重賞ともなれば一般のファンもつくだろう。

そんな人たちの期待を受けて、勝たなくてはならない。

その期待に応えられなければ待っているのは――

だが、レースで勝つことができれば。そこで味わう歓声はどんなものなのだろうか。どんな景色が広がっているのだろうか。

「……走らなくっちゃあな」

みんな、俺が素晴らしい馬になると信じて調教をしてくれたり、ご飯を作ってくれている。

ただの見世物相手ではない、夢を託す相手として——俺に出来ることは、走ることだけだ。

だが、その走ることと夢を与えられるのはきつと……素晴らしいことなのだろう。

俺は馬房に戻ると門を外して中に戻った。そして脚でゆっくり閉める。

「……おっちゃん、いつまでいるんだ？」

「お前自分で戻るくらいなら脱走するなよ……」

おっちゃんを閉じ込めていたことを忘れていた。

第3話 走れ！グレートエスケープ

トレセン学園のトレーナーとなつて1年目。研修も終われば、自分でウマ娘をスカウトし、契約を結ばなければならない。

しかし――

「君ならきつと勝ち上がり、それどころか重賞、GIだっていける！是非私と組まないかしら！」

「本当ですか……？ 私はGIを勝つのが夢で……よろしくお願いします！」

俺はただ、圧倒されるばかりだった。

スカウトをするトレーナー、そしてスカウトされるべく、模擬レースを行うウマ娘の熱量に。座学での研修でこそボランティアのウマ娘と対面方式で話をしたり、契約で気にしなくてはならない点の確認をした。

実地研修ではベテラントレーナーの助手としてチームのトレーニングを手伝ったりもした。

だが研修が終われば、相手にするのは勝ちを目指すウマ娘。

新人が学ぶつもりで相手をするのは不誠実極まりない。だからこうやって、選抜レ

スを走るウマ娘たちを見るばかりで、時間は無為に過ぎていく。

そうやって、スカウトしたいウマ娘に声もかけられないまま、選抜レースの最終レースを迎えた。

4ヶ月に1回のこの選抜レースを逃せば、スカウトができるタイミングはがくんと少なくなる。

有名なトレーナーであればいつ声をかけてもいいだろうが、無名のトレーナーが声をかけても反応は鈍いものになるだろう。

「あれがグレートエスケープか……」

「座学では優秀な成績を修め、トレーニングでのタイムもジュニア級デビュー前としては破格のタイムを連発してるウマ娘……これは是非見ないとね!」

「だがあれだけ有名なウマ娘なら、既に有名なトレーナーから声がかかってもおおしくないんじゃないか?」

「噂だと多くの可能性を試したいから、と断ったそうだよ。とても礼儀正しくて、ベテラントレーナーも気持ちよく選抜レースでもう一度スカウトするって」

「礼儀正しく、成績優秀、そしてレースも素晴らしいタイムを出しているのか……これはあのシンボリルドルフとも並ぶんじゃない」

「気が早い……と言いたい、あの佇まいは見事だよな」

ゲート前で準備体操をするウマ娘たちの中で、誰が噂のウマ娘なのか見抜くことは容易かった。

黒く、それでいて神秘性よりも現実味のある美しい髪。

ゲートの先を見据える鋭い視線。双眸に映るのはこのレースのゴールか、未来に位置する栄光か。

スラリと伸びた背丈と足は、広いストライドで駆け抜ける姿をつい想像してしまう。彼女たちはゲートに入る。

聴覚、視覚共に人間より優れるウマ娘にとってゲートは落ち着かない空間だ。

しかしグレートエスケープは気負うことなくゲートに収まる。

ガコン、とゲートが開く。一番に飛び出したのは、やはりというべきか、グレートエスケープだった。

ハナを切ると、ペースを落ち着かせてゆつくりと逃げる。レースはスローペースになりそうだ。

「1番グレートエスケープが先頭で直線に入る！ 後続が上がってくるがグレートエスケープはまだ先頭だ！ ここでスパートが入ったかグレートエスケープ！ 差を広げていく！ 2番手は8番、しかし差はつまらない！ グレートエスケープ、後続を完封して4バ身差で圧勝ゴールイン！」

直線ではグレートエスケープのスパートについていけるウマ娘はいなかった。

まさに横綱相撲。レースを作り、その上で勝ち切る圧勝だった。風格も相まってクラシック三冠が期待されるのも頷ける。

レースが終わると、一斉にトレーナーたちがグレートエスケープに駆け寄っていく。しかし、不思議と彼女をスカウトしようとする気持ちも湧かなかった。

走る彼女はどこか、冷めているように感じたのだった。

後日、グレートエスケープのことを話すトレーナーたちの会話が耳に入った。話を聞くと、グレートエスケープはすべてのスカウトを断つたらしい。

「グレートエスケープくん! 是非うちに来よう! 君はうちでならもつと強くなれる!」

「スカウトありがとうございます。強くなれるといいですが、そこで目指す目標は?」

「それはここからまた適性を見て、レースを選ぶことになるが……もちろんGIだ!」

「そうですか。残念ですが……スカウトを受けることはできません。どうやら私と貴方では方針に食い違いがあるようです」

「貴方なら私ときつと勝てるわ! さつきのレースもまだ本気じゃないんでしょ?」

さらなる強敵を用意してあげるわ!」

「……すみません。貴方がおっしゃる話は私の望むものとは違うようですね。スカウト

はお断りさせていただきます」

「君はまだ勝ちに本気になれていない。さっきのレースもまだまだ本気を出すには足りなかった。俺となら、必ず強い心を持つことができる！」

「勝ちに本気になり……それで勝てるのですか？ 貴方の言うことと、私のレース結果は矛盾しているようですが……この話はなかったことに」

と、尽くを塩対応で断ったそうだ。

ほかのトレーナーも気づいているように、レースは余力を残して走っていた。その上であの勝ちっぷりなら、誰もが大成を考えるだろうが――

「勝ちにこだわりがないんじゃないか？ たまにいるんだ……いい物は持っているのに闘争心に欠けているウマ娘が」

「優しすぎて勝ちにこだわれなかったり、逆にやる気が持てない子ね……だからこそ惜しいのだけれど」

「あれだけの才能の持ち主だもんな……もつたいないよ」

俺もきつと、彼らと同じ結論に至るだろう。

まだ新米な俺だが、最も大切なのはスピードでもパワーでもない。勝つという闘争心だ。

それがなくては、どんな才能を持つウマ娘も精々「いいところ」止まりだ。

だからこそ、グレートエスケープに対する評価は下がっていくのだろう。だが……彼女の走りが、目に焼き付いて離れなかった。

話をやめてトレーナーたちが業務に戻ってからも、彼女の走る姿を思い出していた。

トレーナーはトレセン学園の授業がある時間以外は、メニューを纏めたり、次のレースの方針などを考慮したり、資料を集めたりする。

もちろん授業がないウマ娘もいるから、その時はその子のトレーニングにつきあったり、逆にトレーナーに選ばれていないウマ娘のトレーニングに付き合うことで未来のダイヤを探すこともしている。

新人の俺は経験を積む意味も込めて教官が行うトレーニングを手伝うつもりだったが、噂のグレートエスケープが木の下で昼寝をしている姿を見つけた。

彼女は確か授業中の時間のはず。間違えているのだろうか。成績優秀とされる彼女が欠席するのは不味いだらうと思ひ、声をかけた。

「ん……誰だ、私を起こすのは。私は昼寝という大切なメニューをこなしていたのだから目を擦りながら起き上がるグレートエスケープ。欠伸をしながら、スカートについた芝を払うと立ち上がった。」

「君は、トレーナーかな。確か……新人だね。なんの用かな。昼寝を起こすんだ、相応の

理由があるんだろう」

授業中じゃないのか？

「ああ、現代文の授業中だ。今日は評論を読み解くところで14ページからだ」

話を聞くとどうやらグレートエスケープは理解した上でサボっているらしかった。

「親切心からの忠告、ありがとう。私は問題ないから、昼寝に戻ると言いたいが、目が覚めてしまった。寝直すとこれからに差し支えるな」

どうしてサボっているんだ？

グレートエスケープはため息をついた。

「そんなもの、サボりたいからだ。退屈なことに時間は使いたくないだろう？ もっと有効な時間の使い方があるのなら、なおさらだ」

昼寝が有効な時間？

「そうだ。君に説明する必要はない、と言いたいが……声をかけてくれたのは善意だからな。これで貸しはチャラにさせてもらおう」

グレートエスケープはスマホを取り出すとスケジュールアプリを開いた。そこにはメモがいくつもある。

「私にとつて現代文の授業は必要ない。なぜならテストでは問題なく点をとっているからだ。一定の出席点とテストで点数を取れば単位は得られるからな。座学で1位をと

るなら全部出るべきだが……合格さえすれば充分だ。ならばこのあとトレーニングで集中するために昼寝をしている方が私の目標に合致する。というわけだ……まあ、それは妨げられたが……昼寝には充分な時間がとれた。少し早いがトレーニングに行くとするよ」

思わず尋ねていた。トレーニングに行くのか?と。

グレートエスケープは変なものを見る目をした。

「当たり前だろう。私はウマ娘、それもデビュー前のウマ娘だ。今トレーニングしないで、いつするんだ。トレーニングせずに勝てるわけないだろう」

だが噂では勝つ気持ちに乏しいと言われている……そんな君がトレーニングをするのは矛盾している。本当は勝ちたいんじゃないのか? と聞くとグレートエスケープはニヤリと笑った。

「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや、だ」

グレートエスケープはゆったりと歩いていく。歩く後ろ姿は傾くことなく、非常にバランスのいい体つきだった。

——あれは何も考えずトレーニングをしている、才能任せの肉体ではない。計算された努力を積み重ねた肉体だ!

俺は彼女の後を追いかけた。

トレーニングを見たいという申し出に、グレートエスケープはタイムを測ることを条件に快諾してくれた。そして見せてくれた走りは、模擬レースで見せたものよりも遙かに素晴らしいパフォーマンスだった。

彼女の本気の走りはとても美しかった。

洗練され、無駄なものを削ぎ落としたフォームに、コース取り。

「どうだったかね、トレーナー」

タイムの速さはもちろんだが、フォームやコーナーの位置取りを特に褒めた。バランスを崩さずに走る能力は並大抵の努力や才能では身につかない。

普段のトレーニングから思考を巡らせている、頭のいいウマ娘なのだ。

「フ、そんなに褒めるな。私もウマ娘、調子に乗ってしまう」

確かに耳が喜びの仕草をとっている。

褒められるのはとても嬉しいらしい。

彼女の走りが目に焼き付いたのは、恐らくこれが理由なのだろう。グレートエスケープが見せた突き詰められた走りから生み出される美が、目に焼き付いて離れなかったのだ。

——グレートエスケープ！

「ん？」

君をスカウトしたい!

気づけばそんな言葉を彼女に向けていた。

グレートエスケープは困ったように笑った。

「ここでスカウトか。嬉しいが……中々に答えづらいな。君はよく見てくれている、いいトレーナーなのだと思う。新人らしいが、関係ない」

彼女は言葉を切ると、改めて言った。

「私は来週のトレセン学園のイベントレースに出走予定でね。……そこで走った後に、答えを言ってもいいかな。勝手な願いだがね」

トレセン学園では定期的に学校を開放し、校外の人を入れてウマ娘たちとの交流の場を設けている。

その日の目玉がイベントレースなのだが、デビュー前のジュニア級にして参加予定になるとは、彼女も豪胆というべきか。

わかった! その時に答えを聞かせてくれ!

グレートエスケープは驚いていた。

「いや……快諾してるが、いいのか? 私も大概無理難題を言っているのだが」

それほどの価値が、君にはある。

「……ふふ、照れるな。ならば改めて、私のレースを見てもらいたい」

そう言って、グレートエスケープは坂路へ駆け出していった……。

×××

へへへ……旦那、お宅の子は責任もってきつちり調教してやりますんで……へへへ

……

という意味ではなく、調教師とは競走馬をレースで勝てる馬に育てる人である。

現役競走馬ならば調教師の厩舎で過ごす時間が一番多くなるだろう（外厩などは置いていて）。

育成牧場で鍛えられながら2歳になるころには、入厩といって調教師のもとへ預けられる。

馬主の橘ちゃんと知り合っていたとのこと、俺が厩舎に入るのは随分前から決まっていたらしい。

その調教師と初めての顔合わせだ。

「こいつがグレートエスケープか。いい馬体しとるわ」

俺を見るなり、現れたオッサンはそう言った。彼が調教師の『黒井』とかいう人らしい。

橘ちゃんに一言。

「こいつは大きいところ狙えますよ。馬体、骨格のバランスがいい。右回りでも左回りでも苦しめないやろ」

「本当ですか!?!」

今日の橘ちゃんは余所行きモード。いつものギャル語全開のパリピ（年代的には結構未来を先取りしてる気もするが）ではなく、敬語を使う社会人の姿だ。そっちも可愛い、普段のパリピ姿の方が好きかもしれない。

黒井さんは俺の体を見ては橘ちゃんにあれこれ説明していく。初めての競走馬だからか、説明も調教やレースについての話が多い。

俺はじつと彼と彼女を見つめていた。

ふいに黒井さんが振り向く。

「ふーむ……ん……へえ」

しばらく見つめていた黒井さんはにやりと笑った。

「こいつ、頭がいいな。話に聞き耳を立てているし、集中している。本来臆病な馬が、それも2歳の若駒がここまでリラックスしているとはな……話してる言葉も理解してそうやな」

「ふふつ、本当ですよ。その子はマジ……いえ、本当に賢くて、優しい子なんですよ。」

きつと黒井先生のこともすごい調教師だとわかってるんだと思います」

「ほほう、美人の太鼓判もろたら嬉しいわ」

「ご謙遜を！ 一昨年なんて全国調教師リーディングで8位だったじゃないですか！」

「去年は32位やで。せやけど、今年はクラシックに期待できるのがおるし、来年はこいつのクラシックやからな……順位を上げてくれると期待しとるで。やあ、グレ坊」

黒井調教師の不敵な笑みに、大胆不敵な発言。自らの眼力、育成力を疑わない強かな自信が彼を大きく見せた。

直感的に、この人には逆らわない方がいいと感じた。野生の勘つてやつだろうか。

そうでなくとも、一目で俺のことを看破してみせた眼力は只者ではないとわかるには充分だ。

やはりプロの目はすごいというべきなのか、プロの中でも別格なのか。

「よろしくなグレートエスケープ。目指すは当然、ダービーや。お前はそれくらいの器や。自信を持って」

俺を撫でながら黒井さん……いや、先生が言う。

他人にべたべた撫でられるのはあまり好きじゃないが……先生の圧倒的な風格に、俺は早くも上下関係を築かれてしまったのだ。

「……あの、またしばらく会えなくなるので……撫でてもいいですか？」

「ぶるるひひっ（是非）」

「うお、こいつ……! 美人の方に撫でられたってな、わははは!」

橘さんの優しい手つきに俺はメロメロだ。いくらなんでも可愛い女性の方がいいに決まってる。俺は心ゆくまで撫でてもらっていた。

入厩すると俺は自分の部屋として馬房に入れられる。当然人間に比べると狭いが、なんだか落ち着く。あちこちに馬に配慮した気遣いが施されており、プロの技を細かいところにも感じた。

新しい部屋でくつろいでいると、隣の馬房の馬に挨拶をされた。

「貴方が新入りくん? 私はダンスパートナー、よろしくね」

「あ、どうも……グレートエスケープです」

「礼儀正しいのね? 若い子って慣れない環境ではしゃいじやうことが多いって聞くけど」

「そうなんですか?」

「恥ずかしいけど、私がそうだったから……私だけだったのかしら」

牝馬の先輩馬であるダンスパートナーさんは照れを誤魔化すように笑った。

そういえば歳上の馬を見るのは、牧場のリードホース以外では初めてかもしれない。馬の本能なのか、彼女はとても美人に見えた。

「ここからレースに出るまで、調教でトレーニングするわけですね」

「ええ、そうよ。貴方、ゲートは嫌い？」

「嫌いじゃないです」

「それなら怪我とかしなければ早くデビュー出来るかもしれないわよ？ 私はゲートが

嫌いだからデビューが遅くなってしまつて……狭くて暗くて怖いのよね」

「そういうものですか……先輩はもうレースに？」

「ええ、一応ね」

話を聞くと、なんと桜花賞に出走予定らしい。

前哨戦のチューリップ賞では惜しくも2着、ここで巻き返しを狙っているらしい。そしてその調整として、俺も一緒に併せて走ることを説明された。

「調教では俺と一緒に走るんですか？」

「軽めだけだね。慣れてもらうために貴方を使うんですつて。心配しないで、お姉さんが胸を貸してあげる！」

鼻息も鳴らさんばかりにダンスパートナーさんは宣言する。その姿はお姉さんぶる可愛らしさを纏っていた。

（カワイイ……）

いい先輩に恵まれたし、調教は頑張らないとだな！

(無理イ……)

そんなふうを考えていた時期が俺にもありました。ダンスパートナーさんと併走をすることになり、坂路で俺が前で走るメニユーだった。

後ろでダンスパートナーさんが駆け出すと一気に俺を追い抜く。追いつがろうと脚を必死に動かしてなんとか後ろにくつつけた程度。

しかもその後のダンスパートナーさんは余裕つて感じの仕草だった。

「ふっふーん! すごいでしょ! とはいえエツちゃんも中々速かったよ?」

「ぜえ、ぜえ……どうも……ぜえ……エツちゃん……?」

「エスケープのエツちゃん……ダメかな?」

「それは……いいですけど……」

「でも入厩したばかりでそんなに走れるなんてすごいね。私も最後、ほんの少しだけ、頑張っちゃった。でも、まだまだだね」

「あ、ありがとう(ご)ございます……」

あれこれ考えようにも疲れて思考がまとまらない。

「そんなに落ち込まないで。GIに出るのに、デビュー前の君に負けちゃったらそれこそ私が調教師さんに怒られるもの」

ダンスパートナーさんがウインクしてくれたように見えた。優しい人、いや馬か。とにかく優しい馬だ。

「それに君がすごく走るもんだから、ほかの子達も君に注目してるみたいよ？」

調教していた同厩舎の牡馬たちが俺を睨みつけている。

ピリピリとした殺気にも似た雰囲気、毛が逆立つ感覚を覚えた。

全頭、俺より調教や経験を積んだ競走馬たちだ。いや、それどころかこの「栗東トレセン」で今も走る馬、引き上げる馬……すべてがライバルたちだ。

——ビビったら負け。

俺は競馬というただ一頭のみが勝ちを得られる過酷な世界に、既に足を踏み入れているのだ。

まだ見ぬ強敵たちに踏み潰されないよう、虚勢を精一杯張りながら調教コースを後にする。

今はまだハリボテの風格でも……強くなってみせる。嘘を本当にしてみせる。それ以外の未来は、存在しないのだから。

そのころの同厩舎の牡馬たち。

(ダンスパートナーちゃんと仲良くしゃがって……！)

(ダンスさんといちゃついてやがる……これは指導が必要ですねえ……!)

(ダンスパートナーさんと羨ましい……あの小僧……!)

(勝つ。あいつには絶対勝つ。絶対勝つ)

第4話 Make debut!

2週間前、ダンスパートナー先輩がオークスで待望のGI勝利を飾った。桜花賞2着の雪辱を果たす勝利に厩舎は湧いた。

黒井先生もこれがGI初勝利らしく、笑顔を浮かべていた。

そんなムードの中、いよいよ俺のデビュー戦の日程が決まった。ゲートもすんなりとお出れるし、調教タイムもいい時計を出していることから、ダービーが終わった次の週、つまり最初の2歳新馬戦に出走することになった。

厩舎ではダンスパートナーに続く期待馬として応援されている。

そうになると、調教も熱が入る。一週前追い切りともなると、馬にまでやる気が伝染したのか厩舎の先輩馬たちも俺を鍛えようと激を飛ばしてくる。

そして最終追い切りの日が近づいてきた。

「最終追い切りの日は騎手に乗ってもらうからな。お前も失礼はするなよ」

「先生、馬に何言ってるんすか」

「こいつはわかるねん、人の言葉が」

「またまたあ」

「担当の西京に聞いてみる。俺よりもよく知つとるはずやで」

「ほんとですかあー?」

俺の馬房の前で先生と厩舎スタッフが話している。騎手が最終追い切りで乗るのは珍しいことじゃない。特に期待されている馬なら、レース前に馬を知るために乗つてくれと依頼することも多くなる。

とはいえ、だ。

騎手が乗つてどうなるのか、俺は少し懐疑的だった。

育成牧場や調教で人に乗られることは何度もあるが、はつきり言つて人に乗られると重い。

荷物を背負つて坂路やダートを走るとそれはもうしんどいことこの上ない。

いくら騎手がいないとレースにならないとはいえ、騎手が乗つてない方が当然速く走れるのだから、乗せたくないのが本音だ。

厳密に言つと、下手くそが乗つたら走りづらくなるから、上手な人に来て欲しい、ということだが。

「先生、健二くん来ましたよ」

「おう。行つてくるわ」

スタッフが黒井先生を呼びに来た。どうやら噂の騎手が来たらしい。先生は馬房の

前から去っていく。

残ったのは先程まで話していたスタッフのみ。

うーん、噂の騎手に会ってみたい……スタッフは壁によりかかりうつらうつらしている。眠いのだろうか、サボるつもりだったのか、休憩時間なのか。

俺も大人しくしていよう、と言いたいところだが。

現在の馬房の状況を説明しよう。扉が開いた状態で、目の前には金属の太い棒が横に設置されている。

普通なら馬は乗り越えるにもくぐるにもできない高さがあるため、ここからは出られない。

だがしかし！俺は普通じゃない。そもそも、俺はほかのサラブレッドと比較しても大柄だ。

そして関節も柔らかい。これは生産牧場でマツサージをたくさんしてくれたみんなのおかげでもあるが、つまり何ができるかというと……

「よーい、ごーい」

乗り越えられます。ポールがお腹を圧迫するけど大した苦痛ではないのでそれも問題なし。ぶつけないように注意をしながら乗り越えてからスタッフを確認した。

……シエスタである。邪魔してはいけない。

厩舎の事務所の方へ向かって歩いていく。幸い誰にも出くわさずにたどり着くことが出来たが、事務所の入口で見慣れない男がホウキとちりとりを持って掃き掃除をしていた。

小柄でヘルメットを被っている。騎手のように見えるが、なぜ掃除を？

「まじ有り得ねー、なんで俺が掃除しなきゃなんねーの。一応俺ちゃんG I ジョッキーなのにさあ……てか調教するんじゃないのかよ」

ぶつぶつ言ってるのを聞くに、どうやらやらされているらしい。掃除が趣味のジョッキーは中々好感度高いと思うが、そんな奇特な人はあまりいないだろう。

小さく嘶いて挨拶をした。挨拶は人も馬も大切だ。

「ん……？ うお、なんでこんなところに馬がおんねん……厩務員とかスタッフはどこや？」

「お、やつぱり抜けてきたか。できると思っただけが本当にやるとはなあ。ははは、ええ馬や」

「黒井先生……」

「グレ坊、こいつは梶田健二。生意気なちやらんぽらんやが腕はあるヤネ（騎手のこと）や。ほら、お前も挨拶しい」

「よろしくな。グレートエスケープ……グレ坊」

ぼんぼんと撫でてくる梶田騎手。童顔に見えるが、先生の話からすると本当に若いのかも知らない。

大丈夫だろうか。同じ厩舎の先輩馬が「若い騎手はグイグイ押してきたり、行かせてくれなかつたり、中々楽に走らせてくれない」とぼやいていたのを思い出した。

そんな不安は、最終追い切りであつさり払拭されたのだった。

（軽い……というより、走りやすい！ 確かに重量はあるが、走るときの動きを邪魔しないどころか……サポートしてくれているみたいだ）

栗東トレセンの坂路を駆ける。4F（800メートル）のタイムは自己ベストを大きく更新する数字だった。

併せ馬の先輩を置き去りにする結果に、俺は不安が自信に変わるのを感じた。

「どや。こいつは。走るやろ」

「賢いですね。乗り役の指示に逆らわないし、反応もいい。長く良い脚も使えますし」「ゲートも得意やからな。前につけて抜け出す王道の競馬をやってくれるで」

ジョッキーと先生も満足の結果だったらしい。今週の新馬戦に向けた調整は正に完璧といえる。

「ところでこいつ脱走したんスか？」

「せやで。頭いいやろ」

「やばいっすよそれは！ てか、管理どうなってるんすか！」

「こいつ賢いから厩舎の周りで過ごすし、車のあるところ行かないしな。たまにはええやろ」

「いやいやいや！」

先生も話がわかる……と言いたいところだが。自分で言うのもなんだが。

……先生がこつち側なのは、まずいのではないですか。

こうして迎えた新馬戦。舞台は京都芝2000m、内回り、10頭立てのレース。直線はほぼ平坦で、波乱が起きやすいコースとして知られている。

俺は2枠2番、内枠を得ることができた。先生が騎手に指示していた前目につける作戦を考えれば、内枠はロスなく進める分、有利だ。

新馬戦では一部のマニアなファンが見に来るくらいで、騒がしいという印象はなかった。でも、競馬を見に来る人達の持つ熱量というものは、感じ取ることが出来た。

(ギャンブルだもんな。そりゃーそうだ)

パドックを周回しながら気持ち落ち着かせようと息を入れる。俺の単勝オッズは2.2倍の1番人気。調教タイムが評価されたのだと言っていた。

血統とかよりもそのほうが自信がつく。努力や結果を認められるのであれば、それは

俺の実力ってやつだからな。

「ダンスパートナーさん……見ててくれよ……勝ってみせるから」

ダンスパートナーさんはオークスに勝ったあと、フランスへ遠征している。

きつと大丈夫、頑張ってね？

そんな彼女の励ましに気合いが入ったのは言うまでもない。それと同時に、同厩舎の先輩たちからすぐく睨まれた。外国人の美少女が新入りに優しくしているんだもの、確かにいい気分はしない。

だが、そんな先輩たちも併せ馬では俺が勝てるように本気で付き合ってくれた。

色んな人の期待を背負って、鍛え上げてもらった自分が負けるわけにはいかない。

パドックの周回が終わる。これから本馬場へ向かい、レースが始まるのだと思うと心臓が跳ね上がった。

——スタートは100点満点の出来だった。

内枠から飛び出してハナへ立つ。大丈夫、俺は冷静だ。冷静だ。そう言い聞かせながら第1コーナーへ走る。

外側から人影、いや馬影がやってくる。

「どきどき芋野郎！ ちんたら走ってたら眠くなっちゃうぜー」

元気に走り込んでくるなり、俺の斜め前にピタリとつけた。ハナを奪われても関係な

い。落ち着いて控え、脚を溜めるだけのことだ。逃げても、先行してもいいと騎手も先生も言っていた。

「そうだよ大人しく引つ込んでな！ 芋くせえ厩舎に芋くせえ馬、近づかれたら敵わねーよ！」

先頭を逃げた馬の名前は知らないが。俺と同じく2歳馬だろう。まだ若く、怖いもの知らず。初めてのレースではしゃいでる可愛い栗毛の若駒。

反対に俺は大人だ。馬としては同じ年でも人間としては30年くらい生きていた……ような、気がする。

だからこの程度の挑発に乗るといふ精神的ミスは決してない。

「……う？ ペース速いぞ。抑えろ。おい……ん？ おい、待てっ」

だからこれは別にキレたとかではなく、先頭で楽に逃がしたらまんまと逃げ切りを許してしまうだろうという戦術的判断によるペースアップだ。

キレたわけではない。俺は冷静だ。俺はとて冷静で……あいつを蹴り飛ばしてやるんだよ!!

手綱が引かれる。

このサインの意味はよくわかっている——そうだな、行けっことだな。

蹴り飛ばしてやれっことだな!

俺をバカにするだけでなく、厩舎のみんなをバカにしやがった栗毛のあいつが、俺の前を走るのが許せない。

「待たんかいコラアアアアッ！ お前どこの厩舎のもんじゃああああ！ 人生めちやくちやにしてやるツツツ！ 馬生めちやくちやにしてやるツツツ！ 騙馬にしてやるからなツツツ！」

「うわっ、なんだこの芋野郎!？」

「てめー覚悟しろ！ 口の中をいっぱいにしてやる！ じゃがいもでッ！」
呑気に前を走る栗毛の馬めがけて、全速力で足を踏み出した。

「梶田騎手！ レース後のインタビュー、よろしいでしょうか」

「なんスカ。人気馬トバした若手騎手の騎乗ミス、ってタイトルにするつもりツスカ」

「いえ、そんな！ 私はあの馬のことについて聞きたいだけで……」

「冗談スよ……今日に関しては初めてのレースでかかったツスね。前の馬を追いかけようとしてペースを上げたりしました。折り合いもつけられなかったし、今日の敗戦は仕方ないツス」

「ですが逃げて前半1000mを58.2秒、しかも3着に粘り込みました。この馬の持ち味はスタミナとスピードを兼ね備えた点でしょうか」

「いえ、正直今日のレースは持ち味は欠片も出せていなかったツスね。3着になれたのも後ろの馬がついてくるだけでバテただけで、グレートエスケープもかなりバテてましたから。むしろこんな一面があるのかって、マジビビりました。次は黒井先生とお話して、決めていくと思います」

「お話、ありがとうございます」

少し離れたところで、梶田騎手と記者が会話をしている。いつもなら聞こえる距離なのに、会話が全然頭に入ってこない。

前半1000mを超ハイペースで逃げたのだ。正直、頭の中がぼやぼやするほど疲れ切っていて、満足にあれこれ考える余裕すらない。

レースはあのいけ好かない野郎は最下位に沈んだが、直線ではもう脚が限界で差されて3着。途中から頭に血が上ってレースをしたなんてとてもじゃないえない、情けないレースだった。結果よりも、内容が悪すぎる。

元々そんなに怒りっぽかったかなあ、なんてうなだれたまま、厩務員の西京さんに鞍などを外してもらっていると、黒井先生が俺の前にやってきた。

「これが競馬や。ちよつと賢いくらいじゃ勝てんのや。今日の負けはお前の慢心と経験不足や。せやけどな、落ち込んでる暇はないで」

黒井先生の一言に、沈んだ心が奮い立たせられる。

そうだ。次、勝てばいいんだ。まだレースはある。次勝って、仕切りなおせばそれでいいんだ。

俺は悔し涙を飲み込んで、馬運車へ乗り込んだ。

できれば避けたかったが、デビュー戦は終始暴走していたことは、厩舎の先輩たちに知られることとなった。

「ぎゃははは！ おま、おまえ、あんな賢いですってツラしておきながら、お前挑発に乗って……ぶはははは！」

「ちよ、笑ったら可哀そう……んんツ、ふふふつ」

「若さが出たってやつだな。くくく……うん、いいんじゃないかな。おじさん、そういうの面白いと思う。くくく……！」

当然の如く爆笑される。顔がぼうつと熱くなるがすべて事実なので理屈だった反論はまったくできない。先輩たちもここぞとばかりにイジってきた。

そんな先輩たちに対して、俺は苦し紛れに

「うるせーっ！ うるせーっ！」

と繰り返すので精一杯だった。

ダンスパートナーさんがフランスに遠征していてよかった。あの人にまで笑われたら、立ち直れないかもしれない。

でも、なんだかんだ先輩たちは「次は勝てる」と励ましてくれていた。その優しさが少しだけ痛かったが、それ以上に嬉しかった。

次走は3か月先の未勝利戦のレースに決定した。

黒井先生曰く、新馬戦の疲労が抜け切れていないのと、暑さで疲労させたくないから夏は全休止、秋の阪神競馬場でのシリーズが始まったらそこで再始動する、と。梶田騎手からのローカルのような小回りにはあまり向いてないかもしれない、という意見も受け入れての判断らしい。

それまでは少しの間、故郷へ放牧に出されたり、あとはさらに能力をつけるべく、調教でトレーニングに専念することとなった。

敗因は俺の精神的な弱さが招いたものだが、実力が充分だったわけではない。

鍛えるべき能力は山積み、呑気していられる暇などほとんどない——とは、黒井先生のお言葉。負けに対して気にしていない風を装っているが地味に引きずっていることに最近気が付いた。

その分調教にも熱が入る。馬体が成長しきっていないから、負荷はかけすぎず、かといって軽くなることもない線引きを探りながらのメニューをじっくりと。ある週は楽で、ある週はハードで。

そんな調教を繰り返すある日のこと。少しだけ涼しい、夏の早朝の頃だった。

今日はウッドチップでの併走を厩舎の先輩である『ラツキーパンチ』さんで行った後、二人して厩舎に帰っている最中に、ラツキーパンチ先輩が口を開いた。

「お前、また速くなつたなあ」

「そうでしょうか。先輩や先生のおかげですよ」

「それもあると思うが、お前はよくやっているよ……お前は頭が良いし、何より才能を理解したうえで努力している。少し羨ましい」

ラツキーパンチさんは力なく笑った。俺よりも年上の3歳馬で、ダンスパートナーさと同じく、厩舎に入った俺に優しくしてくれた先輩だ。

できることがあれば力になりたいが、どこまでいっても俺は馬。できることは限られている。せめて話だけでも、と言うと、ラツキーパンチ先輩はぽつぽつと口を開いた。

「俺、競走馬に向いてないんだよ。足は遅いし、根性もないから……」

「そんな。この前のレースはハナ差の2着だったじゃないですか。次、勝てばいいんですよ」

「……その勝ちもお前のおかげさ。お前が走っているのを見て、どうするべきなのか、ようやくわかりかけてきた結果が2着さ。でも、次のレースはないんだよ」

「どういう、ことですか」

ラツキーパンチ先輩は淡々と説明し始める。

新馬戦で勝てなかった場合は未勝利戦で勝利を目指すことになる。しかし3歳馬の未勝利戦は8月まで、ここで勝てなかった馬は地方競馬の舞台へ行くか、格上となる条件戦へ出走するか、競走馬を引退するか……今は8月、もう先輩が出られる未勝利戦は開催されないとのことだった。

「じゃあ、先輩は」

「引退ってことになった……丁度乗馬としての働き先があったから、そこに行くんだ。俺は思い切り走るより、のんびり歩く方が似合ってるしさ……そつちで生きていくよ」

「……」

なんて声をかければいいのか、わからなかった。人間でいうなら、戦力外通告でチームを離れるプロのスポーツ選手といったところだろうか。

人間ならここで「また会いに行きますよ」「一緒にプレイできて楽しかったです」なんていうんだろうが……俺たちは馬だ。自分から会いに行くことはできない。かといって、一緒に走れて楽しかった、なんて言葉を気軽にかけていいのだろうか。

ついさつき、「次勝てばいい」なんて言葉を無責任に吐いた自分が。

「グレ坊。お前……きつと強くなれるよ。だから、乗馬している俺にもわかるくらい、すげえ活躍してくれよ。それで牧場で自慢するんだ。『アイツと一緒に走ってたんだぜ』って」

先輩のその言葉に、すぐに返事をする事ができなかった。

次のレースで勝とう、なんて考えていた自分が恥ずかしいとすら感じている。『次のレース』は俺にはあるが、では勝つのは『どのレースの次』になるのだろうか。

次のレースを勝つんじゃない。目の前のレースを勝って初めて次のレースを考えることが許される。

甘えていた自分を蹴飛ばして、先輩に向き直った。

「先輩……俺、未勝利戦にもうすぐ出走するんです。厩舎を出るのは、それより後でしたよね」

「ああ、多分……」

「見ててください。俺、そこで必ず勝ってみせます。そこを勝って、先輩が自慢できるような競走馬になることを、約束します」

先輩は優しく笑ってくれた。

未勝利戦は夏競馬が終わった9月の阪神競馬場、芝1600m・外回りのレースになった。距離は長い方が向いてるがこのクラスならマイルでもいける、コーナーも大回りのほうが得意だろうという陣営の判断によるものだった。

残暑が厳しい、晴れの日。芝は乾いていても走りやすそうだ。

ちなみにパドックには橘ちゃんが来てくれていた。新馬戦のときは仕事の都合で難しかったらしいが、そう考えると来てくれなくてよかったのかもしれない。

「グレッチ、前は言うこと聞かなかったん？ そりやダメつしよく！ ちゃんと梶田騎手の言うこと聞くんだよ？ そんでバイブス上げて、パパつと勝つちやうカンジで頼むね〜？」

「……黒井先生、橘オーナーってこんな感じなんスか。めつちやパリピって感じツスね」
「……おまえ、それギャグで言つとんのか？」

ああ、橘ちゃんに撫でられて幸せ……ケンちゃん（梶田騎手が何回も調教乗ってくれているので親しみを込めた呼び方になっている）は乗つててすごい楽だから好きだけどやっぱり橘ちゃんに乗ってもらいたい。

尻がいい。尻が……

「少し痩せた？ ご飯食べてる？ 体調悪くない？ 平気？ 一緒にドライブする？ 愛車になるよ？」

「きやつ、ちよつとグレッチ、あまりもぞもぞしちやバイつて」
くすくすと橘ちゃんが笑う。

ふざけるのもほどほどにして、梶田騎手を背中に乗せる。厩務員が肩を貸しているのを見て、可哀そうだから姿勢を低くしたら先生に怒られたことを思い出した。

無暗に足に負担をかけるな、と。

橘ちゃん、今日は見ててくれ。それに……先輩も。勝って、約束するから……必ず。

「グレ坊はやたら橘オーナーに懐いとるな……今度調教で試しに女の騎手乗せてみようか……」

「先生、本気で言ってるんすか？」

ゲート前に移動すると、何の因果か、新馬戦で一緒だった栗毛の煽り野郎がいることに気が付いた。競馬新聞で見たが未勝利戦を2戦していずれも入着するなど、力をつけていると陣営や評論家の解説が端っこに乗っていた。

栗毛野郎は俺に気が付くと声をかけてきた。

「おい芋野郎。とつくに馬肉にでもなつたかと思つたぜ。ま、甘ちゃんだもんな。俺みたいに夏も走り続ける体力がねえのも仕方ねえか！ 甘ちゃん馬に甘ちゃん厩舎、お似合いだな！」

これはこいつの戦法なのか、ただの性格なのか。いずれにしても、こいつなんて眼中にない。今日は勝たなくちやいけない……絶対だ。

先輩のためにも、勝たなくちやいけないんだ。

ただ、言われっぱなしは趣味じゃない。俺は栗毛野郎に言つてやった。

「ママ専用の種牡馬にでもなつてろ」

「てめえこの野郎ー！」

栗毛馬が暴れ出すが騎手が手綱を引いて落ち着かせようとバタついている。

「……うは、めつちやエキサイティングしてんじやん。近付かないようにしとけよ。蹴られたらやべーっしょ」

「せやな。いやー、自分の感情を抑えられない奴つてダメだよな」

ケンちゃんのぼやきと誘導に従い少し距離を取る。

それにしても人間だろうと、馬だろうと、motherfuckerは痛烈な罵倒になるとは。万国共通どころか種族を越えた罵倒っぷりに少し感動する。

言つて悪いことではあるが、俺だけじゃなく先生たちまで馬鹿にしたんだ。お互い様だろう。

未勝利戦のファンファーレが鳴り、ゲートへ歩みを進める。今日は12頭立ての7枠10番の外枠での出走となる。

1番人気は前走の結果から俺で3.7倍、栗毛野郎は2番人気だった。

今回に関しては先生も騎手も枠順をあまり気にしていなかった。作戦はどうするのだろうか気になるところだが、そこは騎手に全部任せて、俺は走ることに集中するだけだ。

同じ轍は踏まない。

ゲートが開く。スタートは問題なく、外からハナを奪う。

内側には同じくいいスタートを切ったらしい、栗毛のあいつが右斜め後方に映っている。

「なんだ芋野郎！　今回はちんたら走るじゃねえかよ、ええ!?」

鞍上の指示は特になし。今のペースで問題ないようだ。

阪神競馬場の1600mは朝日杯や桜花賞が行われるコースと同じでスタートから第3コーナーまで約400m、直線は約350mの直線があり、坂もあることから差しや追い込みの戦法が決まりやすい。

ペースを上げ過ぎては後ろの馬に差されてしまう。スローペースに落としたいものだが、展開はすんなり落ち着いたスローペースになった。

(そうか、前走で暴走したからそれを警戒してみんな追いかけてこないのか)

図らずも前走が今回に役立っているようだ。

しかし、そうなると後ろの馬たちはゆったり走って、瞬発力を発揮してくるのではないだろうか。

ハッキリ言って俺は瞬発力よりも持続的に速いペースで走る持続力型だ。

もう少し逃げるべきじゃないのか？

気持ち徐徐に前のめりになったそのとき、手綱が少しだけ引かれ、冷静さを取り戻

す。

（大丈夫だ。ペースはケンちゃんに任せるんだ。俺がすべきなのは、とにかく冷静に走ることだ。逃げるんじゃない……俺は、勝つんだ！）

第3コーナーから第4コーナーにかけてペースを速めるよう、指示が入る。

ギアを上げていくように、じわじわとラップタイムを加速させていき、最後の直線もまだ持ったままで鞭が入らない。

「ケンちゃん！ 後ろどうなってるの！ 後ろ！」

当然返事はないが、鞍上はとでもリラックスしているようだった。

このままで問題ないのか。ペースを保ったまま、坂を上る。横目でターフビジョンを窺うと、ゴール前で独走している自分の姿が目に入った。後ろは4馬身ほど離れている。

「あつ……あれ……なんかすげー勝ってるなあ」

ゴール板を駆け抜けてもまだ余裕たっぷり。それだけ完璧なレースができたというべきだろうか。

勝利の喜びよりもあれこれ気合を入れた割りにあつさり勝ってしまった困惑の方が強かった。大歓声でもあれば違うのだろうか、所詮は朝早くの未勝利戦。決して観客は多くないため、ちらほら声が聞こえる程度。

「この、芋野郎のクセに……！ なんなんだ……なんだよ、アイツ……勝てねえよ……！」

栗毛のアイツが睨みつけてくる。だが、今更話すことなどはなかった。俺とほかの馬との間に勝者と敗者という線が容赦なく引かれ、会話すらも隔てていた。

これが、戦いの世界なのだろうか。だとしたら、それがとても恐ろしいことのように感じられた。

レースに出てくる馬たちはみんな誰かの思いを背負って走っている。その上で勝利というたった一つの席を巡って、争う。

勝てば栄光を掴み、負けたら何も残らない。

十分な結果を残せなければ、その未来は……。

それが競走馬の理で、そのことを理解して……俺は初めて『競走馬』になったのかもしれない。

検量室へ向かい、レースが確定したことで俺の初勝利が決定した。

「よしよし。よくやったわ。随分余裕そうやな。ケロつとしてるし、次はプラン通りにいけそうや。橘オーナー、グレ坊を褒めてやってください。ちよつと興奮してるかもしれないから、優しくな」

「あつはい……グレっちすごいね！ 近くの馬主さんがね、すごく強いって言ってたよ。

グレっちはサイコーなサラブレッドね！」

なでなでよしよされる。

これはすごい、確かに興奮しちやいそうだ。あつそこはくすぐつたい……

その後の口取り式での写真撮影ではちよつとポーズでも決めようかと思つたけど、流石に危ないのでそれはやめた。

ただ、ケンちゃんが鼻の下を伸ばして橘ちゃん隣の隣に立とうとしていたので軽く蹴つて追い払つた。橘ちゃんの隣に立つのは俺だ。

後日、ラツキーパンチ先輩が厩舎を旅立つことになった。話すタイミングを窺つていたが、俺の馬房の前を通つた時、少しだけ話をする事ができた。

「グレ坊。ありがとう。お前が勝つてくれて嬉しいよ」

「先輩……ありがとう、ございまして……！」

「俺は大したこととしてねえよ。でも……いいな。いつかお前にお礼をされたつて自慢できる。ダンスパートナーさんっていうスターとも一緒にいられたしな」

「……俺、すげえ馬になります。俺にはそれしかできないですけど……いつか俺に色々聞いてくる馬がいたら言つてやります。ラツキーパンチ先輩つて馬に優しくされたから、今があるつて」

「馬鹿野郎……ウケねえよ、それは」

ラッキーパンチ先輩は少しかだけ涙ぐんでいるように見えた。

俺は我慢できず、涙を流してしまつた。

彼が新天地でも幸せに過ごせるように祈り、そして彼に俺の活躍を届けられるように、より一層強くなろうと誓つた。

×××

いよいよイベントレースの日がやってきた。

トレセン学園には一般の観客も多数来場し、ちよつとしたお祭り騒ぎとなつていた。それもそのはず、今回のイベントレースに出走するウマ娘は錚々たるメンバーがそろつていた。

大歓声の中、入場するウマ娘たちを実況者が読み上げる。

「トレセン学園エキシビジョンレース、今回は芝2400m、左周りで行われます。さあ、入場するなり大歓声が響き渡りました！ 3枠3番に入るのは『レースに絶対はないが、彼女には絶対がある』と評された皇帝・シンボリルドルフ！」

「6枠6番には孤高の王者、シャドーロールの怪物・ナリタブライアン！」

「ターフの名優、メジロマツクイーンは1枠1番へ！ 2枠2番へミホシンザンが収ま

ります」

「葦毛の怪物、オグリキャップも参戦！ オグリは4枠4番へ」

「7枠7番へ入るはヤマニンゼファー、この距離でもいけると自信たくさんのコメントがありました」

「5枠5番へはメジロラモーヌ！ トリプルティアアラウマ娘が堂々とゲートに入ります！」

いずれもGI競争で勝利を挙げた超一流ウマ娘たち。いくらイベントレースといえど、あまりに豪華なメンツに新聞で号外が出たという。

余談だがなぜこのような豪華なレースメンバーになったかという点。

まず、生徒会長であるシンボリドルフが観客たちを呼び込むために出走を宣言。同じく生徒会の副会長であるナリタブライアンがシンボリドルフとのレースを望み、滅多にレースをする機会がないが故に、チャンスと挑んだのがメジロラモーヌ、ミホシンザン、そしてヤマニンゼファー。

オグリキャップとメジロマツクイーンは優勝賞品の一流パティシエによる絶品人参スイーツを目当てに参加した。

その中で異色だったのが――

「8枠8番の大外枠に入るのは、なんとなんと！ デビュー前のジュニア級所属ウマ娘、

グレートエスケープ！ 直前のインタビューでは『1着が目標』とだけ短く答えていました。果たして、どこまで通用するのでしょうか」

——グレートエスケープだ。

彼女は賢く、鍛錬を積んだウマ娘だということとはわかるが、相手がシニア級——それも歴史に名を残すウマ娘たちが相手となると話は変わる。

ジュニア級とシニア級ではそもそも肉体の完成度が違う。経験も、まだトウインクルシリーズで走ったことすらないグレートエスケープと他のウマ娘とでは天と地ほどの差があるだろう。

「2400mという距離はクラシック級の春になってようやく走り出す距離だ。大まかに中距離という枠組みでこそあるが、最長でも2000mまでしかレースのないジュニア級のウマ娘にとっては長距離レースとすらいえるだろう」

「どうした急に」

「ましてやジュニア級のデビュー前のウマ娘にとって走り切るだけでも相当困難だ。さらに相手はいずれも超一流のウマ娘たちだ」

「どこまでやれると思うっ？」

「無理だ。こんな挑戦、無謀とすらいえる……だが超一流ウマ娘との戦いはグレートエスケープにとって貴重な経験になるはず」

「つまり未来に向けた挑戦ってやつか」

「ああ。未来のダービーウマ娘はグレートエスケープかもしれないな……」

観客たちが口々に意見や疑問を口にする。

確かに一流ウマ娘と走ることは得難い経験になるだろう。冷静で賢いグレートエスケープならば未来を見据えたレースを選択することは予想できる。

だが――

『来週のトレセン学園のイベントレースに出走する』

あの時、宣言した彼女の瞳は本気だったように見えた。本気で最強たちに勝とうとしている、挑戦者の目だった。

「やはり癖があるウマ娘だな……良い才能はあるが、いくらなんでも傲慢というものだろう」

「ああやつて現実を知っていくものなのよ。とはいえ、あそこまで無謀だなんて……彼女が天才なのか、愚かなのか、紙一重ね」

「そもそも2400mをいきなり走ろうとすることの方が危険よ。足の負担など考えてないのかしら……ああいうタイプは遅かれ早かれ、怪我で引退してしまおうわ」

以前彼女をスカウトしていたトレーナーたちも冷ややかな視線を向けるばかり。

だが、彼女なら何かやってくれるんじゃないか。だから――

半ば祈るようなそんな気持ちでグレートエスケープを見つめた。

(頑張れ……グレートエスケープ……!)

○

「グレートエスケープ!」

ゲート前で精神統一を行っていると、声をかけられた。声をかけてきたのは、生徒会長にして皇帝と称される三冠ウマ娘、シンボリルドルフ。

——最強の称号を持つウマ娘。

彼女はにこやかに手を差し出してきた。

「噂は聞いている。レースに出たら年功序列、デビューの前かどうかは関係ない。だが君のような新進気鋭のウマ娘が出走してくれて、嬉しく思う。今日はいいレースをしよう」

友好的な態度だが、にじみ出るオーラは熱く、鋭い。

身長でいえば私の方が上だというのに、シンボリルドルフ会長は巨大な一つの岩のようによく見えた。

頬を汗が伝う。冷や汗か、脂汗か。

心臓を鷲掴みにされたような迫力を覚えながらも、私は握手を拒否した。

「……私は勝つためにレースをする。勝ったレースがいいレースだ」

「ほう……そうか。それは失礼した。緊張しているかと余計な気をまわしてしまつたよ
うだ……自家撞着だな。ならば、全力で相手をしよう」

シンボリルドルフ会長の視線が鋭くなつた。普段の生徒会長としての姿は威風堂々
としているが、こうしてレースを共に走る段階になって、より威圧感の溢れるウマ娘で
あることを実感する。

なるほど、皇帝と呼ばれるわけだ——最後にゲートに入る。武者震いか、怯えか、震
えを落ち着かせる間もなく、ゲートが開いた。

○

「あーあ、なんだか可哀そうになつちやいましたね。スタートは完璧、ハナをとつたのに
直線ではすぐに抜かれて最下位入線……しかもかなり離されて」

「当然よ。相手はGⅠをいくつも勝つたウマ娘たち。幾ら才能があろうと、トレーナー
もついていないデビュー前のウマ娘が戦える相手じゃないのよ。時々いるけどね。そ
ういうことがわからないウマ娘が」

「やれやれ。三冠まで手が届く……というのは買い被りだったか。彼女のスカウトはし
なくてよかつたかもしれないな……言うことを聞かない気性難ではレースで勝つのは
難しいだろう」

レースが終わり、トレーナーたちがスタンドから去っていく。俺はいつまでもゴール

を見つめていた。

グレートエスケープは完璧なレースをしたように見える。もし相手がジュニア級のウマ娘であれば、彼女は完勝していただろう。

(彼女はやはり素晴らしい才能を持っている)

ただ、まだ彼女は自分を囲う檻から飛び出すことができていない。彼女自身も、それを目指して必死に足掻いている最中なのではないだろうか。

無謀なだけなウマ娘が緻密にスケジュールを立てて、自分で緻密なトレーニングやスケジュールを組むだろうか。

グレートエスケープは自分の才能を信じて、さらなる高みへ上るために走り出したばかりのウマ娘だ。

彼女を現実が見えていないウマ娘と評価するにはまだ早すぎるような気がした。

帰宅する際に、コースから蹄鉄の音が聞こえてきた。

この時刻は寮の門限に近付いていて、外に出ているウマ娘は普通ならいないはずだ。念のため誰がいるのかコースへ向かうと、芝のコースを走るウマ娘がいた。

「はあっ、はっ……はっ……はっ」

黒い髪と尻尾を靡かせるウマ娘——グレートエスケープが芝のコースを駆け抜けていた。

慣れない2400mのレースを行ったその日に休まず、芝でトレーニング。しかも、クールダウンなどではなく、負荷も以前見たトレーニングと変わらない。それどころか、それ以上のペースだ。

「まだタイムが遅い……くそっ……まだまだ……!」

(明らかにオーバーワークだ!)

あれだけ綺麗だったフォームはばらつき、直線で右にヨレたり、コーナーでは大きく膨らんでしまっている。

我武者羅に走っている状態では怪我をしてしまう。

彼女の名前を呼ぶ。

——グレートエスケープ!

走る彼女が止まった。こちらを見る目は以前のような落ち着いた眼ではなく、今にも噛みつきそうな視線だった。

「……この前のトレーナーか」

なんだか雰囲気が違う。少したじろぐと、グレートエスケープは笑った。

「ん、ああ、素が出てたかな。まあ、いいか……それで。何の用だ。私は今忙しいんだ」
普段の雰囲気は猫をかぶっていたのだろうか。そっちも気になるが、彼女に今ではオーバーワークになることを伝えた。

グレートエスケープはため息をつく。

「……かもな。だがやらなきやならないんだ。今日の敗北を見ただろう。まだまだ最強には遠い。着差以上の実力差を感じたよ」

確かに敗北した。けど相手は遙か未来に位置する最強ともいえるウマ娘たちだ。

そんなウマ娘相手にハナを奪い、善戦した。

いいレースだった。

「いいレースね。いいレースとは何かな。トウインクルシリーズ……いや、ウマ娘のレースはいつだって勝者は一人だ。敢闘賞はない。その戦いの中でいいレースをしたって言えるのは……勝ったときだけじゃないか？」

グレートエスケープはそう反論した。彼女の目は本気だ。

普段は礼儀正しく、成績も優秀な姿こそ見せているが、その実、どこまでもストイックに勝利を求めるウマ娘が、本当の彼女だ。

「言いたいことはそれだけかな。トレーニングに戻らせてもらおうが……」

——君がスカウトを断る理由がわかったよ。

「ほう……そういえば、君は私と契約を結びたいと言っていたな。その願いは今も変わらないか？」

彼女が持つ才能。そしてその才能を武器に、発露する勝ちたいという鋼の意志。

俺は彼女と共に、頂点へと上り詰めた。その思いは変わらないどころか、レースを見てから強くなるばかりだった。

「だったら、私が満足のいく答えを言えたら契約させてもらおう。それで、何故私がスカウトを断るかだが……どうかな」

——君は、最強を目指している。最強を本気で目指す相棒を、君は求めているからスカウトを断っている。

頂点に届くのかどうか、そんなことはまったく考えずに。ただ勝ちたいという思いだけを胸に、藻掻いて、足掻いて、走り続けている。

——君はトレーナーの実力のあるなし以上に、本気で夢を目指す相棒を必要としているんだ。それが理由だ。

俺がそう締めくくると、グレートエスケープは涙を流していた。

どこか痛めたのかと思って慌てるとグレートエスケープは首を横に振る。

「……嬉しくなってしまうって、涙が溢れてしまった。すまない」

彼女が目元を拭う。表情は幾分か和らいでいた。

「幼いころから、私は最強のウマ娘になりたかった。だが、それを聞いた誰もが笑うばかりだった……笑われても関係ない。負けないように走り続けてきたが……」

それも今日までだと、彼女は笑った。

ジャージについた泥や芝を払うと、彼女は手を差し伸べる。

「トレーナー……私だけのトレーナーになつてくれないか。私と共に、頂点へ至る道を歩んでほしい」

彼女が初めて夢を持つてから、ずっと孤独だったのだろう。応援されることはなく、認めてもらうこともなく、嘲笑ばかり浴びて。

それでも、孤独だろうと戦い続けてきた彼女の気高い意志が報われるように、全力を尽くすことを誓う。その証として、彼女の手を握りしめた。

「……なんだか照れるな。だが、悪くない。これからよろしく頼むよ、相棒」

そう言つて笑うグレートエスケープの笑みは穏やかで、年相応の表情に見えたのだった。

第5話 走り出す思い

「ハンバーガーが食べたいッ。ポテトもだ……Lサイズのコーラで油分を洗い流しながら味わうんだよ……どう思う?」

「どう、って言われても……私から言えるのは体重がすごいことになりそうってことくらいなの」

「脂肪分が多いと筋肉にもよくないよ」

「その通りなのだが、如何せんこの衝動を抑えるのは難しい。そんな時はないかな、アイネス姉さん、ライアン」

トレセン学園のカフェテリアでテーブルを囲みながら、アイネスフウジンとメジロライアンにそう尋ねてみた。

ハンバーガーとポテトのセットは油と塩分と炭水化物の塊、体重制限が必要なウマ娘にとつては毒物に等しい。

「どうかどうしちゃったのさ! あんなに広背筋の素晴らしさについて話し合ったのに、君がジャンクフードを食べたいだなんて!」

「ライアンちゃんとそんなお話してたんだ……いいの、内容は聞く気ないから」

「誤解なんだよアイネス姉さん。効率的に鍛えるメニューについて相談してただけで、筋肉色の会話はしてないよ」

「そ、そんなー！」

落ち込むライアンだが本気で落ち込んでる訳ではないと思うので一旦無視する。

「とはいえー！ ライアンやアイネス姉さんの言うことは正論だ。ましてや相棒、トレーナーからも控えるように言われている……そこで、だ。トレーニングやレースに影響させず、ハンバーガーやポテトを好きだけ食べる方法はないだろうか」

カフェテリアでは甘い甘い、乙女がときめくスイーツが多数販売している。これの我慢は意外といけるのだが、今はどうしてもハンバーガーの誘惑に耐えきれない状態だ。

それもトレセン学園のこだわり抜いて作られたハンバーガーではなく、ファストフードのあのハンバーガーを食べたい。

どうしてこんな辛い思いをしているのか、頭を抱えてテーブルに突っ伏した。

「エツちゃん、すぐくストイックだからこういうことはないと思っただけ……意外だなあ。マックイーンと似てるかも」

「ライアンちゃん、実はエツちゃんって大食いというほどではなくても偏食家だったりするの。普段は徹底してるし、ガス抜きも上手くしてるけど、ガス抜きが上手くいかなくなるとうっちゃうの」

「そうなんだ……エツちゃん。それなら……やっぱり運動するしかないと思うよ。食べた分だけ筋トレ！ 栄養素を筋肉に変えてさらにパワーアップだ！」

ライアンがにかつと白い歯を見せて笑った。

「うむむ……しかしそれではほかのメニューが追いつかなくなってしまう。もちろんあの程度は運動するつもりなのだが……」

「ここはやっぱり根性で我慢なの！ 我慢して、レースに勝ったらご褒美にハンバーガーをいっぱい食べる。その方がやる気も出るはずなの！」

「それが一番かな……だが、トレーニングのモチベーションが出せるかどうか……」

アイネス姉さんのアドバイスもイマイチ響かない。

二人とも正論ではあるし、競技に励むウマ娘として当然の行いであって私がそもそもワガママや無茶を言っている。

そんな私に対して二人は意見を出し続けてくれた。

「マラソンしながら食べるのはどうかな?！」

「口がべたべたになりそうだな」

「ぎゅっと押し潰せばぺらぺらになるからカロリーゼロなの!」

「どこかで聞いた理論!？」

「炭酸抜きコーラ!」

「炭酸抜き無しコーラなら……」

「それはただのコーラなの！」

三人寄れば文殊の知恵というが、中々妙案は出てこなかった。

悩み疲れた私は情けない悲鳴を上げながら再度テーブルに突っ伏した。

そんなとき、アイネス姉さんのスマホが振動する。ごめんね、と一言告げて電話に出た彼女は、すぐに悲鳴にも似た声を上げた。

「えっ、アルバイトの子が体調崩して人が足りない!? その子は平気なの? 風邪なんだ……でも人が足りなくて……わ、わかったの。手伝ってくれそんな人を当たってみるの」

「どうしたの?」

「実は……」

バイトで欠員が出た! でも代わりがない! 申し訳ないけど誰か手伝ってくれ
そんな人を探して欲しい!

と伝えられたというのがアイネス姉さんの言葉だった。

「それはアルバイトの仕事なのか?」

「そう言われると弱い……でもお世話になっている以上は助けたいし……」

「それならあたしに任せてよ! どんなアルバイトかわからないけど、できることなら

なんでもするから」

「ライアン、あまり安請け合いは……と言いたいが、私も協力しよう。アイネス姉さんには恩返しをしたいと思っただけだからね」

「二人とも……ありがとうなの！」

アイネス姉さんは少し涙ぐみながら「持つべきは友人なの」と呟いた。

「ところで、どんなバイトなんだ？　あまり専門的だと手伝うのも難しいと思うが」

「ハンバーガー屋さんなの！」

「ハンバーガー屋さん……あっ」

声を上げたのはライアンだった。とても気まずそうにこちらを見つめてくる。

「……食べないぞ」

「そ、そうだよ、ごめんね！」

「そうなの。いくらエツちゃんでも食べないの」

いくら、つてなんだよ。

なんて三人でははははと笑いあった。そして途中で二人が笑うのをやめて、もう一度見つめてきたから固く宣言した。

いくらなんでもアルバイト中に食べるような真似はしない、と。

ぐぎゆるるる……。

今の音は腹の音だ。猛獣が唸りをあげている訳ではないが、私の心情としては余り変わらないかもしれない。

隣でポテトを揚げては紙のケースに詰めていくライアンが心配そうにしている。

大丈夫だ、そんな目で見えるんじゃない。

アイネス姉さんは最初こそこっちに仕事を教えてくれていたが今では忙しくなってそれどころではないようだ。

一人で何人分もの仕事をこなしていくあたり、歴戦のバイト戦士だけある。

しかし……なぜ一生懸命ハンバーガーを作っているのに私は食べられないのだろうか。作るだけだからか……でもでも……。

いやいやいや。私はウマ娘、それもトウインクルシリーズで走るアスリートだ。

今日は不摂生OKデーではない。

はつきり言って、昔からストイックにやってきたのは人並み以上に娯楽に弱いからこそ自分を律してきた面もある。

正確には適度に自分を甘やかし、バランスをとってきた。だが、ここしばらく上手くガス抜きができなかったことが祟って調子は不調状態だ。

ハンバーガーを食べたら調子が上がるんじゃないか……？

「そ、そういうえげさ！ エツちゃんはどうしてアイネスのこと姉さんって呼ぶの？」

「いや、食べてないぞ！ ……ああ、そのことか。なに、彼女には色々世話を焼いてもらってね。それから、そうやって呼ばせてもらっている」

「エツちゃんが世話になった…：…なんか想像つかないね。あたしみたいにズボラでガサツだったりするとアイネスはよく世話を焼いてくれそうだけど」

「ライアンの自己評価に意見はあるが…：…私にも迷っている時期があつてね。思い出すのも少し恥ずかしいが…：…確か、模擬レースで負けが続いていた時のことだ」

——トレーニングが足らないのか。戦法が悪いのか。走法か、条件か。

思いつく限り、あらゆる可能性を想定し、ひとつひとつ潰していく。言葉にすると一瞬だが、実際にはひとつの欠点を潰すのにもっと時間がかかった。

そうやって潰しきった末に臨んだレースでも勝てない日々が続いていた、そんなある時。「いいレースだった」と自分に言い訳をした。

とても楽だった。事実、2着や3着もまたあと少しで勝てるということだし、そうやって次勝てばそれでいい、と。

しかし、次第に2着や3着すら取れないようになってきて、ますます焦った。

その頃から、理論や栄養を軽視して、我武者羅に走るようになった。それでもしないと、おかしくなってしまいそうだったんだ。

フォームはめちやくちや、走行するルートもダメ。

何度も転んで生傷が絶えなかった。倒れるまで走る日々を繰り返していた。

ある日、走り終えて、倒れて、目を覚ますと近くにアイネス姉さんがいた。

そのときはただの野次馬だと思って、素っ気なく接したが次の日からなんとお弁当を持ってきた。

私も大概バ鹿なので「施しや同情なんていらぬ」と無視した。それ以上にアイネス姉さんもバ鹿だったのかもしれない。

生意気に歯向かうウマ娘を相手に、次の日も、その次の日もお弁当を持ってきた。

最初の数日は無視して、さらには酷い言葉を投げつけて、だいたい1ヶ月くらい経ったある日……

「トレーニング後に疲れて動けないところに無理やりおにぎりとスポドリを突っ込まれた」

「えっ」

当然驚いたし、水も飲まずに走り続けた後だから窒息して死ぬのかなと思った。

なんだかんだで食べて死を免れたが、おにぎりを噛んで飲み込むうちに、涙が止まらなくなつた。

張り詰めていた糸が切れたように、涙を流し続けながら、無言でアイネス姉さんが

作ったおにぎりを頬張った。

食べきってから、私はアイネス姉さんに尋ねた。

『どうして見ず知らずのウマ娘にこんな世話を焼くんだ……あんなに酷いことも言ったのに』

アイネス姉さんは制服が芝や泥で汚れることも厭わず、私を抱きしめた。

『貴方が自分を痛めつけるのを見ていられなかったの。なんだか、他人のような気がしなくて』

普段の私なら新手のナンパか、詐欺の手段だと思っただろう。

しかしそのときは、優しく背中を撫で続けてくれた彼女の胸に顔を押し付けて、泣き続けた。

勝ちたくても勝てなくて、練習もどうすればいいのかわからなくなつて。

諦めたかったのに、諦めることも出来ず、ただ脚が痛くても走り続けて、苦しかった。そんな弱音を吐き続けてもアイネス姉さんはずっと聞いてくれていた。

「今思うと本当に恥ずかしいよ。優しくしてくれたほかのウマ娘に泣きついて弱音を吐き続けるなんて。私も若かった……と思うことにした」

「そうかな。アタシは恥ずかしくなんてないと思うよ」

ポテトに塩を振りながらライオンは続けた。

「弱音を吐くつて、大切なことだと思うんだ。一生懸命であればあるほど、弱音を吐くと自分の目標や夢を信じられなくなっていくけど……吐き出さないと、いつか爆発しちゃうんだと思う」

あの時の自分は弱音を吐くことを恥だと考えていた。今でもないものねだりをして
いる暇はないと思つて弱音を吐かずに歯を食いしばろうと心がけている。

ライアンはそれは違うと言う。

「それを優しく受け止めて、励ましてくれる人は大切にすべきなんだと思う。そういう人がいるから、みんな頑張つていられるんだよ。アイネスは……エツちゃんのそういう人に、友達になりたかつたんじゃないかな」

「……それだと、アイネス姉さんには助けてもらうばかりになつてしまうな」

「アイネスは世話焼きだから……でも、こうやつてバイトを手伝つてあげるのも、アイネスを助けることになるんじゃないかな」

ライアンはそう言つて笑つた。

私はなんだか随分赤裸々に語つてしまったことを思い出して、赤面した。

「……まあ、こんな具合に。それから色々世話焼いてもらつてからアイネスフウジンを姉さんと呼び慕うようになったわけだ」

「なんだか……姉さんとか、お姉様つて……本当にあるんだ……なんだか……ドキドキ

してワクワクしちゃうな」

「この流れでそれを言うのか、君は」

「二人とも！ 話してないで手を動かすの!!」

『はいッ』

アイネス姉さんからの叱咤が飛んで、二人して返事をする。

こうして助け合ったり、話し合う相手のことを友達と呼ぶんだな……。

アルバイトの手伝いが少しでも助けになるように、バンズにパテを挟み続けた。

数時間働き続けてようやくアルバイトの時間が終わる。この時間になると利用客もまばらになるため、もう三人が働く必要はないとのことだった。

バイト終わりに店長に呼び出された。

「いやあ助かったよ。まさかトレセン学園のウマ娘ちゃんたちが手伝ってくれるなんてね。メジロライアンちゃんにグレートエスケープちゃん。ありがとう。これ、多めに入れていたから……アルバイト代ね。美味しいもの食べてよ!」

『ありがとうございます!』

バイト代という嬉しい臨時収入も入った。アイネス姉さんも同じくらい貰っていたようで、安心した。

「アイネスちゃんが連れてきた子がいい子で助かったよ」

「ありがとう店長！二人とも自慢の友達なの！」

「そうか……あ、ちようど……これ！三人に一枚ずつ。セットメニューの無料クーポン券。これでウチにまた食べに来てよ」

クーポン券を受け取る。そこには『ウマ娘セット』というメニュー名が書かれていた。ウマ娘セット、それは特大のバーガーに大量のポテト、さらに洪水レベルの飲み物を味わえる特大セットのことだ。

そのセットメニューが自分の前に並ぶ光景を想像し、心の中のジャンクフードを食べたいと願う猛獣が唸りを上げた。

ぐぎゆるるるる。

「エツちゃん……まさか」

「まさかなの」

「……店長。今からこのセットを食べたいのだが！」

気づいたら声に出していた。

……労働後の空腹時にハンバーガーを食べたいという欲望を抑えられないはずがない。

私は店長が笑顔で頷くを見て、我慢できなかったことを自覚し、天を仰いだ。

みんなで働いてから食べるハンバーガーは、とても美味しかった——

後日。トレーニング前に、トレーナーへ提案をした。至ってどうということもないよ

うな、いつも通りの仕草と語り口で。

「トレーナー。特に理由はないんだが、今日はスタミナ中心のメニューにしないかなに、私にもたまには気まぐれのトレーニングが必要だと思ってね……太ったわけではないからな？」

体力が30回復した！

スピードが5下がった

スキルPtが10上がった！

太り気味になった

×××

9月23日、土曜日。中山競馬場にて開催された第9レース、芙蓉ステークス。芝2000mの良馬場で行われたレースに俺は出走していた。

「14番グレートエスケープが先頭で第4コーナーに入ります。2番手8番ダイワアラモードは下がっていきます。1番人気の6番シーズグレイスが上がってくるが抜け出したのは14番グレートエスケープ！ 2馬身のリードを保ったままゴールイン！」

1番人気こそ譲ったものの、外枠からハナを奪い、直線で突き放すという逃げ馬とし

て理想の形で勝利することが出来た。

これでOP特別を勝利したから俺はオープン入り。兼ねてからの目標だった日本ダービーへ至る道が具体的なものに変わる。

勝利するなり黒井先生はぼんぼんと俺を撫でた。

「少し短い間隔と輸送でどうかと思つたが体重も理想通りやったし、いい勝ち方やで。輸送はあまり苦労しなさそうやな」

栗東トレセンから中山競馬場まで長い道のりだったが、前世はこれでも人間（だつたと思う）だ。

窓から外が見れず、あまりいい環境ではなかったが普通の馬よりは我慢できたはずだ。

「中山の小回りでしたけどここでは流石に相手が違つたツスね。意外と器用でした」

「頭いいだけじゃそこは他にもならんと思つたんやけどな。レースを理解している分、コーナーを理解した上で曲がるから騎手も動きやすいやろ」

「ええ、俺も初めてのクラシック制覇が見えてきた気がするツス」

「小僧がよく言うわ。ま、実際リーディングで勝てるからな、文句は言えんわ」

どこか和気あいあいとした雰囲気だ。約1ヶ月後、ダンスパートナー先輩がG1レースに出走予定となっているから、弾みがついたということとで陣営も気分が明るくなって

いるようだ。

ケンちゃんはそのレースでは別の馬に乗るらしいが、まあ騎手つてそういうものだ。昔はともかく、特にほかの厩舎の馬などに乗ることもある今では騎手同士や厩舎同士で犬猿の仲のようなライバルにはあまりならないという。

フランスでは惜しくも敗戦してしまっただが、頑張つて欲しい。なんせ、牝馬であるダンスパートナーさんが牝馬クラシックの最終戦『菊花賞』へ出走するのだから。

牝馬が牡馬に勝つのは人間と同じでとても難しいことだ。そんな難行に挑んでみせるというのだから、応援したい。

厩舎でもダンスパートナーさんに対する応援の声が多数かけられていた。

「最近エツちゃんも調子がいいみたいじゃない？ 次はどこを走るの？」

「黒井先生が言うにはラジオたんば杯2歳ステークス……重賞です」

「いよいよ重賞初挑戦なんだ……私、フランスでは負けちゃって落ち込んでたけど、エツちゃんの勝ちに勇気を貰えたんだ。今度は私の番だよ。菊花賞で勝つて、エツちゃんに重賞挑戦の勇気をあげる！」

ふんすふんすと鼻息を荒くするダンスパートナーさん。張り切っている姿はどこか微笑ましさを感じる。

しかしいざレースに臨むと、切れ味鋭い末脚で牝馬たちを蹴散らす女王の姿に早変わ

りする。

菊花賞でもその末脚を炸裂させて欲しい。

当日、俺は馬房でラジオを聞いていた。なにも自分でラジオを流しているわけじゃない。馬房付近で菊花賞のラジオを聞いている厩舎スタッフによって俺も聞くことができているのだ。

流石に場所を移動しようとしたときには引つ張って止めたが、馬の体でラジオの操作は難しい。コンセントを差すのが感電しそうで怖い。

「始まったな……なんでこいつ離してくれないんだ。わからんだろ……」

スタッフがため息をつく。

すまないとは思いますが実は馬房のみんな、ラジオに耳を傾けている。

意外と馬は人間の言うことをかなり理解しているのかもしれない……と伝えるのは難しいか。

「気合が入って……スタートしました。出遅れはありません」

レースがスタートした。ダンスパートナー先輩は無事にゲートを出たらしい。既に俺たちができることはない。思いよ届けと天に祈り続けることだけだ。

ダンスパートナー先輩は牝馬ながら一番人気に推されている。今年のダービー馬を

抑えての人氣は誰もが彼女の力を認めている証拠。

事実、ダービーよりもオークスのタイムの方が早かった。牡馬にも負けない力がある
とみんなが信じている。

ダンスパートナー先輩は中団につけているとラジオからアナウンサーの声が聞こえる。

「音量上げろよ兄ちゃんよオ」

「充分聞こえるだろ、静かにしろよ」

「今ダンスパートナーって言ってたよね？」

「うるさいから黙っててくれ」

馬房でみんなが聞き耳をたててやいのやいの言い合っている。

スタッフのあんちゃんにとつては鼻息がふごふご鳴ってるようにしか聞こえないだろうが、多分言葉の内容を聞いたら驚くだろう。

レースは瞬間間に流れていき、第4コーナーへ差し掛かる。

「ダンスパートナーは外に持ち出してぐんぐん差を詰めてまいりました！」

「ヨシッ！」

少し離れた事務所で観戦しているスタッフ、馬房でラジオを聞いているスタッフ、ダンスパートナーを慕う俺たち競走馬全員が声を上げた。

中国から末脚を炸裂させて1着でゴールイン。誰もが牝馬の菊花賞制覇という夢を見た。

しかし――

「マヤノトップガン先頭！ マヤノトップガン先頭！ 2番手にトウカイパレスが上がってくる！ マヤノトップガン先頭！ リード1馬身でゴールイン！ 菊花賞を制したのはマヤノトップガンです！」

――牝馬と距離の壁はまだ厚かった。

結果は1着と0・4秒差の5着。4コーナーでの手応えは悪くなかったが、最後の直線で伸びきれなかった。

しかし厩舎では負けて強しのレースだったと受け取り方は前向きだった。これからも牝馬相手に互角に戦える、と。

ダンスパートナーさんが帰ってくると、表情は明るかった。

「残念だったなあ……悔しいけど、男の子相手にあそこまで戦えたなら悪くないでしょ？ でも……みんなのためにも勝ちたかったな。ごめんね」

「そんなことないぞ！ ダンスちゃんは流石の走りだった」

「ダンスパートナー、素晴らしい走りだった！」

「また次があるんだから、次勝つしかないだろ。次、勝つんだ！」

少し悔しそうに笑う彼女に対して、ほかの馬たちは慰めの言葉をかけた。ダンスパー
トナーさんは励ましが次第に「可愛い!」「最近お姉さんぶってるの可愛い!」「優しく
されてるグレ坊は落鉄しろ!」「ダンスちゃんのパートナーになりたい」という褒めてる
のかセクハラなのか怨嗟なのかよくわからない言葉に変わっていくのを聞いて、恥ずか
しそうにしていた。

そうこうしているうちに夜になる。

俺も寝ようかうつらうつらし始めた頃だった。

「エツちゃん……少しいいかな」

壁越しにダンスパートナーさんの声が聞こえてきた。こんな風に聞いてくることは
初めてで、眠気が消えて、耳を立てた。

続きを促すとダンスパートナーさんはぼつりぼつりと語り出した。

「エツちゃんに勇気を上げたいから……私は走るって言ったけど、本当は違うの。本当
は、ただ私が勝ちたかった。第4コーナーで勝てるかもって思って、想像したのは私が
勝って、表彰される姿。でも、結果は5着だった」

相槌を打つにとどめて、話を聞き続ける。声音からすると、いつもよりトーンが落ち
ていて、いわゆる落ち込んだ状態だった。

「バカみたいだね。かっこつけて……結局自分のために走って……負けちゃうなん

て」

「自分のために走ることは悪いことじゃないと思います。それに、いいレースだったじゃないですか。あと少しで勝てたかもしれないレースで……」

「勝てなきや意味ないの!」

まさしく悲鳴だった。ダンスパートナーさんは直後に少し慌てて「誰も起きてないよね……? ご、ごめんなさい」と謝った。

大きな声ではなかったが、そう感じるほど、心からの叫びだった。

「私は勝てると思つてレースに臨んで……一番人気にも推してもらつた。でも勝てなかった! 勝てないと……意味ないの……!」

ダンスパートナーさんはそう言うと、嗚咽を漏らし始めた。

初めて見た彼女の激情に俺は少し戸惑い、なんて言おうか迷う。考えてから、素直な感想を言つた。

「俺は……新馬戦で負けた時、次勝てばいいと思ひました。でも、とある先輩と話して、それじゃダメだと思つたんです。確かに勝てなきや意味が無いと思ひます。勝つために走っているんだから……でも。だとしても……次のレースがあるなら、次勝てるために走るしかないんだと思ひます」

時間は戻らない。菊花賞は一度だけしか挑めないクラシックレース。それでも、競走

馬を続けているなら、次のレースがある。

確かに次勝てば、なんて精神では何も掴めないかもしれない。けれど、負けたレースを引きずり続けても、前には進めないのだ。

「次のレースは重賞レースを予定しています。先生が言うには、来年のクラシック候補が何人も出てくるらしいです。勝てないかもしれない……でも、そこで負けたからといって、これからのレースも走らない訳にはいかない」

だから今は……悔しさを全部吐き出しましょう。

そう締めくくると、ダンスパートナーさんはぐすと音を立てながら泣き止んだ。

「……うん、うん。ん……ほんと、ダメだなあ……年下の男の子に八つ当たりして、慰められちゃって……本当に……ダメだ……」

「年齢は関係ないかもしれないですよ」

一応人間の人生も経験しているから、年上のはずだ。種族が違うのでなんとも言えないが。

馬だろうと色々考えるものなんだなあ、なんてぼんやり考えていると、ダンスパートナーさんは笑った。

「そうかも。エッチちゃんはここに来た時から頭良かったし……」

「頭良くないと思いますよ？ 馬鹿なことしてましたし」

挑発に乗ってレースで負けたり。

結局、人であろうと馬であろうと、悩んだり迷ったりするものらしい。もし人間の頃、そんなこと言っても真に受けられることはなかっただろうが。

「むしろダンスパートナーさんみたいに自分のために走れるのは羨ましいです。俺は、厩舎のみんなのためとか、そういうのばかりで。そういう意思が足りないんですかね……」

「お互い、羨ましく見えるものなのね」

「そうかもしれない」

人と違い馬は睡眠時間が短いので別に辛くもなんともないのが幸いというべきか。朝日が厩舎に差し込んでくるまで話が続いたのだった。

12月23日、有馬記念の前日。阪神競馬場に集まるのは、来年のクラシックで本命となる、未来のスターを探すファンたち。

2歳馬のチャンピオンを決定するレースは牡馬は朝日杯F S、牝馬は阪神J Fという2つのGIレースがあるが、本日阪神競馬場で行われる2歳重賞レースもクラシックを占う大事な一戦だ。

レース名はラジオたんぱ杯2歳ステークス。

G I I Iながら、阪神競馬場芝内回り2000mという距離から、皐月賞、日本ダービーを狙う馬たちが参戦するこれもまた2歳チャンピオン決定戦でもあった。

今競馬界では外国産種牡馬全盛期といわれるほどで、例に漏れずラジオたんぱ杯2歳ステークスにも多くの父が外国産種牡馬を持つ馬たちが参戦していた。

そんな外国産馬を父に持つ競走馬が競馬界に旋風を巻き起こす中で、父が内国産種牡馬ながら堂々と挑む馬がいた。

その馬の名は——『グレートエスケープ』

ダービー馬、アイネスフウジンを父に持つ内国産種牡馬の期待の星が、日本競馬の底力を見せるために参戦するのだった。

競馬ファンたちは、日本の血統は外国の競馬血統に通用するか否か、注目していた——

第6話 F i g h t S o n g !!

重賞レースというものは基本的にその日開催される競馬のメインレースに位置づけられている。

今日、俺が参加するレースも阪神競馬場第1レース、つまりメインレースとされている。

ラジオたんぱ杯2歳ステークス。先生はここが本番だといい、ケンちゃんもここで勝つかどうかで来年のクラシックへの道が変わると言った。

重賞ではあるがG1ほどではない、そこまで気合いを入れるのは何故かと思えば有力馬が多く集まっているらしかった。

日本の競馬界ではとある波が押し寄せている。外国産種牡馬の波？ 否。それ以上の波が押し寄せている。

その正体は——サンデーサイレンスという種牡馬の台頭だ。

去年に初年度産駒がクラシックシーズンを迎え……なんと皐月賞、オークス、日本ダービーというクラシックの大半を制覇してしまった。(ダンスパートナー先輩もサンデーサイレンスの子供)

これから競馬界ではサンデーサイレンス旋風が吹き荒れるだろう……と、新聞に書いてあった。

「それで今回出てくる有力馬がロイヤルタッチ、イシノサンデー、ダンスインザダークか……」

いずれもサンデーサイレンスの産駒にして、ラジオたんば杯2歳ステークスの有力馬として扱われている。

俺の立ち位置は新聞を見るに、外国産種牡馬の旋風に立ち向かう立場であるらしい。

「グレ坊、お前本当に読んでみたいに新聞を眺めるのな……」

厩舎のスタッフが呆れたように言う。読んでみたい、じゃなくて読んでるんだよ。

そう抗議しようにも伝わらず。邪魔しなければなんでもいいが。

ふいにダンスインザダークの項目に気になる文字列を見つけた。

「全姉ダンスパートナー……ダンスパートナーさんの弟!?」

あとで気になったので聞いてみたら、会ったことはないけど同じ母から生まれた子供、間違いなく弟らしい。

会ってみたくて楽しみにしている、とダンスパートナーさんは言う。クラシックを終えて、古馬との戦いでは一緒に走ってみたい……と。

俺はそれを聞いて、なんだかもやもやとした。

寝る時間になったころにようやく、その感情の正体が嫉妬だと気づいて、恥ずかしくなった。

厩舎スタッフの管理もあつて怪我や病気などのトラブルなくラジオたんぱ杯2歳ステークス当日を迎えた。

その日のパドックでのこと――

「――我が名は十字闇に舞い踊る閃光十字――」

1頭の競走馬に声をかけられた。鹿毛の馬体はなんとも雄大で、シンプルなほどに強さを誇示していた。

その馬は俺に語りかける。

「我が血に契約されし眷属と神託を受けし者……この身に刻まれた叡智は汝の真名を捉えているが、故に汝の言霊を欲す」

わからん。なんだこいつは。

俺はその馬にかけられたゼツケンの名前を見た。

「ダンスインザダーク……か」

「肯定。我が問いに答えず、しかし偉大なる神の軛から逃れし者よ。弁えておろう……時代のうねりから逃れられる者は何人足りともおらぬことを」

ダンスインザダークの言動こそふざけたものだが、その眼は決してからかいなどでは

なく、真摯さを感じさせる炎を宿していた。

「何を言ってるかはわからねーが……何を言いたいのかはわかる」

これは宣戦布告だ。お前に勝つという意思を突きつけられている……はず。ちよつと自信なくなってきたな。

それにしてもこいつがダンスパートナーさんの弟……ニワカには信じ難い。顔立ちや体格は何となく似てなくもないような気がするが、如何せん言動のインパクトがあまりすぎる。

「……お姉さんのダンスパートナーさんって知ってる？」

「無論。我が血族にして試練に挑戦せし者……我が偉業の到達点のひとつにして栄光の一部である」

ダンスパートナーさんの弟ということは確からしい。後半は何言ってるかわからな
いが。

そんな俺たちに対してまた別の馬が話しかけてきた。今度は2頭、俺と同じ黒鹿毛の馬と栗毛の馬だ。

「おうおうおう！ 随分いなかくさいのがいるじゃねえか！ OP勝ったからいい気になったカスが人気になっちまって……ウゼーなあ」

「……誰だよ」

「あ？ カスが誰に口利いてんだ。このロイヤルタツチ様に口を利くなんざ10年はええよ」

「ロイヤルタツチ……」

「てめえ……なんで俺様の名を知ってやがる」

おバカさんなのか？ その言葉を飲み込んだ俺の代わりに栗毛の馬が呆れた。

「キミが自分で言ったんだろう。相変わらず、その粗暴な態度は美しくないが……それ以上にキミもまた、美しくないね。血統も時代にそぐわない、それで持て囃されるとは。世間も見ると目がない」

「そういうお前は誰なんだ？」

「ものを知らない馬だね。頭の出来まで美しくない……まあいい。教えてあげよう。ボクの名前はイシノサンデー。美しく、そして誰よりも速い馬の名さ」

そうか。こいつら3頭が新聞で言われていた、来年のサンデーサイレンス産駒の期待馬たちか。

パドックの電光掲示板を見上げると、3頭が1から3番人気を占めている。その下の4番人気は俺となっていた。

「よってたかって何の用だ。パドックで仲良く話すつもりがないのはわかったが、宣戦布告でも？」

「ハッ！ 宣戦布告つてもんは対等の相手か格下が格上にやるもんだ！ このロイヤルタッチ様がカスにそんなことするとでも？」

「我が孕みし闇が言の葉を紡ぐ。栄光を争うのは我と偉大なる脱走者と」

「そういうことだ。キミに格の違いつてものを予め教えてあげようと思つてね」

3頭は突然ポーズを取り始めた。

「最強にして最恐！ どんな敵も後ろからぶつちぎる俺様の名前はロイヤルタッチ！」

「最強にして最速、美しさすらも纏ったレースで観るものを虜にするボクの名はイシノサンデー！」

「最強にして最優。闇を駆ける閃光、迷いし旅人が縋り付く最後の希望にして最期の光景。我が真名はダンスインザダーク」

『我ら4人揃って、サンデーサイレンス四天王！』

俺に腕があるなら、頭を抱えていただろう。

「おかしい。おかしい……なんで四天王なのに3人なんだ。おかしいだろ」

「おかしいのはキミの美的センスだよ」

「やかましいわ！」

関西弁が出ちまうわ。

目の前の3頭が決めたポーズは、まあわかる。なんで四天王なのに3人なんだ。

「俺様の四天王が3人しかないのは当然だろうがよ」

「君抜いたら2人や」

「冗談は置いて……あと一人は今回のレースには出走していなくてね。バブルガムフェロー、といえれば頭の中まで芋でいっぱいなきみにはわかるんじゃないかい？」

バブルガムフェロー。先週新聞で読んだ。2歳牡馬のチャンピオン決定戦たる朝日杯フューチュリティステークスで勝利したサンデーサイレンス産駒。

来年のクラシック戦線大本命とされている馬だ。

俺は戦慄した。

「汝の恐怖の匂いを、風の精霊が運ぶ。しかし恥じることはなく、これは必然である」

ダンスインザダークが何言ってるのかわからないから黙っててくれ。

「嘘だろ……お前らの他にバブルガムフェロー……だと」

「はっ、このカス、随分ビビってるじゃねえか！ まあ当然だがな。俺たちという偉大な馬たちの前座でしかなかったってことを突きつけられたんだ。カスらしい末路だぜ」

お、お前らの他にバブルガムフェローがいるなんて、そんな、そんな……！

——こいつらと同じくらい頭おかしいヤツがまだいるなんて信じられるかッ！

「ふ……ここで再度突きつけておこうか」

『我ら4人揃って、サンデーサイレンス四天王！』

「わかった、わかったから！ もういいって！ 4人揃ってからでいいよ！」

どうしよう。初めての重賞レースだつていうのに変なものを見ちゃった。緊張が消えた代わりに調子が崩されてしまった。

こういうときは近い仲間を探すんだ。頭のおかしい奴らじゃなくてまともな、そう、内国産種牡馬を父に持つ馬ならこいつらより話を通じるやつが……

他の馬たちに視線を向けたら全員に目をそらされた。

おい。嘘だろ……俺のこと、こいつらの仲間と思ってるのか!?

叫び出しそんな切ない気持ちになったが、ちようど騎手たちがパドックへ入ってくる。

もうすぐレースだ。それと同時に調教師の黒井先生もやってきた。そして……橘ちゃんも。

初めての重賞レースで来てくれるなんてどんなに心強いか。

年末で仕事も忙しいだろうに。

「グレっちお久あ〜！ 厩舎に全然会いに行けなくてごめんねえ……仕事の疲れマジ取れるわあ……ほんとグレっちすごいよ重賞走るなんて」

なでなでしてくる橘ちゃん。レース前の競走馬にここまで接触する馬主なんてそうそういないだろう。ちよつと珍しい馬主として有名になるだろうか。

美人だし、既に競馬サークルでも馬主や調教師、生産者と知り合って仲良くしていても不思議じゃないが。

「橘ちゃん元氣してたあ？　くんかくんか」

声は聞こえないので好き放題言いながら甘えまくる。レース前にはこれがないとやる気が出せない気がしてきた。

「うーん、こいつの馬主好きには驚かされるわ。女が好きってわけじゃなさそうやしな」
黒井先生のぼやきに当然だと心の中で呟く。

今思えば一目惚れだったのかもかもしれない。なにもどうこうなりたいわけじゃないが、この橘ちゃんという女性が俺は好きになっていた。

一度、調教に若い女の調教助手が乗りに来たことがあった。

可愛い子だったが、ここでやたら走ったら「人間の女だと誰彼構わず喜ぶ変態馬」と思われそうだったのでテコでも調教馬場から動かなかった。

黒井先生にキレられて仕方なく走ったが……腕前も若いだけあって、まだまだという感じだったために調教タイムもなんとも平凡な数字だった。

若くともリーディングジョッキー争いに挑んでるようなケンちゃんが上手すぎるだけかもしれないが。

「橘ちゃん、ご飯食べてる？　ちゃんと食べなきゃダメだよ？　また痩せた？　好きな

男とかいてダイエツト？ ふふふ、その男教えてよちよつと俺の糞叩きつけてやるから」

「うん……グレッチは元気そうだね！ アガりにアガってパリピってるねえ！ よしよしー！」

当然橘ちゃんに言葉は通じないがこれだけで充分だ。

見ててくれよ橘ちゃん。初めての所有馬が重賞ウイナーになってラツキーレディにしてみせるから！

「なんか……グレートエスケープ、状態よさそうツスね。最終追い切りもよかったツスけど……それ以上に感じちゃうツス」

「いつそのこと橘オーナーに乗ってもらった方がええんちゃうか？」

黒井先生とケンちゃんの呆れた声は無視だ無視。俺はレース前に充電をしてるんだ。

そこでほかの馬たちがこつちを見てるのに気がついた。

「なに見てんだよツ！」

ほかの馬は全員目を逸らした。

ゲートに入るころには、一周まわって気楽になってきた。もうなんか、あいつらのことは忘れよう。自分の走りをして勝つ。そして橘ちゃんのために、黒井先生とその厩舎のみんなのために勝つ。

一緒に勝つのは、ケンちゃんだ。一番頼れる相棒に全てを託して走る。

俺がやるのはそれだけだ。雑念は排除、雑念は排除……そういえばスタンド前からの発走、しかも重賞で観客が多いのにやたらリラックスしていた。

頭がおかしいあいつらの相手をするのを考えたら、緊張してもいられないからか。

俺はゲートが開くと同時に飛び出した。

「……！」

どの馬か、どの騎手かわからないが息を呑む音が聞こえた。それだけスタートは得意だ。

当然、今回もハナをとる。

真ん中くらいの枠だがすんなりハナについて、第1コーナーに入る。少し縦長の隊列になったが有力馬たちはどこにいるか、把握はできない。しかし俺が気にする必要はない。すべてケンちゃんに任せて、俺は指示に従って走るだけだ。

後ろから競りかけてくる馬はいない。

ケンちゃんの息遣い、乗り方もリラックスしていて、俺を抑えたり前に行かせようとすする素振りは見せない。

「いいところってやがるな……ロイヤルタッチとイシノサンデーは」

鞍上から声。レースはゆったりと流れていく。体内時計ではスローかつマイペース

だ。このままでは直線で瞬発力勝負になるだろうが、俺たちはわざわざそんな戦いをする気はない。

残り1400mからペースを上げる。後ろも徐々についてくるあたり、まだ余裕を持ったスピードで。

そして残り5ハロンから脚に力を込める。

「行くぜグレ坊!」

「応ッ!」

言葉は通じなくても目的は同じ。ケンちゃんの声と鞭に従って普段より早めのタイミングでスパートをかけた。

俺の強みは長くスパートをかけられる持続力、そしてスタミナだ。

その他にも騎手の指示に即座に反応するといったこともあるが、基本的な実力ではそこを武器にしている。

(三馬鹿は、ほかの馬たちはどうだ?)

反応を見る。ほかの馬たちは予期せぬタイミングのスパートに少し反応が遅れている。4角先頭のままゴールへ駆け抜けてやる、とギアをさらに上げようとした瞬間だった。

「狂宴への誘い……!」

「スパートのつもりかよ、カス」

「やはり猿の浅知恵、美しきの欠片もない」

(やはり)とも、(まさか)とも思った。

サンデーサイレンス3頭が一瞬で加速し、俺を狙って追いかけてきた。

読めていた訳では無いはず。俺がスピードを上げたことで騎手が反応し、その指示に對して末脚を発揮させているという競馬としては至って普通の走りだ。

だが——トップスピードに上がる速さが明らかにこれまで戦った相手とは違う。

これが重賞に、これがクラシックに挑むということ！

(だけど、負けてたまるかよ！)

凄まじい切れ味を発揮する馬が勝つんじゃない。勝つ馬はゴール板を1着で駆け抜けた馬だ。

こんなことで心が折れるには早すぎる。

厩舎のみんな、先生、ケンちゃん、ダンスパートナーさんに、先輩たち。そして橘ちゃん。みんなの想いを背負って走る俺に、レース中の弱音は許されない。

『第4コーナーを回って直線だ！先頭は7番のグレートエスケープ、このまま逃げ切るか。後ろから9番ロイヤルタッチ、10番イシノサンデーが追いかけてくる！さらには2番ダンスインザダークが馬群の間をこじ開けて突っ込んできた！』

阪神競馬場の最後の直線には上り坂がある。

坂の上りで止まってしまえば、脚を残している3頭が俺を差し切るだろう。

でも、止まってたまるか！ 止まってたまるか！

すぐ後ろに突っ込んできている馬がいるのはわかっているが、だからこそ最後の踏ん張りを発揮できている。

心技体の3つがあるが、苦しい時に最後にモノを言うのは積み重ねた技術と体力、そしてそれを積み重ねてきた自信からくる精神力だ。

(結局全部必要なんだよオオオオオ！)

坂を越えてその先のゴールへ。鞍上からの鞭が俺のトモを叩く。走りやすいように渾身の力で追っつけてくれている。

ケンちゃんも必死だ。

厩舎のみんなも俺に勝って欲しいからコンディションを整えてくれた。

だからこそ、みんなのためにも俺は勝たなくちゃならない。

「このカス……！」

「止まらない、だなんて……！」

「我が眼に陰りは無し、故に屈辱……！」

「うおおおおお！」

『7番グレートエスケープが粘っている！ グレートエスケープが逃げる！ グレートエスケープが逃げています！ 追跡者を振り切り切つてグレートエスケープが逃げ切りましたグールイン！』

グール板を最初に駆け抜けたのは俺だった。

アタマ差でロイヤルタツチを2着に置き去りにして逃げ切り勝ちを収めた。

あと数メートルグール板が遠ければ負けていたかもしれない、そんな脚色だったがグール板はそれより近くにあった。

なんて言おうと、勝者は俺だ。

「……………」

ゴール後のターフで一人息を着く。

勝利の喜び以上に感じたのは安堵だった。勝つことが出来てよかった、というホツとした気持ち。

力が抜けてふらふらと歩いてしまいそうだが、そんなことしたら厩舎のみんながすっ飛んでくる。俺はシャキッと歩いてコースを歩いていく。

ケンちゃんにとっては何個目の重賞勝利、俺にとっては初めての重賞勝利。

でもここがゴールじゃない。まだまだ、目指す場所は先だ。陣営での目標は日本ダービーで、俺のゴールも日本ダービーだけだ。

ターフを歩いている時に、4着だったダンスインザダークに声をかけられた。

「偉大なる脱走者よ。我が腕より逃れし翼には賛美歌が相応しい。しかし……刮目せよ。其は、闇の神話の序章にしか過ぎない」

「……………わからんが、えつと。次も負けない……………」

俺の返答に対してダンスインザダークは何も答えず、表情も変えなかった。やっぱりわからん。

「……………来年だ」

「あん？」

「来年、クラシックではてめエをぶつ潰す……………完膚無きまでな。芋洗って待ってろ、グレートエスケープ」

「それを言うなら首だろう。だがね、グレートエスケープくん。君の名前は覚えたよ。美しさの欠片もない勝ち方だったが、それに負けた自分はさらに美しさが足りない」

ロイヤルタッチとイシノサンデーが踵、いや蹄を返す。

負け惜しみというやつなのかもしれないが、今日の勝ちで格付けがついたとはとてもじゃないが思えない。

たまたま作戦が上手くいっただけの勝利で、決して力の差で勝ったわけではない。いわゆる「展開が向いた」ってやつだ。

ここからは皐月賞を目指すのだろうか、その前にレースを挟むはず。そこでまた戦う機会はあるだろう。

油断はしてられない。

あいつらの頭はおかしいが、実力は本物なのだ。

まだまだ、あの3頭、そしてまだ見ぬバブルガムフェローは超えるべき壁としてそびえ立っている。

振り返ると、ダンスインザダークだけは俺を見ていた。無表情だが、その瞳から放たれる視線は末脚のように鋭かった。

このあと、黒井先生には「いくでダービー！」と撫でられた。ケンちゃんには「必ず勝たせてやるからな」と励まされた。橘ちゃんとは口取り式のあとに「ここまできたら日本ダービーで勝って欲しい」と素直なお願いをされてしまった。

今日のレースで日本ダービーの険しさを改めて知ることになった。だが、心は折れるどころか燃え盛っている。

どんな強敵も必ず乗り越えて、勝ってみせる——決意を新たに、今日のところは厩舎で仲間たちの祝福を受けるのだった。

×××

目覚まし時計を止めると寝間着からジャージへ着替える。

黒鹿毛の髪の毛と尻尾の毛並みはいつも通りに鮮やか。癖がついていたらコトだ。

朝5時の栗東寮は静かで、朝や夜は混雑する共用の洗面台もとても静かだ。

「眠……」

顔をしっかりと洗う。春といえど日が昇りきっていない時間帯だと少し肌寒い。

この分ならきつちりとウオームアップをした方がいいだろう。

まだ食堂は閉まっているが朝練をするウマ娘用におにぎりがいくつか保管されている。

具材はランダムなのでちよつとした運試し気分だ。

おにぎりを3個、誰もいない食堂のテーブルで味わい、冷たい水で流し込む。

寮から出ると気持ちのいい空気が肌を撫でた。

「ふう……絶好の朝練日和だ」

ストレッチを交えつつトレセン学園のコースまで散歩する。コースについても脚や心臓はまだ起床しきっていない感覚がしたので、芝のコースを歩き出す。

怪我は怖いからな。じっくりウオームアップしよう。

(昨日は雨降ってたからちよつと湿ってるな……稍重、まではいかないか)

これならば負担なく走れるだろう。朝は街へランニングに繰り出すウマ娘もいるが、私はコースで走る方が好きだった。

街へ走るのもいいのだが、誘惑が多くて集中しきれない。

ジョグから開始し、芝のコースを一周する。ようやく足が暖まってきて、徐々にペースを上げていく。

春の陽気というよりは涼しく走りやすい気候だ。

「さて……走るとするか！」

ウマ娘、グレートエスケープの朝は気持ちのいいランニングから始まる。

しばらく走れば、いい汗もかいたとばかりに寮へ戻っていく。タイムも体力も脚の状態も問題はない。

ただ、少し腹が空いたことは想定よりズレが生じたことになる。それもまた良し。美味しく朝ごはんを食べることに決めた。

コースから帰る途中でサイレンススズカと出会った。彼女も汗をかいており、ランニングを終えたばかりのようだ。

「おはようスズカ。走るのには気持ちがいい朝だな」

「ええ、おはよう。エスケープも走ってきたのね」

「ああ。私はコースだが、誰もいなかったので満喫できたよ。スズカの好きな誰もいな

い景色ってやつさ」

「いいなあ……」

走りにストイックなように見えて、実はただの走るのが大好きなだけのサイレンスズカ。

彼女の羨望の声はまるでおもちゃを自慢された子供のようだった。

「外のランニングも気持ちよかつたんじゃないか？ この時間なら人の通りもあまり多くはないだろう」

「確かに気持ちよかつたけど……コースの雰囲気も味わいたい、走りたい……今から走ってこようかしら」

「そろそろ朝食を摂らないと始業時間ではないのかね？」

「……くつ。明日はコースで走ろう……！」

天性のスピードを持つ快速ウマ娘、サイレンスズカ。彼女もまた、デビューを迎えたら強敵になることは間違いないだろう。

小細工を弄する必要がない大逃げ戦法。

レースで勝つためにも、必ず攻略方法を身につけなければならない相手だ。

食堂は流石に朝ともなるとごったがえしていた。シャワーで汗を流してから訪れると、席もいっぱい座れそうな場所は見当たらない。

「あつ、おーいエツちゃん！」

テーブルの一角から声が上がる。私を呼んだのはマヤノトップガン、天真爛漫で大人の女に憧れるウマ娘だ。

小柄な彼女は手を挙げてこちらに振ってくる。

見れば隣の席が空いていた。

「座つていいかな、マヤ」

「いいよ！ エツちゃん相変わらず野菜好きだね！」

「マヤの好き嫌が多いだけじゃないか。大きくなれないぞ」

「もー、エツちゃんまで寮長さんみたいなこと言う！ いいの、マヤはほかのご飯を食べ
て大人になるの」

マヤノトップガン——様々な脚質で走れる稀有なウマ娘。器用でいて、レースセンスもずば抜けているステイヤーにして中距離も走れるオールラウンダーでもある。

それは置いといても、こうして私を呼んでくれるあたり、友人と思っている。

「エツちゃんは朝練？」

「ああ。直にデビューする予定だからな、そろそろ負荷量上げていかなければなら
ない」

「やったあ、もうデビューするんだ！ じゃあトウインクルシリーズでは一緒に走ろう

ね！」

「嫌でも走ることになるだろう。キミはGIクラスまで届くと思ってるし、私もそこまでたどり着くつもりだからね。ところで私に勝つならどんな戦法で走るかな？」

マヤにそうやって尋ねると、パンを齧りながら考え始めた。そしてものの20秒ほど待つ。

「……わかつちやった。エツちゃん、マヤが決めた戦法に対策を立てるつもりでしょ」

「さあ、どうかな」

「えー、エツちゃんずるいもん。絶対考えたよ！」

「そろそろ食べ終わらないと遅刻するぞ、マヤ」

「あー逃げた！ エツちゃんやつぱりずるい……あれ？ この前ネイチャちゃんが『大人の女はずるい』って言ってたつけ……むむむ……エツちゃんもやつぱり大人なんだね……！」

マヤの対抗心が少し強くなったように感じた。

どんな理由だ……と思うが走る理由はウマ娘それぞれだ。朝食を終えて未来のライバルとのレースを思い描いた。

……まだまだ足りない。強くならねば。

授業を終えたら早速コースに出る。トレーナーに指示されたメニューに応じて坂路

やダート、芝のコースと様々な走路を走りつづけた。

どれも対応すべき走法が違い、疲労する筋肉も変わってくる。だが、トレーニングをこなすうちにタイムも徐々に速くなり、そしてデビュー戦も近づいてきているのがはつきりとわかった。

4本目の坂路を終えたところでエアグルーヴがコースの傍にいたのを見つけた。

「やあ、エアグルーヴ。敵情視察かね」

「サボってないか確認したただけだ。エスケープ」

じつ、とお互いの視線が交わる。生徒会副会長にして、女帝と呼ばれるウマ娘、エアグルーヴ。

後輩に対する指導も行い、信望も厚い注目株の強敵だ。

「調子は良さそうだな。デビューが近いという噂も本当と見える」

「そつちもな。気が立ってるとも言い換えられる雰囲気、明らかに気合いが入ってるように見える。狙うはオークスか？」

「貴様に言う必要はない。いずれはわかることだ。貴様のことだ、日本ダービーを目指しているのだろう」

「それこそ言わなきゃいけないことかい？」

言い合ってから、お互い自然と笑みを浮かべた。

きつかけは入学試験でのレースだった。試験のレースでまったくの同着で入線してから、何かとつるむことが多くなった。

いわゆる一番のライバルというやつだろう。

デビューをしてもこいつには絶対負けない——心中でそんな想いが燃えていた。

「入学直後は随分鋭かった貴様も、変わったな」

「ウマ娘は成長する。それに、一番大切な部分は全く変わっていないさ」

「ふ……そうか。出遅れたりするなよ」

「女帝サマも、熱発でレースを回避したりしないようにな」

嫌いな訳では無いが、あまり和気藹々と話す気分にはなれない相手。しかし、話すことで多くの実りを感じられる相手でもある。

お互いに話は済んだとばかりに背を向けあった。

まだまだ走らなければ。超えるべき壁に跳ね返されぬよう、再び私はトレーニングのため走り出した。

トレーニングを終えれば日課のトンネル掘りだ。今回のトンネルの名前はディック。部屋から外へ繋がるトムとは別に、寮から学園内に抜け出すためだけのトンネルだ。

勝利には様々なものが必要だが、トレセン学園はウマ娘の生活を守るために寮生活があり、規則もある。

私は規則を守る優等生になりたいのではなく、レースで勝つウマ娘になりたいだけなのだ。その結果、いつでもトレーニングや買い物に行けるような手段を欲していただけのこと。

最初こそシンプルに時を見計らって脱走していたのだが、寮長や警備員との脱走劇によつて次第にエスカレート、結果的にトンネルを掘ればいいのではないかという発想に至ったのである。

この前はアグネスデジタルが見つかってしまったものの、トンネルそのものは見つかっていない。

普通そんな発想には至らないが……

「今日はこんなところか。さて。土を捨ててくるか……」

ジャージを袋代わりにして外へ土を捨てていく。トレーニングしたあとだ、ジャージが土まみれでもさほど怪しまれない。

トンネル掘りや脱走は最初こそトレーニングのためだったが次第にストレス発散の手段に変わっているような気がする。

確かに規則から抜け出し、自由に街を歩く背徳感はストレス発散になるし、やる気も上がるというもの。

なんだかんだコンディション調整になっているような気もする。土を捨てて戻った

ころには夕日は地平線に沈んでいた。

「エツちゃん!」

ふいに呼び止められて肩が跳ねる。別に後ろめたいことをしてるから肩が跳ねるのではない。呼び止めてきた相手が相手だから肩が跳ねた。

「アイネス姉さん……」

「トレーニング終わりなの? いつも頑張ってる偉いの!」

私の頭を撫でてくるアイネス姉さん。土で汚れるよと伝えても「いいの、いいの」と楽しげだ。彼女の方が小柄なのに、つつい頭を下げて撫でられるがままになってしま

う。

「アイネス姉さんはどうしたんだい? またアルバイト?」

「今日はちよつとお勉強。エツちゃんはちゃんと勉強してる?」

「しているよ。テストでは問題ない点を取れている」

「でも、時々おサボリさんなことも聞いているの」

「う……まあ、それは、あるかもしれない、が……」

アイネス姉さんには前から頭が上がらない。こうして痛いところを突かれるとつつい耳が垂れてしまう。

「もー、授業もちゃんと受けないとダメなの。デビューが近いからトレーニングしたい

のもわかるけど……エツちゃんは絶対にすごいウマ娘になるから、そんなに焦らなくてもいいの」

「そういうものかね」

「そういうものなの。デビュー戦決まったら教えてほしいの。絶対応援に行くの！」

その後しばらく、アイネス姉さんと話し込んだ。

もうすぐデビュー戦。今夜は布団にもぐりこんで、早くに眠ることにした。

トレセン学園の一日はウマ娘みたいにあつという間に駆け抜けていく。けれど、無駄にできる日は一日もない。

トレーニングの末に、レースに勝利する自分の姿を思い描きながら瞼を閉じるのだった……。

第7話 勝利と暗雲

XX95年の2歳路線は西と東で2強とする評論家の意見と、やはりサンデーサイレンス四天王が強いと考える評論家の二人で意見が割れていた。

俺としては、正直まだまだ2強といえるほど格付けがついた気持ちはない。

だが厩舎の黒井先生やスタツフたちは間違いないく2強、それどころか東の覇者であるバブルガムフェローより強いと考えていた。

馬主の橘ちゃんも「うちのグレっちが最強っしょ！」と嬉しそうにしていた。

だったら、胸を張って戦いに臨まなくてはならない。

俺一人だけでは決してレースを走れない、だが実際に走るの俺一人だ。

全員の思いを受け止めて、それを背負い、駆け抜けなくてはいけないと思っっている。

それにはまだ足りない。そう思うと調教に対する意気込みも上がってくるものだ。

今日は朝からケンちゃんを背に、ウッドチップコースを走っていた。

「調子いいっすね。馬もすごくやる気になってるツス」

トランシーバーで調教スタンドにいる黒井先生へケンちゃんが報告する。とりあえず決められたメニューをこなしたが、物足りない感覚だ。

ケンちゃんが手綱を引いてコースから離れようとするが、俺はそれが嫌でその場に留まった。

「どうした？ ほら、動かないと。ほら、ほらって」

もつと走りたい。俺はまだまだ行ける。かといつていきなり走り出したらケンちゃんが危ないから、手綱を握つてることを確認したらコースの方へ歩き出した。

「あー先生？ グレ坊……エスケープがなんか動こうとしないんですよ。調教馬場から。脚が痛いようには見えませんが」

トランシーバーでのやりとりだからはつきりとは聞こえない。先生は怒るだろうか。しばらく話し込んでいるとケンちゃんが俺をぼんぼんと撫でた。

「先生が『もう少し走るか？』って聞けつて言つてたけど……いやまさかな。というか言葉が通じるわけ」

その言葉を聞いて俺はハミを緩めた。

そして走つていいかとばかりに駈歩でコースを歩き出す。

「前から思つてたけど本当にお前は賢いな……もう一本行くつしよ！」
どうやらこちらの希望は聞いて貰えたらしい。

我儘を聞いてもらったら、その分結果で応えるつもりでコースを走り出した。

こういうことがあったためか、調教の本数も増えていった。先生も『脚元が丈夫に

なってきたからええやろ、走っても」と、調教でのトレーニングは激しくなる。

1月から休養に入り、2月には厩舎に戻って調教を積む俺の3歳シーズンは——つまりクラシック初戦は『弥生賞』に決まった。

皐月賞と同じ中山競馬場、芝2000mの条件で行われるトライアルレース。

陣営がそのことを発表すると、競馬新聞やスポーツ新聞は『西の覇者、満を持して出陣!』と書き立てた。

有力な相手として挙げられているのは以前倒したダンスインザダークとイシノサンデー。ダンスインザダークはきさらぎ賞での2着、イシノサンデーはOP特別の勝利を経た弥生賞に臨んでいる。

初対戦の相手にはセントポリーリア賞を勝利してきたツクバシンフォニーが2頭に次ぐ人気に推されそうだった。

その中で前評判ながら1番人気には俺が推されていた。

賞金額に余裕のある俺は弥生賞は叩き台にすると見られた上で1番人気とされているのだから、多くの人が俺が勝つと信じているらしい。

そこには実力の他にも、俺の血統に期待している記者やファンも多かった。

『父アイネスフウジン、母の父シンボリドルフの内国産馬血統は外国産種牡馬に互角に立ち向かい、馬産地に希望を与えるだろう』か……」

馬房を抜け出して事務所から引つ張り出した新聞に書かれた文言を眺める。もちろん読むのは部屋に戻ってからだ。歩きながら新聞を読んで怪我なんてしたらマヌケ通り越してみんなに失礼だ。

ちなみに今日は馬房の鍵が壊れかかっついていて危ないから蹴り壊しておいてあげた。これで交換するにはちょうどいいだろう。俺も外に出られて満足。

スタツフが開け閉めで苦労していたから新しい奴を買うといい。

それにしても、つくづく競馬というものは多くの人が生活を賭けて馬産に関わったりするものなのだ実感する。

外国産種馬が話題になる中、内国産の血統でも勝ると分かればアイネスフウジン、さらにはアイネスフウジンと近い血統の馬も人気になり、種付け料でお金を稼ぐこともできる。

そうでなければ、経営不振の状態になる牧場もあるかもしれない。「俺には多くの人の願いを受け継いだ血が流れているんだな」

人間にそれはないとは言わないが、サラブレッドはそれが顕著だ。金のために生まれる経済動物でもあるのだから、思いが託されないわけがない。

ある意味、生まれることを望まれない者はいない——そういう考えもできる。

そのためにも、クラシックレースに繋がる弥生賞で勝利しなくてはならない。

俺はますます調教で走り込むようになった。

中山競馬場、第1レース、弥生賞。

この日の俺はハナにはつけず、3番手でレースを進めていた。

先頭を走るレイカランマン、その後につけるツクバシンフォニーを見ながら、左斜め後ろにはイシノサンデーを見つつゆったりとしたスローペースに身を任せた。

『ええか？ 今日控えてイシノサンデーとダンスインザダークの末脚を測るんや。あくまで皐月賞、そして日本ダービーが本番やからな』

黒井先生のレース前の話を思い返す。

俺たちは弥生賞を勝つことが目標ではない。イシノサンデー、ダンスインザダーク共に本調子で臨んでいるわけではないだろう。

ここで勝つために全力で走るのを目先に囚われているといえる。

だからといって負けてもいいつもりでレースを走りはしない。余力を残した上で勝つ——ダービー馬になるんだから、そのくらいできなければ、と気合いを入れ直す。

『3コーナーから4コーナーの間でダンスインザダーク上がってきた！ 先頭はレイカランマン、ツクバシンフォニーとグレートエスケープが追い出しにかかり、イシノサンデーもそれを追っている！』

場内の実況のボルテージが上がっている。観客の声、そして後方から迫る圧力にダン

スインザダークの手応えが抜群なことを察知する。

だが——恐るるに足らず。積み上げてきた調教によって俺は間違いなく強くなった。サラブレッドは血統の世界とはいわれているが、生物である以上調教によって強くなる部分は必ずある。

それを信じて努力したことが、レースでも動じない自信を生んでいた。

鞍上も同じで『グレートエスケープがいちばん強い』と信じてくれているから、慌てることなく追い出しを待っている。

『直線に入りレイカランマン苦しいか！ツクバシンフォニー、グレートエスケープが前で粘る、イシノサンデーもこれを追って外からダンスインザダーク！ タイキフォーチュンは中団で藻掻いている！』

直線に入ると4頭が横一線に並ぶ。ここからは俺の脚がどこまで底力を発揮できるかにかかっている。

ラジオたんぱ2歳ステークスのときとは違い、まだ余裕があるが明らかにあの時より速くなっている。

イシノサンデーが少し遅れている。ツクバシンフォニーが粘り、ダンスインザダークは末脚でまだ伸びている。

それを見ながらダンスインザダーク相手にリードを保っているのだから、間違いなく

強くなっているのだろう。

結局、馬身差をつけて俺は弥生賞を制した。これで5戦4勝、未勝利戦から4連勝だ。

レース内容も先行抜け出しからの後続を完封した勝ち方で、文句なしだ。記者からは三冠についての質問が騎手と調教師にされていた。

それに対して二人は、

「3つ狙って全部走ります」

「そこを狙わんで調教師やつてる意味があらへん」

と不敵な笑みを浮かべていた。

俺はレース後も疲労は大きくなく、いいコンディションで皐月賞に駒を進めそうだ。

1冠目に向けて視界良好、今回は関東でのレースだったために仕事の都合もあって橘ちゃんは来られなかったが皐月賞は見に来ると言っていた。

GI勝利を彼女のためにも、絶対にプレゼントしたい。

そう言えるほど、俺の、俺たちの状態は良かったが、好事魔多しとはまさにこのことかと、思いもよらぬ出来事に叫び出しそうになってしまった。

——弥生賞の後しばらくして、橘ちゃんが倒れたという知らせを受けた。

×××

グレートエスケープはデビュー戦を勝利し、三冠を目指すために次の目標はホープフルステークスに決まった。

まずはひとつ勝てたことで、トレーナーとして心が幾分か楽になったがあまり休んでもいられない。

現にグレートエスケープはトレーニング、授業、トレーニング、授業サボり、脱走、トレーニングとひたすら勝ちに向かって邁進している。

そんな中、彼女のG I レース用の勝負服が届いた。

「どうかね、相棒。私の勝負服は」

ワインレッドのワイシャツに黄色のネクタイピンがついた黒いネクタイ。その上に黒いジャケットとパンツスタイルに加えて赤い指抜きグローブ着用と全体的にシックでありつつも派手なスタイルになっている。

ジャケットは袖を通さず、金色のアクセサリーで首に留めており、シャツの袖も捲られているぶん、活動的な印象を抱かされる。

とつてもかっこいい、と褒めるとグレートエスケープは笑った。

「デキるビジネスマンとか、敏腕刑事みたいな格好で私のイメージにぴったりだろう？」

それはどうなんだろう。定期的に脱走したり授業をサボっている彼女とは真反対ではないのかと思うが、口にするのと拗ねられそうなので黙っておいた。

「デザインでは結構迷ったが、いざ着用すると中々いいものだ。力が漲ってくるというか、今ならベストのタイムを弾きだせそう。レースで走るのが楽しみになるな」

デザインで迷ったと聞いて、彼女が自分でデザインしたのかと尋ねた。

「まさか。私は大雑把に希望を出しただけで、この勝負服にしてくれたのはデザイナーのセンスのおかげだ。ひとつだけこだわった点といえば……ここかな」

グレートエスケープはジャケットを留めている金具のアクセサリを指差した。そこにはトロフィーを模したものが取りつけられている。

よく見れば、日本ダービーを勝利することで手に入るトロフィーによく似た形をしていた。

「一生に一度しか挑めない、世代の頂点を決める戦い——日本ダービー。そこで必ず勝利するという誓いだ」

トロフィーを握りしめながら語るグレートエスケープ。鋭くも懐かしむような声音の彼女に、何故日本ダービーなのかを尋ねてみた。

有馬記念やジャパンカップ、天皇賞も大レースとされている中で日本ダービーなのか。

グレートエスケープは答える。

「言った通り、世代の頂点を決めるからだ。やるからには頂きを目指す——だから面白いんじゃないか」

彼女が浮かべていたのは獰猛な笑みだった。

グレートエスケープの勝負服に対する思いは徹底した勝利至上主義からくるもの。ウマ娘にとって一番大切な闘争心を強く持っている彼女は、間違いなく最強のウマ娘になれるはずだ。

必ず頂点を獲ろう！

「……ああ。当然だとも。そのために、相棒には全力で手伝ってもらおう。今日はこの勝負服を着たまま走るとするよ」

勝負服を身にまとい、やる気を溢れさせるグレートエスケープは、次のレースに向けて今日もトレーニングに励むのだった。

「すまない。相席してもいいだろうか」

カフェテリアで食事を摂っていると対面の座席に生徒会長のシンボリドルフが座ろうとしていた。

私は昼食の焼き魚定食を食べながら、どうぞ、と促した。

「助かるよ。私の堅苦しい雰囲気のせいか、他の子たちは気兼ねしてしまいうらしい。その点、キミは私にも常に威風堂々たる態度で過ごしているからな」

「威風堂々、なんてそれこそ君に合う言葉ではないかな、ルドルフ会長」

シンボリルドルフ——『皇帝』『絶対の名を持つウマ娘』『完全無欠』などなど、彼女を表現する言葉は多くあるが、私にとっては——『最強』に座する王者だ。

そんな相手に食事の時間程度で怯えていては到底たどり着けない。

「そうだ、グレートエスケープ。デビュー戦の勝利、おめでとう。良い走りだった」

「見ていたのか。天下のルドルフ会長に見られるとは光栄の至りだ。それとも、他のウマ娘にもいつも一言かけているのか？」

「本当はすべてのウマ娘を見て、声をかけてやるべきなのだと思うのだが。実際はそうもいかない。私の力が足りないばかりに……」

「子供じゃあるまいし。ましてや勝ったウマ娘、祝福のためだけに一々時間をとってどうする。もし声をかけるなら負けたウマ娘だろう……いや、これはそういう話題ではなかったな。祝福感謝する、ルドルフ会長」

「いや、いいんだ。君の意見も中々興味深い。……勝利は必ずしももう一度味わえるものではない。であれば、勝ったら祝福する存在も必要だとは思わないか？」

焼きサバから背骨を剥がしつつ少し考えてみた。

ルドルフ会長はこれを聞いて何を目的としているのか。世間話にしてはやや堅苦しい話題で——ああ、このヒトは世間話が苦手というか、話題が自然とこうなってしまうのだろうか。

私はなんだかいたたまれなくなり、会話に乗ることにした。もちろん、自分の意見があつたというのものもあるが。

「わからないな」

「む、君は将来有望だから一度しか勝てないということとはわかりづらいか」

「そうではない。何故そう考えるのかわからない、と感じたんだ。レースに臨んだ以上、勝利を目指す。そして勝てば、次も勝利を求めるのがサガというものだ。勝てないのであれば、それでも勝利を目指して足掻く……敵わないかどうかは問題じゃない。ただ勝利という栄光を手にするために。そんなウマ娘に対して祝福の有無は些細なことだろう。勝利を重ねた貴方にそれがわからないとは思えない」

敗北にこそ、支えが必要とも思う。それを会長がやる必要があるかは置いておくが、もし理想に寄り添うのであれば、圧倒的に数が多い敗者へ声をかけるべきだ。

私はそこまで答えてから、会長が笑みを浮かべてこちらを見つめていることに気が付いた。少し熱弁を揮い過ぎた。茶碗に残る白飯を一気にかき込んだ。

「君の意見は中々参考になる。流石だ、グレートエスケープ」

「デビユー戦しか勝利していないウマ娘の戯言とは思わないのかね」

「ふふふ、イベントレースでの啖呵を思えば、君がそんな小さな器に収まるとは考えられないさ。どうだろう、やはり生徒会に入会してみないかい？」

「またそれか。興味が無い。勝利に不要だ……それに、エアグリーブがいるからな。口うるさいのは御免だ」

昼食を平らげると食器を重ね、お盆を持って立ち上がった。その前に、余っていた食堂の食事券をルドルフ会長に渡した。

「対価なしに手助けするのは趣味じゃない。かといって何か、例えば食事券を貰う代わりにあれこれ助けたりしたら、彼女、間違いなく怒るだろうからな」

ルドルフ会長はハツとした。そして真面目な顔で言った。

「……それは、汚職事件（お食事券）ではないか？」

私は咄嗟に顔を逸らして肩を震わせた。

油断したらすぐこれだ。これがあるから生徒会に入りたくないのだ。

「つ……！ ルドルフ会長、くふ、こ、こ、こでつ、失礼します……！」

「そうだな。グレートエスケープも笑っているし」

「笑ってないっ……！」

「話すのはこれぐれー、と」

「ぶふうっ！ ほ、本当に失礼しますからねッ！」

笑いを堪えるのに必死で普段のキャラも装うのも困難だ。

汚職事件……お食事券って。

私は足早に食器を片付けて食堂を後にする。ホープフルステークスの前だということになんか変なタイミングで変な文言を聞かされてしまった。

悪い調子が出ないか、少し不安になる。

（『これグレー、と』はいつか使おう……）

翌週のホープフルステークスでは見事1着でゴール。その後のインタビューでさりげなくギャグを使ってみるのだった。

第8話 焦燥と憧憬

私は手足を縛ったウマ娘たち数人に向けて声を上げた。覆面にジャージ姿、格好は完全に不審者だ。ほかのウマ娘たちも怖がっている。

「動くな。動いたらペイント弾で芦毛だろうと青鹿毛だろうとカラフルにしてしまっぞ」

モデルガンを向けると人質のウマ娘たちは悲鳴を上げた。教室の一室に集められたウマ娘たちは隅っこに身を寄せあっている。

「うーむ、一人だと自由が利かないしな……だが問題は無い。その君、来てもらおうか」

「ぴえ、ご、強盗ウマ娘の言いなりになんかならないぞ！ この無敵のテイオー様は悪には屈しない！ シンボリドルドルフ会長だつてきつとそう言うもん！」

「ルドルフ会長に憧れてるのか。プロマイドいる？」

「わあい！ いる！」

「暴れたらプロマイド上げないからな。人質としてきちんと働いてくれ」

「はーい！ ところでなんでウマ娘さんは強盗なんてしてるの？」

「……いや、生徒会なら……んん？ キミは……生徒会所属のウマ娘じゃないな？」
「そうだよ？ ボクの名前はトウカイテイオー！ いずれ無敗の三冠を手に入れるウマ娘だ！」

しまった。

本来いるはずのないウマ娘が紛れ込んでしまっているようだ。エアグルーヴに引き渡すか……いや。

「トウカイテイオーくん。君には少し協力してもらおうか」

「協力……？」

「宝探しのようなものだよ。生徒会室にあるんだが……手伝ってくれないかい？」

「えー、面白そう！ ってダメダメ！ 強盗ウマ娘さん、悪いことしてるんだから」

意外とちよろくないというべきか。トウカイテイオーと名乗るウマ娘と目線の高さを合わせた。

「本来これは防犯訓練でね……私は犯人役をやっているだけのウマ娘なのだよ。トウカイテイオーくん、訓練を上手くいかせるためにも、協力してくれないかな」

「訓練……？ あつ、そういえば会長がそれで一緒に併走できないって言ってたヤツだ！ じゃあちゃんと終わらせれば会長もお仕事すぐ終わるかな？」

「無論だ。お互いに利害が一致したわけだな……よろしく頼む」

「うん！ このテイオー様にまかせたまえ！」

調略完了。

ふふふ、私の計画は依然問題なく経過している……防犯訓練に協力するのだ。これくらいのみみがなくては……私はマニュアルに定められた道を進んで行った。

「防犯講習？」

「そうだ。トレセン学園には警備員がいるが、それでも侵入しようとする不審者は時々いる。無論、対策を立てているがイタチごっこになっているのが現状だ」

授業の合間の昼休みに、クラスメートのエアグルーヴに声をかけられた。

話を聞くと協力して欲しいという依頼であり、その内容が防犯講習ということだった。

授業中に教科書で隠しながら読んでいた名作ウマ娘スポ根漫画「月光のマキバオー」を片付けた。

「だが不審者には様々な種類がいる。行き過ぎたファンにスクープを狙う悪質な記者、さらにはトロフィーやウマ娘の私物を狙う窃盗犯……過去には様々な侵入者が現れている。そんな犯人とウマ娘が不意に遭遇した際は危険だ」

「犯人が？」

「それもあるが……その娘の心に癒えない傷を刻みかねん」

「同意はする。私もほかのウマ娘が無闇に辛い目に遭って欲しい訳では無い。だが、毎年生徒会で講習や防犯週間のようなものをやっていないか？ 私が関わる余地はないと思うが」

トレセン学園の生徒会の仕事は多岐に渡る。何でそんないっぱいやることが多いのか疑問に思うこともあるが、とにかく色々やっている。

その中にもこうした防犯週間とか、災害時の避難訓練、防災活動、健康増進週間とか、ウマ娘の安全と健康を守る活動も行っているから頭が下がる。

しかし基本は生徒会活動主導のものだ。部外者の私が関わることはなかったはず。

「ああ、だが毎回同じことをやっているせいか、ウマ娘も危機感を覚えなくなりつつあり……無論それはいいことなのだが、いざというとき身を守るのにはやはり自己の冷静な判断だ。私としては防犯に関わる委員会の常設を提案したのだが……」

「難しいのかね？」

「会長の受け入れがあまりよくなってな……『それでいいんかい？』と度々確認してくるほどで……エスケープ、どうした。腹でも痛いのか」

「ツ……いや……！　そ、そういうわけじゃ、ふ、ふふつ……！　い、いいんかい、よ、よくはないな、うん……ふふつ……！」

「……やはりレースで疲れているのだろう。この話はほかのウマ娘に」

「ごほんつ。疲れている訳では無いが……そこで何故私に話が来るんだ？」

「生徒会に所属する娘からの提案だな。抜き打ちテストをすればいいのではないかと、という案が出たのだ。警察関係者の講習はもちろんだが、その前に実際にそういった場面に遭遇することで、身を守るときはどうするか、何をすべきなのか、より明確になると」

「読めてきたな。そこで被害者役として私を選んだわけか」

「いや、満場一致で犯人役に選ばれた」

「なんだと。私のような成績優秀、文武両道なウマ娘に対して何故そんな意見が上がるかわからない。」

「嘘だろう？」 とエアグルーヴの目を見つめると彼女はぎらりと眼光を輝かせた。

「脱走回数計測不能、立ち入り禁止時間に校舎へ進入、持ち込み禁止物品の持ち込み、及びそれらの無許可での販売……着いたあだ名は『栗東の脱獄王』『ねずみ小僧』『血染めの侵入者』等々。貴様が犯した罪は枚挙に暇がない」

「ふむ……そんなにやったかな？」

「罪に対する詰問は置いておこう。今回はな。様々な侵入、脱走を実施している貴様なら不審者役に相応しいだろうという意見が多く出たのだ」

「そこで模範的に侵入と、防犯をするわけか。イベント性もあって、ウマ娘たちも注目をしそうだな。大切なのはまず興味を持つこと、それがなくては始まらない。いい案だと思うが……」

「私としては反対だ。貴様に頼るのもそうだが、もしも本物と勘違いしたウマ娘と事故があつた場合、レースに差し支える」

エアグルーヴがそんな殊勝なことをいうとは。

女帝様はそういうところで妙に可愛いことを言うから困る。

思わずニヤニヤしているとエアグルーヴが訝しんだ。

「心配してもらえて嬉しく思つてね」

「なっ……だ、誰が貴様などの心配をするか！ 怪我をさせたウマ娘を心配しているだけだッ」

「エアグルーヴは可愛いな……いつそのこと部屋に侵入してみようか」

「ツツ！ ふざけるな！ 結局協力するのか、しないのかを答えろ！」

からかいすぎたらしい。

椅子に座り直してから佇まいを正した。

「ちなみに、対価は？」

「貴様のことだ。そういうだろうとは思っていたが……生徒会に参加している娘たちは

皆信念を持った上で業務に当たっている。そのような不純な動機で臨むのであれば不要だ」

「対価を支払うのが不純だというのは、らしくないなエアグルーヴ。……まあ、私としては委員会という手段もいいと思うがな。ルドルフ会長も本当に拒否するつもりはないのだろう」

「なぜわかる。会長はわざわざ私の意見を断っておきながら受け入れるなど……『いいんかい?』『委員会』……ハッ!? まさか! くっ……なんと……だ……会長の真意に気づかなかったとは……不覚!」

「まずい。思い出したら笑いが。」

エアグルーヴは少し肩を落とすしつ言葉が続けた。

今の時点では既に模範的な防犯行動を行うことで話がついてしまっているため、この方式で行くしかないとのこと。

他にも候補はあるから断ってもいいとのことだったが……。閃いた。

「協力しよう」

「対価の話はどうなった?」

「それは貸しということにしておこう。エアグルーヴたちも忙しそうだから、仕事を増やしたいわけではない」

「……助かる」

「構わんさ」

そうして防犯訓練当日を迎え、今に至る。

心中に計画を秘めながら……。

防犯訓練イベントの全容は以下の通りだ。

今回は生徒会所属メンバーが被害ウマ娘役、そして犯人役が私で進む。犯人役の私はトレセン学園に侵入、会議室にいた生徒会所属のウマ娘を人質に、強盗を企てる。

狙う物は生徒会室に飾られているトロフィー（ダミー）で、そこに至るまでのセキュリティ及び警備員の対応、そこに居合わせる予定の生徒会所属ウマ娘が対応するという段取りになっている。

一応プロレスのようなもので、私が捕まるところまでは決まっているのだが、セキュリティの穴を見つけるためにも本気でダミートロフィーを盗み出すつもりでやるように、ということになった。

「でも生徒会室なんて誰でも入れるでしょ？ さっさと行ってさっさと獲っちゃえばいいじゃん」

「普段はそうだろうな。だが、今は訓練中。学園のセキュリティシステムが作動中なん

だ。無暗に触れると警報が鳴るからあまり触らないようにな。わかったかね」

「了解であります、タイチヨー!」

トウカイテイオーは楽しんでるらしく、敬礼で返事をした。

まずは最初の難関、階段に下ろされたシャッターだ。

「ウマ娘の力ならこのシャッター、持ちあがりそうだよ。ボクやってあげようか!」

「それもいいが大きな音が出てしまう。ここはスマートにしよう……というわけで!

「これの出番だ」

「スマホ?」

「今はなんでも電子制御の時代、デジタルにはデジタルで対応するもんだ」

「スマホとコードでつないで……あつ、ハッキングでしょ! スパイ映画みたいでかつ

正しい!」

「正しくはクラッキングだがね。エアシャカールから借りたツールを使って……」

職員のパスワードはPCにシールで貼られていたりして、盗み出すのはとても簡単だ。

これもデジタルセキュリティの問題点になるだろう。

スマホから管理者権限を持つPCへアクセス、情報を確認しシャッターを開かせた。音を立ててながらも上がっていくシャッター。無理矢理持ち上げるよりは小さな音

で済んだ。

「おおお……タイチヨーかつこいい！」

「ふふふ。少女よ。時には力や速さだけではなく頭脳も必要になるのだよ。さあ、進む
としよう」

——一方そのころ。

生徒会、臨時防犯対策室。エアグルーヴは訝しんでいた。

「会長、もう訓練を開始して10分になります。だというのに未だに警報が鳴らないのは異常があったと考えられます。確認してきましようか」

「訓練は続行すべきだろう。警報が鳴らない理由によるが、それもまた問題点として上がる。最後にすべて確認するでしょう」

「はい……ですが、犯人役はグレートエスケープです。何をしでかすか……」

「彼女はああいう振る舞いこそするが、根は他のウマ娘のことをよく考えている。この前も食事の席を共にしたが有意義な話ができただよ」

「あいつが……いえ、まだ待機することにします」

「そうだ。泰然自若、今は雌伏の時だ」

「——なんて、呑気しているのだろうか、こちらは本気でいく。対価も無しに本気で協力するわけがないだろう」

「何の話?」

「なんでもない」

エアグルーヴあたりは怪しんではいたようだが、私の立てる計画の内容そのものを察知することはできていなかった。廊下を進んでいると生徒会室へ至る曲がり角に人影が見えた。

「む、見回り役の生徒会所属のウマ娘だ」

「見つかつちやうとどうなるの?」

「知らないのか? 通報されてしまう」

「めちやくちやヤバイじゃん! でもこのままじゃ生徒会室まで行けないし……」

トウカイテイオーが頭を抱えてうなっている。すっかりこっち側の立場になっているようだ。

だが、こちらには『これ』がある。

懐から黒光りする物品を持ち出した。テイオーはぎよっとした。

「ちよ、拳銃つていくらなんでも」

「心配しなくていい。中身はペイント弾、毛色がカラフルになるだけだ」

拳銃を持ち出して生徒会所属の茶髪のウマ娘に近付いていく。のっそり近付く姿に相手が気づくも、こちらの手に持つ拳銃に気が付くと尻尾を総毛立たせた。

「あつ、あの、これって訓練ですよね……?」

「訓練だが……こうして凶器を突き付けられても通報なんてできるかね」

「あの、えつと、あのあの……」

「確保オーツ!」

「きゃあああああつ」

生徒会所属のウマ娘を抱きしめるようにして捕まえると、持っていた紐で簀巻きにしていく。肌を傷つけないように縛り上げるとそつと頭と頬を撫でた。

「すまないね、お嬢さん。こういう目に遭わないよう、気を付けるんだよ?」

「ひゃ……ひゃい……」

茶髪のウマ娘はうつとりしながらその場に崩れ落ちるように座り込んだ。

少し怖がらせ過ぎてしまっただろうか。

本番があつたらもつと怖いだろう。ただ、本番がこないようにするための訓練でもある。

「さあテイオーくん、行くぞ!」

「イエツサー!」

テイオーと生徒会室へ向かう瞬間、背後に気配を察知する。

「あつ。ふ、不審なウマ娘発見! け、警備室! 不審者を発見しました!」

他の見回りウマ娘に発見されてしまった。

ここからは時間との勝負だ。

「テイオー、君は脚に自信はあるか？」

「何言ってるのタイチヨ。僕は無敗の三冠ウマ娘になるんだよ？ タイチヨも置いて行っちゃうから！」

「良い返事だ」

見回りのウマ娘が縛った茶髪のウマ娘に駆け寄っている。

犯人確保より仲間の安否確認を優先する素晴らしいウマ娘だ。あとでルドルフ会長に報告しておこう。

「大丈夫!? 犯人に何かされた!?!」

「ぬ、盗まれちゃったあ……」

「何を!?!」

「わ、私の……心です……!?!」

「ずっ、ずるい!?!」

あの二人はこつちを追うのは難しそうだ。トレセン学園の廊下を滑らないよう気を付けながら走り抜ける。

トウカイテイオーも私にぴったりとついてきていた。走りから感じる柔らかな

フォームは瞬発力とスピードを武器に活躍する姿を予感させる。
意外な強敵と出会ったかもしれない。

なにはともあれ、トウカイテイオーのことを気にせず走ったおかげで想定より早く生徒会室まで来ることができた。

「ここが生徒会室だが……」

「うーん、鍵がかかっている……タイチョー、どうするの?」

「時間がない。かといって蹴り壊せば本当に怒られるからな。ここは……こいつの出演だ」

取り出したのはピッキングツール。鍵をかちやかちやつと……ちよつと複雑だが私にかかれば3分とかからない。

生徒会室の重い鍵はかちゃん、と音を鳴らした。

「よし! 突入するぞテイオーくん」

「イエツサー!」

扉を開けると無人の生徒会室が広がっている。テイオーはルドルフ会長が座る椅子に腰かけた。

「おおう、ふかふか……いつもカイチョーが座ってるし、初めて座ったかも」

テイオーは生徒会室をあちこち物色している。

盗むべきトロフィーは決められた場所に飾られているが……『Eclipse finished, the rest nowhere.』の標語が飾られた額縁に最初に手を伸ばした。

「これでよし、と」

「タイチヨーなにしているの?」

「ちよつと今後の投資を、な」

突然、生徒会室の扉が開かれる。扉に待ち構えるのはエアグルーヴ率いる警備員の部隊だ。人間の警備員だけではない、ウマ娘の警備員も多数いる。

「犯人に告ぐ。貴様は完全に包囲されている。大人しく投降しろ」

「トレセン学園には登校しているぞ? ふふ……」

「やかましい! 予め決めていた段取りではここまでなのだから早く捕まれ!」

エアグルーヴに従って両手を上げる。トウカイテイオーが悲しそうに声をあげた。

「た、タイチヨー! 一緒に逃げようって約束したじゃん!」

「すまないテイオー……君は幸せになるんだ。彼女は人質にしていただけだ。犯人は私一人、逮捕するなら私だけを逮捕するんだ……」

「た、た……タイチヨー!」

トウカイテイオー……お前はきつとなれる。私の背中を見て戦ってきた時間は短く

とも、必ず私を越えられるはずだ。

きつと君は——素晴らしい怪盗になれる！

「……茶番は終わりか？　次は問題点の確認と対策のための会議だ。後がつかえている。早くしろ」

「あッ、ちよ、なんで縛って引つ張るのかねエアグルーヴ！　離れたまえ！」

「貴様を自由にしておくと何をしでかすかわからないからだ！」

「くっ……今回は協力していただろうが！」

警備員や生徒会所属のウマ娘たちに連行されていく姿は完全に逮捕された容疑者そのもの。この場合は現行犯逮捕か。

ひとまず計画が上手くいったことに安堵しつつ、この後の会議では警備に対する問題を挙げていくのだった。

一方そのころ、トウカイテイオーは——

「あ、タイチョーの名前聞いてなかった……ま、すぐ会えるよね！」

会議も終わった夜。ここからが本番だ。

会議では侵入しやすいルートや警備システムの穴を指摘したが本当に全部修正させたら私が侵入したり、好き勝手やりづらくなってしまう。

「当然、私のためのルートは残しているとも」

向かうは資料室。そこには過去のレース映像が豊富に保管されているため、研究にはピッタリの場所だ。

しかし映像は貴重なものも多いため、持ち出し厳禁。基本的に資料室での閲覧に限られるのだが予約制であり、思った時に見られないのが困りもの。

そこで忍び込み、夜中にレース映像を見て研究しようというわけだ。

今回の寮脱出ルートは廊下の通風口からダクトを通り、屋外へ出る。服が汚れるがそこはレースのためなら仕方ないこと。

寮から外に出たらあとは予め決めておいたルートから学園の資料室へ向かうだけだ。学校の通風口にも通れる場所はある。

ダクトから資料室へ降り立つ。

「ふ、侵入成功だ」

そうつぶやいたのがいけなかったか。視界が光で埋め尽くされる。周囲からスポットライトで照らされていた。

「そうだろうな、貴様ならそうすると思っていたよ。エスケープ。覚悟はできているだろうな」

「しまった……！」

生徒会所属のウマ娘たちが瞬く間に詰め寄り、確保されてしまう。その中には昼間の茶髪のウマ娘もいた。

「責任とつてくださいね!」

「なんの!?!」

結局、確保された私は翌日は反省文を書かされてしまうのであった……。

後日――

『やはり定期的に見回りを行うべきで、トレセン学園周囲のこのルートを……』

「なに聞いてんだ? 音楽とか聞いているトコ、見たことねえけどよ」

「これか? ……ゴシツプ、かな」

「はあ?」

今回の防犯訓練の本当の目的は――生徒会室に盗聴器を設置することだ。

こうして生徒会の重要な情報はいくらでも仕入れることができ、結果として自由に動きやすくなるというわけだ。わざわざジャージをススマミれにして反省文書いた甲斐があったというもの。

カフェテリアでのんびりコーヒを飲みつつ、値千金の情報を手に入れるシステムは便利なことこの上ない。

対面に座るウマ娘、エアシャカールにカップを小さく掲げて見せた。

「ところでエアシヤカール。先日は助かった……データ測定は今日で大丈夫かね」

「ああ、構わねえぜ。蹄鉄の重量とコーナーにおけるタイムを確認してえがオレだけだと偏りがあるからなア……」

「私にとつても君のデータに対する着目点は興味深い……」

今日も勝利を目指して、エアシヤカールと併走やレースに対する議論を行うのであった。

×××

「黒井先生……大丈夫ですかね、グレートエスケープ号は」

「時計に問題はないし、怪我や体調不良も認めない。客観的にはむしろ好調とっていいんやけど……なあ……」

グレートエスケープ担当厩務員の西京が唸りつつ、ちょうど今削蹄されているグレ坊に視線を向けた。

あの馬は調教師を長年やってきた自分にとって特別な管理馬になるだろうと信じていた。人間並みに賢いのではないかという予想があながち間違いでななさそうで、それでいて競走能力も高い、三冠だって狙える馬。

その特別なサラブレッドは黙って蹄を削られ、蹄鉄の調整に対しても大人しいどころか微動だにせず作業を受けている。

決してうるさい馬ではないが、脱走癖ともいえる逃亡根性があるあの馬にとって削蹄や装蹄の時間は脱獄しやすい時間ではある。

当たり前だが脱走は様々な理由から危険であり、一度脱走できないよう嚴重に警備したらみるみる体重が減りだしたのでリフレッシュも兼ねて放すこともしている。時々自力で逃げ出してもいるが……。

常に監視をつけているがやはりグレ坊は賢い。調教師をやってきて随分経ったが、ここまで賢い馬は初めて見た。

あくまで安全な場所にしか行かないし、知らない場所へも勝手に行かない。馬という動物の危機察知能力もあるが。

そんなグレ坊が弥生賞後、急に普段の迫力が無くなってきた。

弥生賞は余力を持って完勝、レース後のダメージも最小限で済んでいた。病気も怪我もしていない。

調教も問題なく走れてるし、馬体が成長したのもあってタイムも速くなっている。

「……馬なりに、察知しているんですかね」

「かもな。あいつ、馬主に異常に懐いてるからな……」

弥生賞から約1週間後。馬主の橘オーナーを訪ねる予定だったが、オーナーが倒れ、入院したことを教えられた。

皐月賞は入院のためレースへ来られないことを謝られ、その上でグレ坊を頼むと手紙でお願いされてしまった。

基本的に面と向かって会うようにしている橘オーナーが手紙を寄越すということは、いやでも不吉な事実を想像させた。

賢いグレ坊のことだ。それを察して落ち込んでいるのかもしれない。

「……いや。俺らがナーバスになってるから馬に伝わるとるんや。皐月賞まで悩む暇はないんや。グレ坊が勝てるように全力を尽くすまでのこと」

「そうですね。あの馬はきつと凄い馬になりますから」

装蹄されているグレートエスケープは相変わらず静かだった。馬体の成長、重賞の2連勝と風格を感じるが、やはり良かった時の雰囲気とは違和感がある。

「グレ坊……お前ほど賢くても何を思ってるかわからなくなるんやな……」

調教師である自分の無力さを覚えながらも、オーナーと馬のためにもクラシックを勝ち取らせることを改めて決意した。

皐月賞前の最終追い切りで、俺は少しイラついていた。

乗るのは当然グレートエスケープ。皐月賞大本命に上げられる馬で、ここを勝てば俺はクラシック初勝利。

現役で手に入らない騎手もいる中、23歳という若さでその称号を手に入れることに期待しないわけが無かった。

ライバルとされていたバブルガムフェローは前哨戦のスプリングSを勝利後、骨折が判明。復帰は半年後とされダービーにも間に合わない。

次いで対抗馬扱いされていたダンスインザダークも熱発で回避することが発表された。

ロイヤルタツチとイシノサンデーも強い馬だが、ラジオたんぱ、弥生賞のレースができればこちらが勝つだろう。

つまり、皐月賞は絶好のチャンスといえた。だが……

「グレ坊、なんだか走りに身が入ってないツスよ」

「そう感じるか。弥生賞の後からずっとこのまま……気持ちが切れたんやろうか」

気持ちの問題か？ 調教をちゃんとやつとらんのちやいますか？

苛立ちからその言葉を吐き出しそうになるもそれは堪えた。黒井先生だって「そこを走らせるのがジョッキーやろがい！」と怒りたくなっているかもしれないし、実際そこができないのなら一流ジョッキーとはいえない。

しかし、あれほどの馬があんな凡庸な走りをするのが許せなかった。

「タイムは文句なし、だけどなあ……」

「あいつから感じていた闘争心がないわけじゃないと思うんす。併せた馬に競りかけていくし、真面目に走っていますが」

「故障じゃない、気持ちと言うにはタイムが良すぎる……」

「俺たちの勘違いということも有り得ますけどね」

「まあな。馬だつて生き物やし、レースということはわかっていたり、わかっていなかったりするからな」

今の走りでも皐月賞で勝利は充分に狙える。だが、グレートエスケープに対する危うさを心のどこかで覚えていた。

とはいえ最終追い切りは終了しており、今からできるのは桜花賞のエアグルーヴや今回のバブルガムフェローのように熱発や怪我をさせないことだ。

今のコンディションを保つしか手がない。

(それを勝たせてこそ……一流ジョッキーつしよ)

皐月賞は俺のものだ。その先のダービー、菊花賞も掴んでみせる。

騎手になった以上は誰もが求める栄光が掴めるところに転がっているのなら、飛びついてでも手に入れる。

グレートエスケープとなら、必ず獲れると信じて、皐月賞の日を迎えるのだった。

ぼけえー……。

橘ちゃんが倒れた。彼女は今年で29歳、まだまだ若く、病気をするような歳ではないし、持病も持っていないはずだ。

きつと仕事で疲労がたまつたとか、風邪をこじらせただけのはずだ。何も問題はない……ゆつくり休めばすぐに良くなる……そう思っただけでも不安がいつも押し寄せてくる。

俺だって30歳で死んで？ 競走馬になつたのだ。人は死ぬときは死ぬ。だからこそ不安が針のようになって俺を突いてくる。

「おいグレートエスケープ。今日はテメーが1番人気だが、残念だったな。レース後にテメーが浴びるのは歓声じゃなく罵声だ！」

「応援ありがとうロイヤルタッチ」

「あ、!? 馬鹿にしてんのか!？」

「やめなよロイヤルタッチくん。彼のような美しくない馬がGI、それも皐月賞で1番人気なんだ。浮かれるのも仕方ないよ……」

「ああ、そうだな……」

「ふん。どうやら僕すらも舐め切ってるようだね……」

パドックを回りながらとりあえず返事をする。

現在の俺の単勝オッズは1・8倍、2番人氣がロイヤルタッチで6・7倍、3番人氣は重賞2連勝中のサクラスピードオー、4番人氣に前走の若葉Sでロイヤルタッチを破ったミナモトマリノス。次いで5番人氣はイシノサンデーとなっている。

競馬新聞によると、そもそも今年のクラシック前評判はバブルガムフェローと俺、グレートエスケープが東西における本命対抗とされていた。そこにダンスインザダークが追従し、イシノサンデーとロイヤルタッチが三つ目のグループとして扱われている。

しかし今回の皐月賞ではバブルガムフェローは骨折でダービーも絶望的。ダンスインザダークは熱発により回避ということで俺に人氣が集中する形となった。

そのためトライアルで敗戦したロイヤルタッチ、イシノサンデーは俺より格が落ちるとされ、未対戦のミナモトマリノスとサクラスピードオーが相手とされていた。

『では皐月賞のパドックを見てみましょう。前評判では東西2歳王者バブルガムフェローとグレートエスケープの一騎打ちと見られていましたがバブルガムフェローは残念ながら骨折となつてしまいました』

『残念ですね。それにダンスインザダークも出走を回避、こうなるとグレートエスケープが頭一つ抜けています』

『ちようどパドックでは1枠1番、グレートエスケープが映っています。どうですかこれ』

『良い仕上がりですね。陣営もトラブルなく来れたと言っています。今や外国産種牡馬全盛ですからね、グレートエスケープに期待しているお客さんも多いんじゃないですか。それがオッズに出ていると思います』

『ここまで5戦4勝、前走の弥生賞は余裕をもつて先行策からの勝利でした。現在単勝オッズは1・8倍の1番人気です。続いては1枠2番の——』

テレビカメラが俺から別の馬へ向く。

皐月賞で1番人気になったというのに、緊張がまるでない。むしろ、どこか現実感がなくて、夢でも見ているかのようだ。

調教師と騎手が出てくる方向へ目を向けても、関係者の橘ちゃんはいない。

いないと寂しいが、駄々をこねる子供じゃないのだからレースは走る。むしろ、ないからこそ勝利して元気になってもらわないと困る。

——悲しいが、所詮俺は馬だ。

どんなに頑張っても、入院している橘ちゃんに差し入れを持っていくことはできない。
い。

俺ができるのは、走ることだけ。絶対に勝たなくちゃいけないんだ。

「とまーれえー」

係員の声があると俺を引く厩務員の西京さんが歩みを止める。

黒井先生とケンちゃんが出てくるが、そこに橘ちゃんはいない。弥生賞の時は平気だったのに。せめてなんで入院したのかどうかだけでも、知りたい。

だが俺にそれを求める術はない。ケンちゃんが俺に跨り、黒井先生は「自由に乗つてくれ」と指示を出す。

黒井先生も油断はしていないが力関係では俺が上位だと考えているようだ。

「貴方がグレートエスケープさんですか！」

近くにいた馬から声をかけられる。15番のゼツケンと名前を見れば今日の3番人氣、サクラスピードオーという馬だった。

「今日は貴方と逃げの戦いになるでしょう。ならば、当然スピードが速い方が勝ちます！そして勝つのは私、サクラスピードオー！なぜならスピードの王ですから！」

こちらに向かつて啖呵を切ってくるスピードオー。

臯月賞と同じ中山芝2000mが舞台の重賞、京成杯を勝利し、その勢いで共同通信杯も制覇したこのレース注目の馬だ。

戦法は逃げ、黒井先生もこいつと潰し合いになるのを警戒して逃げの指示は出さなかつた。

「……おや？ 私の素晴らしいスピードに声も出ませんか。私が速すぎて反応が追いついていませんね！ 最も速い馬が勝つ皐月賞、やはりスピードの化身たる私のモノですね！」

高笑いをしながらパドックから本馬場へ歩いていくサクラスピードオー。

ライバルたちは多い。ロイヤルタッチやイシノサンデーも人気こそ落としているが実力まで落ちたわけではない。それどころか逆転を期して仕上げてきてすらいる。

弱気になりそうな心に活を入れる。

大丈夫だ、自分を信じる——ここまで5戦4勝、誰よりも優れた結果を残してきたのだから。絶対に大丈夫……俺は自分に念じながら、返し馬に臨んだ。

馬場では大歓声が俺に浴びせられた。これがGIか——しかし心は驚くほどに風いでいた。

口々に「サンデーに負けるな！」「日本の底力を見せてくれ！」「今月の給料全部賭けてるからなあ！」と応援が聞こえてくる。

これだけの人が俺が勝つことを期待していると思うと、不思議な気分だ。スタッフや先生のためだけじゃない、ファンのためにも勝たなければ。

係員の誘導に従い、1番ゲートへ入る。

1 枠1番はロスなく先行できる絶好の枠だ。サクラスピードオーの出方を見て決められる。逆にスタートに遅ければ後方へ包まれてしまう。スタートだけは完璧に決めなければ……! !

大外枠の18番がゲートに入り、歓声上がる。皐月賞が、今始まる!

『第56回皐月賞、大外の18番オンワードアトウが収まって体勢完了。スタートしました!』

ゲートが開くと同時に脚へ全力でパワーをまわす。芝よ抉れるとばかりに力を込めて踏み出し——ガクン、と力が抜けた。

『ああつと1枠1番グレートエスケープ躓いた! 12万の大歓声が悲鳴へ変わったアーツ!』

体勢を立て直したときには、既に第1コーナーで好位置をとるべく他の馬たちが殺到していた。とてもじゃないが逃げどころか先行することすらできない。

「まずい、まずいまずいまずい、まずい!!」

どうする? このままインコースを通って直線まで行くか? 無理だ。インを突いて前が開くわけがない。それに東京ならともかく、中山の短い直線で直線一気で勝てるような切れ味を俺は持っていない。

だから先行しようとしてきたんだ。

外を回して捲る？ 余計なスタミナを消費してなお勝てるか？

どちらも無謀だ。そもそも俺が勝つための前提がスタートを五分以上で決めて前につけることだ。それが崩れた時点で勝率があくんと下がる。

だったら——前につけて勝ちを狙うしかない！

『1番グレートエスケープは最後方を追走、向こう正面に入ります。先頭を逃げるのはやはりサクラスピードオー、快調に飛ばしています。2番手に2馬身、3馬身差をつけていきます。それを追うのが3番ダンディコマンド。そこから大きく7馬身ほど開いています！』

だがいきなりは行かない。今はサクラスピードオーが単騎の逃げへ持ち込むべくペースを上げている段階だ。脚を使わず追走に専念する。

「これはきついっしょ……直線で前が空くの祈るしかねえっしょ」

ケンちゃんの諦めたような声。

何言つてやがる！

俺はハミを噛んで頭を振った。橘ちゃんのためにも勝たなくちゃいけないのに、そんな消極的になつても意味がない。

第一、今回の皐月賞は混戦状態だ。本命候補3頭のうち2頭が出走回避、そして本命となった俺が出遅れて周りの馬たちは俄然やる気を出して勝利を狙うようになって

いる。

その状態で俺がロスなく走った内を易々と開けるわけがない。

やっぱり捲るしかない。俺はハロン棒とペースを確認しながら仕掛けるタイミングを待った。

『逃げた2頭を見る集団の先頭は9番インターアーチ、14番のトピカルコレクター、13番のキャツシユラボーラが続いています。16番ミナモトマリノス、さらに5番のイシノサンデー！ 17番のタヤスタピンチは後ろにつけてさらに4番ナムライナズマ。さらにここにいました6番のロイヤルタッチ！ 後ろから12番のチアズサイレンスも上がってこういう構え』

残り1000m、集団もある程度固まり、一瞬の落ち着きを見せた。

逃げ馬がいるせいでペースは緩まないが、今ならいける。むしろ、チャンスはここしかない。

「行くぞケンちゃん！」

外を突いて上がるうとしたがしかし、手綱をがっしりと握られているせいでスピードが出ない。

何を考えているんだ、本当に内から行くつもりか？

前が開かずに馬群に沈んで終わってしまう。行くって言ったら行くんだよ！

『最後方の1番グレートエスケープが上がっていく、ちょっと掛かり気味か!』

今から行けば間に合うはず。だがケンちゃんの手綱を引っ張って行かせてくれない。何度か引つかかるころには第3コーナーへかかってしまっている。

「ケンちゃん! 頼むよ! これじゃ負けちゃうだろ!」

俺の悲鳴にも似た叫びが通じたのだろうか、それともケンちゃんも折れたのか。

ようやくハミが緩んだ。

コーナーから外を回って先団を目指して上がっていく。息も脚もまだ持っている。少しでもいいポジションで中山の直線を迎えたい。

『第3コーナーから第4コーナーにかけて最後尾につけていた1番グレートエスケープが動き出したぞ! 先頭は依然サクラスピードオー、しかし外からきたきた、サンデー旋風! イシノサンデー、ロイヤルタッチも来ている!』

直線に入っても俺は中団のままだった。

仕掛けるのが遅くなったのがモロに響いている。しかしまだなんとかなる。差し切るのとは不可能な距離ではない。

比較的速いペースで進んだ以上、前は潰れるはず。

俺はもう一度足を踏み出した。

だが、思いとは裏腹にいくら足を動かしても前との差は縮まらなかった。

それどころか前の方にいるイシノサンデー、ロイヤルタッチが俺を突き放して坂を登っていく。

「ちくしょう……!!」

『グレートエスケープは中団でもがいている！ グレートエスケープは厳しい！ 先頭はサクラスピードオーだがサンデーが来た！ イシノサンデーだ！ ロイヤルタッチも来ているがイシノサンデー！』

「ちつ……くしょおおお!!」

——叫んでも、レースには勝てない。だが気づいたら叫びが俺の喉から引きずり出されていく。

紛れもない、敗北を滲ませた叫びは、前を走る2頭には届かない。

叶うなら時よ止まってくれ、時よ巻き戻ってくれ。

けれど、そんなことは誰もが考える奇跡で、そんな奇跡はあつてはいけない。

敗者がいるということは、勝者がいるということ。そんな栄光を奪うことなど許されることではないが、それでも願わずにいられたかった。

『イシノサンデーだ！ 2着はロイヤルタッチ、イシノサンデー！ サンデーだ！ サンデーだ！ やっぱりサンデーサイレンス！ バブルガムフェロー、ダンスインザダークが消えてもやっぱりサンデーサイレンス！ またしてもサンデーサイレンスの産駒

がワンツーフィニッシュを決めました！ サンデーの時代到来です！』

テレビには大歓声を浴びながらウイニングランを行うイシノサンデーとその騎手が映っている。

あのキザつたらしいあいつがゴール後、声を上げて喜んでいたのが意外なほどで、それだけ皐月賞、GIレースの重みを感じた。

レースが確定し、確認すると俺は10着だった。

初めてのGIレースは惨敗だ。今回は躓いて、出遅れて負けた。それだけレベルが高いレースでミスをしたんだ、仕方の無いことだ。仕方が……ない……。

(なんでこんなに泣きそうになるんだ……)

しばらくして、ケンちゃんと黒井先生がやってきた。レース内容について話し始める。

怒られるだろうか、いや怒られるに決まっている。

少しゲンナリとすると、頭を撫でられた。撫でていたのは、黒井先生とケンちゃん、2人だった。

「ゲートで躓いたのは不運やったな。その後はどうや？」

「やっぱり賢いやつツスよ。内から行くこうと思ったんですけど、前に行きたがったツス

ね。引つかかって第3コーナーでは前に行かせたらするする行ったので……やっぱり前につけた方が力を発揮するツスね。今回は俺の騎乗ミスです」

「いや、怪我させたり無茶もさせなかつたからそれでええわ。俺も調教の段階から違和感を覚えていたのに解決できなかつたし、お互い様や」

黒井先生とケンちゃん俺は俺に対して何も言わなかつた。

ケンちゃんからしたら勝てる作戦を考えていたのに、馬に逆のことをされて、怒りたくもなるだろうに。

予想とは真逆に、間違えましたと黒井先生にあつかからかんに語っている。

「グレートエスケープはよく頑張つとつたわ。後ろからは初めてやしな、そういう競馬は教えてきておらんし、冷静さを欠いたな。でも安心したわ、こいつにも馬らしいところがあるやないか」

馬らしい、か。

違う。俺は元は人間で、きちんと考えた上でレースにだって挑めたはずだ。それでも、勝手に焦って、自滅して……惨敗した。

「こいつはレースのことよくわかつてます。賢すぎたのが敗因かもしれませんね」
違うんだ……そんなことはない。

負けたのは全部俺が勝手に行動したせいだ。騎手がいないとダメということをお

かっておきながら、騎手のことを信じずに一人で、一頭で走っていた。できることなら叫びたかった。

「俺のせいで負けたんだ……！」

喉から吐き出される声は、嘶きにしかならなかった。目頭が熱くなつて、涙がポロポロと零れる。

「……ん？ おお、グレ坊泣いとるやないか」

「本当ツスね。目にゴミとか入っちゃったんですかね……？」

「すぐに洗ってやるからな、待ってろよ」

黒井先生、ケンちゃん、西京さんが俺に気がついて構ってくる。

きつと俺の涙はみんなに届かないかもしれない。

それでも溢れる涙を止められず、伝わらなくてももひたすら、「ごめん……ごめん……！」と謝り続けていた。

一週間も経つと、スポーツ新聞はサンデーサイレンス時代到来と書き立てていた。2年連続で皐月賞のワンツーを達成し、ダービーではダンスインザダークも加わることからサンデーサイレンスの種牡馬価値はさらに上がったと褒めたたえている。

転じて、俺に対しては不運な敗北という面が強調されていた。つまりきさえなければ、の声が多くあるが俺はそうは思わなかった。

「新聞記者の言うことだしな」

会ったこともない中であれこれ書いてるんだから、そんな意見にもなる。

中には「やはり大物というには物足りない」という意見もあるが、皐月賞であんなレーズをすればそんな意見にもなるだろう。

甘んじて受け入れるしかない。

黒井先生は皐月賞が終わるまで少しの間は休養し、またダービーへ向けて調教していくつもりらしい。

なので今日の俺はオフ。西京さんに身を任せて体を綺麗にしてもらったり、蹄の調整をしてもらったりする。

「オーナー、大丈夫ですか？ 調子が悪ければ……」「あー平気平気。マジ卍で元気なんです、大丈夫ですよ！ ベリグって感じです。それにグレつちから元気貰いたいし、というか元気も分けてあげちゃえ的な？ ダービーも控えてるのに無理言っでごメンチ」「……何かあれば言っってくださいね？」

この声は……橘ちゃんだ。

体調が良くなったんだ。皐月賞は入院していたらしいが、もう退院出来たなんてなんだかんだ問題なかったんだ。

俺は馬房から顔を出し、橘ちゃんの元気な姿を待ち望んで——酸素ボンベを引きなが

ら歩く彼女の姿を見て、声を失った。

日本ダービーまで、残り1ヶ月の日のことだった。

第9話 ダービーへようこそ

馬房に訪れた橘ちゃんの姿を見て、俺は逃げ出したい気持ちすら沸き起こった。

若く、美しく、それでいてオシヤレで可愛らしい彼女はキャリーバッグのように酸素ボンベを引いている。そこから伸びるチューブは鼻先にかかるように繋がっていた。馬の聴覚が、シユーと酸素を吐き出す音を聞き取っている。

グレッチと同じだね、と笑っていた長い黒髪は短く切られ、隠すように麦わら帽子に収まり、俺からはよく見えない。

そしてなにより、元々華奢だった手足は病的に細くなり、今にも枯れてしまいそうな花を連想させた。

「グレッチ、久しぶり」

彼女の声はとても小さかった。他の馬たちを驚かせないようにするための気遣いと思うには、あまりに小さくて、次いで聞こえてくる息遣いが息切れのようにも聞こえた。

「橘オーナー、あの……」

「ああ、大丈夫よ。ウチとグレッチの仲だし、カンケー梨の果汁100%ってカンジ！

……少しだけ、一人にしてもらってもいいですか」

「……しかし」

素人を、管理する馬たちの傍に置くのは厩舎関係者として難しいお願いだ。俺はよくても、他の馬にとっては異物であるわけで、俺以外にもレースを控えている馬たちがいる。

下手なことがあつてはタダじゃ済まない。プロならば許しはしないことだろう。

俺はそつと馬房の鍵を外した。

「……ん!? 今どうやって外した!? というかダメ! 脱走ダメ! なんで鍵外せたんだこいつ!」

スタッフが慌てて駆け寄ってくるが、どうしても二人きりになりたかった。

俺は尻尾で繰り返しスタッフの顔を叩いた。怪我しないように、軽く。

「わぶつ、ちよ、グレ坊、お前、うわつぷ」

当たり前だがそれだけでスタッフがはいどうぞと出してやるわけがない。流石に本気で追い払おうとしていないのもあり、また馬房に戻されそうなとき、黒井先生がやってきた。

「出してやり。グレ坊は今更どうこう暴れる馬じゃないやろ。責任は俺が持つから……」

「先生……いや、でも」

「……いいから。わかったら一人きり……いや。二人きりにしてやるんや」

「先生、ありがとうございます……!」

「橘オーナー。なにかあつたら呼んでください。あと、ここに座つててや。しんどいやろ、立ち続けるのも」

「すみません、わがまま言つて」

「わがまま言つてもええやろ……橘オーナー」

黒井先生はパイプ椅子を馬房の傍に置くと、スタツフを連れて事務所の方へ戻つていった。ありがたい、ありがたいが……その対応があまりにも優しすぎて、脚が震えた。

馬第一に考える黒井先生が馬主の無茶なワガママに簡単に応えるわけがない。美人だからなんてくだらない理由も有り得ないことは、これまでの生活で理解していた。

だからこそ——橘ちゃんの病状が、想像を上回つて良くないのではないかと怖くなつた。

橘ちゃんはゆっくりと椅子に座ると、「ふう……」と長く息を吐いた。

「頑張つて元気なフリをしてみたけど、難しいよね」

俺が近寄ると、いつもと変わらない手つきで俺の額を撫でてくれた。

「グレつちつてば梶田ジョッキーの言うこと聞かなかつたんだって? こいつめ、ワガママ發揮しちやつたかあ? うりうりー」

わしやわしやと撫でてくる手つきには迷いがなくて、そこには築き上げてきた信頼が生まれていた。けれど、撫でる手は幾分か細くなつてしまつてゐる。

ハツキリ言つて、病的な痩せ方だ。人間だつたところに、老衰で死ぬ直前のおじいちゃんを思い出す痩せ方と考へてしまつた自分を蹴り飛ばした。

「グレつちは賢い馬だよ。本当、出会つた時からずつと。特に私といるときは優しいみたいだし」

俺は黙つて撫でられるがままでいた。

彼女にとつては独白ともいえるのだろう。誰にも言えない言葉がたくさんあるのだろう。

馬であるならば、馬であるからこそ、話を聴き続けた。

「……実は、黒井先生にも伝えてたんだけど。グレつちには言いたくなかつたんだけど、なんだかグレつちは察しちやいそうだから。言うね」

撫でる手が止まつた。

「——末期癌だつてさ、私。どこからかはわからないけど、色んなところに転移してて、肺まで癌でやられてるんだ。今年の2月に体調が悪くて病院に行つたら見つかつて、もう手遅れだつてさ。余命は半年持てば良い方つて言われちゃつた」

2月といえば、俺が弥生賞に向けて走つてゐるころ。橘ちゃんは病魔と向き合つてい

たのだ。そして、橘ちゃんは今年の秋を迎えることは、ない。

俺は天へ叫びたかった。

こんな残酷なことがあるか！ まだ30歳にもなっていない子が、自分の会社を経営し、必死に生きている彼女が、何故死ななくてはいけないんだ！

人であれば周囲のものを殴り飛ばしていただろう。あるいは、言葉を失いながらもひたすら慰めようとしていただろう。

でも今の俺は馬で、彼女には何もしてあげられない。

「あーあ、本当。なんでこうなるかなーって。グレっちが三冠獲る姿を見るつもりでいたんだよ？ まあ、皐月賞は負けちゃったけどさ……」

俺は、恐らく30歳で死んだ。死因はわからないが、わからないなりに死んで、馬になつた。畜生道に落ちたともいえるかもしれないが、今の俺は正直、幸せだ。

生産牧場である懇備式牧場のみんな、競走馬としての学校でもあつた育成牧場のみんな、そして俺のために夜中だろうと働いている黒井厩舎のみんなと、黒井先生。そして、俺を勝たせるために必死にやってくれているケンちゃん。

馬に対するものだけれど、多くの人たちが俺に愛情を注いでくれている。

ハッキリ言つて、ズルいことだと思う。

死んだはずなのにこうやって二度目の生を手に入れて、幸福に生きてることなん

て、有り得ないことなのだから。

一度きりだから誰しも一生懸命で、一度きりだから前を向いてそれでも生きていくのに。

「でも黒井先生言ってたよ。俺に初めてダービーを獲らせてくれるのはあの馬だって。賢いだけじゃなくて脚や心肺機能も期待できるって。皐月賞さえ獲れば絶対三冠獲れたってさつきも悔しがってた。テレビでも三冠の話が出てたからね……それだけで私、ハナが高いよ」

もしも神がいるなら、俺は跪いても懇願するつもりだ。

俺の恵まれた馬生を今すぐに捨ててもいいから——橘ちゃんに全て渡してくれ、と。

馬として生きられるのは長くても20年から30年。その分だけでもいいから、彼女に上げてくれ。

願いが叶うなら、俺は今それを願うだろう。

だが、現実は奇妙でいて、残酷だ。

「今ね、グレっちって人気がすごいんだよ！ 雑誌やニュースで紹介されてさ、頭が良くて人懐っこいイケメンホースだって！ これ、去年のパドックの写真が雑誌に載ってたんだけど……美人馬主とイケメンホースって。美人なんて照れちゃうなあ……」

決してそれは叶わない。

医学が発展した現代においても、不可能な段階に彼女は立っている。

もしもどうか奇跡を、と願ったとしたら——全身に癌が転移していても、こうして彼女が歩いて、残りの時間を自分のために使える事実こそが、奇跡なのだ、理解させられる。

これ以上は、ない。

「やつぱりグレつちつてイケメンだよ。黒鹿毛で、体も大きいし。きつと、グレつちが種牡馬入りしたらいっぱいイケメンで、強い馬を出せると思うんだよね！ そしたら私は、またその子供の馬主になって、グレつちに負けないくらいの馬になってもらうんだ。父馬のアイネスフウジンと合わせて親子三代ダービー制覇だよ！ その馬主になれたらすつごい幸運なことじゃない？ ……初めて持った馬が重賞勝てる時点ですごいことなんだけどね」

橘ちゃんの声が震えている。今にも泣き出しそうな声に俺はどうすればわからず、ただじつとしていた。

叶うならば、彼女の涙を拭きたい。けれど、仮に人間だったとしても、俺には何もできないだろう。

「……まだ、グレつちの現役生活も、子供たちも見たいのに。会社だって、まだまだ大きくなっていけるのに。まだまだ友達と遊んだりしたかったのに……なんで、だろう……」

なんで……!」

俺はそつと彼女の傍に寄り添った。

自分の無力さが嫌になる。どうしたら彼女の涙を止められるだろうか、どうしたら彼女は幸せを享受できるのだろうか。

考えても、考えても、俺には思いつかない。

「グレッチ……嫌だよ……私……死にたくないよお……!」

ぼろぼろと涙をこぼす橘ちゃん。

当たり前だ……30歳にもならず死ぬ。人間としてそれはあまりにも短すぎる人生だ。

それでも彼女は誰にも打ち明けず、ずつと抱え込んで、自分の人生と向き合っていた。俺は、彼女のが好きだが——同じくらい、尊敬した。

自分が30歳で死ぬ直前に同じように振る舞えただろうか。彼女の強さと気高さが俺には眩しくて。その輝きが失われるのは、残酷なことこの上ない。

「ううっ……ぐずっ……ああっ……ひっく……!」

そんな中でも、橘ちゃんは他の馬を驚かせないように声を押し殺そうと必死に堪えている。

言つてあげたい。泣くときくらい、大声でいいんだと。周りの馬たちは気にしていな

いからと、教えてあげたい。

俺は身体を押し付けてあげた。

「泣いていいんだよ。……泣かないと、どうにもならない時もあるんだ」

そう言ったつもりが、通じたのかはわからないが。橘ちゃんは俺の体に顔を押し付けて泣き続けた。

幸い、黒井先生やスタッフのみんなは外で待つてくれている。今は泣いていても、誰も聞いたりはしないさ。

——しばらくして、橘ちゃんは照れたように笑っていた。

「……グレっち、ごめんね。大事な時期なのに……なんだか泣いてもいいって言われてるような気がして、我慢できなかつたよ。グレっちくらい賢いなら、本当にそう言つても驚かないな……」

泣くだけ泣いて、ひとまずは気が晴れたのだろう。ずっと溜まっていたものを人間に吐き出せないなら、馬の俺に吐き出してよかつた。ずつと溜まっていたものを人間に吐き出せないなら、馬の俺に吐き出してよかつた。

「ねえ、グレっち。私、貴方を選んでよかつた。2年くらいだったけど、貴方と会うのは楽しかつたし、レースで走つてくれているときはいつもワクワクさせてくれた。だから——ありがとう」

……ぶるり、と体が震えた。その直後に今度は大粒の涙が俺の瞳から溢れ出す。

皐月賞で負けた悔しさに、もう泣かないと決めていたのに、1ヶ月も経たないうちにまた泣き出している。

しようもない泣き虫野郎だ、俺は。

「……グレっち、なんで泣くの？ ふふふっ」

橘ちゃんが俺の涙を拭う。彼女から見たら俺の涙は滑稽かもしれない、それでも泣かずにはいられなかった。

「……橘オーナー。そろそろ」

黒井先生が馬房に戻ってきた。なんで橘ちゃんが泣いてる時は黙って見守ってたのに俺の時は気にしないんだ、恥ずかしいだろ。

「先生……ごめんなさい、長い時間」

「ええんや。たくさんお話はできましたかね」

「うん……たくさん。先生、グレっちのこと、よろしくお願い致します」
橘ちゃんは座ったまま頭を下げた。

深々とした礼に、彼女の俺に対する色んな思いやりが詰まっていた。

「グレ坊。お前、ダービーではあんな走りするんじゃないで。ダービーを勝った馬の関係者は、競馬が続く限りずっと名前が残る。お前の名前も。だから……お前がみんなの思いを背負って走るんや。馬主、調教師、厩務員、生産者、ジョッキ……名前に乗ら

なくても、関わったお前がダービーを勝ったことを一生の自慢にできるんや。それだけ、ダービーを勝つことは重い」

俺を撫でながら、黒井先生が諭す。

噛み締めるように、言い聞かせるように。

俺へのエールであると同時に、橘ちゃんに対するエールでもあるのだろう。

「……人も馬も、死ぬ時は死ぬ。俺が管理している馬が、現役中に死んでしまったこともある。名前を聞いても普通のファンじゃ思い出さないうような馬やけどな……けどな、誰かに覚えていられる限り、本当に死にはしないと俺は思うんや。誰にも思い出されなくなつた時、人も馬も、本当に死ぬ」

そこには同意する。もちろん、死んだら本人にとつてはそこまでけど……他人の中で生き続けるというのは、そういうことなんじゃないかと思う。

黒井先生は言葉を続けた。

「グレートエスケープ。日本ダービーを勝て。そうすれば、誰もが記憶し続ける馬になり、その関係者の名前を、どこまでも連れていってくれる」

そうだ——その通りだ。

俺はこれまでずっと、誰かの願いを背負ってきた。

でもそれは、期待に応えるとか、そういう思いばかりで、深いところまで理解しきれ

てはいなかった。

俺と関わる人々にも人生がある。生きるために働いてるのかもしれないし、馬が好きだから働いているのかもしれない。

それでもみんなはダービーという頂点を巡る戦いを目指して、日々馬のことを見続けている。

そんな人たちの、人生の大半をかけたものが俺の背中に乗っていたんだ。

「俺……日本ダービーを、勝ちます」

言葉が通じるか否かは関係ない。

この場にいる橘ちゃんと黒井先生に向かってはつきりと宣言する。例え脚が折れようと、絶対に勝ってみせる。

だから——見ててくれよ。俺が勝つところを。

「ええ面構えになった。前よりもな……」

「グレっち。頑張つてね……応援してるから」

二人には通じたのだろうか。はつきりと返事を貰うことが出来た。

——次の日本ダービー。俺は絶対に勝ってみせる。

日本ダービーまで、あと僅か。

×××

皐月賞の直前、グレートエスケープの選手控え室を訪れた。

ノックしても返事はない。入るぞ、と声をかけてから扉を開けると鏡に向かってグレートエスケープは立っていた。

「大丈夫……私は強い……私は強い……必ず勝てる……」

繰り返し呟く彼女は俺が部屋に入ってきたことに気がついていない。

彼女の名前を呼ぶとびくり、と肩を跳ねさせた。

「なんだ、相棒か。集中していたから気づかなかったよ」

そうやって語るグレートエスケープにいつものような覇気がなかった。自信がないのだろうか、彼女が弱気になるのは珍しい。

体調でも悪いのか？

「……どうだろうな。脚は問題ない。ただ、気分が悪い。観客の大歓声を聞くと脚が震えるのは何故だろうな……勝利を目指しているのに、関係ないことのはずなのに」

思い詰めたように語るグレートエスケープ。

今回はクラシック第一弾、皐月賞。GIレースの中でも一度しか挑めない、三冠とい

う頂に登るための最初の門だ。

緊張してるんじゃないか。

「緊張……か。そうだな、そうなのかもしれない。相棒、私は元より気が強い方ではなかった……この振る舞いも、本当の弱い自分を隠すためのものだ」

普段は堂々としていながらも気負いすぎない雰囲気、様々なウマ娘が憧れている。

クールに走って、文句無しに勝利を収めるそんな姿に。

だが、それだけ緊張し、怖いということは――

――それだけ、三冠の夢に本気で挑んでるからだ。

グレートエスケープは目を見開いた。そして、少しだけ笑った。

「ああ、そうだな。本気の夢だからこそ、叶わないことに恐怖するものだな。……相棒。

私は勝利だけを目指す。今日のレースも、そうやって勝ってくるから……!」

力の籠った目で宣言したグレートエスケープ。彼女の勝利に対する執念が、皐月賞に

届くよう、俺は祈った。

レース後、地下バ道に戻ってきたグレートエスケープは俺を見るなり、悔しそうに顔を歪ませた。

皐月賞で惜しくも最も速いウマ娘という称号を手に入れることはできなかった。彼

女にかけるべき言葉は――

――ダービーでリベンジしかないな。

「つ……ああ、ああ！ 今回負けたことは変わらないが……いつまでも横たわってはいられない。勝てなきゃ意味がない、だが負けたことにいつまでも拘っては居られない……！」

グレートエスケープは自らを鼓舞するように頬をペシペシと叩いた。彼女は頭がよく、強いウマ娘だ。

今日のような敗北も飲み込んで、次に活かせるはず。

ライブを終えて、レース場を後にした。

学園に戻ってからは、彼女のダービーまでのスケジュールと今後のトレーニングメニューを考案していた。

体調の管理とレベルアップの両方を図らなくてはいけないが、グレートエスケープはダービーでの勝利を本気で目指している。

彼女のトレーナーとして、その両方を叶えて、ダービーに送り出すことが仕事だと思った。

今後のメニューを考えていたら、すっかり日が暮れて真っ暗になってしまっていた。

トレセン学園に人気はなく、自分の足音がよく響いた。

足音に混じって、誰かの声が聞こえる。

(これは……泣き声?)

恐らくウマ娘が泣いているのだろう。心配になって声のする方へ走っていったのは、グレートエスケープだった。

「ぐす……ひぐ……んっ……うう……!」

トレセン学園の名物でもある切り株に腰掛けて、涙を拭い続けている。

「くそお……ちくしょう……!」

その姿を見て、ダービーまでのスケジュールとトレーニングメニューを考えるのが仕事、と考えていた自分を怒りたくなった。

グレートエスケープは、皐月賞に敗北した悔しさで泣いている。

あんなに負けず嫌いで勝利に拘る彼女が、敗北を受け入れて次へ備えると考えるのはいくらなんでも彼女の強さだと決めつけた結果が、悔しさを吐き出せず、こうして独りで泣いている姿だ。

勝手にそれが彼女の強さだと決めつけた結果が、悔しさを吐き出せず、こうして独りで泣いている姿だ。

それを共有し、支えるのがトレーナーの仕事のはずなのに。

グレートエスケープ!

「……あ、相棒……!」

グレートエスケープは駆け寄るこちらに気がつくど慌てて顔を拭いた。そしていつもの凛々しい姿に戻ろうとして、上手くできないでいる。

「すまない……相棒……」

いつもとは違うしおらしい口調。

強くて美しいウマ娘ではなく、歳相応の振る舞いに思わず足が止まった。

「勝つことがすべてだと言っておきながら、この体たらく……おかしいよな。惨めだよな……私は、所詮強く見せようとすることでしか自分を保てないウマ娘なんだ」

その独白は、ずっと抱えてきたものが滲み出てきたかのような、重く、絡みつくような代物だった。

「私に才能なんてものはない……あのように振る舞うのは、強さを見せつけないと不安だからだ。スティックと言われるほどトレーニングを積むのは、自信がないから……でも、こうして本物の舞台へ上がると思い知らされる。自分はなんでもない凡才のウマ娘なのだと……」

そう言うてから、グレートエスケープは再度謝罪言葉を口にした。

「すまないトレーナー。君がスカウトしたウマ娘は才能溢れるウマ娘ではなく、虚栄心で固めたハリボテのウマ娘だ……」

彼女はずっと劣等感を抱えながらウマ娘としてトレーニングを積んできていた。だ

からこそ、強くなろうと必死に足掻き、最強と呼ばれる相手にも臆することなく立ち向かっていった。

俺には彼女が身の程知らずのウマ娘とは思えないし、ハリボテのウマ娘だとは思わ
ない。

そんなウマ娘が、勝つために辛いトレーニングを積むことはできない。

彼女は、勝利に執念を燃やす本物のウマ娘だ。

グレートエスケープに尋ねる。

——グレートエスケープは、勝ちたくないのか？

「勝ちたいに決まっている！」

間髪入れずに答えが返ってきた。

何故かを尋ねると、彼女は血を吐くように叫んだ。

「やるからには一番を目指す……そうでなくては意味が無いからだ。勝ちたいと願ってしまったから……才能が及ばないからと諦められるほど、達観していられなかったからだ！」

「でも……でも！ 届かなかった！ 相棒には感謝している。相棒がいなければ、きつとデビューすらもできなかつたが……それでも勝てなかつた！」

「私は……私は……見えもしない頂点を目指す愚か者なのか……！」

彼女の叫びを聞いて、安心した。

グレートエスケープの闘争心は決して損なわれていない。今は少しだけ迷ってしまっているだけで——それを支えるのが、トレーナーの仕事なのだ。

君は頂点を獲るウマ娘だと信じている。

「……だが、私は勝てなかった」

三冠は叶わなかったからと、最強になる道を諦めるのか？

「それは……」

グレートエスケープは、諦められないだろ？

「……そうだ。諦められないから、こうやって苦しんでいる……だが……勝つことが何より楽しいことも、知っている」

切り株に腰掛けていたグレートエスケープは立ち上がった。目元を拭って見せた表情は決意に濡れていた。

「相棒。すまなかった……私は、まだまだ走ってみせる。ただ1着を目指して、走り続ける」

もしかしたら、グレートエスケープは想像しているよりずっと弱くて、夢いウマ娘なのかかもしれない。

それでも、彼女が見せる気高い執念こそが、何物にも代え難い強さなのだと思う。

「また……こうして迷ってしまいかもしれない。弱音を吐くかもしれない。そのときは……こうして、元気づけてくれないか？」

黒い髪を弄りながら呟くグレートエスケープ。月明かりに照らされる彼女の頬は、少しだけ赤くなっているように見えた。

——もちろん。二人でダービーに挑もう。

日本ダービーまで、あと僅か。

第10話 winning the soul

誰もが焦がれて止まない夢がある。

足掻いても、藻掻いても、届かない願ひがある。

ある者は言った。

「ダービー馬のオーナーになることは一国の宰相になるより難しい」

ある騎手は言った。

「ダービーを勝てれば、やめてもいい」

ルールによつて出走できない馬の騎手は言った。

「枠順は大外でいい。ほかの馬の邪魔は一切しないし、賞金も要らない。この馬の能力を確かめるだけでいい」

またある騎手は言った。

「ダービーを勝ちたい、なんて言葉は軽々しく口にできない。それくらい重いレース」

ダービーを勝った馬は、ただ一言、『ダービー馬』とだけ呼ばれるようになる。

その後どんな大きなレースを勝とうと、その称号が塗り変わることはなく、その馬をいつまでも輝かせる二つ名となる。

誰もが焦がれるから、燦然と眩いのか。

眩い至高の座にあるからこそ、誰もが焦がれるのか。

その答えを出せるのはただ一頭——ダービーを勝った馬と、そこに関わる人々だけなのかもしれない。

灼熱のダービーへ、ようこそ。

〇〇〇

真夜中、誰かが厩舎へ来る音で目が覚めた。

寝起き特有の不快な気分はなく、それでいてよく寝つけたという爽快感だけがある。

馬房を開けたのは厩務員の西京さんだった。

入ってくるなり、俺の体を隅々までチエツクしていく。毎日細かく見てくれていたけど、今日はいつもの以上に目を光らせているように見えた。

全身くまなく見てから、西京さんは一言、

「行くぞ」

とだけ。

彼に引かれると黒井先生がいた。先生も、俺を見るなりあちこちチエツクする。

「状態は良さそうやな」

「はい」

「なら行くで」

言葉少なに馬運車へ向かう。

夜中故の言葉少なさというには、黒井先生と西京さんから感じる雰囲気は気合が入っている。

俺は馬運車に乗ると、大人しく繋がれた。そんな俺を見て、黒井先生は緊張の面持ちを崩して、笑った。

「グレ坊はなんだかんだ、レース前に悪さをしないやつやったな。悪いことをしているときとダメなとき、わかってやってるやろ」

そりゃあそうだ。

みんなが普段やってきている世話を見たら、とてもじゃないがふざけて怪我をしてレースに出られませんでした……なんて真似はできない。

ましてや、明日には最高峰の舞台へ向かうのだから。

馬運車の扉が閉まる。

走り出すと同時に、俺はレースのイメージトレーニングに励んだ。

『本日はダービーデー。東京競馬場には本当に多くのお客さんが集まっています。現時点で18万人を超えたそうです』

『いやあ流石にこの日は違いますね……私もダービーの解説と言うだけで襟を直してしまいますよ』

『今の会話の中だけで4回直しましたからね。既にボルテージは最高潮、レースが始まればどうなってしまうのか、怖いくらいです。ここでパドックを見てみましょう』

パドックを歩く俺にカメラが向く。一瞥するがすぐに視線を元に戻した。

そういえば、東京競馬場は初めて走る場所だ。

世界最大級の競馬場だけあって、中山競馬場や阪神競馬場より大きいような気がした。

きつと、建物そのものの大きさ以上に、積み上げられてきた歴史が重くのしかかっているからこそその場所なのかもしれない。

何度も突っかかってきたサンデーサイレンス四天王マイナスも、静かにパドックを歩いている。

顔つきが普段以上に鬼気迫るもので、近づいたら噛みちぎるといわんばかりだ。

無論、それは俺も同じ。

『5枠9番、グレートエスケープ。現在単勝オッズは8.7倍、4番人気です』

『踏み込みも強く、落ち着いてますね。前走はスタートで不運がありましたから、スタートを上手く決めれば充分実力を発揮できますよ』

『こうして見るとダンスインザダーク、ロイヤルタツチ、そして皐月賞馬のイシノサンデーとサンデーサイレンス産駒が上位人気を占めていますね』

『ダンスインザダークは熱発で皐月賞を回避こそしましたが、前走プリンシパルスを快勝。陣営も万全の状態とのことですし、期待できますね。やはりサンデーサイレンスは去年に続いて強いという流れが来ていますね』

係員の掛け声で周回を止める。

そして騎手と調教師、オーナーがそれぞれの馬へ向かって歩き出した。

「グレっち」

橘ちゃんは、車椅子で来ていた。押しているのはよく似た女性で、姉妹なのだろうか。

車椅子でもスーツでビシッと決めている。

ダービーオーナーに相応しい格好だ。

「グレっち……おいで？」

車椅子に乗った彼女にそつと頭を押し付けた。

俺を撫でながら、橘ちゃんは言う。

「……無事に帰ってきてね」

俺は頭を離すと宣言した。

「ウイニングランをするから、帰りは遅くなるよ」

橘ちゃんは微笑んでいた。

黒井先生がケンちゃんと俺に話をする。

「細かいことは言わん。一番強いレースをしてこい」

無茶なことを、とは誰も思わなかった。ここまで来て、他の誰かが強いかどうかなんてビビってちゃ話にならない。

「一番は俺だ！ 勝つのは俺だ！」

そんなふうは無謀だろうと、虚勢だろうと、それを言い張れない奴は勝てない。

厩務員の肩を借りてケンちゃんが上に乗ると、肌がぴりぴりと焼け付くような感覚を覚えた。

本馬場へ入場するために地下馬道を抜けると、大歓声が俺を出迎える。

皐月賞のときより明らかに大きく、でかく、熱気が渦巻いている。

(これが——日本ダービー……)

体をぶるりと震わす。今ちようど、俺の名前をアナウンサーが読み上げたのだろうか。歓声がさらにワツと上がった。

『5枠9番、グレートエスケープ。父にアイネスフウジン、母父にシンボリドルフとこ

の府中2400mでは負けられない！ 馬体重は512kgでマイナス5kg、皐月賞のリベンジを狙います。サンデーサイレンス旋風に立ち向かう日本代表です』

「グレートエスケープ頼むぞー！」

「かつこいいい〜！」

「サンデーに、御三家に負けるな！」

「今月も給料全部賭けてんだ、今度こそ負けるんじゃないぞー！」

観客たちの歓声で心臓が脈打ち、全身が燃えるように熱い。

まだ6月になったばかりで夏には程遠いはずの日なのに、じりじりと肌が焼けついている。

きつと、橘ちゃんも馬主席から見ているはずだ。

俺は見せつけるように立ち上がった。

「おいこら馬鹿！」

ケンちゃんが慌ててしがみつくが、この程度で落ちるような騎手じゃないことはわかっている。

立ち上がった俺に対してどよめきが上がったのを確認してから、駆け出した。

「このおバカ馬！ なにやってるんだ！ 俺危うく落ちるところだったっしょ！」

悪い悪い。

俺は気にせず返し馬で待機所まで駆けていく。

ケンちゃんも怒ったような声を出してから、大声で笑った。

「本当にお前は最高な馬だよ！　ったく……勝つぞ、このレース」

当たり前だと叫ぶように俺は嘶いた。

事情を知らない観客には、俺が滅茶苦茶かかっているように見えただろう。

だがこのレースに出るどの馬よりも、強いのは俺たちだ。

日本中のホースマンが思い知るまで、ほんの少し。

ゲートに収まると同時に、歓声は静まり返るところかますます激しくなった。

ここから待ったナシの一本勝負。泣こうが喚こうが、生きようが死のうが関係ない世代最強を決める戦いが始まる。

大外枠の馬が収まれば、落ち着く間もなく係員の掛け声が響き渡った。

観客たちにも欲望と夢を託した馬がいるだろう。

ホースマンすべてに思いの丈があるだろう。

数多の大舞台を制覇してもなお届かない最高峰のレースを狙う天才ジョッキーがいる。

乾坤一擲に賭ける若武者ジョッキーがいる。

勢いのまま押し切るべく波に乗るジョッキーがいる。

悲願を携えたベテランジョッキーがいる。

どんな生い立ちがあつたか、どんな夢があつたか俺にはわからないが——ここにいる全ての馬と、騎手と、厩舎、生産牧場、育成牧場のスタッフが願うものは『勝利』だけ。たつた二文字の言葉を目指して、渴きと飢えすら覚えた精鋭たちが挑む。

それでも俺は言い切つてみせる。

「勝つのは……俺だ!」

『すべてのホースマンが、ファンが、思いを託すは生涯一度の夢舞台! 栄光は彼方2400m! 第63回、東京優駿——日本ダービー、今スタートが切られました!』

「なっ!?!」

「ばかな!」

「うそお!?!」

「驚愕……!」

俺以外の馬のほとんどが驚く。

自分でも驚くくらい、完璧なスタートを切る事ができた。

鞍上のケンちゃんは手綱をかなり長く持ち、ハミも緩ませっぱなし。ゴー!のサインに俺は4本の脚を全力で回転させた。

——今回のレース展開で一番気をつけるべき相手とは？

皐月賞覇者のイシノサンデー？

逆襲を狙うロイヤルタッチ？

満を持してやってきたダンスインザダーク？

関西の秘密兵器ことフサイチコンコルド？

全頭違う。

一番警戒すべきなのは、俺と同じ逃げ馬のサクラスピードオーだ。

こいつと先行争いをやりあってハイペースになって前の馬は総崩れとなるのが一番怖い。

その次にまずいのが、お互いに控えてスローペースになった場合。よいいドンの競馬をすれば先程あげた末脚自慢の差し馬たちとの瞬発力勝負となってしまう。そうなれば奴らに分がある。

ある程度後ろを離れた状態かつスローペースならば理想的だが、俺はなんだかんだほかの馬たちに標的にされている。

曲がりなりに皐月賞大本命に据えられていた馬だ。油断は誘えない。

その上で黒井先生とケンちゃんは作戦を立てた。作戦のためにも必須なのがまず、第一コーナーでインコースかつ先頭をとること。

サクラスピードオーを抑え込むには、これしかない。

内側の埒へ向かって切り込んでいく。内側に後ろから来る馬はほとんどいない。すんなりインコースをとると、第1コーナーを曲がっていく。

『ハナを切ったのはグレートエスケープ！ このまま逃げ切るつもりか！ サクラスピードオーは控えました2番手です！』

後ろから競りかけてくる馬はいない。コーナーでスピードも出しづらいのもあり、鞍上からのサインに合わせて俺はペースを落とした。

やや縦長の展開になり、レースは向正面へ差し掛かる。

第2段階、開始だ。

このままだったら先頭を走っていても末脚自慢たちは捲ってくるだろう。直線の長い東京で脚を残した状態の後続馬に取り付かれたら勝ち目はグッと薄くなる。

鞍上のサインが変わる。緩んだハミに合わせて、少しずつペースを上げていく。

一気にはいかない。じわり、じわりと。

——グレ坊の持ち味はスタミナと勝負根性や。こいつの賢さも武器やが、ガリ勉にホームランは打てん。こいつには確かに走る能力があるんや！

黒井先生の言葉を思い出す。

レース前の作戦会議を、わざわざ俺の馬房の前でやるのは何故だとケンちゃんと言っ

た。

先生は『こいつも仲間だからや』と答えてくれた。

正直、俺が愚痴つてる時に反応してくるし、この先生なら俺の言葉を理解していても不思議じゃないけど……仲間と答えてくれたのが嬉しかった。

仲間のために走る——かつこいいじゃあないか。

美人な馬主、信頼してくれる仲間、そして今も戦う戦友。

彼らのために走ることが、気持ちよかった。

「……ペース、速くないか？」

「じゃあグレートエスケープくんを逃がすのか？ あのまま逃がしたらそのまま勝たれちまうよ」

後続の馬たちが呟く。その通り、ペースは少しずつ速くなっている。

しかしそれは破滅的というには遅く、マイペースというには速い、絶妙なライン。逃げ馬の俺にとってほんの少し速いくらいだ、今こうして追走する後続の馬たちにとっても速く感じるだろう。23歳の若手だというのに冷静で、冷徹なまでのペース判断。流石ケンちゃんだ。

このため、後ろの馬は選択を強いられている。俺を逃がせば、サクラスピードオーが競りかけなかった時点で悠々とセーフティリードをとられることになる。後続は俺を

追わざるを得ない。

いい流れだ。

このままいけば、後続は脚を溜められず、俺は自分のペースで走りきることができる。

目標は最初の1000mを60秒を僅かに切るペース。

そこに収められたら……！

「上等だ、元からマトモに挑んで勝てるほど甘かねえよ！ 勝負だグレートエスケープ

さんよオ！」

「我が闇の眼が捉えし逃亡者……否、闇から逃れし光などない！」

「スピードで負けるなんて有り得ません！ サクラスピードオー、ハナとダービーを取

りに行きます！」

が、作戦は良くない方向へ転がる。

俺のペースについても、俺を無視するでもない。

後続の馬たちが開き直り、俺からハナを奪おうと襲いかかってきやがった——！

このままあっさりハナを譲ってしまえば、確実にレースは落ち着く。そうなれば、ほぼ同じ位置にいるであろうダンスインザダークの末脚とマトモに戦うことになる。

それでは勝ち目はゼロだ。

「く、そ……！ 気づきやがったか……！ バカっぽいくせに！」

「告げたはずだ。覇を競う相手は我と。この十闇に舞い踊る閃光⁺そして、輝きに相応しい天稟のある同胞に敵うものは存在しない」

前にいるほかの馬だけであれば譲っても良かった。

まともにもやりあっても心配のない力関係の相手が、俺より消耗するぶん問題ない。

だがダンスインザダークがここまで前に来るのが邪魔だった。

この位置にいられたら、俺は前に行かない限り勝ち目がない。ケンちゃんもそれを理解しているのか、歯噛みしていた。

「さすが天才ジョツキー、カナタさんだ……嫌なことをきつちりしてくるつすねえー」

滝カナタ……若くして数多のG Iを勝利した天才ジョツキー。今や常にリーディングを獲得しているジョツキー、いや競馬界のスーパースターだ。

その名は伊達ではなかった。

「ちくしょう……ちくしょう……！」

鞍上がハミを緩め、俺は脚に力を込めた。奇しくも、鞍上と言葉が被ったような気がした。

「なんて——言うと思ったか？」

さらにペースを上げる。

後ろの馬たちも俺を捕まえようとスピードを上げ始めた。

「まだ上がるのか……くそっ！」

「無理だこれは！　だが……後続に飲まれたら結局勝てん！」

「行くしかねえ……」

「上等だア！」

「……それでこそ、我が好敵手！」

ここからは作戦なんて微塵も存在しない、地獄へ至る暴走レースの始まりだ。

俺のあげたペースに全頭がついてくる。

日本ダービーはここから過酷なサバイバルレースと化すだろう。

だが、それこそが俺の最終手段にして作戦だ。

「大人しくしてくれりゃこんな博打せずに……済んだのによー」

元々理想通りに行くと思うほど樂觀的に見ちやいなかった。

後ろがペースを落とさないなど、もしもどうにもならないときに使うと決めていた作戦。それはスタミナと根性を盾に、全頭ハイペースのレースに引きずり込むというものだ。

当然俺の消耗も激しく、ゴールまで足が持つか保証はない。

だが、ここから勝つには全頭を俺の土俵に引きずり込むしかないのだ。そもそも100%勝てるレースなんて存在しない。だったら、勝ち目が高い選択をするだけのこと。

『グレートエスケープが今1000m地点を通過し59秒で通過！ 59秒台前半ですこれは速い！ グレートエスケープ鞍上梶田健二、このペースはどうなのか！ 速すぎやしないのか!?!』

遠く離れたスタンドからどよめきが再度上がる。

後続は俺から離れることもなくびつたりと着いてきていた。

第3コーナーへ差し掛かり、坂を登っていく。

この坂もきついが直線にはさらに上り坂が控えている。

段々脚と息が苦しくなってきた。

少しずつスタンドから聞こえる声が大きくなってきている。

第4コーナーを回ればすぐ目の前には壁のようすとすら錯覚するほどの坂が、ダービー馬を目指す馬たちを弾き落とすかのようにそびえ立っている。

「グレートエスケープくんは体力がないはず……ここで捕まえて、ぼくの2冠を！」

「あの野郎を抑えてダービー馬になるのはこのロイヤルタッチ様だ、邪魔すんじゃねえッ！」

「スピードだけは負けられないのですッ！ ゴールにたどり着くスピードだけは！」

「光の速さで駆け抜け、我が名を知らしめるためにッ……！」

後ろの馬が迫ってくる。俺の体力はもう切れて直線で沈むと思つてのスパートだろ

う。

確かに俺の体力はもうほとんど残っていない。あれだけのハイペースで飛ばし続けたんだ。

だが……

「それについてきたお前たちにも、その脚はあるのかな？」

「……！ しまった、ダメだ、力が入らない……！」

「わ、畏にかかってしまったのか……この僕が!？」

「チツ、あの野郎も限界のはず……！ だつつうのに……クソがッ！」

全頭スピードが落ちているならば、リードしている俺に分がある。

事実、後続の馬たちはバラけて追い抜きにかかれていない。

バチン、と鞭が俺のトモを叩いた。

「ゴーサインだ。ここまで来たら足がブツ壊れようと関係ない。全力でスパートをかけて着をとるだけ。」

ここまでのエスコートは梶田健二という若く才能あふれるジョッキーのおかげ。

ここからのスパートは……グレートエスケープという最も強い競走馬の仕事だ！

『グレートエスケープが先頭！ グレートエスケープが先頭！ グレートエスケープが先頭！ グレートエスケープが先頭！』
粘っている！ サクラスピードオーは落ちていく、外の方からダンスインザダークが

やってきた!』

何頭か、辛うじて体力が残った馬たちが追ってきている。

ちくしょう、まだ粘るか!

「至高の座を巡る争い……死闘……だが勝者として舞い踊るのは、我が血に巡る煌めきである!」

「ダンスインザダーク……!」

ダンスインザダークがすぐ後ろまで迫っている。かなり前で俺を追っていたはずなのに、まだ脚を残しているとは。恐らく、こいつが最大のライバルなのだろう。

それでも脚を止める訳にはいかない。

息を吐きながらも、血液に酸素を取り入れるべく必死に息を吸いながら脚をまわす。

坂を登る途中で、段々と視界が白くなっていく。

酸素が足りない。

脚が前に出ない。

音が消えていく。

ゴール板はまだか、今のハロン棒は残り幾つを示していた?

俺が走っているのは平地か? 坂道か?

ただ一頭で走り続けているのは何故だ。

何故俺はこんなに苦しんでいる。

どうして苦しいことをしている。

誰かの馬蹄の音がした。迫られているのか？ 負けるのか？ ……日本ダービーで

2着になったら、それは栄光の証じゃないのか？

『グレッチ』

橘ちゃん……俺は。俺は……貴方が選ぶに相応しい馬だったか？

でも誇れるかどうかは……勝たなきゃわからないよな……。

——バチン！

電流が走ったみたいに視界が広がる。そうだ、俺はまだダービーを走っている。

自分が鞭を打たれたことに、遅まきながら気がついた。

残り何mかもわからないが、俺は思い切り叫ぶ。自分を奮い立たせるためだけに。

実際には走っている最中にただ息継ぎをしていただけかもしれないが、それでも俺は

魂から咆哮を上げていた。

「橘ちゃああああー……んツ!! アンタの選んだ馬は……最強の馬だああああーツ

!!」

『残り200を切りました！ グレートエスケープ先頭、グレートエスケープ先頭！

外からダンス、外からダンスインザダーク！ ダンスインザダークが迫っている、さら

に外からフサイチ、フサイチコンコルドと内の方からメイショウジュエニエ！ しかしグレートエスケープだ、グレートエスケープだ！ ダンスインザダークは届かない！ サンデー旋風切り裂いて！ 海外血統の檻から大脱出したのは、グレートエスケープだアアアアッ！』

ゴールがどこかもわからないはずだったのに。

ゴール板を駆け抜けた瞬間に、全身を爽やかな風が包み込んだ。

誰よりも速く駆け抜けられたと感じられる、身体が浮き上がり、どこまでも行けてしまいそうな、一際違う感覚。

苦しみでいっぱいだったはずの俺の心が蘇っていく。

『ダービーを制したのはグレートエスケープ！ これが日本血統の底力！ 偉大なる逃走者グレートエスケープです！ 勝ち時計はなんと、なんと！ 2分25秒0でレコード決着！ レコードで駆け抜けましたグレートエスケープ！ 父アイネスフウジンが記録したレコードを0.3秒更新しました！』

ゴール板を駆け抜けても脚を緩めろというサインが出ていることにしばらく気が付かなかった。

今、一瞬意識が飛んでいたかもしれない。

ゆつくりと速度を緩めていくと、白くなっていた風景が少しずつ元の色彩を取り戻し

ていった。

「ダービー……勝てたんだよな……」

確かに一番最初に駆け抜けていたはず。

俺はターフビジョンを確認した。

そこには確かに、1着に俺の馬番である『9』が刻まれていた。

クビ差で優勝——紛れもなく勝利したことを、ダービーを見るすべての人間へ知らせていた。

「やった……やったぞ……俺は……」

『ワアアアアアアアアアアッ!!』

うおっ!? びっくりした! 急に叫んで何事だよ!

観客の声に思わず振り向いた途端、全身に鳥肌が立った。馬が鳥肌になるのかは知らないが、間違いなく全身が震えるような感覚があった。

18万人以上の観客が俺と、鞍上のケンちゃんに祝福の歓声を上げていた。

地鳴りのように轟き渡る歓声に胸が熱くなる。

(なんだ……これ……すげえ全身が熱い。脚が震える……!)

ケンちゃんはいつまでもコースを歩かせるばかりで、検量室に戻ろうとはしなかった。

いいのか？　こんなところにいて……と思ったが、G I レースを勝てばウイニングラ
ンがあることを思い出した。

（俺……そういえばG I 勝つの初めてだった）

望んでも勝てないレースが最高峰のグレードであるG I レースだ。それを勝利する
どころか、一生に一度しか走れないダービーを制することができた。

その重みは、この大歓声は何より示しているように感じた。

ケンちゃんが観客に向けてガッツポーズを向ける。

その姿にますます歓声が大きくなった。

繰り返し俺を撫でながら「ありがとう、ありがとう」と口にする彼を見て、俺は嬉し
くなった。

こちらこそ、ありがとう。ケンちゃんがいなければ、ここまできつと来られなかった。

スタンド前を通り過ぎて少しすれば、口取り式が始まる。競走馬、騎手、調教師、厩
務員、生産者、そして馬主が表彰されることになる。

「グレ坊。ようやった。お前はいい馬や……」

黒井先生がこれまでにないくらい俺を撫でる。

厩務員の西京さんは黙って俺を撫でているが、少し微笑んでいた。

「グレっち……おめでどう」

車椅子で押されながら涙ぐんだ橘ちゃんがやってくる。ターフの上だからガタガタして大変そうだ。それでもこの口取り式だけは是非とも出て欲しい。

勝った俺が誰の馬なのか、みんなに披露するために。

「よ、よ……よ……」

橘ちゃんは車椅子からゆっくりと立ち上がった。

恐らく癌によって筋力は落ち、骨にまで転移しているのかもしれない。

歩き方はおぼつかないものの、恐る恐るといったふうに、ふらふらとターフを歩いている。

俺は顔を押し付けると、橘ちゃんは二本足で立ったまま、俺を抱きしめた。

「ありがとう……貴方のオーナーになれて、本当に幸せだったよ……ありがとう……」
……彼女はずからず、二度と会えなくなってしまうだろう。

けど、彼女の命の輝きは決して損なわれることはない。

こんな素敵な人なんだもの。

多くの人が別れを悲しみ、いつまでも思い出してくれる人がきつといる。

その輝きに、彩りを添えられるよう、ダービーオーナーの称号を彼女に渡せてよかった。

俺はその喜びを噛みしめるように、橘ちゃんといつまでも、いつまでも抱き合っ

た。

……馬だからこつちは抱きしめられないんだつた。

——日本ダービーの死闘から1ヶ月。

俺は生まれ故郷の墾備式牧場に放牧に出されていた。陣営が気にしたのは日本ダービーをレコードタイムで駆け抜けたことによる反動だ。

骨折などの怪我がないことがわかると、秋まで休養することがすぐに決まった。

黒井先生が言うにはダービーを勝つたことで凱旋門賞に出走するプランもあった。うだが、流石に疲労が抜けきらないということで見送つた。

もつと余裕で勝てればよかつたんだけど、強い奴ばかりダービーに出ていたから、そう簡単にはいかなかつた。

「お、クロスケはなんだか嬉しそうだな」

牧場スタツフが俺の馬房を開けた。

当然だ。今日は大切なお客さんがやってくる日だ。

それを待ち望んで日々牧場でばかばか歩き回っていたのだから。

早く来てほしいがために、トラブルを起こさないよう脱走を我慢していたんだぞ。

俺は馬房から出されると放牧地へ放たれた。

ココ最近のはんびりダラダラと過ごし、食っては寝て食っては寝てを繰り返している。

レース後数日は飯が喉を通らないこともあったが、しばらくすれば疲労が抜けて食事でも摂れるようになっていた。青草がウマアイ。

「今日の見学の依頼は一件だけだから楽だよ。最近すごかったもんなあ」
スタツフのあんちゃんが愚痴を吐く。

確かに、放牧されてから俺を見に来る観光客がとて多くいた。観光牧場でもないのに、連日大人数で観光客が押し寄せてくる。

それもそのはず、ダービーを勝ってから俺の人気は爆発的に上昇した。

雑誌や新聞で闘病中のオーナーとの絆や外国産種牡馬に立ち向かうヒーロー、イケメンホース、皐月賞で敗北し涙を流す写真などが報道され、人気沸騰。

それ以来、この牧場に見学に来る人々もとても多くなり、連日観光客のカメラに向けてポーズをとるなどサービスしていた。

幸いなことにストレスにならず、むしろいい息抜きになっていた。

だが今日は、VIPが来るので観光客の受け入れは休止。

ファンになってくれるのは本当にありがたいことだけれど、今回ばかりは流石に邪魔される訳にはいかない。

噂をすれば、3年前に聞いた車のエンジン音が耳に届いた。

「来たみたいだな。今開けてやるから……」

橘ちゃんが来た！

俺はいてもたってもいられなくなり、奥義・大脱走日本ダービー拳にて入口の鍵を粉砕する。

「ああ、もう、うん、お前めちやくちやすぎて驚かねえよ……」

安心してくれ。これは橘ちゃんに会う時のみ発動する鍵破壊拳だ。一子相伝の技なのでほかの馬に広まることはあるまい……。

俺はあんちゃんを置いて車の方へ駆け出した。

事務所のそばに着くと、丁度橘ちゃんが降りていたところだった。杖こそ突いてこそいるものの、自分の足で歩いている。

酸素ボンベも装着していない。

遅れてやってきたあんちゃんが挨拶をした。

「橘オーナー、お久しぶりです。お体の具合は……」

「最近は調子いいんです。それに、大切な愛馬に会うのに車椅子になんて乗ってられな
いっしょー！」

いえーい、とテンション高めの振る舞いを見せる橘ちゃん。

以前よりは体調は良好らしい。

仕事も今はやめて、ゆつくりと一日を過ごさせているようだった。

「でも本当におけまる？ ウチみたいな素人がダービー馬の背中に乗りたい……つてノリでお願いしちゃったけど……」

「いいんですよ。むしろクロスケ……グレートエスケープが聞いてからずっと橘オーナーのことを待つてゐるみたいですし。すごい馬ですよ、本当に」

「ウチを元気づけてくれたダービー馬だもの、当ゼンの利休！」

今日は橘ちゃんの乗馬体験の日だ。

祝勝会の際にケンちゃんと橘ちゃんが話したときにグレートエスケープに乗ってみたい、と橘ちゃんが呟いた。ダービーを勝ったことで有頂天の生産牧場の天長牧場長が「せっかくだしいいよー」とOKを出す。

黒井先生も「ちゃんと休めるなら」と後押しした結果、橘ちゃん乗馬体験プロジェクトが始まった。

ネットクは橘ちゃんの体調だけだったが、治療のおかげで酸素ボンベを一時的に外すらしいは可能になった。もちろん、体力を考えたらゆつくり歩く程度だが。

レース用の鞍ではなく、乗馬用の鞍がとりつけられる。少し重たいが、橘ちゃんも今は痩せているぶん、騎手が乗るのと余り変わらないくらいの重さだ。

「じゃあ、お願いします」

あんちゃんが俺を引いて、ゆつたりと歩き出す。

本来こんな事はないのだが、色んな人たちの厚意や願いがあつてこそそのもの。もちろんこの話を聞いてから牧場スタッフが難渋することもあつたが、それを知った俺は懇願代わりに脱走を我慢をすることによつて願いを受け取ってくれたらしい。

ゆつたりと揺れる度に橘ちゃんは「わ……」「あつ」「きや」と声を上げていた。声が可愛くて困らせたくなるが彼女は闘病中の身。むしろ揺らさないように気をつけて歩いた。

「グレートエスケープの上から見ると、すごく高いですね」

「こいつは馬格がいいですからね。秋に、そして古馬になつてもまだスケールアップすると思います」

「そつかあ……秋……菊花賞かな。それとも、いつか有馬記念とか勝ってくれるかな。うーん……見たいなあ」

静かに乗馬時間は過ぎ去つていく。放牧地を一周するだけの乗馬だったが、この時間が永遠になればいいのにと願うほど濃密な時間だった。

……もうちよつと、一緒にいたい。

俺はあんちゃんの周りをゆつくりと回つた。

俺を引いている縄をぐるぐるつとあんちゃんに巻き付けると縄を噛みきった。

「え？ なにしてんのクロスケ。え？ いや、ちよ、嘘だろ？ そんなことできるの？ 馬じゃねえよそれはもう！」

悪い、あんちゃん。もう少しだけ時間をくれ。

俺はあんちゃんを縛り上げるとゆつくりと放牧地のある柵の前まで移動した。

「グレっち？」

橘ちゃんは少し不安そうにしている。大丈夫だよ、と言うと俺の上で頷いた気がした。

牧場の柵を脚でよけると簡単に開く。壊れたところを隠している、俺専用の隠し扉だ。

そこから林を抜けていくと、だだっ広い草原に出た。

「……綺麗」

もし叶うなら、橘ちゃんを背に乗せてこの平原を思い切り駆け抜けてみたかった。

彼女と過ごしていると、まだまだ一緒にいたいという思いでいっぱいになる。

後悔はないが、限らない願いが溢れて止まらないのだ。

「グレっち……。ありがとう」

俺のたてがみに顔を埋める橘ちゃん。

彼女は体を震わせ、泣いている。

誰だって死は怖いはずだ。

俺だって一度は死んだはずなのに、また死ぬと思うと怖い。

橘ちゃんは若く、やり残したこともたくさんあるはずなのに。

それでも、苦しみを彼女は受け入れようとしている。

こうして悲しみを俺に吐き出してくれている。

こんなふうに、彼女の心を慰めることができるのであれば、少しでも良かったと思えた。

「橘ちゃん……初めての馬に俺を選んで、よかったかい？」

橘ちゃんは顔を上げて、涙声混じりに言った。

「……何度も言ってるじゃん？ 最高の馬だって」

「よかった……本当に」

……ん？

「……会話通じてない？」

「本当だ。なんでだろうね……不思議と、わかる気がするんだ」

「……そっか」

「そうなんだよ」

しばらく、風に揺れる草木を見つめていた。

人の営みと喧騒からかけ離れた、隔絶された世界で二人きりになったみたいだった。

「またいつか……グレつちと一緒に走れたらいいな」

「……走れるさ。きつと」

それから俺と橘ちゃんで色んな話をした。

生まれてからのこと、調教のこと、ほかの馬のこと、競走のこと……橘ちゃんからも色んな話を聞いた。

スタツフのあんちゃんが関節を外し、縄抜けして追いかけてくるまで、ずっと、ずっと。

爽やかな風が吹き抜ける、北海道の夏のとある一日のことだった。

約一ヶ月後、橘ちゃんは永い眠りについた。

それを聞いてから俺は一日だけ、馬房の中にこもり切って、泣き続けた。

それでも、きつといつか。

一緒に走ろうという願いを胸に。俺はこれからも、競走馬として走り続けてみせる。

「ダービーだけじゃない……たくさんのGⅠを勝ってみせる。それで、橘ちゃんが誇れるような競走馬になってみせる……だから、見ていてくれ。橘ちゃん……」

北海道の空はどこまでも青く、限りなく広がっていた。

×××

苦しい。胸が痛い。頭が痛い。視界がチカチカする。まだ直線が残っているなんて
どんな悪夢だ。

ダービーを走る私に向けて、僅かに届く声がある。

応援する声だ。

負けるな、頑張れ、最強のウマ娘はお前だと。

喉が張り裂けんばかりに叫ぶ誰かが、一人ではなく、たくさん誰かがいた。

——私は才能という言葉とは程遠いウマ娘だった。

「エツちゃんおそーい！」

「ウマ娘なのに、頑張れば俺でも追いつけそうだなあ」

小学生のころは男の子にも負けそうなことすらあった。

「こら、ウマ娘だって走るのが得意な子、苦手な子がいるんです。エスケープちゃんを馬鹿にしちゃいけません！」

学校の先生が庇ってしまふほど、足が遅いウマ娘が、幼いころの私だ。

ある時、母親に言った。母はレースを走っていたウマ娘ではなかったが、パパよりも力持ちで脚がずっと速かった。

夜、何故かパパにのしかかっている姿を見たこともある。

なのに私は速く走れない。

運動会の徒競走で負けた日、私は泣きながら母に叫んだことがあった。

「なのになんでママみたいに脚が速くないの？ 私だつて速く走りたい！」

母は困ったように笑いつつも、頷いた。

「グレっちは速く走りたいん？ よっしゃ、バイブスあげて鍛えるつてその精神にキユ

ンでえす！ やる気だしたならグレっちしか勝たん」

「でも……どうやったら速く走れるようになるの？」

それから父と母はインターネットでトレニング方法や走るための技術を調べてきては、教えてくれた。最初は練習もよくわからなくて、本当に速くなれるか自信も持てなかつたからイヤになるときがあつた。

けど、両親が毎日、本気で教えてくれているのを信じて私はトレニングに励んだ。

結果——

『1着はグレートエスケープちゃん！ 見事な走りでした』

運動会の徒競走だったけど、他のウマ娘の子に勝つことができた。

一番にゴールした瞬間の歓声と、前には誰もいない景色が気持ちよくて、私はそれからもっと速くなるために鍛えるようになった。

速くなるにつれて、今度はフォームや呼吸の仕方、鍛えるべき筋肉を学ぶようになった——次第にレースを走るウマ娘育成機関の最高峰、トレセン学園を目指すようになった。

トレセン学園の試験直前に、母は言った。

「グレッチは才能がないなんていうけど、諦めずトレーニングし続けた根性が一番の才能なんだよ」

そうやって私を撫でる母の手が、大好きだった。

——そうだ。私は、走ることが好きで、それ以上に、勝つことが大好きだったんだ。

『日本ダービー最後の直線、先頭はグレートエスケープ！ グレートエスケープ！
粘っているグレートエスケープ！』

いつからか、頂点を目指すように変わっていても、根っこに眠る渴望に変わりはない。

ただ目の前のレースを勝ちたい！

日本ダービーの直線、泥がまとわりついてくるような重みを足に感じながら走り続ける。

「う、お、おとおおおッ！」

ダービーに出走できるウマ娘は毎年数多くの入学者がやってくる中で、たったの18人。

ふるい落とし続けて残った18人の誰もが勝ちたいと願っている。

たくさんライバルがいた。

どの子も私に負けなくらいスピードがあり、スタミナがあり、パワーがあり、クレバーさがあった。

それでも負けるわけにはいかない。

勝利への執念と渴望だけは、誰にも負けてはならないのだ。

「根性だけは……負けられないんだ……！」

すぐ後ろに迫ってきてても抜かせない。

体力が完全に切れていようと、私は足を前に踏み出し続けた。

そしてすべてを踏破した先に——日本ダービーの栄光が待っていた。

『今、グレートエスケープが先頭でゴールイン！ やりましたグレートエスケープ！

これがグレートエスケープの底力！ 偉大なる逃走者、グレートエスケープです！』

1着で駆け抜けて広がる視界。

これが頂点の景色——私は観客席に拳を突き上げた。

「うおおおおおッ！」

普段のキャラ作りとか、そんなものは関係ない。

ただ、心の奥底から絞り出された、勝利に対する咆哮だった。

それに合わせて、観客が大歓声で応える。

ターフを踏みしめながら、手を振り返すと観客から口々に祝福の声が上がった。

「ありがとうグレートエスケープ！」

「すげえ走りだったぞグレートエスケープ！ 今月の給料でグッズ全部買ったからな

！」

「流石グレートエスケープだ……直線の長い東京レース場で逃げ切るのは一般的に極めて困難とされている。それでも果敢にハナを切って勝ってみせた。間違いはなかった。俺たちがあの日見たのは、誰もが無謀と思う中でも最強を目指し走った、未来のダービーウマ娘だったんだ」

「どうした急に……ぐすっ」

大歓声を一身に受けながら地下バ道へ戻っていく。

通路にはトレーナーが待ち構えていた。

「いいレースだった！」

トレーナーは満面の笑みを浮かべてそういうと、親指を立ててみせた。

『いいレースは勝ったレースだけだ』

出会ったばかりの頃、彼に言ったセリフが脳裏を過ぎる。

あのときはきつと、苦虫を噛み潰したような顔で吐き捨てていただろう。

でも、今なら言える。

ずつと言いたかった、あの言葉を。

「ああ……良いレースだっただろう、相棒！」

満面の笑みを浮かべながら、私が宣言する。

だが、ここがゴールではない。ゴールは最強の座ただひとつ。

シニア級に所属する先輩たちもいれば、いずれジュニア級の後輩たちが上がってくる。

ライバルはまだ多い。

私がつどり着く頂は遥かに高く、果てしないが——今は、私の名をトウインクルシリーズを見るファンたちに宣言しよう。

これから最強へ至るウマ娘の名前は——『グレートエスケープ』だと。

「相棒。ウイニングライブも、最高のライブにしてみせるよ」

——ダービーデーの終わりを迎える夜。

ダービーで勝利した者だけが立てる、ウイニングライブのセンターの位置に、私はいた。

ギターの旋律が奏でられ、踵を鳴らしてリズムを取った。軽快にして、熱い滾りを抑えられないほど張り詰めたイントロ。

ずっと私が歌いたかった、クラシックを制覇したウマ娘だけが歌える曲。

ここまで努力を積み重ね、自らの才能をかき集めていたのは、この歌にふさわしいウマ娘になりたいがためだったのかもしれない。

（すべてのライバルたちに聞かせよう。これは……『グレートエスケープ』の始まり。そして、この胸で熱く燃える『winning the soul』を！）

——私は勝利、頂点、最強、あらゆる渴望を込めて、観客の心臓を撃ち抜くつもりで歌うのだった。

——名バ列伝『グレートエスケープ』 第一部、完——

第11話 再始動、そして停止

SSR『トレセン学園の空に』（根性）

イベント1「栄光の座へ」

トレセン学園を歩いていると、ウマ娘たちがダンスレッスンに励んでいるのを見つけた。

グレートエスケープとエアグルーヴ、サイレンススズカが3人でうまびよい伝説を踊っている。

「エスケープ、少しズレがある。テンポが遅れているぞ」

「なるほど。今のフリーズのステップはこうか？」

「うーん、もう少し歩幅は小さくていいんじゃないかしら……」

度々曲を止めては振り付けを確認している。表情は紛れもなく真剣で、観客に勝利と感謝を伝えるウイニングライブに懸ける情熱が伝わってくる。

グレートエスケープがこちらに気がついた。

「一度三人で踊って、見てもらった方がいいのではないか？ すまないが少し見てくれ」
ちように暇なものもあり、快諾した。

踊る曲はうまびよい伝説。グランドファイナーレを飾る曲として長くトレセン学園で歌われてきた、まさに伝説の曲なのだが……

うまびよい伝説ってなんか変じゃないか？

歌詞や振り付けがなんだかよくわからないノリで、少し理解が及ばない。

盛り上がる曲であることはわかるが。

私がそう言うのと三人は顔を見合わせ、グレートエスケープが鬼気迫る表情を浮かべた。

「今……何と言った？ 『うまびよい伝説』を踊る名誉を冒瀆したのか？」

グレートエスケープに問い詰められ言葉を失う。

続けざまに今度はエアグルーヴが言った。

「これは直ちに生徒会に報告しなければなるまい……そうなればトレーナーライセンスは剥奪されるどころかURRA関係施設の出入りは禁止となる……貴様だけではない。お前が指導するウマ娘も制裁の対象となる」

あまりの迫力に体の芯から震え上がった。

慌てて俺は声を上げる。

は、発言を訂正させてください！ トレーナーは担当ウマ娘を勝利させるために全力

を尽くします！

「あの……エアグルーヴ？ エスケープ？ 冗談も程々にしてあげないと……」

サイレンススズカがそう言うのと二人は態度を軟化させた。

冗談だったのだろうか。

「少しからかいすぎたかな？ 失礼した」

「ただ、うまびよい伝説はそれだけ歴史ある曲だ。それは忘れるなよ」

俺は繰り返して頷いた。

しかし、うまびよい伝説を歌えるレースは有馬記念や日本ダービーでもない特別なレースに勝利した時のみ。

踊る機会はかなり少ないのではないだろうか。

俺は三人にそれを尋ねると、グレートエスケープが答えた。

「確かに歌う機会が少ない曲だ。だが、これを歌う時は大レースを勝った時だけだ。そんなレースに勝てないことはいくらでもあるかもしれない。それでも私は負けるときのことより、勝った時のことを考えている。もしも負けたらと考えるようになることは多いが、レースで走るのは自分しかいない。ならば、自分に対して期待するべきだ。きっと、それはマイナスにはならない」

だから勝った時の準備をするんだ、と彼女はしめくくった。

エアグルーヴとサイレンススズカが頷く。

「エスケープの言う通りだ。負けた時のことを考えても仕方がない」

「確かに……勝ったときにライブができない方が大変かも」

彼女の言葉に俺は納得し、ありがとうと答えた。

ところで、うまびよい伝説の練習を見るはずだったが、誰が1着で踊る予定なんだ？

「……ここは私が踊ろう」

「待て。最終的に勝つのは私だ。練習でもそれは譲れん」

「私もそう言われたら引けないかな……」

「ならば仕方あるまい。併走して勝った者がセンターだ」

グレートエスケープの宣戦布告にエアグルーヴとサイレンススズカが乗り、グラウン

ドへ駆けていく。

俺は結局、何回もレースで勝ち負けにこだわる三人をずっと待ち続けていた……。

そのときふと閃いた！ このアイディアはメジロマックイーンとのトレーニングに

活かせるかもしれない！

イベント2「本当は怖い」

コースでダイワスカーレットとグレートエスケープが併走している。

二人ともラストスパートをかけており、コーナーでインコースを突いたダイワスカー

レットが僅かに抜け出して勝利を収めた。

「はあ、はあ……併走に付き合ってくださいって、ありがとうございます！ グレ先輩！」

「ふう……ふう……いい走りだった。今日は完敗だな、スカーレットくん」

「いえ、元々インコースを譲られた状態での走りでしたから……」

「勝ちも勝ち、負けは負けだ。実際のレースでは譲つてもないインコースをこじ開けてくる敵もいる。そのためにも外を回つても勝てるようにトレーニングしなくては、と思つたんだが、有意義なトレーニングができたよ」

「こちらこそありがとうございます！」

レースを終えると二人で意見を交換しあっている。

そんな中、ダイワスカーレットが質問した。

「あの……グレ先輩って勝ちに拘るといふか、そういう人だと思つてたんですけど……なんだか、今はそんなに気にしてないんですか？」

「む？ 勝ちにこだわらないウマ娘なんていないだろう？」

「そ、そういうことではなくて……アタシ、模擬レースや併走でも一番になれないと気が済まなくて。でもグレ先輩は冷静じゃないですか。それって目指す目標があるから、それに合わせてるんですよね……アタシにもその冷静さが大切なのかなって……」

グレートエスケープといえば、常に勝ちに拘り、1着以外は負けでしかないと言つてはばからない。

傲慢だと言ふ意見もあるが、トウインクルシリーズの本質を突いている言葉だと思ふ。

しかし彼女はこうして併走して負けてもあまり悔しそうな顔は見せていない。

「……いや。どんな併走だろうと自分が許せないくらいに、悔しいよ。叫んでも結果は覆らないから、大人しくしているだけだ。……負けたことは事実だ。それを否定しても前には進めない」

ダイワスカーレットは眉尻を下げた。

「グレ先輩は強いですね……アタシ、正直そんなふうの前を向けないかもしれないです。1番じゃなくなつたとき……想像しただけで怖いです」

彼女の言葉を聞いて、グレートエスケープはスポーツドリンクで口を潤した。

それからまた、口を開く。

「私も怖いさ。敗北にこそ糧がある、と言ふが勝つために走っているんだ。勝てなきや意味がない。だが……それでも負けることは何度もあつた」

グレートエスケープは空を見上げた。

今は青空だが、曇天の日があり、雨の日があり、雪の日もあつたはずだ。

「だからといって立ち止まっては行られない。負けるかもしれない恐怖に打ち勝つには、トレーニングを積むしかないんだ。……休憩は終わりだ」

そうしめくくると、グレートエスケープは立ち上がった。

「恐怖に打ち勝つ……グレ先輩！ もう一本お願いします！」

「ああ、いいだろう。次は私に勝たせてもらうぞ」

二人は再びコースのスタート地点へ向かうのだった。

そのときふと閃いた！ このアイディアはメジロマックイーンとのトレーニングを活かせるかもしれない！

イベント3 「勝利への希望」

トレセン学園のコースでは模擬レースが行われていた。ちょうど走り終えたところで、スペシャルウィークがコースから戻ってきた。

「ま、け、ま、し、た、あ、あ、く！」

スペシャルウィークは戻ってくるなり、泣きながらレースを見ていたグレートエスケープに報告した。

彼女の同期は粒ぞろい、スペシャルウィークも素晴らしい素質を持ったウマ娘だが今回のレースでは勝てなかったらしい。

「せっかくエツちゃんさんにアドバイスもしてもらったのに……」

すんすんと鼻を鳴らすスペシャルウィークの頭をグレートエスケープが優しく撫でる。

なんだか仲のいい先輩後輩の関係を築いているらしい。

「どれだけ努力しても負ける時はある。また勝てるように努力するしかないものだ」

「うう……でも……」

「スぺ、鼻水出てるぞ。ほら、ちーんして」

「ンフーツー！」

スペシャルウィークはグレートエスケープにティツシユで顔を覆われると思いきり鼻をかんだ。

相当悔しかったようだ。

頑張り屋なスペシャルウィークのことだ、このレースのためにトレーニングを積んでいたのだろう。頑張ったからこそ、勝ちたいもので、勝ちたいからこそ悔しいものだ。

「私……どうしたら……あんなに教えて貰ったのに。私、才能ないんですかね……」

「そうだ」

「ガーン!？」

間髪入れず言い切ったグレートエスケープ。

もう少し、こう、なんというか……手心を……。

「そう言ったらスぺ、君は諦めるのか？ ライバルたちに負けるのを受け入れるのかね」
「……私は……勝ちたいです！ 諦めたくありません！」

「ふふっ……そう言えるなら、まだ強くなれる。闘いたい、勝ちたいという執念が最も大切なのだよ」

「エツちゃんさん……」

「スぺ、君は私やスズカの真似をして逃げたり先行して走る必要はない。君には君の戦い方があるのだから」

グレートエスケープは後輩を導くように語ると、最後にこう締めくくった。

「勝つこともあれば、負けることもある。それでも、走り続けた先にある希望を求め続ければ、いつか必ず勝利へたどり着ける。才能があるかないかは、走り終えてから考えても構わんだろう」

「……わ、私、まだまだ頑張ります！ だから……エツちゃんさんも、また私に教えてく
ださい！」

「もちろんだとも。私も君から教わることはたくさんあるからね」

それからグレートエスケープとスぺシャルウィークはレースの勝ち方についてしばらく話し合っていた。

そのときふと閃いた！ このアイディアはメジロマックイーンとのトレーニングに活かせるかもしれない！

イベント「希望は危険」

廊下でグレートエスケープとナイスネイチャが会話している。ナイスネイチャはため息をついた。

「いやー、アタシも希望とか持ってた頃はありますよ？ でもねー、やっぱり希望があるからこそそれが失われた時のガツカリ感があるわけですよ」

3着でいいから、ちょうどいいところでもいいから、と常々語ることが多いナイスネイチャの言葉にグレートエスケープは少し眉尻を下げた。

勝利だけに意味があるというスタンスのグレートエスケープからしたら受け入れ難い言葉だろう。

「私は諦めない。負けることも、失敗することもあるかもしれない。だが希望を捨てることだけは絶対にしたくない。その先に待つものを掴み取る……今夜、証明してみせる」

「ほんとにやめたほうがいいと思うんだけど……」

そう言ったグレートエスケープは次の日、寮を脱走したところをたづなさんに捕縛され罰として清掃をしていた……。

そのときふと閃いた！ このアイディアはメジロマックイーンとのトレーニングに活かせるかもしれない！

イベント「実はあんまり」

廊下の曲がり角でアグネスデジタルがなにやら覗き込んでいる。声をかけるとアグネスデジタルは手をやって制止した。

「シツ……！ 邪魔しちゃいけません……！」

一緒に覗き込むと廊下の柱にもたれかかりながら、レースの教本を読むグレートエスケープが見えた。

「ああ……スタイルと顔がいい……立ち姿がサマになりしゆぎ……しゆぎ……目算でおよそ身長は170cm、スリーサイズは制服で隠れています。が中々……いやしかし測りきれません……というか脚長すぎ……」

ストーキングじゃないのか？ と聞くと

「いいえ！ エスケープ様の調査です！ もちろん常に2バ身離れているので！」

「別に構わないけどね、私は」

アグネスデジタルはそう答える。しかしその後ろには長身をゆるりと揺らし、グレートエスケープが佇んでいた。

「ひよええつ、お、おじやまままま、おじやまじよどれみ！」

「落ち着きたまえデジタルくん。私は構わないと言つたろう。何か知りたいことがあるのかな？」

「え、あ、あの、あのあのの、その、アタシとしては……お姿を拝見できるだけで嬉しくてですね」

「私の姿か？ 見ても参考になるようなところはあつたかい？」

「ええ、ええ！ ありますとも！ 普段は理的、凛々しき、クレバーな眼差しとクールな振る舞いから世間では頭脳派でレースを組み立てるウマ娘と評されていますが実際のレースでは知略を組み立てた上で最後には基礎トレや根性が大切になるとインタビューでも語っていたように実は泥臭く根性で走る逞しいウマ娘であることのギャップがなんととも——」

「——ほう」

グレートエスケープの空気が変わった。

見守るような視線はがらりと変化し、鋭い獲物を狙う肉食獣の如き眼光をアグネスデジタルに注いだ。

話の途中でそれに気づいたのかアグネスデジタルは、ピクツと肩を跳ねさせた。

「あの……なにか、粗相を……」

「いいや。ただ、君のウマ娘に対する観察眼……洞察とすら言ってもいいかもしれんな。それが素晴らしいと思ったんだ」

グレートエスケープはアグネスデジタルの肩をむんずと掴んだ。

約30cmの身長差では大人と子供くらい違うように見える。

パワーの差もあるだろう、上から押さえつけられてしまえばアグネスデジタルに逃げることは出来ない。

顔真っ赤にしてガクガク震えている。

「よいしょよ」

「え?」

小柄な彼女を、グレートエスケープは米俵をかつぎ上げるように抱き上げた。

「その観察眼で少しライバルたちの情報を聞かせてもらいたい……君を持ち帰ることにしたよ」

「え、お、おも、おもち、おもち!? おもおもおももち帰り? デジたんが? グ

レ様に? ちょ、これやば、鼻血が……お召し物が汚れてしまいまひゅ……!」

「気にする必要はない。その分、充分に話してもらえれば、な。今夜は……寝かさない

さ」

「ぶっはあ?!」

アグネスデジタルは盛大に鼻血を吹き出した。

翌日、カラカラになったアグネスデジタルが発見されたが、表情はとても幸せそうだったという……。

そのときふと閃いた！ このアイディアはメジロマックイーンとのトレーニングに活かせるかもしれない！

×××

私の名前はダンスパートナー、4歳！

去年オークスを勝った黒井厩舎の看板馬。

牝馬だけど牡馬相手に戦い、この前の宝塚記念では3着。去年のオークスから勝ちが遠ざかっているから、今年こそはと頑張っています。

頑張るといえば、この前の日本ダービーでは私の後輩と弟が出走しました。

最後は激戦の末にワンツーフィニッシュ、僅かに先に出たのは後輩のグレートエスケープくん。

いつも頑張っている上に、病気の馬主さんのために走っていたぶん、少し応援しちやった。

弟のダンスインザダークは2着。会ったことはないけど、いつか一緒に走る時はお話してみたいです。

「私も頑張らないと!」

そろそろグレートエスケープくん……エツちゃんは夏の休養を終えてまた黒井厩舎に戻ってくるはず。

先輩が言うには夏を越した3歳馬は大人っぽくなるらしい。

(大人っぽくなったエツちゃんかあ……元々大柄だったし、ますますムキムキになるのかな。なんか……すごくかっこよくなってそうで……つていやいやいや!)

何考えてるんだらう私は!

エツちゃんは後輩で、私はお姉さん。

弟分のようなものなのにこんな気持ちは……そもそも競走馬は引退しても恋は報われないとお母さんも言っていた。

でも……でも……!

「おっ、グレ坊が来たみたいやな」

先生の声に思わず顔を隠したくなった。

今の自分の顔は真っ赤になってるだろう。なんだか顔を合わせるのが恥ずかしくて、それでいてエツちゃんを見てみたいという思いがあった。

「ただいま黒井厩舎のみんなあーッ！」

エツちゃんの元気な声。

馬主の方が亡くなったと聞いて心配していたけど、声を聞く限り、今は大丈夫そうだ。でも、我慢しているんじゃないの？

私は不安になってきた。

彼は誰もが焦がれるダービーを掴み取った競走馬。そうやって自分を奮い立たせて泣きたくても泣けないのを堪えているのかもしれない。

(だったら慰めてあげなくちゃ……！)

そうして、意を決して顔を上げた私、ダンスパートナーの目の前に映ったのは——
「やあやあ苦しゅうない、皆の者。息災であつたか？ ん？ この子達？ いやあ是非厩舎に遊びに行きたいって言うから仕方なく連れてきたんだ。困つた子猫ちゃん……いやポニーちゃん？ ま、スターの風格つてやつかな……ところで私の厩舎へ案内する者が来ないがどこかね？」

——雄大な馬体をだらしのないほど大きくし、たくさんの牝馬にきやーきや言われながら馬運車から降りてくる、サングラスをかけた調子に乗りまくつた後輩の姿でした。

日本ダービー時、馬体重512kg

レース1週間後、506kg

放牧後（現在）、534kg

ばんえい馬にでもなるのかな？

私は何故か怒りでいっぱいになりました。

〇〇〇

「え、エツちゃん……なんか、この、なにこの……えと……」

「ああ、麗しき姫君よ。久しいな……私は会えなくてとても寂しかったよ……君の名前に相応しく、ダンスを共に踊りたいと願ってやまなかった……」

「あ……あ……」

「おや。顔を赤くさせて口ごもるなんて。いつものように年上として振舞おうとする姿で私の心を癒してくれていた貴方が珍しい」

「あ……あんぼんたーん!!」

「ソダシツ!」

ダンスパートナーさんの盛大なビンタを食らった。

……ビンタ？ 馬なのに？ しつぽだったかな？

せつかくかけていたサングラスが吹っ飛んでいき厩務員の西京さんの額にジャストフィット。

寡黙な男によく似合っている。

しかしダンスパートナーさんの怒りは収まらないらしく、まさしく馬が馬乗りになってマウント取って殴ってきそうな勢いでしつぽではちばち叩いてきた。

「もう！ どうしてそんなふうになっちゃったの!?! 私が好きだったエツちゃんはそんな調子に乗ったまるでダメなオトコ馬じゃなかったのに！ 調子に乗ってレースに勝てるわけないでしょ！ これからエツちゃん馬主さんもいなくて勝たないと誰も所有してくれなくなっちゃうかもしれないのに！ 頑張らないといけないのに！」

あまりの剣幕にこれには堪らず、俺は降参した。

「嘘ですつ、嘘嘘！ 冗談ですよ冗談！ ちょっとびっくりさせようとしただけですよー！」

「ほんとにい……？」

「ほ、本当です！」

「……あの女の子たちは？」

「あの子たちは馬運車で一緒になって仲良くなっただけです。ちよつと調子に乗りましたけど」

「やっぱり乗ってたんじゃない……それにそのお腹！」

「これは……黒井先生の指示です」

「先生の?」

「はい。具体的には——」

ぐい、と西京さんに引かれた。

これからシャワーだから行くぞ、と一言告げられてまた後でとダンスパートナーさんに伝える。

冗談のつもりだったが迫真の演技で調子に乗りすぎてしまった。

それとも、演技だと思っけていても本当に調子に乗ってしまふ心の隙があつたのか。

……有り得る。

牧場で過ごしていた頃の俺はスター、地元の英雄とばかりにチャホヤされていた。

観光客は俺の姿を見て写真を撮りまくるし、均整のとれた馬体に見惚れてうっとりとした。

人だけでなく、牧場にいる馬も、みんなが話しかけてくるようになった。幼駒の頃にいじめようとしてきたヤツらですら敬語でぺこぺこしてきていた。

サインも書きまくつたし、ファンサービスもすごいやってきた。

それを繰り返すウチに自然と調子に乗った振る舞いを纏うようになっていたのかもしれない。

西京さんにホースで水をかけられながらブラッシングされていく。馬運車で体を揺

らす間に汚れてしまったままだったから気持ちがいい。

……これから俺は挑む立場だが、挑まれる立場でもある。

心の隙は捨てる。見るのは勝利だけだ。

これからもみんなの期待と想いを背負って走ることは変わらない。

旅の垢と一緒に無駄なものを洗い流していくつもりでブラッシングを受けていた。

あ……そのへんすごくかゆくて気持ちいいす……。

そんなふうにな水を浴びる俺のところに、黒井先生がやってきた。

「ひと夏を越して風格が出てきたやないか。ちゃんと体重も増えてそうやし、文句なしやわ」

放牧に出された際に俺と牧場スタッフに言われたのは飼葉を沢山食べ、ということだった。

「お前の馬体はまだ成長途中や。図体の話やないで、骨格や筋肉……まだまだ強くなれる。しっかり飯を食ってでかくしたら、ここからきっちり絞っていくで」

厩務員の西京さんに言っているのだろう。

俺も何かを喋ってみたが、言葉が通じることには無かった。

橘ちゃんとの出来事が特別だったのか……俺はそのことを夢とか、錯覚とは思いたくなかった。

「まずは神戸新聞杯でひと叩きする。その次は当然菊花賞、そして今年の最終目標はジャパンカップや」

「……はい。有馬記念ではないのですか」

「そこは第二目標やな。こいつの賢さならコントロールはしやすいし、間隔を空けて闘争心なんかを損ないたくないからな。もしジャパンカップが難しければ有馬記念へ行くで」

これからのプランが決まった。

王道でいえば菊花賞から有馬記念だがジャパンカップ——世界の強豪がやってくるGIに挑むのは、少し燃える。勝ったダービーと同じ舞台だが挑む相手はまるで違う。

それでも俺はダービー馬、みんなのためにも負けられない。

そのためにはまず神戸新聞杯、そして菊花賞。

ここを勝てば文句なしに世代最強の看板を背負ってジャパンカップへ進めるだろう。

いや、進むつもりだ。

俺は——もう負けられない……！

「ばんばんばんっ」

「武者震いか？ やる気満々やな」

水気を弾き飛ばすように全身を震わせた。

まずは体を絞つてもう一度レース用の肉体に整え直す必要がある。

水浴びを終えて馬房に戻ると、ダンスパートナーさんがこちらをじつと見ていた。

「ダンスパートナーさん……？」

「あ、いや、その、変わったなあ……って」

「まだ調子に乗つてるように見えますか」

「あつ、ちがつ、違くて！ さつきは変な格好もしてたけどわからなかつたけど……すごく大人っぽくなったなあ……って」

そうだろうか。

しかし、自分に自信があるという感覚はわかる気がする。

目に見える実績がついたから、自然とそれを意識した振る舞いに変わっているような気がした。

「ダンスパートナーさん。お互い、GIを勝つために頑張りましょう」

「う……うん。頑張ろう！」

そして迎えた神戸新聞杯。

このレース、復帰戦としても、相手関係を考えても絶対に負ける訳にはいかない。

黒井先生の扱きにも耐えて馬体重は497kg、ベスト体重のように感じられた。

俺は単勝オッズ1・2倍の1番人気でレースに臨んだ。

ひしひしと伝わってくるプレッシャーは、ダービー馬に対して挑んで一矢報いてやろうという清々しいまでの敵意から来ている。

——だが、俺にはまだまだ届かない。

『1番グレートエスケープ、先行してはいますが4コーナー手前で先頭に変わります。先頭はグレートエスケープ、突き放しにかかる。後ろからはシロキタクロス、アドマイヤビゴールが伸びてくるがグレートエスケープ完璧に抜け出しました！ダービー馬の眼差しに映るは菊の花！グレートエスケープ圧勝ゴールイン！』

3番手で控えて4コーナー手前で抜け出し押し切り勝ち。

先行抜け出し、さらに余裕たっぷりの横綱相撲で復帰戦を5馬身差の勝利で飾った。

次は菊花賞だ。

黒井先生は俺をステイヤータイプと常々評価しているだけに、ここは負けられない。

菊花賞を勝てば、俺が三冠をとれなかったのは皐月賞で運が悪かったから、と周囲に思わせることが出来る。

その帰り道、黒井先生が言った。

「さて……問題は馬主やな」

え？ どういうこと？

「このままだと……菊花賞どころか競走馬登録も出来なくなる可能性があるし……困ったもんや」

……ちよつと待て!?! どういうことだ黒井先生!

俺が菊花賞どころか競走馬じゃいられないって……冗談じゃねえぞーツ!!

第12話 継承

個人馬主が亡くなった場合、そのとき所有していた馬は他の馬主に所有権を移動させなくてはいけない。

相続人が馬主資格を持っているのであればその馬主に、馬主資格を持っていなくとも条件を満たしていれば馬主資格を取得し相続することができる。

相続人が馬主になれない者の場合は相続馬限定馬主となり、所有馬が競走馬登録を抹消するまでその資格は有効となるが新規の競走馬登録はできない。

「じゃあ問題ないよね」

ダンスパートナーさんに尋ねられたことを答えると、そんな言葉が返ってきた。

確かにどこに問題があるかわからない、引き継ぎさえすれば問題は無いのだから。

「そのはずなんですけどね……ただ、人間の怖いところというか。これには欲望が絡みついてくるんですよ」

「どういふこと？」

「レースの賞金は大半が馬主のものになる。つまり俺はぎっくりいうとカネになるんです」

「カネ……エツちゃんはカネに？ んん？」

ああ、そつか通じないのか。

あんまりにも人間っぽい振る舞いばかりしていたから逆にびっくりした。そういえば馬だったな……。

「俺がレースで勝てばダンスパートナーさんが人參沢山貰えると思います。嬉しいですか」

「嬉しい……」

「色んな人が人參を欲しがったらどうしますか？ 分けるのは無しですよ」

「え、ええ……つと、独り占めは悪いから、譲るかな……？」

「みんながダンスパートナーさんみたいに優しければ良いですけどね。みんな人參を欲しがるから喧嘩になりますよね」

「……つまりエツちゃんを巡ってみんなが人參欲しさに喧嘩してるんだ」

「そうです。多分ですけど……人參が欲しくて喧嘩してます」

「そんな喧嘩するまで人參好きだったんだ……なのに厩務員さんや先生は人參を……私に……」

ダンスパートナーさんがしんみりと感動してるので講義はここまで。

つまりどうなっているかというと――

「俺がかっこよくて、強くて、人気者なのがいけないんだ……」

「まさか誰もグレートエスケープを欲しがらんとは思わなかったわ」

嘘だろ!？」

黒井先生の眩きに俺は目眩すら覚えた。

仮にも日本ダービーを勝った上に、競馬関係だけでなくテレビや雑誌でも人気になりつつあるスターホースだというのに。

一緒に並ぶ厩務員の西京さんが頷いた。

近くで作業をしていた厩舎スタッフのあんちゃんが驚く。

「なんでですか。ダービー馬ですよ? 誰でも欲しいに決まっています」

「橘オーナーは個人馬主、それも元の事業は父親から引き継いだとはいえ10年足らずで事業を拡大し、成長させた人や。つまり競馬関係者ではなく、言ってしまうとファンが高じて馬主になったといえる」

「……? それがなんで相続に?」

「牧場関係者なんかだったら相続なんていくらでもするやろうが、橘オーナーの周りにいる人達が競馬のこと興味なかったらどうや」

「あつ」

そういうことか。

確かに限定的に相続はできるが、相続さえすればいいというものではない。

馬は生き物で宝石や貴金属のようにはいかない。

維持費というやつがかかるわけだ。

大体預託料として月に数十万円、支払う必要があるわけだ。

「橘オーナーも貧しいとまでは言わないが一代で富を築いた人。はつきり言つて家全体が馬を持てるほどの富裕層というわけではないんや。預託料を払うのもバカにならん」

「なるほど……でも素人だと賞金稼ぎそうだからという理由で確保しそうですけどね」

「そこは慎重だったんやろな……競走馬だつて生き物や。どんな良血でも勝てないどころかデビューすらしないこともある。そう考えたら結構な博打やで」

つまり家族に相続したいという人がいないというわけか。

橘ちゃんと前に話した時『グレっちが生きていける分のお金は用意してつからね！』
と言つていた。

それはどうなのだろう。

「あんなにグレ坊を大切にしていた橘オーナーが何もしてないとは思えないんですけどね」

スタッフのあんちゃんが言うと、黒井先生は「それがな……」と肩を落とした。

「預託料に関して俺に既に支払われてるんや。『もし怪我や病気になった分の治療費や引退後のお金も含めて』と。だから名前貸すだけでええんやけど、競馬なんて全然知らない家族や。実はあとから余計なお金がかかるのでは、そもそもギャンブルだし、と……受け入れが良くないんや。橘ちゃんのお父様も亡くなってから競馬が好きな人は家族にいらなくなっちゃったようやし」

「……名前貸すだけでもと説明してるのにこれじゃあ、ちよつと……」

「そもそも家族が亡くなった上に会社のことや他のこともやることたくさんあるんや。言ってしまうば馬のことが後回しになるのもしやらない」

じゃあ何すか。グレートエスケープくんは競走馬じゃいられないってことすか。

……やべえじゃねえかッ！ イヤダイヤダ、ダービー馬になれたのにあっさり登録抹消されて種牡馬にもなれず（そもそも繁殖入りの話なんてしててわけがない）、どこかに行くなんて。

新しい就職先なんてラッキーパンチ先輩がいる乗馬クラブくらいしか思いつかない。

コネで採用してくれないかなあ！

「……やばくないですか、先生。西京さん」

「やばいで」

「やばいよ」

俺もやばいと思う。

とはいえ、俺はどこまでいってもサラブレッド。

結局俺を走らせるのは人間であつて、俺がいくら意思を見せようと無理なものは無理だ。

こんな形で終わつてしまふのか、俺は頭を抱えたかつた。

「……希望は僅かながらあるんやが」

黒井先生のその一言が本当であることを、俺は心から祈り続けた。

○○○

栗東トレセンという場所は随分田舎にあるなあという印象を覚えた。

そして、もつと牧歌的な施設だと思つていたけど実際はひとつの街のようで、その中に熱気と効率を求める無機質さも見えた。

「姉さんはここに來てたんだ……」

私の姉、橘馬奈（タチバナ・マナ）は先月、長い闘病生活を終えた。

父親の事業を継いであつたという間に拡大させた姉は終わりを迎えるにあたつて、遺言状を用意していた。

適当でふざけているように見えて意外ときっちりしている姉らしい気遣いだった。

その中で、馬に対する内容が含まれていた。

姉は馬主になり、1頭のサラブレッドを所有していた。名前はグレートエスケープ、テレビで聞いたことがある名前だ。

でも、私はあまり興味を引かれるどころか嫌悪感すら覚えた。

競馬はギャンブルだ。

そして、競走馬として大成できなかったサラブレッドの大半は屠殺か実験動物になる。

仮にレースで走っても種牡馬として活躍できなければこれまた行方知れずになってしまう。

私は姉が馬を持つと言うので調べてみて、後悔するほど残酷な世界が広がっていることを知った。

なにも馬が、動物が好きでベジタリアンになっているわけでもないし、今だって馬刺しは好きだ。

ただ、人間のエゴとでもいうのか、それを感じ取ってしまったせいだ。好きになれないでいる。

それでも遺言状に書かれていたサラブレッドの処遇。

そして、痛み止めのための麻薬で意識が朦朧とする中、その馬の名前を呼び続けている姿を見てしまえば、無視することは出来なかった。

名義だけ貸すだけでもいいと姉は言っていた。

でも、それはあまりにも無責任な気がした。

馬主になり、レースで勝てば表彰式？　のようなものにも出なくてはいけない。名義だけ貸して関係者と話もしないというのは、いくらなんでも失礼だ。

だから私は、その例のサラブレッドをまず見ることにした。

その上で、他の馬主に売却するか、私が相続するか、決めようと思った。

(広い……地図見たけど同じような建物が並んでるし……)

アポイントメントをとって、その馬を管理している黒井先生と話すことになったが、広すぎて迷ってしまいそうになる。

行ったり来たりしながら黒井先生の厩舎へ向かっていると、曲がり角から黒く長い影が地面に伸びていた。

(なにか……いる)

ゆつくりと影が動き出す。

物陰から現れたのは、1頭のサラブレッドだった。

黒く、大きく、そして何よりも草食動物とは思えない鋭い眼光。

一目見て、私は恐怖を覚えた。

(なんでこんなところに馬が……!?)

見上げるほどに大きい馬がこちらを見下ろしている。

草食動物は穏やかなイメージを持たれるが大概そういう生物は臆病なもの。

見知らぬ生き物に驚いて暴れ出すことだってある。

体重400kgを超える生き物に突進でもされたらバラバラになってしまう。

私は恐怖で声を上げそうになったが——目の前の黒い馬はパニックになることもなく、その場でぐるりと回った。

そして、身につけた紫色のゼッケンに名前が書かれていることに気がつく。

(……グレート、エスケープ……この馬が)

一度、姉が病を押してレースを見に行つたとき、ついて行つてこの馬を見ていたがその時よりも大きくなっているように感じた。

あのときの迫力とは違う、落ち着いていて岩のような厳かなオーラを纏っている。

グレートエスケープは一度嘶くと、引き縄を私の前に放つた。

「……持てつて……?」

恐る恐る縄を持つと、グレートエスケープが歩き出す。私はどうしようか迷つてから、とりあえずついて行くことにした。

……一応、今の所有権は私ということになってるし、問題は無い、はずだ。

グレートエスケープについていくと、件の黒井厩舎へたどり着いた。

この馬は私を案内したのだろうか。
そう考えると、少しだけ不気味に感じた。

厩舎に着くなり、黒井さんという方が私に気がついて小走りやってきた。

「初めまして。橘恵奈（タチバナ・エナ）です。姉の馬奈（マナ）がお世話になりました」
「どうも橘さん……この度は御足労頂いて……グレ坊と一緒に来たんですね」

「え、ええ……ついてきたら……流石というべきか、トレーニングセンターでは競走馬は
放し飼いなんですね」

「……………まあ、せやな」

なんだろう、今の間は。

「で、で！ グレートエスケープはどうでしたか」

「どう……ですか」

なんて答えればいいのか。

かつこよさを褒める？ いい馬だと言う？

当たり障りのない答えを言えればいいと思ったが、私は不誠実なことのよう感じられ
て、率直な感想を口にした。

「……怖かったです。あんなに大きくて」

「そら、そうやろな」

ぼりぼりと頭をかく黒井さん。

やっぱりもう少し当たり障りのないことを言うべきだっただろうか。

私は昔からそうだ。正直すぎるとよく両親や先生からもよく言われていた。

褒めてくれたのは姉くらいか。

「もう少し近くで見えますか。あいつをどうするにしても、ちゃんと見ていただきたいですし」

「……はい」

先程私を案内？ したグレートエスケープは馬房に入り敷き詰められた藁をかき分けたりよけたりしている。

結構整頓された位置によけられていた。

「頭がいいって言うのは、本当なんですわ。姉が言っていました」

「ああ、俺も初めてや。こんなに頭がいい馬は。実は人間が入ってるんじゃないかってくらい人間くさいわ」

「だとしたら、とても辛いでしょうね。勝てなければ殺されてしまう世界で生きていくことになる訳ですから。勝っても、望まれなければ必要とされない……幸せに過ごせるんですかね、その馬は」

そこまで口にしてから、黒井さんとグレートエスケープがじっと私を見つめているこ

とに気がついた。

「す、すみません。素人が偉そうに」

「いや……少し安心したわ。橘オーナーといい、妹さんといい……馬のことを心配してくれている優しい人やって」

「……怒らないんですか？ 素人がサラブレッドや競馬のことをわかったように語って、責めているのに」

「事実や。この世界では勝たなきゃ意味が無い。負ければ終わる、人間なんかよりも遙かに残酷な世界や。けど、牛や豚だって人間が食うために生かし、殺している……そこに違いはないやろ。それでも畜産に関わる人間は牛や豚に愛情を注いで育てている。競馬界も同じや」

……私は何も言えなかった。

そして、浅はかな発言をした自分を恥じた。

残酷に感じるのは変わらなくても、偏見や先入観で物を言っていたのは事実だった。
「ごめんささい」

「謝らんでええ。俺も時々考えてしまうことがある。それでも生きている以上は愛情を持ってやらんとな。こいつらはみんな、可愛くて、かつこええんやから」

黒井さんが見せた笑顔は少年のようにあどけなくて、彼がサラブレッドと、競馬のこ

とが大好きなことがよくわかった。

姉も、こんな笑顔を浮かべていた気がする。

天衣無縫な人ではあったけど、ここ数年は特に幸せそうで、会う度にグレートエスケープの話をしていたのを思い出した。

(この……馬を追えば、私にもその気持ちがかかるのかな)

私にとつて姉とは越えられない壁だった。

幼い頃から勉強や運動が優秀かつ誰とでも仲良くなれるコミュニケーション能力があり、子供の頃は嫉妬などよくしていた。

両親は姉を見習えとよく言っていて、私はそれに反発する気持ちを覚えていたこともあった。

そんな私に姉は、泣いてる私に『恵奈ちゃんには恵奈ちゃんのみさみがあって同じよさみはウチにはまったたくナシナシの洋梨っしょ。恵奈ちゃんは自分のバイブス上げてパリピってけばおける水産よ』と言ってくれた。

意味はよくわからなかったが……言いたいことは大体わかった。

大人になるにつれて、姉と自分を比較することはやめたが……大好きだった姉が亡くなって、正直何故私じゃなかったのかと思う時がある。

あのグレートエスケープも、姉のことが大好きだったのだろう。

テレビで仲睦まじい様子が放送されていた。

「あの馬も、姉が馬主を続けられたら嬉しかったんでしょね」

「……あいつはびつくりするくらい懐いていたし、橘オーナー……お姉さんも忙しいのにしょっちゅう会いに来ていましたから」

「ええ、いつもあの馬の話をしていましたよ」

癌が発覚し、余命宣告を受けてから姉は塞ぎ込むことが多かった。それでも、テレビでグレートエスケープの話が出る度に、少しだけでも笑っていた。

今思うとグレートエスケープは姉の心を救ってくれていたんだと思う。

「もし……私が相続しなかったら、グレートエスケープはどうなるんですか?」

「……まあ、今から売却して権利の譲渡は間に合わんやろうし、競走馬登録抹消ってことになるかな」

「抹消されると?」

「乗馬クラブが買い取るか、馬術用の競技馬になるかとか……買い取ってくれるところがあれば余生をそつちで過ごすことになる」

「……この子にとって何が幸せなんでしょう」

「それはあいつに聞いてみるとわからんわ。目を見てみるとええんちゃうか」

私は馬房の前に行き、グレートエスケープの瞳をじつと見つめた。

「……橘さん。その馬房の隣やで」

「……………失礼しました」

横にズレて今度こそじっと見つめる。

透き通った綺麗な瞳をしていて、そこに映る私の姿もくつきりと見えた。

「……全然わかりません」

「せ、せやな」

正直、この馬に抱いたのは不気味な程、頭がいいということと、大きな体から繰り出される威圧感に対する怖いという思いの二つだった。

でも、私が怖いと思っても、姉に元氣と希望を与えたように、グレートエスケープが走ることで多くの人を勇気づけるのだろうか。

——だったら、その勇氣の芽を摘むことは正しいのだろうか。いや、正しいはずがない。

「——相続します」

競走馬や競馬というものが好きかと言われたら、正直嫌いだと思う。

ギャンブルであり、そしてギャンブルに熱中する人々がいる。でもそれと同じくらい夢を見て、希望を見ている人たちがいる。

せめてこのグレートエスケープが走り抜けるまでは、彼を追ってみようと思った。

黒井さんはただ「そうか」とだけ言った。

穏やかではあったが、彼が笑みを浮かべたのを見て、黒井調教師というホースマンもグレートエスケープが走ることによって救われる人なのかもしれないと思った。

こうして、競馬嫌いな私の馬主生活が始まった。

(なんか知らんうちにまとまった……)

グレートエスケープは蚊帳の外ならぬ馬房の中だった。

×××

瓶のコーラの王冠を開けると炭酸の抜ける小気味いい音が響いた。

キンキンに冷えたコーラを瓶で飲む、何にも代えがたい至福のひとつだ。ハンバーガーが欲しくなる。

休憩時間を過ごす私が座るテーブルの対面にウマ娘が座った。

「どうもスマートファルコン先輩」

「むっ、どうせならファル子先輩って呼んでほしいな」

スマートファルコン……ウマ娘アイドル、ウマドルを自称する先輩ウマ娘。

主にダートを活躍の場としていて後続を引き離す逃げ戦法を得意とする彼女とは、あまり関りがなかった。

私はコーラを飲み干すと瓶を置いて佇まいを正す。

私と相席するウマ娘には二種類いる。

一つは友人として談話をするウマ娘で、サイレンススズカやシンボリルドルフが当てはまる。

二つ目は相談事を抱えているウマ娘だ。

それも、生徒会や風紀委員には言いづらい少しダーティなものが多いだろうか。

後者の場合は関りが薄いウマ娘もどんどん頼ってくる。

今日の相談者はスマートファルコンだったというわけだ。

「それで何の用かな、ファル子先輩。私に何か話があるんだろう」

「実は……逃げ切りシスターズに加入してほしいの！」

「却下だ」

「逃げ切り早ッ」

逃げ切りシスターズとは、スマートファルコン先輩が勝手に組んだ結果思いのほか受け入れが良くなんだかんで成立してしまったウマドルグループである。

メンバーはサイレンススズカとミホノブルボン。

「何故私なのかね。そもそもメンバーは既に3人いるだろう」

「実は夢で……かくかくしかじか」

「まるまるウマウマというわけか……もう一度言う。断る」

「なんでえ!？」

「当然だろう。ウイニングライブの練習ならともかく、ウマドルとかいうものになって
いる暇はない……トレーニングの時間だ。失礼する」

「ああつ、待って、せめて名刺だけでも……」

私は空き瓶をゴミ箱に捨ててカフェを後にすることにした。

しかし、ファル子先輩は諦めきれないのか私の制服を掴んで引き留めてきた。

「待ってよお〜! マチカネフクキタルちゃんからは逃げ切ろうとするウマ娘が新メン
バーって言われてるの! だからお願い、それはもう加入する運命ってことなの!」

「よりによってフクキタルを信じるな! 大体私はアイドルというガラではないだろ
う」

「そんなことはないよ!」

ファル子先輩は私の前に立つとスケッチブックを見せながら解説しだした。

「可愛いというより綺麗、カッコイイ寄りのエツちゃんアイドルグループのお姉さん
的な立ち位置として人気が出るはず! やっぱり属性は大事だよ」

「それはいわゆるアイドルグループの中で年増扱いされる立ち位置ではないかな」

「うゝッ……エツちゃんはそのなことならないと思うケド……」

「私の目を見ながら言いたまえ」

「でも、でも……とにかく逃がすわけにはいかない！　ここはアイドルらしく……実力行使あるのみ！　スズカちゃん、ブルボンちゃん！」

彼女がそう呼ぶと物陰から網を持ったサイレンススズカとミホノブルボンが現れた。

「本当にやるんですか……？」

「オペレーション、脱走ウマ娘の捕縛。オーダー受信しました。迅速に確保します」

スズカは恐る恐るというようなへっぴり腰で、ブルボンは相変わらず感情の読めない瞳の色で迫ってくる。

ここで逃走を選ぶことは可能だがちょうど今コーラを飲んだばかりで走ればウマ娘にあるまじき行為を行いかねない。

両手を壁に突いて背中を向けた。

「生徒会以外にこのポーズを取らされるのは屈辱だ……」

「そこまでしなくていいから！　エスケープ、みんな見てるから！」

スズカに止められた結果、逃げ切りシスターズと交渉の席につくことになった。

「やはり私がやる必要はないと思うんだが。可愛いアイドルというものに」

「ウマドルだよ」

「……ウマドルには似合わない」

別に可愛くなりたいたいわけでもないが、客観的に見て私には不向きなものだろう。

背丈は大柄で顔立ちも愛嬌があるとは思えない。

どちらかという眼光が鋭い方であり、威圧感を与えるタイプのウマ娘だ。

アイドルのように愛想を振りまくのは難しい。

そんな私の意見に対して、沈黙を保っていたミホノブルボンが挙手した。

「意見をまとめますと、『可愛くなる』という条件が達成されれば逃げ切りシスターズの加入を拒否する理由はないということですね」

「いや……トレーニングの時間とかもあるんだが」

「その分多くトレーニングすれば解決できます。スマートファルコンさん、サイレンススズカさん。如何でしょうか、グレートエスケープさんを可愛くすれば上手く行くのではないですか」

一体何を言っているのだろうか。

ブルボンも突飛なことを言う。二人にこいつを止めてくれと視線を向けた。

「なるほど……可愛くなりたいたいカツコイ系アイドル……これは大ヒットするはず。具体的にはボクとか言って慌てて私と言い換えるような、身体能力高めの王子様アイドル

……トツプを狙える逸材だよ！」

「ファル子先輩、それすごく使い古された奴。というか偉大な先人が持つてる属性だろ。スズカ……君からも何か言ってくれ」

「え!? ええと……私としてはメンバーに加入してもらった方が、その、收拾がつくから……」

スズカからはツッコミの悲しい思いを聞き取ってしまった気がする。

そうなると止めてくれる者は誰もいない。

私は諦めて付き合うことにした。

「と、いうわけで！ ウマドルならまずはファンに対するアピールが大切！ こんな風に……」

ダンススタジオに連れてこられるなり、始まったのはアピールから。

ファンの声援を受けることで人気が高まり、私を応援する声で対戦相手を萎縮させることはできるだろうが、だからといって出来るかと言われると首をかしげるところではある。

しかしファル子先輩は続ける。

「みんなー！ 元祖ウマドルのスマートファルコンです！ 今日のライブはどうだったかなー？」

『カワイイー!』

ブルボンとスズカの合いの手が入る。鏡に向かって話す姿はシニールだが、真剣な表情からは決してバカにできたものではない。

トレーニングもこれくらい熱心にやるべきと考えたと、見習うべき姿だ。

「みんなありがとー! トキメキ☆ウマドル、スマートファルコン! みんな、覚えて行つてね! ……こんな風に!」

「口上が考えつかないのだが……」

「自分の長所とか、チャームポイントを込めるとみんなに覚えてもらいやすいよ?」

長所か。自分のことを考えてから、私は鏡をファンに見立てて宣言した。

「長所は勝つところ……グレートエスケープだ。勝者として最高のライブを届けてみせよう!」

指を立てて頂点のポーズ!

やってみるとしつくり来る感じた。意外といい口上かもしれない。

「ダメー! 全然エツちゃんの魅力を押し出せてないよ! なんとというか、こう、もつと可愛く、親しみやすく!」

しかしファル子先輩的にはイマイチだったらしく、ダメだしを食らってしまった。

「む……そうか。ブルボン、スズカ、何か意見はないか?」

「アイドルに必要な可愛らしさには仕草を見せることが重要とデータがあります。可愛
い仕草を取り入れてみては。ちなみに一般的にはこういった『きやるん』『いやん』と
いった仕草が例に挙げられています」

「無表情だとしてもシユールだな……スズカからは何かないか？」

「え!? えーと……やつぱり、常日頃から応援してくれているわけだし、ファンに対する
感謝の言葉があつてもいいんじゃないかな……」

「あとはエツちゃんも普段の声が低めだから、ちよつと高い声を意識するといいかもし
れない!」

「なるほど。では……」

腰まで伸びた長い黒髪をポニーテールに、そして表情を動かしやすいように簡単に揉
んでから、鏡に全力でアピールした。

そして音程をできる限り高くするために喉の調子を確かめてから声を出す。

「みんな〜! ハピハピ〜☆ 今日も一日カワイイ☆ウマドルのグレートエスケープだ
ゾ☆ みんなの応援が私をキラキラにしてくれてるの! だから今日もとび〜つきり
の声援、よろしくネ☆シ」

今のはだいたいよかつたんじゃないだろうか。

アドバイス通りにできたはずだ。

私が振り返るとスズカとファル子先輩は目をそらした。

「ごめん……」

「ごめんなさい……」

「この感情の名前を検索中……該当しました。『痛い』という感情に一致しました」

「よしわかった。全員表へ出ろ」

そんなこんなで、気づけば私をアイドルデビューさせるといって逃げ切りシスターズによるプロデュースに取り込まれていた。

元来負けず嫌いな私としては自然とアイドルらしく振る舞えるようにしようと、彼女たちの指導に対抗するようにのめり込んでいった。

そして――

「みんな！ 私の、グレートエスケープのライブにようこそ。こんなに集まってくれてなんて感激だ……フフ、今夜は少し、キケンな夜になりそうだな……♡」

『ギヤアアアアアア!!』

絶叫にも似た声援が響く中で、私は歌う。

舞台こそ学園で行うミニライブ（それでもたくさんファンの駆けつけてくれた）だが、手は抜かない。

全力で歌い、全力で踊る。

衣装も勝負服やウイニングライプ用の衣装ではなく、王冠を載せた王子様風の衣装を身に着けて、最前列のウマ娘ちゃんに投げキッスを送る。

こうして歌いながら踊ることで心肺機能が鍛えられ、ステップも自然と無駄のない動きを意識するようになっていく。

勝利に関係ないと切り捨てようとしたが、意外と何が役立つかわからないものだ。

私はそれが面白くて、笑顔を浮かべながら観客に手を振るのだった。

「あの……ファル子先輩。エスケープはどうしてあんな風に……」

「私気づいたの。ウマドルは可愛いだけじゃない、一人一人に色んな魅力があるんだって。だからエツちゃんも可愛い路線じゃない、王子様路線で全然いいと思ったの！」

「それはもうプロデューサーの仕事なんじゃあ……」

「データから意地悪年上イケメンアイドルタイプは需要が高いとマスターからの指導がありました。素晴らしい判断だと思いますが……メンバーを増やす話はどこへ行つたのですか？」

「あ」

「ウソでしょ……」

のちにアイネスフウジン、マルゼンスキーが逃げ切りシスターズに加入したが、その

お話はまた別の機会に――

第13話 咲き誇る

常々考えることがある。

私はレースで勝つためにトレーニングをしている。

レースには真実がある。

どんなに引き離そうと、どんなに接戦だろうと、先にゴール板をかけ抜けければ勝利し、遅れれば敗北する。

清々しいまでの事実に対して、私はトレーニングを積んでいた。

最後の数cmで泣きたくないから。

一完歩のミスで泣きたくないから。

「ふうー……」

200kgのバーベルを置いてベンチプレスを終える。

本日は筋力トレーニングがメインのメニューとなっているが、まだまだ余力はあり、追い込んでいきたい。

どんな作戦や戦法を選ぼうと最後に大切になるのは基礎能力だ。

少しでも上積みを増やすためにこうして筋トレメニューを黙々とこなしている。

「あと3セット……」

「グレートエスケープさんすごい……表情が真剣というか」

「やっぱりトレーニングもあれだけ集中してやっていかないとダメだよ……私達も！」

「うん、頑張ろう！」

周囲から私を見てひそひそと話す声が聞こえた。

注目されるのは苦痛ではないが、ダービーを勝った今や自分の振る舞いが周囲に大きく影響する。

そう考えるとトレーニングには真剣に打ち込み、勝たなければならないという思いが強くなった。

「次はバーベルスクワット……うん？」

そう思っていたところに賑やかな声が近づいてくる。

トレーニングジムの入口を見れば、青と緑を連想させる騒がしい2人組がやってきていた。

「ぶつぶぶーん！　トレ中にメンゴ！　ちよい探しウマ娘で三千里つて感じなんだけど、グレートエスケープってウマ娘ちゃんおらん？　おりゆ？」

「グレートエスケープ先輩なら……あそこでトレーニングしてます。でも今は……話し

かけない方がいいかも」

「え？なぜに？」

「そりゃあ集中してるからでしょ」

「なる〜！ 流星パーマー！」

「でしょ？」

「うえーい！」

「うえーい！」

なんて言っていると、その青と緑の二人がバーベルスクワットを行う私の横にやってきた。

「オツスオツス！ トレ中マジごめん！ 今話良い？ あ、私はダイタクヘリオス」

「私はメジロパーマーだよ」

鏡越しにそう言ったウマ娘を見る。

ダイタクヘリオスと名乗ったウマ娘は、黒い髪にところどころ青のメツシユが入り、イヤリングや髪飾りで着飾っている姿は快活さと可愛らしさを演出している。

もう一人は鋭い線のような流星が入った栗色の髪の優しそうなウマ娘がメジロパー

マー。

私はトレーニング中だぞ、と言いたげに睨みつけた。つもりだったが……なんだか、

あまり冷たく当たろうとする気が起きなかった。

「ああ、構わない。何か用かな」

「あのグレートエスケープ先輩がトレーニング中に……!」

「嘘、この前は素っ気なく後にしろと言われちゃったのに!」

「そんなこと言っただけで貰えたの!? ずるい!」

外野がうるさい。

バーベルスクワットを続けながら私は続きを促した。

「ちよつと逃げウマ娘を集めて逃げの勉強会みたいな? ウチらトレーナーからアタシとパーマーの爆逃げだけじゃなくて色んな逃げがあるから学んでこいつて言われてさあ。つてなわけでここは仲良くなるためのパースイして意見とLINE交換しちやえば的な天才の発想をパーマーが打ち出したワケよ!」

「ライオンに聞いたら逃げウマ娘といえればグレートエスケープがいいって教えて貰えたからさ。是非教えてもらいたいんだよね」

「ライバルに自分の戦法を教えて得があるのか?」

「あちゃ……確かに。グレッチクレバーじゃん! 流石誘いの逃げ方もクール入ってんじゃない……」

「ヘリオス、それ少し煽り入ってない?」

「マ?」

私はバーベルを床に下ろした。

がしやんと音が鳴り、二人は突然気をつけの姿勢に変わった。

「あ、いやいやいやヘリオスも悪気があつて言つたんじゃなくてね!」

「ちよちよちよメンゴ! とうかごめんさい! バカにするつもりはなくて」

別にそういうつもりじゃないと、手で制した。

「……」つ頼みがある」

「頼み? いいよ、なんでも言つて!」

「その……もう一度、グレつちと言つてもらつてもいいか」

「ほへ?」

ダイタクヘリオスは一瞬困惑こそしたものの『あだ名呼んで親睦深めたい的な?』

キユンときちやうじゃん! OKよ!』と心ゆくまで呼んでくれた。

彼女の話し方や声は不思議と私をリラックスさせた。

何故だろうか。答えは出なかったが上機嫌でジムのそばのベンチで話を聞くことにした。

「と、いうわけで! グレつちとの親睦深め合おうぜパーリイ始めちやおうぜうえーい

！」

「うえいうえーい！」

「うえいうえーい！」

「うえいうえーい！」

「うえ……私もやらないとダメか？」

「そこはノツてくれないと！」

「くつ、うえいうえーい……！」

話は逃げウマ娘たちを集めて逃げ講座、のはずだったが実際には既にパジャマパーティと化している。

集まったのは発案者のダイタクヘリオス、メジロパーマーの二人の他、暴走爆走そして逆噴射ことツインターボだった。そして何故か呼び出されたマチカネタンホイザがいた。

「これは一体……」

「教えるにもなにもやっぱまずは親睦深めないとでしょ！　というわけで自己紹介シクヨロ！　ウチはダイタクヘリオスでえーす！」

「メジロパーマーだよ。パーマーでいいからね」

「ターボはツインターボなのだ！ 逃げならターボいっちばん得意なんだから！」

「マチカネタンホイザです！ ……逃げウマ娘じゃないけどいいんですか？」

「……グレートエスケープ。私も逃げと言っているのか微妙だが……」

「おけまる水産！ とりまキャロチ開けてコーラでバイブス上げてまじ叩！」

「あの、私は？ 逃げウマ娘じゃないよ？ いいの？ ノリが早くない!?! グレートエ

スケープさん、なんとか言ってくださいよ！」

キャロットチップスとコーラか。

夜中に食べるジャンクフードの味は何故こうも罪深く、そして甘美なのだろうか。

私は一枚つまんでからコーラを喉に流し込んだ。

しゅわしゅわとした刺激がチップスの油を洗い流すようで、残った甘味を再びチップ

スの塩気で中和する。

うおん夜中のキャロチとコーラはウマ娘の永久機関だ。

「全然聞いてないし！ チップス好きなんだね……」

「ターボも好きだよ！ ターボね、やっぱりキャロットチップスはのりしおだと思う」

「わかりみが深い！ ウチはコンソメ派かな！」

「私はやっぱりうすしおかなあ……マチタンは？」

「あたし？ あたしは栄養良くないからあまり食べないけど……うすしおかなあ」

わいわいとキャロットチップス談議は続いていく。

キャロットチップスが嫌いな年頃のウマ娘はほほいらないと思う。

いたら見てみたいものだ。そしてそのチップスを全部代わりに食べてやろう。

話がチップス、最近のファッシュョン、トレセン学園の秘密話など話がうつり変わったところで、ようやく『逃げ』についての座談会ということになった。

話が脱線していたように思えたが、これまでの会話で仲も深まり、気安く話せるように場の空気が暖まっていた。

「じゃあ逃げならターボね！　まずスタートしたら全力で走る！」

「うんうん。それで？」

マチカネタンホイザが熱心に聞いている。

メモまで出して、勉強熱心なことに感心した。

ツインターボは熱心に聞き耳を立てる周りに触発されて饒舌に語り出した。

「そのまま着でゴールイン！」

「それだけ!？」

「先頭で逃げ切り最高にCOOLじゃんFooo！」

「WHOOO！」

「これでいいの!?　グレートエスケープさん、これ收拾がつかないんですけど！」

でも今終わった。

タンホイザが悲鳴じみた声こそ上げたものの、私は密かに頷いていた。

スタートから先頭に立ち、後続に追いつかせないペースで走りそのまま着でゴールイン。

スタミナとスピードで圧倒していれば相手より速い速度で終始走り続けてさえいればよいという戦い方はある意味理想だ。

ツインターボはその理想の走りを目指して戦い続けているというわけだ。

「……なるほど。素晴らしい戦法だ。それができれば苦労しないという理想だが、その理想を目指さなければたどり着くことは決してない。いつか完成した時は……ツインターボは最強の逃げウマ娘になるな」

「でしよー!? ターボは最強だから!」

「嘘……これツツコミは私だけ?」

「はいはい! 次はあたしとパーマーね!」

「本当にこれでいくの!?!」

2番手はダイタクヘリオスとメジロパーマー。

逃げなのに二人なのかと首を傾げてしまうが、そこはこれから説明されるはず。

私は二人の言葉を待った。

「ウチらはまず逃げる！」

「それで、逃げたらまずは爆走！」

「そしたらパーマーとウチで先頭を争って最後は」

「ゴールに向かってFOOOOO！」

「で、終わり」

「終わっちゃった!!」

ダイタクヘリオスとメジロパーマーはお互いに切磋琢磨し、常に最終直線と同じ緊張感で走り続けることでスピードを高め合っているというわけだ。

人間やウマ娘でも走る相手が自分より少しだけでも速いと自分のタイムも良くなるという科学的なデータがある。

つまり最初からスピードに上積みさせることができる素晴らしい戦法だ。

「競い合う仲間がいることで速く走れる……綺麗なように聞こえるがそれもまた事実。それを利用したクレバーな走りだ……」

「あつれえそんなクレバーな話だったかなあ!?! 逃げウマ娘わかんない……」

マチカネタンホイザが悲鳴じみた声を上げるが気持ちは分かる。

偉大な敵の影がちらつくと心が弱音を吐いてしまう時もあるものだ。

それでも挫けずにトレーニングを繰り返すもののみ、栄光はやってくる。

頑張れ、マチカネタンホイザ。

「せいじや、次はグレッチね!」

「私か……私の話は長くなるかもしれないが……いいかね」

全員が顔を近づけて注目してくる。

特にマチカネタンホイザの祈るような目線が印象的だった。あと、ツインターボはなんだか眠そうだ。

「逃げというものも一種類ではない。大きく後続を引き離す逃げ、ハイペースにするための高速逃げ、スローペースでゆったりと走るための逃げ……逃げ方にも種類がある。通常これは自分の適性に合わせて選ばれるものだが、私はこれを対戦相手によって変えている。展開を読んでいるともいえるな。スローでいくべきか、ハイペースにするべきか、大きくセーフティリードをとるべきか。私の逃げの特徴としては相手によって逃げ方を変えることか」

「ふむふむ……でもそれだと大変じゃないかな? 自分の武器を一本に絞れた方が強そうだし、それに相手だって一人じゃないよね。私みたいな特に武器がない普通のウマ娘だとどれが来ても大変なだけど……」

「いい質問だ、タンホイザくん。正直、私も武器といえる才能は無かった。末脚もスピードも、パワーもなかったからな。だからこそ、他者に自分のレースをさせない、或いは

自分の力を最大限発揮する展開を作り出すことがある意味武器なのかもしれない」

「自分の力を発揮しやすい戦い方を……メモメモっと。あ、ごめん、私だけ質問しちやつて。みんなはもつと聞きたかったよね？」

マチカネタンホイザが振り返ると、三人はテレビに向かってスマブラをやっていた。

ちやうどダイタクヘリオスの操るソニックが二人をまとめて吹き飛ばしたところだった。

「全然話聞いてないし！ あ、ああ、グレートエスケープさん怒っちゃうよ……以前生意気言ってきた後輩ウマ娘が次の日顔を見ただけで逃げちやうようになっただって噂もあるのに……！」

「え？ まじ？ なにそれすごウケる。グレっちもこつちやりながら語るっしょ！ パリピはスマブラで会話するのな？」

「あ、あのグレートエスケープさん、これはその、あの子たちには少し話が難しかったといいいますか」

マチカネタンホイザを制して私は三人を睨みつけた。

私は本気だ。本気で三人に言葉を放った。

「私はマリオ使いだ」

「エッ、エスケープさーん!？」

このあと消灯過ぎてもスマブラに励み、仲良く寮長に叱られたのだった。

本音を言うと、貪欲に他者の話を吸収しようとするマチカネタンホイザは自分と似ている。

だからこそ、あまり情報を与えるのは不利になると考えたという打算もあったのだが、そこは黙っておくことにした。

その頃トレーナーは中々やってこないグレートエスケープを待ち続けていた。

体力が15上がった！

根性が5下がった……

やる気が減少した……

××× 怠け癖になった……

橘ちゃんの妹、恵奈ちゃんは妹ちゃんと呼ぶことにしたッ！

そういうえば俺の兄弟姉妹は今どうしているのだろうか。

帰省（放牧）したときは母（馬）と会って色々話したものだ。だが弟や妹もきつと尊敬していると言っていたからいるのだろうか、当然会う機会がほぼない。

2歳の夏前だから厩舎か育成牧場にいるだろうし、もう1人は1歳だから同じく育成牧場に行ってしまっている。

これから新馬戦の新聞を毎日見るべきだろうか……兄にダービー馬がいるんだから注目はされるだろう。

新聞を見れば全兄または半兄『グレートエスケープ』という名前が出ているはずだ。ちよつとワクワクする。

今は菊花賞に向けて調教を積んでいる最中だが、驚くことに妹ちゃんは毎週のように栗東トレセンへ足を運んできていた。

今も馬房のそばで本を読みながら、時折俺に視線を向けている。

「新しいオーナーさん、エツちゃんのこと大好きみたいだね。前のオーナーさんも大好きだったけど」

「どうでしょうねえ……」

隣の馬房のダンスパートナーさんがそう言うが、好きでいるのかと言われると少し違うと思う。

当然、俺個人……人？ 個馬？ とにかく俺を嫌っている訳では無いと思う。わざわざ栗東トレセンに毎週やつてくるくらいなのだから。

しかしあの目は……

「……監視しに来てるだけだと思っんです」

「監視？　ちゃんとやってるかってこと？　エッチちゃんいつも頑張ってるし、厩舎でも一番の努力家だよ！」

ダンスパートナーさんがぶんすこしている。

なにも俺がちやんとやってるかどうかなんて見に来ている訳では無いと思う。

そもそも馬が主体的にトレーニングするわけではない。調教師に促されてトレーニングを積むものだ。

やれといわれたらやる、それがサラブレッドだ。

まさか調教を拒否する競走馬がいるわけでもなし……

俺が妹ちやんをじっと見ていると顔を逸らされた。

彼女が読む本のタイトルは『サラブレッドの基礎』という初心者向けの本だ。

決して嫌っている訳ではない、はずだ。

「なんだか少し落ち着かないなあ……エッチちゃんは気にならないの？」

「俺は慣れました。お客さんからの声の方が俺は嫌いです」

「？　結構面白いと思うけどなー。『カネカエー』って、面白い響きだし。意味はわからないけど」

「なんの言葉が通じて、何が通じないのかわからなくなってきましたね……ダンスパート

ナーさんはそのままいでてください」

「どうして?」

「……可愛いので」

「……う、うん……う……恥ずかし……」

今度は俺がじつと彼女を見ていると競走馬も恐れる厩舎という城の主といえる人物、黒井先生がやってきた。

「橘オーナー、グレ坊はどうですか」

「橘でいいです。……オーナーと呼ばれるほどの者ではありませんから」

「そか。で、橘さんの願いは叶ったんか?」

なんのことだろう。

俺は耳をピンと立てた。聞いてますよアピールをするが誰も気づいてくれなかった。とても悲しい。

「願いたいという程のものでは……相変わらず、わからないままです」

『『姉がどうしてアイツを大事にしたか』……別にええと思うけどな、好きな物は人それぞれやし』

「姉の大切なものを引き継ぐんです。ちゃんとその思いも理解したいんです。バカみたいですけど……たとえ、嫌いな競馬だろうと。姉の思いを、少しでも持ちたいんです」

「……すみません。軽率でしたわ」

「いえ、自分でもバカみたいだと思ってます。でも、性分なんです……バカが付くほど真面目だとか、正直とかよく言われてましたから」

妹ちゃんにとって橘ちゃんがどんな姉だったかは知らないが、こうして馬をわざわざ相続するくらいなのだから仲は良かったのだろう。

姉を亡くして、姉の思い出を少しでも受け止めようとする姿勢には尊敬の念を禁じ得ない。

彼女は競馬が嫌いらしい。

その上で愛そうとするなんて中々できることではない。結局俺が彼女にしてやれることは何も無いが……何がなんでも菊花賞で勝たなくては。

勝って、妹ちゃんに橘ちゃんが味わったであろう幸福感を教えてやるのだ。

「ところで……ゲートに縛るって調教方法があるらしいんですけど、まさかグレートエスケープにやりませんよね?」

「やるわけないわ。アイツ、ゲートは上手いからな」

「下手ならやるみたいない方ですね……」

「やるで? てか、やったで」

「え」

妹ちゃんはますます競馬に対してマイナス感情を抱いてしまいうさだ。そもそもゲート訓練なんてビビらなきゃ問題ない。

最近忘れかけてきたが元人間の俺ができなかつたら色々とコトだ。

「ゲート怖いゲート怖いゲート怖い……！」

気づいたらダンスパートナーさんがトラウマを発症してがたがたと震えていた。

そう彼女はオークス前にゲート難矯正のために縛り付けられていた。あれからゲート難は減ったようだが、ゲート嫌いはかえって加速しているようだ。

ダンスパートナーさんのオークスの頃は新馬戦を控えていた頃だったか……1年経つのが早くてびっくりだ。

今ではダービーを勝ち、菊花賞を控えている身。

あのときより俺は強くなった。そして、勝つことの意味、大切さ、俺の背中に乗るもの大きさも知ったつもりだ。

見ててくれよ妹ちゃん。俺が菊花賞を勝つところを……！

○○○

パドックから電光掲示板をチラチラと窺う。

俺は単勝1番人気、オッズは皐月賞以来の1倍代になる1.6倍と表示されていた。

馬体重は488kg（19kg）、重すぎず、それでいてガレていないというすつきり

とした気分。つまり今の俺は絶好調で文句なしの状態だ。

菊花賞はクラシックレースの最終レースであり、京都競馬場の3000mを舞台に争われる長距離レース。クラシックレースの中で『一番強い馬が勝つ』とされるこのレース、俺には負けたくないという思いが腹の中で燃え盛っていた。

血統では決してステイヤー血統ではないが、馬体から長距離に適性があると黒井先生に言ってもらえた俺にとっては負けられない一戦。

橘ちゃんはもちろん、妹ちゃんにだって勝利を届けると勝手ながら約束をさせてもらったから。

「よしっ……グレ坊、いったらうぜ」

ケンちゃんが俺に乗るとぼんぼんと頭を撫でた。

傍には黒井先生と妹ちゃん。

俺は頭を下げて立ち止まった。

「……………」

少し遅れて、慌てて頭を上げて何事もなかったように振る舞う。

つい、いつものクセでやってしまった。

もうあの手に撫でられることはないはずなのに。

辛気臭くなっちゃった。

すぐに本馬場入場するため移動が促され、列に続いて歩き出した。

「久しいな、好敵手」

しみりしながら本馬場へ歩みを進めると、ぱかぱかとダンスインザダークが近寄ってきた。

「神々の黄昏から幾星霜……我が血肉と魂は更なる高みへ上り詰めた。ただ渴望だけを秘めて。永き戦いの果ては、我が闇に染め上げて終幕を迎えるのだ」

相変わらず何言ってるかはわからなかったが……今の俺は誰にも負ける気はない。

「……まあ、頑張ろうな」

「我が名を……呼ばぬか……逃亡者よ」

だがレースではほかの馬は気にしない。自分のペースで走り、1着をとればそれでいい。

本馬場での返し馬でも走りは好感触だった。

長距離戦で大切なのは折り合いだ。どんな馬だろうと3000mを全力で走ることには不可能だ。

だからこそ、長距離レースの馬券は騎手で買えと言われる。

そういう意味ではレースというものを理解し、手前を自力で変えたりペース配分を理解出来る俺は明らかに有利になる。

そして自力をつけるために黒井先生からの容赦のない坂路調教をピシバシやってきたのだ。

死ぬかと思つた。ダービーほどではないがかなり負荷をかけられたがスタミナは間違ひなくついた。

レコードで走るスピードとスタミナ、そしてレースに対する判断力……すべてを兼ね備えた今、それを発揮することだけに集中する。

『第57回菊花賞の時間がやってまいりました。1番人気は前走を圧巻の走りで完勝したダービー馬グレートエスケープ。王者に挑むのはダンスインザダークか、フサイチコンコルドか、ロイヤルタッチか。はたまた伏兵か。現在、ゲート入りが行われている最中です』

快晴の空に、乾いて走りやすい芝。

体がでかいのに比例してストライドも広い俺にとって良馬場とコーナーの大きい京都競馬場は相性がいいコースだ。

『8枠18番、グレートエスケープがゲートに収まりました。第57回菊花賞、淀を舞台にダービー馬は逃げ切るのか。スタートしました』

大外枠からの出走となったが、無理にはいかない。

スタートを五分に決めると俺は先行しスツと前目の4番手につけた。

ローゼンカバリーが真ん中の枠から前に出ていくがそれを見るようにして追走する。京都競馬場の名物、淀の坂を越えて、再び下っていく。

速度を出しすぎるとコーナーが膨れてロスをしてしまう他、スタンド前直線で速度を上げてしまうと馬が勘違いしてかかってしまうこともあり、このあたりから菊花賞はペースが落ち着く。

「だからこそ、行く。だろ、先生、ケンちゃん」

それを心配しなくてもいいのが俺の強みだ。

スタンド前正面の歓声を聞きながらローゼンカバリーより前に行き、ハナを奪う。

「お先に」

「な……待て！ くそ、なんでいかせてくれない！ 置いていかれるぞ！」

俺が追い抜いたことで先頭集団の何頭かが少し落ち着かなくなり、かかりはじめる。

理想通りの展開だ。

あとは俺のペースで逃げるだけのこと。

『スタンド前直線でダービー馬がハナを奪いました。やはり逃亡者グレートエスケープ、菊の舞台でも逃げ切るのか。最初の1000mは1分2秒から3秒で通過、平均ペースです。レコードの出たダービーとは違うぞグレートエスケープ』

向正面に入っても展開は変わらず。

3000mを走った経験のある馬は1頭もない。

ここが初めての長距離レースとなる以上、騎手も探りつつという思いもあるのだろう。

とはいえ、GIレースに出る騎手たちはいずれも百戦錬磨の強者たち。

それを織り込んだ上でレースに乗っている。

どこからでも来いとはかりに後方に注意を払う。

『第3コーナー前、2度目の淀の坂越えです。先頭は依然グレートエスケープ、後続がぐつと距離を詰めてきた。ロイヤルタツチ、フサイチコンコルド、ローゼンカバリーが前を狙っているぞ！ ダンスインザダークは馬混みでもがいている！』

坂の下りから徐々にペースが上がってきた。

俺の脚にはまだまだ余裕がある。

もちろん、決して楽ではないが十分に足を溜めた上で直線を迎えることができた。

「ケンちゃん、あれをやるわ！ ええ、よくつてよ！」

一人芝居を打ちながら、仕掛け所で手前を変える。

最初こそ遠慮していたがダービー以降、どこが仕掛けどころなのか、ケンちゃんがどこで仕掛けたいのかわかってきたからこそできる息のあった芸当。

それを行える自分の中には、心地いい全能感すら溢れていた。

辛く厳しい調教を積んで、自分の力を充分に活かせる最高のレース展開で走ることが出来ている。

「橘ちゃん、妹ちゃん、見ててくれよ！」

第4コーナーを抜けると内回りと合流地点である草原のような直線が広がっていた。

まるで最期に語り合った場所のような景色。

疲れきった脚は自然と軽くなり、どこまでも走れそうな気持ちになる。

『先頭はグレートエスケープ、突き放す！ それを追うロイヤルタッチ、フサイチコンコルド！ もう言葉は要らないのか！』

後ろから迫る馬がいる。

だが、今の俺に勝てる馬はいない。

ケンちゃんが鞭を揮い、走れ走れと駆り立てる。

ゴールまで残り200mのハロン棒を通り過ぎ、ゴール板が見えてくると同時に観客の大歓声が響き渡った。

「え——」

まさに一瞬の光景だった。

俺のすぐ外を真っ黒な流星が走り抜ける。

何故？ どうして？

今の俺は余力をたっぷり残し、後続が追い付けない末脚を発揮できる状態で、実際に発揮して直線を駆けている。

完璧なレースをしたはずだ。

したはずなのに——なぜ、俺の前に馬がいる？

『おおつとここでダンスきたダンスきた！ ものすごい脚だダンスインザダーク！ グ

レートエスケープかダンスインザダークか、ダンス躲した！』

（橘ちゃんと……妹ちゃんのために……勝たなくちゃいけないのに……！）

先頭に立っていたのは俺ではなく——ラジオたんぱ2歳S、弥生賞、そして日本ダービーと悉く勝ってきたはずの、ダンスインザダークだった。

100mという6秒で駆け抜けられる距離で、ダンスインザダークは俺に漆黒の馬体を見せつけている。

全力で走っても、追い付けない、かわせない。

たった半馬身の差が、絶望すら覚えるほど遠くに感じたのは、初めてのことだった。

『ダンスインザダークだ！ ダンスインザダークだ！ ダービーの無念を晴らした！』

ダンスインザダーク1着、2着はグレートエスケープ！』

ゴール版を先に駆け抜けたのは、ダンスインザダーク。

完璧なレースをしたはずの俺を追い抜いて、菊の舞台上で咲き誇った。

あれだけ軽かった身体が、レースを終えた途端、嘘みたいにも重くなり、息が乱れる。先に駆け抜けたダンスインザダークがゆつくりと歩み寄ってきた。

「……偉大なる逃亡者よ」

「……おめでとう。俺の負けだ」

祝福を一言、俺は彼に背を向けた。

橘ちゃんにも、妹ちゃんにも、先生やケンちゃん、厩務員の西京さんだつて。

みんなに申し訳ない思いで一杯だ。

一番得意なはずの長距離レースで力負けだなんて、なんて思われるだろうか。

「……僕を見ろッ、グレートエスケープ！」

雷鳴のような声が俺を貫いた。

一瞬、誰の声かわからなかったが、射殺さんばかりに俺を睨みつけるダンスインザダークを見て、俺は驚いた。

「僕は、君に負けてからずっと勝ちたいと思って、君だけを見ていた。君は……どこを向いているんだ！」

言われなくても、俺が見ているのは勝利だけに決まっている。

負けた俺に対する挑発のつもりなのかと怒りそうになったが、ダンスインザダークの剣幕を見てそういうことではないらしかつた。

とうか、普通に喋れるじゃねえか。

突っ込もうかと思つた俺を置いて、ダンスインザダークは言葉が続ける。

「僕は、僕のために走っている。君は何のために走っているんだ！」

何のために――？

それは当然、俺に関わる全ての人のために走っている。

その何がおいしいというのか。

立ち尽くす俺を置いて歩き出すダンスインザダークの背中を見送ることしかできなかった。

「相変わらず……お前の言ってることはわからねえよ……」

クラシック最終戦の菊花賞で俺は2着という結果に終わった。

決して悪い成績ではなかったが、3度破つたはずの相手に完敗したという苦い経験が俺に刻まれた。

レース後、ケンちゃんが報道陣に対してレースを回顧する。

負けたのもあつて、言葉は少なかつたが表情は決して暗くはなかつた。

『やりたい競馬はできました。操縦性が相変わらず高い馬なので、長距離はやつぱり合っていると思います。直線の手ごたえも抜群でしたが、勝ち馬が強かったです。次は古馬とのレースになると思うので、この馬の持ち味を次も活かしたいと思います』

菊花賞から数日後、ジャパンカップに出走するべく俺は厩舎で過ごし調整することとなった俺は、日課になりつつあるスポーツ新聞を読んでいた。

「松尾秀喜とリュウイチローが今季のMVPかあ。巨人が強くて嬉しい」
「グレ坊、せめてお前競馬の方を読めよ……」

厩舎スタッフのいつものあんちゃん——白村（ハクムラ）という苗字である——が呆れたように言う。

最近じゃ厩舎の人間は俺が新聞を読んでも誰も驚かなくなってきた。

時々調教で乗りに来る若い騎手が俺を見てギョツとしている光景は見られるが。

だが白村くん。馬になってから俺は競馬以外のスポーツにほとんど触れられていないのだ。新聞くらい別にいいだろう。

なんて、言っても当然聞いてもらえないが。

本音を言うと、少しだけ競馬のニュースや話題から離れたい気持ちがあった。

——何のために走っている。

不意にダンスインザダークの言葉を思い出す。

俺はこれまでずっと、誰かのために走ってきたつもりだ。

こうして俺が生きていられるのは、牧場や厩舎のスタッフがいてこそ。

人間の時以上に誰かの手を借りなければ生きていけないことを理解しているからこそ、恩返しとして勝利を目指している。

それが間違いだともいうのだろうか。

また、心かもやもやとしてきて、逃げるように新聞をめくった。

「え……」

飛び込んできた新聞の文字に思考が停止する。

気づいた時には馬房を飛び出して、雨の中一目散に走り出していた。

俺が落として広がった新聞には『ダンスインザダーク、引退』の見出しが大きく報じられていた――

第14話 夢、想い、そして勝利

雨の中、馬房を飛び出した俺は白村くんや他スタッフの静止を振り切って走り出した。

大粒の雨が地面を叩き、瞬く間に水たまりやぬかるみを生み出していく。自分でもなぜ走り出しているのか、わからない。

だが、とにかくダンスインザダークに会わなくちゃいけないという思いに突き動かされていた。

同じ栗東トレセンの石口厩舎にたどり着いた時、馬運車がやってきたタイミングだった。

「ダンスインザダーク！」

雨の中叫ぶと、あいつを乗せようとしていたであろうスタッフたちが驚いていた。

「ありや……グレートエスケープか？　なんでこんなところに！」

「黒井先生に言つとかないとまずいんじゃないやねえか」

スタッフたちはどうでもいい。

俺はゆっくりと馬運車に近付くと、馬房からダンスインザダークが出てきた。

「……偉大なる逃亡者よ。戯れとしては、良い趣向だな」

「……」

「相変わらず、沈黙を守るか。空も泣いている。言の葉を紡ぐ気分になれぬのは、当然ともいえるが」

ダンスインザダークの脚に巻かれたバンテージを見つけてしまった。

新聞に書かれていた『屈腱炎』の文字。

屈腱炎とは競走馬の不治の病であり、一度治療してもまた再発することから競走馬生命に大きくかわる病だ。

リーディングサイヤのサンデーサイレンスの子供にしてオークスマダンスパートナーの弟という俺とは正反対とすらいえる良血の競走馬、ダンスインザダーク。

そんな彼に対しても、運命は容赦なく牙を向いた。

「……」

「……旅立ちを迎えるまで、刹那の時がある。暫し、言葉を交わそう」

ダンスインザダークが周囲のスタッフに下がるよう合図を出すと、スタッフたちは厩舎のベンチに座った。

そのやりとりだけで、こいつもまた、厩舎では愛され、スタッフの人たちとすごく仲が良かったのだと理解できた。

雨を避けられる場所で二頭並んだ。

思えば、他の厩舎の競走馬とこうしてゆっくり喋ることはなかったような気がする。

「引退……って本当か」

「肯定。我が野望は天命に追いつかれたよ」

そう言うダークは怪我で引退する無念そうな雰囲気はなくて、むしろ穏やかに笑みさえ浮かべていた。

「……もう、走れないのか」

「……………」

雨の音がやけに大きく聞こえた。

しばらくして、ダークは口を開く。

「……………うん。もう、走れない」

菊花賞で見せた激情とは違う、初めて聞く静かな声。

深く染み渡るような音を吸い込む、闇を連想させた。闇というと縁起でもないが、どちらかというと布団にもぐって眠るときのような、心安らぐ闇だ。

「……………これからどうなるんだ」

「僕は種牡馬になるらしい。たくさんお嫁さんを貰って、子供たちに頑張ってもらおう。目標ではあったけど、こんなに早いとは思わなかった」

「そうか」

あまりにも軽い口調で言うから、かえって言葉が見当たらなかった。

「その、未練はないのか。競走生活に」

「あるに決まってる。僕、言ったでしょ。菊花賞の後」

「そう……だよな」

「……気にしてるの？」

「まあな」

ダークはずっと俺に勝ちたかったという。

クラシックの最終レースでようやく倒したものの、そのライバルは眼中にすら自分を入れてなかったとわかれば、次こそはという気持ちになるだろう。

だが、その機会はもう永遠に訪れない。

「俺は……ずっと誰かの思いとか、そういうものを背負って走ってきた。それは、間違いだったのか……？」

絞り出した言葉は懺悔のようだった。

ダークは笑った。

「それはわからない。でも、あの時の菊花賞は、君は君だけのために走って欲しかった」「俺だけのために……？」

「……でも、あの時の君は間違いなく強かったよ。ダービーのときもそうだけど、菊花賞の君に勝てたからやり残したことは少ないかな。本当はお姉さんと会って見たかったけど」

「ダンスパートナーさんも言ってたよ。会ってみたい、一緒に走ってみたいって」「そうだったのか。未練が増えたな……」

雨が止んだ。

ダークは太陽が差し込み始めた屋根の外へ、俺を置いてゆつくりと歩き始めた。もう時間が来たらしい。

「君に頑張ってくれとは言わない。君はただ、自分のために走ればいいんだよ」

「……本当、会った時から言ってることはわかんねーよ……最後に、聞きたいことがある」

「なに？」

「あの話し方はなんだ……？」

ダンスインザダークは振り返らずに答えた。

「また次に走ることがあったら、教えるよ」

ダンスインザダークの言葉に、俺は思わず追いかけてそうになって止まった。

馬運車に乗り込むダークを見送りながら、追いかける資格は俺にはないと悟ったから

だ。

それでも、傷から血液がにじみ出るように、言葉がどろりと口から溢れた。

「俺……アイツに勝ちたかったんだな……」

ダンスインザダークが旅立ったのは、太陽に照らされて輝く、雨上がりの午後のことだった。

流石に今回の脱走はめちやくちや怒られて「去勢したるか！」とスタツフや先生はそう言わんばかりだった。

幸いグレートエスケープのグレ棒は守られたが、当分脱走は控えることにした。

大切なグレートエスケープのグレートな部分であるグレ棒がとられたら今後のレースで勝てなくなってしまう。

闘争心をもぎ取られるようなものだ。それはつらい。とてもつらい。

それからは、ジャパンカップに向けて調教の負荷量が徐々に増えていく。

タイムこそ平均的だが、俺としては脚がなにか引つかかるように動かしづらくなった。

理由はわかっている。

体の健康ではなく、心の健康が損なわれているのだ。

(何のために……自分のために走る……か)

「——エツちゃん」

調教を終えて引き上げる中、考え込む俺に声をかける馬がいた。

「ダンスパートナーさん……」

「やあ。なんてね……なんだか調子悪そうだけど、大丈夫？」

「別に体はどこも悪くないですよ」

「体は……ということは、悩みとかあるの？」

ぎくりとした。

隠してるつもりだったが、ダンスパートナーさんの鋭さには降参だ。

「なんで気づいたんですか」

「いつも見てるから……あつ、変な意味じゃなくてね！」

「馬房が隣ですからね」

「うん、まあ、そうなんだケド……」

「……これは愚痴なんです。俺はなんのために走っているのか……って思ってる」

ジャパンカップはもう2週間後に迫っているというのに、俺の中ではあの時の言葉がぐちゃぐちゃと心を掻き乱している。

ダンスインザダークから言われた自分のために走れという言葉。

そして、今更になってダンスインザダークに勝ちたいと思ったこと。

今では叶わない思いを抱えて苦しいということ、素直に口にするだとダンスパートナーさんは答えた。

「……それは、辛いね」

シンプルな慰めの言葉に、俺は心地よさを覚えた。

それと同時に、どうしようもない問題であることも知った。

引退した相手——それも怪我をした相手ともう一度走るなんて不可能だ。どんな奇跡が起ころうと。

だからこそ、行き場の失った情熱を持って余している。

「ダンスパートナーさんはどうしますか、そんなとき」

「……そうだなあ。私にも同じことはあつたけど」

「あつたんですか？」

「うん。でも、それは……私が出した答えだから。あつ意地悪しようってわけじゃないんだよ!! ただ……私が言っても、解決できないと思うの」

そう言われて、さらにしおしおと萎びてしまう。

多分その通りなのだろう。

だが、正論は決して俺を救いはしない。

わかってるからこそ、不貞腐れて、唸っている。

そんなうじうじしている俺を見かねたダンスパートナーさんが笑う。

「今週のエリザベス女王杯。私、出るから……見てて。言葉では教えられないかもしれないけど……私の走りには、そんな想いも込められているから」

本当だろうか、思わず閉口する。

彼女は今週のエリザベス女王杯では一番人気になると予想されている。

もちろん勝てない可能性はあるだろうが、彼女のポテンシャルならチャンスは大きい。

一番人気で勝つことは簡単ではないが、勝てると思われているからこそ一番人気になるもので。

俺の悩みが晴れるかは、正直半信半疑だった。

——だからといって勝利を願わない理由にはならない。

エリザベス女王杯の当日、レースが近づくのを悟ると馬房の前の鉄柱を蹄でカンカんと叩いた。

「お……？ グレ坊、どうかしたか？」

白村のあんちゃんが来た。

ラッキーだ、こいつは結構脇が甘い奴なのでこういうときは気楽だ。

これが西京さんとかだと、もうバレてしまう。

最近大抵の要求は理解して貰えるようになったのはすげえと思うが。実際にしても
らえるかは別に。

「……腹が痛いのか？」

ひひくん、ひひくん（泣）

こちらら演技派、やれと言われれば王子様系アイドルの真似事だつてやれるぜ。

ルックスさえ良ければな……！

「おいおいジャパンカップは目の前なのに……大丈夫か？ 腹が痛いのか？ 本当に腹
か？ 嘘じゃないよな？」

嘘だぜ。

白村がのこのこ鍵を開けた拍子にそっと押しつける。

おっと、失礼。

「あ、こちらこそ……じゃなくて！ 待てグレ坊！」

休憩室へのそのそ歩くなり窓に前脚をかけて観察する。

ついでに後脚の筋トレになるし、一石二鳥だ。

テレビではちょうどダンスパートナーさんが出走するエリザベス女王杯のファン
ファーレが鳴り響いていた。

「……グレ坊、なんでここにいる」

厩務員の西京さんがじろ、と見つめてきた。

いいじゃないですか。

頼りになる先輩の晴れ舞台を見るくらいは。

「さ、西京さん……」

白村が追いかけてくるなり身を縮こまらせている。

西京さんはどうやら他のスタッフにも恐れられているらしい。確かに厩舎の中でも年上の、40代の働き盛りの寡黙な男って感じだから、取っ付きづらさはあるようだ。

「……まあ、ええか」

そして良くも悪くも俺の行動に慣れた一人でもある。

今更そんな気にするような人ではない。

怪我しそうになった時はめっちゃくちや怒られたけど、それは俺が悪い。

担当厩務員が言うなら……と周りのスタッフは大人しくなった。

ありがたいが、この厩舎は大丈夫だろうか。

大概テキ(調教師)も中々ぶっ飛んだお人だから今更といったところかもしれないが。なにはともあれ、黒井厩舎の看板馬のダンスパートナーさんの出走だ。

○○○

G Iレースに出走するのはこれで7回目。

桜花賞、オークス、ヴェルメイユ賞、菊花賞、安田記念、宝塚記念、そして今日のエリザベス女王杯。

何回出ても、緊張感で胸が苦しくなる。

いつになったら慣れるのだろう。今では緊張していることに慣れてきそう。

私はゲート前で待機しながら、空を見上げた。

灰色の空は、どこに繋がっているんだろう。

再戦を約束したあの子は今、怪我と戦っている。

再戦を約束したあの子は今、永い眠りについてしまった。

クラシックレースでしのぎを削った同級生はすっかり見なくなってしまうて、今では孤独を感じながら先輩たちと戦っている。

私にとって先輩たちと争う古馬G Iは必ず取らなくてはならない栄光だった。

惜しいところまでいくが届かないと言われていたが、それと同時に「牡馬が相手だから」とも言われていた。

女同士の戦いになるこのレースでは負けられない。

1番人気という称号が私の背中には乗っていた。

「よう、ダンスパートナー。1番人気になっていい気になっていたら、このアタシがガ

「ブツと喰らい尽くしちまうよ?」

青鹿毛の綺麗な馬が威嚇してくる。

彼女の名前は確か、ヒシアマゾンという。私よりも歳上の競走馬だ。

「人気なんて関係ないよ。私はただ1着を取るだけ」

「ヒュウ、いいね。やっぱりこの日本の血統じゃなくて海外の血を宿す奴が強いってのがわかるよ。今日はアタシとタイマンだ!」

「……日本の血統とかは関係ないと思うけど」

「ああん? あるに決まってるだろ。サラブレッドはブラッドスポーツ! 連綿と続く血筋はすべて勝つこと、そして最強の競走馬を生み出すため! それは競馬の歴史が深い欧州の血統を引くサラブレッドが強いのは当然だ。歴史の浅い日本の血ばかりの奴に用はないね!」

ヒシアマゾンの言葉に周囲のサラブレッド、特に内国産種牡馬や母馬が両親の子達が気色ばむ。

「……まあ、私は欧州ではないけど、外国生まれのお父さんとお母さんは同じだね」

「そうさ。こんな挑発にイラついてるような奴らじゃ相手にならないね!」

私はじつとヒシアマゾンの瞳を見つめた。

瞳に映るものは爛々と輝く、鬪志の炎のように見えた。

「……貴方は、自分を追い込んだ上で勝利を掴もうとしている。ただ他人を嘲るだけの馬じゃない。本当に強い馬なんだね」

「へっ……やっぱりこの戦いはアタシとアンタのタイマンだね」

「そうかもしれないけど……勝つのは私だよ。お姉さんとして見せなくちゃいけないモノがあるの」

「そいつはこつちのセリフさ。アイツのためにも負けられない」

選ばれたサラブレッドたちが続々とゲートに入っていく。

京都芝2200m、中距離のこの舞台では負けるわけにはいかない。

『昨年から古馬にも開放され、装いが新たになったエリザベス女王杯。全頭ゲートに入りました体勢完了——スタートしました』

ゲートが開くと同時に全員が駆け出す。

私が中団に控えるとその横に並ぶようにヒシアマゾン。

牝馬でありながら牡馬と対等に渡り合う女傑と評されている彼女は確かに他の子と比べて頭一つ抜けているように見えた。

近走は勝ちから遠ざかっているものの、レースはすべて牡馬牝馬混合GI、衰えたと判断するには早すぎる。

『先頭に行くはシーズグレイス、続いて2番人気のブライトサンデー。ダンスパート

ナーは先行集団について5、6番手といったところ。前のヒシアマゾンを見るような格好です。3番人気のフェアダンスは中団やや後方に待機しています」

第1コーナー、第2コーナーを回って第3コーナーの坂へ差し掛かる。

展開そのものは落ち着いているが、裏を返せば直線で末脚を爆発させようとする展開になっているということ。

第4コーナーの手前、坂のくだりで一気にペースが速くなった。

「うおおおっ！」

ヒシアマゾンが先にスパートをかけた。先頭集団を外から抜かそうと捲り始める。

私の鞍上たる三井（ミツイ）くんはまだ合図を出さない。

少し遅れて出された合図と指し示された方向は内埒いっぱいだった。

『直線に入ってヒシアマゾンがくる！ 外からフェアダンス！ そして来た来た内から

ダンスパートナー！』

4コーナーを越えると先頭集団がばらけ、内側に大きな道が開いた。

後は貯めきった末脚を爆発させるだけ。

「くそ……負けてたまるか……負けてたまるかってんだよオ！ ブライアンのためにも……こんなところで負けられないんだ！」

ヒシアマゾンが外から私に競りかけるように内に切れ込んできた。

彼女もまた、今はないライバルの想いを背負って走っているらしい。

だからといって勝ち星を譲る私ではない。

3歳クラシックで争ったライバルたちはここにいないくて、できることならいつまでも同じ舞台を目指して走っていたかった。

けれど、それはもう叶わない。

——エツちゃん。きつと貴方は私とこれから同じような思いを何度もすると思う。だけど、貴方ができることはたった一つ。『勝つこと』！

どうしているだろうか、常に目線で追ってしまうことが増えた私の後輩ダービー馬は。

私の姿を見て何かを感じてくれているだろうか。

(長く走ると、段々背負うものが増えてくる。それでも最後の決め手になるのは、勝ちたいたいという意思だから……！)

「ああああああ——ッ！」

『内からダンス、ダンス、ダンス！ 大外からフェアダンス、真ん中ヒシアマゾン！ ダンスパートナー！ ダンスパートナー！ 三井洋介が左手を上げました！ ダンスパートナー！ 着でゴールイン！』

エリザベス女王杯のゴールを私は先頭で駆け抜けた。大歓声が響き渡り、誰もいない

景色が目の前に広がっていた。

久々の勝利の味はまさに格別だった。

「エツちゃん……次は貴方の番だから……！」

私は観客たちの方を見ながら、彼の目の前にこの光景が広がる未来を祈った。

○○○

『エリザベス女王杯を制したのはダンスパートナー！ 菊花賞のダンスインザダークに続いて姉弟でG I制覇！』

厩舎のスタッフ全員が歓声を上げ、抱き合いながら喜んでいる。

黒井厩舎に初めてのG I勝利を届けた看板馬の久々の勝利ともなると応援の気合いもまた特別なものだろう。

歓喜の輪を外から見ながら、俺はテレビに映るダンスパートナーさんの姿を見つめていた。

「……すいい」

俺に勝ったダンスインザダークも、あんな走りをしていただろうか。

切れ味鋭い末脚を發揮して一番にゴールへ飛び込んだ彼女の姿は俺に敗北感を覚えさせたアイツとよく似ていた。

「すいい……！」

徐々に炎が勢いを増すように、胸が熱くなる。

ダンスパートナーーさんに見せてもらったものを上手く言葉にできないが、求めている答えらしきものを掴み取ることができたような気がする。

早く走りたい。

ジャパンカップを走りたい。

俺はいてもたってもいられなくなり、調教助手を引つ張って走りたいとアピールした。

××馬房に入れられた。

××

菊花賞で勝ったはずのグレートエスケープの顔色は優れなかった。3000mという長距離を走ったのだ、負担はかなりのものになるはず。

怪我があったのかと心配するとグレートエスケープは首を振った。

「怪我はなにもない。疲労はあるが……相棒。私は……ジャパンカップに出るべきと思うか？」

自信が無いのか？

「今日のレースで感じたんだ。私はこれまで自分のために、勝つために走っていた。だ

が……それは正しかったのだろうか」

グレートエスケープは勝利至上主義であり、その勝利は自分のためだと言ってはばからない。

そんな彼女が弱気になるのは珍しい。

誰かに何かを言われたりしたのはだろうか。

「そういうわけではない。ただ、今日のレースで負けた子が言っていたんだ。『トレーナーやお客さんのために勝ちたかった』と。きっとそれは彼女にとって夢なのだろう。勝っているはずなのに……何故か敗北感が胸に渦巻いている」

気合い負けとでもいうべきだろうか。

レースで共に走ったウマ娘に気迫で押されてしまつて、そんな自分がジャパンカップに出てもいいか悩んでいるらしかつた。

今の精神状態でトレーニングを積んでジャパンカップに行くのは難しいだろう。

少し期間を空けよう。

そう提案すると、グレートエスケープは少し悩んでから頷いた。

ジャパンカップは世界最高の舞台。

彼女自身、今の状態で結果を残せないことを理解しているのだろう。

「そうなるよ、どのレースを走るんだ？ 我ながら情けないことを言っているが……」

クラシックレースを走ってきた疲労もある。

一度体を休めてから休養し、再び大きな目標を目指すためのステップレースがいいだろう。

そうなる時期は来年の春頃か。

日経賞で行こう。

「日経賞……そうなる、天皇賞・春も行くわけか」

日経賞は中山レース場で行われる芝2500mのGII競走で、天皇賞・春を目指すウマ娘も参戦するレベルが高い重賞レースだ。

G Iほどではないが、強敵揃いのここで勝利し、天皇賞・春で完全復活を果たすのが目的だ。

「それに……有馬記念と同じコースだな。……決して諦めた訳では無い。今はその時では無い……勝負は来年……そう考えるのは負け犬の思考かな？」

——燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや、だ。

「……ああ、そうだな……羽ばたくには、広げられるだけの羽を手に入れなくてはだ
な」

出会った時に言われた言葉をそのまま返すと、グレートエスケープは笑みを浮かべる。

その表情には、少しだけ活気が取り戻されているような気がした。

目標は日経賞、そこでグレートエスケープの完全復活を披露してみせる！

目標達成！

菊花賞で3着以内！

Next↓日経賞で2着以内

第15話 グレートエスケープの世界

「あの……エスケープ先輩、ちよつといいすか……」

食堂でトレセン学園特製牛丼を食べていると声をかけられた。

お盆にハンバーグステーキ定食を乗せた、片目を髪で隠した流星が特徴的なウマ娘、ウオツカが立っていた。

「食べながらでもよければ。座るといい」

「アザッス！」

ウオツカ——私の後輩ではあるが、その實力は多くの生徒に知れ渡っている将来有望なウマ娘だ。

切れ味鋭い末脚は見る者を震わせるスター性を兼ね備えている。

そんな彼女はどこか落ち着かない様子で、歯切れが悪かった。

「珍しいじゃないか。私に『5バ身ブツチぎつてやりますよ！』と挑んできたウオツカ君とは思えないな」

「ぐっ……！ か、過去のことはいいんすよ！ ってか次は勝つつす！」

出会いはウオツカからの果たし状によるものだった。

宣戦布告された私は手加減することなく全力で走り、5バ身置き去りにした。

彼女はダイヤの原石だが、まだまだ磨けていない。

そんな才能任せな彼女に負けているようでは、頂点など遥かに遠い世界になってしまう。

ただ、格上だろうと臆するなく勝負を挑む姿は嫌いではなかった。

それ以来、ウオツカを何かと可愛がることが増えた。こうして、何かを相談されるくらいには。

「じゃあ聞きますけど……あの……エスケープ先輩って、バイク持ってるって……マジすか」

「うん？ ああ。それがどうかしたかね」

「お、おおー！ ちなみに……なに乘ってるんですか」

「トライアンフTR6トロフィー」

「うおおおおお！ か、かつけえ、かつけー！ しかも大型！ 免許持ってるんすか!？」
「そりゃあ持ってるとも」

ウオツカはバイクが好きなのを思い出した。

私はスマホを取り出し、バイクの写真を見せる。

「だいぶオンボロだね。メンテも中々骨が折れる」

「ヴィンテージじゃないすかあ！ うわあ、いいなあ……いいなあ……！」
目がキラツキラしている。

宝物を見つけた少年のように……あまり比喩になっていないな。

嬉しそうに写真を見てはすげーすげーと呟いている。

「……乗ってみるか？」

「え!? いいんすかあ〜？」

「最初から期待してただろう……ちようど、これからシューズと蹄鉄を買いに行こうと
考えていたからな。ついでにウオツカ君がどのように選んでいるのか興味がある。意
見が欲しい」

「バイク、タンデム……どんな服着ていこうかなあ。革ジャンで決めるとして……サン
グラスも欲しいな……うへへへ」

「ダメだ、聞いてないな」

○○○

というわけで午後から買い物に行くことになった。

制服から私服に着替えてから、ちよつとウオツカが好きそうな格好を意識する。多分
喜ぶだろう。

トレセン学園に密かに設えた隠しガレージから愛車を出す。メンテナンスも昨日の

うちに済ませている。

再度確認してからバイクを押しして歩き出す。

誰かに見つかると面倒だ。

私も可能なら、マルゼンスキー先輩のように一人暮らしをして堂々と愛車を管理したい。

あの人はどうやって管理しているのだろうか。

隠しガレージから出て学園の門へバイクを押ししているとエアグルーヴと鉢合わせた。

「むっ？」

「げ」

「……すみません。入校証を確認させていただいてもらってもよろしいでしょうか」

「……うん？」

私ということに気がついていないらしい。

今の私は格好はヘルメットを被り、サングラスに革ジャンにジーンズという格好だ。

確かにこれでは顔はわかりづらい。

とはいえ、生徒証はあっても入校証なんて持っているわけ……あるんだな、これが！

実はこっそり確保していつでも出せるようにしていた。

嘘だ。本当は母が学校に来た時に持っていったものを返し忘れていた。が、これもこの

ことを見越してということにしておく。

そもそもトレセン学園は業者の出入りが非常に多い。

そのため業者の名札の他にある入校証は簡素なもので、持ってさえいればよっぽど怪しい風体でなければパスできる。

私は安心して入校証を渡した。

「失礼しました。お帰りですか？」

「んんツ……ええ、そうです」

声を変えて対応するとエアグルーヴが気づいた様子はない。

「これはいけるかもしれない。」

「では……」

「校門まで見送ります」

ダメかもしれない。

私はバイクを押しながらエアグルーヴと並んで歩く。大丈夫、あと数十mの距離を誤魔化せばいいだけだ。

どうせエアグルーヴのことだ、むっつりとしてそのまま校門まで見送るだけだろう。

と、思っていたのだが、彼女は意外なほど気さくに話を振ってきた。

「失礼ですが、生徒の保護者の方ですか？」

もちろん、口調は普段と変わりないが、こうして話を振ることが珍しく見えた。

ひよつとして私には塩対応なだけでほかの生徒にはこんな感じだとか？

有り得る。

この前も栗東寮の監視カメラをジャックして脱走していたし、補習から逃げすぎて先生からトレーナーや生徒会に連絡されたりもしたからな……。

「ええと……ご存知かわかりませんが、グレートエスケープの……妹です」

「グレートエスケープさんの……」

母と名乗ろうかと思ったが母は何度かトレセン学園に来ている。

それに迷惑がかかるのは避けたい。ここは妹の名を騙ることにした。許せ、妹よ。帰ったらトレセン学園の近くにある有名なキャロットプリンを食わせてやる。

それはそうとエアグルーヴが自分の名に敬称をつけているのを聞いて背中がなんだかかゆくなつた。

礼儀として当たり前なんだけど。

校門の方を見るとウオツカが……いない。

まだ遅れているらしい。

そのためだろうか、よせばいいものを、私は急にエアグルーヴから見た私を知りたくなつてしまった。

「どうですか、わ、姉は……」

「素晴らしいウマ娘です。ダービーを勝利し、学園でも有数のウマ娘として知られています。トレーニングに余念がなく、それを手本にする後輩ウマ娘も多くいます」

これは他所向けの発言だな。

もう少し本音が聞きたくなってしまった。

きつと私に意地悪な質問をする記者もこんな気持ちなのだろうか。

「そうですか？　姉は昔はすごく足が遅くて。努力はしてましたけど……そんなに速くなるなんて」

「アイツが……昔から速いものだとはかり」

お、ちよつと言葉が砕けて興味を示しているらしい。

しめしめ。このままもつと聞いてみよう。

「正直姉がダービーを勝つなんて信じられないです。あの姉が……と。運が良かったんでしょうね」

「……いいえ。それは違います。彼女は、グレートエスケープは紛れもない実力でダービーを勝ちました。だからこそ、私はアイツとGIIレースで決着を望んでいます。……私のライバルは運だけで勝つような奴ではないのです」

……やばい、恥ずかしい。

まさかエアグルーヴがこんなに私を意識しているとは思わなかった。彼女はティアアラ路線に進み、オークスを制した。

同世代ではあるが今のところ戦う予定はまだないが、いずれは激突することもあるだろう。

「エアグルーヴ……さん、は、グレートエスケープのライバルなのですか？」

「……本人には言わないでくださいね」

そう言つて照れ笑いを小さく浮かべるエアグルーヴ。

なんだか申し訳ないような気がしてきた。

まだウオツカは来ないだろうか、周囲を見回した時、ちょうど寮からこちらに走ってくる彼女が見えた。

満面の笑みで、目がキラキラしている。

「おーい！ エスケープせんぱーいー！」

おいはかやめろ。

「……thc。」

隣に立っていたエアグルーヴが凍りつく。

じつとこちらを見つめて、上から下まで視線を繰り返し動かしていた。

「まずいな、これは」

「貴様……な……なんの真似だ……これは……？」

エアグルーヴが顔を真つ赤にしてぷるぷるしている。流石に私が誰だか気づいたのだろう。

本人を前にして本人に対する中々言えない想いを吐き出してしまった彼女の心情を考える、流石にからかうことはできない。

私は持っていたタンデム用のヘルメットをウオツカに投げ渡した。

「乗れ！」

「……！ ツ、つ、つつつ！！ はいッス！！」

目を輝かせながらウオツカが私の後ろに身を翻した。

こういうの好きだろうから、ちゃんと反応してくれると信じていた。

この瞬発力がレースでも発揮されているのだろう。

流石だ。

「待て、グレートエスケープ!!」

「悪いなエアグルーヴ！ このバイクは二人乗りなんだ！」

ウオツカが後ろから抱きつくのを確認すると、私はエンジンを吹かし、アクセルを捻った。

ウオツカと私の頭の中で流れるのは当然大脱走のマーチ。

TR6のエンジン音を響かせながら街へ繰り出す瞬間は何物にも代え難い多幸福感を生み出してくれる。

「今のアレなんスか!?! 超……超超超かつこよかつたつすけど!! 有無も言わずバイクで逃げ出す……オレもやってみてえ……!」

「帰った時にどうするか困ってるがな……とりあえずは買物とタンデムを楽しむとするか」

「ハイっす!」

ひとまずこの後のことは忘れて、ウオツカに愛車の素晴らしさを実感してもらおうとさらにスピードを上げるのだった。

しかし……これからエアグリーブと顔を合わせづらいな……。

×××

ジャパンカップまであと数日。

最終追い切りは栗東坂路で行うことになった。正直調教は嫌いじゃない。もちろん誰かを乗せるのはしんどいし、重いし、息も苦しくなるけどアスリートって感じでテンションが上る。

「調子よさそうだね」

併せ馬をしてくれたダンスパートナーさんが笑みを浮かべていた。

先日、エリザベス女王杯を制した彼女は勢いそのまま、ジャパンカップに出走することになった。黒井先生としては是非とも獲りたいタイトルなのかもしれない。

「ダンスパートナーさんの方はどうですか。疲れてないですか」

「ぜんぜん！　と言いたいけど……ちよつと忙しい気持ちもあるかなあ……」

苦笑いを浮かべるダンスパートナーさん。

今日の最終追い切りでは俺に先着を許す結果になったわけで、本調子ではないのだから。

「俺はすぐにでもレースがしたい気分です。なんででしょうね、ダンスパートナーさんの走りを見てから、胸が熱くて仕方ないんです」

「えへへ、嬉しいなあ……ジャパンカップは頑張ろうね！」

「はい。強敵も多いらしいですしね……」

調教スタンドにはマスコミが大勢押しかけてこちらにカメラを向けている。ちょうど並んで歩いているのもあって、まさにシャッターチャンスだろう。

ダービー馬とオークス馬の豪華な併せ馬はもちろん、ジャパンカップに出走するメンバーの豪華さによって注目度が増しているような気がする。

厩舎に戻ったら新聞を読まなくては。

「あ、少し待っててくださいね」

少し離れた場所に移動する。

調教スタンドに向けて自分のゼッケンが見えるように立ち尽くした。多分この角度が一番映えるはずだ。

追い切りに騎乗していたケンちゃんは特に動じることなく、のんびりと俺のアピールに付き合ってくれていた。サンキユー、ケンちゃん。

——世界の名馬に対して、日本馬が挑む！ 東京芝2400mGI、ジャパンカップには豪華な出走メンバーが揃った。

そんな見出しが書かれた雑誌を読み耽る。情報収集は大切だ。関係者の間でも、ジャパンカップのメンバーは豪華だと話しており、そのうちの一頭とされる俺も鼻が高かった。だからこそ、無様なレースはできない……いや、したくない。

今回のジャパンカップで日本勢は、現在古馬王道路線で三強とされるマーベラスサンデー、マヤノトップガン、サクラローレルは出走せず残念だったが、それらに見劣りしないメンバーが走る。

○グレートエスケープ……今回日本勢トップとして期待されるダービー馬。父アイネスフウジン、母父シンボリドルフと流行とはかけ離れた血統だがスタートで躓いた皐月賞を除き、全レースで複勝圏を確保しているまさに世代ナンバーワンのダービー馬。菊花賞ではダンスインザダークの猛烈な末脚に屈したものの、ダービーと同じ舞台でもう一度レコード勝ちを見たい。

(写真) 最終追い切り後に馬体を見せつけるグレートエスケープ

どうやら俺はかなり期待されているらしい。

今までなら嬉しさを感じるとともに、負けられないと思っただろうが、不思議と心は落ち着いている。

ジャパンカップの日まで、コンディションを整えるだけだ。

次のページには俺と同じくらい、大きく取り上げられているサラブレッドがいる。

○バブルガムフェロー……グレートエスケープと並んで外国馬に立ち向かうのがこのバブルガムフェロー。今年のクラシックを席卷したサンデーサイレンス産駒と同期で2歳王者だが、春は骨折で全休。しかし復帰後は3歳にして古馬の強豪を抑えて天皇賞・秋を制覇してみせた。2歳のころはグレートエスケープと東西の横綱として前評判を得ていた。この舞台で同期のダービー馬に本当の実力を見せつける。

バブルガムフェロー、春に対戦はできなかったがサンデーサイレンス四天王でも一足先にG Iを勝利した名馬。もちろん、こいつがダークやイシノサンデー、ロイヤルタツチより上とは言わないが、もしかしたら俺はダービーを勝つことができなかつたかもしれない。

決して容易い相手ではない。

そのほかにも様々なサラブレッドが紹介されている。

同世代のマイル王、タイキフォータン。秋華賞勝ち馬のファビラスラフィン、そして我が厩舎の先輩であるオークス馬、ダンスパートナーさん。

日本馬の主なメンバーは全体的に3歳馬と牝馬が挑むという構図。

続くページには海外馬が多く書かれている。

○シングスピール……パリ大賞、エクリプスSで2着、今年に入ってからカナディアン国際Sで初のG I勝利を決めるとBCターフで2着するなど実力上昇中。父はインザウイングス、祖父はサドラーズウェルズ。鞍上はイタリアの若き天才ジョッキ、フランクリン・アントリーニが騎乗する。

○ペンタイア……父ビーマイゲストは重賞勝ちまでだがその父は言わずと知れた大種牡馬、ノーザンダンサー。母父は欧州三冠を初めて達成したミルリーフ。勝ち鞍はアイルランドチャンピオンS、そしてキングジョージ（正式名称略）。社来（シヤライ）

フアームの代表である吉村輝夜（ヨシムラ・カグヤ）氏がオーナーの馬が日本へやってきた。今の日本競馬の立役者ともいえるオーナーの眼には日本で勝てるという未来が見えたか？

その他にも外国からサラブレッドの名前が並んでいるが、特に大きく取り上げられているのがエリシオというサラブレッドだった。

戦績には世界最高峰のレースのひとつである凱旋門賞を5馬身差でぶつちぎって勝利したとある。

まさに世界最強クラスの馬だ。

この馬が断然の一番人気になるだろう。

もしこの馬に勝てば俺は……世界最強のサラブレッドとして、扱われるだろうか。誰かに賞賛されることは嬉しい。

黒井先生やケンちゃん、厩務員の西京さんやスタッフたち、妹ちゃんにだつて褒められたい。橘ちゃんに褒められた時はもつと頑張ろうと思えた。

けど、それとは違う欲望が溢れ出し、今にも走り出したい思いで一杯になる。

ああ、そうか——これが『勝ちたい』ってことなんだ。

ダンスパートナーさん、ダンスインザダーク、そしてこれまで戦ってきた多くのサラブレッドたちを思い出す。

これまでは誰かの願いや思いに応えようと必死だった。

けど、今回のジャパンカップは、勝利のためだけに走ろうと決意を固めた。

○○○

「YO！ そのイケてる兄ちゃん♪ 声かけてるのはオレちゃん♪ この舞台で決まるのは最強じゃん♪」

ジャパンカップ当日のパドック。

調教を終えてからも調子を崩すことはなく、府中競馬場へやってきていた。

もちろんダンスパートナーさんも一緒だ。

「YO！ YO！ ついにやってきたジャパンカップ♪ お前が刻むのは精確なラップ

♪ それを破る俺はお前にとってのトラップ♪ YO！」

ですが、黒井先生……調子を崩しそうです……！

「ダービー出てりや俺が優勝、お前は凡将、大人しく引退してはどうでしょう♪」

目の前で突然ラップによる攻撃を仕掛けてきた謎のサラブレッド。

俺は瞬く間に目が死んでいく感覚を覚えた。

パドックを見ている観客は「わー、向き合ってるー」なんて暢気なことを言っているが俺からしたら宣戦布告やトラッシュシュートークよりダメージのある、名状しがたい精神攻撃を受けて、暢気してられない。

「グレートエスケープ、できるのは逃げることだけ！　なんか勝ったことあったっけ♪
YO！　逃げしかないイモ野郎、今日勝つのは俺だろう、その名こそバブルガムフェ
ロー！」

バブルガムフェローと名乗った目の前の奴はふう、と息を吐いた。

「とうわけだ。テメーにや負けねえ」

俺はロイヤルタツチやイシノサンデー、ダンスインザダークを思い出した。

初めて見たときもこんな感情を覚えた気がする。

懐かしさすら覚えながら、俺は絶叫した。

「なんでサンデーサイレンス産駒は頭のおかしいやつばかりなんだツツツ！」

「ちよ、ちよっと、エツちゃん、私は違うよ！」

パドックの離れたところからダンスパートナーさんの抗議の声が聞こえたがそんな
ことに反応する余裕はなかった。

バブルガムフェローはラップを歌い切って何故か得意げで、言葉をつづけた。

「テメーの戦績は同年代を相手にしているだけ♪　雑魚の中で持て囃されてるだけ♪
酔っているのは偽りの勝利の酒♪　勘違い野郎は田舎へGo a head！」

「……大概何言ってるかわからねーけど、ダークよりはマシだな……」

「お山の大将倒せば最強が誰かみんな理解♪　お前の栄光も破壊♪　偽りの称号はうる

さい♪」

言いたいことはなんとなくわかる。

だが俺にも譲れないものがある。こういうものは、舐められたら終わりなのだ。一度舐められたら、レースでも格下としての走りを強いられる。

俺はバブルガムフェローにガンを飛ばし、メンチを切った。体格は同じくらいで毛色も同じ、だからこそ対等とは思わず、自分が格上だと振る舞うように接する。

「一つ言っておく……お前がどんな奴を倒したかは知らないが、俺の戦った相手に雑魚はただの一頭もいない。よく覚えておけ、ガム野郎」

「その言葉が雑魚っていうんだよ……芋野郎」

「おいおい、俺を忘れるなよ」

俺とバブルでガンを飛ばし合っているところに割って入る馬がいた。

視線を向けると、どこかで見た覚えのある顔だ。

「お前らと同期のマイルスピード王……このタイキフォーチュン様をな」

タイキフォーチュン、今年のNHKマイルカップを制覇した3歳マイル王だ。

記憶には薄かったがラジオたんば2歳S、弥生賞と対戦したことがあったような気がする。だが、バブルガムフェローにとっては知らない相手だろう。

「フォーチュン……YO! YO! 冴えねえ兄ちゃんYO! ここは違うぜマイル、

なのに挑む身の程知らずさにこっちが参る♪ イエア！」

「なんだとコラあッ！ テメーッ！」

「見苦しいわ、おやめなさい」

「……君は？」

「ファビラスラフィン。以後、お見知りおきを。ダービー馬さん」

「礼儀正しそうにお辞儀をしてみせたのは今年の秋華賞を勝利したファビラスラフィン。
ン。

牝馬三冠路線に進んだ馬は大抵エリザベス女王杯に駒を進めることが多いのだが、
えて強豪が揃うジャパンカップに挑む豪胆さ。

穏やかな物腰の裏には誰にも負けないという勝気さが渦巻いている。

「ファビラス、お前、俺に負けてるくせにまた挑んできたのか？ リベンジマッチのつもりか？」

「興味ありませんわ。あのときはマイルで負けてしまいましたけど、あくまで私の本分は中距離。ここで勝って、本当の女王が誰か教えてあげないといけませんから」

「俺たちを見てねーっていうのか」

「貴方たちではなく、貴方です、見ていないのは。今日は古馬相手に天皇賞を勝利したバルガムフェローさんに、レコードタイムでダービーを勝利したグレートエスケープさ

んに挨拶に來ただけですわ」

「減らず口を……」

「HEY！ イカすねーちゃんよ……俺を相手に選ぶ眼は信頼！ でも芋野郎を同格に見るのは心外！」

「いいえ、同じですわ。勝者たる私にとつての敗者でしかないのですから」

「HEEEY！ 女でもナメてると俺ちゃんキレちゃうぜ！」

バブルガムフェロー、タイキフオーチュン、ファビラスラフィンが騒がしく言い合っている。こいつらが同期と思うと気が重い反面、クラシックもだいたいこんな感じだったことを思い出した。

「みんな喧嘩しちやだめだよ！ これからもうすぐレースなんだよ！」

止めに來たのはダンスパートナーさん。年上ということでも張り切っているのだろう。彼女はあまりそういうことに向いているタイプではない。

誰も言うことを聞かずにわーわーと揉めている。

そこに助け舟を出したのが、また別の競走馬だった。

「おいおい、やめようや。外国からのお客さんもおるんやで。あんまりみつともないところ見せたら、テキのおヤジさんに叱られるちゃうんか」

「HEY！ オッサン誰だYO！」

「オツサンて。てか、アンタはこの前も一緒に走ったやないかい。負けてもうたけどな」
「カネツクロスさん……」

「久々やな、ダンスちゃん。エリザベス女王杯はおめつとさん」

「あ、ありがとうございます……」

俺はまったく知らなかったが、ダンスパートナーさんが知っているらしかった。

「カネツクロスさんは何度か走ったことがあって、重賞を幾つも勝ってる馬なんだよ」

「ちなみに俺の親父は白い稲妻ことタマモクロスや！ グレートエスケープ、アンタは俺と同じ内国産種牡馬を父に持つ馬。仲良くしたかったんよ。よろしくな！」

「ああ、どうもよろしく……」

「じゃ、あいつら止めてくるわ。外国からのお客さんも呆れとるわ」

カネツクロスさんと挨拶をする。

そしてまだ言い争っている三人をカネツクロスさんが諫めた。

「ほら、いい加減にしとき。レースで決着をつけるのがうちらやろ」

「うるっせえぞこのバカ！」

「なんやとバカ言うほうがアホやねんこのアホ！」

結局日本馬は全員言い争いを始めてしまったようで、騒がしいのが3人から4人に増えただけになってしまった。

早くケンちゃんたち来ないかなあ。

「はっはっはっ。日本のサラブレッドは面白いね」

ゆったりと現在一番人気に推されているエリシオが近付いてくる。

その後ろに控えるようにして、シングスピールとペンタイアがこちらを値踏みするような眼光を向けていた。

「どうも、グレートエスケープです」

「君がこの国のダービー馬なんだね。私はエリシオ。よろしく、いいレースをしよう」

「……随分仲良くしてくれるんだな」

「うん？　当然だろう。僕はただ走るだけだからね。1着をとることが求められている。極東のこの地で、負けてなんかいられないんだ」

凱旋門賞を勝っただけあって傲岸不遜なのではないかと心配していたが、中々どうして勝気なやつだ。

笑みを交えているが眼はまったく笑っていない。

俺たちを見てすらいない。

ダークから見た俺も、こんな風だったのだろうか。だとしたら、めちゃくちゃ悔しくもなるというものだ。

じっと見返してもエリシオは興味も持たず、俺たちを見ているようで見えない状態

は続いた。

そんな俺の反応に対して後ろに控えていた2頭が割って入った。

「あまり睨むな。レースで走りづらくなるだろう」

「君はペンタイアか」

「ああ。今年のキングジョージを勝たせてもらった。不相応なのはわかっているが、運が良かったんだ」

態度は落ち着いているくせに言うことはいちいち卑屈だ。

そんなペンタイアを気にすることなくこちらに話しかけてくるもうもう一頭のゼツケンにはシングスピールとあつた。

「悪い悪い！ ペンタイアもエリシオも癖があるやつなだけど悪意はないんだ！ 君がここのダービー馬だね、よろしく。シングスピールっていうんだ」

シングスピールはずいぶんと気さくな奴だった。

外国からやってきた馬だから、長くは一緒にいられないがもう少し話してみたい、そんな気持ちが良い奴だ。

「よろしく。今日は負けないぞ」

「ああ。君たちは競馬後進国といわれているが、油断はしない。もちろん、エリシオにもペンタイアにも、誰にも負けない……勝つのは、俺だ」

力強い宣言に全身の筋肉がぶるりと震える。

目の前のこいつは今、5番人気だが前評判なんて気にせず、自分が最も強いと信じてこの場に立っている。

どんな奴にも負けない、自分が最強だというプライドが振る舞いに滲み出ている。ただの良い奴ではない。

そうこうしているうちに、ようやく騎手やテキがやってくる。

「よし、グレ坊。行くっしょ」

「一番強いレースをしてこい。今日一番強いのはこいつや」

ケンちゃんか俺に跨り、黒井先生が声をかける。

この二つがあるといよいよレースなんだ、と気合が入る。

そんな俺に妹ちゃんが近づいてきた。

「……？」

「……グレくん」

俺のことはそうやって呼ぶのか。

グレつちの響きも大好きだったが、これもまたなんだか気分がいい。

妹ちゃんは俺の額を優しく撫でた。

ぎこちなくて、厩舎スタッフや橘ちゃんと違って、恐怖感や警戒心も感じている。

それでも撫でてくれるのは、歩み寄ろうという意味なのだろう。

俺は彼女を怖がらせないように気をつけながら、顔をこすりつける。

うーん……橘ちゃんとは違う香り。

「……怪我しないでね」

心配そうな表情の妹ちゃん。

怪我は確かに怖い、大怪我で引退とか予後不良なんてしたくない。

だからといってビビって走らない気なんてさらさらなかった。

元は人間だろうと、今の俺はダービー馬『グレートエスケープ』だ。

勝利を必ず掴んでみせる。

『世界からまたしても名馬が集結しました。それに挑むは超新星と女王たち！ 第16

回ジャパンカップの本馬場入場です』

どうやら一番最初に入場するのは俺らしい。

そういうえば、東京競馬場に来るのは日本ダービー以来だったな。

あのときは盛大に立ち上がって大歓声を起こさせたっけ。

「ケンちゃん、アレやっていいかな？」

「頼むからやめてくれよ……あの時は落ちるかと思ってヒヤヒヤしたんだから……」

「わかった、やめる」

「まあ、もうやらないよな？」

まるで通じているかのような会話になったが、もちろん言葉は通じていない。

けど、俺とケンちゃんの間言葉は要らないはずだ。

俺は自らの馬体を晒して大歓声を一身に浴びた。

『皆さんの記憶にも新しいでしょう。春に見せた衝撃のスピード、レコードタイム。ダービー馬がここに帰ってきました！1枠1番グレートエスケープ！馬体重は498kg、プラス10kgです。単勝オッズは3.9、現在1番人気』

「グレスケー！頼むぞおお！」

「あのときの感動をもう一度見せてくれ！」

「凱旋門賞馬に負けるな、日本代表はお前だー！」

「また給料全部賭けてんだ！菊花賞の分を取り返してくれえー！本当に頼むからー！」

「キヤーーツ！かっこいいー！！」

「梶田くん！！こつち見てー！！」

男たちの欲望渦巻く叫びの他には、女性客からの黄色い声援も聞こえた。俺に対する声援だけでなく、ケンちゃんに対する声援も入り交じっている。

ダービーを勝って以来、ファンが増えたとニヤニヤしていたのを思い出した。

むむむ、俺の方が人気なんだからな！……なんてな。若き天才ジョッキーが俺の背に乗っているんだ、嬉しいに決まっている。

でもちよつと悔しいのでファン増やしてくるわ。

「あつグレートエスケープこっちきた！」

「ほんとかつこいいい！」

「でええなあ……馬体重も前走もより増えてるし、平気か？」

「ダービーはもう少しあつからな。むしろこの前が絞りすぎてたんじゃないか？」

「……いつまで歩いてるんだ、グレートエスケープは」

「さあ」

みんなに見せびらかすように芝をばかばかと歩く。

盛り上げて、グレートエスケープという名前を日本中に、世界中に轟かせてみせる。

(橘ちゃんにも届くような、すごい馬になってみせるからさ)

世界最強がすぐ傍に来ているのだ、これはまたとないチャンスとすら言える。

馬場にはエリシオが離れたところを歩いている。続いてペンタイア、シングスピール、ストラテジックチョイスなどなど、外国馬が堂々とターフへ登場していた。

(絶対に勝つ……！)

眼光を飛ばし、俺は返し馬で最後のチエックを行う。
世界最強に挑む戦い、ジャパンカップがもうすぐ始まる――

〈上位人気馬 単勝オッズ〉

- 1 番人気 グレートエスケープ 3・7 倍
- 2 番人気 エリシオ 3・8 倍
- 3 番人気 バブルガムフェロー 4・0 倍
- 4 番人気 ペンタイア 7・5 倍
- 5 番人気 シングスピール 9・1 倍

『今回は第16回ジャパンカップ、人気は3頭が少し抜けています。まずは外国招待馬についてお聞きします。解説の安藤さん、如何ですか。やはり凱旋門賞馬のエリシオですか』

『過去の凱旋門賞馬はいずれも凡走しているんですが、この馬はまだ3歳でローテーションにもゆとりがあります。先行するタイプなので展開にも左右されず、地力を発揮してくれると思いますよ』

『続いてキングジョージを制したペンタイアに、BCターフで2着のシングスピール……錚々たるメンツに対抗する日本代表格はやはりこの2頭ですね』

『同じ日本代表でも対照的です。片や日本内国産馬の血統を持ち、クラシックを戦い抜いたダービー馬。片や春は全休し、古馬を相手に戦った今をときめくサンデーサイレンス産駒。サンデーサイレンス産駒は今年の牡馬クラシック3戦のうち2勝、この前のエリザベス女王杯でもダンスパートナーが勝っていますし、ノリに乗っていますよね』

『その中で安藤さんの本命はバブルガムフェロー、と』

『鞍上の岡谷騎手は2400は初めてだけど大丈夫と言っていましたしね。馬体もすごく良く見えます』

『3歳馬が世界を打倒するのか、世界が実力を見せつけるのか。ジャパンカップのファンファーレです』

ファンファーレが鳴り響く。

関東のGIで演奏されるこの曲は皐月賞での苦い敗北と、日本ダービーでの輝かしい勝利を思い出させてくれる。

このレースが今年最後になると黒井先生は言っていた。

ありつたけの気合いを込めて、全力で勝ちに行つて、その後は故郷の牧場で休養タイムだ。

「だから、思い切り走れるな」

ゲートに大人しく収まると観客の歓声が一際大きくなる。

息をフツと吐く。

橘ちゃん……ダーク……ダンスパートナーさん……少しだけ、自分のために走るとい
うことがわかった気がする。

俺は今、心の底から叫んでいる。

(勝ちたい)

って。

『全頭収まりました第16回ジャパンカップ、スタートしました！ 流石に選ばれた優
駿たち、16頭の揃った綺麗なスタートです』

ゲートが開けば内枠の利を活かしてスピードをつけて先頭まで走る。

「オラオラーツ、どいとけやあ！ ハナは俺が切るんや！」

外からカネツクロスさんが切れ込んでくる。

展開次第では逃げると言われていたエリシオは控えて3番手か4番手といったところ。
ろ。

人気上位の有力馬は揃って先行している。

向正面に入る頃には馬群がやや伸びきっていた。

緩みないペース、かといって今回はハイペースではない。

『先頭は1番のグレートエスケープです。ダービー馬が果敢にハナを切ります。2番手

に14番カネツクロス、稲葉がいきます。凱旋門賞馬エリシオは3番手、好位につけています。4番手にファビラスラフィン、続いてバブルガムフェローはここ、5番手にとりついています！ グレートエスケープは前半1000mを59秒から60秒で経過、これは平均ペースです』

すごい圧だ。

経験が浅い奴もいたクラシックとは違う、全員がグレードレースで戦ってきた百戦錬磨であり、同じ3歳馬でもGⅠで勝利するような馬しかここにはやってきていない。

後ろから俺を狙う威圧感がびりびりと背中と脚を痺れさせる。

まともな精神だったらかかってさらに逃げようとしていただろう。

「ダービー馬さんや！ もっと逃げなくてええんか？ 緩いペースやなあー！」

「うるせーですよ！ 逃げたきや逃げりやいいじゃないですか！」

「へっ、俺のスピードでは結構しつかり逃げてるつもりなんや！」

カネツクロスさんが言葉でつついてくる。

彼の単勝オッズを見るに、GⅠでの勝利はまだないのだろう。走りを見ている、なんとなくほかの馬と比べて一段落ちるように見えた。

それでも自分が勝てるように手を尽くしている。

カネツクロスさんだけじゃない。

ほかの馬全頭が勝ちたいと願って走っているのだ。

「それでも負けない……勝つのは俺だ！」

大櫓を超えて最終直線へ。ここまで緩みないペースで走ってきた。

あとは地力勝負だ。

ケンちゃんの合図とともに手前を変えてスパートをかけた。

『最終コーナーに入り先頭はグレートエスケープ！ 1馬身と抜け出した！ エリシオ、ファビラスラフインが追ってくる！ さらに内からシングスピール！ 残り400を通過、先頭は依然グレートエスケープ！』

「このままいっちゃまえ、グレ坊！ 頑張れ！」

バカ言うなってケンちゃん。

とつくに頑張ってるよ。

後ろから凄まじい馬蹄の音が圧力になって俺を駆り立てる。

「クソツ……芋野郎が……なんであんなに速えんだ！」

「待てよジャパニーズ……ダービー馬！ お前に世界の称号は与えられない……！」

「私は勝つのです。見るものに証明してみせるの、女王は私、ファビラスラフインと！」

エアグルーヴなどではないのでしてよ！」

「逃がしてたまるかッ！ 善戦続きだろうと……勝たなきゃ意味ないんだ！」

後続からの怨嗟にも似た、追い込みがすぐ側まで迫っている。

恐怖すら覚える熱気にこのまま横へ逃げてしまいたくなるが、そんなことはしてられない。

偉大なる逃走の逃げ道は目の前に一本道ががっぽり広がっているんだ。

最適な逃走経路は目の前のまっすぐ、ただ一つ！

「エツちゃんがんばれーっ！ そのまま行っちゃえー！」

ダンスパートナーさんの声。

俺は再び手前を変えて息を思い切り吸い込んだ。

「うおおおッ！」

『残り200、先頭はグレートエスケープだ、グレートエスケープだ！ バブルは伸びない！ エリシオは届かない！ ファビラスは追いつかない！ シングスピールは捉えられない！ 見たか世界！ これが偉大なる逃走者だーッ！』

全力を出し尽くしたあとの倦怠感、不思議なほど気持ちよかった。

これが勝利の味。

勝ちたいと願って、満たされたこの想いはどこまでも爽快な味だった。

『グレートエスケープ、勝ちタイムはなんと2. 23. 4！ ダービーレコードより早く逃げ切ってみせました！ 恐ろしい3歳馬、まさに最強のダービー馬です！ アス

コットへ、ロンシャンへ！ 日本血統の夢を見せてくれる走りでした！』

レース後、一番に近づいてきたのはダンスパートナーさんだった。

「エツちゃんおめでとう！ すごいよ！ 一番に逃げ切つて、私も走らなきやいけなかったのに応援しちゃつて……とにかくすごかつた!!」

「ありがとう、ダンスパートナーさん。……直線での声援で、力が湧いてきたよ」

「き、聞こえてたんだ……なんだか嬉しいなあ」

はにかむダンスパートナーさん。

彼女は中一週で決して楽なコンディションではなかつたはずだ。もしも叶うなら、本気の彼女と走つてみたいという気持ちが湧いてきた。

「グレートエスケープ！」

「シングスピール……」

「今日は俺の負けだ。最近中々勝ちきれなくて悔しいが……諦めないからな。そしてまたいつか、走ろう！ ジャパンカップか、ドバイか、ヨーロッパかはわからないが……」

「俺は——」

なんて答えようか少しだけ迷つてから、ダークのことを思い出した。

「——次も勝つ。負けないからな」

シングスピールは嬉しそうに笑つた。

「グレートエスケープ。君は……L, Arc (凱旋門賞) には来るのか？」
そう声をかけてきたのはエリシオだった。

凱旋門賞——それは、日本のホースマンがいつかはと夢見てきた欧州で最高峰のレース。

五冠馬シンザンを超えろ、と馬を生み出し、皇帝シンボルドルフを生み出してからは世界を制覇しろと日本のホースマンたちは目標をステップアップさせてきた。

その中で具体的な世界最高峰の舞台とされている。

もちろん、俺が出たいと言ったところで出してもらえないような場所ではない。

そもそも凱旋門賞なんて考えたことすらなかった。

俺が難しい顔をしていると、エリシオは笑った。

「もしも叶うなら、その舞台でリベンジをしたい。楽しみにしているよ」

エリシオはそう言って去っていく。

そこへバブルガムフェローが俺に噛み付く。もちろん、比喩だ。

「YO! YO! なにが凱旋門賞、リベンジマッチはどう? まだてめえにや負けられない俺参上!」

「……すまん、よくわからない」

「カツ! 覚悟しておけつてことだよ芋野郎! 凱旋門賞に行く前にテメーに100倍

でやり返したるってことだ！」

「あら、はるか後方で負けていた殿方の言葉とは思えませんわね。おめでとうございませ、グレートエスケープさん。私もいつか貴方に勝ちたいですわ。貴方のような素敵な方となら、また走っても熱い戦いが出来ると思いますが」

「フアビラスラフィン……素敵な、って。けど、次も俺が勝つてみせる！」

フアビラスラフィンも、バブルガムフェローも。エリシオ、シングスピールといった馬たちにも、負けない。

俺は勝ちたいという思いを知ってしまったのだから。

これからも、走り続けて、勝つてみせる！

ほかの馬たちが引き上げても、俺は——いや、俺たちはまだターフに残っている。栄光を掴んだことを知らせるためのウイニングランが、これから始まる。

芝生に戻って走ると、ウイニングランでは鞍上への梶田コールが鳴り響く。

俺の名前は少し呼びづらいから叶わなかったけれど、同じくらい嬉しかった。

口取り式ではガチガチに緊張した妹ちゃんがトロフィーを受け取っている。

そりゃあそうだ。

いきなり日本でもトップレベルの馬を持つ馬主になって、表彰されて平気ではいられない。

橘ちゃんはそのへんヨユーそうだが。

「……グレくん」

妹ちゃん。どうだったかな？ かつこよかっただろ？

「……すごかった。ドキドキした。かつこよかった！」

興奮冷めやらぬといったふうには、俺をべたべたと撫でる妹ちゃん。俺は大人しく撫でられながら、誇らしい気持ちでいっぱいになったのだ。

——こうして、俺の3歳シーズンは終えた。

皐月賞での敗北、日本ダービー、橘ちゃんの死、ダンスインザダークとの戦い……そしてジャパンカップ。

1年が濃密で、何十年も生きてきたような錯覚に陥る。

それでも、俺の競走馬生活はまだまだ続く。

どこまでいけるか……まだまだ走り続けてみたかった。

翌年、俺が最優秀3歳牡馬と、年度代表馬を受賞したことでケンちゃんや黒井先生、妹ちゃんが表彰された。

表彰式には、橘ちゃんの写真も連れて行って貰えたと聞いて、俺は自分を誇らしく思えたのだった。

第16話 休息

牧場はいいなあーッ！

青い空にどこまでも（柵まで）続く芝生、そして爽やかな北海道の風。

今、私は故郷の懇備式牧場で放牧に出されてまーっす！ いえーっす！

「ヒマだーっす！」

芝生に寝転んで俺は叫んだ。

柵の外からこの牧場に見学に来た観光客が何人もいるはずだが、今は年末、しかも真冬の北海道。

懇備式牧場は俺のせいかちよとしたバブル状態で観光客から上手いこと収入を得ているらしかったが、流石に今はやってくる観光客なんていない。そりやそうだ。

それで儲かるなら是非とも利用してもらいたいし、俺も故郷が稼いでくれるに越したことはないが、天候には敵わないのだ。

放牧されたばかりの頃は女性客にはサーブスとしてポーズ決めたりしていたけど、今はそれすらいないのでとても退屈だ。

厩務員のアんちゃんから渡されたガーガーチキンは2時間で飽きた。

「こんなに暇じゃ頭も腐っちゃまうよ。なあ、ファストよ」

「プペエ！」

「だよなー、そう思うよなー！」

「ファアーツ！」

「うるっせえわ!!」

俺はガーガーチキンを唾えて放り投げた。アアアア！なんて間抜けな声を出してぼとりと地面に落ちた。

ファストと名付けられたガーガーチキンこと俺の新しい友達（フレンド）はすぐに絶交となつてしまった。

それにしても退屈だ。

休みという名目で放牧には出されたが、走るしか楽しみがないのは元人間の脳には少しきつかった。

もちろん芝生を走り回るのは好きだがそれだけでは飽きてしまう。

「はアアアアアア！ 突然ウマ耳美少女化して可愛い女の子とキャツキャウフフできるようにならないかなアアアア!!」

無理だろ。

自分で突っ込んでしまうくらいには、暇だった。

年度代表馬になった昨年はまさに激動の一年だった。

黒井先生は可能なら有馬記念も考えていたらしいが、流石に負担が大きいということ
で回避。

ファン投票では一桁順位だったが、それで怪我したらそれこそアウトだ。

というわけで春の復帰を目指して放牧に出た訳だが、やはり暇だ。

「兄上！ 兄上！ 今のは何でしょうか！ 私にも見せていただきたいです！」

「俺の友達だ。名前はファスト。いるか？」

「是非に！」

そおい！ 俺はガーガーチキンを啜えて隣の柵へ目掛けて放り投げた。

オアアーツという叫びとともにファストことガーガーチキンは柵にぶつかつた。

ファストは届かにやい！

「ごめん、届かなかつた」

「いいえ！ 見事な投擲でした兄上！」

「そうか。お前がいると自己肯定感の上がり幅がすごいよ」

「ありがとうございます、兄上！」

隣の放牧地で過ごすのは一つ下の俺の弟（父は違うから半弟になる）で名前は『ブレー

ヴステップ』という。

父は欧州を震撼させた末脚を持つ勇者、ダンシングブレーヴ。

別の厩舎に所属し、去年にデビュー。

新馬戦は2着だったがその後に勝利を挙げ、今は2勝目とクラシックを目指している最中だという。

直接顔を合わせたのは今回の放牧が初めてで、そのときからこいつはやたら懐いていた。

「兄上のようなダービー馬になります！」

と、目をキラキラさせていた。

俺としては応援することしかできないが、兄弟でダービー制覇できたら素晴らしいことだと思う。

是非とも達成してもらいたいものだ。

ちなみにさらにもう一歳下に妹がいるが、足元が弱くデビューするかどうかは未定らしい。懇備式牧場で繁殖牝馬になるかもしれないと話していたのを聞いた。

デビューすらままならない世界だと改めて身が引き締まる思いだ。

が、しかし。

「やっぱり暇だなア……」

テレビの撮影も放牧された当初はあったが、大して撮られずに終わってしまった。

オンエアを見たらほとんどレース映像と関係者に対するインタビューで俺の出番はなかった。

牧場主や馬主の許可がなんとかといってたから、本当に映像の撮影だけしかしなかったのだろう。

俺を守るためというのもあつたんだろうが、嬉しい半面やはり出演してみたかった。番組内容はなんだか感動ドキュメンタリー風だった。ファンが増えてくれたらとても嬉しい。

「くっそー、事務所に忍び込んでPCやってもインターネット黎明期で全然面白いもんねえしよお！フラッシュ動画ですらまだ全然出てきてないってあの時代の俺はどうやって生きてたんだ」

芝生に寝転がってじたばた。

隣の放牧地では弟たるブルーヴステップことブレちゃんかガーガーチキンでアヒョアヒョと音を鳴らしている。

TwitterとかティコティコタックじゃなくてTikTokに挙げたら人気出るだろうな。

「兄上！兄上はもう最強のサラブレッドなのですか!? 先のジャパンカップでは2着に2馬身差をつけて勝利とありました。もう日本に敵はいないのではありませんか!」

俺は少しだけ考えてから、ブレちゃんという言葉を否定した。

「まだ強い奴らはたくさんいる……俺が最強と呼ばれるようになるには、まだ早いよ」
今回のジャパンカップで確かにグレートエスケープが現役最強馬として持て囃されるようになった。

しかし、俺たちの世代のひとつ上にはまだ三強と呼ばれる馬たちがいる。

まず、サクラローレル。

昨年は天皇賞・春と有馬記念を制覇した三強の一角。年度代表馬の選考会議では俺とこのサクラローレルが票を分け合ったと聞く。

いずれは凱旋門賞も目指しているとか……。

次に、マーベラスサンデー。三強の中では遅れてやってきた大物という扱いで、去年は重賞を含めて6連勝を記録した。

そのため有馬記念では三強に数えられ、2着。来年こそはGIを、と執念に燃えている。

そして三頭目は、マヤノトップガン。

ここまで菊花賞、有馬記念、宝塚記念を制覇している去年の年度代表馬。

春のクラシックにこそ遅れたものの、ナリタブライアンとの死闘や変幻自在の脚質で名を馳せている。

ステイヤーとしての資質に富んでいて、間違ひなく来年ぶつかるであろう相手だ。

「兄上が倒すべき相手はその3頭なのですね！」

「こいつらだけじゃない。バブルガムフェローだっているし、この前にはフアピラスラフィンに教えてもらった相手だって強敵だ」

「いつの間に秋華賞馬のお嬢様とお知り合いに……流石です兄上！」

「ジャパンカップでメアド交換したんだ」

フアピラスラフィンは有馬記念で10着で敗れたあと、怪我で引退することになってしまった。

また一緒に走れなくて残念だったと言うと「また会える気がしますわ」と返ってきた。どういいう意味だろうとダンスパートナーさんに相談したら「知らないっ」と怒らせてしまった。

馬心はよくわからない。ジョッキーにはなれそうもなかった。

「ラフィー（愛称はそう呼べと言われた）が言うにはオークスを勝ったエアグルーヴがすごいらしい。一緒には走れなかったが、牝馬でありながら牡馬にも負けない強さがあるって」

「エアグルーヴ、ですか。確か秋華賞では大敗してその後は骨折で休養していると聞きますが」

「よくわからんがすごいらしい」

「どんな牝馬なんでしょう」

俺は普通に言うのもつまらない気がして、冗談めかして言った。

「きつとばんえい馬よりも大きくて、車よりも速いんだろう。すごいんだからな」

「それは……すごいですね」

「強敵だ」

「強敵ですね」

真面目な顔をして頷くブレちゃんに対する笑いを堪えるので精一杯だったが、反対に心配になってしまった。

×もう少し疑ってもいいと思うんだ……。

×

×バイクを走らせている間はウオツカと話をしていた。

「バイクはやっぱ最高だなあ〜！ グレ先輩はよくツーリングはするんスカ？」

「最近忙しくてあまり乗れていないがね。時々こいつを走らせて色んな場所に行く」

「うおお、いいなあ〜！ でもタンデムなんてする相手いないんじゃないすか？」

しばらく走ると信号にたどり着き、そこで止まった。記憶を探ると、確かにほとんど後ろに乗せたウマ娘はいないように思える。

強いて言うなら、学園に来た母を駅まで送り迎えしたくらいか。

「あ、メジロのお嬢を乗せたことはあるな」

「メジロの……って、マックイーンすか？」

「ああ。お嬢の他には、ドーベルちゃんも乗せたこともあったかな」

信号が青になり、手首を捻る。

重低音を響かせながら走り出すトライアンフは、心を突き抜ける爽快感を味わわせてくれる。

ウオツカもしきりにこのバイクを褒めてくれていた。

素直に感情を出すやつなので、こういうとき中々楽しくて、ついついまた誘ってしま
う。

「でも意外つすねー。マックイーンたちと知り合いだなんて」

「ドーベルちゃんはたまたま目的地が一緒だったから送ってあげただけだが、お嬢……
マックイーンは話すことはそれなりにある。きっかけはなんだったかな……」

「もつと意外なのはグレ先輩がめっちゃ安全運転なことですけど」

「未来のライバルが乗ってるんだ。転けて大怪我でもしたら大変だろう」

「でもかつ飛ばしたくないんスか？」

「そうだな。そういうときもあるが、私たちにはこれがあるだろう？」

私は自らの太ももを軽く叩いた。

バイクで走ることももちろん気持ちいいが、やはりトレセン学園にいるウマ娘、自らの足で走る快感には代え難い。

「つく〜！ その通りつすね！ くあく、やつぱかつこいいなあ〜！ バイクなくても走りやいいんですよね！」

「そういうことではないが」

府中駅近くのショッピングモールに到着すると、最初に向かったのはシューズや蹄鉄を売っているトレセン学園のウマ娘御用達のスポーツショップ。

ウオツカと並んでシューズのコーナーであれこれ見て回る。

「ちなみにウオツカはシューズはこのメーカーをよく使うんだ？」

「もつぱらアビダスつすね。グレ先輩はG I走ってるしメーカーからスポンサー契約があるんじゃないすか？」

「シューズはアンダーウーマーとスポンサー契約をした。レースではメーカーのオーダーメイドのシューズを履いている。そもそも勝負服に合わせて作られているからな、G Iに出るウマ娘によって契約内容はまちまちだが、基本的にオーダーメイドのシューズで走る」

「へー、じゃあ今日買うのはトレシューつすか？」

「メーカーから貰えるものもあるが、トレーニング用はすぐ履き潰してしまいうからな……買うというよりは色々試して、メーカーの担当者にまた依頼するという形になる」
GIで走る際に着る勝負服はメーカーにデザインの希望などを提出する。このとき、細かく指定するか要点だけ指定するかはウマ娘によって違う。

靴も勝負服に含まれるので、ここに対しては私は細かく依頼した。

レースでGIで走ったり、重賞でも上位に食い込むような実績を残すとスポンサーがついてくれる場合がある。

私はそれを利用してシューズはオーダーメイドのものを用意してもらっている。

ウオツカはまだデビュー前だから基本的に自分で購入することになるだろうが、彼女はすぐにスポンサーが殺到するだろう。

「グレ先輩はこだわりあるんですか？」

「ないウマ娘の方が珍しいだろ……少しでも違和感があつたらそれは使わないな。シューズに関しては妥協しないようにしている。インソール、幅、靴底の厚さや柔軟性……下手なものを使えば怪我のリスクも高まる」

「やつぱりあれこれ考えるのは大切っすよね……」

シユン……とウオツカの耳が垂れ下がる。

どうかしたのかと尋ねると照れ隠しに笑いながらウオツカは言った。

「オレ、シューズのことは見た目しか考えてなかったな……浅い所だけしか見てねーのは、ダセエっすよね……」

私はウオツカのケツをばちんと叩いた。

「ウオアツ!? なにするんスか!？」

「別に悪いことじゃあないだろう。ウマ娘は走ることで夢を与える。見た目に気を使つて、かつこよく勝つことだつて大切だろう」

そこまで言つてから、自分でなんとなく気がついた。

何のために走るのか、悩んでいたが、これはそれに近い事柄なのではないか、と。

ずっと自分のために走つてきて、菊花賞では他の人のために走つてきたウマ娘に敗北感を覚えさせられた。

観客やトレーナーのために走るというのは……それほど強い力を与えるのだろうか。

考え込む私に気づかず、ウオツカは笑顔を浮かべた。

「……そう、ツスよね……やつぱりかつこよくねーと、ダメっすよね! グレ先輩、あざっす! オレ、今回シューズはこれにするっす!」

「……ああ、いいじゃないか。私も、悩んでいたことに少しだけ光が見えた気がする」

「え、悩みがあつたんすか!? どんな?」

「ふふふ、ウオツカにとつてはすぐく些細なことかもしれないからな。秘密にさせてもらうよ」

「えー!」

「代わりにそのシューズ、奢るから勘弁してくれたまえ」

「ま、マジっすか!?! ありがとうございますッ!!」

ウオツカが選んだシューズと替えの蹄鉄やメンテナンス用品を購入した。

中々大きな出費だったが、走る意味ということに対して、少しだけ気づくことがあった……気がする。

バイクを片付けて、部屋に戻る頃にはだいぶ遅くになっていた。

無論、門限をオーバーすることはなかったでのんびりと寮の自室へ向かう。

現在同部屋の子は遠征中なので一人を楽しむことが出来る。

スポーツ用品を買ってきて開封し、使う時を想像しながら仕舞うのが何より楽しい時間なのは諸君にもわかってもらえらるだろう。

私は部屋の扉に鍵を差し込んだ。

開いている。

ルームメイトは鍵を閉め忘れるようなタイプではない。それにいつも鍵をキチンと閉めている。

遠征は無しになったのだろうか。

ガチャリとドアを開けた。

「遅かったな」

バタン。

知らない女帝がいた。

部屋を間違えたのかと思い、番号を確認するが間違いなく自分の部屋だった。

もう一度開ける。

「……何故入らない。入れ」

「あの、何故エアグルーヴさんが」

「入れ」

「はい」

何故かエアグルーヴが椅子に腰掛けている。

私は椅子に座って足を組む女帝の前に正座を組んだ。

「何故頭を上げている？ 貴様にはすべきことがあるだろう」

ヒエッ。

私はそつと土下座の姿勢をとった。

どうしてこんなことに……！

「グレートエスケープ。貴様は自分のしたことを理解しているな？」

「いつ、いえ、まったくもって見当もつきま」

「黙れ。貴様に発言権は許していない」

ヒエツ。

私はひたすらに平伏して、嵐が過ぎ去るのを祈った。

多分昼間のことが恥ずかしくて、ちよつと怒っているだけのはずだ。

決して騙すつもりは……あつたけど、ちよつとだけだ。不可抗力だ。許してくれ。

「貴様は今、頭を下げていればなんとかなると思っているな？」

「いや、その、そんなことは……」

「私の言うことを否定するのか？」

「エエツ!？」

これももう言い逃れる余地がない……つてコト!?

まずくない？

「なにがまずい？ 言ってみろ」

無惨様ですか？

私は恐る恐る手を挙げた。

「お、恐れながら申し上げます閣下」

「副会長だ」

「わ、私めにはとても見当がつかず……か、閣下のお怒りの理由がどのようなものか……わ、わかりませぬ……」

「ほう。ならば自分は自らの行いを省みることもできぬ愚物です、と言ってみ」

「自分は自らの行いを省みることもできぬ愚物です！」

「早いな。いいだろう……まずは入校証の不正所持だ。申し開きはあるか」

「い、いいえ！ あれは不正所持ではなく」

「貴様は私の言うことを否定するのか？」

ヒエエツ弁明の余地なし！

だが入校証くらいなら余程悪質じゃなければ大した罰にはならないはず……。

「あとはバイクの不正所持だな。届出がない以上、トレセン学園に駐車することは許されない上にガレージの違法造設。これにはバイクの売却などで対応する必要があるな……」

「すみませんバイクだけは勘弁してください」

私は必死の土下座を繰り返し、なんとか再度バイク使用許可の届出の提出と奉仕活動と反省文まで減刑してもらった……。

第17話 UNLIMITED IMPACT

「凱旋門賞へ行きます」

黒井先生が俺の馬房の前に集まったケンちゃん、厩務員の西京さん、そして妹ちゃんへ向けてそう宣言をした。

「今年の大目標はここや。まずは日経賞から復帰して天皇賞・春、宝塚記念を獲る。その後はフオワ賞で叩いてから凱旋門賞へ乗り込むで」

「日経賞……ですか。わざわざ関東に行くのはなんでなんスか？ 叩きなら阪神大賞典でも良さそうッスけど」

「凱旋門賞の後は有馬記念かジャパンカップを考えてるからや。日経賞は有馬記念と同じコース、ここの走りを帰国後の参考にするで」

真剣な顔つきで質問するケンちゃん。彼にとつては俺が一番のお手馬のはずだ、そりゃあ気合いも入る。

妹ちゃんは所在なさげにしている。競馬知らなければよくわからないよね。

俺は首を伸ばして妹ちゃんに甘えた。

妹ちゃんは戸惑いながら俺を撫でてくれた。

大丈夫、別に仲間外れにしてるわけじゃないから。

「橘さん……それでええですか」

「わ、私にはどういうことかよくわからなかったんですけど……凱旋門賞、が世界で一番すごいレースなんですよね？」

BCクラシックやドバイWC、キングジョージなど色々あるが確かに世界一のレースといつても差し支えないだろう。

黒井先生やケンちゃんも、西京さんも頷いた。

「……グレくんが、グレートエスケープが、海外に行つても……大丈夫なんですか？」

「100パーセント安全とは言えません。ですがこいつは頭のいい馬や。アホなことはしない。もちろん、万全の状態で送り出しますし、万全でなければ凱旋門賞には行きません」

「だったら……私から言うことはありません。よろしくお願いします」

妹ちゃんは深々と頭を下げた。

決して心を開いてもらった出会いではなかったけど、今では俺のことを心配してくれている。

彼女には頭が下がる思いだ。

お辞儀をするとまた撫でられた。嬉しい。

……最近、自分が馬の仕草とかしても違和感を全く感じないどころか人間だったことも忘れつつある。

大体3か4年くらい馬やってるんだもの、そりやあ忘れる。

「健二！ お前下手な騎乗すれば凱旋門賞では乗り替わりやからな、覚悟して乗れよ」

「当たり前っすよ」

平気そうな顔をしているがケンちゃん、俺にはわかる。

鞍上交代は嫌だっつて顔だ……。

『——以上、第45回日経賞のパドックでした。解説の岡部さん、如何でしたか』

『やつぱり去年のダービー馬、グレートエスケープが一番良く見えますね。去年のダービー以降、少し体重が減っていましたが今回はダービーのときと同じ体重まで戻っています』

『今回は512kg、前走から14kgの増加ということになりますが、これは成長分と？』

『トモの張りや歩容も抜群ですし、風格は充分です。久々ですけど落ち着いていて、入れ込んでる様子ありませんね』

『単勝オッズは現在1.5倍で1番人気です』

パドックを回りながら脚元を確認する。

調子は文句なし。自分のレースは問題なくできるだろう。

こうなるとあとは相手次第なところもあるが……ほかの馬たちからの睨みつけているとすらいえる視線が、度々俺へ向けられる。

抜けた1番人気故に当然、マークはされるだろう。

俺が1歩歩く度にぎろりと他馬の視線が向く。

『対抗とされるのは2番人気、ローゼンカバリーでしょうか。4歳馬です。去年、春のクラシックは間に合わず条件馬でしたがセントライト記念を勝利して菊花賞へ駒を進めました。そこでは11着と敗北しましたが年末の鳴尾記念では4着。明け4歳初戦のAJCCを勝利、中山記念では3着と安定しています。今年が楽しみな馬ですな！』

『ここから天皇賞・春、宝塚記念を狙っているでしょうからね。充分立ち向かえると思いますよ』

『他にはマウンテンストーンも楽しみです。ここまで2戦連続2着と惜しいレースが続いています』

『やはり安定して走っているというのは魅力ですよね』

『OP特別2着から重賞挑戦のインターフラッグ、去年のエリザベス女王杯2着のフェアダンスが控えています』

『グレートエスケープは唯一のGI馬として挑まれる立場ですからね。休み明けですがここは格の違いを見せて欲しいです』

周囲の観客の視線も期待に溢れている。単勝オッズが低いだけではない、色んな人気が俺には乗せられているようだ。

日経賞は有馬記念と同じ中山競馬場芝2500m。

黒井先生は有馬記念かジャパンカップか決めるために、という目論見もあるくらいには、勝てるだろうと思われていた。

しかし——俺たちには、懸念がひとつあった。

『馬場はこのまま重馬場で行われそうですね。雨は止みましたが天候は曇りのままです』

『グレートエスケープの不安要素にはそこもありますね。グレートエスケープはここまで走ったレースはいずれも良馬場です』

これまで不良馬場や重馬場でのレース経験はまったくなかった。いずれも良馬場、稍重ですら調教で走った程度。

黒井先生もそこを一番気にしていた。

雨の予報が出たレース前に、俺に悩みを吐露していた。

『重馬場で走ったことが無い馬なんていくらでもいる。だが、お前は大型馬、それもスト

ライド走法や……弥生賞では中山のコーナーを苦にしておらんかったが、そこに涉った馬場が加わるとどうなるかは未知数や』

ため息と共に俺の馬房の前で項垂れる黒井先生。

彼もまた、調教師として勝利を掴むために悩んでいた。

はつきり言つて、俺も自信があるとは言えない。

調教はともかく、実際のレースで脚がどんな感触を返すのか、全く想像がつかない。

『……そんなの、レースで負けたら考えればいいじゃないスか。あのシンボリルドルフやオグリキャップだつて負けたことあるんスよ?』

厩舎スタツフの若者、白村が仕事をしながら言つた言葉によつて、結局はレースに出て考えるしかないという結論に至つたのだが。

「健二……今日のレース、無理はするな」

「えっ」

「えっ」

「えっ」

黒井先生の言葉に、ケンちゃんと俺はもちろん、寡黙な西京さんですら驚きの声をあげた。

あのスパルタで大胆不敵、傲岸不遜な黒井先生が無理するな? 俺たちは思わず顔を

見合わせた。

「雨でも降るんスカね」

「雨はさつきまでのはずだ」

ひよつとして黒井先生も体調が悪いんじゃないのか……？

俺達が困惑していると黒井先生が一喝する。

「やかましいわ！ 初めての重馬場、それに決して得意とは言えないコーナーがきつい
中山競馬場でのレースやぞ。心配くらいするわ」

「休み明けですしね……テキがそう言うなら」

ケンちゃんはんぼんぼんと俺を撫でてから、西京さんの肩を借りて俺の背に跨った。

勝負服こそ綺麗だが顔は泥がたくさんついていて、この馬場の荒れ具合を身をもって
知っている顔だった。

「わかったな、グレ坊」

俺はそつぽを向いた。

「なっ!? グレ坊、俺の言うことを聞け！ あくまでここはG I I、こんなところで怪我
をしたらどうする！ ここはいいレースをするだけで充分やろうが！」

「そうツスよ。グレ坊もムキにならず言うこと聞いた方がいいっしょ。林檎とかくれな
くなるかも」

西京さんも何も言わない代わりに俺の引き繩を引つ張り、黒井先生へ向けようとする。

何も俺は怪我をするつもりはない。

だが、怪我を恐れて全力を出さないつもりもなかった。

「俺はダービー馬だ。負けていいレースなんてひとつもない——勝ったレースだけがいレースだ！ そんな舐めた気持ちで走るなら、俺は走らねえ！」

叫ぶように吐き捨てると、黒井先生は齒齧みした。

先生が俺を心配してくれているのはわかる。俺よりも競馬というものを知っているだろうし、ここがゴールでないことも、理解しているつもりだ。

だとしても、これだけは譲れないのだ。全力で走った末に負けるのなら……仕方ない。

悔しいが、また勝つしかない。ダークのときもそうだった。

けど、力を抜いて走るのは違うはずだ。

「グレ坊……俺も、初めてのダービー馬を持って、ビビってたんやろな……」

黒井先生は俺の身体をバシンと叩いた。

「言うからには勝ってこい！ ただし、少しでもまずいと感じたら止める！ 健二、お前が手綱を握るんやぞ！」

「了解ッス」

西京さんはそつと引き繩を持つ手を緩める。

これは俺の我儘だが——そんな我儘も聞いてくれるみんなのためにも、そして俺自身のためにも、勝ちたい。

「さあ行くでグレ坊！」

「当然だろ！」

俺は大きく嘶いて前脚を高く振り上げた。

そしてケンちゃんと黒井先生に滅茶苦茶怒られた。

『グレートエスケープ、パドックで暴れ出しました』

『レースがイヤになったんでしょうか。休養明けですからね、カツカしているかもしれないよ』

俺のオツズが、少しだけ上がったらしい。

○○○

返し馬で足元を確認すると想像以上にドロドロとしていて、蹄の引っかけが悪かった。

馬場も内側が悪く、特に走りづらそうだ。一見すると芝生は生えそろっているように見えるが、その下は薄く水が張っている。ここから雨でも降ればすぐに不良馬場になり

そうだ。

待機所にたどり着くと、縞々の勝負服と縞々の大きなブリンカーをつけた馬に絡まれた。

「よう、ダービー馬。久しぶりだな」

「お前は……ええつと」

「ローゼンカバリーだ。ま、覚えてないだろうがな。あの時の俺は雑魚だったが……今日は違うぜ。それに、中山は俺の庭だ。関西のヤローには負けねえ」

「……ん、ブリンカーずれてるな……」

ローゼンカバリーの騎手がブリンカーを一度外す。するとローゼンカバリーの雰囲気さがらりと変わった。

「うわあ……一人は嫌だよう……寂しいのはやだよう……グレートエスケープくん！置いて行ったりしないよね!」

「よし……装着完了だ」

「てめーにや負けてられねえ、菊花賞でのリベンジだ!」

「あれ、上手く付いてなかったかな……」

「俺一人は本当ダメなんだ！頼むから一緒に走ってくれよう!」

昨日、競馬新聞を読んで、ローゼンカバリーの父馬がサンデーサイレンスということ

を思い出した。

「なんでサンデーサイレンス産駒は頭のおかしいやつばかりなんだツツツ！」

俺の叫びは誰にも拾われることなく、中山競馬場に消えて行った。

ゲートに入り、開くのを待つ。中山は先行勢が有利。しかも芝2500mのコースはコーナーがすぐ目の前にあるため、内枠であるほどスムーズにコーナーに入ることができさる。

つまり逃げ馬である俺にとってはスタートが大切になる。

ガコン、と音をたててゲートが開くと同時に俺は飛び出した。

ほぼ真ん中の枠からスタートし、一気にハナを奪ったタイミングでコーナーを迎えた。

——絶好のスタート！ このまま逃げ切ってやる！

そしてコーナーを曲がろうとした瞬間に事件は起きた。

『先頭に立ったグレートエスケープおおっと大きく躓いた、いや滑りました！』
ずるうつと脚が滑り、外側へ膨らむ。

鞍上のケンちゃんもバランスを崩すほどで、あと少しで落馬という状態だった。

「危ねえッ！」

脚に力を込めてケンちゃんが落ちないように踏ん張る。そしてバランスを立て直せ

るよう、身体をよじって手助けをした。

俺がコーナーで揉めている間に他の馬はすいすいとコーナーを曲がっていく。

辛うじて俺が取りついたのは、11頭中6番手と本来の脚質とはかけ離れた位置になつてしまった。

「わ、悪いケンちゃん……!」

慌てることなく、6番手のままレースを進める。スタンド前の直線では馬場が荒れており、スピードも出ないのだろう。ペースは比較的スローで進んでいる。

ケンちゃんの指示に従い、スタンド前直線でスピードを上げて先頭集団に近づく。外を回つてしまうがこの馬場では先行する以外に選択肢はない。

3番手までつけてから、第1コーナーへ差し掛かる。

が、しかし。

『おおつとグレートエスケープ、第1コーナーでもバランスを崩しているか？ スピードが出せません』

スピードを出そうとする度に外へ滑りそうになり、思うように走れない。

中山の急カーブは知っているつもりだったが、馬場が重くなるとこれまで以上に走りづらかった。

「グレ坊、ここはスピードを緩めて走るしかないっしょ！ このままじゃいつか転倒し

て大怪我しちまう！ 逃げるのは無理だ！」

ケンちゃんが手綱を思い切り引いて俺を抑えようとしている。

先行するのが有利とはいえ、ここまでノメっついてはそもそもレースにならない。

俺は力を抜いた。

「わかったよ、前に行くのはやめた」

「わかつてくれたか……？」

「だが勝ち諦めちやいない！ 俺は、勝つんだ！」

「グレ坊、お前まだ勝つつもりか……!?!」

中団に控えながら第2コーナーへ。

とはいえ打開策はなにも思いつかない。

このまま中団でレースを進めてもサンデーサイレンス産駒のような瞬発力は俺には出せない。

スピードを緩めればコーナーを曲がれるだろうが、加減速はスタミナを消費するし、ほかの馬たちに遅れをとることになる。

（考えろ、考えろ。頭フル回転させてなんとかするんだ……そもそもなんで他の奴らはスムーズにコーナーを曲がれる。体重は精々10から20kgしか違わねえやつもいるし、なんで……）

第2コーナーから向正面に入るその時だった。

芝生の中に一際えぐれた窪みを見つけた。このままでは脚がとられてしまう。この馬場では転倒すら有り得る。

(ま、ずいっ！)

必死に歩幅を縮めて窪みを回避する。

だがしかし、無理な歩幅の変更のせいで体が横に倒れそうになってしまった。倒れる！

俺は無我夢中になって前に走り体勢を立て直そうとした瞬間、滑ることなく、スムーズにコーナリングをこなして向正面に入った。

(あ………れ？ 今なんで曲がれた……？)

転びそうになったのに、むしろ今日一番の上手さで曲がることのできた。

俺は先程体を横に倒して――

「――そうか！ わかったぞ！」

俺は中山競馬場の向正面の下り坂を利用してスピードを上げた。

ケンちゃんの手綱を引きっぱなしだが、俺は引つかかることを承知で前に進む。

「おいグレ坊、オーバースピードだ！ そのまま行けば怪我するぞ！」

「いいやッ、問題はなし！ ここからは俺は逃げてみせるさ！」

俺の武器はスタミナを活かした持続したスパートだ。瞬発力がない代わりに、スピードに乗れば長くない脚を使える。

ここまでの消耗を承知の上で俺は第3コーナーから捲るようにスパートをかけた。

「く……ええい、ままよー」

ケンちゃんが覚悟を決めて構えた。

俺は泥に脚を踏み入れるなり、体を埒に向かつて思いっきり倒した。

そして、脚の回転をこれまでのストライドの広いものから小刻みなものに変えて一気に加速した。

「な、なんだ、急に上手く曲がって……ハッ！ グレ坊……お前……自分でストライド走法からピッチ走法に変えたのか!？」

ケンちゃんのだらけの驚愕に対して俺は答えなかった。わりと転倒しかねないギリギリの技……技というのも烏滸がましい。

小手先だけの小細工だ。

馬はスピードを出して曲がる時はバイクみたいに体を倒しながらコーナリングをする。

俺も普段は無意識のうちにそれをやっていたはずだ。

だが脚元が悪いのを気にして、体を倒す角度が足りずに脚を滑らせていた。

そしてもう一つ。普段の良馬場であれば急コーナーでも前に脚を出し、倒れる前に進むことが出来ていたが重馬場になることで足の力が地面に伝わらず、結果として地面を蹴れずに芝の上で滑るばかりだった。

それは俺の走りがストライド走法という、歩幅が広く跳ぶような走り方だったからだ。

そこで俺は敢えて歩幅を短くする走法、ピッチ走法にして地面に触れる時間を増やし、バランスを保ちやすくした——その結果が、コーナーリングの改善だった。

もちろん良馬場でストライド走法で走るの方が曲がりやすいしスピードも出やすい。だが今だけは、この走り方でないとスピードを出して曲がれないのだ。

脚の負担も増える。少しでも重心移動を失敗すれば最高速のままクラッシュしてしまうだろう。

だがダンスパートナーさんが、ダークが、怪我にビビって勝ちを諦めるか？

そんなわけがない。俺は自ら手前を替えた。

「いくぞケンちゃん！ ここから捲って勝つんだ！」

「よし……これならいけるで……ここまできたら勝つ以外ないっしょ！」

6番手から徐々に進出していく。第4コーナーでは大外に膨らんでしまうが外目の馬場の方がまだ走りやすい。

俺は思い切り脚を踏みしめた。

「うおおお!!」

「や、やつぱり来たかダービー馬……!　だが、カーブも曲がれない奴に、中山で負けてられつかよ!」

丁度内側のローゼンカバリーと併せるような格好になった。

脚に力を入れるが、引き離せない。

「流石に脚はたつぷり残ってるんな。いくらダービー馬でも、今のお前にや負けられねえよ!」

「ぐっ……まだまだアツ!」

息が苦しい。ケンちゃんが俺をぐいぐい押しているが思うようにトップスピードに乗り切れない。

「ここまで脚を滑らせたたり、スピードを出したり、大外を回すなどで明らかに余計な疲労がある……きついかな……!?!」

ケンちゃんの鞭が入るが脚が思うように進まない。

いくら小細工をしようと結局、俺のストライド走法が重馬場には合わないことに変わりはない。

「だけど——だとしても!」

「根性だけは、負けられないんだあああッ！」

「お前、まだ……!?!」

中山の最後の急坂を乗り越える。そして最後、ローゼンカバリーに並んだままゴール板を駆け抜けた。

どっちが先かはまったくわからない。

ただ、とにかく全力で走りきったことだけは確かだった。

併走していたローゼンカバリーが息を切らしながら言った。

「なんて走りだ……あんなチグハグな競馬をしながら並ばれちゃうなんて……やっぱりダービー馬はすげえな」

「ありがとう……けど、もう息もできないくらいしんどい……もうこんなレースはしたくないな……!」

「フン、結局テメーの敵はテメーだけだったというわけか……いけ好かねえダービー馬だ」

ローゼンカバリーのプリンカーがズレているのに気がついた。

俺はそのズレを大きくズラしてやった。

「で、でも最後まで一緒に走ってくれたから寂しくなかったよ！ 次は負けないからね

！ すごい走りだったけど、天皇賞に出るつもりだから！」

……二重人格、いや二重馬格かあ？

掲示板には写真判定の文字が浮かび、その間に検量室の方へ向かう。しばらくしてから、1着は俺ということに確定し、歓声が上がった。

終わってみれば1番人気と2番人気でワンツーフィニッシュという波乱のない結果となった。

だが俺にとっては危うく負けるかもしれないという大波乱すら感じていたレースでもあった。

苦しみながら勝ち取ったハナ差のG1は、黒井先生やケンちゃんへ謝らなくちゃいけないなと俺に思わせた。

脚がとても重かったが——これが勝利の重さだと、しばらく俺は苦労の末に勝ち取ったものに、酔いしれるのだった。

×××

元旦の日、トレーナー室でグレートエスケープのトレーニングメニューを練っていると扉をノックされる。

どうぞ、と声をかけると、グレートエスケープが部屋に入ってきた。

「あけましておめでとう、相棒」

彼女に做つてこちらも新年の挨拶を返す。

「やはり挨拶はきちんとしないな。それで、今日のトレーニングはどうするんだ？」

トレーニングするつもりだったのか？

グレートエスケープは何を当たり前なことを、と腕を組んだ。

「日経賞まで時間がない。その後は天皇賞も控えているんだ。一日だって惜しい、そうだろう？」

確かに彼女の言うことにも一理ある。

とはいえ、グレートエスケープは焦っているようだ。

一息ついた方がいい、そう思つて提案をした。

初詣に行かないか？

「初詣……？ 神頼みでもするのだろうか。それで勝てるなら苦労はしなと思うが」

グレートエスケープは渋っているようだが初詣は大切だと熱心に説得すると彼女はそれなら……と初詣についてきてくれた。

神社は初詣の参拝客で賑わっていた。

「人もだいたい多いな……参拝するだけで時間が経ってしまうんではないか？」

呆れたように言いつつも、彼女は律儀に並んでくれている。

待つててもいいよと言うと「相棒だけだと変なことを願われそうでイヤだ」と隣に並んできた。

しばらく待つうちに順番が来る。

何を祈ろうか……。

健康祈願、凡事徹底、蓋世不拔……

こちらがこの3つのうちに1つ決めて祈ると同時に、グレートエスケープも拍手を鳴らした。

何を願ったんだと聞くとグレートエスケープは笑った。

「何も。私はただ決意しただけだ。強くなる、と」

本来初詣は一年の決意を神前で誓う儀式だったと聞く。彼女はある意味正しい行いをしたわけだが、ひよつとして初詣を楽しみにして調べていたのだろうか。

「あつ、グレートエスケープだ！」

「本当だ……サインください！」

「この前の勝った時、本当にかっこよかったです！ グッズも買っちゃいましたよ！」

「グレートエスケープ……菊花賞から翌年まで休養を選んだウマ娘、今最も注目されているとすら言ってもいい有力ウマ娘だ」

「どうした急に」

「えー、そんなすごいウマ娘なんだ！ サイン貰っておこうー！」

参拝客の一人がグレートエスケープに気がつく、みんながあつという間にグレートエスケープを囲んだ。

次々と挨拶やサインを求めてくる勢いに流石の彼女もたじろいでいた。

これまでの彼女なら当たり障りのない返事をして、人混みから逃れていただろう。

しかし、

「いつも応援ありがとうございます。……これからも走りますよ！」

一人一人丁寧にサインや握手などを行い、ファンの対応をこなしていた。

初詣は気づけばグレートエスケープのサイン会場と化した。

参拝客が捌けた頃には日も沈んで夜にさしかかろうとしていた。

伸びをしているグレートエスケープに声をかける。

大丈夫か？

「まあ……疲れたよ。スタミナには自信があるが、流石にあれだけの長丁場は初めてだ」

初詣のつもりが随分疲れるイベントになってしまった。少し申し訳なくなり、謝ると

グレートエスケープは首を振る。

「私も予想していなかったことだ。仕方ないだろう……あの客のほとんどは、私のファンだろうか」

多分、そうだろう。

或いは、今日からファンになるであろう人たちだ。

「あれが全部ではないのだろうか？ ……随分、多くいるんだな。そして、あんなに私の勝利を望んでくれていたのか」

河川敷に差し込む夕陽によって、彼女の表情を窺うことは叶わなかった。

彼女は河川敷の道から芝生へ降り立ち、河のすぐ側まで歩を進めた。

芝生から砂利や石で溢れた場所まで出ると、石を拾う。

「これまで私は自分の勝利のために走ってきた。私を勝たせてきたのは、私と相棒の努力だと思っていた。だが……ファンの力というものは、もっと大きな力を持っているのだろうか。それによって、勝たせてもらったのだろうか」

グレートエスケープは小石をお手玉のように手で弄んでから、河へ向けて石を投げた。

平べったい小石は水上スキーのような勢いで水面をすべり、反対側の岸までたどり着いた。

「相棒……私にはわからない。レースでは常に独りだった。もちろん、相棒の手助け無しにここまで勝てなかっただろうが……ファンとか、そういう思いに負けてしまうものだったのか」

きっとグレートエスケープは、なにもフアンの声援を無駄だと思ってる訳では無いのだと思う。

ただ、ほかのウマ娘が口にするフアンの後押しというものがよくわからないだけなんだろう。

——今日、フアンの声を聞いてどう思った？

「どう……って。そうだな……ああ、心地よかったよ。私は知らない相手だったが、賞賛されるというものはやはり嬉しい。勝たなくては、と思わされたよ」

その気持ちがフアンの力ってやつじゃないかな。

「……なるほどな……私だけが勝ちたいと思ってるわけではなく、フアンも私の勝ちを望んでいるわけか。なるほどな……フアンの力か……確かに、勝つために努力しなければならぬな」

グレートエスケープはダッシュで河川敷の坂を駆け上がると、振り返った。

「少しだけわかったような気がする。きっと、気づかなかっただけで、その声によつて背中を押されていたのかもしれない……相棒！ 早く帰ってトレーニングといこうか！」

声をはりあげた彼女に応えて、河川敷の道へ走り出す。

頭が良さそうでいて、意外と悩みがちな彼女のトレーナーは自分で、最初のフアンも

自分だ。

彼女に勝って欲しい、勝たせたいという思いで一緒に走ってきた——少なくとも一つは、フアンの力が彼女の背中を押ししていたのだ。

○○○

日経賞当日を迎えて、グレートエスケープは控え室でそわそわしていた。

控え室の中をうろうろしては鏡に向かって髪の毛をいじったり、靴紐をチェックしている。

緊張しているのかと声をかけると、彼女はいいや、と答えた。

「今まで意識しなかったが、フアンが私のために来ていると思うといてもたつてもいらなくなってきただけだ」

それを緊張していると言うんだと思う。

グレートエスケープは深呼吸を繰り返していた。

「フアンの手前、いいレースをしなくてはな」

表情を引き締めるグレートエスケープ。本調子に戻りつつあるが、まだ彼女らしくない物言いだった。

俺は彼女と出会った頃を思い出して、言った。

——勝ったレースだけがいいレースだ。

グレートエスケープはぼかんとしてから、大きな声で笑った。ひとしきり笑ってから、こちらに視線を向ける。

身震いするほど冷たく、無情なまでに勝利を貪る鋭い眼光——勝利に飢えるグレートエスケープの瞳がようやく戻ってきた。

「その通りだ相棒。私も、相棒も、そして応援する観客も。誰も善戦なんて求めている。求めているのは『勝利』の二文字。そうだろう、相棒！」
もちろんだ。

俺は彼女の背中を押すファンとして、トレーナーとして、発破をかけた。

——勝って戻ってこい！

まだ寒さの残る中山に、春と、王者の訪れを予感させた。

日経賞をグレートエスケープは見事勝利してみせた。勝利を掴み、威風堂々に振る舞う姿はまさにダービーウマ娘に相応しい風格だった。

レース後、学園に戻ると……

「らんでいくんぐー！」

校門で目の前に小さなウマ娘が現れた。

「エツちゃんレースすごかったね！ おめでどう！」

「マヤノじゃないか。ありがとう、どうしたんだ急に」

マヤノトップガン——幼げな風貌をしているがレース展開に合わせた変幻自在な脚質でいくつもの大レースを勝利しているトップウマ娘だ。

ステイヤータイプでもあり、いずれグレートエスケープとぶつかると思っていたウマ娘でもある。

「エツちゃんずつと悩んでる風だったけど、なんだか強くなつたみたいだから！ エツちゃんは次のレースどこに出るの？」

「まだ正式には決まっていないが……相棒」

俺はマヤノトップガンに次は天皇賞・春を予定していることを伝えた。

京都芝3200mで行われる最も距離の長いGIレース。スタミナと勝負根性が溢れるグレートエスケープにはびつたりの舞台だろう。

それを聞いてマヤノトップガンは小さくぴよこぴよこと跳ねた。

「ほんと!? やつたやつたやつたー！ エツちゃんと走れる！ なんだか今日のレースでエツちゃんすごいキラキラしてたから……きつとマヤと最高にキラキラできるよ！」

自信満々に言ってみせるマヤノトップガン。

小柄な体格だが、彼女の天才的なレース勘で積み上げてきた実績が、ひと際大きな壁のように立ちはだかっているようだった。

「マヤもトレーニングしなきゃ。エッチちゃん、天皇賞ではいいレースをしようね〜！」
マヤノトップガンはそう言って走り去った。

風のような速さで、あっという間に見えなくなってしまった。

いいレースをしよう、と言われたグレートエスケープは楽しみそうに笑っていた。

「マヤと話すことは多いから、私が常々言っていた『いいレース』の意味を良く知っている」

それってつまり……。

「ああ、宣戦布告だ。——相棒！ 次の敵はマヤノトップガンだ。天皇賞・春まで時間がない。全力で仕上げてみせよう！」

闘志に溢れるグレートエスケープはレース後だというのにこのままトレーニングを始めてしまいそうなほど、熱く燃え上がっていた。

元々予定していたレースではあるが、ああも正面切って挑まれたら引くわけにはいかない。

早速、天皇賞・春に向けてトレーニングとレースのプランを練り始めるのだった。

Clear!!

日経賞で2着以内

Next!!

天皇賞・春で3着以内

第18話 臨戦態勢

「マヤノトップガン対策会議の時間だ」

グレートエスケープはトレイナー室のテーブルを占拠していた色んな道具を叩き落として、Blue-rayディスクや雑誌、レース記録などがまとめられた資料をドンとテーブルに乗せた。

私物を置いていたせいでいくつか床に散乱してしまう。この後掃除するのはこちらの役目だというのに。

レースの勝利を優先するふてぶてしいグレートエスケープが戻ってきたのは嬉しいが、そこは落ち込んでいた頃の彼女のままでよかった。

例：

普段通りイケイケなグレートエスケープ。

「相棒。これとこれとこれの洗濯を頼む。部屋がなんだか汚れているな……それはそうと戸棚にあったキャロットチップスは相棒のものか？ 美味しかったぞ。私は今日のタイムをまとめておく。ああ、疲れたら先に帰っていてくれ。タイムをまとめたら私もクールダウンしてすぐに上がる」

雑用など押し付けてくるし結構傍若無人だ。これがクラスではクールなちよいワル生徒で済んでいるのが不思議でならない。

もちろん掃除などはやらなくても彼女は文句ひとつ言わないが、彼女自身そのへんのはやらないので結局こちらがやらざるを得ない。

そして彼女は見張つてないとすぐ追加トレーニングをするか、データをまとめようと遅くまで残る挙句、寮の門限を紙よりも容易く破る。

結局彼女の傍にいないと落ち着かなくなってしまう。

これが、少し自信を失っていた頃は。

「……………もうこんな時間か。部室の整理でもするか……………相棒、少し休んでいてくれ。いつも迷惑をかけてすまない……………コーラ？ ああいや、体に良くないだろう。スポドリとアミノ酸でいい」

部室の掃除や雑用を率先してやりつつ、トレーニングについても悩んでタイムが伸びなかつたり。

こちらの方がアスリートとしては良くない状態だったが、一人のウマ娘としてはだいぶやりやすかったのも事実。とはいえ、数日でしおらしい彼女に落ち着かなくなつてもつと頑張らないと、と思つた訳だが。

「……………どうした相棒、家事に疲れたか？ たまには息抜きをした方がいい」

多分悪気はないんだと思う。

ある意味レースにストイックなのはいい事だと思う。

話を作戦会議に戻す。次の春の天皇賞で最も有力とされているのがマヤノトップガンだ。

俺もただら過ごしていたわけじゃない。

彼女の資料を集めて対策を考えていた。

「マヤノトップガンの最大の武器はレース展開に対する勝負勘、そして変幻自在な脚質だ。これまでも逃げ切り、好位抜け出し、4角先頭と異なる戦法でGIを勝利している。相棒もここは知っているな？」

相手なりに作戦を変えられる器用さ、そしてそのレースで最適な戦法を理解する読み、それを実現可能な能力。

改めて書き出してみるとかなりの脅威だ。

グレートエスケープはホワイトボードに先程の戦法を記していく。

隣の虎の絵はなに？

「マヤノトップガンだ。似てるだろう？」

相槌だけ打って、資料に目を落とした。

こうして見ると相手の作戦はどうなるか分からない以上、対策の打ちようがない。

そこが強みでもあるのだろう。

「そうだ、だがマヤノトップガンが私を標的にしていると考えたらどうだ。相棒なら私に勝つためにどんな作戦を指示する？」

グレートエスケープは基本的に逃げか先行だ。マイペースで逃がし、離れてしまうと直線で捉えきれない可能性がある。

彼女に天皇賞・春という3200mの長丁場で勝つことを考えると、スタミナを残しつつ前を狙える位置でレースを進めたい。

——先行か！

「私を標的にするなら、そうだろうな。様々な戦法を取れるように見えて、意外と選択肢は狭められるものだ」

そうなるかとマヤノトップガンの上がり3ハロンのタイムが気になってくる。

去年も天皇賞・春に出走しているがそこでは5着に終わっている。この時も先行し、4コーナーを先頭で回った。どこまでタイムを出せるかと考えると上り3ハロンは前でレースをすればおよそ35秒前後。

つまりグレートエスケープも同じく上がり3ハロンを35秒前半にまとめれば負けないということだ。

「ここに必要ななのは、長距離を走っても最後の直線で踏ん張るスタミナか、ペース配

分を整えて脚を溜める戦術のどちらかだ。今から重点的にやるのなら、片方だけだが……どちらがいいと思う？」

スタミナか、戦術か。

少し悩んでから俺が答えを出すと、グレートエスケープは満足そうにうなずいた。

「それならば、後はそのためにトレーニングするだけだな」

○○○

相棒とやることを決めたはいいが、ただトレーニングするだけで勝てるかと言われるとまだ勝算が高いとは言えない。

私はランニングをしているとコースをマヤノトップガンが走っているのに気が付いた。

せっかくだから彼女の走りをしばらく見ていくことにした。

ちょうどタイムを測っているらしく、彼女のトレーナーがストップウォッチ片手に手を振っている。

天皇賞・春を見据えた3200mのタイム測定だろうか。

「いつくよおっ!!」アフターバーナーぜんかああああ!!」

最後の直線、マヤノトップガンは爆発的な加速を見せる。

小柄なバ体が光の尾を引きながら弾丸と化した。

なんと表現すればいいだろうか——例えるなら、まさにマツハの末脚。音を置き去りにせん勢いで直線を駆け抜けていく。

3200mを走って出せる末脚ではない。

もしもあの末脚が天皇賞でも発揮されたら——私の背中に冷たいものが通り抜けた。マヤノトップガンもまだまだ、成長しているということだ。

「ただ鍛えるだけじゃ意味がない、か」

菊花賞よりも長い長距離レース経験は中々得られるものではない。

どうすればマヤノトップガンにも負けない力を手に入れられるだろうか、と考えるうちに、近くを通るウマ娘たちの会話が耳に届いた。

「今日食堂のケーキ食べ放題なんだって。早く行こう?」

「実はこの日のためにダイエツトしてたんだよねえ」

ケーキ。スイーツ。ダイエット……私の脳裏に名案が浮かんだ。

きつと食堂にその人はいるだろう。

私は食堂へ向けて走った。

と、いうわけで今回のゲストはメジロマックイーンさんです。

モンブランを口に運んでは頬を緩ませ切って「この日のために生きてきたと言っても過言ではありませんわあ……!」と内心で思っているかのようにです。

「……人の心を勝手に代弁しないでください。それで、何の用ですか。グレートエスケープさん」

メジロマックイーン。天皇賞・春を2連覇し、他には菊花賞や宝塚記念を勝利した最強ステイヤール。安定して勝利を積み重ねる姿に人は歓喜や熱狂を超えて退屈すら生み出したといわれるウマ娘だ。

大量のケーキをぱくぱくと味わっている小柄な姿からは想像もつかないが、レースに臨めば何倍も身体が大きく見えるほど、圧倒的な風格を持っている。

「最強ステイヤールメジロマックイーンに助言を求めたいと思ってる。邪魔させてもらったわけだ」

「そういうことですか。私を頼ってくださいるのは嬉しいですが、今私は忙しいので」
「もちろんタダでとはいわない。取引だ。私も無償で何かをしたり、されるのは好まないからな」

メジロマックイーンの眼が細められる。

つまらないものを出せば私のスイーツタイムを邪魔した報いを受けてもらいますと言わんばかりだ。

私は懐から一枚のチケットを取り出した。

「きみならこれが何か、わかるのではないかな。メジロのお嬢」

「これは……ウマンサンクレールの優待券!? あの超有名スイーツ店のものを……何故貴方が!」

「少し縁があつてね。ここで聞かせてもらおう。お嬢、私のトレーニングに」
「私のトレーニングは厳しいですわよ?」

愚問だったな。

流石はメジロマックイーン、スイーツを味わうことを邪魔すれば鬼になるという噂は本当なのかもしれない。

メジロマックイーンが私の差し出したチケットを掴む……が、がっしりと握って離さない。

「……………? つ……………ふつ……………!」

渾身の力を込めて握つたまま、渡さない。

メジロマックイーンも負けじと力を入れて美しい白い頬を真っ赤にさせている。

「な、なんなんですか……何故渡してくださらないのですか!」

「まだいつまでやるか、トレーニングの内容も聞いていない。適当な口約束では困るからな」

「一番約束に信用を置けないウマ娘の貴方が何を……」

「私も私が信用がない自覚があるからこそ、契約書にサインが必要なわけだろう」

メジロマックイーンはため息をついて腰掛けた。

「わかりました。私もしばらく休養でレースに出る予定はありませんし、ステイヤーとして認められたことに感謝して、協力しましょう」

「スイーツのためだろう」

「ノブレス・オブリージュですわ。とはいえ、私のアドバイスで怪我をされたら困りますからね。ちゃんとトレーナーに話を通してくださいまし」

「当然だとも。相棒に黙ってこんなことをするのは申し訳ないからな」

というわけで、相棒に事情を話すとあっさりOKを貰えた。

私とメジロマックイーンはジャージに着替えてコースに向かうと、既に相棒が待つていた。

そのときのメジロマックイーンが持ってきたのはやたら重そうな木箱だった。

「グレートエスケープさん。天皇賞までの約1ヶ月、貴方にはこの蹄鉄をつけてもらいます」

「これは……？ うっ……重い……！」

メジロマックイーンから受け取った蹄鉄は通常のものより遥かに重く、気を抜けば落としてしまいそうだ。

「芝3200mに必要なのはとにかくスタミナですわ。いくら完璧な作戦やスパートの

タイミングを掴もうと、最終的に勝負を決めるのは積み重ねてきた基礎トレーニングで。貴方には釈迦に説法かもしれませんが」

「確かに、その通りだ。これをつけて走ればいいのかね？」

「ええ。1ヶ月後、貴方はどこまでも高く飛べる翼を手に入れてるでしょうね」

私はその場でシューズに蹄鉄を合わせ、釘を打ち直した。

数歩歩くだけで脚が難しい表情をしているようだ。

だが、これで3200mを走り抜けたなら、実際のレースはどこまで走れる——いや、飛べるのだろうか。

「筋トレとコースメニューからだな」

まさに鉄がまとわりついた両足を抱えるようにして、飛び跳ねると着地の時には周囲が軽く揺れているようだった。

「ええ。まずはハードル飛越を軽く100からいきましよう。肩慣らし程度ですが」

そういつてメジロマックインが用意したのはミニハードル。

「お嬢、君は意外と根性タイプなんだな」

「メジロのウマ娘たるもの、いつだって優雅に。ですが、時には泥にまみれようと立ち上がる泥臭さが必要になる時もありますわ。もちろん、見せるものではありませんが」

私はまず、ハードルの飛越から始めた。最初の数回は意外といけそうだと思い、2桁

を越えてしばらくすると汗をかき、50もやるころには脚が他人のもののように思えた。

結局、74回で私は地面に倒れ込んだ。

「まだウォームアップですのに、倒れ込んでどうするんですの？」

「はあっ……はあ……はあ……ぜえ、ぜえ……ふーっ……まだまだあ！」

脚が産まれたての子鹿のようにガクガクと震える。

それでも、気合いで立ち上がる。

今でこそ体格は立派なものを両親から貰えたが、決して誰にも負けないスピードがあるわけでも、無尽蔵のスタミナがあるわけでも、めざましいパワーを持っていた訳でもない。

けど、根性だけは。精神だけは、負けられない。

「う、ああああっ!!」

私は何度も飛び続けた。

天皇賞はこれよりも遥かに苦しいはずだ。こんなウォーミングアップ程度で弱っていたら、マヤノトップガンと戦うどころか最下位で入線になるだろう。

「勝つのは、私だ……!」

地面を揺らす音が響く。

私は100回を終えると、今度はコースを走って初日から徹底的に自分をいじめ抜いたのだった。

○○○

メジロマックイーンが協力してくれたのは望外の僥倖だった。

超重量級の蹄鉄を身につけて足に負荷をかけるトレーニング方法。

下手をすれば怪我の恐れがあるが、そこを管理するのがトレーナーの役目だ。

彼女には目いっぱい体をいじめ抜き、強くなってもらおうとしよう。

あのトレーニングは1ヶ月でスタミナがそれだけつくものなのか？

メジロマックイーンは自分がやっていたからこそグレートエスケープに教えたのだろうが、効果に関しては未知数だった。

マックイーンは声を上げながら跳ぶグレートエスケープを見ながら答えた。

「もちろん効果はありますわ。ですが、それだけで勝てるかといわれたら違います。スタミナもスピードも、地道なトレーニングの積み重ねで強くなるものですから」

じゃあ、何故？

「あの表情を見てください。『勝つのは自分だ』という精神力で疲労すらねじ伏せてみせる、そんな顔をしていますわ。ステイヤーとして、その力が必要なのです。根性論だけで勝てるような世界ではありませんが、スタミナが尽きて苦しい時に踏ん張れるかどうか

か——最後にはやはり、根性が必要だと私は考えています」

「じゃあ大丈夫だな。」

「……………？ なにがですか？」

ウチのグレートエスケープは、根性だけならどんなウマ娘にも負けないから。

「親バカならぬウマ娘バカ……………ですわね。ふふつ、ええ、そんな思いもまた、必要なのかもしれませんね……………」

夕暮れのコースに、グレートエスケープの悲鳴混じりの叫びが響き渡った。

×××

馬房で休むダンスパートナーさんに俺は尋ねた。

「マヤノトップガンって……………あと、サクラローレルとマーベラスサンデーってどんな奴でした？」

「んえ……………？」

「ついさっきまでお昼寝をしていたダンスパートナーさんはぼけーつとしたまま顔を上げた。」

彼女はジャパンカップの後、有馬記念を走った後に香港のクイーンエリザベス二世

カップに出走し、現在は休養中。

勝利は飾れなかったが短い期間で大レースを何度も走るタフさは流石というほかにい。

そんな彼女は菊花賞や有馬記念などで三強と称された三頭と激突していた。

雑誌などで情報は集められているとはいえ、やはり実際に共に走った経験からわかるものもあるだろう。

ダンスパートナーさんはにへらと笑った。

「あー……エツちゃんだあ……どーしたのー……う？」

完全にオフモードだ。ぼわぼわしてレースのことなんて全く考えてない。

休みになったらこれだけ気を抜いてしっかり休めることが、繰り返し走るだけの体力を作る秘訣なのかもしれない。

しかし天皇賞・春はもう今週、今朝には最終追い切りが終わっている。

ぼわぼわダンスパートナーさんとぼわぼわしてる暇は無いのだ。休みの日に仕事の話をするわけだから、そう考えると申し訳ないけど。

「ダンスパートナーさん。ダンスパートナーさん」

「……はっ。あ、うん、なに？ き、聞いてたけどもう一回言つて？」

「マヤノトップガン、サクラローレル、マーベラスサンデーと走ってみてどうでしたか

？」

「うーん……みんなやっぱり強かったよ」

ちなみにダンスパートナーさんと三頭は同期である。特に親交が深いわけではなかったというが。

まあ、普通はそうだ。

「マヤノトップガンさんは速かったし、サクラローレルさんも飛ぶような末脚が凄かったなあ……」

マーベラスサンデーさんは……うん……ま、マーベラス……」

いったいなにがあったんだ、マーベラスサンデーとの間に。

ところで、厩舎の外がなんだか騒がしい。

音から考えるに、調教師の取材に来た競馬新聞などのマスコミだと思いが数が多い。

耳を立てて盗み聞きをする。

「今週の天皇賞・春は如何ですか黒井先生」

「はい、日経賞は重馬場で脚をとられていましたけどその疲労はあまり見せていないですね。ここまでの追い切りも気合いたっぷりで時計も素晴らしいものを出している。ダービーの時よりも好調です」

「相手は初対戦となるマヤノトップガン、サクラローレル、マーベラスサンデーがいます

が、力関係はどう見ていますか？」

「グレートエスケープはステイヤー向きの気性と体格をしています。ここは絶対に負けられないですね」

「それでは最後にはファンの方々に一言お願いします」

「私にダービーを取らせてくれた馬ですから思い入れも深いです。次のレースでは皆様にとっても思い入れができるようなレースにしたいです」

一人目の記者の質問が終わるとほかの記者はまた別の内容を確認してくる。

どんな質問に対しても黒井先生は強気な発言を繰り返していた。

実際に俺もこの上ないほど絶好調だ。

今朝の最終追い切りでは坂路を自己ベストタイムで駆け抜けた。

どこからでもかかってこい、と言いたいがあくまで俺はチャレンジャー。

初めての3200mという距離はこれまでにない苦難が俺に降りかかってくるだろう。

「けど、負ける訳にはいかないだろう」

世代最強と評された今、この距離で勝たなければ称号は取り下げになるだろう。

そしてここで勝てば、菊花賞で勝ったダンスインザダークの価値もまた上がるというもの。

「俺だって勝ちたいからな」

ふんす、と鼻息は荒く。

気合いを入れると、外から気になる質問が聞こえてきた。

「グレートエスケープは先日の日経賞で途中からストライドを変えて走つたと梶田騎手が話していましたが……黒井先生はどうお考えですか」

そういえばそうだったな。

もちろん骨格に合わない走り方をする以上、負担もかかるし、慣れた走りの方が速いに決まっているが。

黒井先生なら笑い飛ばすだろうか。

あの馬はよく変なことをするだけだ、と。

しかし、黒井先生は想像だにしない答えを記者に返した。

「あの走りはサラブレッドには有り得ない走りやったな。俺も震えたわ」

え？

「いや——1頭、その走り方をする馬がいたな」

「ええ、セクレタリアト……ですね」

「あの伝説の馬や」

え？

ちよつ、まつ……え？

念の為に説明しておこう。

セクレタリアトとはXX72とXX73年のアメリカで活躍した伝説の馬のことである。

あまりの強さに人々は熱狂し、まさに最強の馬としてアメリカでは語り継がれている。

様々な伝説が彼の馬には存在するが、最も有名なのは彼がアメリカで三冠を達成したベルモントステークス（ダート1マイル・つまり12ハロン、約2400m）だろう。セクレタリアトはこのレースで2.24.0というタイムを記録した。もつとわかりやすく言おう。

2着に31馬身差をつけ、従来のレコードを2.6秒短縮し、30年以上経っても記録が破られるどころか2分25秒台で走った馬すら存在しない。

ちなみに俺が勝ったダービーのタイムは2.25.0で俺より1秒速い。ダートなのに、芝を走った俺よりも！

そんなセクレタリアトがやっていたのは等速ストライドと呼ばれる走り方だ。

通常のサラブレッドは骨格でストライドが決まっている。だから胴が詰まったストライドが短い馬ほどマイラー、スプリンターとなる。

逆に胴が長い、特に俺のような大型馬はストライドが広い馬はステイヤー寄りになる。

しかしセクレタリアトはレース展開やコースで走り方を変えていた。サラブレッドには有り得ないことだ。

そう考えると、俺も同じようなことをやっているとはいえ、俺のはあくまで小手先だけの技だ。

本物とは違う……が、抗議できるわけもなく、俺はハラハラしながらインタビューを聞いていた。

「グレートエスケープはセクレタリアト級、と？」

「そこまでは言わん。が、あの馬に特別なものがあるのは事実や。これまでダービーを勝った馬たちとは違う、何かがある……三冠はとれんかったけどな」

「なるほど……これは天皇賞で凄まじいレコードが出るかもしれませぬね」

「楽しみにしとき」

気づいたら俺は伝説の馬と比べられていた。

プレッシャーというレベルではない、無理難題じゃないかとすら思った。

「黒井先生はグレートエスケープを高く買っているんですね」

「ああ。初めて見た時からこの馬には惚れ込んでいたんや。こいつは凄い馬になる！」

ってな。調教師をやっている良かったと思うし、こいつが無事に活躍するなら、こいつと一緒に引退だっと思ってええと思っとるわ」

黒井先生……！

そうだ。伝説に届くかどうかじゃない。

虚勢だろうと、見栄だろうと、勝たなくちやいけないんだ。

橘ちゃんだけじゃない。俺に関わってくれた人を、最強の馬に関われた人にしてみせる！

記者は「おお……」と声を上げた後に言った。

「そのセリフ、ダンスパートナーがオークスを勝った時も言っていましたね……」

「せやったかな？」

黒井先生……

と、とにかく、俺は天皇賞・春へ向けて闘志を燃やすのだった。

○○○

天皇賞・春の状況としてまず、世間で言われていたのは『古馬の強豪に挑むダービー馬、グレートエスケープ』という構図だった。

3強はいずれも父が外国産種牡馬。サンデー四天王を倒し、世界の強豪を撃破した父、母父ともに内国産馬の俺が古馬の最強格を倒すことを最も期待されていた。

しかし、馬券の人気は意外とシビアだった。

1番人気はグレートエスケープこと、俺が2.8倍。去年のダービー、ジャパンカップを勝利し、休み明けの日経賞は脚元の不利がありながら1着。

テレビではスタート直後やコーナーで滑るなど大きくロスをしながら勝ち切る姿に
対し「この馬は規格外だ！」というファンの声で溢れていた。

2番人気はサクラローレル。3.2倍でほとんど差がない。去年の天皇賞・春ではあのシャドーロールの怪物、ナリタブライアンを倒し勝利。去年の有馬記念でも勝利したことで年度代表馬の投票では俺とほとんど同数に近い票を獲得していた。今年是有馬記念から直接天皇賞・春へ出走することになった。

3番人気、単勝オッズが4.0倍なのがマヤノトップガンだ。一昨年の年度代表馬だが去年はサクラローレルに3敗している。しかしこの前の阪神大賞典では逃げ、先行の戦法ではなく直線で一気に抜き去るレースで勝利している。

4番人気は単勝オッズ4.2倍のマーベラスサンデー。こいつも去年サクラローレルに負けてこそいるものの、前走のGIIの大阪杯では快勝してこの舞台にやってきている。

離れた5番人気にはロイヤルタッチ。こいつと走るのは菊花賞以来、久々だ。

俺は4枠7番での出走が決まった。

レース当日、パドックを回っていると、現役最強の呼び声もあるサクラローレルに話しかけられた。

「よう。お前がグレートエスケープか」

「どうも、サクラローレル」

「フンツ、澄ましたようなツラをしてるな。自分が特別だとしても言いたげな……俺から年度代表馬のタイトルを奪っただけのこととはある」

「なんだ随分と喧嘩腰じゃねーか、先輩」

「人間どもはどうやら理解してねーらしいからな。ここで誰が最強なのか、理解させてやる」

どうやら闘争心バチバチといった雰囲気だ。

俺だつて黙っているつもりはない。ぎろりと睨み返して、ガンを飛ばし合う。

そこへ割ってきたのがマヤノトップガンだった。

「オーケー、完全に理解した。ローレルは嫉妬してんだな。クラシックで華々しい活躍をしてきたグレクんに。わかっちゃったわ」

「トップガン……テメー知った風な口を利くんじゃねえ。テメーだつて皐月賞やダービーに間に合わなかったじゃねえか。そもそもオレは怪我で出られなかったただけだ。実力が足りなかったテメーとは違う」

「おお、怖い怖い。グレくん、俺結構気に入ってんだよねキミのこと。なんか親近感あるし? 今日よろしく」

「あ、ああ、よろしく……」

マヤノトップガンはサクラローレルとは対照的に、随分と軽い奴だった。

挑発に対しても飄々として、気負っていない様子だ。

しかし不気味なのは、彼の眼だった。

俺の目をじつくりと見ながら、ふうん、へえ、なんて声を出している。

見透かすような瞳がなんとも不気味だ。

「あれ、マベくんは?」

「トップガン、アイツを呼ぶんじゃねエ。話がややこしくなるだろうが」

「……マーベラスサンデーのことか?」

するとどこからか大きな声が聞こえてきた。

「ん? マーベラス……呼んだかい?」

不敵な笑みを浮かべたサラブレッドが姿を見せた。……盛大に小便をしながら。

「マーベラスサンデー! テメーパドックで小便するのいい加減やめろッ!」

「ローちゃんはこのマーベラスさを理解してないねえ……キミもやってみるといい。

とつてもマーベラスだよ」

「誰がやるかボケツ!!」

「あつはつはつはつ。マベくん相変わらずだねえ。キレはどう?」

「ふ、マーベラス。すごい出た」

「何の話をしているんだテメエらはッ!」

マーベラスサンデーは小便を出し終わると、ふう、とやり切ったような表情を浮かべた。

そして俺を見た。

「中々マーベラスな素質があるね。強いサラブレッドというのはよくわかる」

「……ど、どうも」

「だが実力を知るには、もつとだ……見るべきものがある」

「はあ」

「——放尿している姿を見れば、実力すらも理解できる。そういうわけだ。キミもマーベラスな体験をしよう」

俺はそつと笑みを浮かべた。

一度視線を足元に下ろしてから、声を出して小さく笑った。とても乾いた笑みだった。

そして叫んだ。

「なんでサンデーサイレンス産駒は頭のおかしい奴ばっかりなんだツツツツ!!!」

俺はサクラローレルと少しだけ仲良くなった。

ちなみにこの後、ロイヤルタツチやローゼンカバリーと少しお話をしたのだった。そういえばこいつらもサンデーサイレンス産駒だったなと思って話していたが、やっぱり頭のおかしさを節々に感じさせた。

大丈夫だろうか。

天皇賞・春をちゃんと走り切れるか、不安になってきたのだった……。

第19話 NEXT FRONTIER

天皇賞・春は京都を舞台に行われる。

菊花賞よりもさらに長い、ステイヤーたちが鎬を削る最高の舞台。

本馬場に入場すると歓声が出迎えた。

何度聞いても、観客からの欲望、期待、願いの籠った声は俺を高揚させる。

『雄大な馬体を見せるのは4枠7番グレートエスケープ。増減は—3キロ、509kgでの出走です』

「キヤー—！ こつち向いて—！」

「グレク—！—！」

「今月も給料を増やしてくれ—！」

大観衆が競馬新聞を丸めて振っていた。

まるで大海の水面のように不規則で荒れた波だ。

待機所まで颯爽と駆け出すと、歓声が一際大きくなった。

返し馬を終えて待機所で話しかけてきたのは、またもサクラローレルだった。

「カツ！ 大人気なことだな、ダービー馬」

「ローレルはやけに突っかかるな。大人気ないぞ」

「ふん、大人気なくもなる。去年は特に調子が良かった。昔から弱かった脚が強くなったのもそうだが……去年は年度代表馬になるチャンスだった。それをテメーが持つていつちまったからな……タイトルがあるかないかで、俺の価値も変わってくるってものだ」

「そうか。でも奪つて悪かったな、と言つたら怒るだろう？」

「当たり前だ。俺が言いたいのは去年の話じゃねえ。今年は去年の俺を超える……今年目標は凱旋門賞だ。そこで日本馬初のタイトルを手に入れて、競馬を見てるやつすべてを納得させてやる」

凱旋門賞——俺も同じく目指している最中だ。

別に天皇賞に勝てなくても凱旋門賞は出走できるが、だからといって「負けでいいです」とはならない。

「俺だつて負ける訳にはいかない」

「その理由はファンの期待とやらか？」

確かにファンや、関係者のために走っていた。今でも、彼らのため勝利を届けたいという気持ちにも嘘はない。

でも、それと同じくらい、俺の心には燃え盛るものがある。

「いいや。俺は俺のために勝つ。勝って、最強を証明してみせる」

「アハハッ！ 二人とも燃えてんじゃん！ グレくんもローレルにビビらないし、かつこいいねえッ」

飛び込んできたトップガンとマーベラス。

返し馬を終えて準備完了の霧囲気を漂わせている。

「ま、大体わかったよ。レースがどうなるか。その上で言っちゃうけど……勝つのは俺、マヤノトップガンだ。今回の予想はマジで当たるぜ」

「うーん、マーベラス。マヤくんのそういう予想はよく当たるからね」

「ケツ、勝てないかもとほざいてた去年の天皇賞・春と有馬記念は確かに当たってたがな。負けることは誰にでもできらあ」

「そうだね。マーベラスな予想だけど、やはりマーベラス。君の放尿具合から見て調子がいいのはわかっているけど、それに勝つからこそマーベラス。今日のパドックでの放尿のキレもよかったからね」

「マベくん俺がパドックで小便してたって嘘つくのやめてもらっていい？」

なんだか霧囲気がおかしくなってきた。

ローレルを見るとなんだか微妙な表情で、俺と目が合った。

『それはそうと苦労してるんですね』

『見ればわかるよな……苦勞してんだよ』

ライバル関係でバチバチとしつつも、同情と諦観に関してはとても気があつた雰囲気を見せていた。

ついに発走時刻直前となり、ゲートへ向かう。

ゲート前につくと3頭は軽口を叩かず、ただ無言でゲート、そしてその先を見据えていた。

じんわりと肌が湿る感覚。

この汗は冷や汗かと思つたが、徐々に熱くなる体に安堵を覚えた。

体が、脚が、燃えるようで、フワフワとした感覚。

係員の誘導に従いゲートへ入ると今までと違い、不安や焦燥でいっぱいになった。

今頃になって緊張している自分に少し笑つてしまひそうだ。

天皇賞・春——ここを勝つて、最強のサラブレッドになってみせる！

『天皇賞・春、さあ行こう。スタートしました。全頭揃つて飛び出しました大きな出遅れはありません。果たして何が行くのか』

ケンちゃんからグイグイ押されて先行を促される。俺たちのいつもの勝ちパターン、マイペースで逃げ切る作戦でいく予定だ。

五分のスタートから一気に先頭へ躍り出た。

しかし外から競りかけてくる馬がいる。

ビッグシンボル——俺と同じ逃げ、先行馬だけあってハナは簡単に譲りたくないらしい。

「ダイヤモンドS、阪神大賞典とここまで長距離レースを2着……ステイヤーとして目覚めつつある俺を捉えられるかな？　ダービー馬よ！」

「そうか。じゃあ先にどうぞ」

「……あれえ？」

『ハナにたつたのはビッグシンボル、ダービー馬を制して行くのはビッグシンボルです。ダービー馬グレートエスケープは2番手に控えました。鞍上西井が果敢にハナをきりました第115回天皇賞・春。グレートエスケープは2番手に控えてタマモハイウエイ、メジロランバダ、エイシンホンコンが続きます。そしてロイヤルタッチ』

ビッグシンボルにこのまま行かせて2番手をつけていく。

先頭を走るビッグシンボルのペースはまあまあで俺のマイペースで走れる展開。

サクラローレル、マーベラスサンデー、マヤノトップガンは少し離れて後ろにいる。

「1頭くらいはついてくると思ったが、中団に控えたか？」

ケンちゃんの反応からしてすぐ側にいるわけではないらしい。最初の第3コーナーの坂を登り、下っていく。

1周目の第4コーナーではレースは落ち着き、このままスローペースになりそうな雰囲気だった。

ホームストレッチを走ると大歓声が上がると。

少し気合いが入るが、体が硬くならないように力を抜いた。

気を入れすぎても力んで余計な体力を消費してしまう。あくまで気合いを入れるのは最後の直線だ。

「よしよしグレ坊、いい力の抜け具合だ」

『先頭を走るのはビッグシンボル。＼大きな＼心臓にモノを言わせて逃げ切るのか。レースを引っ張ると思われたグレイトエスケープは2番手、これはスローペースになりそうだ』

正面スタンド前掲示板に映るレース映像を横目で見ると、3強はいずれも中団にいた。

マヤノトップガンは中団やや後ろ、内側で落ち着いており、サクラローレルは対照的に外目。そんなサクラローレルをマークするように不気味にマーベラスサンデーが後ろにつけていた。

時計では62秒程度、淡々と落ち着いて第2コーナーへ入っていく。

『正面スタンド前を通り過ぎて大歓声が湧き起こります。1番人気、日本血統の底力を

見せつきたいグレートエスケープは2番手でゆったりと追走。ビッグシンボルを眺めているようです。サクラローレルはここにいました、もう一度カメラで見たいサクラローレルは中団外目、それを見るマーベラスサンデー。マヤノトップガンはおおっ、やや後方に位置を取り折り合っています』

向こう正面に入るまでレースは動かず、各々が騎手と折り合い、勝負どころまでの準備を進めていく。

このままスローペースになるかと思われたが残り1800m程でレースが、サクラローレルが動き、観客がどつと湧いた。

『おおっとサクラローレルが先団を狙っているぞ！これはかかってしまったか、行ってしまったぞ！鞍上の館山典佑（タテヤマ・ノリスケ）はどうなんだこれは。マーベラスサンデーもこれをマークして上がっていく。マーベラスサンデー鞍上滝カナタ、サクラローレルをマークする構えです』

すぐ後ろまでサクラローレルが上がってきたのが見える。まだ残り1600mはあるのにもう上がってきたのか？

押し出されるように後続もペースが上がり、先頭のビッグシンボルがスピードを上げた。

このペースならついていける、前のビッグシンボルも直線でバテるだろう。

「よう、ダービー馬。捕まえに来たぜ」

「かかっているんじゃないのか、ローレル。まだ距離は長いぜ」

「ケツ、あの先頭のがキはともかく、テメーを楽に逃がしたらそのまま行かれちゃうのはわかっただよ」

外回りの第3コーナー、淀の坂を登る。

当たり前だが1周目以上にきつく感じ、その上ですぐ下り坂でスピードが出すぎてしまう。

そうなると第4コーナーで速度が出すぎて大きく膨らんでしまい、ロスに繋がる。

長距離レースでそれはかなりの負担になるだろう。

(ペースが速い……！ レースの中盤からぐっと速くなったからか……！)

『春の天皇賞にしては珍しい入れ替わりの激しいレースとなりました。淀の第3コーナーを越えて坂を下っていきます。おお、グレートエスケープが動いた動いた、第4コーナーを前に先頭に躍り出ます』

ビッグシンボルが想定より早いタイミングでバテはじめた。中盤、それも早いタイミングから落ち着く間もなくペースが上がった影響だろう。

俺はどうだろうか……まだ、いけそうだ。

息を入れて、このままロングスパートをかけてスタミナで押し切るべく、手前を変え

た。

『ここでグレートエスケープが動いた動いた動いた！ 日本血統のスタミナで逃げ切るのか、しかし怖いローレル、マーベラスがついてきている！ トップガンは後ろで少し苦しいか！』

「第4コーナー手前で速度を上げるなんてヘボ騎手とアホ馬だな！ そのまま外に膨らんでロスしちまうぜ！」

どの馬かわからないが、俺を揶揄する。しかし、そんなことわかりきっている。

「いいや、そうはならない。なぜなら、勝つのは俺だからだ！」

コーナーだけストライドを狭めて馬体を横にいつも以上に倒す。

速度を落とさずにブレーキをかける真似は脚への負担がかかるがそのために最終コーナーまでとっておいた、とっておきだ。

カーブをスピードを落とさずに曲がりきると、後続から驚きの声上がる。

「な、なんだとオーツッ!？」

内埒から離れきらず、かといってぶつからず、速度を落とさず。

後ろを少しだけ突き放した感覚を理解した。

「このまま——ッ！」

直線を向いた途端に、脚が一気に重くなった。

体力が底を尽きかけて、思うように脚が出なくなっている。早い話がスタミナ切れ寸前だ。

百里を行く者は九十里を道半ばとす——こうしてみると確かに、直線で力尽きるのがよくわかる。

「よう……人気者……！ このペースでまだ走ってるのは褒めてやる……！」

「マーベラス！ このペースはマーベラス……でも……勝つことでお、マーベラス！」
マーベラスサンデーとサクラローレルが競りかけてくる。残り300m、まだ粘らなくてはいけないうのに並ばれてしまっている。

ダメか——!?

俺の弱気を吹き飛ばすのは、ケンちゃんの左ムチだった。

「粘りきれ、グレ坊ツ！」

首を下げて、鞭をバシバシと俺のトモに叩きつけるケンちゃん。

そうだ、いつだって俺を助けてくれたのはケンちゃん、最高の戦友なのだ。

「うおおおッ！」

「まだ粘るか……だがテメーにや何より速度が足りねえ！ 瞬発力の戦いになれば、特にそれが出てくる！」

アタマ分前に出ていたはずの差が埋まり始める。

そうは言うがマーベラスサンデー、スクラローレル共に限界近くまで体力を消費しており決して余力が残っている訳では無い。

ならば後は勝負根性の戦いになる——!?!

歓声が一際大きくなった。

まだゴールは先だ。先頭集団はまだ団子状態のままのはず、だとしたら何が起こって

『おおっと外から何か突っ込んでくる！ トップガンだトップガンだ！』

外からマヤノトップガンが追い込んでくる！』

「アイ・コピィ……完全に理解していたよ、この展開も」

マヤノトップガンが外から一気に並びかてきた。

この超ハイペースでなぜこれほどの脚を残しているのか。それは、予め脚を残せるように後方待機していたからで……

「この展開を読んでいた……のか……!?!」

「グレくん、君はすごい奴だ。マトモに逃げや先行で挑んだら負けたか共倒れだったかもしれないが……俺はどこからでも正攻法の戦いができる」

驚きながらも必死に追従する。

残り200mでマヤノトップガンが俺たちより先に出ているのが見えた。

「マーベラス……！ そんなに余裕に……！」

「余裕なわけではないよ、マベくん。ギリギリで脚を残せるペースで、それでも限界まで速度を出してもまだわからないんだ……！ だが……勝たなきや意味が無いツ！ 見ていろ、俺の末脚をツ！」

トツプガンがさらに加速する。

スピードが足りない。ここからマヤノトツプガンを上回る速度を出すにはどうしたらいい。

ローレルの言う通り、体格と血統共に一瞬のスピードに欠ける俺ではここから巻き返すのは不可能に近い。

酸欠になりゆがみ始めた視界、必死に頭を捻る。

スピード、瞬発力、俺の血統と体格——

『トツプガンだトツプガンだ、マーベラスサンデーとサクラローレルが並ぶ！ もう一度グレートエスケープ、すこしヨレながら粘る粘る！』

——一瞬のスピード。スプリント適性、セクレタリアト……。

無我夢中になりながらも一度手前を変える。

これはスタミナを回復させる訳では無い。今からやるのは、一か八かの賭けだ。

脚がズキリ、と痛む。それでも俺は——負けたくない！

「うあああッ！」

ぐん、と加速する感覚を感じる。

小手先だけの手品のようなものでも、どんな手を使っても勝ち切りたい。

我武者羅に脚を動かす中で、身体がガクンと沈み込み、ローレル、マーベラス、トツブガン、三頭より少しだけ前に出た。

『四頭が並ぶ、三強か、新星か、固まったまま！』

視界がぐにやりと歪む。

頭がぼーっとして身体がふわふわと浮いているような心地で。

なんとか、勝てた——の、か？

「——はっ!？」

一瞬、意識が飛んでいた。

いつの間にか余計な力が抜け、身体が楽になっている。

少し遅れて、背中にケンちゃんが乗っていないことに気が付いた。

「——グレ坊」

見下ろした先にケンちゃんが立っていた。

まだここはターフの上。

たとえレースが終わっても検量室に行くまで下馬してはいけなはずだ。

だというのに、ケンちゃん俺の頭を優しく抱きながら、周囲の係員をジェスチャーで呼んでいる。

「大丈夫だ。きつと良くなる。今は冷静に、落ち着いて、暴れるなよ……」

なにやってるんだよ。

天皇賞・春はどうなったんだ。ついさっきまで走っていたはずだろう。

下馬している暇なんてないはずだ。

どういふことだ——半ばパニックになりながら見上げたターフビジョンには、1着から順番に、4番、8番、14番、7番、16番と、順位が表示されていた。

4着——つまり、負けた。勝てなかった。

現実を理解しはじめてから、じわじわと体にレースを終えた疲労感が溢れ出し——右前脚に焼けるような激痛が走った。

「ぐ……うッ……！」

今までに感じたことのない痛み。

なんだこれ、なんだこれ、なんだこれなんだこれなんだこれなんだこれ——！

痛みで思考がまとまらない。正常な判断を下せない。

痛みのせいで頭がどうにかなくなってしまいそうで、それを振り払うように頭を上下に何度も振った。

「グレ坊落ち着け、怪我が悪化しちまうっ……大人しくしろ……良い子だから……」
ケンちゃんが繰り返して俺を撫でる。

その言葉に少しだけ冷静さを取り戻し、深呼吸を繰り返した。

心臓が脈打つのに合わせてその度に激痛が右脚に走った。

係員の誘導に合わせて馬運車がやってくる。

「おい、芋野郎ッ！」

振り向けば、ロイヤルタッチが息を切らしながらこつちへ視線を向けていた。

いつもの見下したような、偉そうなツラではなく、心配そうな顔だった。

「てめえ……脚を……」

右脚の激痛。

これはきつと、そういうことなのだろう——それでも俺は、言葉にはしなかった。

「俺より後ろで入線したのに、心配か？」

「バツ……てめえ……次こそは負けねえよ！ だから……だから……さつさと次のレー

ス出て来いよ！」

俺はその言葉に対して、曖昧に笑うだけで約束はしなかった。

結局、天皇賞・春は3強に遅れること半馬身差の4着という結果に終わった。

しかし、レースの結果以上に、今もなお激痛を訴えてくる右脚が俺の心をじわじわと

蝕んでいた。

×××

ついに迎えた天皇賞・春、当日。京都レース場には10万人近い観衆が押し寄せている。

メインレースの一つ前、第10レースの最後の直線なんてGIレースと遜色ない歓声が上がっていた。

会場の熱気を聞きながら、控え室で私は化粧のための鏡を見つめていた。

顔色は、よし。寝癖もない。

間違いなく絶好調。私はシューズを履き替えてから、蹄鉄をまだ交換していなかったことを思い出した。

「忘れるところだった……」

昨日ギリギリまで特訓していたから、重量級の蹄鉄のままだった。

蹄鉄を打ち直して履き直すと、足に凄まじい違和感が迸った。

軽い……あまりにも……。

決して不快感ではなく、試しに跳ねてみたら天井にぶつかってしまいそうだと、杞憂

ではなく本気で心配するほどに調子がいい。

一歩出すとそのまま走り出してしまいそうだ。

「それが超重量級蹄鉄の効果のひとつでもありませんわ」

いつの間にかメジロのお嬢が部屋に訪れていた。

ノックはしましたわよ？ と先んじて断りを入れてからお嬢は言った。

「重い荷物を下ろしたあとの解放感。やはりメンタルは重要です。実際に付いたスタミナ以上の走りを引き出す精神状態のはずですわ」

「お嬢、感謝する。ウマンサンクレールはどうだった？」

「最ツ高ツでしたわ！ モンブランの甘さは多幸感を引き出し、それでいて口説くないパティシエの熟練の技を舌で味わう喜びは何物にも変え難く——し、失礼しました」

喜んでくれたようだなによりだ。

お嬢は佇まいを整えると、拳を握り激励した。

「とにかく、私が特訓に付き合っただんですから勝たないと承知しませんわ」

「当然だとも」

私は勝負服の指ぬきグローブをはめ直した。

気が引き締まり、気づけば嫌な緊張感は消えて高揚感で満たされていた。

「いい表情ですわね。では、スタンドから見えます。ご健闘を」

お嬢はそう言うのと控え室を後にした。入れ替わるようにトレーナーがやってくる。

メジロマックイーンが来たのか？　と言うトレーナーに対して「応援されたよ」と答えた。

「不思議な気持ちだ。今までは自分が勝つために走っていた。メジロのお嬢が協力してくれるのは交換条件があったからで私の勝敗には興味無いと思っていた。それでも勝って欲しいと願うようになるというのは……それだけ特訓に真剣に手伝ってくれていたのだな」

相棒はきつとそうだ、と頷いた。

控え室にレース場のスタッフがやってきた。もうすぐパドックです、の声に私は立ち上がった。

「さあ、行くぞ相棒。マヤノトップガンにリベンジだ！」

威勢のいい返事が聞こえてから、「リベンジ？」と聞き返された。

「……私、今リベンジと言ったか？」

相棒が頷く。

私はまだマヤノと模擬レースはともかく、実際のレースでは勝負したことはない。

なんで自分でそんなことを言ったのか、わからない。

「……なんでリベンジなんだろうか」

トレーナーと一緒に首を傾げながらパドックに向かう。しかしその疑問も、道中で作戦を話すうちに忘れてしまうのだった。

「エツちゃんの勝負服ってさー、モチーフはマフィアとか、ギャング？ ワイルドでかっこいいよねー！」

「そういうマヤノこそパイロットみたいでかっこいいな。どこまでも飛んでいけそうだ」

ゲート前ではどこまでも軽やかに言葉を交わす。

今更勝つとか、負けないとか、言い合う必要がないことはよくわかっている。

お互いの心にはただ『勝つ』というどこまでも純粋な熱気が立ち込めていて、肌を焼くほどの緊張感となって放出されている。

「マヤノー！」

「なあに？」

私はゲートに入る直前の彼女を呼び止めた。

握り拳を作ると、小さく掲げる。

「無事に走りきろう」

マヤノはつぶらな瞳をぱちぱちと瞬かせると、同じように拳を作ってこっん、とぶつ

けてきた。

「アイ・コピーー！」

そう言つて別れると、ゲートへ体を進ませた。

すべてはこの時のために。

私はゲートが開くのを静かに待った。

『本日のお天賞・春は実況は赤坂、解説は細江さんでお送りしています。さあ、全バ共にゲートに収まりました。変幻自在に舞い踊る音速の翼か、それすらも逃げ切つて魅せるのは逃亡者か。淀の舞台で繰り広げられるドッグファイトの結末は如何に——お天賞・春、スタートしました！』

踏み込んだ地面に爆発を起こしてやる気持ちでゲートを飛び出す。

完璧なスタートを決めるとハナを主張し走り出した。

『やはり先頭を行くのはこのウマ娘！ グレートエスケープ！』

『彼女の脚質には合っていますね』

『続いてラージマークが続いて、マーベラスサンデーは中団、マヤノトップガンは後方です！ 今回は思い切つた作戦に出ましたね細江さん』

『どこからでも走れるのが彼女の魅力です。末脚に期待しましょう』

マヤノトップガンは後方と予想とは真逆の位置に彼女はいた。

だが私は想定通りのレースで進めている。
何も問題は無い。

正面スタンド前ではペースを落ち着けるべく、力を抜きつつストライドを大きくした。

〇〇〇

「マヤノトップガンは最後方。取れる手段は二択、早めに捲るか直線一気のレースをするつもりだろう。だがグレートエスケープの力を考えると捲り戦法ではスタミナが持たない。ならば取るのは直線一気のはずだ」

「どうした急に」

「しかしグレートエスケープはレースのインタビュなどでも有名なように非常にクレバーなウマ娘だ。マヤノトップガンのレースはある意味一か八かの戦法。破れかぶれの選択だとしたらかえってグレートエスケープにとっては楽になるだろう」

「そうか？ 距離を離そうとかかるんじゃないか」

「彼女のことだ。一定のセーフティリードを保って逃げる戦法だろう。対するマヤノトップガンは感覚派だ。先行の正攻法ではないレースを選択するということは、何か見えているのかもしれない……！」

「つまりどっちが有利なんだ!？」

「ひとつ言えるのは……みんな頑張れーッ！」

「おおおおおおお!!!」

○○○

正面スタンドを通ると大歓声が聞こえてくる。

余計な力を入らない、むしろ嬉しくなって、リラックスできた。

隊列はやや縦長でレース展開は落ち着いている。

スローペースのままだ。

だが——相棒はスローペースにはならないだろうと予想していた。

私、グレートエスケープは自己評価抜きに、実績のあるウマ娘だ。

逃げウマなのもあり、多くのウマ娘がマークしやすい標的ともいえる。

故に私の動きに合わせてスパートをかけてくるウマ娘が多数出るため、後半からペー

スが一気に速くなるだろう、と相棒は語る。

（——なるほど。マヤノが下がったのはそれか）

このレースで有力なウマ娘は私とマヤノ。

マヤノまで前につけていたら、他のウマ娘にまとめてマークされて思うようなレース

ができなくなるのを恐れていたというわけだ。

だとしたらマヤノは後ろに下がってなお私を差し切る自信を持っているということ。

『第3コーナー淀の坂を越えていきます。後続が一斉にスパートをかけていきます。グレートエスケープが捉えられる、ダービーウマ娘はここまでか!?』

(いける!)

(ここから……!)

(いける!)

私を突くウマ娘たちのそんな心の声が聞こえてくるようだ。

しかし作戦通り私は焦らない。

抜かれても、ペースはあくまでマイペースのまま走る。

残り300m、私がマヤノだったらここからスパートをかけるだろう。

その直前で、一気に脚を弾けさせた。

『おおつとグレートエスケープがもう一度速度を上げて先頭が変わる! ここからだ、ダービーウマ娘はここからだ!』

第4コーナーで外に膨らむ集団の内側から一気に走り抜ける。

直線に入ったウマ娘の中から、1人だけ風を切り裂いてやってくるのがわかった。

「やっぱり来たか、マヤノ!」

「もつちろん! 思ってたスパートのタイミングと違ったけど、勝つのは私だもん!」

『外に持ち出したマヤノトップガンがグレートエスケープに並びかける! グレートエ

スケープは粘っている!」

3200mを走ったことは初めてだがマヤノは経験がある。その差はきつと思っている以上に大きなもののはずだ。

今回の作戦や戦術はその経験の差を埋めるためのもの。

大歓声にかき消されて聞こえないはずなのに、スタンドから相棒の声が響く。

「作戦を練ろうと結局、あとはマヤノトツプガンより速く走れるかどうか懸かっているんだ! 全力で走れ、グレートエスケープ!」

そうだ。いくら作戦を練ろうと、結局最後は実力差での勝負になるんだ。

レースに勝つのは相手を出し抜いた方じゃない。

最初にゴール板を駆け抜けた方が勝者だ。

『マヤノトツプガン迫る! マヤノトツプガン迫る! 抜かせない、抜かせない、グレートエスケープが抜かせない!』

後ろから聞こえる苦しそうな息遣いはマヤノのもの。

苦しいのは彼女だけじゃない。

私だって今にも肺が、脚が千切れそう。だが、私の心はまだ折れていない。

肺が破れるなら破れる。

脚が千切れるなら千切れる。

例え体がバラバラになっても構うもんか。

負けて泣き叫ぶことに比べたら、遙かにマシだ——！

「おおおおおおッ！」

「うああああッ！」

絶叫に近い雄叫びが喉からひり出される。

視界の隅に、観客の姿が映る。

祈るように腕を組む女はなにを願っているのだろうか。

私のぬいぐるみを握りしめて声を張り上げる青年は私の勝利を疑っているのだろうか。

若者に負けない迫力で叫ぶ老人はこのレースをなにを見出しているのか。

（ああ——レースは、こんなにも多くの人たちが見ていたんだな）

自分のために勝ちたい。けど、それと同じくらい——レースを見ている人々に興奮と歓喜を与えたい。

彼らが見せてくれる景色はきつと、私の心を震わせてくれるだろう。

（そうだろう……相棒……！）

観客の中にただ一人、腕を組み、じつと見つめている男がいる。

微塵も疑いを浮かべていない瞳に映るのは、きつと私が走る姿だ。

ずっと、信じてくれた。

私が私を疑っても、私を信じてくれた貴方に贈るのは——勝利の栄光、ただ一つ。
「絶対に、かああああああつ!!」

体をガクンと沈ませる。

ほぼ倒れ込むような姿勢になりながら、体を前傾させた。

そして——

『グレートエスケープだ! グレートエスケープだ! 音速からも逃げ切るウマ娘、それがグレートエスケープ!!』

ゴール板を駆け抜け、反射的に拳を突き上げた。

心臓の鼓動と必死に空気を出し入れする呼吸の音がうるさい。

それすらかき消して、レース場の観客が大歓声を上げた。

『天皇賞・春の勝者はグレートエスケープ、なんとレコードで決着!』

私は拳を突き上げたまま、ふらふらと後ろに倒れ込んだ。

もう立っていられない。

視界がぐるぐると回って、ただ興奮した観客たちがいつまでも大歓声を上げていた。

隣にどさりと音がする。

顔だけ傾けると、マヤノトップガンが前のめりに倒れ込んでいた。

「はあ……はあ……マヤノ……私の勝ちだ……」

「ぜえ……ぜえ……悔しいなあ……」

鼻をすすするような音。視界の端でマヤノが涙を拭う仕草を見せた気がしたが、きつと汗が目に入ったただけだろう。

私は起き上がらずにマヤノの手を握った。

「だったら、何度でも走ろう。天皇賞・春だけじゃない。有馬記念も、宝塚記念も、ジャパンカップも。そしてまた、全部勝ってみせる。勝ち逃げはしないし、させないからな」
マヤノは私の手を握り返すと「アイ・コピー」と言った。少しだけ笑ったのを聞き遂げると、起き上がった勢いそのままマヤノを立ち上がらせる。

そして、思い切りハグをすると、観客がどつと湧いた。

「エツちゃん。今度は勝つよ。リベンジ返し！」

「次も負けないさ……また走ろう、マヤノ」

表彰式が終わると、いよいよウイニングライブが始まる。シニア級の王座決定戦とすらいえるレースの晴れ舞台では柄にもなく緊張しつつあった。

そわそわしている私をマヤノと3着のマーベラスサンデーが笑う。

相棒に助けを求めると、いつものグレートエスケープでいい、と。

それでいいのか。

だが、それ以外も思いつかないのでその意見を受け入れた。

「……相棒。レース中、ずっと私を見つめていたが、あれはどういう意図だったんだ？」
少し緊張が解けたのもあって、相棒に話を振ってみる。レース中でも捉えられる動体視力があるんだぞというちよつとした自慢のつもりだったが、と相棒は驚くことなく答えた。

——俺のグレートエスケープが負けるはずないと信じてた。

俺の。俺のグレートエスケープ。

その言葉がやけにくすぐったくて、レースを終えてシャワーも浴びたと言うのに、なぜだか急に顔が熱くなった。

「俺の……だなんて。勘違いを招く発言はやめておけ。……ばか」

私は顔を逸らして吐き捨てる、マヤノとマベにライブが始まるまでいじられ続けた。

スタッフが私たちを呼びに来ると、流星に二人はからかいはしなかった。その代わりに、軽く手を合わせて、ライブの成功を祈った。

——頂点を目指し駆け抜け、そして頂へ至った者だけが歌える曲『NEXT FRONTIER』のイントロが流れ出す。

今日のレースを見届けた10万人近い観衆がサイリウムを振る様は圧巻の一言。

それでも、ここがゴールではない。

力の限り先へ——まだ、頂点へ至ったとは思っていない。

まだ、次の最前線（フロンティア）がある。

そして私は、グレートエスケープは、次の戦いでもきつと勝利し、いつかは頂点へたどり着いてみせる。

そんな誓いを胸に、私は高らかに歌い上げたのだった。

目標達成！

天皇賞・春で3着以内

N e x t

宝塚記念で3着以内

第20話 スペシャルな出会い

トレーニングは大切だが休息もまた、同じくらい重要だ。今日は郊外まで出向き、トライアンフTR6でツーリングして気分転換をしてきた。

あまり遅くに帰ると明日に響くため、夕方前にはトレセン学園へ戻ろうとしていたが、駅前のコンビニでガムでも買っていこうかとバイクを停めた。

ガムを買ってから駐車場に戻る。

その傍でトレセン学園のジャージを着た生徒がスマホを片手におろおろしていた。

見たことないウマ娘だったが、明らかに表情は困り顔だし、それに気づきながら無視するのは後味が悪い。

せつかくの休日なのだから気持ちよく終えたいというのが素直な気持ちだった。

私はその生徒へ話しかけた。

「お嬢さん、お困りのようだが大丈夫かね」

「ふえっ!? え、えつと、おっ、お母ちゃんから知らない人について行っちゃダメって言われてますから!」

緊張した様子でわたわたと慌てている。

自分が今、制服を着ずに私服姿なことを思い出した。ましてやサングラスやライダーズジャケットだなんて明らかに警戒させてしまうような格好だった。

私はサングラスを外し、トレセン学園の生徒証を見せた。

「私もトレセン学園のウマ娘なんだ。休みの日に遊んでいてね。名前はグレートエスケープ。お嬢さんは？」

「そ、そうだったんですか！ 失礼しましたあ！ 私は、スペシャルウィークつていいます……え、エスケープ先輩？」

「先輩とか気にしなくていい。友人からエツちゃんと呼ばれたりしているし、君もそれでいい」

「じゃ、じゃあ、エツちゃんさんで……」

どうしてそうなる。

ただ、とりあえず警戒は解いて受け入れてくれたらしい。

「それでスペシャルウィーク……長いな」

「あ、じゃあスペでいいです。お母ちゃんにも、友達にもスペとか、スペちゃんつて呼ばれてますから」

「そうか……スペ、君は困ってるように見えたが、どうしたんだ？」

「実は——」

スペシャルウィークが語るには、ランニングに出たはいいものの、いつもと違う道を選んだら迷ってしまったということだった。

スマホのアプリで地図を見てもイマイチわかりづらく、コンビニの店員に聞こうかと思っただけで忙しそうに聞きにも行けず、途方に暮れていたところに私が声をかけたのだという。

「トレセン学園に帰るなら送っていいこう。丁度バイクで来たからな」

「いいんですか!?! でも、悪いですよ……」

「何が悪いのだ。ヘルメットも貸すし、スペは乗るだけだろう? それに、迷っても大変だ」

「じゃあお言葉に甘えて……ハッ! あ、安全運転をお願いしますっ」

「……? あ、ああ、もちろんそのつもりだが……」

スペシャルウィークにヘルメットを貸し、後ろに乗らせる。

彼女が私にしっかりと掴まったのを確認してからアクセルを回した。

緩やかに加速してから大通りの交通の流れに乗って走り出す。

「バイクは苦手か?」

「え? そういわけではないですけど……」

「そうか。いやに恐れていたからな。怖いのかと」

「実は……マルゼン先輩って先輩が運転する車に乗った時に……」
 「ああ……なるほどな」

マルゼンスキーことマルゼン先輩の運転は超がつくほど運転が荒いと有名だ。

荒いというよりは彼女のレースぶりと一致するように生まれついでのスピード狂というべきか。

地平線まで届くように限界まで振り切り、マルゼンスキー先輩はCrush! In to the rolling morning Flash! I'm in the coolest driver's highなのだろう。

来世で会おうぜだなんて言わなくちゃいけない助手席には乗りたくない。

「私はこう見えて道交法はちゃんと守るよ。流石に学園の外でやらかすのはまずいからな」

「で、ですよね……失礼しました」

タンデムすることはよくあるが、当然後ろに乗せるのは親しい間柄の者たちばかりだ。

一番多いのはウオッカ、次にアイネス姉さん。マックイーンは運命が惹かれ合うみたいなタイミングで鉢合わせて乗せることが多い。

後ろに乗るスペが気まぜくになりはしないだろうか、と最初こそ不安に思っていたがあ

ちこちの景色を見ては素朴な感想を漏らすものだから、自然と話も弾んでドライブは楽しいものになっていく。

ちなみにまだ相棒は乗せていない。恥ずかしいから。

「ところでスベ、走るとこここまで距離があつただろう。随分走り込んでいるんだな」

「は、はいっ。もうすぐ模擬レースがあるんです……クラスのみんなはすつごい速くて、なんだかいてもたつてもいらなくなつちやつて……そしたら道に迷つちやいました」
笑つて誤魔化すスベだが、彼女のレースにかける思いは熱いものだ、ここまでの会話の節々から感じられた。

聞けば彼女は転入組で、北海道からやつて来たらしい。

そこにはウマ娘どころか同年代の友人すらいなかったという。ちなみに母がウマ娘だろうと思つたが、敢えてそこには触れなかった。ちなみに母がウマ娘

誰しも事情があり、初対面のウマ娘が触れていいものではないかもしれない。

そんな環境だったから、同期のウマ娘たちと一緒に走れる今が楽しいらしい。まだデビュー前だが、いつかトレーナーと契約してレースでいっぱい走りたいと純真爛漫という言葉が似合う語り口だった。

「走るのが楽しい……か。私には中々なかつたなあ」

「そうなんですか？ 走るのが嫌いだったり……？」

「そんなことはない。ただ、走るのが好きというより、勝つのが好きなんだ。レースが好きなのかな」

子供の頃は鈍足でからかわれていたし、どちらかというといじめられっ子だった。

スぺのように周りにウマ娘はいなかったわけではないが友達が全然いなかったというのは共通点だ。

「勝つことが楽しい……ですか？」

「そうだ。まあ、スぺはスぺの楽しさを持つのがいいと思う。走ることを楽しめるのも才能だ」

「才能……でも、走って勝てたら、すごく嬉しいですね。負けたくないって思うし、私も勝つことが好きなのかも……」

「嫌いなウマ娘はあんまりいないだろうな」

ウマ娘の脚で走るとすこし遠くてもバイクだとそう時間はかからない、というか楽だ。

時々ヒトに「走ればいいじゃん」と呼ばれるが走るわけがない。走って済むならヒトは自転車を使わなくなるだろう。

トレセン学園に到着すると彼女を下ろし、校内はバイクを押し歩いて歩く。

「ありがとうございましたエツチャンさん！ バイクの後ろに乗るのも楽しかったです

「！」

「それはよかった。スペは栗東寮かね？」

「はい！ でも、今からランニングしてきたら門限までに戻ってこれないですよね……今日のトレーニングは難しいかなあ」

「なんだかんだで時刻は門限に差し迫っていて、今からまたランニングに行けば確実に門限を越えてしまうだろう。」

「しかしスペはなんだか走り足りないようで、そわそわとしていた。」

「私は休みの日ではあったが、少し体を動かしたい気分なのもあって彼女に提案した。」

「じゃあ、コースで一緒に走らないか？ 体を動かし足りないなら、手伝わしてくれ」

「いいんですかっ!? 是非お願いします！ ありがとうございますっ」

「スペは嬉しそうにニコニコしていた。表情豊かで、彼女が今、素敵な友達がたくさんというのはこの性格もあるのだろう。」

「私も出会ったばかりの後輩を好ましく思っていた。」

「私服からジャージに着替えてコースへ向かう。」

「でもコースを使うのは使用許可があるんじゃないですか？」

「基本的にはな。だがこの時間は門限が近づくから使うウマ娘はあまりいないんだ」

「そうなんですか！ ……あれ？ それって……いいんですか？」

「たまには」

純粹な後輩に事細かに色々言う必要はあるまい。

ウォーミングアップとしてストレッチから始めると意外と筋肉が柔らかいようだった。なんともバネのありそうな脚をしている。

「エツチャンさん、体固いんですね……」

「ま、まあな……結構柔らかくなった方なんだが……昔はこれが原因で体を痛めたよ。今では平均くらいか……GIで上位を走るウマ娘と比べるとやはり固いんだが」

「そうなんですね……柔軟は大切ですよね、やつぱり」

「怪我はな……やはり怖いよ」

相棒からも口酸っぱく言われたものだ。

特に体が固いから柔軟をたくさんしろ、と。そのかいもあって、入学時と比べると随分柔らかくなった。

トウカイテイオーなどと比べるとまだまだ固いと思ってしまうが、柔らかくても関節に負担が増えるらしいから難しい。

柔軟を終えるとWC（ウッドチップ）コースをゆっくり走り出す。

軽く走りながらスベに話を聞くと、レースの駆け引きがわからず、最後までスパークが続かなかつたり、逆に最後まで伸びきれなかつたりするらしい。

レース経験が乏しかった彼女ならではの悩みだろう。

多くのウマ娘はトレセン学園に来る前からウマ娘のレースに参加経験がある子が多いという。

私も活躍してた訳では無いが、参加は何度かしていた。

「ならばそのトレーニング方法を教えよう。といっても、やったことあるかもしれないが……」

私はストップウォッチを取り出した。ラップタイムまで測れる優れたもので中々に勇気のいる出費だった。

だが買ってからはしばらくこれを使うためにタイムを測るメニューをたくさんしてしまっただけに気に入っている。

「これからやるのはペース走だ。まずは自分の体内時計を正確なものにする。その上で自分が何秒で走れるのか、何メートルからスパートをかけるかを考えていけばいい」

「ペース走ですか……あつ、共同トレーニングとかではやったことありました！ そのときは1ハロンを20秒くらいで走ったりして」

「普通のペース走はそうだな……だが、これからやるのはそんなに甘いものじゃない。スベ、目標にしているレースはないか？」

「えっ……と。その……に、日本ダービー……です」

「わかった。それを基準にしよう」

ちようどトレセン学園の芝コースは1周2400mとちようど測りやすいようになっている。

スタート地点へ向かおうとすると、スベが目を丸くしていた。

「どうしたスベ」

「あ、え、えっと、わ、笑わないんですか……？」

「なんで笑うんだ。ひよつとして何かジョークでも言っていたのか？ 会長くらい面白いジョークでないと中々笑わないぞ私は」

「そ、そういうわけじゃないんですけど！ なんだか……これを言うと、笑われることが多い。自分でもわかるんです。デビュー前のウマ娘の無謀な夢だつて……」

私はなんとも言えない気持ちになった。

トレセン学園は本気でダービーを目指すウマ娘たちが多くいる、と言いたいが、やはり現実を知ったウマ娘たちは多くいる。

その中でデビュー前で現実を知らないウマ娘の夢を笑うのは、まああることだ。

「スベ。夢を口にするのを、恥じるな。恐れるな」

「夢を口にする……ですか？」

だとしても、夢は口に出すことで強く願うようになると思う。

きつとダービーを目指すことは強力なライバルや越えられない実力差、そして苦難が多く降りかかる道だ。

だとしても、夢を口にする強さを持つ彼女にはダービーを本気で目指し、勝利して欲しいと思った。

「よし、これからのペース走は私のダービーのタイムと同じラップタイムで走ってもらおう。少し遅めにするつもりだったがね」

「え、ええっ!? そ、そんなタイムで走るなんて……!」

「スぺ。走れるかどうかは考えなくていい。走るのか、走らないのか、どっちだ?」

「……走ります!」

芝のコースで、スペシャルウィークは合図とともに走り出した。

デビュー前のウマ娘らしく、スペシャルウィークの走りはまだまだ未熟で、フォームから作っていかないとならないレベルだった。

それでも、私が指定したラップタイムで走る姿は楽しそうで、輝いて見える。

「うあああああつ!」

「スぺ、苦しいだろうが踏ん張れ! ラスト一ハロンだ!」

ペースが落ち始めても、スぺは諦めていない。

最後の一ハロンはさらにペースが落ちるかと思われたが、粘っていいタイムを維持し

た状態でゴールを駆け抜けた。

走り抜けるなり、スベはターフに座り込んだ。

「はあ……はあ……ふへえ……もう無理です……」

完全にガス欠になっていたが、記録したタイムを確認する。総合タイムはまだまだG
Iクラスには程遠いが、最後の2ハロンはなんと1秒台を記録していた。

まだデビュー前とはいえど光るものを持つている。

いずれ彼女は強力なライバルになるだろう。だが、冷や汗なんかよりも、いつか共に
レースをしたいという思いが強かった。

「スベ」

「はあ……へえ……エッチャンさん……タイムは……？ 結構いい感じ……だったんで
すけど……はあ……ダービーに届きますか？」

「いや、届いてない」

「そんなあ〜!？」

「だが、最後の踏ん張りは見事だった。今のように一生懸命トレーニングを積めば、ダー
ビーに手が届くかもしれない。スベ、君の武器は素晴らしい末脚と、決して諦めない根
性だ」

私も昔、母には言われたな。諦めない根性が才能であり、きつと強くなれると。

そう思うと、スペには自然と声をかけていた。

「諦めない根性……」

「ダービーは才能や努力だけでは勝てない世界だ。運も必要になる……だが、スペにはそれを手繰り寄せる力があると信じている。頑張れ、スペ」

へたりこんだままのスペの頭を撫でる。

スペは目を細めてそれを受け入れてから、真面目な表情を浮かべて元気よく「はいっ」と返事をした。

気持ちのいい返事に、私は破顔した。

このあと、寮の門限を超えるまでトレーニングに付き合った。そして門限をオーバーしてもバレないように抜け道から部屋に戻る方法を教えて、スペには秘密にしてくれと指を立てたのだった。

そんな姿をスペと同室らしいスズカに「スぺちゃんに悪いことを教えないで」と咎められたのは別の話。子供じやあるまいし、何故母親めいたことを言うのかとからかおうかと思っただが、サイレンススズカからエアグルーヴへ私の余罪を告げ口されたら中々面倒だ。

私は適当に相槌を打ってその場を後にした。

スペがスズカに向ける目は親しみと憧れだったが、それに近い視線を送られて、少し

気分が良かったのは秘密だ。

×××

天皇賞・春で脚を痛めた俺は、獣医から右前脚骨折と診断された。

結構すっかり折れていて、手術が必要だと語られた時の黒井先生やケンちゃん、西京さん、そして妹ちゃんの表情はとて沈痛なもので、俺まで落ち込んでしまった。

牧場に戻ると早速手術で骨の整復を行い、しばらくは放牧ということになった。

「獣医です。手術は問題ありませんでしたが、経過を追う必要があるでしょう。全力で走れるようになるには早くて今年の冬ですね」

「そうですか……有馬記念を目標に進めていこか……実際は年明けが初戦になるやろうが」

黒井先生は獣医からの診断結果を受けて、そう言葉を締めた。

とても悔しそうで、きつと俺にそれだけ凱旋門賞の期待をしていたのだろう。

応えられなかったことが悔しくて、申し訳なかった。

ケンちゃんは下手に乗ってしまった、と肩を落としていた。その他の競走ではちゃんと勝っているあたり、プロだなあと思った。

俺はどうだろうか。最初は落ち込んだ。

妹ちゃんもすぐく心配していて、今後も走れるのか、走れなくなったら廃用になつたりしないか、しきりに心配していた。

そんな様子を見ていたから、何時までも落ち込んでいられないと自分の出来ることを探した。

まず、獣医の言いつけを守った。

何を言ってるんだと思うだろうが、獣医が体重をかけるなどいえば可能な限り免荷し、体重をかけていいといえれば少しずつ体重をかけた。

最初こそ獣医は訝しんでいたが、こちらが理解しているのではと思い始めてからは事細かに言うようになった。

しかし、これが意外と難しかった。

そもそも骨折して、手術をしたわけで、脚が痛い。

その中で体重をかけないようにしつつも、サラブレッドのような大型哺乳類は運動をしなければならぬから動き回って余計に他の脚が疲れたり、うっかり脚について激痛に悶絶したり。

今度は体重をかける段階になつては痛みがある。

容易に体重をかけられないのが本音で、そりゃあ人間も医者言うことを聞かないよ

なあと思ひ出したりしていた。

「兄上！ 兄上！ 私は兄上が復活してくれることを信じています！」

「ありがとうブレちゃん。それはそうとなんでここにいるの？」

「ダービーに間に合わなかったので放牧すると調教師殿が！」

半弟たるブレイヴステップも夏が近づくと牧場に放牧されていた。

なんでもダービーに出走するべく青葉賞に出走したが完敗、夏競馬途中からの復帰の前にリフレッシュということらしい。

兄弟ダービーは叶いませんでしたがジャパンカップがまだありますね！ と言ってのけたこいつは俺より大物だと思う。

競馬はダービーに始まり、ダービーに終わるといふ格言が終わる。

ちようど先日、上半期の締めくくりともいえる宝塚記念も終わったが、俺が放牧治療されている間に競馬界ではビッグニュースがいくつもあった。

「トップガンは怪我で引退、クラシックではサニーブライアンが皐月賞と日本ダービーで2冠達成。この前の宝塚記念ではマーベラスサンデーが勝利。サクラローレルは予定通り凱旋門賞をめざし、まずはフォワ賞へ……か」

こうして見ると、三強世代に同期たちは敗北してしまったという形になった。

俺も完敗したためか、去年クラシック世代は弱いという風潮すら競馬雑誌では書かれ

ていた。

「負けは負けだからなんとも言えん」

一応、去年は天皇賞・秋とジャパンカップはこの世代が完勝したはずだったが、斤量とか成長分とかの話がされているのだろう。

とにかく俺に出来るのは、早く怪我を治すことだけ。

そんな風に、集中していたのが良かったのだろう。

夏競馬が始まって少ししたくらいで、獣医からは思いのほか早くに怪我が治ったから予定を前倒しして入厩できると言われた。

「流石グレ坊や。これなら秋の天皇賞に余裕を持って間に合うで。京都大賞典でひと叩きできるわ」

「しかし黒井先生、どうせならもつと時間を空けてもいいのでは？」

「流石に調教を見てレースに出走するか否か決めるで。とはいえ、グレ坊の気質を考えるとあまり間隔を空けたくはないな」

厩舎に戻るとスタッフたちは皆が喜んでいたが、先生と西京さんだけは喜び一色ではなかった。

競走馬が怪我した場合——人間のアスリートも同じだが、怪我以前のパフォーマンスを発揮するのが難しいこともある。

俺も全速力で走るのはほとんどやっていない。

少し不安もあるのだが……。

「エツちゃん怪我治ったんだね！　よかったあ……エツちゃんの怪我が酷かったらどうしようって……治療している間もずっと寂しかったんだよ？」

「ご心配おかけしましたダンスパートナーさん。ここからまた頑張っていけますよ」

「そうだよね、そうだよね！　また一緒に走れるの、楽しみだなあ」

ダンスパートナーさんはニコニコして俺がいない間に厩舎で起きたことを話してくれる。

誰が勝って誰が負けてとか、そういうことがメインだったが、その中でなんでも大型新人が厩舎にやってきたという話になった。

「先生も来年のダービーでは2連覇だつて期待してたよ。今は朝の運動に行ってるけど……あ、戻ってきたよ」

馬房にやってきたのは俺と同じ黒鹿毛のサラブレッド。

ダンスパートナーさんがその馬のことを説明してくれる。

「彼が今年から入厩したスペシャルウィークくん。若いけど落ち着いててかつこいいんだよ」

「……確かに、いい見た目をしてますね」

「わ、私はもちろん、エツちゃんの方がいいな〜って思ってるんだけど……あれ？ 聞いてないね……」

俺は馬房の中からスペシャルウィークに声をかけた。

歳をとるのは早いもので俺も既に古馬、調教でもガンガン走っているから気づけば厩舎のボス格のようになっていた。

だからこそ、打ち解けられるように声をかけなければという責任感で声をかけたのだが――

「君がスペシャルウィークか？ 俺の名前はグレートエスケープ、よろし――」

「貴方がグレートエスケープさんですか!？」

「ここらこらく。馬房に入るぞー」

「はあい」

凄まじい勢いでこちらに振り向くと視線がこちらに固定された。

厩舎スタツフがスペシャルウィークを引っ張って馬房に入れたあとも、スペシャルウィークは顔を出してこちらを覗き込んでくる。

「あ、ああ、俺がグレートエスケープだが……知り合いだったか？」

「いいえ！ でも本物のグレートエスケープさんだあ、すげえっ！ すげえすげえすげえっ！ マジモンだ、マジモンのダービー馬だあ〜！」

目がキラツキラしてる。

俺は困惑し、普段からこんな感じなのかとダンスパートナーさんに目で訴えると彼女は首を左右に振った。

普段は礼儀正しいがどこか一線を引いたような馬らしい。こんなあけすけに感情を見せる姿は初めて見た、と。

「し、知ってるようで光栄……だ……?」

「知ってるに決まってますよ! ダービーだけでなくジャパンカップまで勝った現役最強馬! 一緒に厩舎に入って教えを受けることもできるなんて僕はすごい幸せもんですよ〜!」

ここまでくると大袈裟すぎておべっか使ってるように聞こえてくる。

それでも褒められているのだから、悪い気はしない。

こうやって慕ってくれる以上は色々と助けてやらなきゃなと思うんだから自分もチヨロいとは思う。

だが、今の俺は再起を図る挑戦者の立場だ。

あまり構っていられる余裕はない(普通競走馬がほかの馬に構うこと自体があまりないが)。

「まあ、何かあったら言ってくれ」

「ありがとうございますっ！　なんて優しい馬なんだ……実力だけでなく気性も素晴らしいとか、ずるいなあ〜」

もうすぐ俺の乗り運動の時間らしく、西京さんやスタッフがやってきた。

準備するのを待つ間に俺はダンスパートナーさんに言った。

「随分人懐っこい……馬懐っこいやつですね」

「スタッフの言うこともよく聞きたい子なんだって。サンデーサイレンス産駒とは思えないよ」

俺はその言葉を聞いてピシリと固まった。

「サンデーサイレンス産駒……？」

「うわっ、すごい顔」

「……あんない子が、あの頭のおかしいサラブレッド展覧会の仲間……？」

「エツちゃん、私も一応サンデーサイレンス産駒だよ……う？」

俺はぼかんとした。

「いやいや、ダンスパートナーさんはサンデーサイレンス産駒ってわかってますよ」

「あれっ!?　エツちゃんの前でそんなところ見せてないでしょ!？」

「俺が2歳のときすごい反抗してたし、ゲートに縛り付けられてたり、それより前もやんちゃしてたって聞いてましたよ」

「あううううう……！　知らなかった、よりによってエツちゃんに知られてるなんてえ
く……！」

悶絶するダンスパートナーさん。彼女にとつては黒歴史だったらしい。黒井先生に
初対面から反抗したがその後のゲート調教で徹底的に躡られたつて厩舎のスタッフが
言っていたくらいだから、女番長並に気性が荒かったのだろう。

元ヤンがバレるほんわか系先輩。

俺に対してはあくまでそうやって接していたが他の先輩や厩舎のスタッフにはバリ
バリ地が出ていたなというのが本音だ。

例：グレートエスケープが見ていないと思ってる時のダンスパートナーさん。

「またゲート練習!?　チツ、やんないわよ大体後ろから差せば多少遅れても問題ないだ
ろうがわかってんのかこちとらオークスマだよ舐めんじやないよアアン!？」

(おー……ダンスパートナーさんすごい荒れてるなー)

ダンスパートナーさんは項垂れたまま言葉を漏らしていた。

「もうお嫁に行けない……」

「周りが許せば俺が貰いますから。じゃ、朝の運動行ってきまーす」

スタッフに連れられて歩き出す。

今日は軽く運動した後に調教馬場で15―15（1ハロン15秒のペースで走るこ

と)をやつて問題なければ本格的に強めの調教を再開していく予定だ。

足の調子は悪くない。鼻歌交じりにばかばか歩いていると、黒井先生とケンちゃんが話しているのが見えた。

「先生、ケンちゃん、おはようございまーす」

軽く嘶いて挨拶をすると通じたのか、二人も一言挨拶を返してくれた。

言葉は通じなくとも心は通じ合えるくらいの仲ということ。

チームグレートエスケープはこれまでずっと一緒に戦ってきたんだから、これくらいのやりとりは普通だし、これからも一緒に戦っていくんだ。

「えっ、グレ坊は京都大賞典から復帰するんですか!？」

「怪我の調子が良くてな。天皇賞・秋の前にここで叩こうと思う。そのあとはジャパンカップ、有馬記念と使っていくで」

「まずいつすね……いや……実はシルクジャステイスの依頼を先に頂いていて」

「シルクジャステイスか。ええ馬やな。グレ坊ほどじゃあらへんが。けど、そいつは3歳馬やろ? 古馬混合重賞とは関係ないやん」

「この前の神戸新聞杯で8着に負けたんすけど……菊花賞前にもうひと叩きするということまで京都大賞典に出走するんすよ。先生もグレートエスケープの復帰は早くて有馬記念、多分年明けと聞いていたので……年内はシルクジャステイスに騎乗すると約束し

たんすよ」

「……そうか……代わりの騎手を探さなアカンな……わかったわ。天皇賞は問題ないやろ？ とりあえずそこは乗ってくれ」

「すみません。まさかグレ坊がこんな早く復帰するとは」

「俺も驚いたしな。うーむ、どうしたもんか……」

……チームグレートエスケープ崩壊してるやないかい。

乗り替わりは騎手の常、しかし若く優秀な騎手かつ、デビューからずっと乗ってくれていたケンちゃんではなく別の騎手が乗るとなると、不安を隠しきれなかった。

京都大賞典まであと数週間。

怪我による調子の低下から、乗り替わりという問題まで出てきて、一気に心細くなってきた。

——この時の俺は、競走馬が、アスリートが、怪我をするとはどんな意味を持つのか、まだ知らなかった。

第21話 踏み出す恐怖

騎手というものは基本的に先約優先となっている。

確かに実力がある騎手には期待馬や素質馬の依頼が多くかけられ、結果として勝利もしやすくなる。

だがしかし、実力があればいいというものではない。いくら腕があろうと、馬の力が足りなければ勝つのは難しい。

そんな世界で実力はあっても横暴とか、馬主や調教師との人間関係を軽視した振る舞いをしていればいい馬はいずれ回ってこなくなる。

結果として、毎年全国リーディングジョッキークーランキングのトップ10に入る梶田健二も例に漏れず、俺より先約の馬に乗ることになった。

「むううう……わかつている。わかつているが、ケンちゃんはなんで俺を選んでくれなんだ」

「仕方ないよエツちゃん。ずっと同じ人が乗ってる方が珍しいくらいだし」

馬房でむっしやむしやとご飯を食べながら愚痴るとダンスパートナーさんは慰めてくれた。

G Iではなく、ケンちゃんに乗る予定のシルクジヤステイスも、俺も先のG Iを見据えたG I Iなのだから先約を優先するのはわかる。

とはいえ、だ。

仮にも日本ダービーやジャパンカップといった大きなレースをコンビで勝利したのだから、それを差し置いて優先してくれてもいいじゃないか。

「今回だけは……」

とか言ってくれたってバチは当たらなかつたんじゃないか。

やっぱり若いからか？ 若い子の方がいいのか？

将来性があるから若い子の方を今のうちに乗っておこうってことなのか？

「納得いかない……」

「エツちゃんなんだか子供みたい……可愛い……」

「大人気ないのはわかってるんですけど！ デビューからずっと乗ってきた戦友ですよ。その戦友が1歳年下のどこの馬の骨ともわからん奴を優先するんですよ！ これが怒らずにいられますか！」

むっしやむっしや飼葉を食べきると、ご馳走様でしたとばかりに桶を叩く。

厩舎スタッフの白村が「美味しかったか？」と撫でてくれたのでお礼のつもりでぶるるっとなだんだん。

すると、隣の馬房がダンスパートナーナーさんの場所だが、もう反対側の隣の馬房から返事があった。

「エスケープ先輩ツ、エスケープ先輩！ エスケープ先輩次は京都大賞典で復帰するんですよね！ 僕すっげえ楽しみです！」

「スペシャルはどうしたんだ急に」

「え？ いや、なんか元気づけようと思ったんです、僕！」

「元気か。怒りで一周回って元気だよ、俺は」

「そうだったんですか!? 僕気づかなかったつす！ すげえつ、こうやって周りを欺いていくんだなあ……てつきり僕、エスケープ先輩は怖がってると思ってました！」

びく、と耳が動く。

少し離れた馬房でやり取りを聞いていたらしい1歳下や同い年、年上の僚馬たちがぶつぶつと語り合っていた。

「オイオイオイ、死んだわアイツ」

「ほう、厩舎の看板にしてボスのグレートエスケープさんに煽りですか……大したものですね」

「死んだわアイツ……」

俺のことそんなに怖がってるの？

ただ2歳で入厩した時にいた先輩はダンスパートナーさんを除くとかなり減ってしまつた。

よく考えたら2年くらいしか経っていないのにな。

時が経つのは早いと言うべきか、厩舎にいる競走馬の入れ替わりが早いと思うべきか。

とにかく周囲の先輩からスペシャルに対するこいつやつたわみたいなの雰囲気が出ていた。

「で……誰が怖がつてるって？」

「エスケープ先輩ですよ。やつぱり怪我をして本調子じゃないのに、元々乗ってくれていた騎手も乗らないから不安なのかと思つたんです」

アホつぼく見えて中々鋭いらしい。

あんまりにも明け透けな言い様と、自分でも無意識に無視していた感情をぴたりと言いついでられて、恥ずかしい思いに駆られた。

俺は誤魔化すようにそつぽを向いた。

「別にそんなんじゃない」

「そうですよね！ エスケープ先輩がそんなことで怖がらないですよね！」

まともだと思つてはいたがこいつも大概……と思つたが俺は何も言わずにいた。

そんなこんなで脚の調子も問題ないため、追い切りが始まったが、夏競馬のこのシーズン、騎手たちは東北や北海道にいる。

そのため厩舎に所属する調教助手の白村が跨って走るのだ。

最初こそ騎手に比べて重いし動きづらいいしで好きではなかったがここまで来ると慣れたもの。

今日はウッドチップコースで馬なりに走るよう指示が出ていた。

「よっし行くぞー」

馬なりというのはジョッキキーが追ったりムチを叩いたりせずに走ることだが、俺が勝手に速度を出せばその分早くなる。

とりあえず今日は徐々にスピードをあげられるように脚に力を込めた。

ウッドチップ、つまり木片を踏みしめる音が心地いい。

すっかり競走馬として走るのが好きになってしまった自分に違和感がなくて、久々に人に乗せて走る感覚を素直に楽しんでいた。

栗東のウッドチップのコース、通称CWコースは6Fと結構な距離がある。元気になる、馬なりとはいえ病み上がりだと中々スタミナにくるコースだ。

脚に痛みがないことを確認するとスピードを徐々に上げていく。

なにもベストタイムを出すつもりはないが、遅いタイムを出しても仕方ない。しっか

りと力を込めて6Fを走り切った。

だいぶ良い感触だ。再入厩後の1本目の追い切りかつ馬なりと考えると良く走ったほうじゃないだろうか。

コースから引き上げ、白村が俺から降りて黒井先生と話す。

俺の感触とは裏腹になんともいえない表情を白村は浮かべており、黒井先生も腕を組んで難しい顔をしていた。

「イマイチですね」

「イマイチやな」

あるえー？

とはいえ、半年以上調教から離れていたことはなく、初めての体験をしている。

白村も、黒井先生もそこまで深刻そうな顔はしていなかった。

「まあ、怪我明けて最初やしな」

「馬も気持ちはまだ入っていないでしょう。反応にずぶさもありません」

「せやな。また少しづつ強くして、2週間前にはダンスパートナーと併せるで。あくまで京都大賞典は叩き台やし、レース感覚を取り戻してもらえばそれでええ」

気持ちが入ってない、感覚をとりもどせばそれでいい……なんだか二人がまるで俺がそこまでやる気を出していないような口調で、少し引つかかる。

とはいえタイムに出ていないのなら口で言っても仕方ない。

今日のところは馬房に戻ると、ダンスパートナーさんが嬉しそうに話しかけてきた。

「ねえエツちゃん聞いた？ 京都大賞典が復帰戦らしいけど、私も出走することになったんだよ！ 去年のジャパンカップ以来だよ！」

「去年はダンスパートナーさんは結構レース間隔も狭くて大変そうでしたからね。今回はお互いに疲れなく挑めますよ」

「その通りその通り！ 本当はG1レースと一緒に走りたかったけど……」

本当は今年の宝塚記念と一緒に走る予定があった。

しかし俺が骨折したことでそれは叶わず、ダンスパートナーさんはマーベラスサンデーとバブルガムフェローに遅れて3着という結果だった。

次の京都大賞典では真剣勝負が出来る。それが楽しみだった。

「エツちゃんの復帰戦だけど容赦しないからね〜？」

「もちろん。負けても惚れないでくださいいね」

「ええー……もう、惚れてるけどな……」

「そうなんですか？」

「ごめん今の無し!! 無し!! 冗談だからね!! ち……がくはないけど、そういうわけじゃないからねっ!!」

隣の馬房からスペシャルウィークの「ダンスパートナーさんってエスケープ先輩のこ
と好きなんですすね！ すげえっ、ダービー馬の先輩すげえっ！ オークス馬も惚れさせ
てる！」と空気を読まずに褒めて？ 煽って？ とにかくヤジがとんできた。

ダンスパートナーさんは恥ずかしそうに馬房の中に引っ込んでしまったので、俺は寝
藁を噛んでスペシャルウィークに投げつけた。

「それ食ってろ」

「ふあい」

もぐもぐと本当に食べたが俺は突っ込まなかった。

とにかく、ダンスパートナーさんとのレースだ。GⅡとはいえ万全の状態で戦いた
い。

そして、ケンちゃんが乗るシルクジャステイスとかいう年下の奴にも簡単に負けてい
られない。俺は闘志を燃やした。

そんな俺の熱意とは裏腹に、調教タイムは中々良化しなかった。

今回はCWを単走で一杯に追われながら6Fを走った。自分の中ではかなり力を込
めて走り切ったはずだったが、実際の調教タイムは平凡……もちろん、GIレースに出
走するだけのタイムは出せているが、勝ち負けしていたこれまでと比べると明らかに遅
い。

最初こそ杞憂だろうという雰囲気だった白村と黒井先生も流石に難しい表情をしはじめた。

「リズムはいいんですけどね。反応はしてくれているし、あくまで乗り手の合図で動いてますから」

「純粹に速度が出えへんな。筋肉の戻りも今年の春とまではいわんが去年の勝つとつた時期くらいはあるんやが」

「あと3週間で京都大賞典ですね……」

「まあ、レース使えば変化はあるやろ。あくまで大目標はジャパンカップ連覇、京都大賞典と天皇賞で態勢を立て直すつもりでいくんや」

「大目標はジャパンカップなんですな、有馬記念じゃなくて」

「凱旋門賞に挑むはずだったダービー馬が力を見せるならジャパンカップしかないやろ」

次の週からはダンスパートナーさんと併せ馬をすることになった。

栗東トレセンの坂路を駆けあがっていく。

普段のほわほわとしたダンスパートナーさんは真剣な表情で俺を追走し、しっかりと先着している。

何度も併せ馬をしたことはあるが、ダンスパートナーさんはこんなに速かっただろう

か。

「ふっ……ふうっ……はぁ……息の入りはいいはずなだけだな」

「……エツちゃん、まだ脚が良くないの？」

引き上げる途中でダンスパートナーさんは不安げに尋ねてきた。

「そんなことはないですよ」

「……きつと不安だと思うけど、大丈夫だよ！ 何かあったら私に言ってね！」

「……ええ」

彼女の励ましに取り繕い切れずに、ぽつりと答えた。

脚に痛みはない。ただ、繰り返しの追い切りで感じたのは前ほど動きが良くないという感覚だった。怪我というものは、アスリートにとって非常に厄介なもので、競技に参加できなくなるだけではなく、その後のパフォーマンスにも関わるという。

骨折や靭帯損傷に至っては体の感覚の違いや動きの変化で思うように動けなくなってしまうのが、恐ろしいところ。

ひよつとして、いやひよつとしなくとも、俺もそういう状態に陥っているのだろうか。徐々に生まれてくる焦り。

そして迎えた京都大賞典前の最終追い切りではレースで騎乗するジョッキーが跨ることになった。

「おはようございます」

厩舎にやってきたのは全国騎手リーディングを5年連続で獲得している天才騎手、滝カナタだった。

これまでダンスパートナーさんの追い切りに乗るところを見たことはあるが、当然俺に騎乗するのは今日が初めてだ。

黒井先生が滝騎手と話す。

「カナタ、お前には是非ともダービー馬の感想を聞かせてもらいたくて依頼したんや」

「あのときは覚えてますよ。ダンスインザダーク乗ってた時はこれはダービー勝てるかなって思っていましたから。健二は良い馬乗ってるなあと思っていましたけど、まさかダービー勝たれちゃうとは。良い馬とはダンスパートナーの調教のときから言っていましたけど」

「せやろ。ただ怪我してからなんだかズブい様子でな。天皇賞はエアグルーヴやろ？」

「ええ、依頼はいただいていますね。健二はシルクジャステイスを選んだんですね」

「本当は怪我が長引くと思ってたんやが思いのほか悪く無くてな。ただ、どうも身が入ってないのか、走りが元に戻ってこんのや」

「二度怪我すると元に戻らなかつたりしますからね。ナリタブライアンも結局戻りませんでしたから」

カナタさんと黒井先生が厩舎前にやってくる。

西京さんの肩を借りるとカナタさんはひよいっと俺に跨った。

なんとなく感じていたが、トップジョッキーは騎手にしては長身で少し驚いた。とりあえず、跨ったカナタさんが何かを確かめているのに任せてじっとしていた。

「すごい利口な馬ですね。頭が良いんでしょうね……レースで結構引つかかるところを見てたので、もっと気性が荒いと思ってました」

「せやろ。こいつは根性があつてな、負けん気があるからレースですぐ熱くなるんやろうな。結構悪戯好きやが調教では言うこと聞かし、ええ馬やで」

「そうですね。いいんじゃないですか」

ぼんぼんとカナタさんが俺を撫でる。

焦りや不安があつたが、流石に天才の名を欲しいままにしているトップジョッキーからのお褒めの言葉に、少し気をよくしていた。

すると、同じく併走する予定のダンスパートナーさんが近寄り、じっと見つめてきた。

「じーっ」

「な、なんですか」

「私が慰めた時はそんなに喜ばなかったのに。あの騎手が褒めたら喜ぶんだ……」

「えっ、ち、ちが、そういうわけじゃないですよ!？」

「ふーん」

「ダンスパートナーさんってばあ」

「っーん」

拗ねてしまったダンスパートナーさんに困惑していると、彼女はくすりと笑った。

「うそうそ、元氣だしてくれてよかった。今日も併走頑張ろうね!」

「嫌われたかと思いましたがよ」

「嫌われたら嫌なの?」

「そりゃあそうですね。だって俺、ダンスパートナーさんのこと——」

「調教行くぞ〜」

白村や西京さんが割り込んでくると俺とダンスパートナーさんを引っ張った。

ダンスパートナーさんはぼかんとしたあと、激しく身震いした。

「なんで! このタイミングなのっ!」

「うわ、ダンスパートナーかっかしてなあ……どうどう」

「むふー!」

暴れるダンスパートナーさんを後目にカナタさんの案内に従い調教馬場へ向かう。

最終追い切りは栗東坂路で併走。少し強めに行き、反応やリズムを大事にするというのが

黒井先生からの指示だった。

「いきますー！」

俺が先に走ってダンスパートナーさんが追走する形になる。

走り出して感じたのは、体の軽さだ。

足ではなく、体が軽く、とても走りやすい。

騎手と調教助手はそもそも体重や技術が違うから、騎手の方が動きやすいと感じることは多いが、それでも滝力ナタさんが乗るとケンちゃんのと看以上以上に感覚が違った。

「……エツちゃん、調子が戻ってきたのかな？」

少し後方を走るダンスパートナーさんがそう言うのと、俺は少し悩んでから、残り2Fで再度加速した。

脚に痛みはなく、カナタさんは邪魔せずに走らせてくれる。

そのままダンスパートナーさんに先着し、久々にいい感覚で調教を終えた。

これなら京都大賞典も『いいレース』ができそうだ。

「悪くは無いですけど……こんなものですかね」

「迫力不足だな。まあレースを使わんとわからんわ」

そんな俺の感想も騎手とテキにぶつた切られてしまったのだが、あまり悩まないことにした。

今の俺にできることはもうないのだから。

——そして迎えた京都大賞典当日。

オッズは1・8倍と文句なしの人気で俺はパドックを歩いていた。

ファンたちが手を振り、声をかけてくれる。

体重は515kg、春の天皇賞から6kgの増加でコンディションが整えられていた。

「よう、先輩。今日はよろしく頼むわ」

のっそのっそやってきたのは3番人氣に推されたシルクジヤステイスだった。

今日出走するメンバーで唯一の3歳馬、まだ恐れを知らない若者といった風で、1番人氣がなんぼのもんじやいとばかりにふてぶてしい態度だ。

「ああ、よろしく」

「なんだあ、後輩がメンチ切ってるのに怒りもしねえのかい。腰抜けだなあ、せんばあい？」

「……挑発してペースを乱したいんだろうが、通じない」

「へえ、かつくい！ 大舞台の経験は足りてますっつか？」

「いや……頭のおかしい連中を見ると、それくらいじゃ動じなくなってきたな」

ヤンキー、ナルシスト、厨二病、ラッパー、多重人格（馬格？）、放尿マン……そういったら思えば、この程度の挑発は丁寧な挨拶みたいなものだ。

「……まあ、色んな経験してるってのはわかったよ」

そんな俺の目を見たのか、シルクジャステイスは少し落ち着いたようだった。時間が経たないうちに、テキヤ騎手がやってくる。

カナタさんがまたがる前に、妹ちゃんが俺の前まで来た。

「今度こそ無事に……走ってきてね。滝騎手、黒井先生……よろしくお願いします」
優しく額を撫でる妹ちゃんは俺のことをとても心配しているようだった。

サラブレッドの骨折Ⅱ死のイメージを持つ人だつて少ないし、それが間違いだとも言えない。

随分と心配をかけてしまったんだと俺は申し訳なくなつた。

今日はきつちり勝つて、グレートエスケープが復活したと知らしめない。

カナタさんが俺に跨るのと同時に、ケンちゃんが青と赤の勝負服を身にまとい、シルクジャステイスに跨るのが見えた。

いつもの橘ちゃんが決めた赤と黒の勝負服ではないものを着ているのは新鮮で、今日は本当に敵同士だと思うのが少し寂しかった。

(でもいいんだ。勝つて後悔させるくらいのもりでいくんだ)

本馬場へ入り、ゲート前で待機する。

京都大賞典はG I Iだが、天皇賞やジャパンカップへ展望を向けたG I馬が集まるスーパーG I Iとして有名なレースだ。

東京では同じく毎日王冠が行われ、競馬ファンの注目度が高い一日だけあって、観客の数は他のGIIよりは多いようだった。

『バブルガムフェロー、バブルガムフェロー！ 斤量差もなんのその、悠々押し切り勝ち
ゴールイン！』

ちょうどターフビジョンでは一足先に行われた毎日王冠のレースが放送され、観客たちが歓声を上げていた。

毎日王冠はバブルガムフェローとジェニユインの他、3歳馬ながら安田記念に参戦し3着になったスピードワールドの3頭の戦いが注目されていた。

結果はバブルガムフェローの勝利に終わったらしい。

同期の活躍に、武者震いをした。

ここは負けていられないとばかりに、ゲートへ入る。

『京都大賞典、スタートしました。11番グレートエスケープがすつと前に出ました』
ゲートが開くと同時に前へ駆けだす。

他馬を制してハナを切るとペースを作っていく。逃げ馬があまりいなかったのもあり、俺がハナにたつとすぐにペースは落ち着いた。

人気していたダンスパートナーさんとシルクジャステイスは後方に控えている。

淡々とした流れになり、残り1400mのハロン棒を通過したところで鞍上の滝力ナ

タさんが呟いた。

「61秒かな」

(…………?)

『先頭のグレートエスケープは1000mを61秒3で通過しましたゆつたりとしたペースになっています。ダービー馬が復活するのか、オークス馬が男馬を打倒するのか、3歳馬がフレッシュユな力を見せつけるのか、向こう正面を通り坂の上りにかかります』

滝さんの乗り方とはかく柔らかく、重さを感じさせない騎乗だった。

それでいてペースを配分し、それを知らせるように合図を出したり、手綱を軽く動かしたりしている。

第3コーナーの坂を上り、下り始めても体力にかなり余裕があるように感じた。

後方から迫る馬蹄を聞きながら、俺は第4コーナーの植え込みを回り、先頭で直線を迎える。

合図の鞭が入ると同時に手前を変えて脚を踏み出す。

スローペースに落とし込み、体力が有り余った状態でスパートをかけられる。

流石はトップジョッキー。

ならばここからはエスコートに應えるのみ。

脚に力を込めて、俺は前へ飛び出す。

——飛び出した、はずだった。

「……………」

鞍上の困惑する雰囲気と、鞭が二度三度揮われる。

それ以上に不思議に思ったのが、自分だった。

「な……………え……………」

全力で走っているはずなのに、スピードに乗らない。

力を入れているはずなのに、芝生を思い切り蹴る感触が伝わってこない。

鞍上の鞭と追う動作で促されているはずなのに、前へ進まない。

『直線に入ってグレートエスケープ先頭、しかし内からダンスパートナー！ ダンスパートナー、その内を通ってシルクシルク、シルクジャステイス！ グレートエスケープは馬群に飲み込まれていく！』

後続の馬たちが俺を抜き去っていつても、それは変わらなかった。

結局、俺は直線では見せ場なく、なんと最下位の11着で入線という醜態をさらしてしまった。

走り終えて引き上げる俺に観客たちが罵声を浴びせた。

「ふざけんな金返せー！」

「ばかやろう、ばかやろう、ふぎけるなー!」

「カナタあー!　へタクソー!」

ターフの上をとぼとぼと帰る中で、罵声よりも遥かに重く心にのしかかったのは、走り切った感覚がまるでないことだった。

まだ体力が残っている。

もう1周、芝2400mを走れと言われても走ることが出来るくらいに。

それはつまり、今のレースを俺は走れていないってことで――

「エツちゃん!!　大丈夫、もしかしてまた脚を……?」

ダンスパートナーさんが近付いてきた。

レースでは惜しくも2着に終わったというのに、自分のことより俺のことを心配していた。

少し離れたところからは失望したようなシルクジャステイスと、心配そうなケンちゃんの二つの視線が俺に注がれていた。

それが悔しくて、苦しくて、情けなくて。

ダンスパートナーさんに俺は背を向けた。

「脚は……大丈夫、です」

「そう、なんだ。それなら……よかった……」

「でも、俺……走れなかったんです」

「え——？」

「すみません、先に行きますから」

がっかりしたような観客の雰囲気や他の馬たちから逃げるように馬場を後にする。心配して立ち尽くすダンスパートナーさんを置いて、俺は検量室へ向かった。

黒井先生も、西京さんも、俺のことについてはとやかく言うことはなかったが——かえってそれが、たまらなく苦しかった。

——レース後、騎手インタビュウでは。

11着、グレートエスケープ（滝カナタ騎手）

『スタートから第4コーナーまではリズムよく走ってくれて、直線では余裕もありましたが追い出してもスピードに中々乗りませんでした。馬は一生懸命走っていました。良かったときのパワフルな走りが中々出てきませんでした。久々の競馬で上手く力が入らなかったのかもしれませんが。調子が良い時にまた乗ってみたいですね』

×××

青い空、白い海、どこまでも続く砂浜、そして座礁したクルーザー。

「うう……ここ、は……どこですの……？」

すぐ傍から声がする。よろよろと砂浜から起き上がったのはメジロマックイーンだ。

「無事かお嬢」

「グレートエスケープさん……私たちは一体……」

「私たちはどうやらどこかの島に漂流したらしい」

「え……？」

メジロマックイーンは何が起きたか記憶を辿っている。

船の事故の原因を探るには数時間前に遡る必要があった。

『お嬢、助かるよ。トレーニングのために場所を貸してくれるなんて』

『礼には及びませんわ。スイーツ引換券を頂きましたし、ギブアンドテイクの関係です。』

それに、メジロ家のトレーニング場をG I ウマ娘が借りたともなれば、箔がつくというものですから』

『しかし……まさか島にあるとは思わなかった。クルーザーを持つことも予想外だ』

『ふふ、新鮮な反応が見られて楽しかったですわ。操舵手ができる使用人が体調不良で来れない時はどうしようかと思いましたが……まさかゴールドシップさんが船舶免許

を持っていてるだなんて』

『ああ、まったくだ。意外と多才なんだな』

『は？ ゴルシちゃんは船を操作したいとは言ったけど別にできるとは言ってるぞ？』

『え？』

『はい？』

『あ、前方に岩が』

……というわけだ。

「そうですわ!! どれもこれも全部ゴールドシップさんのせいですわ! いつまで寝てるんですの! 早く起きなさい!」

メジロのお嬢はゴールドシップをがくがくと揺らして起こし始めた。

呻き声をあげながらゴールドシップが体を起こす。

「なんだよ……ゴルシちゃん低血圧なんだからね……」

「貴方が低血圧なら森羅万象血が通ってすらいませぬわ! 早く起きなさい! そしてこの状況を見なさい!」

ゴールドシップは周囲をキョロキョロと見回した。そして目を見開いて身を震わす。

「大変な状況がわかったでしょう?」

「あ、あ……海めちやくちやキレーだなオイ！」

「あああ違う違う違う！ 違いますわ！ もっと見るべきところあるでしょう！」

「お海水すげえ冷てえ！ おらおらー、ゴルシちゃんスプラッシュユ！」

ゴールドシップが海に入ると水をかけてきたので応戦する。

グレートスプラッシュユ！ えいつ、えいつ。

「遊んでる場合じゃないですわ！ リゾート地に来たんじゃありませんのよ!？」

二人して首根っこを掴まれ砂浜へ放り投げられた。

そこで私はようやく重大なことに気がつく。

「まずい、大変だ……!」

「既に大変ですわ」

「スイーツ引換券が濡れてぐしよぐしよだ……」

「どうでも、よく……ないですわ！ あああ限定フルーツタルトがあ……!」

膝を突くマックイーン。

何を呑気に言ってるのか、私とゴールドシップは呆れるあまりため息をついた。

「お嬢、無人島に来てスイーツの心配をしている場合じゃないだろう」

「グレの言う通りだぜマックイーン。ちよつとは危機感を持てよな。常識を疑っちゃう

ぜ」

げんこつを食らった。

「まずやるべきなのは人がいるかどうかですわ。幸い大きな島ではないようですし、手分けして探しましょう。私は砂浜を探るので二人はそれぞれ島を回ってきてください。ついでに水や食料を見つけたらお願いしますわ」

「マックイーンだけ探す範囲狭くね？」

「ウマ使い荒いお嬢様なこと」

「もう一度いきみますか？」

「行つてきまーす!!」

ゴールドシップと二人で別れて島を走り回った。大きくないため少し探ただけで終わってしまった。

私が砂浜に戻るとゴールドシップが先に戻っていたようでお嬢に報告している。

いつの間にかお嬢は学園指定の水着に着替えていた。

泳ぐつもりだろうか。

「隊長! 報告です!」

「誰が隊長ですか。それで、なにか見つかりましたか？」

「でっけえカブトムシ!」

「きゃっ!?! ……? ゴキブリじゃありませんのツツツ!!」

「ああつ、すばしっこいから捕まえるのに苦労したんだぞ!？」

「違います誰があんな恐ろしいゴキブリを捕まえてこいといいましたか!？」

「マツクイーンだろ?」

「言つてませんわ!! 人かなにか見つけませんでしたかと言つてるんです!」

「壊れたスマホなら見つけたぞ」

「ああっ私のスマホじゃありませんか!!」

また打ちひしがれているお嬢に近づく。私としてはいい報告ができなくて少し残念だ。

「お嬢、なんで水着に?」

「服が濡れたからですわ。グレートエスケープさん……貴方はなにか見つけましたか?」

「可愛い子は見つからなかったな」

「ナンパですか!?! 何してるんですの貴方は。まあいいですわ……他に何かありませんでしたか?」

「ダンベル」

「ダンベっ……?!? 漂流したんでしょうか。まあ、いいですわ。いざというときは武器にもなりますわね」

メジロマックイーンの足元には荷物がまとめられていた。それについて尋ねるとカバンを開けてお嬢は解説し始めた。

「クルーザーに積まれていた荷物で無事なものを持つてきました。ほとんど濡れてしまいました」

「着替えに、おかし、おかし、おかし、そしておかし。おいおいグレ、お前スナック菓子ばかりじゃねえか、もう少しチョコとか持つてこいよ」

「キャロチは定番だろう。これさえあればなんとかなる」

「もうちよいバルボンの菓子とか持つてこいよ。見てみるよマックイーンの菓子を。ちやんとバルボンオリジナルアソートとか入れてるし、わかっただよ」

「当然です。お菓子を持つていくなら必ずバルボンのものを持つていきませんと。メジロ家では常識ですわ」

「わからなくもないが。バルボンといえばウマフオートだと思っ……うむ、やはり美味しい。クッキーの食感とチョコレートの甘さは幸福な気分にさせてくれる」

ウマフオートとはクッキーにチョコがコーティングされたお菓子メーカーバルボンの主力商品のことである。

チョコにはウマ娘のシルエットが刻まれており、かつてウマ娘がバルボンの社長を助けたことから感謝の気持ちを忘れないため作ったという。

この話を元に作られた番組では多くの視聴者が涙を流したといわれている。

「ウマフオートや、ウマンドは逆にみんなで持つてくるとダブリやすいだろ？ アタシは敢えてチーズおかきを推すな。甘いものを多く食べたらずししよっぱいものを食べたくなるだろ？ お、あるじゃん……うめえな！」

ウマンドは幾層ものパイ生地の中にココアクリームが入った、甘さ控えめのお菓子で、サクサクとした食感でつつい手が進んでしまう。

チーズおかきは香ばしい醤油で包み、濃厚で滑らかなチーズクリームを乗せたお菓子。

おやつだけでなくおつまみとしても問題なく、大人なヒトやウマ娘にも好まれる万能お菓子だ。

敢えてしよっぱさを選択するゴールドシップのクレバーさに舌を巻いた。

「私はやはりウマームロールですわ……あの食感に甘さ、子供の頃から変わらない『甘いものを食べたい』という素朴な願いを叶えてくれるまさにお菓子のお手本です。おばあさまが私が幼い頃、おやつにいつもくくださったのですが、そんな、優しい甘さが心地よくて……」

「お嬢の思い出の味なんだな、ウマームロールは」

「ええ。もちろんパティシエが作ったケーキやパフェも大好きですが、製菓会社のこう

いった商品もまた、愛していますから。もぐもぐ……やはり美味しいですわ」

ウマームロールはミニロールケーキをホワイトクリームで包んだ長きに渡って愛されてきたバルボンの主力商品である。

そんな流れで3人仲良く、無事だった荷物から出したお菓子を和気藹々と食している。

「ふう、スナック菓子が好きだがたまにはチョコやビスケットもいいものだな」

「ゴルシちゃんもついつい食べちゃったぜ」

「うふふ、ゴールドシツプさん、多めに食べてましたわね」

「あ、バレちゃった☆」

「んも〜二人とも食いしん坊さん♪」

「うふふ、美味しかったですわね……じゃ、ねえですわあああッ!!」

お菓子を広げた敷物をお嬢はひっくり返した。その勢いで私とゴールドシツプもひっくり返された。

「なんで貴重な食料をこのタイミングで食べてるんですの!! 唯一の食料ですわよ!?
これがなくなったら食料ないんですわよ!」

「マックイーンも食べてたじゃねえか、みんな三等分したからいいだろケチケチすんなよ。独り占めはよくないぜ」

「だから問題なんですわよ！」

「お嬢、お菓子食べて口が渴いただろう。これを飲むといい」

「あ……ありがとうございます」

ペットボトルに入った水を手渡すとお嬢はごくごく喉を鳴らして飲み干した。

私もゴールドシップにペットボトルを渡して三人で喉を潤す。

「流石に暑いだけあつて喉が渴く。こまめな水分補給をしないと脱水症状になってしまうから、気をつけろよ、二人とも」

「おう。ゴルシちゃんはこのうときはだし汗派だぜ！」

「塩分の補給もできていいな、それは」

「だろお〜？」

「塩分多すぎて喉が渴きますわよ、逆に。ところで……お水なんてどこにありましたの？」

「ああ、私が持っていたものだ。船の上は喉が渴くかと思つて多めに持つてきてよかった。ペットボトル三本あつたのが幸いだつたな」

「三本……？」

メジロのお嬢はそれぞれが持つペットボトルを見た。

どれも中身は空っぽであり、全員が無事水分補給を終えたところだ。

お嬢はペットボトルをバットののように構えると、往年の名選手を彷彿させるフルスイングで私とゴールドシップをかつ飛ばした。

「なんで貴重な水を飲んでしまっているんですかツツツツ!!!」

「いってーな! 何するんだよマックイーン! あたし達は最後の食料となるお菓子と飲水をイタズラに浪費したただけだろ!」

「そうだお嬢。飲み食いした食料や水は3日ももたない。今食べたところで問題ないだろう」

「おばかさんですの!? 3日分あれば助けが来る可能性がありますでしょう! なのに……ああ……もうダメです……私たちはこのまま何処ともしれない未開の島で白骨化していつかの未来にウマ娘の化石として展示されてしまうのですわ……」

項垂れるお嬢に、私とゴールドシップは顔を見合わせて首を傾げた。

一体何を言っているのだろうか。

「はあ……お家に帰りたい……トレセン学園に帰りたいですわ……」

「それはもう少し時間がかかると思うが」

「もう少しどころではありませんわ! もう無理なんです! 奇跡でも起こらない限り、元の場所へ帰ることは叶わない! あなた達と一緒にですわ!」

「いや帰れるだろ。船もうすぐ来るらしいし」

「……………え？」

「だから、船が来るんだって」

「時刻表からしてあと数十分といったところではないかな？」

お嬢が不思議そうに眼をぱちぱちと瞬かせている。

「ど、どうやって……………？」

「どうやっても何も、定期的にくる船なんだけだな」

「は？ 無人島ですわよ？ なぜ無人島に定期船が——」

「お嬢、何をわけのわからないことを言っているんだ。ここは無人島ではないのだが」

「……………は？」

私たちは一言もここが無人島だと言った覚えはない。

こここの反対側には漁港があつて、港町が小規模ながら存在する人口数百人くらいの島。

本州からクルーザーで1時間半ほどの位置にあるし、定期船も多くはないが出てくる。今はシーズンじゃないが、時期になると釣り人が多くやってくるらしい。さつき園いたらトレセン学園のウマ娘も釣り好きなお嬢が来るとか。

「グレートエスケープさん……………貴方先ほどおっしゃってましたわよね……………？ 可愛い子はいない、と……………どういう、ことですか……………？」

「そのままの意味だが、何か変だったかね」

「なんで本当にナンパしに行ってるんですの!？」

「皆さん大丈夫でしたか、船が転覆したとかなんとか」

砂浜に小走りでやってくる初老の人が好きそうな男性。

ゴールドシップが手を叩いた。

「あ、ゴキ……カブトムシのせいで忘れてたけどこの人が村長さんだつてよ。港まで車で送ってくれるつてさ」

「寮の門限にはなんとか間に合いそうで良かった」

「なー、流石に次はゴルシちゃん地下牢へ幽閉も有り得たからなー」

「私も一度あるがあそこは中々堪えるぞ」

「皆さん大変でしたね。私の車で港までお送りしましょう」

「村長さん、あんがとなー！」

「恩に着ます、村長さん。しかし素敵な島ですね。落ち着いたところにまた来てみたいですよ」

「お待ちしております。島の海から獲れる魚は絶品ですから……とところで、そこのお嬢さんはどうして水着を？」

「さあ？ マックちゃんったら綺麗な海があるから泳ぎたくなっちゃったんじゃないの

「？」

「お嬢はこう見えて結構強気なところがあるからな。暢気というのかもしれない」

「はっはっはっ、流石ウマ娘のお嬢さんは豪胆ですなあ。しかし、海の事故は危険です。あまり気を抜いていたらいけませんよ」

村長に連れられてゴールドシップと共にについていくが、お嬢は立ち尽くしている。

振り返るとぶるぶると震えている。

どうしたのだろうか、今更帰りたくないという気持ちが出たのだろうか。

確かに海はきれいで、釣りにリゾートに、なんでもできそうな島だ。周囲を回った時も街の人はみんな優しく暖かい人たちだったし、時間に余裕ができたなら是非来てみたい。

「な……納得いきませんわあああッ！」

「ギャー!?!」

「うわーっ!?!」

私とゴールドシップは突如として怒りだしたメジロマックイーンに、背負い投げを食らい見事海へ放り投げられたのだった。

第22話 誰かのために、自分のために

聖蹄祭ッ！ それは秋のファン大感謝祭とも呼ばれる催しで、トレセン学園のウマ娘が喫茶店やレストラン、屋台といったもので出店し、そこへファンやウマ娘の保護者が訪れるというトレセン学園でもトップレベルに大切なイベントなのである。

所謂、よその学校では学園祭とか文化祭と呼ばれるものだが国民的エンターテインメントを運営するURA、そしてそこに所属し、レースを走るウマ娘の総本山たるトレセン学園ともなればレースと並ぶほどの大規模なイベントになる。

大半のウマ娘はここに気合いを入れており、私も同じだったが——栗東寮の寮長、フジキセキから話をされたときは流石に後ずさりしたい気持ちに駆られた。

「で、どうだいエツちゃん。王子喫茶への参加は」

なぜなら参加を要請されているのが王子喫茶だからである！

「……本当にやるのか？ 無難にやるのが一番良いと思うのだが」

「おや、エツちゃんらしくない意見だね。でも無難といえは無難だよ？ 去年は執事喫

茶だったし、その上で大人気だったからね」

「それはそうだが、私に合うのか？」

「今年の春のファン感謝祭ではノリノリでライブをしていたじゃないか。王子様キャラは大反響だったらしいね」

「むう……」

春はスマートファルコン先輩に乗せられたというだけで。

去年は参加していないが、フジ寮長が仕切った出店は執事喫茶だった。

その教室の近くを通ったのだが、客の反応はすごいものだった。

「しかし、気絶者を出すのが無難か」

「そこは予想出来なかったからね……大丈夫、今回はすぐに搬送できるシステムを構築してあるから」

「気絶させることは前提なのか。ちなみにその王子喫茶、参加予定は誰がいるんだ？」

執事喫茶はフジキセキが仕切り、そこにエアグルーヴ、ティエムオペラオー、私は見ていなかったがルドルフ会長まで来たという。

錚々たるメンツで揃えた以上、今回は見劣りするように思われては残念だが、どうなのだろうか。

フジ寮長はよくぞ聞いてくれたね！ と何も無いところからメニュー表を出した。

装丁されたそれは高級レストランのメニュー表を想像させるが、中身はお見合いのよう写真が片方のページにあり、もう片方にはプロフィールが載っていた。

「まず私が出るよ。ちなみに王子喫茶んだけど王子ごとにコンセプトを決めていたんだ。私は正統派王子様」

「正統派とは？」

「諸説あるよ。次のテイエムオペラオーはナルシスト系王子様」

「あれは素じやないか」

「でも意外とノリノリでやってくれるよ。そして次はウオツカ。年下の生意気王子様、に見せかけて実は純情な王子様だ」

「1回捻りを入れてくるところにこだわりを感じるな。ウオツカが乗るのは意外だったが」

「かつこいいよって褒めたら案外やる気出してってくれたよ」

流石寮長、寮生の特徴を理解している。

「それでこっちはナリタブライアン。不器用で俺様タイプな王子様」

「……ナリタブライアンがよくOK出したな」

「会長に打診したんだ。会長は忙しいからエアグルーヴかナリタブライアンを参加させてくれると思ったけどラツキーだったね」

「やっぱりの人はすごい。伊達に私の逃走経路を予測して逮捕してきたり、脱出不能なように栗東寮地下牢に監禁したりと策士ぶりを見せつけているわけではない」とい

うことか。

「そしてアウトロー系破滅願望王子様としてナカヤマフェスタ」

「ここだけ別の喫茶店にならない？」

「飴玉を賭けてポーカーもできるようにしたよ」

「本当に別コンセプトではないか」

紹介が終わって、フジ寮長は最後に写真のないパンフレットを見せてくれた。

「そこでエツちゃんには火遊び経験豊かな意地悪年上系王子様を頼むよ」

火遊びが多い王子様は俗に言う暗君ではないだろうか。

とはいえそういう話では無いのだから突っ込むだけ野暮というもの。

「……まだやるとは言っ」

「ちなみに売上ナンバーワンのグループにはお菓子一年分が副賞で贈られるよ」

「年上系とはいうがツンデレ成分を組み込んでみたらどうだろうか」

「それはいいね！ 流石エツちゃん！」

やるからに目指すはナンバーワンだ。

賞品に釣られたわけでは決してない。だが手に入るなら欲しい。なんとしても。

「ちなみに商売方法はどんな形式にするつもりなんだ？ 私としては流石にファンを楽

しませるのを前提にしたいと考えているが」

「私を誰だと思ってるんだい、エツちゃん。もちろん抜かりはないよ。喫茶店だから飲み物と料理を提供するけど、そこに王子様の指名があるわけだよ。流石に何人も指名されてしまうと大変なので来店時に一人指名してもらおう予定さ」

「永久指名制か」

「指名時に追加料金、その後適宜サービスによって料金が決まるよ。せつかくだから王子様の一番人気も決めたいね……名付けてプリンスタードービーなんてどうだろう？」

「ノリノリなところ悪いが……これホス」

「違うよ、ただの喫茶店だよ。サービスが独特なだけで」

「……生徒会が怒らないか？ いや、執事喫茶もやってたしそういうものか……待って待って。料金形態的になんかの法律に引つ掛かりはしないか？ 生徒会が許すとは思えないが」

「料理と飲み物の料金は売上にさせてもらうけど、指名料やサービス料は児童養護施設とかに寄付させてもらうよ」

フジ寮長がポスターを見せた。

既に王子喫茶の宣伝は進んでいるようだが、しっかりと寄附に関する事も記載されていた。

流石は寮長。聞けば聞くほど完璧だ。

「つまり……一番人気になればそれだけ多くの人達に貢献しているわけだな」
「そういうことだね。とはいえ脅迫とか強要はダメだよ?」

「当たり前だ。私は勝負に勝つためならなんでもするがあくまでルール内で、だ」

「そんなにいいポリシーがあるならもう少し寮の規則を守って欲しいなあ……」

「代わりの王子を見つけるかね」

「冗談だよ。規則に関してはまた今度だ……でもエツちゃんはこういうものに詳しいだろう? 是非アドバイスして欲しいんだ」

「なんだ……独自に購買をしていたのがバレていたのか」

「えっ?」

「あっ」

藪蛇だったか。

その場は誤魔化して、私はフジ寮長に様々な意見を提出した。

もちろんすべてが受け入れられたわけではないが、いくつか受け入れられた。

そして迎えた聖蹄祭——決められた王子たちはまだ見ぬ姫と出会うため、自らを彩っていた。

私は王子に支給された制服をじっくり確認する。

「ウオッカ、これどう思う?」

「グレ先輩に似合ってたかっこいいっすよ！ でも、今日は負けねーっすからー！」

「やる気だな……しかし、君がこうもやる気なのは意外だったな」

「そっすか？ 一番かっけーやつを決める喫茶店でしよう？ オレが出ないわけにはい
かないじゃないすか！」

マヤではないが、わかってしまった。

これは多分、素の反応——意外と純情な彼女を演出するために細かいところ教えずに
やらせているのだろう。

フジ寮長、表裏比興の者である。

そうこうしているうちにファン感謝祭の始まりがスピーカーから流れる会長の演説
によって告げられた。

『では、簡易的ながら出店などを紹介しようかい……ふふ』

「ぶっふおー！」

「……しまった、ここで入れてきたか……」

思わず吹き出して肩を震わせて笑いを堪える私と頭痛でも堪えるかのように額を抑
えるナリタブライアン。

そんな一幕があつたが、無事聖蹄祭は開幕した。

ちようどそのときになって、フジ寮長がこつちにやってきた。

「お客さんが沢山来てくれたね。想像以上だ」

「去年の執事喫茶がウケたんだらう。整理券を用意していてよかった」

私が提案した第一の作戦。

それは整理券の配布だ。予め別のブースで整理券配布を行い、客入りを調整する。質のいいサービスを常に提供できることを目標にした。

ちなみに、王子様役のウマ娘が接客するが、整理券配布や調理のウマ娘は特に王子様はやらす、基本的に裏方というわけだ。

そんなたくさんのファンの話をしていると、テイエムオペラオーがうずうずした様子で近づいてきた。

「去年同様、ボクの輝きを一目見たいがためにやってきたんだらう」

「……確かに、そうかもしれない」

真面目に話す横で語るテイエムオペラオーは今日も調子が良さそうだ。

走りでは圧倒的な実力を見せつけ、普段の言動を傲岸不遜とも思わせぬ力の持ち主だが、その上でやはりこのウマ娘以上のナルシストはいないだろうと思う。

こんな感じできつちり接客してもらえるといいのではないだろうか。

「随分と多いな……今日の王子喫茶、誰がトップになるか賭けるかい？ グレよ」

多数の客入りを見てナカヤマフェスタが肩を寄せた。

「……フジ寮長」

「意外と手堅いところにいくね。ちなみに、私はブライアンだ。当たったら何か奢ってもらおうか」

「ゴルシ焼きそばでいいか？」

「いいぞ。アンタとはもう少しひりつく場面でやりたかったが……今回はこれで我慢しよう」

「お互い多忙の身だ。打ち上げの時にやるのもいいかもしれないが」

「フツ……いいね。そこが本番か」

ナカヤマフェスタはざっくり言えば勝負師だ。

何かを賭けてギャンブルをし、ギリギリの勝負で特に燃えるというアウトローな気質のウマ娘。

彼女とはあまり接点はなかったが、たまたま話す機会があつてから妙にウマが合った。

私も勝負事は好きだから、なにか通じ合うものがあつたのかもしれない。

「さ、みんな準備して。お客様……いや、お姫様が城にやってくるよ」

「なんだそれは……」

「ブライアン先輩！ これ王子になりきれてことつすよ！」

「……くつ、会長、エアグルーヴ……厄介事を押し付けたな……!」
教室の扉の前に王子様役のウマ娘が並ぶ。

お手伝い役のウマ娘が扉を開けると同時に全員で恭しく礼をした。

「お帰りなさい、お姫様」

聖蹄祭、開始ッ!

——そこは、地獄だった。

亡者たちの絶叫が響き渡り、一人が倒れ、また別の者が倒れ、搬送されていく。

「フジ寮長、これ問題にならないかい？ 絶叫めいた悲鳴はともかく、気絶者多数だが」

「どちらかというトエツちゃんのスービスが効果てきめんなんじゃないかな……!」

早速フアンの手相をしたのだがあまりにもたくさんいらっしやるもので、どんどんフアンの回転が早くなっていく。

忙しさででてんでこまいだ。

「永久指名制はやらなくてよかったね……!」

「そもそもホス……ああいうサービスの店は一人の客を長くいさせて、客単価を上げることと利益を得ている。利益をあげるのではなく、多くのフアンに楽しんでもらうなら客の回転数を上げるのが得策だ」

「うーん期待はしてたけどまさかここまで本格的な意見が出るとは……私も珍しさにばかり目が向いてそこに気がつかなかったよ。ありがとうエツちゃん」

「とはいえ……本当に大丈夫か、これ。エアグルーヴが見たら卒倒しかねん勢いだと思うが」

『おい。今は接客中だ。少し大人しくしている』

『ギャアアアア!! 不器用俺様系王子ムーブからの壁ドンマジ無理死んじやうううう!!』

ばたり。

ナリタブライアン、撃墜数＋1。倒したのは一般のファンらしく、決まり手は鋭い眼光と心配した言葉の内容か。

『は、はあっ!? そ、そんな恥ずかしいこと言えるわけねーだろっ! う……わかった……みんなにバラすなよ……? こしよこしよ』

『ンヒイイイ! 生意気年下系王子の恥じらい耳打ち頂きました意外と声が高く正しい匂いがするのね!!』

ばたり。ああつ、ウマ娘生徒がやられた!

ウオツカ、撃墜数＋1。ささやき戦術の内容はなんだろうか。

『僕という輝きに魅せられたんだ……であるならば、瞳の中に僕が映っている君は誰よ

りも美しいはずさ』

『マジムリイイイ顔が良すぎてナルシストじゃなくてただの事実だああああ!!』
 ばたり。

テイエムオペラオーのグッズをたくさんつけたファンが倒れた。

テイエムオペラオー、撃墜数＋1。

こんなことを言っているが手鏡にジョセフィーヌという名前をつけている。ガー
 ガーチキンにファストと名付けた私とどう違うのか。

『BEETしてもらうのは……アンタ自身、つてのはどうだ？ ククク……ヒリついた勝
 負の末に手に入るのがアンタというのは、極上だ』

『イヤアアアアママラネエエエエエ!! 来世はアウトロー系のナカヤマフェスタ
 王子様に目をつけられ勝負に負けたことで貰われてしまうお姫様でオナシヤスツ!!!』

ばたり。

また一人倒れた。ナカヤマフェスタ、撃墜数＋1。

アウトロー系……! 確かに奴は栄光を掴んだ勝利者……! だが違う……ま

やかし! 他人の失敗は見えないもの……! 縋るな……! 他人の栄光に……!

あいつも大概やらかしているっ……! 勝負での失敗……!

でもそんなところも含めて楽しんでるから、彼女は面白いのかもしれない。

気づいたらフジ寮長も接客していた。

『やあ、よく来たね、お姫様。どうか精一杯おもてなしをさせておくれ。君のような可憐な花を愛でることができて、光栄ですよ、姫』

『ニアアアアアツ!! 正統派、故に王道!! 王とは! 誰よりも鮮烈に生き、諸人を魅せる姿を指す言葉!! 然りっ! 然りっ! 然りっ!』

ウマ娘一人、絶叫を上げながら気絶。

フジ寮長撃墜数+1。倒れかかったウマ娘を優しく抱きとめて微笑む姿を見て他の客まで余波で撃墜している。

つよい。

「エスケープちゃん! 王子様人参ハンバーグとグレープジュースできたよ。8番さんによろしく!」

「了解した」

私も接客はしっかりしなくては。

8番テーブルに運んでそつと料理とジュースを置き、短いながらもトークの時間をとる。

『お腹が減っているのか、姫。あまり食べると太ってしまうぞ……ふふ、冗談だとも。拗ねた顔が見たくなってね……美味しそうに食べる君は可愛らしい……せつかくだ、こん

な飲み物はどうかね？　少し大人な飲み物だが……大丈夫、教えるさ。じつくりと……ね』

『ひよわあああああ堕落させられるううう悪いこと教えられてこのまま不良お姫様になりたいいうううあああ!!』

やった、撃墜だ。

——こういう競い方じゃなかった気がする。

ともかく、開始30分程度なのにファンでごった返して忙しいっいたらありやしない。ちらほらウマ娘たちが混ざるように、ファンだけでなく生徒も出店に遊びに来たりしている。

そんな中で私の知り合いのウマ娘も何人か遊びに来ていた。

1. 『桃色の風神』アイネスフウジン&『豪脚怒濤の神器』メジロライアン

テーブルについてはアイネスフウジンとメジロライアンで、私を見かけると二人は手を振った。

「やあ、アイネス姉さん、ライアン」

「エツちゃんは王子喫茶やったの？　すごい似合ってるの!」

「エツちゃんはかっこいい服も綺麗な服も似合うよね、すごいなあ」

「ありがとう二人とも。二人も……いえ、姫たちならきつと、ドレスも似合うでしょう」

「わあ、似合ってるの！ エツちゃんかっこいい！」

「もう少し没入して欲しいなあ、アイネス姉さん」

「あはは……でも私がよく読んでる少女漫画……いやつ、ドーベルに教えてもらった少女漫画みたいでいいなあ〜」

ライアンはメニューを見るふりをしてサービスの欄をちらちらと見ている。

本人は隠しているつもりだが、少女漫画が好きだったりとかこういう催しは結構好きなのだろう。

アイネス姉さんに尋ねてみた。

「ひよつとしてここに来たがってたのは……」

「そうなの。ライアンちゃんがそわそわしてたから……私もエツちゃんに会いたいから来たけど、ライアンちゃんはマジだったの」

「そうか……」

私はライアンの傍に寄るとそつとナプキンをかけた。

「では姫、飲み物をお持ちしましょう。君には少し大人な、キャロットカクテルがいいかな……？」

「あ……はい……お願いします……」

ライアンはうつとりとして頷いた。

完全に夢見心地だが、これだけ楽しんでくれているのは素直にうれしい。

アイネス姉さんにも同じように対応し、しばらく和気藹々とした雰囲気でも過ごした。

2. 『不屈の女帝』 エアグルーヴ

生徒会としての見回りでやってきたのはエアグルーヴだった。他のファンもいるから手短にしようと言っていたが、どうせならしっかり味わってほしいというフジ寮長のお言葉で私が対応した。

「ようこそ、姫。こちらがメニニュー表となっております」

「……そこまで熱心に行っている貴様を見ると勘ぐってしまうのは何故だ」

「おや、警戒心の強い姫様だ。ふふ、実際に確かめてみるかい？」

「ではこれとこれを……ちなみにこのサービスというのは？」

「サービスはこういうもので……事前に申告したものと同じはずだ。確認してくれ」

「……問題ないな。すまんな、わざわざ接客までさせてしまった」

「おや、副会長……いや、姫が謝るなど、珍しいことだ」

「茶化すな。私とて公私は弁えている」

エアグルーヴはあくまで仕事で来ている感じで、ちょっと固い雰囲気だった。

彼女の真面目さを考えれば当然であり、それだけこの聖蹄祭の規模を考えての行動だろう。とはいえ、フジ寮長もそうだが、来たからには楽しんでもらいたいというのがこ

ちら側側の思いだった。

「では姫、望みのことをしてあげよう」

「望み？」

「必ずサービスとして複数の種類からパフォーマンスをするんだ。こんな風に」

エアグルーヴの手を取り、甲にそっと口づけをした。

周囲のお客さんから歓声と悲鳴と気絶する音が聞こえた。

「な、なにをつ……！ 貴様そんな不埒なことを……！」

「不埒なものかね。西洋では敬意や親愛を表すために手の甲にキスすることだってある。私もイギリスやフランスに行ったときは驚いたが」

かの大レースを走るために海外遠征を行ったが、距離が色々と近くて驚いたものだ。

慣れると意外と楽しいもので、私もそれに倣ってみたのだが。

流石の女帝エアグルーヴも慣れてはいないらしい。

顔を赤くして手を振りほどくと何かを言おうとして、結局飲食していた。

「照れ屋なお姫様だこと」

「……うるさい」

反論はか細いものだった。

3. 『末脚自慢のけっぱりウマ娘』スペシャルウィーク&『影すら追いつけない稀代の

逃げウマ』サイレンススズカ

スペシャルウィークの来店を認めた瞬間、予め伝えていた暗号を言った。

店員全員に緊張が走る——！

なぜならスペシャルウィークはランクAに分類される……大食ウマ娘だからである！

「まずいぞツ！ スズカはともかくスペはまずい！」

「エツちゃん、いますぐ食材を補充するよう買出し班に伝えたよ！」

「流石寮長！ こういうときは……ナカヤマ！」

「フツ、ずいぶん分の悪い勝負をすることになっているようだね、グレ」

呼び出したのはアウトロー系王子様ナカヤマフェスタ。

あくまで王子喫茶店はエンターテインメントであり、それを楽しんでもらうのもコンセプトの一つだ。

ここはナカヤマフェスタにポーカールックジャックといったトランプ勝負で楽しんでもらって時間稼ぎを——

「わあ、美味しそうな匂いでいっぱい！ 教室の中も綺麗ですし、いいですね〜！」

「ええ。エアグルーヴも美味しかったと言っていたし、楽しみね」

しまったエアグルーヴからの情報がスペシャルウィークに伝わってしまったか！

だが今日は聖蹄祭、屋台も沢山出ており、ここまで寄り道はしていたはず……!

「お腹しつかり減らせてきちゃったんですよね……朝ごはん以外まだ食べてないんですよ?」

「確かに……スペちゃん、大丈夫?」

「もう倒れちゃうかと思いましたが……しつかり腹ごしらえして、このあとのお祭りもたくさん楽しみましょうね、スズカさん!」

「終わりだ」

絶望して天を仰ぐ。

カードゲームを提案し、ご飯の後で一蹴されるナカヤマを見ながら私は打ちひしがれた。

厨房担当の子が料理にこだわるタイプで間違いなく絶品だったが、かえって仇となつてしまったか。

かといってまずく作れなんて言えるはずもなく。

「このまま負けてしまうのか……!?!」

「注文制限をつければいいだろう」

ナリタブライアンがナポリタンを運びながら言った。

いいのか、それ。

私はブライアンに尋ねると呆れられた。

「当たり前だろうが……ファンが必要以上に購入しようとすることもある。それを予防するため、問題ない」

ハツとしながら、私はスペのもとへ接客しに行った。

「ようこそ、姫様方。まるで姉妹のようだ」

「エツチャンさん！ すごい、かっこいいです〜！」

「エスケープ、よく似合ってるわよ」

「ありがとう、二人とも。ところでメニューは決まったかな？ 悩んでる姿、もつと見てみたかったが……」

私が二人に語りかけると他の客がキヤーキヤー言っている。

もちろん他の王子様が喋る度に黄色い応援ならぬ黄色い悲鳴が上がっている。

私は幾つ頼むつもりなのか内心戦々恐々していると、スペは料理と飲み物をひとつずつ頼んだ。

それで注文はおしまいらしい。

思わず確認をとってしまふほどの異常な行動に、隣のスズカも焦っていた。

「スペちゃん、そんなに少なくて平気？ このあと歩く体力残る？」

「調子が悪いのか……？ いますぐ保健委員に連絡するか？」

「ちつ、違いますよお！ ただ、このあとスズカさんと一緒に歩くのにご飯食べてたら時間が無くなつちやうじやないですか……」

「スぺちゃん……！」

私は感動のあまり健気な後輩を抱きしめたい衝動に駆られたが、流石にそれはやめた。

このあとも少しの間、王子様として振る舞い二人を楽しませることに従事した。

4. 『美しき日々の探求者』ファインモーション

「パターン青……姫です！」

整理券配布係のウマ娘が駆け込んでくると同時に、俄に緊張が走る。

「来たか……」

「来てしまったね……」

入口をチラと見やると圧倒的輝きが教室を照らす。

輝きだけではない、どこか香ってくる高貴な匂い……。ピファニー（ブランド名）やシヨネル（ブランド名）の以上の匂いがプンプンする。こんなロイヤルには出会ったことがないほどに。環境で身につくものでは無い、これは生まれつきの王族！ そのオーラ！

「ここが王子喫茶？ 日本の喫茶店はユニークなものがいっぱいだね。メイド喫茶も面

白かったし……楽しみだなあ」

やってきたのはフラインモーション。

アイルランドからの留学生だが噂では王族に連なる一族の出身といわれている。それが真実だと受け入れられるほど彼女の振る舞いは洗練されていた。

それでいて嫌味なところはなく、親しみがあり、友人も多くいる。

だからこそ……彼女は最重要目標ウマ娘の一人なのである！

姫であるフラインモーションを王子様としてもてなし、楽しませること！ それを完遂して初めて王子喫茶の大成功といえるわけなのだ！

「というわけです。ではお好みの茶葉はございますか、姫」

「ありがとう！ じゃあ（聞いたこともないが多分高級な茶葉の名前）で！」

「……なんて？」

「ないの？ あ、メニュー表あったんだ……ごめんね」

てへへと笑うフラインモーション。

既にフアビュラスなオーラに私は圧され気味だった。

王族出身と噂される彼女からしたらこれは児童戯に映るかもしれない。だから、これで満足させられなかったら恥になるだろう。

だが、満足させるおもてなしの心を忘れるのはそれ以下じゃないか！

「エツちゃんがやる気入ってる……」

「おお……グレ先輩、なんかすげー……」

「エアグルーヴが言っていたが結構熱くなるタイプらしいからな」

外野からなにか聞こえる。

しかし、向き合うべきなのは今のお客さん、いや、姫であるファインモーションただ一人。

「ではお姫様。私と甘い時間を過ごそうか……」

「わー、かつこいいい！ なんだか昔を思い出しちゃうなあ……じゃあ、このキャロットジュースを飲みたいな！」

「すぐに持つてこさせよう。可愛いものが好きなんだね」

見ててくれ、私の全身全霊を！

「楽しかったよ、ありがとう！ またやってね！」

ファインモーションは手を振って教室を後にする。

決まったお礼を言いながら頭を下げていたが、私の心には不完全燃焼感があった。

「……普通に楽しんでいたな」

「当たり前だろ。学園祭だからな？」

「気合い入れてるエツちゃんは面白かったよ」

呆れるブライアンにくすくす笑う寮長。

ファイブモーションは些細なことにも驚いたり、喜んだり、楽しそうに過ごしていた。決して気合い入れて損をしたとは思わないが、二人からはよっぽどのことをしないと機嫌を損ねるわけがないと笑われた。

「……なぜだか気合いを入れないといけない気分になったんだ」

5. 『名前はレース場を選ばず』アグネスデジタル

「コヒユツ……コヒユツ……!」

来店して1歩、アグネスデジタルは産まれたての小鹿のような足取りになっていた。

椅子に掴まり、よぼよぼと歩く彼女の呼吸は掠れ、額に玉のような汗を張り付かせており、まるで激戦のレースを走り終えた直後のような有様だった。

「危なかった……事前の広告ポスターに目を通していなかったら受けきれなかった……!」

「デジタル姫。どうしたのかね。そんな困った顔をしていると、意地悪しなくなってしまう」

「アツ（『イケメンウマ娘による王子様コスに追加されたサドっ気溢れる年上意地悪王子様ロールとか勝てるわけじゃないじゃんいや実質これ勝利だよもう死んでもいいというか

死んだわサヨナラ!』という意味が込められた圧縮言語)」

「姫……甘い甘いキャラットジュースは如何かな? 甘いひと時には、さらに甘いものを……もつと甘い関係になってみるかね」

「アツアツアツ」

「ふむ、ナポリタンとキャラットジュースかい……? チエキも欲しいんだね? ……ちゃんと言つてごらん? 欲しいものは何がいいか……」

「アツアツ (サドつ気たつぷりなのに優しい口調とか解釈一致じゃん誰だよあたしを昇天させようとしているのはグレ様に昇天させられたい)」

「……ね? 言えるだろう……?」

「ちえ……チエキが……欲しい、です……」

「よく言えたね。偉いよ……ご褒美はなにがいいかな?」

「あ、(囁きボイスだめだめ耳が溶けますよいいんですかダメです溶けました)」

なんて具合に、アグネスデジタルは面白い反応を返してくれるのでつついこちらも張り切つて接客してしまう。

なぜかアグネスデジタルは挙動不審ウマ娘だと噂になることが時々あるが、私としては素直な良い娘だと思う。しよせんは噂だからなんともいえないが。

「……エツちゃんはよくデジちゃんを可愛がっているけど、何かあるのかな」

「さあね……ただ、あいつも結構ヘンな奴ってことは確かだ」

フジ寮長とナカヤマが片付けながらつぶやいている。

私はデジタルとチエキツーショツトを撮りつつ、なぜ私が変なウマ娘なのだと抗議したかったが、退店間際に彼女がふらふらになっていたのでその介抱をしていたらそれどころではなくなった。

アグネスデジタルが終わるころには人もだいぶ捌けてきていた。

「フジ寮長。そろそろじゃないか」

「そうだね……みんな、お疲れ様。最後に大本命が残っているよ、もう少し頑張ろうか！」

彼女の号令によって王子たちが店を出る。

これまでのお客さんと同じくらい、丁寧に接客し、夢のような時間を届けなくては。

6. 『スペシャルサンクス』

トレセン学園の一面にある広場——普段は芝生が生えそろい、そこで生徒たちは昼寝をしたり、お昼ご飯を食べるのに利用する場所がある。

のんびりとした雰囲気のは多くの人たち——特に子供が多く集まっていた。

フジ寮長が子供たちを前に高らかに宣言をする。

「やあみんな、よく来てくれたね。今日はウマ娘のお姉さんたちと一緒に遊ぼう！」

『わあーい!!』

子供たちが一斉に王子に扮するウマ娘たちのもとへ走ってやってきた。

「元氣だなあお前たち！ よっし、オレが肩車してやるよ。順番だからな、喧嘩するなよ？」

「トランプか。ブラックジャックなんてあるんだが……教えてやるさ。まずはな、飴玉をベツトして——」

「はっはっはっ、無垢なる輝きはボクという至高の輝きに照らされ、さらに輝くのさ！

ああ髪を引っ張るのはやめたまえ！」

「速くなる方法か。フン、ただ前を走る奴を抜く、その信念さえ持つていればいい」

子供たちがウオツカに、ナカヤマに、オペラオーに、ブライアンに群がり、それぞれが子供たちを相手に笑顔を振りまいている。

やはり未来のスターと、そして未来のファンたちもまた、大切にしなければならぬだろう。

「でもエツちゃんがこういうことを言い出すのは意外だったなあ」

「柄じゃないのは理解しているとも。だが、こういったイベントはなくてはならないものだと思うがね」

私が聖蹄祭前に提案した最後の一つ——それは子供たちとの触れ合いの機会だ。

トウインクルシリーズは国民的エンターテインメントであり、聖蹄祭や春の感謝祭でも多数のファンが訪れてくれる。

しかし、ある程度自由に時間とお金を使える大人と違い、子供は保護者と一緒じゃないと来れないことも多い。特に養護施設の子供などは、レース以外でトレセン学園のウマ娘と触れ合うことは少ない。

だったらせめて——ということでも提案したが、今回の交流イベントである。

子供たちを同時に何人も体にぶら下げるのは中々大変だが、子供たちの無邪気な笑顔を見られると、自然と嬉しくなってくる。

「エツちゃんも変わったね」

「……私とてウマ娘、成長もするし、変化もするさ」

今までは自分が勝つためのことを考えていた。

それは決して間違いではないと思う。勝利は努力と才能だけでは辿りつけない世界にあるのは事実だ。

しかし、私の力だけで走っていたかと思っていたことが実は色んな人の願いに後押しされていて、それに応えられる自分になりたいがために走ることが、さらなる高みに引き上げてくれる。

自分のために走り、応援してくれる誰かのためにも走る。

言葉にしてみたらなんてことはない、よくインタビューで『フアンの応援があるから頑張れました』と言われていただけの話だった。

ただ、それだけの事実が驚くほど力を与えてくれるものだった。

「そこに気がつくまで、随分と時間がかかったが……悪いことじゃないだろう」

「ウマ娘のお姉ちゃんどうしたのー？ お姉ちゃん……王子様？」

「なんでもないさ。さあ、もつと遊ぼう！ こう見えて私は最強のウマ娘だからな。将来きつと自慢できるぞ」

——聖蹄祭に出店した王子喫茶はいろんなことがありつつも、大成功に終わったのだった。

×××

『第116回天皇賞・秋は予想外の展開となりました。第2コーナーを回って先頭は9番、3歳馬サイレンススズカ！ 後続に10馬身近いリードをつけています。2番手は4番イナズマタカオー、そしてグレートエスケープは3番手！ 13番グレートエスケープは3番手で今日は控えました。それをマークするように1番人気バブルガムフェローは早めの競馬。6番ヤシマソブリン、8番グルメフロンティアそして1番ジェニユインと2番ロイヤルタッチ、1枠の2頭はここ。その後ろにるのがエアグルーヴ

です！ 12番エアグルーヴは中団で折り合っています！』

大丈夫だ、大丈夫。大丈夫。問題はない。スタートで後手を踏んでしまったが問題なく前目でレースを進めることができている。

先頭を走るサイレンススズカと、すぐ目の前のイナズマタカオーはバテるだろう。

すぐそばをバブルガムフェローがいて、後方にはジェニユイン、ロイヤルタッチ、エアグルーヴ、シンカイウンが控えている。

こいつらより少し先にスタートをかけなければ着は目指せないだろうが、幸い脚を溜められるペースで来ている。

第3コーナーで飛ばしに飛ばすサイレンススズカの脚色が鈍り始めた。そして後続がペースを上げるのがわかる。

俺もケンちゃんも、示し合わせたようにペースを上げて直線に入った。

今だ——ここでスパートすれば、ぎりぎり逃げ切れる。

だというのに——

『サイレンススズカが5馬身リードを保っている！ 内からジェニユイン、バブルガムフェローが伸びてくる！ グレートエスケープは沈んでいく！ その外からエアグルーヴが上がってきた！ エアグルーヴとバブルガムフェローの一騎打ちだ！ 二頭の激しい叩き合いだ！ 3番手にはジェニユインとロイヤルタッチが来ているが突き

放されている！ エアグルーヴかバブルガムフェローか、どっちだ、どっちだ!? バブルガムフェローを抑えてエアグルーヴ差し切ったかーッ!」

デッドヒートが繰り広げられたのは、俺が走る場所からはるか先の世界での出来事だった。

『天皇賞・秋を制したのはエアグルーヴ！ 並み居る男馬を蹴散らして、見事に古馬混合GIを勝利！ これは恐ろしい馬です！ エアグルーヴ、天皇賞・秋を制覇！ 1番人氣のバブルガムフェローは惜しくも2着、離れた3番手にジェニユイン』

走り終えて、大歓声を浴びる1着をとったエアグルーヴ。

掲示板を見る気にもなれず、ケンちゃんの手綱に従って東京競馬場の地下馬道へ戻っていった。

後ろから声をかけられる。ロイヤルタツチと、バブルガムフェローだ。

「おい！ ダービー野郎！ 俺はてめえみたいな弱い奴に負けた覚えはねえぞ！」

「無様な敗戦、全力で挑むのは冒険！ お前は勝負から逃亡、全力を出さずに敗北！」

二人からの言葉に対して、俺は何も言えなかった。

実力差で負けたとすらいえない。

そもそも直線ではレースにすらなっていないなかったのだから。あの二頭がそういうのも、当然だった。

直線に入ってなお、全力でスパートをかけられなかった。

あとはずるずる抜かれていき、終わってみれば二桁順位で入線。見るも無残な結果という他なかった。

弁明もできず、二頭に背を向けたまま俺はその場を後にした。

天皇賞・秋 結果

1着 ⑫エアグルーヴ 2番人気

2着 ⑦バブルガムフェロー 1番人気

3着 ①ジエニユイン 4番人気

4着 ②ロイヤルタツチ 7番人気

5着 ⑧グルメフロンティア 15番人気

……

13着 ⑬グレートエスケープ 3番人気

「……怪我なんですかね」

後日、厩舎で俺にお湯をかけながら厩務員の西京さんが呟いた。

傍にいた黒井先生は唸る。

「最近は何調教も悪くなってきたからな……走ってはいるが乗り手と馬の呼吸がまるで合つたらん……放牧させてよくなるとも思えないしなあ」

気持ちのいいシャワーの時間がどんよりとした時間変わる。

今まで調教では走れていた。しかし最近は何レースで結果が出ていない影響か、焦つてしまい調教でも上手くいかなくなっていた。

脚は痛くないはずなのに、最後の直線で力を入れることができないでいる。

自分でもわからないくらい心の奥底で、恐らく恐怖しているのだろうか。

「ジャパンカップ……ジョッキキーはどうするんですか」

「ノリに依頼した。有馬記念も乗ってもらう。明日の追い切りから乗ってもらう予定や」

「館山騎手ですね。美浦の……」

「あれくらいの騎手になると美浦、栗東の関係なく馬が集まるがな」

館山典祐——美浦に所属する騎手で関東リーディングの1位、2位を毎年争う一流ジョッキキーだ。ケンちゃんよりも年上で、この前乗ったトップジョッキキーの滝さんの一つ年上の年齢的には中堅騎手。

だが、今の俺にはどんな一流騎手が来たところで、レースで勝てるビジョンがまるで思い浮かばなかった。

どうすればいいのだろう。俺は馬房に戻っても、食事が進まなかった。

「エスケープ先輩！ 天皇賞どうしちゃったんですか！ あんな負けるなんて信じられないですよ！」

ついでに言うのと、隣の小僧にも辟易としていた。

既に空っぽになった桶から顔をあげたスペシャルウィークに、うんざりしながら俺は答える。

「負けるときは負ける。それだけだ」

「ええー、なんか違うでしょ！ 負けたというより……走れてないんじゃないですか？」

「全然エスケープ先輩らしくないですよ！ あの必死な走りはどこにいつちやつたんですか!？」

「……お前、見たことあるのか？」

「ないです」

思わずこけそうになった。

人間と違ってこけるだけでも大変なんだからやめろ、そういうボケは。

でも、とスペシャルは続けた。

「牧場の人は言っていました！ 『お前もあんなすごい馬になるんだぞ』って。いつもグ

レートエスケープ先輩のことを話してましたよ！ あの勝負根性に負けるなっつて」

牧場——確かに、スペシャルが牧場にいるであろう年のダービーを勝ったのは俺だ。

ダービーはホースマンの目標。自然とその話が出たのだろう。

しかし、今の俺にとつてそのダービーは過去の栄光でしかなかった。

今じゃ怪我で終わつた馬、血統には勝てない馬、早熟なだけだったといわれる始末。

「今の俺にそんな力はないよ」

「なんでそんなことがいえるんですか！」

「あのレースを見ただろ」

「見てません！」

「悪い。とにかく、俺は惨敗したんだ。2戦も続けてな。まあ……失望させて悪かったな」

「知りません！ そんなことは知りません！ エスケープ先輩はきつと勝てるんです！」

何を言っているんだこいつは。

段々俺はイラついてきて、半ば八つ当たりだと思いつつも、大きく嘶いた。

「お前に何がわかる！ レースに出たこともないような奴が知った風な口を聞くな！」

俺があまりに大きく嘶いたからだろう。

馬房から顔を覗かせていた僚馬が驚いたように視線を向けるだけでなく、スタツフまでもが顔を見せてきた。

注目されたことで、自分が大人げないことをしてしまったことに気が付いて、かといつて謝るのも恥ずかしくなり、馬房の奥へ引つ込んだ。

「言われなくても……わかってるんだ」

誰にも聞かれないように、思わず呟いていた。

夜になり、スペシャルウィークが寝静まったのを確認してから、隣のダンスパートナーさんに聞こえるように音をたてた。

ダンスパートナーさんは起きていたようで、話に応じてくれた。

朝の騒ぎのとき、ダンスパートナーさんは調教でいなかったから、つい大人げない態度をとってしまったことを愚痴った。

「明日謝らないといけないですね」

「そうだね……でもスペシャルくんはエツちゃんに本当よく懐いているね。私に対しては礼儀正しいけど、そっけないくらいなのにな」

「なんででしょうね」

「……厩務員さんが言っていたけど、スペシャルくんのお母さんって生まれてすぐ亡くなってるんだって」

ぴくりと耳が反応する。

不意に橘ちゃんのことを思い出しながら、そうなんです——とだけ返した。

「それで人に育てられたから人懐っこい馬なんだって」

「だから他の馬との距離が空いているのか」

それだとなんで俺が懐かれているのかわからないが、ダンスパートナーさんなどに少し素っ気ないのは理解した。

人間も馬も、近しい誰かを亡くすことは決して珍しいことじゃない。

ただ、その悲しみを考えると、とてもじゃないが気持ちにはわかるとは言えなかった。

「あの明るさで気づかなかったが……泣きたくもなるだろうに」

「私は今、エツちゃんの方が心配だよ」

「え？」

「……一番泣きたいのはエツちゃんじゃないのになって、私は思ってるの。だって、調教とか、レースを終えて帰ってくるよときのエツちゃん、すごく苦しそうだよ」

隠していたつもりはない。

辛いときは辛そうな顔をしていたと思うし、弱音を見せないなんてやったつもりはない。い。

けど、いざそうやって言葉をかけられた途端に否定したい気持ちが湧いてくる。

違う、別にそんなんじゃないです——俺は反射的に言っていた。

「俺が走れないのは力が足りなかっただけで、それは今後鍛えていくしか——なくて……」

目頭（馬に目頭？）が熱くなり、これはダメだと思った時には涙がぼろぼろ溢れ出していた。

「——なのに、走れない……勝ちたいのに、走れないんだ……！」

もう一度あの勝利を味わいたい。

騎手に、調教師に、厩務員に、生産牧場のみんなに、育成牧場のみんなに、ファンに、妹ちゃんに、橘ちゃんに——また、勝利を届けたい。

「どうしたらいいんだ！ レースに出ても走れない！ 走ることすらできない俺が、どうやって勝てるんだ……！」

「エツちゃんは、どうして勝ちたいの？」

「え——そ、それは」

自分のためだ。自分が勝って——勝って、どうしたいんだったつけ。

「そういえば去年も、エリザベス女王杯の頃だったよね。エツちゃんが悩んでいたのは」
「……そうですね」

ダンスインザダークに負けて、何のために走ればいいのかと悩み、その答えの欠片を

ダンスパートナーさんは見せてくれた。

「エツちゃんには自分のために走るべきだと言われたし、私もそのために走るのが良
いって言ったよ。でも、今は——一番最初の気持ちを思い出してみるのがいいんじゃないか
かな」

かつて俺はみんなのために勝ちたいと思っただけ。

いつしか自分が勝ちたいと思うようになった。

今は——どうすればいいのだろうか。

翌日の調教からは予定されていた通り、館山騎手が跨ることになった。

みんなからはノリさんと呼ばれていて、関東の美浦に所属するジョッキーのはずなの
に栗東の黒井厩舎でも人気している光景には驚いた。

俺の第一印象としては——「この人大丈夫？」という感想をまず抱いた。

「おはよー。眠いわー」

なんだかぼんやりしている雰囲気。

別の馬の調教では「良い馬だね。いいレースするよ」と言っていたけど、さらに他の
馬の調教でもまったく同じセリフを吐いていた。

適当というべきか、つかみどころがないというべきか。

しかしいざ跨られると、これが中々しっくりくる。

滝さん、ケンちゃんも一流ジョッキーであり、彼もまた同じだけの技量を持つ騎手なのだろう。

すごく柔らかい乗り方で、歩いているときから楽な感覚だった。

今日の調教馬場は栗東の坂路。最近調教でも上手く走れなくなりつつある中で、坂路が近付くにつれて身体が縮こまっていくような感覚を覚えた。

館山騎手は俺をぽんぽんと撫でる。

「ゆっくりいくからなー」

黒井先生からは強めに追ってくれと指示だったのだろうか。

俺は訝しみつつ、坂路を駆け上がった。

館山騎手はなんと。まったく手綱を動かさない。俺が走り出しても、押しもしなければ引きもしない。

どういふつもりかわからないが、とりあえず走るしかない。

「よしよし。良い走りするなオマエ」

結局、馬なりと呼ばれるような強度で走り終えてしまった。

こちらもどうするのか困惑しながらだったから、スピードも出せていない。

館山騎手は黒井先生の元まで行くと話し始めた。

「良い馬ですね。これだけ走れるならジャンパニックが楽しみです」

「……今日は全然力んでいなかったな。久々に綺麗なフォームで走った。このまま行ってみるか」

「ゆつくりタイムを出していきましよう」

何を言ってるんだろうこの二人は。

当然、説明されないからよくわからないまま、今週の追い切りを終えた。

馬房へ戻ると、スペシャルウィークも追い切りを終えたのか既に食事をむしやむしやと食べていた。

俺は仲直りも兼ねて、飼料とは別のもらえる林檎をスペシャルに上げた。

「やるよ」

「ええっ、ふいふいんれすか!」

「食べるか喋るかどちらかにしろ」

「もっしやもっしやもっしや」

「食べるのかよ」

食事が終わると、俺はスペシャルウィークに謝った。

スペシャルウィークは気にしていないと言っていたが、謝られたら大抵そう答えるだろう。しかし繰り返し謝るのもかえってくだいなので、受け入れられたことにした。

俺は、昨日のダンスパートナーさんから聞いたことを思い出し、スペシャルに尋ねた。

「スペシャル、お前はなんで俺をそんなに慕うんだ？」

「え？ それは……牧場の人たちに似てるからです」

「……人に？」

「はい。俺が生まれたときにお母ちゃんは死んじゃったみたいで……牧場の人たちに育てられたんです。だから人ってなんだか身近な気がするんですよ。エスケープ先輩はなんだか……その人たちに近い、ような気がして」

最近すっかり忘れてしまっていたが、元々人間だったことがスペシャルにとっては親近感を覚える一因になっているのだろうか。

「それに——牧場の人からずっと聞かされてきたんです」

「何を？」

「エスケープ先輩のダービーのことです。いつも牧場の人と話していました。『グレートエスケープは闘病中のオーナーのために、ダービーを走り、勝利をささげたすごい馬だ』って。俺……お母ちゃんは死んじゃったけど、お母ちゃんや、牧場の人たちのためにもダービーを勝ちたいんです！ エスケープ先輩みたいに、誰かのために勝ちたい！

そんな夢を持っています」

「誰かのために——」

俺も、ダービーのときは橘ちゃんのために走っていた。

今は……自分のために走っているのか、誰かのために走っているのか、何のために走っているのか、わからなかった。

週末、エリザベス女王杯が開催された。

ダンスパートナーさんは連覇を狙い出走した結果——惜しくも2着。最後の直線で勝ち馬と凄まじい叩き合いを披露したがあと少しというところで敗北してしまった。

厩舎に帰ってきたダンスパートナーさんは負けたには晴れ晴れとした表情で、悔しがりながらも落ち込んではいなかった。

「ねえ、エツちゃん。私のために代わりにジャパンカップを勝つてよ」

「え？」

珍しい物言いに、俺は驚いた。頷く間もなく、今度は反対側の馬房からスペシャルウィークも首を伸ばしてくる。

「俺もジャパンカップの後にデビュー戦があるんです！ 応援するために勝ってくださいー！」

「はあ？」

2頭の聞きなれない言葉に困惑して、理由を聞いても何もそれ以上は答えてくれなかった。

——そして、ジャパンカップ前の最終追い切りの日。

今日も館山騎手——ノリさんが乗った。

「だいぶ調子が戻ってきましたね」

「グレ坊も元の感覚を取り戻せたんちゃうか。今日は残り2Fから追ってくれ」

「はい」

感覚？ なんのことだ。

最近走るもなにも馬なりってやつばかりで全然動いた感じがしなかった。

感覚もなにもないんじゃないか。

半信半疑になりながら坂路を駆け上がっていく。序盤は相変わらず俺の走りに任せてきりで指示がまるでない。

残り2Fに差し掛かったところで、ここしばらくの調教で初めてノリさんは追い始めた。

(……なんだ？ すごいスピードに乗れてる気がする)

脚が前に出る。窮屈な感覚がない。

ここしばらく忘れていた、全力で走ること——身体がようやく思い出したような反応だった。

調教を終えると、久々に黒井先生の笑顔を見た。

「いい追い切りだったで。栗東坂路で4F51.8秒、少し仕掛けてこれなら文句無し

「や」

「グレートエスケープは勝負根性がありすぎる馬でしたからね。最近の走りは気合が入りすぎていたんでしょう。ただ、レースになるとこんなに負けるのはちよつと不可解ですね。天皇賞でも手ごたえ見たら勝ち負けでしたよ」

「健二が言うには直線になると馬がレースをやめてしまつてな。俺にしたら怪我による精神的なものもあると思うんやが」

「……じゃあ、ラストスパートはさせないようにしましょう」

「は？」

黒井先生だけでない。傍に立っていた俺ですら思わず聞き返したくなつてしまった。

ラストスパートはさせないってどういうことだ？

ノリさんはその場で具体的な説明はせず、「まかせてみてよ」とだけ言つて不敵な笑みを浮かべた。

○○○

ジャパンカップ展望――

年内最後の東京開催を締めくくるGIレース、ジャパンカップ。世界の強豪が参戦する当レースだが、去年に劣らないメンバーが集結した。芝2400mのチャンピオンコースに相応しく、瞬発力やスピードだけでなく、スタミナも要求される。総合力が優

れているからこそ、クラシックデイスタンスを勝利できると考える。

それを踏まえて、今年は◎ピルサドスキーが本命となるだろう。

ファンには説明不要のチャンピオンホース。ここまでGI5勝、凱旋門賞2着2回。実績は全出走馬でトップレベル。ジャパンカップが引退レースであり、この後は日本で種牡馬入りする予定。

既に日本で成功する血統だと予想されているのだろう。ダンジグ系のスピードは日本にもフィットする。

対抗馬は○エアグルーヴ。天皇賞・秋を制覇したまさに女帝であり、オークスを制したこの舞台でも海外の強豪を迎え撃ってくれる。

▲グレートエスケープ。怪我明けの2戦は大敗しているが、最終追い切りでは久々にリラックスしたフォームで走っていた。変わり身があるならここ。去年の覇者であり、同舞台で復活の可能性あり。

△にはロイヤルタッチ、ローゼンカバリー、シルクジャステイス、バブルガムフェローを抑えたい。

……

レース前インタビュー

館山典佑騎手（グレートエスケープ）

Q. 今回が初のコンビですが、どんな印象を受けましたか？

A. 評判通り、真面目に走る馬だな、と。真面目過ぎて行き過ぎるところがあるんじゃないかなと思ってましたけど、調教では言うこと聞かし、利口ですね。

Q. 前々走の京都大賞典、前走の天皇賞・秋では大敗していますが、今回はどうでしょうか。

A. 前までは怪我明けで馬の方も本調子じゃなかったみたいです。今回も、最初にはよくなかったみたいですけど、僕が乗らせてもらったくらいから状態も上がってきたんでね。去年のダービー、ジャパンカップを勝ってる馬ですから。復活できる力があります。

Q. 良い状態で最終追い切りは終わられましたか？

A. 黒井先生（栗東・調教師）も前2走よりは良いと言ってたからね。馬もここしばらく感じていた力みも抜けていたし、いいんじゃないですか。

Q. 枠は2枠2番と内枠をとれました。如何でしょう、これまで逃げ、先行で来ましたが有利な場所をとれましたか？

A. やっぱりあのコースは内枠のほうがいいですし、スタートはすごい上手な印象があるからね。包まれる心配もなし、良い枠をとれたと思います。

Q. 当日のレース展開はいかがでしょう？

A. この馬のいつものレースをしますよ。いつものレースでいつもの力を發揮してくれば、皆さんもご存知のように能力がありますから。ファンや関係者の皆さんに、強いところを見せたいと思います。

「インタビュアー、ありがとうございます」

「はい、お疲れさん」

○○○

当日のパドック、俺は早速2頭に絡まれていた。少しお馴染みの感すらある、ロイヤルタツチとバブルガムフェローだ。

「おうおうおうおう！ テメー天皇賞では舐めた真似してくれたじゃねえか！ なんだあのシャバい走りはよオ！」

「YO！ YO！ 物足りない走り、そんなんじゃお前は俺のパシリ、はやく行けよあつちに！」

うるさい……リベンジを期したのに不甲斐ない走りしたのは申し訳ないがそんなまくしたてられても……といたいところだ。

俺が反論しようとしたところで、別の声が届く。

「やかましいぞ、たわけども！ パドックでは肅々と周回しろ」

凜とした声で言い放ったのは鹿毛の牝馬。

ほれぼれするほど引き締まった肩回りやトモは強者の証で——それもそのはず、1か月近く前の天皇賞・秋を制覇した牝馬、エアグルーヴなのだから。

エアグルーヴは苛烈な気性を窺わせる声音で続けた。

「パドックはファン、関係者が我々を見る場所だ。世間話をする井戸端ではない」

「チツ、天皇賞を勝ったからって良い気になりやがってあのアマ……！」

「いい気になってる牝馬が1頭、それを切り伏せるのは俺の一刀、だいたいいい子ぶっちゃって言うてるお前は不細工、勝てたのもどうせ小細工！」

「ふん、負け馬どもめ」

「ムキーー！」

「ンガーー！」

煽り耐性低くない？

それとバブルガムフェローはラップ調はわかりづらいからもう喋らないでくれ頼むから。

エアグルーヴはいきり立つ2頭を無視してこちらに視線を向けてきた。

「貴様もだ、グレートエスケープ」

「俺？」

「失望したぞ。あのダンスパートナーさんの同厩にして同じ世代のダービー馬だからと

楽しみにしていたが、なんだあの走りは。覇気のない走りに、怒りすら覚えた……過去
の栄光に縋って無暗に走るだけなら、大人しく控えている」

それだけ言うとな帝・エアグルーヴは顔を背けてしまった。

反論の余地すらない怒りっぷりに、こちらとしては呆れるばかりだった。

しかし、こうしてみると改めて感じる。

「——俺の背負ってるものは、随分大きくなっていたんだな」

しみみりと掲示板を見上げた。

そこには俺が5番人気と表示されており、あれだけの大敗を繰り返してもまだ評価さ
れ、応援されている証だった。

現在のところ、1番人気は——

「きつ、貴様アツ！ な、な、なに、なにを、なにをぶらさげ……粗末なものを見せるなッ
！」

先ほどの絶対零度の冷気を思わせるものとは違う、少し上ずった声を上げるエアグ
ルーヴ。何事かと思ひ、視線をやると俺は言葉を失った。

あのエアグルーヴが後退るほどの異様。

全身を包む筋肉にすらりと伸びた脚は数々の戦場たるレースを駆け抜けてきた戦士
の証。

しかしそれ以上に目を引くのが、股の間からぶらさがる逸物。

そう、たつた今、馬つ気をだしている——つまり勃起しているサラブレッドこそが現在の1番人気、ピルサドスキーである。

ピルサドスキーは動揺することなく、とても穏やかな声で言った。

「すまない。日本は初めてでね、つい緊張してしまつたんだ。許してくれ、エアグルーヴ」

「あ、あ、ああ、う、うん？ 牡馬なら仕方ない……のか？」

「だ、騙されるなエアグルーヴ！ 普通やらないから！」

「ハッ！ く……貴様、さつさと粗末なものを仕舞え！」

エアグルーヴの反応に対してピルサドスキーは気を悪くすることもなく、朗らかに笑つた。

「日本で種牡馬生活を送るから気が逸つてしまつたかな。いや、すまない。だが1番人気として、恥じないレースをしてみせよう」

「すまないと思つているなら早くしまえ！」

「どうか今変わったぞ。変なもの見せるから」

少し離れたところでロイヤルタツチ、バブルガムフェローが悔しそうな顔をしてい

どうしたのか尋ねるとピルサドスキーに視線を向けた。

「勝てねえ……あれが世界の壁かよ……!」

「あれが凱旋門……いやエツフェル塔だ……」

「何の話をしているんだ」

というかお前たち父親は外国産馬だろうが。思いつきり世界レベルのはずだぞ。

俺は呆れつつもピルサドスキーを見て一言。

「ウマナミナノネ……」

サンデーサイレンス産駒は頭のおかしい奴ばかりだと思っていたが、世界は広い。

いつか俺は世界へ羽ばたいていけるか、少しだけ不安になった。

しまらないままパドックの周回が終わると、ノリさんに黒井先生、妹ちゃんがやってきた。

「レースは任せる。勝ってこい」

「わかりました」

相変わらずの怖い顔で黒井先生が言って、ノリさんは飄々と答える。

その中で妹ちゃんが俺をじっと眺めていることに気が付いた。

「あの……グレくんは……グレートエスケープは、まだ走らないとダメなんですか?」

妹ちゃんがそう、口にする。

西京さん、黒井先生、ノリさんが頭に疑問符を浮かべ、俺も同じように首を傾げた。妹ちゃんはレース前に言う必要はないんですけど、我慢できなくて、と前置きをして、言葉を続ける。

「調べてみました。牡馬は種牡馬としての買い手がつかない？ 殖馬にはなれないって。でも、種牡馬にならなくても引退して牧場に預けることもできるんですよ……」

「橘オーナー……？」

「……グレくんは怪我をして、それでも回復して走つたのに、みんなから悪く言われて……それでも走る意味がわからなくなってきた……」

妹ちゃんは少し泣きそうな顔で言った。

「ごめんなさい。本当にレース前に言うことじゃないのに、グレくんを見ていたら……止めたい……ゆつくりと余生を過ごしてほしいです。でも……黒井先生や西京さんが一生懸命お世話をして、グレくんが一生懸命走っているのも見ているから。だから、お願いします……！」

妹ちゃんは震える手で俺をそつと抱くと、見上げる。

「——勝つて！」

競馬が好きではないと言っていた妹ちゃん。それでも、俺のために馬主になってくれただけでなく、ずっと見守ってくれていた。

勝ったときも、負けたときも。

心優しい彼女にとつて、怪我から復帰してもなお走らせることは、心苦しいものがあるのかもしれない。

けど、俺の中にはまだ——勝ちたいという意志がある。その意志を汲んで、送り出してくれるというのなら。

「勝つてみせるよ、妹ちゃん。いや——恵那ちゃん！」

新たな戦友を背に乗せて、地下馬道へ行く。

血液が冷え込んで、頭がクリアになっていく。聞こえてくる大歓声と、冬の訪れを感じさせる秋風は俺の身体を震わせた。

10万人以上の大観衆が叫んでいる。

返し馬をしながら、聞こえてくる声は俺を応援する声や、俺の負けを願う声、2着にさえ来てくれればという声、色んなものがある。

ここまで走ってきて、なんとなくわかったことがある。

誰かの想いや願いを背中に乗せて、それら全部を自分の勝ちたいという意志で包んで走るんだ。

きつと、それが競走馬『グレートエスケープ』がやるべきこと。

俺は、俺と、みんなのために、このジャパンカップを勝利してみせる！

《ジャパンカップ 単勝オッズ》

1 番人気 ⑭バブルガムフェロー 3. 7 倍

2 番人気 ⑨エアグルーヴ 4. 2 倍

3 番人気 ④ピルサドスキー 4. 8 倍

4 番人気 ①シルクジャステイス 7. 7 倍

5 番人気 ②グレートエスケープ 11. 4 倍

『東京開催を締めくくる本日の第10R、国際招待競走ジャパンカップの発走時刻を間もなく迎えようとしています。実況は私、中井正継（ナカイ・マサツグ）、解説には競馬「ハチ」の梨田武（ナシダ・タケシ）さんをお迎えしています。梨田さん、今日はよろしくお願ひします』

『よろしくお願ひします』

『まず外国馬からお話をお願ひします。梨田さんとしてはどうでしょう、今回の外国馬は』

『実績では断然ピルサドスキーですね。パドックでは少し良く見せてはいませんでしたが、今回のメンバーでは超一流といっているんじゃないでしょうか。他には芝2400mのGIであるジョッキークラブ大賞を勝利してやってきたカイタノもいいですね。』

父の父はニジンスキー、日本でも走れると思います。アスタラバド、オスカーシンドラーなどですね』

『日本馬は如何でしょう。現在14番バブルガムフェローが1番人気、エアグルーヴが2番人気と外国馬を迎え撃つ形になっています』

『ヒシアマゾン、ファビラスラフィンといった牝馬が2着、3着と来ていますがエアグルーヴはそれ以上に力を見せてくれると思います。バブルガムフェローは去年は大敗しましたが、鞍上の岡谷騎手は距離が合わなかったわけではないと言っていましたから。この2頭が大將格ですね』

『昨年の覇者グレートエスケープはどうでしょう』

『ここ2走は大敗してしまいましたけどね、返し馬の状態はすごく良さそうでした。負けた2走は直線で不可解なほどの失速でしたからね、ここで復調すると思われる面白いですよ。他には菊花賞で惜しくも敗れた1番のシルクジャステイスですね』

『史上初の2連覇か、日本の牝馬か、それとも3歳馬か。スターターが台に立ち、ジャパソニックのファンファーレが鳴り響きます』

演奏隊の生演奏と観衆の手拍子が鳴り響く。

演奏を終えると同時に歓声が大きくなり、枠入りが始まる。

『枠入りが始まりました。梨田さん、展開はどうなるでしょうか』

『やっぱり2番のグレートエスケープがハナを切るでしょう。前走ではサイレンススズカに遮られて控えましたが、今回は逃げ馬は1頭ですからね。レースを作って得意の展開に持ち込めるかがカギでしょうね。ツクバシンフォニー、モンズが競りかけてくるかもしれないませんが、グレートエスケープの出方がペースの鍵になるでしょう』

『枠入りがすんなり……おつと5番のモンズがゲート入りを嫌がっていますが……あ、入りました。少し時間がかかりましたが入りました。15番アスタラバドがゲートに入って態勢完了しました。第17回ジャパンカップ、今スタートです!』

ゲートが開いて飛び出すまさにその瞬間、激痛が走った。

「いたアーツ!」

予想外だったぶん、一層痛みを強く感じて、まるで駆り立てられるように飛び出した。ムチだ。ゲートを出た瞬間にノリさんが俺を鞭で叩いたのだ。

鞍上はそのまま手綱を緩めると、まるで最後の直線のような勢いで俺をぐいぐいと押しした。

「えっ、えっ、行くのか?! いや行くけど! 大丈夫かこれ!」
促されるがままスピードを出す。

スタート直後から全力疾走で、コーナーに入ってからもストップのサインがかからなかった。

そんな俺の走りを見て暴走したと思ったのか、それも騎手が暴走させたと思ったのか、観客がどよめいた。

向こう正面に入るなり、斜め後ろの馬群が視界に入ったがおおよそ5馬身ほど差がついている。

「ま、マジかノリさん……ここで俺に大逃げをさせるのか!？」

『向こう正面に入りますがなんとこれはびつくり、2番グレートエスケープが逃げましたこれは大逃げです! 既に5馬身近い差をつけて悠悠先頭です! 遅れてツクバシンフォニー、モンズが馬群の先頭を走ります。エアグルーヴは早め4番手、それをマークするようにバブルガムフェロー、バブルは5、6番手でレースを進めています』

大逃げなんて当然打ったことはない。

ダービーで行うか案が上がったくらいで、実際にそれをしないレースこそが俺の勝ちパターンでもあったからだ。

だから、先頭は誰もおらず、後方の馬群もすこし遠く感じる孤独感が、俺を焦らせる。手綱が引かれた。

ゆつくりといけ、そんな声が聞こえてくるようだ。

再び歓声上がる。驚きも混じったその歓声は、きつと俺に対して向けられているのだろう。

『2番グレートエスケープこれは思い切りしました鞍上館山典佑！ 後続には既に10馬身近い差をつけて前半1000mを通過、これは59秒台で通過しました！ これだけリードを保って第3コーナーへ、バブルは、エアグルーヴは、ピルサドスキーは、逃亡者を捕まえられるのか！』

コーナーを回りながら、息が上がって苦しくなってきた。

そりやあそうだ。今までは先頭を維持しつつも息を入れて、スタミナをキープしながら走ってきた。

それをこんな差をつけて逃げたら早々にバテるに決まっている。

ここからまだ800m残っていて、さらに坂もあるなんて信じられるか。信じたくねえ。

苦しい。

苦しい。

苦しい。

勝つために、こんな苦しみなきやいけないものだったっけ。

でも、でも――

「はっ、はっ、は……は……は……」

笑っちゃうのはなんでだろうな。

最後の直線を俺だけが迎えて、坂を上り始める。
思い出した。

確かダービーのときも、こんな風に、苦しくて、諦めたくて、それでも、俺には目指さなくてはいけないものがあるのだから。

——ごめん、橘ちゃん。散々弱音を吐いて、ビビって、情けないところを見せて。

約束したもんな。

ダービーだけじゃない、たくさんG Iをとって、すごい馬になってみせるって。

少しの間、それを忘れちゃったみたいけど、別に忘れたわけじゃないって言い訳をさせて欲しい。

ここで勝って、その約束を証明して見せるから——！

『グレートエスケープが残り200mに差し掛かって後続が襲い掛かってくる、しかし坂を上るがグレートエスケープが粘っている！ エアグルーヴ、ピルサドスキーが上がつてきた！ バブルも伸びる！ 後方からはシルクジャステイスが追い込んできているが、グレートエスケープだ！ グレートエスケープだ！ これは逃げ切る逃げ切る！ 復活の逃亡者、グレートエスケープ！ 栄光の舞台に振り返り咲いたのは逃亡者グレートエスケープだ！ 後続を完封です！』

ゴールを走り終えて、手綱が引かれる。

頭が真っ白になりそうなほど必死に走ったが、これは勝つただろうと確信するほどの手ごたえ。久々の勝利の味に、喜びが爆発しそうになるが、それを表現するには疲労が大きすぎた。

『ジャパンカップ、勝つたのは2番グレートエスケープ！ 後続に6馬身差をつけてま
んまと逃走成功！ 見事でした鞍上館山典佑！』

少しずつ冷静さを取り戻す脳が思考を巡らせる。

ラストスパートをかけさせないレースと言ったノリさんの意図。それはこの大逃げだ。

きっと調教ではスピードが出せていたのに直線で走れないのを、精神的なものと読み取って彼は敢えて前半に飛ばさせて、後半はスパートすらかけず粘り込みを図る作戦だったのだろう。

ここ2走で大敗していたことで油断を誘い、後続馬同士で牽制し合ったことも有利に働いたようだ。

観客が大歓声を上げて俺を出迎えている。その中には、馬券を外した恨み言も混じっていて、少しだけ笑ってしまう。

『グレートエスケープは史上初のジャパンカップ連覇！ やはりこの舞台では負けられない！』

俺を称える実況。そして鞍上ではノリさんがガッツポーズを繰り返し観客に見せつける。

ウイニングランをする前、ロイヤルタッチとバブルガムフェローがやってきた。

「てめー姑息なマネしやがってよお！」

「本当の復活、それはまだまだ本物じゃねえ、でも引つかかった俺たちは迂闊！」

なんて言うが、どこか嬉しそうな二人。

勝ちも勝ちだが、今回は決して実力だけで勝ったと自信を以って言うことはできなかった。

だが、ようやく何か吹っ切れたような気がする。

俺は自信たっぷり二人へ言い放った。

「次も負けないからな！」

「ケツ、言ってる！ 本気のでめえをぶっ潰してやるからよ！」

「次代の挑戦は既に始まってんだ調子乗ってんとすぐに終戦、俺がお前を昇天！」

二人はそう言うで一足先に地下馬道へ向かう。

その途中でエアグルーヴとすれ違った。

「……フン、次は勝つ。貴様の名前、覚えておくぞ」

「ああ。次も絶対に勝ってみせる」

「そうではなくてはな。では、な」

まだ戦いは終わらない。

復活したなら、次は王座を守り抜かなくては。

けど、今は——久々の勝利と、支えてくれたみんな、そして勝利に導いてくれたノリさんに感謝しよう。

恵那ちゃんには安心させられただろうか。ダンスパートナーさんや、スペシャルは喜んでくれるだろうか。

「……次は有馬記念だな！」

ジャパンカップだけでは完全復活とは言えない。

次の有馬記念を勝利して、文句なしに現役最強馬だと証明してみせる！

口取り式では、恵那ちゃんは泣いていた。

俺を撫でながら、繰り返し涙を拭ってはまた溢れ出していた。

「グレくんすごいね。あんなにボロボロだったのに、復活して。すごいよ……本当に感動したよ」

そう思ってもらえたのなら、よかった。

確かに勝てないときは苦しくて、目の前が真っ暗になった。

それでも、俺はまだまだ走って、勝ちたい。

勝って、歓声を浴びたいし、頂点まで上り詰めて、橘ちゃんや恵那ちゃん、そして黒井先生や西京さんのこともみんなに知ってほしいと思う。

だから——これからも、ずっと見守っていて。

俺は恵那ちゃんに、そんな思いを込めながら額をそつと押し付けた。

勝利ジョッキーインタビュー 館山典佑騎手（グレートエスケープ）

「今のお気持ちをお願いします」

「ジャパンカップという大きいレースを、なおかつ2連覇を達成できて嬉しいです。最高の気分です」

「グレートエスケープは思い切った大逃げとなりましたが、作戦通りですか」

「そうですね。最後の直線で伸びないレースが続いていたので、依頼を頂いてからはこういうレースがしたいなあと思っていました」

「最後の直線、グレートエスケープは見事に粘り切りしました。追っている最中、どんな気持ちでしたか？」

「いや、もう、粘ってくれ、頑張られて応援していました。根性ある馬で、苦しくなつても走り切れる良い馬です」

「この勝利でジャパンカップは史上初の連覇となりました。館山騎手も初めてのジャパ

ンカップ勝利です。どんなお気持ちですか？」

「海外で一流の結果を残している馬がいる中で、日本内国産馬の血統が勝利したわけですから、心強いですね。海外の相手とも戦える、強い馬だと思えます。とにかくうれしいです」

「インタビュ―、ありがとうございます。勝利ジョッキー、館山典佑ジョッキーでした！」

写真：口取り式後にグレートエスケープからジャンプして降りる館山典佑騎手

第23話 Get back

日本競馬の1年を締めくくるグランプリレース、有馬記念。毎年10万人を超える観客が押し寄せ、チャンピオンホースの激闘を見届けている。

去年は出られなかったな、と白い息を吐いた。

パドックにはファン投票で選ばれた一流のサラブレッドが周回している。

「ダンスパートナーさん……いよいよですね」

「うん……なんか、すごく不思議な気分。黒井先生も怪我なく回ってきなさい、つて言つてたくらいだし……」

一年を締めくくるレースは名馬の最後の花道に選ばれることが多い。

ダンスパートナーさんも、今年の有馬記念が競走馬生活のファイナーレを飾る舞台に選ばれた。

もう、一緒に走ることはなく、馬房で話すこともなくなるだろう。

今日で、挑戦し続けた偉大なる牝馬は引退する。

「私はこれからお母さんになって元気な子供を産むことを期待されてるからね。頑張らなくちゃ」

「そういえばダンスパートナーさんはお嬢様でしたよね」

「そういえばってどういう意味かな。でも……うん、最後にエツちゃんのかっこいいところが見たいかな」

今日のは有馬記念に相応しい豪華な顔ぶれが揃っている。

今のところ一番人気に推されているのはマーベラスサンデー。宝塚記念を勝利したあと骨折し、ここに向けて調整されてきた。

体調は万全と見られており、ファンの期待を一身に背負っている。

「マーベラス……」

「なッ！ 貴様なにをしている！ パドックでなにをしているんだ貴様アッ！」

2番人気ながらファン投票で最多得票となったのがエアグルーヴ。天皇賞・秋を勝利、ジャパンカップは3着と牡馬相手に堂々たる戦いぶりが評価されているのだろう。

3番人気が俺、グレートエスケープ。ジャパンカップ勝利でようやく復活したと見られたのだろう。

4番人気が——

「あつ……あの……ダンス……パートナー、さん、ですよね」

「うん？ そうだよ。貴方は？」

「わ、私……メジロドーベルっていいですよ！」

ダンスパートナーさんに声をかけた牝馬、メジロドーベルだ。

オークス、秋華賞の2冠を達成した3歳牝馬で、打倒牝馬ということだろう、有馬記念に参戦してきた。

「今日で引退と聞いていますが……お会いできて嬉しいです！」

「え？ あ、うん、なんだか照れちゃうな……」

「フランス遠征や菊花賞挑戦、牝馬にも負けない戦い、ずっと尊敬していました！」

「ありがとう……今日は頑張っつてね」

「はい！」

ダンスパートナーさんは随分人気者らしい。彼女が慕われていることが嬉しくて、俺は年下の牝馬に声をかけた。

「メジロドーベル……さん？」

「……なに？」

おや。纏う雰囲気の不審者を見る目にかわつたぞう。冷やかな視線に思わずぶるりと来てしまう。

「えつと……今日は……よろしく？」

「フンつ、気安く話しかけないで。大体、私は貴方のことなんて知らないし」

「えっあつうん……ごめん……」

メジロドーベルはそっぽ向いて去ってしまった。

これはコミュニケーション方法を間違えただろうか。俺なんか悪いこと言ったかな、と思わずダンスパートナーさんを見たが苦笑いされるばかり。

しょんぼりしていると、今度はエアグルーヴがこちらにやってきた。

「ダンスパートナーさん、お初にお目にかかります。エアグルーヴです」

「ああ、天皇賞はおめでどう！ すごいなあ、牡馬相手に勝ちやうなんて……」

「覚えていただき光栄です。しかし、私が天皇賞に出走できたのも、ダンスパートナーさんのおかげです」

「えっ、どうして？」

「私の先生は私自身を評価していましたが、きっと、牡馬相手に挑戦を続けていた貴方の姿を見ていたからこそ、天皇賞に出走したかもしれませんから……それに、私も尊敬していましたから」

「なんだか照れくさいな……結局牡馬相手に勝てなかったけど……でも、ありがとう」

ダンスパートナーさんとエアグルーヴが和気藹々とした雰囲気でお話している。

なんだか仲間はずれだなあと思っているとエアグルーヴがこっちを向いた。……が、ギロリといった擬音が似合う形相で、レース前だと言うのに気圧されてしまいそうだった。

「グレートエスケープ！ ジャパンカップでは貴様に敗北した……世間ではジャパンカップは貴様の作戦勝ちなだけで、実力では私が上回っていると言われている。今日、有馬記念を勝利してそれを証明してみせる！」

すごい気合いだ。

肌がビリビリと痛くなるほど緊張感を覚えつつも、俺はダービー馬だ。天皇賞馬がなんだ、ビビっていられるか！

俺はふんす、と鼻息を鳴らしながら一歩、踏み込んだ。

「やってみろ……お前に俺は捕えられない」

天皇賞・秋で一騎打ちを演じてみせたバブルガムフェロー、そして同期のロイヤルタッチはジャパンカップ後に脚を怪我してしまい、引退となった。

とても悲しいことだが、あいつらも強かったと言わせてみせるためにも、エアグルーヴには負けられない。

「吠え面をかくなよ」

一言、しかしその瞳に映る炎は千の言葉にも勝る思いを感じさせた。

「でも……エツちゃん、大丈夫？ まだ本調子じゃないって先生言ってたよ？」

「いやいや絶対調ですよ。先生は隠してるだけです、俺の実力をね」

「本当〜？」

「ほんとほんと。ダービー馬は嘘つかない」

嘘をついた。

ジャパンカップこそ、勝利したものの、最後の直線で全力で走ったわけではない。

そもそもヘロヘロになりながらゴールしたわけで。

ラストスパートをかけられない状態はまだ続いていた。

今回、前走のように大逃げて逃げ切りは難しいだろう。

中山競馬場はカーブがきつく、俺の走り方ではどうしてもスタミナを余分に使うし、スピードに乗り切れない。

ハナは切れど、マイペースで走る逃げになると思う。

つまり、最後の直線で二の脚を利かせなければならぬということだ。

ライバルは多い。

マーベラスサンデー、エアグルーヴ、メジロドーベル、シルクジャステイス……ローゼンカバリーやタイキブリザードも虎視眈々とタイトルを狙っているが、一番の敵は自分だ。

自信は正直、ない。

それでも俺はダンスパートナーさんに力強く宣言した。

「俺が勝ちます。このレース」

係員の「とまあーれー」の間延びした合図。

遅れて整列し頭を下げたジョッキーたちが駆け寄ってくる。

ヤネはジャパンカップに続いて有馬記念もノリさんこと館山典佑騎手。

騎手の中にはマーベラスサンデーに乗る滝さん、シルクジヤステイスに乗るケンちゃんが見えた。

二人とも俺をちらりと見ると、それぞれ厩務員やテキと一言二言話し、馬に跨った。「出来はジャパンカップより上向いとる。乗り方は任せるで」

「前走の大逃げは通じないでしょうから、この馬のレースをしてもらおうと思います」
「それでええ。まかせた」

「前走はこいつの連覇でしたから、今回は僕の連覇を達成しますよ」

そういうえばノリさんは去年、サクラローレルに騎乗して有馬記念を制覇していた。

このコースを知る乗り手のエスコートはきつと俺をいい方向に導いてくれるはずだ。

——有馬記念が始まる。

中山競馬場芝2500mはスタートしてすぐにカーブがある少し特殊な形態をしている。

そのため、外枠より内枠の方が有利で、特に大外枠はかなり不利とされていた。

『8枠16番グレートエスケープ。最後にゲートに収まります』

そして運の悪いことに、俺がここの馬番になってしまった。

だが、裏を返せば逃げを邪魔されないとはいえる場所。逃げ馬が俺くらいしかいない以上、スタートを五分以上で決めれば、すんなりハナはとれるだろう。

ゲートが開くと同時に、飛び出した内にいるのはカネツクロス先輩だった。

「先輩、久々ですわね！」

「おう、俺の走りを邪魔しに来たんか後輩！」

「もちろん！」

カネツクロス先輩には悪いが、スピードも瞬発力も俺の方が上だ。俺が本気でハナを主張すれば彼はなにもできないで控えるしかない。

かといってスローペースには落とさず、緩みないペースで走り出す。

後続に脚を残させるような展開にすれば、直線の短い中山といえど俺は逃げきれない。

先行勢をスタミナですり潰し、差し馬たちには直線で脚を使わせないのが俺の理想だ。

ペースが多少速く感じてても後続は俺をみすみす逃がすことはできない。結果として俺が団子を引き連れるようにしてレース展開が進んでいた。

淡々と流れたレースはあつというまに第3コーナーへ差しかかる。

後続達がペースを俺を捕まえにペースを上げてきた。

そして、俺もここからスパートをかけ出さなければならぬ……が……！

『第4コーナーを回りグレートエスケープが先頭、しかしすぐ後ろにエアグルーヴがつけている！ マーベラスサンデーも先頭集団に取り付いている！ やはりこの3頭か、三強で決まるのか！』

すぐ後ろで馬蹄の音。

直線へ差し掛かるというのにスピードを出せていない。ここまで取りつかれたら俺に勝ち目はないが、未だに俺は怪我を引きずっていた。

ノリさんの鞭が繰り返し俺のトモを叩く。

わかってる、そんなことをされなくてもわかってる！

だが、脚は重い所ではない。鎖に縛られたように動かなくて――

「がんばれ……エツちゃん、がんばれ！」

後ろから声が聞こえる。

ああ――そうだ。人だろうと、馬だろうと、男が女に応援されたら、負けてなんかいられない。

「うらああああッ！ 怪我なんてしねえ！ だって俺は――最強のグレートエスケープだから！」

芝を踏みしめた俺の蹄がレース場を抉った。

ずっと、怪我してから長らく忘れていたスピードに乗るこの感覚——！

この走りこそが、グレートエスケープなのだと思わせるように、直線を駆けた。

「それでこそ……倒し甲斐があるというものだ！」

「マーベラス！ 怪我明けで復活するのは、君だけじゃない！」

「先輩だろうと負けてられるか……クラシックで勝てなくても、ここで勝てば文句も言われねえ！」

だが、すぐ後ろにライバルたちがギラついた野望を振りかざしながら突っ込んでくる。

これまで積み重ねた13戦のキャリアが冷静に判断する。

『遅すぎた——』

スパートをかけて、スピードに乗るのがコンマ1秒遅かった。そして、コンマ1秒で半馬身、つまり1m強の差がつくのが競馬の世界だ。

中山の最後の直線にそびえ立つ、競走馬たちを絶望に叩き落とさんとする高低差2.2m、最大勾配約2.24%の坂を登りながら、すぐ隣にライバルたちが並ぶのを理解した。

『直線で駆けられるようになったから良い』

『ここで負けても次がある』

『充分に頑張った』

きつと、そうやって言い訳することはできる。

だとしても、迸る汗の熱はまったく失われていない。

それは——俺がまだ、俺自身の勝利を疑ってはいないからだ！

『グレートエスケープが粘る！ グレートエスケープ先頭、グレートエスケープ先頭！

エアグルーヴとマーベラスサンデー、内からシルクジャスティス！ 横一線だ、横一

線、4頭固まったまま大接戦でゴールッ！』

最後は必死に頭を伸ばしながら、ゴールに突っ込む。

駆け抜けたと同時に競馬場が震えんばかりに大歓声が鳴り響き、今の今まで音すら忘れて走っていたことに気がついた。

レースはどうなった？

手応えは完全に不明で、差された気もするし、逃げ切った気もした。

掲示板には1着から4着まですべてが写真の文字が浮かんでいた。

「そんなに大接戦だったのか」

息を整えながらじつと見つめる。掲示板に映像が表示されるが角度が悪くて微妙に

よく見えない。

ノリさんは、俺の鬘をさわさわと混ぜた。

「ちよつと厳しいな」

ま、負けてるの!? というか……わかるの!? アレが!?

ジョッキーフツてすごい。俺はそう思った。

『着順が出ました、1着はシルクジャスティス、2着はマーベラスサンデー、3着にエアグルーヴでグレートエスケープは4着です! アタマ、ハナ、アタマ、ハナ差とまさに大接戦でした!』

ほんとだ……負けた。

負けたかあ……負けちゃったかあ……。

「ふっ……はっ、ははは、ははははははははっ! ちくしょう、くやしい! 滅茶苦茶悔しいな!」

悔しいはずなのに込み上げてくる笑い。

最後は紛れもなく全力で走ったというのに、それでも勝てなかった。

1着までタイムの差は0.1秒もないが、それでも負けとまったく同じだという事実が、悔しさを通り越して爽快ですらあった。

「……こんなに悔しいのは、久々かもしれないな」

レースもよくわかっていなかった新馬戦。

スタート直後に躓いて、自分の力をまったく發揮できなかった皐月賞。視界に入れてすらいなかった相手の執念に打ち負かされ、どうしようもないタイミングで悔しさを覚えた菊花賞。

怪我をして、不安でいっぱいになった天皇賞・春。

思いもよらない不調で満足に走れずに惨敗した京都大賞典。

遙か遠い場所で繰り広げられる激闘をただ見ているだけだった天皇賞・秋。

そして今回——全力を出した末に、惜しくも勝利を逃した有馬記念。

こうして比べてみると、全力だったからこそ悔しくて、全力だったからこそ笑ってしまっただけに痛快でもあったのだろう。

「グレートエスケープ」

後ろから声をかけられ、振り向くとそこにはエアグルーヴが検量所へ蹄を返すところだった。

「……言い訳ではないが、貴様を捕まえようとした結果、早仕掛けになってしまったようだ。だが——」

「俺もスタートをかけるのが遅すぎた。でも、まあ——」
『勝つのは俺／私だ』

二頭の声が重なった。

お互いに笑みを交わしてから背を向けた。

そして、次はウイニングランをしているシルクジャステイス、そしてマーベラスサンデーに視線をやった。

エアグルーヴはともかく、シルクジャステイスやマーベラスサンデーは古馬の中長距離路線に出てくるだろう。

来年、必ずリベンジして見せる。そして、強いグレートエスケープをもう一度見せつけるのだ。

《グレートエスケープ》 XX97年 最終戦績《6戦2勝

日経賞 1着

天皇賞・春 4着

京都大賞典 11着

天皇賞・秋 13着

ジャパンカップ 1着

有馬記念 4着

○○○

有馬記念を終えて、俺は明日放牧に出される。

故郷の懇備式牧場は豪雪に見舞われているらしく、黒井先生の伝手で別の放牧先が手

配された。

その放牧先がなんと、日本最大の大手馬産グループである社来グループの系列の外厩施設（※完全にリラックスさせる牧場地とは違い、休息をしつつもトレーニングが可能な施設）『信楽ホースパーク』だというのだ。

確かにダンスパートナーさんは社来グループの牧場である社来ファーム出身で、それを預かる黒井先生はオーナーとも関係があるのだろうか、橘ちゃんはともかく、まるで競馬界に関わりのない妹ちゃん馬をわざわざ引き受けてくれるのは驚きだ。

相当親密なのだろうか。

黒井先生は色々すごい人だ。

と、思っていたのだが、話を聞いていると黒井先生の伝手だけではないらしい。

なんと橘ちゃんがいづのまにか社来グループの代表と知り合いになっていたらしい。

なんでも、俺が初めて勝った未勝利戦のときだというから随分前から（といつても一年半くらい前）知り合っていたらしい。

『……グレつちすごいね！ 近くの馬主さんがね、すごく強いつて言ってたよ。グレつちはサイコーなサラブレッドね！』

……そういえばそれっぽいことを言っていた気がする。橘ちゃんアンタすごいよ……流石若くして会社をでかくした女社長。

そんなわけで俺は明日から信楽ホースパークへ行くことになる。

そして、ダンスパートナーさんは俺が放牧されたあとに生まれ故郷に戻り、繁殖牝馬として生活することになる。

夜中、馬房で二頭壁越しながらも思い出話に花を咲かせていた。

「ダンスパートナーさんも引退ですか……なんだか早いような、すごく長かったような……」

「確かに。うん……でも、まあ……最後にエツちゃんと思い切り走ってみたかったな……Gイレースで……」

Gイレースと一緒に走ったのは去年のジャパンカップと今年の有馬記念くらいか。両方ともダンスパートナーさんは本調子じゃない状態で、真剣勝負という風ではなかった。

「怪我をしなければチャンスはあったんですけどね」

「仕方ないよ。でも、エツちゃんみたいに一緒に走りたいと思えた相手がいたのは……幸せだった」

ダンスパートナーさんは昔を懐かしんでいた。

「クラシックと一緒に走った子達がいてね。でもその子たちは怪我でなくなっちゃったり、復帰できなかつたり……だからずっと寂しかったの。もちろん競馬は勝負だから、

仲の良さなんて関係ないよ？ でも、いつまでも一緒に競い合っていたかった……」

俺にとつてのダンスインザダークやロイヤルタッチ、バブルガムフェローのような関係だろうか。

もつと競い合いたかった、そんなスポーツに望むアスリートのような、爽やかな願いがいつのまにか自分の中にあつて、彼女の気持ちがいよりリアルに感じ取れた。

イシノサンデーはどうしているだろうか。

俺たちの世代は4歳を終えたばかりだというのに、クラシックを走った仲間たちはあいつと俺だけになつてしまった。

「でもね……エツちゃんがいたから寂しくなかつたよ。いつか一緒に走りたいし、走ってる姿はついつい応援してたから……」

「……俺だつて、ダンスパートナーさんにはたくさん助けてもらいました」

「もういないから、1頭で頑張らないとダメだよ？ ……なんて——」

「……ダンスパートナーさんがいないと、頑張れないかもしれません」

「えっ?」

何も考えずにそう答えていた。

茶化すつもりも、冗談のつもりもなく、本心からダンスパートナーさんがいない厩舎を想像すると、とても寂しかった。

「俺はダンスパートトナーさんに、ずっと傍にいてほしいですよ」

「エツちゃん……」

夜になると馬房は仕切られてしまうから、彼女の表情を窺うことはできない。

しかし、だ。

サラブレッドはあくまで人間の都合で生きることが許される。

俺が願ったから「わかりました」とはならない。

それどころか、今後二度と会えなくなるかもしれないのがサラブレッドというものだ。

彼女は良血のお嬢様。

俺は冴えない血筋の雑草。

住む世界が違うといわれれば違うし、これからまた出会うことはないかもしれないから、俺は素直な思いを吐露した。

「サラブレッドとして、『グレートエスケープ』として生きてきて——俺は、ダンスパートナーさんのことが好きです」

ダンスパートナーさんがいるであろう馬房に身体を傾けながら、言葉を囁く。

そして、それを口にするともう会えないということが現実感として襲い掛かってきて、胸が苦しいほどに痛くなった。

「エツちゃん……それは……わ、私も……ダンスパートナーも、グレートエスケープが大好きです！」

返事がきた。

そう聞くと、心が温かくなつて、幸せな気持ちでいっぱいになった反面、やつぱりずっと一緒にいたいという思いが強くなる。

ダンスパートナーさんが傍にいない未来を想像しただけで、胸が締め付けられるようだ。

それでも彼女は、力強く言った。

「……いつか、迎えに来てね」

「えっ……？」

「エツちゃんはきつとすごい競争馬になるから……今もすごいけど、もつとすごい競走馬になると思うから……」

——きつと、また会えるよ。

俺は弱音を吐いていられないと思った。

この世界は複雑なようできて、想像するよりシンプルだ。

もしも何かつかみ取りたいものがあるならば、勝て。勝利の積み重ねこそが、望む未来をもたらしてくれるはずだ。

「……ダンスパートナーさん」

「うん？」

「……また会いましょう」

「そうだね……また、会おうね」

競走馬『ダンスパートナー』との会話は、これが最後になった。

もしも次に話す機会があったら、競走馬『グレートエスケープ』じゃなくなったときのことだろう。

そのときをいつか迎えるために、ダンスパートナーさんとの絆を再確認した。

「ところでファビラスラフィンさんとはまだメル友なの？」

「えっ？ まあ……ラファイも頑張っているようで」

「ラファイー？」

「あつ、あの、ダンスパートナーさん……？」

「へえ……いきなり浮気するんだ……」

「ちよ、ちが、まつ……ダンスパートナーさん？ ダンスパートナーさん？ ちよつと!？」

無視しないでください！ 浮気って何のことですかッ!？」

……絆を再確認した！

×××

トレセン学園のカフェテリアは放課後になるとかなり混雑してくる。

それぞれの話す声によって賑わい、何か大切な話をするのであれば他人に聞かれづらく、かえっていい場所になるという私オススメのスポットでもある。

そんなカフェテリアで私はアイネス姉さんに相談をしていた。

「アルバイトがしたい……？」

「そうなんだ。少し、お金が必要になってしまっただけね。無論、アルバイトの時間にのめり込んでトレーニングが疎かになるのは困る。それにたくさん必要なわけでもないから、一定期間だけでもアルバイトができると助かる」

「短期バイトってことなの？ うーん、いざ聞かれると難しいの……中々思いつかないから……」

「そうか……ちなみに申し訳ないが飲食店は勘弁してくれないか？」

「ああ、うん、トレセン学園の周りの飲食店で働くのはやめた方がいいの……」

ウマ娘がたくさん訪れるため、すごく忙しい上に店員もウマ娘のことをよく知っているからおまけでたくさんご飯を食べさせてくれる。

そのためバイトしてるだけで太るといふ噂があながち嘘でもないものとして広まっていた。

「スぺやオグリ先輩が来た時は大変らしいと聞く」

「私も一度やったことあるけど、あれは当分やりたくないの……スぺちゃんやオグリさんが来た時はそのお店にとってのダービーだから」

あの二人の食欲を想像するだけで店長は怒号を飛ばし、バイトリーダーは悪態を吐き、新人アルバイトは泣きながら家に帰りたいと震えている店の光景が思い浮かぶ。

そこに行くとしたら私は相当な覚悟を胸に抱かなくてはいけないだろう。ルームメイト、クラスメート、相棒には別れを告げなくてはならないかもしれない。

「私には無理だな」

「ハンバーガーシヨップとかは今募集してないみたいなの」

「ハンバーガーは腹が減ってしまうので難しいな。今はジャンクフード断ちの期間中だから耐えられない」

「エツちゃんやストイックなようできて意外とそうでもないの……そうだったら色々探してみるのがいいの。生徒会の方にはトレセン学園を通して紹介されているアルバイトがたくさんあるの！」

「おお、それなら安心だな……」

というわけで、アイネス姉さんと生徒会室の傍にある掲示板のもとへ向かった。そこにはたくさんの張り紙、ポスターがあり、アルバイト関係の区画にはトレセン学園の傍にある聞き覚えのある飲食店やスーパールのアルバイトの募集があった。

「ここならトラブルもあまりないし、レースを走るウマ娘が来ることがわかってるから融通も効かせやすいの！」

「へえ……アイネス姉さん、こっちは？」

区切られた先には生徒会からの依頼という張り紙がいくつかあった。

決して多くはないが、見慣れない形式の紙面に興味を引かれたが、アイネス姉さんは気にしたことはないらしい。

内容を読み込んでいると通りかかったエアグルーヴが説明してくれた。

「それは生徒会で一般生徒に協力を依頼している、ボランティアの募集だ」

「エアグルーヴ……このアンケートの回収とか、あとは事務用品の運搬とかか……」

「無論、生徒会の者だけで済ませるべきなのだが、数が多い単純作業は効率化を図るために一般生徒にも協力を依頼している」

「そのわりには依頼主に生徒会以外のウマ娘の名前や、先生のものもあるが……」

「次第に手伝いを必要とする者たちも依頼し始めたんだ。本来ルール違反ではないかと話も出たが、報酬に金銭のやり取りや、強要などがないのであれば、ということでも黙認

されている。現状、ボランティア募集の掲示板になっっているな」

「ボランティア……無償でやるのは今回の目的に合致しないな」

「エスケープ、何か入り用なのか？ 念のため聞くが……また何か企んではないだろうな」

エアグルーヴの鋭い視線に、私は両手を上げて苦笑いを浮かべた。

「そんなことはしない。流石に私にも線引きはあるよ。贈り物をしたいと考えていたのだが、用意するための資金が少し足りなくてね。それでアルバイトを探していたというわけだ」

「そうか。疑ってすまない。だがボランティアとは本来無償で行うことではなく、有志で行うものを指す。実際、金銭のやり取りはなくとも、手伝ったお礼に物の受け渡しは認められているから、何かあれば使うといい」

「そうなんだ……今度私もやってみようなの！」

なんか今のゲームのチュートリアルっぽいな。

なんて思いながら再びアルバイトの欄に目を向けようとした時、とあるボランティアの依頼の報酬に『限定キーセット』というものを見つけた。

細かい説明を見ると、なんでも有名スイーツ店であるG I ウマ娘も絶賛と書かれている。

「……これをやろう」

「エツちゃん、アルバイトは？」

「贈り物にはむしろこれがいいと思ったんだ。内容は……どれどれ」

そこにあつたのは花壇を耕す依頼だった。

依頼主は、エアグルーヴとある。

「なあ、エアグルーヴ。この依頼、私がやっても構わないか？」

「む……手は確かに借りたいが、エスケープ、お前は園芸などの経験はあるのか？」

「ないな……教えて貰いつつというのは、応募資格がないかね？」

「問題ない。元々私も共に行うつもりだったからな。しかし、簡単なものでは無いぞ」

「もちろんだ。よろしく頼む」

というわけで、エアグルーヴの花壇手入れの手伝いをする事になった。

ジャージに着替えるとスコップやリヤカーを用意して指定された畑まで向かう。

エアグルーヴも同じような格好で準備万端といった様子だった。

「では、今回の業務内容を説明する。言っておくが、仕事をする以上は一般生徒だろうと生徒会だろうと関係ない。私の指示に従ってもらう。いいな？」

私が頷くとエアグルーヴは眉間に皺を寄せた。

「返事は？」

「は、はいっ」

その迫力に思わず背筋が伸びる。

流星は副会長だけあつて、他者を従えるカリスマに富んでいる。

エアグルーヴは佇まいを質した私に満足したのか、頷くと言葉を続けた。

「今回の仕事内容はカーネーションの花壇を作るために土を耕すことだ。力仕事だから繊細な作業を必要とする。わからないことがあればなんでも聞くように」

「はい」

「覇気がないぞエスケープ！ そんなではいいカーネーションは育たない！ 貴様の声はか細い声で歌うためにしかついてないのか！」

「いえ」

なんだろう、エアグルーヴのテンションが随分とかかり気味でかえって冷静になつてしまう。

とはいえ引き受けたからには仕事はきっちりこなす。

私はエアグルーヴの説明に従い、作業を始めた。

そこは花壇というよりは空き地といった表現が正しく、辛うじて仕切られていることで花壇の面影を感じさせる程度の場所だった。

なんでも、しばらく手を加えられなかった場所らしく、エアグルーヴは心苦しそうな

表情をしていた。

彼女は花の世話をするのが趣味らしく、その話をするときは生き生きとしているし、逆に花が枯れてしまったりしたときはとても落ち込むらしい。

手が加えられず、そのまま枯れて荒れてしまった花壇について話すエアグルーヴはとても寂しそうで、それが意外だった。

私はちゃんと花壇の再生を図ろうと決めた。

まずはスコップで土を掘り返しつつ、雑草や小石を取り除いていく。

時々少し大きな石をどかすと、石の下で生きるたくさんの虫がわらわらと出てきた。

「うひゃあっ!?!」

エアグルーヴが吃驚して耳を後ろに向けてしつぽを逆立たせていた。

へっぴり腰で虫たちを追いやろうとする彼女が見ていられなかつたので、スコップで

土ごと運び、別の場所へ放した。

「虫が苦手なのか?」

「う……わ、悪いかつ」

「そんなことはない。私は蛇が苦手だが、それを笑うかね」

「笑いはしないが……」

「そういうことだ。もし虫が出たら私が片付けるから、蛇が出たら頼む」

「……申し出はありがたいが、別に蛇なら平気という訳では無いぞ」

「えっ……」

なんて話をしながら、土を掘り返しては土が柔らかくなるように、硬い部分を砕いていく。

カーネーションといえば母の日だ。

来年にカーネーションでいっぱいになったら、贈り物としていくつか分けてもらおうか。

土を掘り返していく作業は思ったより重労働だが、普段のトレーニングに比べたら大したことはなかった。

それに、小石や雑草をひとつずつ取り除いていく作業は苦にならない。

昔からコツコツと、没頭できる仕事は好きだった。

ウマ娘二人の力を以てすれば耕すのはすぐに終わった。

「次は堆肥をいれる。カーネーションは多湿が苦手だから水はけの良い土を使う」
「そうだったのか」

彼女の指示に従い、堆肥を入れながらさらに耕していく。時々出てくる土の塊を壊しながら、綺麗にならす。

エアグルーヴをちらりと見た。

「……生き生きとしているな」

「なに？ ……そうだな、ガーデンニングは趣味でもある。確かに花は好きだが……どうかしたか？」

「エアグルーヴがそんな表情をするのは初めてだなと思つてね。私も同期として共に走ることあつたが、強敵にはまだ知らない面もたくさんあるものだな」

「私もエスケープがこういつた作業が得意だとは思わなかつたがな」

「どういう意味だ、それは」

なんてやりとりをしながらしばらく土いじりに没頭する。

土を掘り返すだけなら直ぐに終わつたが、整地するのが意外と時間がかかつた。

完璧主義のケがあるエアグルーヴに従いながら整えたところには夕方になり、ジャージも土で随分汚れてしまつている。

しかし、達成感があり、疲労はあまり感じなかつた。

「余分な土や石は向こうに捨ててくれ」

「捨てる場所があるのか。土や石に」

「業者や車を通る際に事故があつたら危険だからな。それに、誰かが土を集めているのか、自然とそこが土が集まる場所になつている。問題はないが……知らないか？」

「いや、わからないな」

そういうわけで余分な土などをリヤカーに乗せて運んだ先には確かに土が盛られた小さな山があった。

見覚えのある光景だ。

一目見て、思い出した。

(これは脱走トンネルを掘る時に出土を捨ててた場所だな)

これは何も触れないでおこう。私はリヤカーに貯めた土を放流しながら、密かに積み重ねた自分の功績を誰に誇るでもなく、胸に抱きしめた。

土を耕せばあとは1週間ほど寝かせるらしい。

なんでも土の中の微生物が活発になり、土壌がよくなるらしいが、よくわからない。

とりあえず私より長く花に触れているエアグルーヴの言うことだ、多分合っているのだろう。

「これで終了だ。礼を言う、エスケープ」

「構わないさ。私にも目的があったが故の手伝いだ。それに、ライバルの意外な一面を知ることができた」

「フツ……私に勝つヒントでもあったか？」

「ああ、あったね。虫を用意してだな……」

「貴様！ それは反則だろうが！」

けらけらと笑ったりしながら、使用した道具を片付けるとエアグルーヴから報酬が手渡された。

限定ケーキセット引換券。

スイーツが嫌いなウマ娘はいない。どんなに澄ました顔をしていようとこれを食べたら絶好調になること間違いなし。もちろん食べ過ぎによる体重オーバーに注意。

私は近くのスイーツ店へ行くと、ケーキをいくつか包んでもらった。

今日はルームメイトが帰ってくる日だ。

辛い時は慰めてくれて、彼女が辛い時はこちらが慰めて、年齢は違えど親友といえる相手。

そんな相手が、今日遠征を終えて帰ってくる。

私はケーキとティーセットを用意すると、彼女が帰ってくるであろう時間に合わせてテーブルに並べた。

しばらくして、廊下に足音。

たくさんの荷物と疲労を抱えた重い足取りとは裏腹に、軽快な鼻歌が聞こえてくる。

ドアが開いてから「ただいま」という声が出たら、私は微笑みながら言った。

「おかえり——ダンスパートナーさん」

挑戦を続ける彼女は、今回もまた、たくさん走ってきたようだ。

——名バ列伝『グレートエスケープ』第二部、完——

第24話 覚醒

蹄を鳴らしながら部屋へ入るとたくさんのシャツターが瞬いた。サングラスをしていなければ即死だったろう。

軽く一言挨拶をしながら、椅子に座ることは出来ないのです、マイクが並べられたテーブルの前に立つ。

馬装もきつちりつけた正装。会見に臨むなら当然である。

「ただいまより、黒井厩舎所属グレートエスケープ号による記者会見を開始させていただきます」

「本日はお集まりいただきありがとうございます。今日、会見させていただくにあたって、お伝えしたいことは……えー、私、グレートエスケープ号は、4歳シーズンの有馬記念を以て……」

涙ぐむあまり少し言葉に詰まってから、言葉を続けた。

「今年の有馬記念を以て、引退させていただきます」

顔を再び上げ、言葉を発した瞬間にフラッシュが瞬いた。

挨拶を終えると質疑応答の時間となる。

手を挙げる記者を指名し、質問が怒涛の勢いで飛んできた。

「今回の引退という判断に至った経緯を、お聞かせください」

「一番は、えー、身体能力の衰えといいますが、思ったような戦績を残せない、走りがでないことですね。グレートエスケープという競走馬を、ファンの皆さんにお見せ出来なくなっている……それが一番ですね」

「社来グループで種牡馬入りの報道がありました。巨額のシンジケートが組まれているとも……その影響ですか？」

「いえ、違います。種牡馬価値を評価してもらえるのは嬉しいですけど、お金の問題ではありません」

「同じく報道ではシンジケートの価格について交渉決裂し、別の種牡馬場、それか現役続行かとありましたが……」

「決裂自体がないですね。詳細は後々詰めるとして……今はまだ、考えさせてください」と一旦は保留させてもらいました」

「種牡馬価値を釣り上げるための交渉という声もありますか……」

「釣り上げる気持ちなんてありません。ただ、色んな生産者の評価を聞きたい気持ちはあります。グレートエスケープというブランドをそこで終わらせていいのか……どうすれば今後の私にプラスになるのかを熟考させていただいています」

「率直な今のお気持ちをお聞かせください」

「……黒井厩舎が大好きなので。つ……辛いです……喜んで引退するわけではないということは、理解して欲しいです」

「シルクジャステイス号、メジロブライト号といった年下の牡馬相手との競合を避ける意図はありますか？」

「……ありません。負けない自信はありますが、社来グループさんからもお話を頂いていまして……」

「結果的には逃げてるわけですよね？」

「いえ……逃げてるとかではなく……引退する時期が今かな、と」

「ですがまだ走れるのに引退する。これは……そう受け取られても仕方ないんじゃないんですか？」

「そう受け取る人もいるかもしれませんが。ですが怪我で現役を続けられない競走馬もいる中で、引退できるのは幸福なことかな、と思います」

「走れるなら……走つてもいいんじゃないですか？ 負けて種牡馬価値が下がるのを恐れているんじゃないんですか？」

「……さつきからなんなんですか？ 負けるとか負けなとか……関係ないですよね？」

「でも走れるのに引退するというのは、今のうちにシンジケートを組んで大金を得ようとしているだけでは？」

「は？ ちがうし。勝てるし。俺を誰だと思っっているんですか？」

「でも引退するんでしょう？」

「……引退撤回してやらあ！ なーにがシルクジャステイスだ、メジロブライトだ、エアグルーヴだ！ やってやんよ、倒してから引退してやらあ！ 見てろよちくしょう！ 100馬身差でぶつちぎってやらああああ！」

「ふふふ……その言葉が聞きたかったのです。グレートエスケープ……貴方はまだ競走生活を終えるには早い……強さと夢を運び、駆け抜けるのです……」

先ほどまで質問していたはずの記者がふわふわと浮き上がる。

「え……？ あ……貴方は一体……？」

「時間です。私はこれで失礼します……ふふふ……いつか会う時があれば……また会いましょう」

「貴方は一体何者なんだ！」

「ニューヨークカップ、といえば貴方はわかるでしょう」

「なっ……まさか……いや本当に誰だ!! ニューヨークカップ!! 聞いたことねえぞ！ マジで誰だ！ なんだお前！」

「ふふふ……ウマ娘、そして馬を司る女神、ゴルゴルシーナちゃんのお告げをよく聞いて覚えておくのです……貴方はそのまま走り続けられれば、後世に美少女として言い伝えられるでしょう……」

「やめろッ！ ウマ娘つてなんだ！ 後世になんで美少女になるんだ！ 関羽か!? 関羽雲長みたいな美少女化か!? 佞言断つべしッ！ ちなみに巨乳キャラか!? 待て、答えろ！ どうせなら深窓の令嬢みたいなお淑やかで美しい感じのキャラがいい！ 聞いているのか、オイッ！ 待て！ 待ってくれーッ！」

「——はっ!？」

目が覚めるとそこは馬運車の中だった。

馬の女神はどこだ、引退会見は？ 俺は周囲を見回すがそこにいるのは同じくレースを控えた競走馬たちだけ。

輸送の疲れでぐったりしている奴がいれば、カリカリしているやつもいる。

意外と気にせずヴヒヴヒと鼻を鳴らしてる奴も。

ただの夢というには訳が分からず、どちらかという悪夢だったような気もする。

「むう……なんだっただ」

時間が経つとどんな内容か思い出せず、とにかく酷い内容の夢だったことと、メジロブライトとシルクジャステイスには負けられないという思いが残っていた。

今日は阪神大賞典。

5歳になった初戦として選ばれたGⅡレースであり、阪神競馬場の芝3000mで争われる長距離戦だ。

「今回は阪神大賞典から天皇賞・春をとるで。そこから宝塚記念か、海外遠征か……去年は凱旋門賞と遠くを見すぎた。まずは春の天皇賞からや。ここを勝って、その上で今後を考えても十分間に合うわ」

と、黒井先生のお言葉。

そして阪神大賞典と天皇賞・春の鞍上は去年1戦乗ってもらった、滝カナタ騎手に決まった。

ケンちゃんシルクジャステイスを選択するであろうことを予想し、またカナタさんの長距離路線を走るお手馬がいなかったため、依頼したという形になっている。

ケンちゃんに乗ってもらえないのは残念だが、天皇賞を幾度となく制覇した通称『盾男』が乗ってくれるのは心強い。

輸送中にストレスも溜めることなく、無事阪神競馬場へ到着する。

単勝馬券の人気はメジロブライトが断然の1番人気になっていた。

パドックで真面目に歩いている姿を見て、競馬ファンたちはカメラを向け、競馬新聞に色々と書き込んでいた。

中でもパドックを熱心に見ている競馬ファンの会話が聞こえてくる。

「すげえな、久々にメジロが春の天皇賞獲るんじゃないか」

「去年の菊花賞は3着だが年末のステイヤーズステークスでは2着に1・8秒差の大楽勝。今年初戦のAJCCでも危なげなく勝利して、ここにきてようやく本格化した感じだなあ」

「マックイーン、ライアンが引退してからは絶不調だったが去年はドーベルが出てきたしな。ここにブライイトが活躍すれば、名門メジロ復活じゃないか？」

「有り得るな……そういえば父はメジロライアンだな」

「それがどうした？」

「メジロライアンのライバルといえば……ほら」

「アイネスフウジンか。そういえばグレートエスケープはアイネスフウジンの子供だったな」

「同じ内国産種牡馬を父に持ち、しかもクラシックを争ったライバル同士……これは見ものだぞ」

「けど、シルクジャステイスだっているからな。俺はなんだかんだシルクジャステイスだと思っぜ」

「そうか……長距離で実績が一番あるのはメジロブライイトだ。俺は人気通り、メジロブ

ライトが勝つと思うよ」

「エスケープは？」

「まあ……若い方が勢いあるしなあ」

「だな」

おいおい、まるで俺が衰えたみたいじゃないか。

こちらら調教は絶対好調で自己ベストタイムを連発している勢いだっていうのに、軽視しすぎなんじゃないの？

なんて心で思いながらも、電光掲示板の単勝3番人気という評価は納得のいくものだった。

シルクジャステイスには去年2敗し、メジロブライトはシルクジャステイスと互角以上で渡り合っている。

そりゃあこのオッズにもなるというもの。

「貴方がグレートエスケープさんですね」

「君はメジロブライトか。今日はよろしく」

「いいレースにしましょう」

傍に来たのはメジロブライト。

単勝1番人気に推されているのに納得するほど、堂々とした振る舞いをしている。

俺を前にしても欠片も萎縮する様子はなく、礼儀正しきの裏には勝利に対する執念が渦巻いているようだった。

あくまで競争相手としか見ていないのだろう、一言二言で彼はまたパドック周回到戻ってしまう。

「けつ、なんだよおっさん。また来たのか？」

「シルクジャステイスか。元氣そうだな」

「もう引退した方が良いようなおっさんとは違うからな。去年の京都大賞典では終わった奴だと思ったし、ジャパンカップは逆にしてやられたと思った。それでも有馬記念では俺が勝った。もうおっさんの時代じゃねえってことだ」

シルクジャステイスは名前とは裏腹に悪役が似合う顔つきで言い放った。確かにそうかもしれない。

世間では復活の気配ありと持て囃されていても、歳の衰えというものは来る。

しかし——今の俺はそうではない。

「……レースが終わればわかることだろう」

「チツ、ジジイぶりやがって……ヤネの梶ちゃんを選んだのも、俺の方が強いと思ったからだぜ」

「ほかの騎手は知らないが、カナタさんが空いていたし、ケンちゃんがジャステイスを選

んでも大丈夫なように黒井先生が先にカナタさんに依頼しただけだぞ」

「うるせー！ どうでもいいんだよそんなことは！ とにかく、てめーの時代は終わらだーッ！」

シルクジャステイスは怒鳴ると背を向けた。若々しいが故に、荒く、闘争心に富んでいるやつだ。

まだ4歳になったばかり、人間なら高校生くらい。運動部のエースとか大体ああいう感じだった気がするし、意外と違和感がなかった。

対して俺は今年で5歳。一般的にサラブレッドの肉体的な成熟は4歳の秋ごろといわれており、人間では20歳くらい。

そこから換算すると肉体的には20台前半。精神的なものは環境によつて変わるものだが、肉体はまだまだ戦えると思う。

精神的にはいい加減大人にならなくちゃいけないという年ごろ。いきり立ってレースでかかるようでは、やっていけない。

もちろんそれは冷めているというわけではない。大切なのは冷静さだ。

冷静に勝利を見据えて走る——俺に最も大切なのは、きつとそれだ。

シルクジャステイス、メジロブライト。

この2頭には負けられない！

パドック周回が終わり、カナタさんが俺の背に跨った。特にトラブルもなく、本馬場へ入場した。

「おー、前より調子良さそうだね」

本馬場で走り出すと、レジエンドと既に呼ばれているジョッキーは笑った。

彼は黒井厩舎の後輩でスペシャルウィークの主戦騎手を務めていて、来月には皐月賞をスペシャルと共に挑む予定となっている。

後輩と鞍上のためにも見事勝利してみせたいものだ。

ゲート入りもスムーズで、俺は2枠2番に収まった。

ひとつ飛ばした先にはメジロブライ트가少し落ち着かない様子でゲートに入ろうとしている。

動きが硬い。噂ではゲートが少し苦手らしい。

メジロブライ트가後方からスパートをかけるタイプなもの、それが原因だろうか。

大外枠の馬がゲートに収まって、スタート。

俺は完璧にスタートを切るとそのままスツと先頭に立った。5番のギガトンがハナを主張したが、鞍上の抑えた手綱に従って2番手につけた。

先頭のギガトンから1馬身ほど開けて俺が2番手。

阪神芝3000mはスタートからカーブまで比較的短く、位置取りが熾烈になりやす

い。

しかし今日は人気の2頭が後方からのレースを得意とする馬だからか、周りも特にそちらを警戒して動いては来ない。

正面スタンド前を走ると歓声上がる。

何頭かが歓声を聞いた結果、入れ込んでいるがいずれも騎手たちが落ち着かせて元のペースを取り戻している。

さすがにGⅡを走る馬たち、落ち着いている。

レースは淡々と流れている。

どの馬も自分のポジションをとったまま動くことなく、レースのペースに身を任せていた。

「よしっ……ここからだ……！」

第3コーナー手前からギアを上げていく。

阪神の直線は短く、第4コーナーにおけるポジションは東京や京都の外回り以上に重要だ。

先頭を走るギガトンは俺の上げたペースに追い付ける脚は残っていない。

第4コーナー手前でギガトンを躲すと勢いに乗ったまま先頭で直線に入った。

歓声上がる。

すぐ後ろにシルクジャスティスかメジロブライトが上がってきているのだろう。3000mの長丁場となるとスタミナが尽きかけている馬も多くいるが、後続に控えていた馬たちは脚をしつかりと残している。

後続を突き放しつつもぴつたりと人気の2頭がついてきているのを感じた。

阪神の最後の直線には坂がある。

ここで失速してしまえば当然後続の馬に差し切られるだろう。

これまでの俺であれば、歯を食いしばって必死に坂を上っていただろうが——生憎、今の俺は絶好調だ。

「なっ——てめ、え……！」

「まだこんな脚が……！」

二強対決、あるいは三強と関係者やファンたちは考えていたかもしれない。

いつぞやの彼の三冠馬ナリタブライアンとGI4勝馬マヤノトップガンの一騎打ちのような戦いを期待しているのだろう。

悪いがそうはならない。

後ろに付かれつつも決して抜かせない。

鞍上のカナタさんのペース配分、スパートのタイミングは完璧だ。

決して最高速度そのものは速い方ではないが、最高速度を維持する時間を俺より長く

できる奴は現役には恐らくいまい。

滝カナタというトップジョッキーが判断した決して追いつかれない地点でのスタートは見事にシルクジャステイス、メジロブライトを置き去りにしていた。

ゴール板を駆け抜けると同時に馬券が宙に舞う。

阪神大賞典で2着に1と1/2馬身差をつけて見事に優勝したのだった。

春の盾へ向けて視界良好、依然問題はなし。

今年はグレートエスケープの年にしてみせるぜ！

俺は阪神大賞典での完勝しながらも、春の天皇賞を見据えていた。

自分の中で最強という称号を手に入れたい野望がすすくと育ち、心を燃え上がらせているのを強く感じた勝利だった。

×××

「学園に幽霊が出る、ねえ。幽霊といわれてもピンとこないものだが」

「イマドキ随分使い古された噂が出てくるもんだなあオイ。幽霊なんてロジカルじゃねーよ。何かと見間違えたんだろうよ」

「えー！ 本当だよ？ だってボク聞いたよ？」

トウカイテイオーは頬を膨らませて反論する。

幽霊と聞いても、ピンと来ないというのが素直な感想だった。

始まりはカフェテリアでレースについて、エアシャカールと話している時のことだった。

私をタイチョーと呼び慕うテイオーは暇していたのか、会話に混ざりこんで、話が夜のトレセン学園に及んだ時にテイオーは幽霊について話し出した。

そのことについて私もエアシャカールも、子供っぽいテイオーの言うことだと真面目に取り合わなかった。

「幽霊なんてそもそも非論理的だよなア。死者の魂がなんとか……そんなもんあるわけねーっての」

「まったくだ。夜のトレセン学園に忍び込んだことはあるが、そういったものは見たことがない。夜のトレセン学園は警備員もいて、完全な無人ではない。噂の種はいくらでもある」

私とエアシャカールがそういうとテイオーはますます口を尖らせて拗ねた。

「なんだよう、つまんないの!」

「テイオーは幽霊に会いたいのか?」

「え!? いやあ、流星に会いたくはないけど……でもでも、本当にいたらどうしよう!」

「いねえよ」

「いないだろうな」

「あー！ もうそうやって言うー！」

テイオーが騒ぐが私とシャカールはどこ吹く風というやつで二人してコーヒーに口をつけた。

ぶんすこうるさいので私はお茶請けとして食べようとしていたキャロットケーキを半分に分けると、大きい方をテイオーへ差し出した。

「これあげるから静かにするんだ」

「子供を宥めるんじゃないんだからやめてよ！ 食べるけどー！」

「お子様はこれだから……ユーレイとかそういうアホみたいな話が好きだなあ」

「むー……シャカ先輩もタイチヨーもお化けが怖いだけなんでしょ！」

ピタッとシャカールと私が動きを止めた。

「別に怖かねーよ。ただ存在が有り得ねーってだけの話だ」

「同意見だ。確かめるのも時間の無駄だしな」

「ふーん、だ。そういつて逃げようとしてるんだ。本当は怖いくせに」

「ああ!? 別に怖かねーよ！ いいじゃねえか、幽霊騒ぎが本当かどうか確かめてやるよー」

「……テイオーもついてくるんだぞ。言い出しつpegが逃げるのは許せないからな」
「ぴえ!？」

というわけで幽霊騒ぎの真相を探るべく、エアシャカールと私グレートエスケープ、そして嫌がるトウカイテイオーを連れて夜のトレセン学園を探索することになった。

トレセン学園へ向かって歩きながら、気になったことをテイオーに尋ねた。

「テイオー、そもそも幽霊話はどんな話なんだ?」

「おいおい別にいいじゃねーか。聞かなくても。どうせ火の玉と懐中電灯を間違えたとか、そんなもんだろ」

「えー、ぼく怖くてあまり話したくないんだけど……」

テイオーは鈴の鳴るような声音から一転して、低く、足元から這い出てきそうなトーンで話し始めた。

「トレセン学園に寮ができた頃の話なんだけどね……とあるウマ娘がGIを目指して走っていたんだ。けど、中々結果が出なくて……その子が結果を出せなかったのは太りやすい体質のせいだったんだって。筋肉をつけるためにご飯を食べると体重オーバー、かといって制限をしたら力が出ない。そんな体質のせいで重賞も中々勝てなかった」
「本調子ではないのにOP戦勝つなんてすごいな」

「栄養学がなくてねえな。トレーナーはなにしてんだ?」

「知らないよ。というか話の腰を折らないで。それで、そのウマ娘は夜遅くまでトレニングをしていた。そしたら、誰もいないはずのトレセン学園の食堂から音が聞こえてきた……」

誰かがつまみ食いをしているのだろうか、それともメンテナンスだろうか。

そのウマ娘は寮に戻る前にキッチンを覗いてみることにした。

台所には、青鹿毛のウマ娘がいた。

ウマ娘は尋ねた。

『盗み食い？ ダメだよ、怒られちゃうよ』

青鹿毛のウマ娘は首を振った。

『いえ、待っていただけです』

誰を待っていたのか聞こうとしたら、青鹿毛のウマ娘は答える。

『お腹が減っているのは本当です』

そして聞こえてきた腹の音に、そのウマ娘は思わず笑った。

冷蔵庫におにぎりがあったので、青鹿毛のウマ娘と一緒にそのおにぎりを食べることにした。

青鹿毛のウマ娘は美味しそうに食べていた。

食事をしながら、最近はずっと勝てないこと、食事制限の度合いが難しくなっている

ことを自然と話していた。

青鹿毛のウマ娘は相槌を打つと最後には、

『食事は大切です。貴方は私におにぎりをくれました。そのお礼に体重をキープする秘訣を教えましょう』

青鹿毛のウマ娘は色々と話してくれたが、どれも聞いたことがある栄養学のことばかりで目新しいものはなかった。

そんな心中を察したのか、青鹿毛のウマ娘は提案をした。

『これは特別なのですが……貴方の体を軽くしましょう。今回はこれだけ……』

青鹿毛のウマ娘がそのウマ娘に触れた。

しばらくするとなんだか体が軽くなったような気がした。次の日、模擬レースで自己ベストのタイムで優勝した。

そのウマ娘は嬉しくなり、その勢いで出走した重賞レースで2着になった。

惜しかった。

ただ、手応えを感じた彼女は再び夜の食堂へ向かう。青鹿毛のウマ娘はやはりそこにいた。

『貴方のおかげであと少しで重賞で勝てそうなんだ！』

『またあの特別なやつをやってほしい！』

『アレならGIだって勝てる！』

ウマ娘は興奮した様子で青鹿毛のウマ娘に頼み込んだ。

青鹿毛のウマ娘が了承し、体に触れるとまた軽くなった。今度は翼が生えたようにすら思えた。

それからウマ娘はGIを勝ち、その後またレースに負けた。

そして負ける度に青鹿毛のウマ娘を頼っていた。

しかし、五度目のお願いをすると、青鹿毛のウマ娘は初めて返答を渋った。

『4回もやったから、もう出来ないと思う』

引き下がれないのは件のウマ娘だ。

ここで勝てないと失望されちゃう、ただの弱いウマ娘だとバレてしまう。

何が必要なのか、何でもするから。

そのウマ娘は青鹿毛のウマ娘に懇願した。

『……でしたら、次のGIレースが最後ですよ？ 終わったら必ず……必ず私の元へ来てください』

ウマ娘は喜んで、そのGIレースで見事に勝利した。

約束通り青鹿毛のウマ娘に会いに行くと、そのウマ娘はにっこりと微笑んだ。

『約束を守ってくれて嬉しいです。では、いただきますね』

何を言っているのだろう。

そのウマ娘は意味を尋ねると青鹿毛のウマ娘は言った。

『貴方の体をずつと軽くしてきたんですけど、もう一口ぶんしかありませんから。だから、今回で最後』

常軌を逸した事象に巻き込まれていると気づいたウマ娘は後退ろうとして、尻もちをついてしまう。

転んだのだろうか。

足を見ると、両足が付け根から綺麗さっぱり消え失せていた。

その先には、ウマ娘の顔がまっぶたつになりそうな程口を開けて、足を咀嚼している。悲鳴を上げながら逃げようとして、既に這い蹲るだけの腕すらもいつの間にか食べられている。

助けて、勝ちなんていらぬから——ウマ娘は結局、丸呑みにされて食べられてしまった。

「——つてお話。怖い怖いけどちよつと唐突すぎて作り話だよねつて僕は思うんだけど二人ともめちやくちや膝笑つてる!？」

「べべべべべべべべべつにビビつちやいねえよ。ただ今日はトレーニングやりすぎただけだよへへやりすぎちまつたなハハハハハ」

「大体そういう話は子供をしつけるための話とかそういう類から来ている。これもいわゆる勝利が欲しいために禁断の行為に手を染めることを諫める逸話からきているのだから怖くなんてないぞ」

「すごい早口じゃん……やめてよお、二人が怖がったら僕も怖いでしょ!？」

「怖かぬーよ!」

「怖くない!」

「ぼ、僕だつて怖くないし!」

3人の間で流れる沈黙。

完全に撤退する流れを失ってしまった。

誰か一人でも『えー、怖いから帰ろうぜ!』と冗談めかして言えば乗る流れだったというのに、つまらない見栄のせいで探索を続ける以外の選択がとれなくなっている。

「……とにかく食堂に行けばいいんだろ! 食堂に何もなきやただの噂っただけだ。そうだろ?」

「ああ! そうだなシャカール! さつさと食堂に行つてしまえばいいのだ」

「じゃつ、じゃあ、さつさと行つちやおうよ!」

しかし行かない! 誰も前に行かない!

まるで逃げウマ娘不在のレースで誰がハナを切るか迷った結果超スローペースに

なつてしまふレースが如き有様。

三人の中で共通の認識があるだろう。

「一番前は怖い、かと言つて一番後ろも怖い。だとしたら真ん中……真ん中がいい！
私もそう思う。」

「シヤカ先輩……タイチョーでもいいけど、前に行きなよ」

「バカ言うんじゃないよ、テイオー。お前が言い出したんだからお前が行け」

「そうだぞテイオー。隊長命令だ」

「なんで僕が！ タイチョーは逃げウマ娘でしょ！ シヤカ先輩は追い込み！ 僕は先行だから真ん中が僕になるべきでしょ！」

「ふつ、ふぎけんな！ 追い込みだろうと最後は捲るんだよ！」

「私は先行するときもあるから」

「じゃあ僕差しになるもーん！」

「ガキかてめえは！」

ぎゅおおお……！

明らかに三人の声ではない音が鳴り響き、沈黙が流れる。顔を見合わせてから、後退りをしようとしたときだった。

後ろからガタリ、と物音が鳴った。

「キヤー——!!??」

「わああああああああ!!??」

「アアアアアア!!??」

三人全員が一斉に走り出すとまるで逃げ込むように廊下から部屋に飛び込んだ。

心臓がバクバクいつて口から飛び出そうだ。

「なんだ、なにがあつた!?!」

「オイオイオイ後ろから物音がしたぞいるんじゃねーか!?!」

「つていうか……こ……こ……」

テイオーの声が震えている。

まるで踏み込んだ先がいてはならない場所だともいうのか——私はテイオーの言葉聞いて辺りを見回すと、彼女が恐怖に染まった理由を理解した。

「……食堂だな……」

「び」

「ヒュツ……」

さつき聞いたウマ娘のかたちをした怪物の話を思い出してガタガタと震えた。

そして、ぎゅるるるといふ音がもう一度鳴る。今度はすぐ傍から音が聞こえた。

「だ、誰だ!?! いわゆる幽霊というやつなら相手になるぞー！ テイオーが!」

「おうコラ舐めてんじやねーぞビビらせようとしたってそうはいかねえぞ！ 黙ってねーからな！ テイオーが！」

「なんで僕なんだよう!!」

「……何をしているんですか？」

影から出てきたのは美浦所属のウマ娘、マンハッタンカフェだった。

見事なまでに光を飲み込む美しさを持った青鹿毛のウマ娘だけあって、闇に溶け込んでいた。

「なぜカフェがここに？」

「……お願いされて、見回りの手伝いをしていたんです。時々トレセン学園に忍び込むウマ娘がいるとのことだったので……」

「なんだよ、さっきの音もオメーか？」

「音ですか……？ 少しお腹がすいていたので……」

「はーびつくりした。やっぱりお化けなんて嘘だったね！」

「お化け？ 何を言ってるんですか。そんなことより、早く寮に戻ってください。叱られますよ……」

マンハッタンカフェが扉を指差す。

流石に見つかってしまえば大人しく寮に戻る他ないだろう。

脱走ウマ娘として名を馳せた私としては残念だが今回は寮に戻るとしよう。残念だが！ 仕方ないが！

「あれ？ こつちに扉つてあつたっけ……」

「何を言ってるんですか。私もお腹がすいているので……早く、入ってください……」
ぐい、とまとめて背中を押される。

マンハツタンカフェと話したことはあるがこうも強引なタイプだっただろうか。

少し違和感を覚えた瞬間だった。

「こらあ！ なんでこんな夜中に学園にいるんだい！」

怒声によつて背筋がピンと伸びた。

声の主は懐中電灯を持った美浦寮長、ヒシアマゾンだった。

姉御肌で面倒見が良くて人気者。

そんなヒシアマゾンまでここに来るとは何事だろうか。

「アマ寮長はなぜここに」

「見回りだよ。時々こうして見回っているんだ。そんなことより、お前たちはなにしているんだい？ 警備員もいるとはいえ、不審者が侵入することだつてあるかもしれないんだ。事件に巻き込まれたらどうするんだい！」

「ケツ」

ヒシアマゾンのお叱り言葉に思わず小さくなる私とテイオー。シャカールはそっぽ向いているが、どこかバツの悪そうな表情だ。

「ごめんなさい……」

「すまなかつた」

「まったく。早く寮に戻りな！ フジはきついお灸を据えてくるだろうが、もうするんじゃないよ！」

三人で返事をして振り返る。

気づいたらマンハッタンカフェはいなくなっていた。

「アマ寮長、さっきまでいたマンハッタンカフェは戻ってしまったのか？」

「カフェ？ なにを言ってるんだ。最初からあんたら三人しかいなかったろ」

「は？ いやいやいや今ここで私たちをあの扉の方に——」

指差した先には、ただ壁があるだけ。

だがさつき見たときは確かに扉があつて、マンハッタンカフェが私たちの背中を強引なまでに押していて——

「寝ぼけてるんじゃないよ。そもそも扉すらないじゃないか」

シャカールとテイオーと三人で顔を見合わせる。

身の毛もよだつ怪談の内容、そしてマンハッタンカフェだと思っていたウマ娘は実は

存在しなくて、あるはずのない扉へ連れて行こうとしていて――

「きゆう」

「どうしたんだいアンタたち!? おい、しつかりしな!」

トレセン学園の怪談の正体に近づいてしまった私たちは、意識を失った。

この学園は途轍もなくヤバイ事件や事故が眠っているのかもしれない――もう二度と安易にそういった話に首を突っ込まないことを決意したのだった。

「……ダンスパートナーさん。あの、今日……その、ちよつと……一緒に寝てくれないかな……」

「エツちゃん……どうしたの急に」

数日は独りで眠れなかった。

第25話 シューティングスター

夏のうだるような暑さは冷房でかき消されているはずだったのに、グレートエスケープのトレーナーはじつとりとした汗を流していた。

ナカヤマフェスタというウマ娘に誘われたグレートエスケープに呼ばれて、空き教室で行われる麻雀に参加することになったトレーナー。

急ぎの用事もないから構わないだろう、半荘くらいであれば……と参加したのだが。

「くくく……立直だ。いいね……痺れる展開になってきたよ」

対面、ナカヤマフェスタからの立直。

トレーナーは視界が歪むのを感じ、目頭を揉んだ。

一度冷静になるべきだろう——トレーナーは危険牌の整理も兼ねて一息ついた。

場は既に南二局。自分は残り7000点でびりつけつ、子の満貫直撃でトぶほどの点数。

立直をかけたのは対面のナカヤマフェスタ。現在は10000点で3位ながら親番で巻き返しを狙っている。

下家には巻き込まれた割には恐ろしい手腕を見せつけるエイシンフラッシュ。堅実

な打ち方で現在2位、33000点を保持している。

そして上家のグレートエスケープが現在49000点でトップを走っている。

本来なら、これはただの遊び。

暇つぶしに付き合っているだけだというのに——！

ナカヤマフェスタがくつくつと笑う。

ギャンブル狂いと噂のナカヤマフェスタとグレートエスケープの仲がいいのは知っていたがまさか、ここまで過酷な勝負をしていたのは知らなかった。

「くくく……負けたら『なんでも言うことを聞く権利』ね……意外とグレのトレーナーがやられることになりそうだ」

そう！ 今回賭けられているのは己の尊厳なのだ！

恐らく大した命令はされない、そう思ってはいるが、勝者が容赦してくれるとは限らない。

上家のグレートエスケープは現物の三筒を切る。

牌山からツモってきた牌を手牌の上に置いた。

聴牌——純全（ジュンチャン）、三色、一盃口という勝負手。

跳満は確定、立直をかけて裏が乗れば倍満まで伸びる手だ。

親を迎える前に巻き返すためにも、ここは勝負したいところだが、ツモった牌は最悪

と言つていいものだった。

手の中にあるドラの發は一枚も切れていない初牌、つまり超危険牌……！

どうする……！

もうこれ以上は振り込めない……！

……。

仕方がない。ここはオリて次の親番で巻き返そう。

手を崩して現物を掴んだそのとき、隣から声が聞こえた。

「ふふ……相棒よ。グレートエスケープのトレーナーたるものが、そんな弱気な姿勢で

どうする……！ 慎重さは大切だが……時には必要だつ……！ 勇気がつ……！」

グレートエスケープの言葉に目が覚めた。

そうだ……この手で勝負しなかったらどこで勝負するとうんだ。

ここは立直をかけて、一発逆転を狙うのみ！

立直と宣言をしながら發を叩きつけた。

「「ロン!!」」

「四暗刻単騎です」

「大三元だ」

「国士無双だよ」

○○○

というわけで、勝者たるグレートエスケープから命じられたのは一緒に出かけて食事を奢ることだった。

待ち合わせの場所はトレセン学園の正門前。

少し早く着きすぎてしまっただろうか。

腕時計を確認したり、そわそわしていると、声をかけられた。

グレートエスケープの声だ。

振り返ってから、言葉を失った。

「どうだ、相棒。……似合っているか？」

トレーナーがウマ娘を見る姿は基本的にジャージか制服、そして勝負服のどれかだ。

しかし今日は、着飾った上でサングラスをかけており、まるでハリウッドにいるモデルやセレブのようだ。

ウマ娘はヒトから見て容姿端麗な種族だが、グレートエスケープは背が高いのもあって美しさを際立たせていた。

似合っている。

そう伝えると、グレートエスケープは「そう」と小さく返した。

サングラスの下の表情はわからない。

「今日は私の言うことを聞いて、一日自由にしてもいい……構わないな？」
構うから、流石に困ることは断らせてもらおう。

とはいえ彼女も子供ではないから、決して無茶な命令はしてこないだろう。

ご飯の奢りくらい、普段のレースやトレーニングの頑張りに対するご褒美だと思えば、むしろ足りないくらいだ。

早速彼女が希望に出したショッピングモールへ向かう。

到着するなり彼女はポケットから出したメモを盗み見ていた。

「えっと……最初は自然な会話で……」

グレートエスケープはメモを仕舞うときこちない仕草をしながら、これまたぎこちな
い口調で話し始めた。

「さ、さっ、最初はスポーツ用品店とかどうかな！ やはり欲しいアイテムはトレーナー
にも見てもらいたくてな！」

いつものクールさはない。

違和感を激しく覚えるが、そこは指摘せず、彼女の求めるがまま付いていく。

その後も同じような流れで色んな店を回った。

「ど、どう、だ……このシューズは！」

少し重くないか？

——スポーツ用品店では普段トレーニングで使うアイテムを見たり。そこでは普段履かないようなタイプのシューズを提案された。

「このスコップ……上手く穴を掘れそうだ……この滑車も上手く使えば……」
何を企んでるんだ？

——ショッピングモール内のホームセンターでは自分の世界にのめり込んでいき。

「キャロチ……コーラ……」

ダメです。体重管理がダメになるでしょ。

——お菓子専門店ではじいっとスナック菓子などを見つめていて。

最後に映画を見終えると、ショッピングモール内のレストランで昼食を摂ることにした。

そこでグレートエスケープに尋ねられた。

「相棒……今日は、楽しい、か？」

なんだか緊張しているらしい彼女は、落ち着かない様子だった。

冷静沈着でいることが多い彼女を見ているから、新鮮で、楽しいよと答える。

「な、そんなに落ち着かないか？ 普段と同じ自分を心掛けていたのだが」

なぜ取り繕おうとするのだろうか。

体調でも悪いのかと問いかければグレートエスケープは眉をひそめて「朴念仁め

……」と呟いた。どういふことだろうか。

間もなく、二人が注文した料理が運ばれてきた。

グレートエスケープはリブローズステーキ、こっちはビーフカレーライス。

とても美味しくてあつという間に食べ終えてしまった。

「御馳走様でした」

会計を済ませてからトレセン学園へ戻る。

その途中でまた色んな店に寄っては、グレートエスケープと話し込んだりしていた。

寄り道しながらだったから、あつという間に夕方になってしまった。

「あつという間だったな……」

楽しかったが名残惜しいと言うとグレートエスケープも頷いた。

「もう少しゆっくりしたかったかもしれない」

トレセン学園の門限にはまだ余裕がある。

公園で少し休んでいこうという提案にグレートエスケープは賛同した。

夕方にもなると子供たちが遊んでいて、少し賑やかだった。

噴水そばのベンチに腰掛けて、一息つく。

「……相棒。今日はすごく楽しかった。また相棒と2人で、デー……んんっ、出かけたい
と思っている」

何かを合図にするでもなく、彼女はぼつりぼつりと語り始めた。

「宝塚記念にはサイレンススズカもエアグルーヴも出るという。間違いなく強敵だ。それでも勝つのは私だと自分を信じているが……怖くもある。相棒、私は才能豊かなウマ娘と思うか？」

初めて出会った時から磨けば光る素質はあつたように思える。

そして彼女は常に己を磨こうとしていたから、デビュー前の同期の大半は相手にならない強さを持っていただろう。

先行して、自分のペースで逃げ切る姿はまさに横綱相撲と呼ばれるような王道の勝ち方で、決して弱いウマ娘ではなかった。

——ああ、そう思う。

「ありがとう。……それでも、ウマ娘——いや、ウマ娘に限らず、頂点を目指すということとは過酷だ。才能と実力を築き上げてもお届かない……私はサイレンススズカやエアグルーヴに、それを突きつけられるのが怖い」

しかしグレートエスケープは笑みを浮かべている。

「だが、逆にこちらがその事実を突きつけることだつて有り得る。……相棒。二人でなら、それができるよな」

もちろんだ。俺は、ウマ娘の頂点に立つのがグレートエスケープだと信じている。

グレートエスケープは立ち上がると、笑顔を見せた。

「夢を達成出来たらまたこうして、出かけてくれないか？ トレーナーとウマ娘、勝ったレースや負けたレースの思い出に浸りながら……」

ああ、きつとまた来よう。勝つのは俺たちだ。

グレートエスケープとの外出は、宝塚記念のモチベーションを高める一日になった。

○○○

「——で、麻雀してまで手に入れたデートの機会でなにもできず、か？」

「わかっている！ ナカヤマに言われなくても自分でもわかっているとも……だがいざ2人きりになるとレースの話とか、そういうことばかりしか話せず……」

「話すことを予め決めておけばよいのではないですか？ 内容も時間も決めておけば悩まなくて済むと思います」

「フラツシュ、そういうわけではないんだ……くっ……ナイスネイチャかカレンに聞いてみるか……」

「宝塚記念前に随分贅沢な悩みをしているな……」

「結局宝塚記念が気になってその話になってしまったからな。落ち着いてからまた試してみるか……」

×××

——天皇賞・春。

京都芝3200mで行われる日本で最長のGIレースであり、数多の名馬が制覇してきた。

昔は天皇賞こそが最大目標とされる時代もあり、ダービーが3歳馬の最高峰を決める戦いなら天皇賞は古馬最強を決める戦いでもあった。当時の制度、番組表の影響で優勝後、引退する馬も多かった。

しかし秋の天皇賞が2000mに短縮されるなど、徐々に長距離レースの価値は以前ほど高いものではなくなりつつある。

だとしても、まだ天皇賞を優勝することは古馬最高峰の栄誉だという風潮は残っている。

俺も、3200mという過酷な距離を勝つことは確かに最強の証だと思う。

挑戦者としてレースに臨んだ去年はマヤノトップガン、サクラローレル、マーベラスサンデーといった名馬たちに迫りこそしたが、敗北。

そして骨折までしてしまい、しばらく低迷が続き苦しんだ。

そのせいでステイヤーではない、中距離向きの馬だという評価になってしまった。

黒井先生は『長距離やタフなレースでこそ力を発揮する馬』だと言ってくれている。先生の相馬眼は正しかったと証明するためにも、今回の天皇賞・春は負けられない。

去年の敗北は本当に悔しかったとみんなが言っていた。そのため、厩舎一丸となって俺をサポートしていこうという雰囲気で接してくれている。

黒井先生も天皇賞の盾がやはり欲しいらしい。

阪神大賞典後の追い切りでは黒い布のようなものを見せてきた。

「今日からこれをつけて走るんや」

「プリンカーですか」

今日俺に乗る調教助手のあんちゃんが呟く。

プリンカーとは、本来視野の広い馬の視界を遮ることでレースや調教で集中できるようにするための馬具。

しかしなんで今更俺に。俺は真面目にレースを走っているというのに。

「いいかもしれませんね」

「せやろ」

あれ？ なんだか意外と好意的というか、装着することは当然みたいな反応だな。

別に着けるのが嫌なわけではないのだけれど。

まるで普段から集中して走れていないみたいないイメージを持たれてるのは心外だ

なあというかなんというか、でもそういう意味じゃないんですよ。

「前走でもカナタさん言っちゃいましたからね、レース中ほかの馬を気にしやすいつて」

「レースを理解するだけの賢さがあるからな。そのせいやろ」

集中して走れてない意味でした。

ええー。そんなふうにしてたのお？ もう2歳から数えて4年目になるというの

に、衝撃の新事実だ。

「というわけで着けるで」

「イヤがりそうですね」

イヤーツ！

しかし暴れると先生や調教助手のあんちゃんが危ないので大人しく装着される。

違和感はあるが邪魔な感触はない。

黒鹿毛の馬体に黒いブリンカー。似合っているだろうか。

「……流石やな。イケメンや」

「ですね」

ほんとにいく？

見た目より大事なものは走っている時に効果があるかないか、そこだ。

今日はレース明けの追い切りなので栗東のCWコースを馬なりで走る。

タイムはもちろん問題なく、体のバランスもあまり崩れておらず阪神大賞典の疲労はほとんど残っていない。いい調子だ。

しかしブリンカーの効果はわからなかった。

音が少し聞こえづらくなり、視界も狭まったが自分だけで走る時はいつもと違う部分は何も無い。

次の週も単走だったから効果はわからず、その次の週でようやく併走で調教を行うことになった。

「というわけでよろしくお願いします、エスケープ先輩！」

「よろしくな、スペシャル。というか……カナタさんが乗りに来てるのか。まだ1週間前追い切りとはいえ」

調教馬場まで歩きながらスペシャルと世間話に興じる。話す相手の上ではトップジョッキーの滝力ナタさんがゆったりと乗って調教を待っていた。

スペシャルは今回臯月賞の1週間前追い切りを予定している。俺は臯月賞から2週間後に天皇賞・春だから、少し仕上がりは劣っているだろう。

「それにしても顔に付けてるやつかっこいいですね！ ブレーカー！」

「ブリンカーな。似合うか？」

「ヒトが着けてるグリーングラスみたいでかっこいいです」

「多分サンングラスだが、ありがとう。似合ってるかー……そうかあ。ヨシツ、スペシャル！ 今日日は併走よろしくな！」

仕上がりには差はあれどこっちは古馬GⅠ馬、まだ若い3歳馬には負けられない。

調教は栗東ウツドチツプコースで併走。

先を走る俺を後ろからスペシャルが追走し、追い抜くという形で行う予定だ。

逃げ馬と差し馬でお互いにちょうどよく調整できるというわけだ。

ダンスパートナーさんを思い出すなあ。

そして調教が始まる。

いくらその後方をスペシャルが追走しているらしいが、プリンカーのせいでそれを伺うことはできない。

音でなんとなくの位置はわかってても、正確な位置はわからない。

しばらく走ると、馬蹄の音が大きくなったと思えばすぐ隣にスペシャルウィークが並ぶ間もなく抜き去っていた。

(速い……いや、それ以前にヤネの合図に反応しきれない……)

スペシャルは俺を追い抜き、スピードを維持したままコースを走り終えた。

流石に仕上がっているが、それ以上に自分の悪さが際立った。

実際にそれを感じたのもあるようで調教助手のあんちゃん、カナタさん、黒井先生が

3人で話し合っている。

……ここまでの自分の戦績は間違いなく立派なものだろう。

しかし生き物である以上、衰えは必ずやってくる。

それに適応するためには変化が必要だ。

(よし……やってやるか)

翌週、俺はスペシャルとは別の僚馬である『ラッキーストライク』(牡・4歳、500万円クラス)と併走することになった。

「よろしくお願いしますー!」

「よろしく!」

実はこの子、俺が2歳のときに世話になった先輩馬、ラッキーパーンチ先輩の弟(半弟)なのだ。

その縁もあって世話を焼いている。

先輩の弟らしく、気弱で優しい性格なため、レースではイマイチ競り合いに弱いという欠点があったりするほか、ほかの馬にいじめられやすかった。

そのため俺が周りの奴らを蹴散らしていたら、懐かれた経緯があった。

だが先輩の弟だろうと調教になれば関係ない。

坂路を駆け上がりながら、追走してくるラッキーストライクを待つ。

(走る)とだけに集中……集中……集中……)

俺がやるべきなのは合図にいち早く反応することだけ。

プリンカーで前しか見えない即ち前だけ見ていれば良いということ。

馬蹄の音は聞かない。

ただ鞭が俺に入るのを待つ。

地面を蹴る度に小刻みに鳴る蹄の音。リズムカルに地面を叩きながら、無心になつていく。

(——今だ)

騎手からの合図の声と共に鞭が振るわれ、肩が叩かれる。

痛みには及ばない刺激だけで合図には充分だ。

走りながらもため切った脚を爆発させるように、地面を蹴りあげた。

この日の調教タイムは、競馬新聞の片隅に素晴らしい時計を記録したと載せられた。

「うゝあゝあゝあゝあゝあゝ!!! まゝけゝまゝじだゝあゝあゝあゝ!!!」

「おお、よしよし。俺の分の人参をお食べ」

「もっしやもっしやひぐつ、ひんつ、ひいんつ……もぐもぐ」

皐月賞の翌日、俺はスペシャルウィークに泣きつかれた。

1番人気で臨んだ皐月賞だったが前を走るセイウンスカイ、キングヘイローを捉えきれず3着。それが悔しくて馬房に戻ってくるなり俺にひんひんと泣いて訴えるのだ。

気持ちをはわかるだけに突き放しづらい。

かといって「仇はとつてやる」と言うのは違う。そもそも対戦できない。

「悔しかったなあ、そうだよなあ」

「ううっ、うっ、ぶほっ、もぐ、ひい、ぴいい……ぼふっ、ぶもっ……」

食いながら泣いてるせいでまるで豚さんだがそこは黙っておいた。

しかしスペシャルはなぜ負けたのだろうか。

はつきり言つてスペシャルウィークはクラシックを走っていた頃の俺よりも優れていると思う。

瞬発力や切れ味は父サンデーサイレンスの持ち味を受け継いでいるし、新聞では久々にサンデーサイレンス産駒の大物が出たと評判だ。

「こういうときは……アレしかないな。最近やつてなかったからみんな待ちわびているだろうし」

「ぶふえ……？ なにするんですか……？」

「スペシャルまで連れ出すのバレたら怒られるからな。夜になるまで待て」

そして夜になった。

みんなが寝静まった（スタッフ何人かは起きていると思うが）夜更けになればあとともう俺たちの自由時間だ。

「脱走をする」

「ええっ、いいんですかそんなことをして」

「ダメに決まってるだろう」

「そ、そうですね、普通やんないっすよね」

「ダメだからやらないとは言ってないぞ。今回脱走方法はこちら」

まず厩務員からくすねた馬房の鍵を用意する。

この鍵を使って馬房を開ける。

スペシャルの分も開ける。

「以上が脱走方法です。簡単だな」

「で、出ちゃった……本当にいいんですか……？」

「ダメだからさっさと出てさっさと帰る」

厩舎から出る途中にスポーツ新聞が置かれていた。

臯月賞でスペシャルウィークが敗北し、セイウンスカイが勝利した記事がでかか

乗せられている。

どうやら大外枠かつグリーンベルトと呼ばれる内側有利の馬場状態のために前を捉

えきれずに負けたらしい。

それも競馬とはいえ負けは負け、悔しいだろう。

「それでエスケープ先輩……外に出てどうするんですか？」

「なにもしない」

「ええーっ!? なんかこう……次のダービーで勝つための特訓とか、作戦とか……心構えとか!」

「俺と脚質も能力も相手も騎手も違うのに言えないだろう……言うことなんてない。ただ、こうやってのんびり過ごす。そして、敗北の辛さを噛み締めながら……何のために走るか、次どうするのか考える」

手が届きそうもないほど遠くに、無数の星が煌めく空を見ながら、地面に横たわる。

俺から言えるのはそんなことくらいで、俺だつて負けてのたうち回るくらい悔しくなったり、悩んだりしてきた。

あの星々に負けない輝きを放つライバルたちがいて、きつとこれからも増えていく。

「勝てない相手が出てくるかもしれない。逆に、勝てるはずだと思っていたのに負けることもあるだろう。そんな勝負の世界に俺たちは生きてるんだ。負けたあとはまずは心をすつきりさせて、どうやったら勝つか。それを考えるしかないんだ」

俺はそれに気づくのに時間がかかったし、気づいた今でも負けたら悔しくて喚くだろ

う。

でも、そんな自分が競走馬『グレートエスケープ』たる所以なのかもしれない。

「スペシャル……日本ダービー勝ったらすごいぜ。モテモテだ」

「そ、そうなんですか。オレ、あんまり興味ないすけど」

「ちやほやはされるしな。故郷の牧場の人達にも誇れるだろうな」

「へー！ エスケープ先輩はどうだったんですか？」

「聞きたいか？ 俺はまず橘ちゃんっていうそれはもう美人な馬主がいてだな——」

慰めがてら、自分の身の上話をしながら夜を過ごす。

スペシャルウィークには是非ともダービーをとって欲しいと思うのが親心ならぬ、先

輩心というものだ。

気づかれないうちに馬房へ戻るまで、スペシャルに色々なことを話していた。

2週間後には天皇賞・春が控えている。

少しずつ見えてきた最強の称号へ、あと少しだ。

第26話 手が届きそうで

天皇賞・春を皮切りに、今週から連続で春のGIレースが開催される。

開催はいずれも京都または東京であり、まさに様々な路線のチャンピオンを決める戦いといっても過言ではない。

今週行われる天皇賞・春は伝統あるGIレースであり、最強ステイヤーを決める戦いでもある。

古くはこのレースを勝つことが最高の名誉とされ、今でもこのレースはまさに格付けにはびつたり、大レースとなっている。

スーパークリーク、メジロマツクイン、ビワハヤヒデ、ライスシャワー、マヤノトツプガンと平成に入ってから名馬が綺羅星の如く、このレースを勝利して名を刻んでいる。

今回、その名を刻む馬はやはり◎メジロブライトだろう。

前走はグレートエスケープの逃げ切りを許したが、直線の短い阪神競馬場では持ち味を活かしきれなかった。

直線と距離がそれぞれ伸びることで末脚は前走以上に期待できる。久々にメジロの

天皇賞制覇を見たいものだ。

對抗には○グレートエスケープ。

昨年秋にジャパンカップを勝利し、その後の有馬記念もタイム差がない4着、年明け初戦の阪神大賞典を楽勝した。

恐らく当日は1番人気に推されるだろうが、そういうときに敗北したりするのがこの馬。

父アイネスフウジンはどこらかというスピード型だが、その父シーホークはスタミナ型産駒を多く出していた。

体型からモステイヤータイプなだけに、今年はきつちり強さを見せて欲しい。

▲にシルクジャステイス、有馬記念ではスローな流れから素晴らしい追い込みで差しきり勝ちをおさめている。

今回の天皇賞・春でもグレートエスケープは悠々逃げてスローペースになりそうな予感。

しっかり追走していれば末脚で逆転は可能だ。

△には――

(競馬新聞『ハチ』のコラムより一部抜粋)

○○○

緊張というものはまるで感じていなかったと思う。

レースが近づき、周囲がピリつく中でも自分はいつも通りに過ごし、ただ呼ばれるのを待つだけだった。

パドック周回では時々電光掲示板やパドックを見に来たお客さんを物見しながらのんびり歩く。

黒いプリンカーにみんなが注目し、データ重視で予想する競馬ファンは「プリンカー着用か……」と難しい顔をしている。

そうは言ってもやはり俺が一番強いと評価してくれているのだろう。俺の現在の単勝オッズは2・0倍で1番人気だ。

そこにシルクジャステイスとメジロブライトが続く。

「グレートエスケープくん」

そこにやってきた馬は随分と懐かしい顔だった。

「……イシノサンデー！ 懐かしいなあ」

「まったくだ。日本ダービーの時以来かな……それにしても君は……大きくなったな」

「そうか？ 前走よりは絞られてるはずだが」

「ふ……そういうことを言っているのではないが……それでも、僕の美しさによろやく並んだくらいかな」

「美しさは競ってないぞ。それに美しい馬の毛色といえば白毛だろ。いつか白毛でGIとか凱旋門賞とか勝つ馬出てきたら人気出るだろうな……」

「やれやれ。相変わらず君はセンスがないね。この美しい鹿毛こそが最も王道で洗練された美しさと速さを兼ね備えているというのに」

うん？ こいつ何言ってるんだ？

「お前栗毛だろ？」

「——え？」

「いや、だから。お前の毛色は栗毛だって。鹿毛はもう少し黒みがかかっているぞ」

「……な、なんだってー!？」

馬の視覚だから正直どこまで本当か怪しいが、少なくとも鹿毛とされている馬よりも明るい色をしている。

イシノサンデーは本気でショックを受けているようだった。

「まさか、本当に自分が鹿毛だと思っていたのか……？ 5年近くの間……」

「うっ……なんてことだ……なんてことだ……この僕が……鹿毛じゃなく栗毛……？」

「栗毛ダメなの？」

「ダメだ……鹿毛こそがもつとも美しい馬体なはずなのに……夢で見たんだ……サンデーサイレンスから生まれた鹿毛の馬が最高傑作になると……」

「なんか色々キマってるな……」

やっぱりサンデーサイレンス産駒はみんな頭がおかしい。

イシノサンデーは落ち込んだ様子でとほとほとパドックの周回に戻っていく。

アイツもダーフト競走のダービーグランプリを勝利して変則二冠馬とか言われていたらしいし、もう数少ない頑張っている同期なのだ。

気合い入れて頑張って欲しい。

「先輩」

また声をかけられた。

こちらを睨みつけているのはシルクジャスティス、そして隣にはメジロブライト。

一つ年下の有力馬たちだ。

「前走は俺の負けだ。完全に……やられたぜ。だがなあ……ここでは負けねえ。オツサン！ てめえに勝つ！」

「私もそのつもりです。貴方にはわからないでしょうが、ホースマンがダービーを目指すようにメジロは天皇賞・春こそが至高としています。貴方には負けられない……使命のためにも」

今回の天皇賞・春で最も強力なライバルになると思われるのが、この2頭だ。

前走で勝利したが今回はさらに仕上がっていることが予想され、決して油断できる相

手ではない。

ところで――

「お前たちの後ろにいるやつも、仲間か？」

「え……げえつ」

「うわ……」

ジャステイスもブライトも後ろにいる相手に対して後ずさった。

見開いて、鋭い眼光で俺を見つめており、年上だろうと嘯みつきそうな雰囲気するあ
る。

唸り声を上げんばかりの様子は確かに後退りもしたくなるというものだ。

「お前、名前は？」

「先輩。そいつに話しかけるのはやめたほうがいい。悪いことは言わない」

「とうかやめろ。ほんとにやめろ」

「なんで？ イジメはよくないぞ」

「――ステイゴールド」

2頭に止められる俺に対して、低いながらもはっきりとした声で答えた。

ステイゴールドは意外と小柄なやつで、俺に詰め寄ってきてあまり迫力は感じな
かったが、なにかやりそうな雰囲気を持った馬だった。

「あんたがグレートエスケープ?」

「そうだ。今日は負けないぞ」

挨拶代わりの宣戦布告。

それに対してステイゴールドは小さく笑った。

「よーやく俺様の出番が来たかあ〜! いやあ出番が来るの遅かったよなあ! 大体もう26話だぜ? 俺様主人公適性高いのに全然触れないとか馬鹿なの? 馬鹿だよなあ。俺様の出番をみんな待つてただろ? 俺様が出ただけでランキングぶち抜けるのになんで出せねえんだらうおかしいと思うよなあ!」

——俺は硬直した。

何かを言おうと口を開きかけてから、ちよつと怖くて再び黙った。ステイゴールドは俺を見ているが、俺に焦点が合っていない。

瞳は真っ黒に塗りつぶしたようで、ずっと見ていると引きずり込まれる魔物の窟のようだ。

「まあわかるぜ? あくまでここまでの俺は足りない条件馬つてやつだからな。出番ねえけど、こつから俺の出番めつちや増えるからみんな安心しろよ! 感動のラストを見逃すな! 主人公は今回で変わるぜ!」

俺は後ろのジャステイスとブライトへ振り返った。

「どうということなの、これは」

「やめとけつて言っただろ……こいつ頭おかしいんだ」

「彼はステイゴールド……実力はあるそうだがあまりある頭のおかしさで台無しにしてる馬だ」

「そうか……」

こいつがどんな奴か大体わかった。

そして、最早限定的な状況であれば直感を超えて啓示の域に至った頭脳がほぼ自動的に俺を叫ばせた。

「——なんでサンデーサイレンス産駒は頭がおかしいやつばかりなんだツツツツ!!!」

「ぴすぴーつすー！ これいいな。未来へ託す言葉にしよう。まずは俺様の最高傑作の実装すべきだろサイームス！ 青い勝負服はぶつつぶす！」

こいつの話を聞いていると正気を失いそうだ。

俺に対して話しているようで全く違うどこかの誰かに話しかけてくるステイゴールドは、パドック周回でもひたすら話し続けていて参ってしまいそうになる。

ひよつとしてこれは作戦なのだろうか。

ささやき戦術とかそれに近い……全然囁いてねえじゃねえかつ！

げつそりナーバスグレちゃんとなりつつあったが、ようやくパドック周回が終わり、

黒井先生が恵那ちゃんを伴ってやってきた。

カナタさんもほかのジョッキーと別れ、俺に向かってくる。

「状態は万全やな。カナタ、勝つで」

「一番強い競馬をします」

言葉はあまり要らなかった。

トップトレーナーとトップジョッキー、あれこれ言わずともわかっているのだろう。それに、これまで調教を通じて話し合いもしてきた。

今更慌てて準備する必要も無い。

「グレくん……」

見上げてくるのは恵那ちゃん。

お仕事で忙しいようだったが来てくれて嬉しい。

仕事頑張りすぎて体調崩してないだろうか。少し痩せたかな？ ……ちよつとウエスト増えたね。成長期とはいえないかな……なんというか、そ、育った、かもしれない。

「その顔に付けてるのは何……？ マスク？」

「それはプリンカーいうて馬の集中力を高めるものなんや」

スペシャルも絶賛のプリンカーだ。

どうだ、かっこいいでしょ。

「……ちよつとかっこ悪いですね」

「せやろか。いいと思うんですが」

「ガーン！」

恵那ちゃんにそう言われるのはショックが大きい。外して貰えないかなあと思うが、プリンカーを装着してレースに出る時は届出が必要だという。

「というかそんな理由で外してくれないよね……しよんぼり。」

「それはそうと……グレくん。頑張つてね。勝てなくてもいいなんて言わないから……無事に勝つてきて」

「言われずとも。」

俺は頭を恵那ちゃんの胸元に押し付けて、抱擁を受け止めた。

柔らかな感触が俺に勇気を与えてくれる。

古馬最高の栄誉である天皇賞・春の盾を恵那ちゃんに、黒井先生に、厩舎や牧場のみんなに捧げてみせる。

「行こうか」

カナタさんが背中に乗る。

「ぼんぼんと俺を撫でる彼は自然体で、流石トップジョッキーといったところだろうか。」

「去年秋の天皇賞勝つてゐるからここで勝てば連覇なんだ。結構自信あるから、まかせてくれよ」

俺に対しても淡々と語る姿はどこか落ち着く雰囲気を感じていた。

勝利を求めてはいるが飢えてギラギラとしてはいない。

絶対的な自信に裏打ちされた振る舞い——なるほど、素晴らしいジョッキーだ。

阪神大賞典の頃から走りやすいとは感じていたが、彼の本当に素晴らしいのはこの精神力なのかもしれない。

さあ、去年の忘れ物を取りに行こう。

ファンファーレがやんで、大歓声が轟くのは京都競馬場。

夢と欲望を載せた声援が俺と鞍上に雨あられの如く降り注いでいる。

〈上位人気馬 単勝オッズ（最終）〉

6番 グレートエスケープ 2. 1倍

4番 シルクジヤステイス 2. 8倍

5番 メジロブライト 3. 2倍

3番 ダイワオーシユウ 14. 6倍

10番 ローゼンカバリー 25. 3倍

電光掲示板には単勝オッズが表示され、耳をすませば「安い」だの「買い目」だの「会

社のお金全部5番」だの「給料はグレートエスケープ」だの、欲望塗れの声が聞こえる。春の王座決定戦に駒を進めたのは14頭。

マガジンに弾を込めるがごとく、次々とゲートへ装填されていく。

3200mというGIレースで最長の距離だろうと、1cmでも前でゴールを通り抜けた馬だけが掴める栄光。

僅かなミスや狂いが勝者をがらりと変えてしまう可能性がある。

故に競馬に絶対はない。

だが——敢えて言おう。

「勝つのは俺だ」

『大外14番のシグナスヒーローが収まります。ゲート体勢完了、第117回天皇賞・春……今、スタートしました。いつもの如く、メジロブライト少し出足がつかないか』

スタートは問題なし。このまま一気にハナを奪ってレースをコントロールする。

そのつもりが、手綱をぐつと引かれたため、スピードは出せなかった。

カナタさん？ ハナは切らないの？

俺が足を緩めると手綱も緩んだ。

集団から飛び出した2頭がレースの展開の鍵を握りそうだ。

『1番フアンドリリヴリア、11番のマイネルワイズマンが飛び出していきます。グ

レートエスケープは少し抑えて集団の先頭です。ファンドリリヴリアが前に行きました』

前の2頭は速いペースで飛び出すと、1回目の京都競馬場第3コーナーの坂へ差し掛かる。

あのペースで逃げていたらいずれバテるだろう。

他の馬たちもそれを理解しているからか追いかけて、むしろ3番手につけた俺を警戒しているようだった。

プリンカーで良く見えないから感覚でそんな気がするだけなんだが。

『3番手はグレートエスケープ、その後ろにシルクジャステイスがおります。一昨年のダービー馬をマークする位置、早めに捉えられるようにということでしょうか。鞍上梶田健二はグレートエスケープの手の内を知る騎手であります。その外にダイワオーシユウ、シグナスヒーローは外から前目の位置をとろうとしているか』

前の2頭は集団から少し離れて飛ばしているが、馬群は落ち着いたペースになりそう
だ。

1回目目の淀の坂を下りつつ、じつくりと脚を溜めることに専念する。

すぐ外にやってきたのはダイワオーシユウ。

去年の菊花賞2着馬、スタミナには自信があるのか。スタンド前直線を走りながら、

俺へプレッシャーをかけるかのようじわりじわりと姿を見せつけている。

プリンカーがあっても見える位置にペースが乱されそうになる。

(それだけ狙われている立場ってことか)

周りが望んでいるのは、俺のペースが上がり、最後の直線で力を発揮できなくなるかつ、後続の集団が末脚を活かせる展開になること。

だとしたら絶対に避けなくちゃいけないのは、俺が周りを気にして力んでしまうことだろう。

あくまで走ること集中し、ペース配分は鞍上の滝カナタ騎手に任せる。

そのためのプリンカー、そのためのトップジョッキードろう。

『第2コーナーです、もう一度先頭から見ていきましよう。ファンドリリヴリアが先頭飛ばして、5馬身ほど空いてマイネルワイズマン、さらに5馬身空いてグレートエスケープ、ダービー馬が、ダービー馬がここにいます。去年の借りを返したい、グレートエスケープが集団の先頭に立ってペースを作っています。その外にダイワオーシユウ、グレートエスケープの後ろにぴったりつけているのがシルクジャステイスであります。そしてさらにそれを見るようにしてメジロブライト。阪神大賞典と近い展開だ』

恐らくシルクジャステイスとメジロブライトはそんなに後ろに位置せず、好位をとるはずだ。

結果的に上位3頭がお互いを牽制しあう展開になる。

向こう正面を走る中で斜め後方に一瞬、青い帽子と白い勝負服が映った。

青い帽子は俺ともう1頭、ブライトしかいない。

俺に対して突つかかろうというのか、それともかかっているのか。このスローペースでは折り合いに苦労するだろう。

俺自身も、このペースで走って前の2頭を捉えて、さらに後方の連中を振り切る事ができるのかという焦燥がちりちりと心を揺らし始めていた。

(いいや、動かない……長距離戦は我慢比べ。鞍上を信じると決めたんだ。この連中で一番強いのは俺なんだから……どっしり構えて、自分のタイミングでスパートをかければ負けない)

鞍上の手は動いていない。このペースで問題ないということ。

後ろが焦れば焦れるほど、俺に有利に働く。

まだ大丈夫——俺は自分に言い聞かせながら、第3コーナーの坂を登る。

『シルクジャステイスの内からマウンテンストーン。メジロブライトの後ろにはユーゼイトツプラン、シグナスヒーロー、イシノサンデーも良い位置だ。そしてステイゴールド。メイショウヨシイエが続いてローゼンカバリーが後方から徐々に進出を開始している。第3コーナーへ差し掛かりペースが上がります。徐々に集団が仕掛け始めてい

きますがまだファンドリリヴリアが先頭です』

ここまで走り続けてからの坂越えは一気にスタミナを奪うにあきたらず、坂の下りを経ることで強制的に体力をさらに使わされる難所だ。

如何に乗り切るかが勝負の分かれ目となるが——関係ない。

俺はただ集中し、これまで通りのペースで走るだけ。

鞍上のゴースインはいつ出されるか、出されたら溜まり切ったこの末脚を全力で発揮することだけを意識する。

集中しろ。前の馬はどうでもいい。後ろの馬も、どうでもいい。

俺は俺の走りさえすれば、決して負けない。

視覚も聴覚も、触覚も、すべて閉ざす。

視界が白くぼやけ、歓声と馬蹄が遠くに聞こえる。

全神経を、全脚力を、研ぎ澄ませろ——

『第4コーナー手前でファンドリ先頭で直線に入ります！ グレートエスケープがマイネルワイズマンを躲す！ シルクジャステイスはインコースへ突っ込んだぞ、その外からブライトきた、ブライトだ！ ローゼンカバリーがそれを追っている！』

——今だ！

カナタさんの鞭が肩に入ると同時に、視界にターフの緑が広がり、世界に大歓声が取

り戻された。

『ファンドリ逃げる、ファンドリ逃げる！ ファンドリが逃げたが猛然とグレートエスケープが伸びてくる！ カナタの右鞭が飛んでグレートエスケープが伸びる！ 真ん中赤い帽子はジャステイス、外からメジロだ！ メジロだメジロだ！ ブライトが外から突っ込んでくる！ そしてなんと9番ステイゴールド！』

プリンカーのせいで何が迫ってきているのかさっぱりわからない。

ジャステイスか、ブライトか。

はたまた伏兵か。

馬蹄の音が後ろで響いていても、心は驚くほどに冷たく、そして脚は軽かった。

『ブライトとステイゴールドが迫る！ ジャステイスは少し苦しいか！ しかしグレートエスケープだ、グレートエスケープだ！ 外からローゼンカバリー！ メジロブライトが追う、ステイゴールドも突っ込んでくるがグレートエスケープに届きそうもない！』

息は切れていて酸欠で倒れそうだが、視界は明るく、光が一直線にゴールへ伸びている。

苦しい、苦しい。

けれど、澄み切った視界はどこまでも続いており、俺はどこまでも届きそうだった。

「みんな待たせたなッ！ 俺が……最強だあーっ！」

『メジロブライトは2番手、グレートエスケープ1着でゴールイン！ 一年遅れで春が来ましたグレートエスケープ！ 去年の忘れ物を取り返しました！ グレートエスケープです！』

舞い散る馬券は桜吹雪の祝福が如く。

馬券を外した者の絶叫と、的中させた者の歓喜、そして俺を応援してくれた人々の大歓声が俺とカナタさんに降り注いだ。

『2着にメジロブライト、3着にはなんとステイゴールド！ 流石は平成の盾男です。滝カナタ、これでなんと天皇賞・春はメジロマックイーン以来5勝目、秋も含めると7勝目です』

「エスケープ。俺、すごい騎手でしょ」

カナタさんが俺を撫でながらウイニングランをする。

大レースを勝利したというのに、どこかのんびりとした雰囲気のままにんだか気が抜けてしまいそうだ。

ひよっとして勝つのがもう当たり前で嬉しくないとか？

少し疑念を抱くが、客席に向かって手を振ったり、ガッツポーズする姿を見ると、その気負わない姿こそが、彼という人物の味なのだとわかった。

ウイニンググランを終えて検量室へ戻ると、黒井先生が満面の笑みで出迎えてくれた。

「でかした！ カナタもダービーへ良い弾みになったやろ」

「こんなに良い馬を2頭も乗せてもらえるなんて本当に嬉しいです。ありがとうございます
ます」

「次は宝塚記念に行くんやが……流石にエアグルーヴか？」

「すみません。今年いっぱいエアグルーヴを優先すると先生やオーナーと約束があり
まして……」

「そうか……健二は宝塚記念まではジャステイスに乗る言うてたし、ノリもローゼンカ
バリーがおるし……まあ、鞍上はおいおい決めるわ。とにかく、カナタおめでとう。ス
ペシャルのダービーも頼むで」

「ありがとうございます。しかし——グレートエスケープは強いですね。この馬に敵う
馬は……ほばいないでしょうね」

「ほば——か」

「ええ、『ほば』です」

カナタさんと黒井先生が話している。

耳を立てると今後についての話らしかった。

予定では俺は宝塚記念ということになっているが——相手は今回のジャステイスや

ブライト、3着に食い込んだステイゴールドの他にあのエアグルーヴもやってくるはずだ。

去年果たすことができなかった凱旋門賞へ向けて、最強の称号を掲げながら宝塚記念への思いを強くするのだった。

——そんな、俺のあずかり知らぬ場所で。

『ぶつちぎったぶつちぎった！ これは圧勝でしょう、楽勝、いや大楽勝です！ 2番手以下にもう何馬身差がついているのかわかりません！ 20m以上引き離してゴールイン！ もちろんレコードです！ とんでもない馬が現れてしまったかもしれませぬ！』

実況が、興奮冷めやらず叫ぶ。

観客はあまりの強さに馬券のことすら忘れて、誰もがその走りに魅了されていた。

のちに伝説のレースのひとつに数えられるこのレースは、勝者にとって栄光ではなく、宣言でしかなかった。

『これは今後が楽しみになりました。素質馬という評価はありましたが4歳にしてついに覚醒したか——サイレンススズカ！ 金鯱賞をレコード勝利です』

×××——神すら嫉妬する怪物が、目覚めた。

ウッドチップのコースで走ると小刻みで軽快な音が奏でられる。

自分の息遣いと地面を踏みしめる音だけを耳に入れながら、意識をレースへ飛び込ませた。

第3コーナー手前から徐々に速度を上げていく。

前に走るサイレンススズカと、後方から詰め寄るエアグルーヴどちらも抑え込めるように、ラストスパートの機会を伺った。

「はっ……はっ……はっ……はあぁっ！」

無理やり大きく息を吸い込んで肺の隅々まで酸素を行き渡らせる。

そして、脚に力を込めてスパートをかけた。

残り400m、宝塚記念の舞台と考えるとコーナーを曲がりながらの最高速度となる。

如何にスムーズに曲がれるかが問題だ。

直線に至ればやることはひとつ、真っ直ぐ走ることだけ。

止まりそうな脚を叱咤しながらゴール板を全力で駆け抜けた。

「タイムは……まあまあ、か」

息を再び入れながら、ゴール板の傍で見守っていた相棒から聞いたタイムは悪くは無いが破格というほどではないものだった。

実際は駆け引きやコース取り、バ場状態でタイムはいくらでも変わるからこれだけではないとも言えないが、物足りないというのが本音だった。

「状態は悪くないようだな」

スポーツドリンクで喉を潤す私に声をかけるウマ娘。次の宝塚記念で対戦予定のエアグルーヴだった。

彼女もトレーニング中のようで、汗で濡れた前髪を額に貼り付かせている。

「偵察か？ 光栄なことだ」

「ふん。いつだって貴様のことは見ている。悪い意味でな……なにかやらかすからな」

「レースやトレーニングでは非常に紳士的で通っている。もちろん、譲るようなマネはしないがね」

「当然だ。そのような真似をして貴様に勝っても意味が無い」

トレーニングの合間のトラッシュトークがてら挑発し合う。

お互いにその程度で播らくことはないとわかっているからこそその軽口の応酬。そんなつもりで話していると、蚊帳の外だった相棒が尋ねてきた。

いつから知り合いなのか、と。

「お互い入学した時には名前は知っていたが……デビュー前の模擬レースを重ねるうちに、かな」

「当時の貴様は今と考えると協調性がまるでないやつだったな」

「やめろ。君とて、常に剣呑な雰囲気をもとわせていただろう、それは同じではないか」
「どんな風に仲良くなったのか知りたい、と相棒が言う。次のメニユーまで少し時間がある。」

その暇つぶしがてら、私は語り出した。

「あれはエアグルーヴの情熱的な告白を受けた時のことだったかな」

「貴様！ 適当なことを言うな！」

○○○

デビュー前のウマ娘は教官からのメニユーに従って基礎トレーニングを行う。

とはいえ、多数の相手に一人の教官がトレーニングをつけるのは現実的ではなく、画一的でとりあえずやっておいて損はないがそれをしたところで劇的に伸びる訳ではない、そんな質のトレーニングでしかなかった。

私はそんなトレーニングはほどほどに、自分のトレーニングを中心にやっていた。

「グレートエスケープさん！ どうしてトレーニングメニユーをこなさないんですか！

選抜レースで見てもらえなければ、困るのは貴方なんですよ」

教官がそのことを咎めてくる。

しかし、そのトレーニングを行えば強くなれるかと言うとそれはノーだ。

「む、むりいー!」

「むくり〜!」

先頭を奪った勢いそのままレースを進め、直線では一気に後続を引き離す。

同学年のウマ娘相手では最早敵う相手はほとんどいなかった。

1着でゴールしても勝利の喜びはなく、ただ自分はいったいなにをしているのかという焦燥に駆られるばかりだった。

こんな同世代を相手に、なんの感動もなく勝つだけで頂点に至ることはできるのか。

模擬レースが終われば、そんな思いを燻らせながら部屋でキャロチを食べ、また次の日からトレーニングに励む。

そして迎えた模擬レース。

今日はいつても以上にギャラリーの数が多い。

あくまで同期しか参加していないから有名なウマ娘はいないはずだというのに。

「今日はデビュー前の子達の模擬レースなのに人が多いですね」

「お前知らないのか? 今日この模擬レースはエアグルーヴとグレートエスケープが同じレースに出走するんだよ。恐らく、この二人がこの世代で一番力があるだろう」

……なるほど。

ほかに出走するウマ娘のゼッケンを盗み見ると、エアグルーヴはすぐに見つけられ

た。

期待のルーキーというところだろうか、それも領けるオーラを纏っている。だからどうした。

最強を目指す私には同期になんて負けていけない。

模擬レースが始まると聞こえる歓声はいつも以上に大きかった。

芝2000mという今回の条件は今の私にはマッチしている。

ほかのウマ娘を制してハナに立つと自分のペースでレースを進めた。

私は私のタイミングでスパートをかける。

直線が見えた瞬間、脚に力を込めた。

しかし――

(なんだと……!?)

「はああああっ!」

エアグルーヴが既に並んでいた。

恐らく先行していたのだろう、しかしこのスピードと切れ味はまるで予想していな

かった。

けど、負けるか――!

『グレートエスケープとエアグルーヴの壮絶なマッチレースになった!』 2人が後続を

ぐんぐん引き離す！ 壮絶な叩き合いだ！ エアグルーヴか、グレートエスケープか、エアグルーヴか、グレートエスケープか!?」

ここまで激しく競り合ったのは、トレセン学園に入学してから初めてだ。

逃げる作戦を身につけてから相手に追いつかせる間もなく逃げ切っていたからこそ、味わうことのなかった勝負。

「ああ、エアグルーヴに追いつかれた……!」

「グレートエスケープは入学以来逃げ戦法がほとんどでこうした競り合いはほとんどなかった。競り合いになれば最後の力を発揮するのは相手を抜かせないという精神、いわゆる勝負根性が肝になる」

「どうした急に」

「競り合いを経験していないグレートエスケープにとって、エアグルーヴの壮絶な末脚に切れ味で負けてしまう可能性が高いんだが頑張れえー!」

「どつちも負けるなあーッ!」

勝負根性が大事?

確かにトレセン学園に入学してからは経験したことのない展開になっている。

だが——根性の勝負なら、負けられないんだ!

「うおおおおおっ!」

「はあああああつー！」

私は勝つ。

いいレースは勝ったレースだけがいいレースだ。

何故勝ちに拘るのか聞かれたことがある。

そんなもの決まっている……勝つことが『楽しい』からだ！

『グレートエスケープ少し苦しいか！ エアグルーヴか、エアグルーヴか！ いやグレートエスケープが差し返す！ グレートエスケープが差し返す！ 大接戦だ！ 大接戦でゴール！』

走りきつてから膝に手を着いてぜえ、ぜえと荒く酸素を求めて肺を稼働させる。

呼吸も忘れるほどのデッドヒートに観客たちは口々に賞賛を口にした。

「かっ……はっ……ああ……」

息を大きく吸い込んでから、再び長く息を吐く。

余裕な姿を見せつけなくては。

欠片も疲れていないフリをして、まだまだ走れることをアピールする。

今のレース、結果はどうだった……？

『写真判定の末、勝利したのはグレートエスケープ！ 今回の模擬レースでは見事に勝利を飾りました！』

アナウンスに対し、拳を握り込む。

しかし勝てると思っていたが、まさかここまで接戦になるとは。

「グレートエスケープ。いい走りだった」

エアグルーヴが近づいてくる。

言葉では賞賛しているが、視線は欠片も敵愾心を隠せていない。

かといつてこちらを憎んだり、妬むのではなく、己の至らなさに怒りすら抱えている目だった。

「……今回勝てたのは運が大きい。だが……次も負けない」

エアグルーヴは母がオークスを勝利したウマ娘であり、それもあって入学当初より将来を有望視されていた。

いわゆる秀才というやつなら勝負根性に欠けるかと思えば、ギラついた勝利への執着を見て、私は一目でエアグルーヴを気に入った。

エアグルーヴは鋭い視線のまま言い返した。

「それはこちらのセリフだ。……同学年のウマ娘は多くいるが、GIをいくつも勝利できるウマ娘は僅かだ」

「……そうかね」

「私はそう思っている。それができるのは……私か、貴様のどちらかだろう」

「熱烈な宣戦布告だな。だが何度だって相手をすると。そして、何度だって勝利してみせる」

「望むところだ……!」

——それからはエアグルーヴとなにかと関わりが増えた。

方や生徒会でも辣腕を振るう副会長であり、反対に私は自分のためなら規則を平気で破る不良ウマ娘。

まさに正反対のタイプで、学園生活ではエアグルーヴが私を注意して、私はそれから逃れるために知恵を働かせる関係になった。

しかし、コースに出れば面白いほどに私たちはよく似ていた。

エアグルーヴは己の掲げる理想に邁進し、私は最強という純粋な欲望に身を焦がした。

目的は違えど、ストイックに自分の肉体を追い詰め、いじめ抜く姿は自然と親近感を湧かせ、それでいて負けたくないという気持ちを奮い起こさせた。

同期のウマ娘には私とエアグルーヴを実力はある者同士でも正反対だと語る娘もいる。

だが、コースで並べば、百の言葉を重ねるよりも雄弁に走り語り、どこまでも分かりあえた。

トレーニングに励み、時々二人でレースを行う。

専属のトレーナーがつくまで、そうやって切磋琢磨し、強くなってきたのだった。

〇〇〇

「——と、いうわけだ。その時以来、エアグルーヴとは走っていない。だから……宝塚記念で決着をつけるつもりでいる」

「ほう？ 模擬レースでは私が勝ち越しているが……それは忘れたらいいな」

「忘れてはいないさ。だが、最終的に本番で勝てばいいのだ。いくつ勝ったかなんてどうでもいい」

お互いに軽口を叩き合う。

既に口元には笑みが浮かんでいて、宝塚記念で雌雄を決する喜びに気が逸っていた。

「エアグルーヴ。決着は宝塚記念だ」

「当然だ。しかし私やお前だけが走る訳では無い。精々足元をすくわれんようにな」

「それほど自分を過信してはいないさ。だが、負けた時の想像は欠片もしていない」
脳裏に浮かんだのはサイレンススズカという稀代の快速ウマ娘の姿だった。

強敵の出現は勝利の邪魔になるが……なぜだろう。

笑みが浮かんでしまうのは。

背を預けていた厩から身を起こして跳ねるようにコースへ向かった。

「相棒！・休憩が長くなってしまったな。私はまだまだ走れる……もつと追い込んでいくとしようか」

エアグルーヴに背を向ける。足音がして、ちょうどエアグルーヴも踵を返したところらしい。

次に会うのは阪神競馬場——宝塚記念の舞台だ。

エアグルーヴ、そしてサイレンススズカ。

強敵に勝つためにも、私はトレーニングに打ち込むのだった。

第27話 指先が触れるには遠く

天皇賞・春を終えた約1ヶ月後のこと。

『後ろからスペシャルウィーク！ 間を割ってやってきた！ スペシャルウィークとセイウンスカイ、あつという間に——並ばない！ 並ばない！ あつという間にかわした！ あつという間にかわした！ スペシャルウィーク！ スペシャルウィーク！ 夢を掴んだ滝カナタ！ 夢をつかみましたスペシャルウィーク、滝カナタ！』

1番人気で迎えた日本ダービーで、スペシャルウィークは2着に5馬身差をつける見事な勝利を挙げた。

鞍上の滝カナタ騎手はこれが嬉しいダービー初制覇。トップジョッキーにして既にレジェンドの領域に片脚を突っ込んでいる彼はダービーは勝てないと言われてきたが、ついに勝ち星を挙げた。

黒井厩舎はこれでダービーは俺以来2勝目。2つ目のダービーといえどやはり格別なものらしく、しばらく黒井厩舎はお祭り騒ぎだった。

「エスケープ先輩！ 俺やりましたよ！ ダービー勝ちました！ これで世代ナンバーワンですね！」

スペシャルウィークもやはり嬉しいのだろう、俺に対して喜びを見せつけてきた。

最初こそは微笑ましくよかったなと受け止めていたのだが……少し様子がヘンだった。

「俺つてば最強ですね。もう何も怖いものはないというか……このまま世界を制する器というか……エスケープ先輩が今年の凱旋門賞を制して、俺は来年の凱旋門賞を制しますよ……」

「同世代にはライバルと思える馬はいない。エスケープ先輩にエアグルーヴさんくらいじゃないですかね」

「何かを持つてると言われましたけど、ダービーで何を持つているかわかりました。それは仲間」

「世界のトツプジョッキ乗せてえ。社来で種牡馬入りつてヤバイですか？ うわぁ頑張ろうビッグになろう」

ダービーを制覇したことで調子に乗っているようだった。

俺としてはよくないと思うが他人が言つてどうなるものでもないし、そもそも俺にだつて宝塚記念がある。

スペシャルウィークばかりを気にしてられないのも事実だった。

「もう……」飯沢山食べても勝てるというか……夏の間はたくさん飯食つて強くなりま

す……俺、サラブレッドの星になる」

バルバルと飼葉を食べるスペシャルウィークの相手をするのに少し疲れたのもあって、俺は馬房を抜け出した。

「おつす白村さんお疲れー」

「お疲れー……ん？ あれ？ 今グレ助が通らなかつたか？」

「白村さん何言ってるんですか。いくら新人の俺を騙そうつても、そんなことはいくらなんでも信じませんよ！」

「そうか……そうだよな……！ グレートエスケープが南京錠2個ついた扉を鍵も無しに開けられるわけないよな！」

「鍵があつても不可能ですよ」

厩舎から出て事務所周りをうろちよろする。

そこでは厩舎スタッフが色々と仕事をしていた。それを眺めながら、少しのんびりと過ごすことに決めた。

初夏の暑さは馬の体には中々堪えるものだが、少しくらいは陽の光を浴びたいのが人情……馬情だ。

スペシャルウィークのあれもそのうち治るだろう。

あそこまで露骨ではなかつたが、俺もダービーの後はあるな風に腑抜けていたときが

あった。

それを叩き直すのはやはり、ライバルというやつではないだろうか。

「いい天気だなあ……おや？」

厩舎の入口を掃き掃除している人物にやたら見覚えがあった。

小柄ながら引き締まった体型、それにやんちゃそうな童顔とも取れる端正な顔立ち。

久々にレース以外で見ると、梶田健二騎手その人ではないか。

「おおつ、ケンちゃん！ ケンちゃんじゃないか！ なんて掃き掃除を!?!」

「ん……？ あ、グレ坊！ お前また抜け出したのか……よしよし……久しぶりだな」

ケンちゃんに駆け寄ると額を撫でられる。

ここまで接近したのは本当に久々だ……再会に喜んでくるとケンちゃんのまわりを回っていると、厩務員の西京さんがやってきた。

「梶田騎手……久しぶり」

「えーと、お久しぶりっす……」

「なぜ掃き掃除を？」

「先生に会いに来て……そしたら『ちよつと掃除をしてこい』と」

「先生らしい。貴方ほどの騎手に掃除させるテキはいないでしょう。ではよろしく願います」

「えっ、あつ、はい」

西京さんは表情をあまり変えないまま、その場を後にした。

別にケンちゃんに掃除しなくていいよとか言うわけじゃないんだ……。

ケンちゃんは気分を悪くしたふうな様子もなく、どこか気を抜いてすらいた。

「こんな風に接してもらえただけありがたいんだ……グレ坊、俺もう一回お前に乗せてもらえるかなあ……」

えっ、乗ってくれるの!?

是非是非乗って欲しい。

確かにカナタさんは上手いけどやっぱり細かいところで息が合うのはデビューから乗ってくれていたケンちゃんだ。

カナタさんだとこつちが少し気後れしてしまう。

ノリさんは俺すら予想しないことをやらせるから心臓に悪い。次は最後方から競馬させられそうだ。

次の宝塚記念ではエアグルーヴが出てくる。

万全を期すならケンちゃん以外有り得ないだろう。

「おおっ、なんだめっちゃ近づいてくるじゃん……よしよし。掃除したところまた掃き直さなきゃいけなくなっただけ……」

しかしシルクジャステイスに乗るはずだったのになんで黒井厩舎に来たのだろうか。

その疑問に答えるかのように黒井先生がやってきた。

黒井先生は大股で歩くとケンちゃんを無視して俺を撫でる。

「よしよし。どうしたグレ坊、こんなところで。次の宝塚記念は誰に乗ってもらおうか。洋介に乗ってもらうのもいいしな、岡谷騎手も空いてるし……いいジョッキーがいるかな」

「あの……先生……？」

「少なくとも調子悪い時期は乗らなくて調子が良くなったら乗せてもらおうとする騎手は乗せないから安心しろ、グレ坊」

これは、もしや。

「く、黒井先生！ おはようございます！」

「ふーん。なんや。なんの用や。グランプリホースの主戦騎手たる梶田健二くんが、寂しい厩舎になぜいらっしやるんかな。掃除は終わったんか？ 随分汚れとるで」

「す、すみません」

黒井先生ひよつとして、拗ねてる？

ケンちゃんはしどろもどろになりながら声をかけるもわざとらしく背を向けては俺を撫でる。

かといってこの場を離れる素振りにはまるで見せなかった。うーん、わざとらしい。

「健二、なにかゆうてみい」

「あの、その、えつと……」

黒井先生は怖い人だから、何か言えと言われたら何も言えなくなってしまうだろう。

ケンちゃんはホウキとチリトリを地面に置くと深深と、それはもう見事なまでに直角なお辞儀をしてみせた。

「黒井先生！ 不義理を働いてしまい申し訳ありませんでした！ 恥を忍んでお願いします！ 次の宝塚記念でグレートエスケープに俺を乗せてください！」

ケンちゃん……！

黒井先生は小さく笑いながら、初めて彼に向き直った。

それは、子の過ちを諭す父親のように厳しくも、暖かな声だった。

「健二」

「ッ、はい！」

「腹を斬れ」

「は……はい？」

「聞こえんかったか？ 何度も言わすな。腹を斬れ」

え、ええー！？

改めて先生の表情を覗き込むが、確かに微笑んでいる。

だが目が全く笑っていないどころか青筋すら額に浮かんでいる！

いやいやいやダメダメダメ！

俺は慌ててケンちゃんを背中に庇った。

「……冗談やグレ坊」

「いや……冗談に聞こえなかったツスけど」

「許されるなら腹は斬らせてたわ」

「ひえ」

とりあえず馬房の中へ戻ることになった。

その間もケンちゃんを守るように、黒井先生との間に割って入っていたのは言うまでもない。

——結論から言うと、シルクジャステイスは乗り替わりになったため、宝塚記念の騎乗馬がいなくなったから厩舎に騎乗依頼を求めてきたという。

「貴様……乗る馬がないからと頼んで乗せてもらえると……グレートエスケープをその程度の馬と見てるんやな……」

「ち、違います！ ごめんなさい違います！ そうとしか見えませんけど！」

先生！ 殿中でごさるぞ！

問答無用とばかりに刀を抜きそうな勢いだが、既に馬房に入れられてしまった以上助けることは出来ない。

しかし黒井先生は凄んだものの鉄拳制裁などは行わなかった。

この前無理な騎乗をした若手騎手に闘魂注入していたので、ないともいえないのが怖いところだ。

「俺はシルクジャステイスが先約だったから優先しました。本来は依頼を受けて初めて乗るようにしていますが、グレートエスケープだけは違うんです。俺から頭を下げてでも乗せてもらいたい馬なんです」

「それだけの馬なのは確かや。せやけどな、少なくとも世間では調子が戻ったから乗せてもらえるよう頼んだとか、そういう穿った目で見てくるやつはたくさんおる。ファンだけではなく、テキヤやオーナーにもそう思うモンは出てくるやろなあ。その意味はわかっとなるな？」

「——はい。乗り替わりは騎手の常ではありますが、それに対する批判も切り離せないものだど覚悟しています。それでお手馬に乗れなくなっても、俺は後悔はしません」

「まあお前に対しては批判じゃなくて正論になるがな」

「うぐ」

ああつケンちゃんに言葉のナイフが！ 相当根に持つてるんですね、先生。

「やるべきことはただ一つや。勝て。これからもグレートエスケープに……いや、ウチの馬に乗りたくないなら、次の宝塚記念は勝て。それしか認めん」

「そ、それって……つまり……!」

「本来、馬は騎手を嫌うものや。ムチ入れられるんやから、当然やな。だというのに、グレ坊はお前に懐いてる。乗せんわけにはいかんやろ……橘オーナーに確認はとるが、橘オーナーは騎手に注文つける人ではないしな」

や、やったー!

久々にケンちゃんが手綱をとることが純粹に嬉しかった。

元々宝塚記念は勝利した上で凱旋門賞へ行くプランが兼ねてより掲げられていた。

世界最高峰の舞台へ至るのなら、一番俺を知っている騎手が最も勝率が高いはずだ。

次の宝塚記念は滝カナタ騎手とエアグルーヴというこれまでを考えると最も難しい敵が相手になる。

それでもケンちゃんと一緒なら必ず越えられると信じて、宝塚記念を迎えた――

○○○

グレートエスケープの怪我はショックだったが、休養すれば治るものと聞いて、レー

スから数日後、自宅で俺は安心した。

これまで乗ってきた競走馬で最も特別な存在がどうなるか不安で眠れなかった俺は、久々に安眠ができたほどに。

サラブレッドに骨折は付き物だ。無論、最悪は予後不良で安楽死となるが、グレートエスケープはそれと比較したらだいぶ軽いものだった。

天皇賞・春は決して勝てないレースではなかった。

怪我させてしまったことより、勝たせてやれなかったことの方が申し訳なかったが、そのときは重大なことに捉えていなかった。

だから、京都大賞典で当初の予定よりはやく復帰するのは正直想像できた。

とはいえシルクジャステイスの騎乗依頼が先に来ていた以上はそちらを優先した。

古馬と3歳馬というある程度路線が別れるのもあったし、京都大賞典はGII、グレートエスケープにはあくまで復帰後初戦の調整レースの側面の方が強いと思っただからだ。

菊花賞を控えたシルクジャステイスにはそれ以上に大切な時期でもあった。

菊花賞を目指すためにも、俺はグレートエスケープの騎乗依頼を断つてもなお、彼に對する心配はなかった。

そして京都大賞典を迎えて、俺は愕然とした。

皐月賞の大敗は、慣れないレースをしたせいで実力の半分も出せていなかった。しかし今回はかつての力の片鱗すら感じさせない走りだった。

道中は問題ないどころか、シルクジャステイスの取得賞金を加算できるかどうかすら危ぶんだ。

怪我を乗り越えてまた強くなったのだと喜びもあった。

だから直線に入ってから、ズルズル下がっていく姿を信じられなかった。

グレートエスケープは苦しんでいる。

あんなに走ることに一生懸命な馬が必死になりながら、後方に置いていかれる姿は何度も夢に出てきた。

そして迎えた天皇賞・秋。

道中の手応えで、きつとあの敗戦はなんでもなかったのだと自分を信じ込ませた。

それほどに良かったのだ。

しかし直線に入ると、ぱたりと勢いが止まってしまう。

大敗した後、俺は怖くなってしまった。

グレートエスケープがこのまま負け続けてしまったら？ そのとき俺は、彼を勝利に

引き上げることができるのか？

あの馬は間違いなく名馬として数えられるに足る、素晴らしい馬だ。

その馬を俺は、再び走れるようにできるのか？

ジャパンカップと有馬記念でシルクジャステイスに乗ることをオーナーサイドに伝えた日が、答えだったのかもしれない。

ジャパンカップでは俺よりも少し上手くて、俺より少しリーディングが上の、俺よりも少し年上の騎手がグレートエスケープに乗った。

そして、あっさり勝ってしまった。

思いもよらない戦法で、まんまとジャパンカップを勝利すると、次の有馬記念では良かったときのグレートエスケープの走りが垣間見えた。

少しだけ、嫉妬した。

しかし有馬記念でシルクジャステイスを勝たせたことで、その負の感情は消え去っていった。

年を明けて、グレートエスケープの騎乗依頼は俺に来るものだと思っていた。

実際にはトップジョッキーの滝力ナタさんに依頼が行った。

滝さんはすごい騎手だ。人間としても、騎手としても尊敬しているからこそ、彼が騎乗依頼を受けたのも仕方ないと思った。

迎えた阪神大賞典では、シルクジャステイスと共に挑んだが、結果は完敗だった。

良かった時のグレートエスケープではない。これまでで一番良い、見たことがない出

来のグレートエスケープが圧勝してみせた。

天皇賞・春でも、それは変わらず、圧勝。

去年よりも一段と良くなったグレートエスケープを見て、俺は嬉しかった。それと同じ時に、滝力ナタさんとの差がそこにあるのだと、突きつけられているようだった。

競馬サークルも新たなスターの誕生に喜び、グレートエスケープへの注目が深まった。

それを嬉しく思いながら、新聞や雑誌を見ていた。

最初は「グレ坊のことわかってない」「真面目と言うよりは切り替えがはつきりしてるんだ」「あの馬の魅力はスタミナよりも苦しくなっても走り続ける勝負根性だろ」と笑いながら読んでいた。

雑誌や新聞にはグレートエスケープが諦めなかった姿が綴られていて、それを読むうちに嘲笑は嗚咽に変わっていた。

どうして俺はグレートエスケープに乗らなかったんだ。初めてダービーを勝ち、こいつは特別な馬だと自分で思ったのに。

どうして……どうして、一番苦しい時に一緒にやらなかったんだ。一番わかってやれた騎手は俺のはずなのに……。

いい歳こいて、俺は家で一人、泣き続けた。

俺はグレートエスケープが大好きなはずだったのに。

リーディング上位が故にGⅠでは選べるほど有力馬がいて、だからこそグレートエスケープから逃げてしまった。

そんな俺だけど、もう一度、あいつに乗って、勝ちたい。

一晩中、涙が枯れるまで泣いたら、翌朝には黒井先生へ連絡した。

会ってください。ただそれだけの言葉で。

黒井先生は何も言わず、「そうか」とだけ言って電話を切った。

普通は乗せてくれと言って乗せてもらえるわけが無い。

それでも、例えもう騎手生活を続けられないとしても、グレートエスケープに乗りたかった。

俺は黒井先生に頭を下げた結果、腹を斬ることと厩舎の掃き掃除を免除される代わりに、厩舎スタッフみんなに飯を奢ることになり、そして宝塚記念でグレートエスケープと一緒に戦う権利も手に入れた。

ごめん、グレートエスケープ。

リーディング上位にいるからと胡座をかいていた梶田健二とかいうヘボジョッキーだけど、また乗らせてくれ。

お前が天皇賞で現役最強を証明してみせたように、今度は俺が、お前に乗るに足る

ジョッキーだと証明してみせるから——

○○○

宝塚記念のパドック——俺はエアグルーヴを見つけるとまず駆け寄った。

「久しぶりだな、エアグルーヴ」

「貴様か……随分と調子が良いらしいが、所詮は雑魚相手に稼いだ勝ち星だろう」

「そういう君は前走G I Iで取りこぼしたらしいな？ 愛嬌あつていいじゃないか」

ふふふ、ははは、と目ん玉ギラギラ眼光を飛ばしあいながら軽くジャブを放つ。

今日の1番人気と2番人気は俺とエアグルーヴで分け合っているはずだ。ファンたちも牡馬と牝馬のトップが激突するのを楽しみにしているはず——おや？

電光掲示板には俺の単勝オッズが2.2倍で1番人気となっているが、2番人気にはエアグルーヴ、ではなくサイレンススズカという馬名が表示されていた。

単勝オッズ3.0倍と俺とそう変わらないオッズだ。エアグルーヴは4.3倍で3番人気、4番人気はメジロブライトで5.2倍となっていた。

「サイレンススズカ……」

そういうえば、去年の天皇賞・秋で見事な大逃げをかましていた馬が彼だと思い出した。

戦績こそわからないが、去年の走りはスピードにまかせて走っている典型的な逃げ馬という感じで、強さは感じなかった。

そんなサイレンススズカが2番人気。

今回のメンバーは豪華の一言。

俺とエアグルーヴは当然、去年の有馬記念を制したシルクジャステイスにそのライバルたるメジロブライト、牝馬2冠のメジロドーベル、天皇賞・春では3着のステイゴールドなどなど、好メンバーが揃っている。

その中で2番人気として評価されるということはそれだけの実績を積み重ねてきたということ。

「エアグルーヴ。サイレンススズカを知っているか？」

「……先生から聞いているのは重賞を連勝して宝塚記念に挑んできたということくらいか」

普段なら自分で競馬新聞を読むが、今回は調教に必死になるあまり、走ったことがない相手の情報は全然集めていなかった。

だが重賞を連勝しただけで宝塚記念でここまで人気になるものだろうか。

彼は緑のメンコをしていて、馬体を見ると迫力に欠けた小柄こそ目立つものの、確かに筋肉の付き方や歩き方には品があつてスマートだ。

「……まぐれで勝ってきた馬ではないな」

「怖気付いたのか？」

「事実を言ったまでだ。まぐれじゃないのは俺も同じ。勝つき。サイレンススズカにも、エアグルーヴにも」

サイレンススズカは逃げ馬らしいが、同じ逃げ馬の筋肉質で大柄な俺と比べたら対照的で、パドックを見るファンたちも同じような感想を口に出している。

「グレートエスケープかサイレンススズカか、どっちかが勝つと思うぜ。逃げ馬の頂上決戦だ」

「王者グレートエスケープに挑むサイレンススズカって感じだな……結局何連勝してたんだっけ？」

「4連勝……重賞は中山記念、小倉大賞典、金鯱賞で3連勝中だ。前走は2着に大差をつけて勝ったし、これはわからないぞ」

重賞3連勝か……俺は2連勝してるし、GI含んでるし、負けてないけど？

といったふうに張り合いたい気持ちもあるが俺はあくまで年長にして王者。

それに相応しい振る舞いをしなくては。

俺はサイレンススズカに偵察がてら声をかけた。

「やあ、サイレンススズカ。俺の名前はグレートエスケープ。今日はいいレースにしよ

うな」

「……」

「……」

「……」

立ち止まっているから無視している訳では無いようだが、反応もない。

しばらく待っていると彼は口をようやく開いた。

「それだけ……ですか」

「えっ？ ああ、うん……」

「他の馬に興味ないので。それでは」

ぼかんと口を開ける。

俺は隣のエアグルーヴに向き直った。

「ひよっとして俺無視された!？」

「知るか、たわけ!」

しかしあの目は——何も映していなかった。

レースをするのではなく、走るのをただ待っているだけで戦う者の目ではない。

……いや、本来サラブレッドということを考えたらそれは当たり前前のはずというか、

おかしいことではないのだが。

サイレンススズカは逃げで勝利してきたという。自分のレースさえすれば負けない、そして周囲の馬は関係ないのだろうか。

「ま、まあ、俺は今や現役最強の王者だし？ この程度のことでは焦れ込む（キレる）俺じゃあないですから。焦れ込んで（キレて）ないっすよ。僕をキレさせたら大したもんですよ」

「誰に言っているんだお前は……」

周回が終わり、騎手や馬主、調教師がそれぞれの馬の元へ向かう。

パドックにいるファンたちも上半期を締めくくる宝塚記念の発走が近づくと馬券を買いに行く者、パドックでそのまま騎手や調教師を見る者に別れ始める。

夏といって差し支えない気候で、今まさに灼熱のグランプリレースが始まろうとしていた。

ケンちゃんと黒井先生がやってくる。厩務員の西京さんの肩を借りてケンちゃんが背中に乗ると、思わず笑みが零れた。

やっぱりケンちゃんじゃなくつちやあな。

「グレ坊。勝つぞ」

「健二、男になつてこい」

「ウイッス！ ……勝てば凱旋門賞ですか？」

「アホンダラ。お前はゴールまで必死に乗ってればええんや」

競走馬たちに騎手が跨るとレース場の雰囲気がいよいよ盛り上がり始めた。

ファンたちは口々に騎手に声援や野次を投げかけている。

「グレくん」

「恵那ちゃん……また来てくれたんだね」

忙しいだろうに天皇賞に引き続き、来てくれてとても嬉しい。

なんでも、色々勉強中とか準備中だとか。

「今……私もグレくんのために頑張ってるんだ。お姉ちゃ……姉さんのようにはできないかもしれないけど、私は私らしく頑張るから……グレくんも、勝って!」

「もちろんだぜ……」

俺は彼女に答えるように頭を一度だけ上下させた。

「グレートエスケープ……頷いてるように見えるなあ」

「賢いことで有名だし、本当にわかってるのかも」

「それにしても馬主の人……可憐だ……」

一部の観客がこちらに気づいて、なにか反応しようか考えたが、それは俺の仕事ではない。

彼らを一番楽しませるのは、俺が宝塚記念で勝つこと。

それだけだ。

返し馬にてスタート地点まで走る中で大歓声が俺を出迎えた。

輪乗りしている中ではサイレンススズカもいたが、俺が近づいても特に気にした素振りは見せなかった。

「周りなんて眼中にないって感じだけど……随分自信があるらしいな」

「……」

「……」

「……」

「……」

こいつの名前はこの大人しきから来ているのか？

サイレンススズカはしばらく沈黙を保ってからようやくやく言葉を返した。

「別に……誰が相手でも、やることは変わらないですから」

「確かに速いらしいが、G I レースはそんなに甘くないぞ。俺も負けるつもりはない」

「……」

「……」

「……………」

「いい加減何か言えよ」

サイレンススズカは俺に一瞥をくれることなくあっさりと、それでいて鮮やかな切り返しを見せた。

「貴方には無理だと思う」

ちょうど、輪乗りが終わりゲート入りが始まる。

他の馬が先にゲートの前へ行く中、俺は立ち尽くしていた。

サンデーサイレンス産駒に頭がおかしいやつはたくさんいたが……初めてだ。この俺をここまでコケにしたおバカさんは。

ゲート入りは既に半分ほどが終わり、俺が大外の8枠14番ゲートへ誘導される。が、ゲートには入らない。

『おっと、大外14番グレートエスケープ、ちよつとゲート入りを嫌がっています。ちよつと珍しい光景ですね』

ふー。ふーっ……。よし、精神統一完了！

怒ってない。俺は怒ってない。王者の精神で肅々と、それでいて危なげなく勝利するだけのこと。

『収まりました14番グレートエスケープ……メジロブライトは先程ゲート内で立ち上がったため外枠発走となっています。貴方の夢、私の夢が走ります。大歓声を背に受けて宝塚記念——今スタートです』

ゲートが開くと同時にいつも通りハナを目指して加速する。

その一つ内側からサイレンススズカがそれ以上の加速で前へ走っていく。

「速いな……」

ケンちゃんが手綱を抑え、俺はそれに従いサイレンススズカを見ながら内側へ進路をとる。

「お、男の馬……!」

「宝塚記念だもの、そりゃあそうだろう」

インコースから先行したメジロドーベルに一言飛ばしながら2番手につける。

正面スタンド前を通り、第2コーナーへ入る頃にはサイレンススズカは2馬身ほど前にいた。

俺はその次につけて、集団グループの先頭でレースを進める。

逃げるサイレンススズカは結構なペースで飛ばしており、馬群も徐々に縦長になっていく。

最初の1000m地点を通過したのは当然サイレンススズカ、そのころには集団に対して5馬身以上離して逃げていた。

「58……俺たちは59秒台くらいか」

ケンちゃんが呟く。

わき目もふらず駆けつつも、視線の先には快調に飛ばしているサイレンススズカが映っている。

1000mを58秒台——マイル、いや1800mのレースのペースだろうか。

宝塚記念でそのペースは明らかに速い。

あいつは直線前にバテるだろう。

問題は後方にいるであろうエアグルーヴ、メジロブライト、シルクジャスティス、メジロドーベルといった有力馬たち。

3コーナーへ差し掛かると同時に、ペースを上げる。

後続馬たちも俺に合わせてペースをあげて、馬群が一塊になってサイレンススズカへと詰め寄った。

徐々にサイレンススズカとの差が縮まる。

当然だ。1800mのレースならともかく、そのペースで2200mを逃げ切れるわけがない。

俺が第4コーナーでサイレンススズカの後ろにつけると歓声がドツと上がった。

——捉えた。

ケンちゃんならここで鞭を入れるはず。俺は手前を変え、スパートするタイミングを併せようとしたそのとき、声が聞こえた。

「——一回、ペースを落として溜めるって……走りにくいな」

そして次の瞬間には、元々小柄なサイレンススズカの馬体が、小さくなっていた。

「な……まだそんな余力が——!?!」

一瞬、鞭が入るのが遅れた。

だが問題ない。ケンちゃんの指示に従い、スパートをかけてサイレンススズカに詰め寄る。

第4コーナー手前から直線までの間に息を入れたというのか。

だとしても、まだこの速度を叩きだせるはずがなかった。あの速度は明らかにオーバークラスで——

サイレンススズカがじわりと俺を引き離していく。

(まさか。まさか、そんな……)

まだたっぷり余力があるサイレンススズカは涼しい顔をして走っている。

オーバークラスだと思っていたがその姿を見て、今更になつて俺が読み違えていたことに気が付いた。

サイレンススズカにとって、前半1000mを58秒台で走ることはハイペースでもなんでもなく、あいつにとって普通の、ミドルペースだったのだと。

スタミナがあるからではなく、純粋にサイレンススズカの脚が速いが故に。

直線に入るより速く俺はスパートをかけて奴を追った。
しかし追いつけない。

仕掛けどころを誤ったという話ではなく、ただスピード能力がまるで違うのだと、絶望的なままで理解させられた。

「まだだ、まだだああああつー！」

約束したんだ。

ケンちゃん、恵那ちゃんと、みんなに、必ず勝つと。

王者としての振る舞いなんてどうでもいい。というか、元からそんなキャラじゃなかったんだ。我武者羅に、必死に、勝利を求めて走るのが俺の走りだ。

そして勝つことが俺の誓いのはず。

だというのに、そんな根性論を一笑に付すかのように、サイレンススズカは残酷なまでに速かった。

何故だ。

持つて生まれた才能ってやつか。

それとも、血脈に受け継がれてきた能力ってやつか。

骨格や血統から生み出されるスピードの絶対値が俺には決して届かない、だとしても

——諦める理由になりはしない！

「サイレンス——スズカあーッ！」

差が詰まる。

阪神競馬場最後の坂に差し掛かったところで再び差が縮まり、サイレンススズカの影を捉えた。

「——！」

緑のメンコで見えないが、サイレンススズカが驚きの素振りを露わにしたような気がした。

初めて俺を見たな。

いい気味だ。

これまで何度も感じていたが、俺にスピードという才能はない。

もちろん、スタミナやパワーは恵まれているだろうが、最後には一番前でゴールしなければいけない以上、スピードは絶対に必要だ。

「それでも俺は——勝つ！ 才能があろうが、なかろうが、勝つのは俺だ！ 戦いに臨んだなら、それだけが正義だ！」

「だとしても——関係ない。もう、僕の前には誰も走らせない！」

サイレンススズカから熱気のように、気迫が伝わってくる。

カマトトぶつていようとこいつもまた競走馬であり、勝利に対する闘争心を備えてい

た。

残り100mで半馬身にまで並ぶ。

このままなら差し切れる、あと少しで——そう思った瞬間が、ゴールだった。乱れた息で走り切ったスピードを落としながら走る。

入線後に俺は受け止めていた。紛れもない全力を出して追いつき、負けたことを。差はクビ差か、半馬身差だったが、その差には言葉では言い表せないほど隔たりがあるように感じた。

だというのに——身体が熱い。

夏に行われるグランプリレースで、俺は負けてなお、心を燃やしていた。

「……グレートエスケープ、さん」

俺より半馬身先にゴールしたサイレンススズカが歩み寄ってきた。

どこかバツが悪そうにしながら、「あの、その……」と言い淀んでいる。

息を整えながら、俺は悔しさを隠して「どうした？」と聞いた。

「グレートエスケープさんの走り……すごかったです。レース前に……なんか……変なこと言つて……ごめんなさい」

レース後で疲れている以外にも、ちょっとしよんぼりしているように見えた。

高慢ちきな奴だとレース前は思いもしたが、大人しい姿を見るとどちらかというと世

間知らずなおぼっちゃんのような気性にも感じた。

悔しいし腹が立ったのは事実だが何も心の底から憎んだわけではない。

俺は気にするな、と答えた。

「それにしても、スズカは速かったなあ。いや……本当に、悔しい。けど……次は負けな
い」

「それは……僕だって、次も逃げ切ってみせます」

「ああ、楽しみにしている！」

スズカは勝者が進むウイニングランへ、敗者たる俺は検量室へ歩みを進めた。

エアグルーヴだけじゃない、サイレンススズカ——あいつもまた、俺のライバルに違
いなかった。

心には苦々しい敗北の味が広がっているが、不思議と爽やかな気分だった。

常勝無敗というのも苦しいものだろうが、それ以上に気持ちのいいものだと思う。

しかし勝って、負けて、そしてまた勝つ。

それを繰り返していくのが俺らしいといえれば俺らしいのだろう。

「グレートエスケープ」

「おお、エアグルーヴ……今日はライバル対決とはいかなかったな」

「……そう、だな」

エアグルーヴの歯切れが悪い。

いつもこちらを怒るような、堅苦しい委員長気質な彼女とはかけ離れていた。

「どうした、エアグルーヴ」

「貴様は……直線では、何を考えていた？」

「……勝ちたい、としか」

「お前はそうだろうな。だが私は……くっ……また会おう……」

エアグルーヴは悔しさを滲ませながら競馬場を後にする。

彼女が心配な反面、ライバルたるエアグルーヴに下手な慰めや声掛けは却って失礼な気がして、背中を見送った。

「はあ……勝てなかったか」

ケンちゃんがため息をつく。

とてつもなく重いため息だったが、あくまで2着。次勝つしかないだろう、と言おうとしたところで気づいた。

——ケンちゃん、次も乗ってくれるのか……？

×××

宝塚記念——最後の直線でグレートエスケープはサイレンススズカを捉えることができなかつた。

「くそっ……!」

膝に手をつき息を荒くする。

サイレンススズカとエアグルーヴと一着を争つたが彼女は勝利することは出来なかつた。

グレートエスケープ……。

声をかけると、彼女は滝のように流れる汗を拭つて笑つた。

「スズカも、エアグルーヴも速い。目を奪われるほどに鮮烈で……観客たちも、彼女らの走りに魅せられている」

言葉とは裏腹に、グレートエスケープの笑顔は力強いものだった。

「相棒。私は負けたのに……楽しいんだ。負けたことは悔しい。今にも壁を殴りつけたいほどだ。だが、彼女たちの走りに魅せられもしたのだろう……共に走ることが楽しかつた」

敗北でここまで爽やかな表情をするグレートエスケープは初めて見た。

今日の走りも決して悪いものではなかつた。

心身の状態は間違いない良いのだろう。

次は天皇賞・秋を走ろう。

「理由は？」

エアグルーヴも、サイレンススズカも出てくる舞台だからだ。夏合宿で実力を高めて、全力で天皇賞に臨みたい。

王道たる中距離で勝ち、彼女の目指す最強へ至るために。

「そうだな。ああ、それでこそ私だろう。ファンの夢、相棒の夢、そして私の夢。すべてをあの二人に、ライブルにぶつきたい」

グレートエスケープは拳をパンと手のひらに叩きつけた。

「サイレンススズカもエアグルーヴも、心技体すべてを賭けなければ勝てない相手だが——相棒。ワクワクするだろう？ 最強への道が、見えてきたのだから」

その通りだ。

グレートエスケープこそが最強のウマ娘になると信じるからこそ、心躍り、昂る。

次こそは天皇賞・秋で勝利しようと、グレートエスケープと誓い合った。

目標達成！

宝塚記念で3着以内

Next

天皇賞・秋で1着

第28話 それでも手を伸ばす星の名は

『妥当サイレンススズカ！エアグルーヴ！』

「……書き間違えた」

私は合宿所に来るやいなや、荷物を置くと一筆したためた。

しかし漢字をうっかり間違えたのもう一枚書き直す。

できた半紙を乾かしてから、掲げた。

「打倒サイレンススズカ！ エアグルーヴ！」

声を出してから、自分の布団の枕の上に乗せた。

トレセン学園の合宿所は広いとはいえ流石に全員に個室を与えることは不可能だ。

トレセン学園の寮ですら相部屋なのだし。

そういうわけで基本は大部屋に雑魚寝なのだが、意外と嫌いではなかったりする。

新鮮な刺激というものは大切だ。

私はこの合宿で万全に仕上げて天皇賞・秋へ臨みたいと思う。

相棒と話したのは、徹底的な基礎トレーニング、フィジカルトレーニングを積むとい

うこと。

相棒曰く、

グレートエスケープは戦術や駆け引きが強いが、それを活かすには素の身体能力が高いことが必要となる。新たな作戦などではなく、純粋に基礎能力であるスピード、パワーを鍛えることを目標にしよう。

とのことで。

相棒との時間は身体能力に合わせたより効率のいいフォームの調整、それ以外は徹底的に基礎トレーニングという進め方になった。

そして私は今、競泳水着を着て砂浜にいる。

じりじり照りつける太陽、そして海から吹いてくる潮風がなんとも気持ちいい。

「というわけですが……本当にいいのか、ライアン。君もトレーニングがあるだろう」

「気にしないでエツちゃん。今日はみんな、筋肉を鍛えたい人が集まっているんだから」

今回はメジロライアンに筋トレの協力を得ることにした。ただ、色んな意見も聞きたいと考え、パワー自慢のウマ娘を訪ねたところ、ほかのウマ娘からの協力も得られた。

「集団で筋力増強訓練を行うことで互いにフォームの確認や、セット量の増加も行うことができます。メリットがあるのですから、積極的に行うべきかと」

淡々と語るのはミホノブルボン。

「当然、馴れ合いになつては意味がない。互いを切磋琢磨する関係でなくてはな。もち

ろん、筋力トレーニングにも理論は必要だ。効率よく行つていこう」

理路整然と語るのがビワハヤヒデ。

そして――

「私はあまり協力出来ないかもしれないが……いいのか？ 言葉にするのは苦手だし……」

「構いませんよ、オグリ先輩。やはり、目標に足る人のトレーニングに付き合うのもいい刺激になるだろう。是非ともトレーニング姿を見せてもらえると嬉しい」

「それはそれで恥ずかしいが……努力しよう」

――芦毛の怪物、オグリキャップ。

規格外な彼女はまさに最強の名に相応しいウマ娘だ。

是非ともトレーニングを共にして、自らもその領域へ足を踏み入れたい。

「早速だけど、始めていこうか。みんなよろしく！」

お互いによりしくお願いしますという声をかけ合う。

仕切るのはライアンでも、ここでは先生も生徒もなく、筋トレ仲間だ。

ライアンの指示に従い、まずは砂浜に膝をつく。

「筋肉体操第1パート。大切なのは脚だよね！ まずは脚のトレーニングの王道、スクワットをするよ！ スクワットは筋トレの王様、スクワットを制することはG I レース

を制することにも繋がるから、頑張ろう！」

「そんなこと聞いたことないが、頼む」

ライアンが見本を見せる。

まずはフォームから、というわけで見様見真似で繰り返し行う。

全員問題なくできるのを確認するとライアンは後ろから荷物を何かを引っ張り出した。

「まずは軽く、バーベル140kgを持ってスクワットを10×3セットから始めよう！」

「承知しました。ミツシヨン、バーベルスクワット。開始します」

「いい負荷量だ。パワーがあれば加速能力も高くなる。下半身を鍛えていくとしよう」

「わかった……細かいことは分からないが、やっていこう」

「本当にこの重さから行くのかね？ ……いや、何も言うまい。はあっ……！」

どこが軽くなのかさっぱりわからなかったが、バーベルを持ち上げる。

トレーニングを続ける中で私は大腿四頭筋が真っ先に悲鳴を上げるのを確かに聞いた。

「筋肉が喜んでる！ 筋肉が喜んでる証拠だよ！ エッちゃん笑って！ 筋肉も笑ってくれるから！」

既に笑っている。痙攣という名の大爆笑だ。

そんな反論をしようにも、トレーニングがきつくて言葉にできない。

2セットが終わり、3セット目も終わりに差しかかるタイミング。

「エツちゃん声出でないよ！ ほら！ 大きな声で！ お・お・き・な・こ・え・で！」

「ぐぐぐ……は、はちいい……！」

「はちみー……？」

「オグリ先輩が突然ペースアップを!？」

「ほう、はちみーか……大したものだな。はちみーには様々な栄養素が含まれており、特にレモンのはちみつ漬けなどはトレーニングや競技のプレイ中にはとても効率のいい栄養補給になる」

「はちみーはレース中に摂取することでスタミナ回復が可能……三冠ウマ娘ミッション成功のためインプットしました」

ツツコミ役がない!？」

私は筋トレのような、コツコツ積み重ねることは決して嫌いではない。むしろ好きだとすらいえる。

だがつらいものはつらい。

筋肉が狂ったように笑っている、私も変な笑いが出てきそうだ。

「はい9!」

「きゅ、ううううう……!」

「もう1回9!」

「ふえっ!? な、なんでえ!」

「ほらまだ9回! レッツマツスル! 本物の筋肉は逆境を乗り越えないと育たないよ

エツちゃん!」

「う、ぐ……きゅうううう……!」

「もう1回オマケに9!」

「ぎゅ、も、もうむりだよライアンっ! むり、やだ! もうげんかいつ……むりっ……

だめえ……」

「現象、キャラ崩壊を確認。素のグレートエスケープさんは俗にいう女の子、という性格

の認識をしました」

「グレも可愛い声を出すんだな……なんだか意外だ」

「ふっ、あざとい、ともとれるかもしれないな」

バーベルを持ちあげながら私は叫んだ。

「ちくしょう君たち覚えておけよあとで!!」

「忘れません。とても面白いものを見た、マスターに報告するので」

「ああ、忘れない。そんなグレも素敵だぞ」

「悪ぶっていても、ブライアンが時々昔のように振る舞うのと同じだ……懐かしきすら覚える」

こいつら……！

私は先輩であることすら忘れてバーベルを持ち上げる。

怒りで少しだけパワーが湧いてきたかもしれない。

このあとバーベルスクワットは、ライアンの「もう1回9だよ！」の声を7回聞いて、ようやくくっつ目のトレーニングを終えた。

「準備運動は終わり！ どうかエツちゃん、大腿四頭筋の声を聞いてあげて？」

「……」

私は太ももをそつと撫でた。

『艦長！ この艦はもう限界です！』

『総員……脱出の準備をしろ』

『了解！ 総員脱出用意、総員脱出用意！ 艦長は……？』

『私はこの艦と……運命を、共にする……』

筋肉が痙攣して今にも轟沈寸前だ。

私は伏し目がちにライアンへ視線を向けてから、小さく首を振った。

「じゃあまだ足りてないね！ 大丈夫、落ち込まないで！」

肩を叩くライアンの笑顔は、それはそれは笑顔であった。

筋トレを楽しむ人達はマゾヒストの気があるんじゃないかと常々思っていたが、この姿を見ているとサディストの気もあるのではないか。

私はそう思いながらも、勝利を想い、筋トレ地獄に身を投げ出すのであった。

そして合宿一日目の筋トレメニューを終えて——今度はビワハヤヒデとオグリキヤップからの簡単な講義が始まる。

「夕食の前に大切なことを伝えておこう。筋肉はタンパク質から作られる。つまり、食事を疎かにしてはいくらトレーニングをしたところで望んだ成果は得られないということだ。そしてタンパク質は筋トレをしてから1〜2時間以内に摂取することで効率よく吸収される。つまり、大切なのは多少辛かろうが食べること！」

「理屈っぽいわりに精神論少し入ったな……だが言っている意味はわかる。確かにあまり脂物を食べるのは体に良くなさそうだ」

脂物、大好きだけど。

合宿の間は特に我慢しなければなるまい。

「そこで……炭酸抜きコーラだ」

「……ビワハヤヒデ。君、それがやりたいだけだろう……」

「否定はしない」

「読んだらう。……刃〇」

「ふふふ……面白かった」

「〇牙理論で筋トレはできないだろう……それはともかく、栄養が大切というのはよくわかった。いわゆる低カロリー高タンパクの食品や、運動に充分な量の炭水化物を摂取する必要があるのだろうか？ ではなぜオグリキャップが出てくるのだ」

ビワハヤヒデはメガネをクイツと持ち上げた。

レンズに光が反射して瞳が見えなくなり、表情がわからなくなる。

「君にはオグリキャップと大食い競争をしてみよう」

「……今私に、とんでもない指令が下されたようだ……う？」

「大食い競走だ。ただ食べるだけでは満腹になれば食べなくなる。だが、沢山食べるにはそれだけでは足りないのだ。限界を超えて栄養を摂取し、血肉に変えることこそが大切だ」

「……本当に、やるのかね？」

「できないなら無理には」

「やるに決まっているだろう、できるとも！」

「ではレッスン2……大盛り肉増し激辛カレー大食い対決、スタートだ！」

「うおおおお！」

「おいしい……！」

ウマ娘のレースは意地と意地のぶつかり合い。

努力と才能を絞り尽くした先に初めて栄光を掴むことが出来る過酷な舞台。

全てをぶつけるレースに勝ちたいのなら、大食いくらい相手に勝てなくては、どうす

ることもできまい。

「勝負だアアアア！」

「おかわり……美味しいな、このカレーは！」

オグリキャップなにするものぞ！

一杯目を食べ終えて横をちら、と見るとオグリキャップはまだ半分しか食べ終えてい

ない。

この勝負——いける！

私は合宿所の壁にもたれかかっていた。

「エツちゃん大丈夫……？ 苦しくない？」

「平気ですナーさん……うぶ」

傍で甲斐甲斐しくお世話してくれているのはナーさんことダンスパートナーさん。

お腹が今にも爆発してしまいそうなほど苦しくて、すっかりグロッキーになってしまった。

「もうオグリキャップと大食い対決なんてしない……ああ……誰だ……川の向こうで……え……あれは、たちば」

「エツちゃん、目を開けて！ そんなに食べたあとに寝たら牛になっちゃうよ！ とうか逆流性食道炎等によって癌になりやすくなっちゃうよ！」

そう聞いてスつと目を覚ます。

流石に大病にかかりたくはない。私はしばらく座りながら、ナーさんの傍でのんびり過ごすごことにした。

「……やつぱりナーさんの隣は落ち着くな」

「そうかな？　ありがとう」

結局、夜までナーさんにもたれかかりながら、ゆっくり休んでいた。

次の日からも筋トレ、食事、筋トレ、食事を繰り返し、そして週に一度はフォームを確認する作業を相棒と繰り返し返した。

すべては天皇賞・秋で勝利するために。

真夏の合宿所で、今日も私は砂浜を駆けるのだった。

×××

宝塚記念は2着に終わり、放牧されるまで数日というある日のこと。

馬房から少し離れた事務所まで恵那ちゃんと黒井先生が話し合っている。

俺は飼料を食べながら、その会話を耳を傾けていた。

「えつと……その、凱旋門賞っていう……世界一の馬を決める戦いにグレートエスケープを出す予定だったんですよね」

「ええ。今もそれは決まっていますけど……正直悩んでいます」

「なにか問題が……お金のことでしたら、グレートエスケープ自身が稼いだお金があるので大丈夫だと思うんですけど」

「私は宝塚記念を快勝して日本に敵はなし、前哨戦を使わず満を持して凱旋門賞へ！

……と考えていました。しかし、サイレンススズカという馬に負けてしまった。あの馬は間違いない歴代でも最強に数えられるであろう馬です。その馬に負けたまま凱旋門賞へ行っていないのか。そこを考えています」

「わ、私はその強さとかはわからないんですけど……勝てる確証がないということですか?」

「そこはどんなレースもそうです。ただ、やはりグレートエスケープには最強馬という

称号で凱旋門賞へ行ってももらいたい気持ちがあるんです。そこで成績を残して、いい状態で種牡馬になってももらいたいんです。そこでなんです……」

黒井先生はそこまで俺のことを考えてくれていたのか。とても嬉しい。それと同時に、サイレンススズカに勝てなかったことが悔やまれる。

もし凱旋門賞へ行けば秋の天皇賞には出られないだろう。

そうなればジャパンカップ……とはいえ、スズカがジャパンカップに出るかどうかは距離適性の問題で少しわからない。

再戦の機会はもうないかもしれない……それに、エアグルーヴと違ってまだ決着がついたと思っていない。

むむむ……なんだか自分の心の整理を上手く付けられないぞ。

俺が悩んでいる間も、二人の話は進んでいく。

「札幌記念を走ってから決めたいと思います。そこで勝てば凱旋門賞へ行き、負けるようであれば天皇賞・秋に行きます」

「ええつと……札幌記念が、いいんですね？」

「芝が洋芝で欧州の競馬場に少し似ているんです。そして別定戦といって、GIを勝っているグレ坊の斤量は少し重くなります。欧州では斤量が多めに課されるので……」

「欧州の条件に近くなるということですか……」

「そして最後に……エアグルーヴが札幌記念に出走するからです」

「えっと、女の子なのに天皇賞・秋を勝ったすごい馬ですよね」

「ええ。エアグルーヴに勝てるのであれば、文句無しに凱旋門賞へ行けると思います。負けるようであれば……サイレンススズカやエアグルーヴと、秋と冬に国内で決着をつけます」

つまり、今後を占う決戦の舞台は——札幌競馬場！

「……ところで、凱旋門賞の前に札幌記念を経由するのはよくあることなんですか？」

「10年もすれば当たり前になってくると思います」

黒井先生が言うのと本当に聞こえるから困る。

札幌競馬場で行われる重賞レースで最も格式が高いのはG I I Iである札幌記念だ。

去年G I I IからG I Iに昇格し、夏競馬で唯一のG I I競走となった。また、ハンデ戦から別定になることでより強い馬たちがタイトルを狙いにくるようになった。

一昨年は後に宝塚記念を制したマーベラスサンデー、去年はいわずとしたエアグルーヴと皐月賞馬のジェニユインが参戦するなど少しずつスーパーG I Iの様相を呈してきている。

まさに真夏の中距離最強馬決定戦とすらいえる戦いに、俺は臨むことになった。

それより先にエアグルーヴ陣営が札幌記念参戦を表明しており、スポーツ新聞はエアグルーヴの札幌記念連覇を目指すことを報道。

遅れて俺たちの陣営が札幌記念をステツプに凱旋門賞へ挑むことを発表したものだから、競馬サークルは大騒ぎだった。

『現役最強となったグレートエスケープが海外へ飛び立つのか、最強牝馬エアグルーヴが夢を砕くのか』ねえ」

新聞を読みながら俺は馬房の中で体を震わせた。

サイレンススズカに勝ててない状態で最強もなにもあるのか、というのが本音だがマスコミは見出しを大切にする。

それがあるから仕方ないのだろうが、やはり周りの評判は俺とエアグルーヴの実績ありきで語られていた。

『札幌記念は別定のためエアグルーヴには58kg、グレートエスケープには59kgの斤量が課される』……凱旋門賞ではもつと背負うし、エアグルーヴも同じくらい背負ってるからな。言い訳にはならないな」

既に札幌競馬場へ入厩しており、体勢は万全。

凱旋門賞は確かにたどり着きたい栄光だ。しかし、それより前に挑むべき相手がいる。

せめてエアグルーヴとだけでも決着をつけてから、世界へ飛び立ちたい。

「グレ……時間だ」

西京さんが俺を呼ぶ。

彼に引かれるがままパドックへ出ると、既にたくさんのお客さんがいて、俺を見るなり感嘆の声が上がった。

俺は大外の8枠13番で最後尾。

前の方にはエアグルーヴが見事な歩様で歩みを進めていた。

エアグルーヴに俺は近づいた。

「よう、エアグルーヴ」

「……何の用だ。私に何か言うことでもあるのか？」

「あるに決まっているだろう。ライバルだと思ってるんだからな、俺は」

「……！ なにが、ライバルだ……」

そう吐き捨てるエアグルーヴには馬体の見事さほどの覇気を感じられなかった。

俺をバカにしているというよりは、自嘲によるセリフらしかった。

「宝塚記念ではあれだけ大言壮語しておきながら、完敗した。サイレンススズカと貴様の戦いを遥か後方から見ているだけだった」

「……そうだったな」

「最初は……貴様のことは見下していた。ダービーを制したとはいえ、所詮は既に燃え尽きた馬だと。しかしジャパンカップでは敗北し、有馬記念でも競られ、そして春の天皇賞は貴様が勝利した。気づけば同等どころから私よりも格上だった。だというのに私は……まるで道化だ」

しょんぼりと耳を垂らしながらエアグルーヴは落ち込んでいる。

最初こそ心配だったが聞いてるうちに腹が立つてきた。

こつちはエアグルーヴと全力で走ることを楽しみにしていたのに、彼女は勝手に走る前から折れてしまっている。

「エアグルーヴ」

ずいっと詰め寄るとエアグルーヴの担当厩務員が慌て出すが、俺に暴れる気配がないとわかると慎重に引き離そうと手綱を引く。

しかしエアグルーヴは動くことなく俺をじっと見つめていた。

「俺は去年の秋の天皇賞で惨敗した。バブルガムフェローと争うお前の姿は今も覚えている……その後のジャパンカップ、有馬記念、どれもそうだ」

俺にとってライバルといえる競走馬は多くいた。

ダンスインザダークに始まり、ロイヤルタツチやイシノサンデー、バブルガムフェローたち同期。シングスピールにエリシオ、ピルサドスキーといった海外馬たち。マヤ

ノトップガン、サクラローレル、マーベラスサンデー……年上三強。

イシノサンデーすら今年の安田記念後に屈腱炎を発症し、引退した今、いずれも再戦が叶わぬ猛者ばかりだ。

そして今はサイレンススズカと……エアグルーヴと走って勝ちたいと思っている。

今年で俺は5歳、サラブレッドであれば怪我がなくても引退することだってある年齢で競走馬としての時間はそう多くない。

無駄なレースは一戦もないのだ。

「エアグルーヴ……お前はあの走りで俺の目を奪ったんだ。あれから俺はお前を追い続けてきた……追いついてきたから、まだGⅠで勝敗を争い、GⅡではスターホースとして迎えられているとすら思っている」

最初は一言言つてやろう、くらいのもりだったのに、段々と言葉が胸から溢れて止まらなくなってくる。

自分でもこんな語るほどの想いがあったことに驚いていた。

「それなのに、今のお前はなんだ。惨敗したから道化のようだと？ だからなんだというんだ……しかも掲示板にはきつちり入ってるだろ。その程度でウジウジしてるんじゃない！ 俺はお前の走りが好きだ！ そしてそれを打ち負かしたいと思ってる！ もう一度俺に、あのときの走りを見せてみるよ！」

「ぐ……貴様……こちらが黙っていれば……勝手なことを……！ 言うに事欠いて私が好きだと……？」

「うん？ いや、俺は走りが……」

「貴様と違い、私には選り抜かれた優秀な父の精、母の血が流れている！ 貴様のような何処の馬の骨とも知れない者など本来触れることすらできんのだ！」

「ちよ、ちよつと待つてくれ」

「そこまで私が欲しいというのなら……今日のレースで証明してみせろ！ そこで力を見せたのなら……か、考えてやらんこともない……」

それだけ言うエアグルーヴは背を向けて俺から離れ、自らのテキヤヤネの元へ向かった。

担当厩務員が俺が絡んでいったことを言ったのだろう、エアグルーヴのテキヤからは鋭い目付きを向けられたのと、ヤネである滝さんから意外なものを見るような目を向けられた。

「グレートエスケープに絡まれてちよつとかかり気味か？」

俺のせいじゃないし！

まるで「うちの娘に何の用だ凡骨が」とでも言いたげだ。怪我させられたら困るのだから、その反応も当然だが。

そうこうしているうちに、うちのテキとヤネがやってくる。

黒井先生の傍らにいるのは——ケンちゃんだ。

勝たなければ乗せないと言っていたのに、どうして札幌記念でケンちゃんが俺に乗るのか。

それは宝塚記念後に記者から受けた黒井先生のインタビューが原因だった。

『黒井先生、グレートエスケープは惜しくも宝塚記念2着でした。鞍上が乗り替わりましたが、今後兼ねてより話に出ていた凱旋門賞は如何でしょうか』

『そこはまだ未定や。なんともいえん』

『鞍上は……そのままですか？』

『そのままや！ なにか文句あるか？』

と、黒井先生が記者の挑発めいた質問に乗ってしまった結果、続投となった。

黒井先生はあの記者のせいだ、と言っていたが今後も梶田健二でいくと決めていたのは厩舎のみんなが実は知っていた。

ケンちゃんが背中中に跨り、札幌競馬場のパドックから本馬場へ向かう。

札幌競馬場は洋芝でなんだかふわふわとしている。

なんだか面白い感覚だ。

返し馬ではケンちゃんと息を合わせるようにゆっくり歩いたり、スピードを出した

り、少し曲がりながら試しながら走る。

「……調子よきそうだな」

ケンちゃんが呟く。

俺としても、悪くない。洋芝はパワーが必要だというのが、確かにしつかり踏みしめてもきつい感じはない。

「その癖不良馬場は下手だけだな」

走法の問題だから仕方ないんじゃない？ ほっとけ！

とはいえ洋芝が合うかもしれないというのは良い方向に働きそうだが、今回の俺は大外枠。

はつきり言って結構不利だ。

「でも関係ないだろう？」

そういう意味を込めて嘶くとケンちゃんは落ち着かせるように俺を撫でた。

待機所にたどり着く。

俺が脚を踏み入れた途端にエアグルーブ以外の競走馬が俺を睨みつけた。

闘争心だけではなく、畏れや警戒が入り交じる雰囲気。

俺とエアグルーブを除くと1頭が標的として俺を見ているよう——いや、1頭足らないぞ。返し馬は全頭終わっているはずだが……。

「——キミがグレートエスケープだね」

ヒエツ！

誰もいないはずの後ろから声をかけられてびくりとその場を離れる。

距離はそれなりに離れていたのに耳元へ生暖かい息を吐きかけられながら囁かれたような感覚だった。

「そんなつれない反応しなくてもいいじゃないか……同期なんだぜ……？ キミにとって僕は目立たない石ころみたいなものかもしれないけど」

「お前は……誰だ？」

「僕かい？ 僕は……ふふ、そうだね……キミを捕まえる者さ。名前をサイレントハンター……」

脳内で警報が鳴り響く。

『艦長！ これは……この反応は間違いありません……ヤツです！』

『サンデーサイレンス産駒（あたまがおかしなやつら）か……！』

おつと意識が混線した。

改めてじつと見ると、確かに馬体は鍛え上げられており、雰囲気を変態めいただけではなく、間違いなく重賞級の馬だとわかる。

「僕の名前からわかるように、僕の走りは狩人……石ころだと思って油断してくれて

いることのほうが、好都合なのさ。キミとエアグルーヴが見つめあって気が抜けているところを……僕が狩る……」

「俺をマークするってことか。油断する気はないが、そう簡単に俺を捉えられると思うなよ」

「それはこの後わかるさ……フッフ」

変態ちつくな言動こそしているが、内容は割とマトモであいつらに慣れた今では「よろしくお願いします！ 二度と立てないくらいポコポコにしてやります！」くらいの挨拶と同じだ。

「現役最強の名は軽くない……無礼（ナメ）るなよ、サイレントハンター」

俺は彼を睨みつけてから踵、いや蹄を返す。

……今のちよつと強キャラっぽかったな。

「フッフ……ゾクゾクしちゃうねえ……」

あつ、なんか強キャラを目の前にした得体の知れない変態キャラっぽい言動だ。

ちよつとかっこいいやりとりができたのと、心の中でサイレントハンターに親指を立てるのだった。

サラブレッドになつてはや5年。未だに少年心は忘れられていなかった。

『プペポピー』

札幌記念のファンファーレが生演奏され、ゲート前に出走馬が集まる。

札幌記念は平坦かつ、小回りなコースを一周する芝2000mで行われるため、求められるのはコーナリングのスムーズさが最も重要だろう。

直線は短く、後方から勝つにはコーナーからスパートをかけないと間に合わないからだ。

裏を返せば逃げ、先行する俺は有利な反面、今回は大外枠を引いてしまったため、かなりスタートが良くないとハナに立てず、外を回されてかなりロスしてしまう。

大切なのはスタートダッシュだ。

最後にゲートに収まると、観客が歓声を上げた。札幌にGI馬が来るのは札幌記念くらいだろうか。

そう思うと、今日の札幌競馬場の熱気はまさにGI級だった。

俺が凱旋門賞へ飛び立てるのか、それともエアグルーヴが俺を倒すのか。

泣いても笑っても決着の瞬間は2000m先に待っている。

『GIIになって2度目の開催となります札幌記念。グレートエスケープの世界へ向けた壮行レースになるのか。それともエアグルーヴが阻止し連覇を達成するのか。はたまた伏兵の台頭か。第34回札幌記念、今スタートです!』

ゲートが開くなり、いつもの如く飛び出して先頭めがけて加速する。

いいスタートだ。斜行にならないよう、ケンちゃんの指示に従いながらインへ切れ込んでいく。

すんなりハナにつけたと思いきや、馬群の中から猛スピードで飛び出してくる馬がいた。

『グレートエスケープがハナに立とうとしますが……サイレントハンターです！ サイレントハンター譲りません！ ぐんぐんスピードをつけてハナを奪っていきます』

「あれえ!!? 狩りは!!? ハンターは!!?」

「イヤツホウウウウ! 最高だぜええええ!」

サイレントハンターは俺を無視して勢いよくペースを上げると後続に差をつけて逃げていた。

ランナーズハイってやつだろうか。

全然名前とかさつきまでの振る舞い関係ないじゃないか。

どうして——!

「どうしてサンデーサイレンス産駒は頭がおかしいやつばかりなんだツツツツ!!!」

『ハナを奪ったのはサイレントハンター。マイネルブリッジもそれについていきます。グレートエスケープは離れた3番手、4番手といったところか。集団の外につけました。エアグルーヴは先団のインコース、6番手でレースを進めます』

しかも思い描いていた中でも悪い展開になってしまった。

ハイペースで飛ばすサイレントハンターに釣られて集団のペースも速くなっている。

第1コーナー、第2コーナーではストライドの大きい俺ではさらに外に振られやすくなり、速いペースの集団から無理にハナを奪おうとすればいくらスタミナやパワーに自信があろうとエアグルーヴから逃げ切るのは不可能だ。

どうするか迷ううちに向正面に入る。

多少強引だがさらにペースを上げて——手綱をそつと引かれた。

抑えるほど強くないが、何かを俺に伝えるかのように柔らかな力だった。

(俺と自分を信じろ、グレ坊)

ケンちゃんの気配がどんな言葉よりも雄弁に物語っている。

凱旋門賞は札幌記念よりもハードな戦いになるはずだ。外を回ってでも自分の走りをして、貫き、少し強引な競馬だろうと勝てなければ凱旋門賞を勝つなど夢のまた夢だろう。

(——よし、腹括っていくぞ……！)

息を大きく入れ、息遣いが小刻みなものから少しずつ長いものに変わっていくのを感じ取る。

既にレースは前半1000mを終えたところ。

最初の第1、2コーナーはややペースが速かったが向こう正面に入ってからペースは緩んでいる。

後続も俺も上がりの脚を使って勝負していける展開だ。

ケンちゃんなら、ここで――！

『グレートエスケープ3コーナー手前で動きます！ あ、つれてエアグルーヴも早めに捕まえて行こうという構え！ マイネルブリッジは少し苦しくなった！』

俺のすぐ後ろでエアグルーヴがびったりマークしている。

並んだままコーナーを周り、第4コーナー直前でサイレントハンターを捉えた。

ここからはエアグルーヴと一騎打ちだ。

『直線に入ってグレートエスケープ先頭、僅かにエアグルーヴが並んでいる！ 札幌競馬場は大歓声です！ 真夏のG1で一昨年の年度代表馬と、去年の年度代表馬の一騎打ちだ！ 外グレートエスケープ、内エアグルーヴ！ びつしり並んでいる！ どちらも譲らない！』

プリンカーをつけていてもわかるこのプレッシャー。

腑抜けたことを言っていようと、やはりエアグルーヴは強く、勝つには一筋縄ではない。かない。

末脚を發揮してからの切れ味は凄まじいの一言で、すぐにも置き去りにされてしま

いそうだ。

——だとしても、負けたくない！

『グレートエスケープ！ エアグルーヴ！ グレートエスケープ、エアグルーヴ！ 並んだ！ 内外並んだまま！ 連覇か、証明か、並んだまま今、ゴールイン!!』

駆け抜けた感触は勝った、と思った。それと同時に、負けたかもしれないと思った。

ターフビジョンへ目を向けると中々順位は表示されず、その後写真判定ということになった。

『札幌記念のレースタイムは1. 58. 8です！ 1990年にグレートモンテが記録した1. 58. 9の基準タイムをコンマ1秒上回るレコードです！ 1着は……ターフビジョンでも映像が映し出されていますが……まったくわかりません！ 現在1着は写真判定中です。お手持ちの勝馬投票券は確定まで大切に保管してください』

ケンちゃんが俺を撫でる。

「いい走りだったよ、グレ坊」

だが勝ったかどうかはまるでわからない。

促されるまま、検量室へ向かう途中でエアグルーヴと並んで歩いた。

「……勝ったと思うか？」

「正直なところ、わからん。だが……貴様に相応しい走りはしたぞ」

「俺も、エアグルーヴのライバルといえる走りをした」

「ならば、あとは結果を待つだけのことだろう」

「……だな」

長い、長い写真判定だった。

馬連を買っていた観客は暑いから早くしろとばかりに不満を述べ、単勝を買ったものは悩んでいたり、何かに祈るような仕草を見せている。

俺とエアグルーヴの体つきや能力の傾向は違えど、実力は同等だ。

最高速度を出し続けるスタミナは俺が。

最高速度までの瞬発力はエアグルーヴが。

総合力では同等——だった。

『まだ写真判定は続いています。GIIでありながら多くのファンがターフビジョンを見つめています。間もなく15分になるところですが——ターフビジョンに馬番が表示されました!』

もしも俺とエアグルーヴの勝敗を分かつものがあるとすれば、それは。

競馬というどちらが速くゴールにたどり着くモノで、最高速度が勝っていたという点に尽きるのだろうか——

『表示されたのは、4番——エアグルーヴです! レコード決着、そしてハナ差でグレー

トエスケープとなりました！ まさに死闘でした。真夏の北海道で繰り広げられたG
IIの戦いはエアグルーヴの連覇で幕を閉じました！ しかし、これはナリタブライア
ンとマヤノトップガンの伝説の阪神大賞典に負けず劣らず伝説のレースとなるでし
う！』

結果を聞いてから、俺の中ではじわじわと悔しさが湧いてきた。

エアグルーヴにも、サイレンススズカにも負けた。

卓越した加速力と速度の2頭に最後の最後で交わされ、追いつけず、速度を出せない
自分の脚に怒りすら覚えた。

(いや——そもそも)

確かに一瞬の切れ味鋭い脚は持っていなかったが、速度は決して足らないことはな
かったはずだ。

人間でもフルマラソン走れる体力があるうと速度を出せなかったら意味がない。

それと同じこと。

だとしたら——

(俺はまだ速くなるための努力をやりきれてないんじゃないのか?)

黒井先生は当然、俺が強くなるために調教をかけているだろう。

俺の持ち味を活かし、欠点を少なくするために調教を積ませるのが調教師なのだか

ら。

しかし俺は、周囲の声に引きずられて、自分を囲む檻を作っていやしないだろうか。「限界を越える、か……」

馬運車に揺られながら、俺はぼんやりと世界最高峰の舞台について考えていた。

——後日。

スポーツ新聞には『グレートエスケープ、凱旋門賞を回避』という見出しが躍っていた。

第29話

「凱旋門賞は出ないんですか……そうですね、残念です……」

「まあ、仕方あらへん。馬はあくまで馬主のもの、無理させて怪我でもさせる方が問題や」

「あれだけ強い競馬をしたグレートエスケープには是非行つて欲しかったです……難しいものですね」

「馬も生き物やからな。しゃーないわ」

馬房の中から聞こえる会話に俺は思わず耳を垂らしてしまう。

凱旋門賞回避——競馬サークルには札幌記念の反動で疲労が抜けず、凱旋門賞まで態勢が整わないということと回避が発表される。

そのことを伝えるための取材の前に、黒井厩舎によく取材に来る記者が、黒井先生と話していたのだった。

「秋は天皇賞ですか？」

「そうなるやろな。国内路線には強い奴らがいるしファンはそれはそれで嬉しいんちゃうかな」

「そうですね。天皇賞には恐らくサイレンススズカが出てくるでしょう。ジャパンカップではサイレンススズカの他にエアグルーヴはもちろん、先生の管理馬のスペシャルウィークとのダービー馬対決や、マルゼンスキーの再来といわれたグラスワンダーの復帰など……確かに楽しみではありますね」

「このまま何も無ければ天皇賞は問題ないと思つとる。こうなつたらグレ坊にはしつかりGIを獲つてもらわんな」

「ちなみに……種牡馬入りの話はいかがです?」

「来まくつとるで。流石にオーナーと正式な話し合いはついてないが……いつになるかは完全に未定や」

「凱旋門賞で好走したらさらに種牡馬価値が高まつていたでしょうね。エアグルーヴを相手にあの斤量を背負い、大外を終始回りながらハナ差の2着。後続には5馬身ついていましたから、やはり隔絶した力を持っていましたね」

「……せやな。あ、次走とこれから話すことは記事にしてもええで」

「はい?」

「グレートエスケープはまだまだ伸びしろがある。そういうことや」

「……素晴らしい記事が書けそうです! 最強と言われていても未だ管理馬の力は頂には至つておらず、まだまだ強くなれるという信頼! そのためには己の身も犠牲にして

みせるという尊い志があつてこそなんですね！」

「ちやうで」

「ありがとうございます、すぐに記事にしなくては！」

「聞けや」

話しているうちに黒井先生は記者と別れて、俺の元までやつてきた。

「あの乙名史つて記者は時々いい方向に拡大解釈するからおもしろいわ」

呆れてため息が出てますよ先生。

しかし、先程の話を聞いて本当に申し訳ない気持ちが強くなってくる。

「今更そんな顔をするなグレ坊。凱旋門賞がすべてではない。そもそも天皇賞、ジャパ
ンカップや有馬記念が凱旋門賞に劣らないとホースマンが考えなければ、国の競馬の価
値を落としてしまうんやから」

そうは言うけど、黒井先生も凱旋門賞に管理馬を出したいという思いはあつたんじや
ないだろうか。

数年前にはフランスヘダンスパートナーさんを遠征させていたし、決して海外志向が
ない訳では無いと思う。

「ま……お前が凱旋門賞ではなく天皇賞に出たいというのなら……仕方ないわ。サイレ
ンススズカに勝てないまま引退つても面白くないわな。それにしても驚いたわ……」

グレ坊が凱旋門賞を嫌がるなんてな。そんなにサイレンススズカと戦いたかったのか」
——そうです。

そこだけは誤魔化さず黒井先生の目を見つめた。

じつと見続けていると黒井先生は表情を緩めて、俺を撫でた。

「良い目をするようになったわ。精神的には競走馬としてお前は完成しつつある。だからこそ凱旋門賞も楽しみやっただけ」

本当に申し訳ない。

今回の凱旋門賞回避は札幌記念後の反動が抜けないから、という理由になっているが、本当は俺がサイレンススズカともう一度戦いたいという思いばかりが強くなり、札幌記念後の調教をごねたのだ。

最初こそ調子が悪いフリ、いわゆる仮病を使ったが厩務員の西京さんは淡々と問題ないと報告し、変わらず凱旋門賞へ行くといい話になった。

そこで俺は調教を拒否し、黒井先生に猛烈なアピールをすることで天皇賞・秋に方針を変えてもらった。

ナチュラルに話を通じているような気もするけど、それだけ俺を見てくれている証拠だった。

「走るからには勝ってもらおうで、グレ坊」

もちろん。

とはいえ、だ。このままだ調教を積んでも、サイレンススズカには勝てないだろう。アイツはまだ未完成だ。まだまだ強くなる。

これは予想ではなく確信と、信頼だった。

黒井先生も同じことを考えているだろうし、サイレンススズカに勝つための調教を積んでいくことになるだろう。

サイレンススズカを倒すべきライバルだと意識する自分はまるで恋焦がれるようだった。

○○○

調教スタンドから見えるグレートエスケープの追い切りに対して、記者たちは困惑や疑問を抱えるものがほとんどだった。

記者だけでなく、その他の栗東に厩舎を開業する調教師も怪訝な表情を浮かべていた。

「黒井先生……どうしたんだろうな」

「わからん。凱旋門賞行けなくなってヤケに……なんていう人ではないし」

「それでも異常だ。追い切りの本数、負荷量、タイム……どれ一つとつても、普段とまるで違う。今も、ヤネが一杯に押ししている。もう10月になったのに、札幌記念からずつ

と一杯に追っている」

記者たちはグレートエスケープが走る姿を双眼鏡で観察した。

500キロを超える雄大な馬体から繰り出される走りは迫力満点であり、現役最多タイのGI4勝の馬というに相応しい姿をしている。

だが——そこまで目いっぱい追って馬が壊れやしないだろうか。

黒井調教師は調教師リーダーディング上位に食い込むまさにトップトレーナー。

そんなことを言えばプライドを傷つけるし、当然揉め事になることは馬券より予想が簡単だ。

記者たちの中の一人、駒場は黒井厩舎に取材のためよく出入りすることがあり、黒井調教師とは親交が深い人間でもあった。

なにか一言を聞き出したいという記者として、一競馬ファンとしての好奇心から、調教終わりに彼に尋ねた。

「黒井先生、おはようございます。グレートエスケープは調子が良さそうですね」

「おはようさん。まあまあのできや。まだよくなる」

「まあまあですか。猛時計を連発しているのに……札幌記念の反動があると聞いて少し心配していましたか」

「結構疲労していたからな」

「その割には……グレートエスケープは元気そうに見えますね」
「特にどこも悪くないからな」

「……疲労が蓄積しているのでは？」

「は？ ……あ。グレートエスケープには丁度いい調教ということや」

大丈夫か、本当に。

駒場は思わず突っ込みたくなってしまったが、ぐつと堪えた。

元々強かで測り知れないところがある方だから——駒場は彼には彼の、凱旋門賞を回避した理由があるのだと推察した。

「秋の天皇賞は楽しみにしておくんやな。きつと素晴らしい競馬をするで」

不敵に笑う黒井調教師に、駒場はごくりと喉を鳴らす。

もしかして、サイレンススズカに勝つためだけに凱旋門賞を蹴ったのではないだろうか——そんな考えが頭に浮かんだが、それだけではないだろうと考えを振り払った。

しかし、今年の天皇賞・秋は世紀の大レースになる。

半ば確信めいた予想が駒場にはあった。

○○○

「うわあああああ！ うああああああん！ まけましたあああああ！」

馬房の隣で未だに泣いているのは今年のダービー馬、スペシャルウィーク。

ひと夏を越えて大きくなった馬体と態度を振りまきながら菊花賞に挑んだのが数日前。

そこで見事にセイウンスカイという皐月賞で逃げ切りをくらった相手に完膚なきまでに逃げ切られてしまった。

それからは俺を見る度にギャン泣きするのだ。

「……スペシャル、お前泣くなよ。自業自得だろ」

「だって俺は一番の馬だって、最強だって思ってたのに！ 全然そんなこと無かった！

僕は所詮ただのおデブ競走馬なんだああああ」

厩務員や調教師がいるときは大人しくて従順なくせして、馬だけになると途端にワガママになりやがる。

あまりにもうるさいので少し静かにして貰いたいが故に、人参を啜えてスペシャルに放り投げた。

「人参やるからおとなしくしてろ」

「もぎゆもぎゆもぎゆうえええん、もぎゆもぎゆ」

「食いながらよく聞け。残念ながらお前は最強の馬ではない」

「そんなあ！ もぐもぐ、ごつくん。俺、ダービーを勝つたのに!?! エスケープ先輩みたいになれたのに!」

「そもそもお前、ダービーの前に俺が含蓄ある言葉を言っただろう。それにダービーを勝ったから最強になるわけじゃない。俺だって、最強というには程遠い。現役最強とは言われているけどな」

「ええ……じゃあ最強と呼ばれるにはどうしたらいいんですか!」

「いいかスペシャルウィーク。最強つてのは、勝ったやつに言われるんだ。いくら勝とうが、負けようが、次のレースで勝たなければ最強とは呼ばれない」

説教が自然と自分に言い聞かせるようなものに変わっていく。

現役最強と呼んでもらえるようになったのは嬉しい。

橘ちゃん、懇備式牧場のみんな、育成牧場のスタッフたち、黒井先生、西京さん、黒井厩舎のみんな、ケンちゃんにカナタさんにノリさん、恵那ちゃん。

みんなのおかげでそれだけの評価を得るに至ったし、関わった全ての人が評価されているわけだから、素晴らしいことだと思う。

だとしても、次の天皇賞・秋でサイレンススズカに負ければ、その称号は奪われてしまうだろう。

最強の証明は常に次のレースだ。

「スペシャル、俺は俺のために——次の天皇賞・秋で証明してみせる。前に言ったことと同じだ。負けても、次は勝つ。それしかないんだ。俺の走りを見て……もう一度考えて」

みろ」

自分の走りを見ろ、か。

思えば、俺も同じような時期にダンスパートナーさんの走りを見て悩みを吹っ切ったりもしたが今ではこうして同じ厩舎の後輩に走りを見せようとしている。

気づけば5歳、引退してもおかしくはない年齢だ。

走れるレースも恐らくあとわずか。

一戦ずつ、全力を出し尽くしたいものだ。

「エスケープ先輩……俺、レースは見られませんよ」

「あれえ？」

『第118回天皇賞・秋、返し馬を終えて間もなくゲート入りです。本日の実況はキタテレビアナウンサー佐藤常夫（サトウ・ツネオ）解説は競馬新聞ハチの梨田武さん、元騎手で競馬評論家の西晋助さんを迎えています。お二方、今日はよろしく願います』

『よろしく願います』

『よろしく願います』

『天皇賞・秋、去年は牝馬が秋の盾を見事つかみ取りました。その牝馬を導いた名手、滝カナタはサイレンススズカに騎乗しています。サイレンススズカはここまで重賞6連

勝、奇しくも滝力ナタも重賞6週連続勝利中と人馬ともに絶好調です。今日勝てばまさにラッキーセブンです。全13頭で争われる天皇賞・秋が間もなくスタートします。まずは梨田さん。注目はやはりサイレンススズカとグレートエスケープ』

『はい、そうですね。タイプが全然違う逃げ馬ですが、この2頭がレースを引っ張るのは間違いなんでしょうね。両馬共に調教は抜群で返し馬もとても落ち着いていました。もう1頭、サイレントハンターがどこまで突つかかるかですけど、これだけ逃げ馬がいると前が総崩れもあるかもしれません』

『つまり波乱の結果になるかもしれないということですね。現在1番人気はサイレンススズカですが、天皇賞・秋はミスターシービー以来、1番人気は連敗を重ねているジंकスもあります。また波乱となるのか、ジंकスを打ち破るのか。梨田さんの本命はメジロブライトです。さて、西さん。元ジョッキーとして、今日のレースは如何ですか？』

『滝力ナタ騎手と梶田健二騎手は当然本命対抗の2頭ですから、緊張していると思いますよ。返し馬のときもお互いの馬をよく見ていましたから。1番と2番でサイレンスとエスケープが入りましたが、サイレンスが逃げてエスケープは2番手につけるんじゃないでしょうか』

『他のジョッキー心理としては、どうでしょう』

『シルクジャステイスやメジロブライトがいますけど、前を野放しにはできませんからね。かといって早く捕まえようと動くのも難しいと思います。そこで明暗が別れるところになるんじゃないですか』

『そうですか。西さんの本命はグレートエスケープということですか。スタート地点には塩川アナウンサーがいます。塩川さん』

『はい。返し馬はサイレンススズカは外ラチをゆつくりと歩いてきました。ダツシユはつけず、とても落ち着いている様子です。滝騎手は返し馬中は笑顔を浮かべていましたけど、その後にグレートエスケープが本馬場に来てからは時々視線を向けていました。笑顔はなく、緊張感あふれる表情でした』

『グレートエスケープはどうですか』

『元々返し馬では激しく動くタイプでしたが今日はとても落ち着いていました。サイレンススズカと同じように、芝生を歩いていました。梶田騎手も手綱は持ったままで馬に任せている様子です。元気がないというよりは、冷静といった雰囲気を感じました』

『塩川さんありがとうございます。さあ、スターターが位置につきました。………秋を知らせる自衛隊のファンファーレが府中に響き渡ります。東京競馬場に詰めかけた13万人の観衆の手拍子に送られて、各馬ゲートインしていきます。恐らく大半の人が気にしているのは、サイレンススズカとグレートエスケープの頂上決戦ですね、梨田さ

ん』

『まさに世紀の逃げ馬が2頭ぶつかりあいますからね。グレートエスケープが凱旋門賞を回避したのは残念ですけどね、エアグルーヴとの名勝負のあと万全の状態に仕上がったと陣営は自信満々ですから。そしてサイレンススズカも毎日王冠でエルコンドルパサー、グラスワンダーを破りましたし、競馬ファン誰もが注目しているでしょうね』

『勝てば世界に、という話が両陣営から示唆されています。異次元の逃亡者は王者に変わるのか。偉大なる逃走者がねじ伏せるのか。塩川さん、ゲート入りはどうでしょうか』

『サイレンススズカは順調にゲートに入っています。全馬歓声があってもテンションはあがらず、次々とゲートインしていきます』

『現在単勝オッズはサイレンススズカが1.7倍、グレートエスケープが2.4倍、3番人気はシルクジャステイスで12.2倍と2強状態です。グレートエスケープが今2番ゲートに収まります。隣り合うライバル同士、何を思うのか。モヤの向こうでグルメフロンティアが最後に収まります。スピードとスピードのぶつかりあい、何かが起こるぞ第118回天皇賞・秋——スタートしました!』

パドックも、本馬場入場も、返し馬も。

誰とも会話をすることなくゲート入りを迎えた。

血液が沸騰して筋肉が躍動したがっているが、頭脳は冷ややかに東京競馬場の芝コーズを見てはレースのプラン——というよりは、サイレンススズカが走るであろう姿を思い描いている。

ゲート入り直前、サイレンススズカと一瞬目が合ったが、言葉は交わさなかった。

語りたい言葉はある。

だが、それより先に見せるべきは走りだけだろう。レースが終わってサイレンススズカにこう言ってみせるのだ。

『俺の方が速い』『俺の勝ちだ』と。

プリンカーで視界は遮つていようと、ひと際大きくなる歓声がスタートまで間もないことを教えてくれる。

これまでの俺は、周囲の評判を受け止めて無意識のうちに、スピードよりスタミナや勝負根性で勝負すべきとばかり考えていた。

もちろん、血統つてやつを見ればそれは当然かもしれない。

だが俺にはまだスピードを上げるための努力をし尽くしていなかったし、努力を許されてもいた。

札幌記念が終わってから黒井先生はそれはもうすごい負荷量の調教をしてくれたも

ので、2カ月とは体つきがガラリと変わったように感じる。

だから今回は、スピードでお前を上回ってみせるからな——いくぜ。

ゲートが開いた途端に前脚は地面をかき込み、後脚は土塊を蹴り飛ばした。

大歓声上がる。

スピードの乗りがこれまでとはまるで違う。

間違いなく俺は速くなった。

だが——サイレンススズカが俺の前を走っている。

(また速くなった……アイツも……)

鞍上も、先生も、今回はペースとか位置取りなんて考えていない。

サイレンススズカに全力で競りかけ、スピードとスタミナ勝負に持ち込むという競馬というものを無視した走りをしている。

グリーンのメンコをつけたスズカの半馬身後ろをぴったりとマークして追走しているが、これは明らかにオーバーペースだ。

スピードを徹底的に鍛えているというのに、すぐに千切られそうになる。

時折スタンドから大歓声上がるが、俺の目の前をサイレンススズカが走っていることくらいしかレース展開はわからない。

視界の隅で残り1000mを表すハロン棒が通り過ぎたのがわかった。

（スズカも決して楽に走ってはいない……馬鹿みたいに速いが！ 隙を見せるまで絶対に食らいついてやるッ……！）

ペースを緩めた瞬間でも、コース取りにロスがあるとか、なんでもいい。

一瞬でもスピードが上回って前に出られれば、ずっと逃げてレースを進めてきたスズカに俺を差し返すための再加速をする力は恐らくないはず。

俺はサイレンススズカの走りを見続けた。

息が上がりに、ペースを緩めそうになるたびに脚を前へ前へと出していく。

そして、第3コーナーと第4コーナーの丁度中間に差し掛かった瞬間に俺の競争本能が反応し全身の細胞に電気信号が行き渡る。

「いまだあああッー！」

「……ッ!? い、いけ、いけ！ グレ坊！ いくんだッー！」

サイレンススズカが少しだけ外にヨレた。

コーナーで外に振られれば距離のロスはもちろん、当然減速する。

大チャンスに見逃しはあり得なかった。

減速した隙に息を思い切り吸い込むと同時に、内ラチとサイレンススズカの間に身を滑り込ませる。

ケンちゃんの怒号めいた声に後押しされながら残り約600mの最後の直線へ飛び

込んだ。

「ハツ、ハツ、はあっ……ハツ……ははは……！」

もう限界だ。脚は棒のようだし、まっすぐ走るのも難しく、外にヨレながら進んでいる。

ケンちゃんが右のトモを鞭で叩いて教えてくれた。

まっすぐ走る！

まっすぐ走る！

まっすぐ前だけを見て走る！

大歓声の中、一面に広がるターフを切り裂いて駆け抜けていく。

あのときのダービーのように！

俺は天皇賞・秋を最速で駆け抜けた。

「ぶはあーっ……はあっ……はあ……！」

疲れた。苦しい。ちよつとした酸欠状態だ。もう走れない。

2000mだから耐えられたが2400mだったらこんなのスタミナが持つわけがない。

もし次のジャパンカップでサイレンススズカが出てきたらどうやって勝てばいいのだろうか。

「はあ、はあ、はあ……でも、でも、勝てた」

嬉しい。身体がぶるぶると震えて、嘶いて後ろ脚で立ち上がったままスタンド前まで歩いていきたいくらいだ。

今それをやったらひっくり返るだろうが。

「勝ったぞサイレンススズカ！ まだ、お前に最強の座は譲らな——い……？」

振り返った先に、サイレンススズカはいなかった。

俺より後に入線した馬はたくさんいる。

オフサイドトラップ、ステイゴールド、ブライトやジャスティス、サイレントハンターも、走り終えた疲労感で一杯になりながらもちやんと、いる。

だというのに、俺が勝ち誇ってみせたい相手だけが、どこにもいなかった。

「——ッ!？」

電光掲示板に表示される5着までの馬番にも『1』がない。

観客の喜びの中にあるどよめき混じりの声で、首に死神の鎌をかけられたような寒気が背筋を走り抜けた。

ここから1分もかからないような場所に、彼は、いた。

「どつして……」

俺の脚なら、スズカの脚なら、あつという間に届く場所だというのに、スズカは快速

も見せずに止まっている。

「どうしてお前が……ここにいないんだ……」

サイレンススズカと俺の、600mにも満たない距離は——闇の静寂に瞬く星のよう
に、遙か遠く、離れてしまっていた。

第29話 S i l e n t S t a r 完

第29話EX Silent Star

天皇賞・秋の前夜。

東京レース場の芝コースを私は歩いていた。

ここ数日は晴天が続いており、芝は乾いている。

明日も晴れの予報で、良バ場で行われることは間違いないだろう。

いよいよ明日、ライバルたちとぶつかることになる。

サイレンススズカ、エアグルーヴ——共に私に近い世代の中では最強といわれるウマ娘たちと。

宝塚記念では届かなかった。

悔しかったし、悲しかったが、それと同じくらいワクワクした。

勝つことこそが好きだったのに、気づいたらより強い相手と走り、そして勝利を掴むことが好きになった。

「私も変わったな」

それが良いか悪いかでいえば、良いことだ。

トレセン学園に来たばかりの頃はガムシヤラで、目指す場所や走るために必要なこと

もよくわかっていなかった。

今は、それが少しだけわかるようになった。

だが——変わらないものもある。

「スズカにも、エアグルーヴにも、勝つ。頂点の座を手に入れる……それは変わらない」

「それは譲れんな。エスケープ」

「やつぱりここにいたのね」

振り返ると、ジャージ姿のエアグルーヴとサイレンススズカが芝コースにやってきていた。

二人とも薄く笑みを浮かべ、リラックスしているようだった。

「どうした、眠れないのかね？ 私としては寝不足で挑んでもらえる方が有利になるから助かるが」

「たわけ。昔ならいざ知らず、今の貴様は全力でレースに出走してほしいと願っていることくらいわかっている。下らん嘘をつくな」

「すっかり私を知られてしまっているな」

「当然だ。もう貴様の背を見る訳にはいかん。挑み、挑まれてきてそんなことに気づけない私ではない」

「そうか。スズカはどうだ、調子は」

「変わりないわ。私はただ、先頭を走るだけ……もう、二人が相手だろうと、負けない」
全員、勝ちたいという思いは同じ。

それを再確認すると、三人で笑いあつてから、並んで東京レース場を後にする。
会話はまるでない帰り道だったが——不思議と心地よい時間だった。

決戦は嵐の中で——なんてことはなく、予報通り快晴で行われる。

集まった観客は拍手や歓声を送つて天皇賞・秋が始まるのを今か今かと待ちわびていた。

地下バ道を歩きながらも聞こえてくる声に、心臓の鼓動が早くなり、手がじつとりと汗ばんでくる。

隣を歩く二人も同じなのだろうか。

私は勝負服のジャケットを羽織り直しながら、二人に宣言した。

「——本当はレースが終わるまで言わないつもりでいたが、今言うべきな気がしたから一度だけ言うよ。……ありがとう。二人がいたから、私は速くなれた。そして、これからも速くなる」

「……ふふつ、どうしたのエスケープ。かしこまっちゃつて」

「私たちを動揺させようともいうのか? ……だが、切磋琢磨するライバルというも

のは大切なことには同意する」

「ええ、そうね。私も今まで、何度も色々なウマ娘の背中を見てきた。でも、今日は——
誰の背中も見えないわ」

「残念だ、スズカ。今日は私が勝つ。そして、理想の姿というものを世界に知らしめてみせる。勝つのは私だ」

三人並んでコースへ歩いていく。

地下バ道の出口は光で満ちていて、これから始まるレースの結末のように、先が見えなかった。

○○○

最後にグレートエスケープに言葉をかけたとき、彼女の出来は万全だったように見える。

合宿で誰よりも徹底的に鍛え上げたのはグレートエスケープだと、トレーナーたる自分がよくわかつている。

「誰が勝つと思う？」

「やっぱりサイレンススズカ！ あのスピードを上回れるウマ娘はいないだろ！ エアグルーヴの最高速に加速するための瞬発力や切れ味、グレートエスケープの粘り込むスタミナと勝負根性はすごいがスピードで上回られたら届かないしな！」

「だよなあ、サイレンススズカが圧倒的な勝ち方をするかもしれないよな！」

観客の多くはサイレンススズカが勝つと予想しているらしかった。

確かに彼女の速度は現役どころか歴代のウマ娘より速いかもしくない。

短距離で活躍するウマ娘ならば匹敵するウマ娘もいるだろうが、天皇賞・秋が行われる2000mだと唯一とすらいえる。

それでも、グレートエスケープが勝つと、確信を持って宣言することができた。

——グレートエスケープ！ 絶対に勝て！ 勝つのはお前だ！

向正面のスタート地点目掛けて、あらん限りの声援を送った。

「——相棒？」

「グレートエスケープ、早くゲートに入りなさい」

「あ、ああ、すまない」

ゲートに入りながら、スタンドに視線を一瞬向けて、前を向いた。

まさか相棒の声が届いたのだろうか。

私は馬鹿な、と笑った。

「そんなもの、ずっと私に届いているよ」

ガコン、という音を立ててゲートが開いた。

歓声がどつと湧き起こり、ターフへ躍り出すウマ娘たちを出迎える。

私はただ前だけを見て走り続けた。

脚が軽い。そして、芝を蹴る度に小さな爆発が起こっているかのように脚が進む。

他のウマ娘を見る必要なんてない。

レースに臨めば、エアグルーヴもサイレンススズカも、凄まじいプレッシャーを放っているからこそ、どこにいても位置を感じ取れる。

「サイレンススズカのスピードには敵わない」

「エアグルーヴの切れ味には及ばない」

「二人に勝つには得意のスタミナ勝負にするしかない」

そして、今のレースの展開を見て、

「グレートエスケープはマークしようにもサイレンススズカに追いつけていない」

なんて、観客は考えているのだろう。

事実、私は向正面を走りながらスズカには2バ身近く遅れをとっている。エアグルーヴは感覚的に5バ身後方か。

確かに私はスズカより前を走り続けて逃げ切るようなスピードはない。

スズカも理屈にしろ感覚にしろ、わかってるからそうやって私を封殺しようとしている。

スズカはあくまでまだ全速力ではない。

普通の逃げウマ娘は最初に大きくセーフティリードをとって、最後に粘り込んで勝つ。または自分のペースを作り、最後に突き放して勝つ方法と、分けると二つに分類される。

このスピードを見ると前者に見えるが、実際は後者の戦い方をしている。

素のスピードが速すぎるからセーフティリードをとっているように見えるだけだ。ここからスズカはさらに加速を図るだろう。

それはきつと、第3コーナーと第4コーナーの丁度中間。

私は脚に力を込めた。

『サイレンススズカ逃げる逃げる！どこまで逃げるのか！このスピードはどうか、捉えられる娘はいるのか！1000mを通過なんと57秒4! サイレンススズカ飛ばしに飛ばしています、後続にこれだけの差が——』

一瞬、東京レース場に響き渡っていたはずの歓声が消失する。

誰もが言葉を失っているのだろう。

「あ、ありえない……!」

誰かがそう呟いた。走っているウマ娘か、観客か、あるいは先頭を走るサイレンススズカの声か。

私の、俺の勝負勘が囁いている。

——ここでサイレンススズカに加速をさせるな、と。

相棒の声が聞こえる。

——いけ、と。

頭の中ではつきり聞こえた声に導かれるまま、コースロスのない内側からではなく、外側から自分の姿を見せつけるようにサイレンススズカを追い抜いた。

(スタミナ勝負に持ち込むにしろ、私が——俺が勝つためにはこれしかなかった。スピードの世界で、一瞬でもスズカを上回ることでは、勝てなかった)

「っ……いかせない……！」

サイレンススズカがスピードを上げようとしているが差はつまらない。

加速する直前に追い抜かれたことで、再加速までにラグがあった。

そこで生まれた差をもう一度追い抜くには、サイレンススズカの脚質では難しい。

一度リードをとってしまえば、私はペースを上げることで残りをスタミナ勝負に持ち込める。

自分のペースで走るか、他人を追い抜くかどうかの差だ。サイレンススズカが私を追い抜いて勝ち切ることは難しくなった。

もちろん、後続のウマ娘たち相手に逃げ切るために、へろへろになる直前で粘り込み

を図る。

『グレートエスケープが逃げる！ グレートエスケープが逃げている！ サイレンススズカが必死に追って、中団からエアグルーヴも伸びてきたぞ！ しかしグレートエスケープだけが直線に入っている！ 坂を上って少しペースが落ちてきたか！ しかし逃げる逃げる、これは逃げ切る！ エアグルーヴ猛追、サイレンススズカは苦しくなってきた！』

スズカは私のペースに振り回されて脚が一杯になっている。

残るはエアグルーヴ一人。凄まじい勢いで突っ込んできているのがわかる。

どこまでも楽には勝たせてくれない奴らだ。

だからこそ——勝ちたいと思える、ライバルなんだ。

「うおおおっ！」

「はああああっ！」

「おおおおっ！」

『グレートエスケープだ、グレートエスケープ！ 粘って粘ってグレートエスケープ！
今先頭でゴオオールツ！ 府中2000m、超高速レースを勝利したのは逃亡者、グレートエスケープです！』

そして私は、願いをつかみ取った。

天皇賞・秋を走り抜けた喜びが爆発して、何度も何度も、噛みしめるように拳を握って小さくガッツポーズを作った。

最高の走りが最高の場面で出たと自分でも断言できるレースだった。

「……おめでとう、エスケープ」

「エアグルーヴ……」

息も絶え絶えながらに、エアグルーヴが手を差し出してきた。

祝福の言葉と、悔しそうな表情。

私はエアグルーヴの手を握る。

「……今日は私の勝ちだな」

「ああ。今日はお前の勝ちだ」

握手する私たちに歓声が上がった。

そういえば、スズカはどこだろうか。

振り返ると膝に手を着いて息を荒くするスズカがいた。

私は歩み寄った。

「スズカ」

「エスケープ……おめでとう」

「スズカ……ああ、私は勝ったぞ。スズカより、前でゴールしてみせた。最強の座は譲ら

ない」

「そうね。でも……次は勝ってみせるわ。そのときはまた一緒に、走ってくれるわよね？」

そのとおりだ。そう答えようとして、言葉に詰まってしまった。

なぜか目元がツンと熱くなり、じわりと視界が歪む。

私は言葉ではなく、スズカを思い切りハグすることで答えた。

歓声が一際大きくなった。

「ちよ、ちよつとエスケープ!？」

「何度でも……何度でも走ろう。私がここまで走れたのは、ライバルがいたからだ。また、一緒に走りたい」

「エスケープ。スズカが困っているぞ、離し、うわあっ!？」

「エアグルーヴも! また走ろう!」

「わかった、わかったから離せ! まったく……」

「エスケープしたら……ふふっ」

私はいつまでも、エアグルーヴとサイレンススズカの二人を抱きしめていた。

——数日後。

私は相棒と共に次に出走予定のジャパンカップについて話していた。
「錚々たるメンバーだな、これは」

相棒が頷きながら出走表をホワイトボードに貼り出した。

サイレンススズカやエアグルーヴはもちろんのこと、『皇帝』シンボリルドルフ。『葦毛の怪物』オグリキャップ。『シャドーロールの怪物』ナリタブライアン。

それだけではない、『世紀末霸王』テイエムオペラオーがいて、『超光速の脚』アグネスタキオンが、『天衣無縫の三冠バ』ミスターシービーもいる。

年上たちだけでなく、年下のライバルにも『日本総大将』スペシャルウィーク、『怪鳥』エルコンドルパサー、『常識破りの女帝』ウオツカ。

まさに夢のレースといった様相で、メディアもレースへの注目度がこれまで以上のものとなっている。

「これを勝てば……文句なしでナンバーワンかな」
相棒が答える。

——君はずっとナンバーワンだよ。少なくとも俺にとつては。

「ば、ばかつ、そういうことを言っているのではないッ！ まったく……それで。次のジャパンカップで私は勝ちたい。相棒は……どうかな」

グレートエスケープが勝つところを見たい。

目を見てハツキリと相棒が宣言する。

であるならば、私も目指すところはこれまでどおり、何も変わらない。

「ならばジャパンカップで勝利してみせよう。そして、最強を証明してみせる。そうだろう、相棒」

私たちはジャパンカップで勝つために、データを集め始めるのだった。

天皇賞・秋で1着 clear!

Next

ジャパンカップで1着

第30話 蹄跡を刻んで

そのウマ娘はただそこに座っているだけで風格があつた。優美さ、華麗さ、美しさや気品を称える言葉はたくさんあるがそのどれを当てはめても安つぽく聞こえてしまうほど、浮世離れた美しさを纏っていた。

花や光に誘われる虫のように、美しいものに近づくものは出てくる。

あれほどの美人になら近づきたいと思つた髪を金に染めた男が話しかけた。

「ねえ、お嬢さんは一人？ よかつたらお茶でもどう？ 美味しい喫茶店知ってるんだけど」

尋ねられたウマ娘は目をぱちぱちと瞬かせた。

きよとんとしてから、柔らかな笑みを浮かべる。

男の生物的な欲望を隠した仮面に気がつくことなく、それでいて至つて社会的な振る舞いで誘いをやんわりと断つた。

「ごめんなさい、友人を待っているの。カフェには行けないわ」

「そっか、じゃあ、せめて連絡先と名前だけでも教えてよ！ また次の機会にでも行きたいんだ」

「えっと……」

ウマ娘は困ったように笑った。

逃げようと思えばいくらでも逃げられるが、待ち合わせが近づいている今、場所から離れてしまえば友人が困ってしまう。

かといって、強気に迫ってくる男を上手くいなす術を彼女は持っていないかった。

「ねえ、次空いてる日とかかでもいいからさあ——」

「なんだア、ためエ……ツレになんか用か？」

「先程彼女は断っていたように聞こえたが、まさか無理矢理誘っているわけではあるまいな」

「あつ、シャカールにグレ！」

ナンパをしていた男は思わずたじろいだ。

女性にしては大きな体格の二人が明らかに警戒の色を視線に込めながら睨みつけてきている。

片方はピアスを開け、つり上がった瞳と眉が好戦的な印象を抱かせるウマ娘で、今にも噛み付いてきそうな危険な雰囲気があった。

もう片方はダークグレーのパンツスタイルスーツで、パイロットサンングラスをかけているから表情は伺えない。

だが胸ポケットに入れた手から取り出すものは不吉なものだと、男は予感していた。ちなみに断っておくがウマ娘を怒らせることは人間にとつてかなり危険である。

基本的に温厚な種族とはいえ、私の顔も三度までという言葉があるように、怒る時は怒る。

ナンパをした男は冷や汗と作り笑いを浮かべながら、その場を後にした。

「つたく……おいファイン、寮から一緒に出ればよかつたらうが」

「そう言うなエアシヤカール。姫様たつての『どうせなら待ち合わせもやってみたい！』という願いだぞ」

「グレ！ テメーもこいつを甘やかすな！ 世間知らずのこいつがなにやらかすかわかつたもんじゃねえぞ」

「ああ、シヤカールひどい！ 今日行くラーメン屋さんの美味しい食べ方教えてあげないよー！」

「別にいいわ。ネットで調べりゃあつたからな」

「さすがエアシヤカール、ブレないな……ファイン、とにかく大丈夫だったか？」

サングラスをとつたのはグレートエスケープ。

スーツスタイルはマフィアを思わせるが、すらりと伸びた足に颯然とした顔立ちがモデルめいた様相を呈している。

黒い髪を後ろで一纏めにし、パイロットサングラスを額にかけた姿はこれからラーメンを食べに行く姿とは思えない。

グレートエスケープとは対照的にジーンズにパーカーというラフな格好のエアシヤカールは当然突っ込んだ。

「グレ、てめえはなんでそんなカツコなんだ……？ ラーメン食いに行くって言ってたのに不釣り合いだろ」

「少し調べたんだがこの時間、スーツ姿の会社員が多いらしい。スーツの方が溶け込めるから正体がバレないんじゃないかと思ってるな」

「えっ、そうだったの!? どうしよ……私の服、結構カジュアルなやつにしちゃった……」

「アホか！ そんなリーマンいてたまるか、マフィアとかヤクザとかだろ、その格好は！ ファインも別にあれはドレスコードでもなんでもねエよ！」

先程まで粉をかけられていたウマ娘はファインモーション。エアシヤカールのツツコミに「そうなんだ」と感心している。

カジュアルな格好というが、ファインモーションも着飾っており、少なくともラーメンを食べに行く格好ではないのだがツツコミの手が追いついていなかった。

「というかファインはともかく、グレ、お前はラーメン屋に行かないような奴じゃねえだ

ろ」

「今日行く店は初めてだが、ラーメン屋には良く行く。だがいつもこの格好だったぞ？」
「マジかよ……」

ラーメン屋に行くたびに周囲を威圧しまくっていたのだがグレートエスケープは全く気づいていなかった。

(こいつ変なところでズレてるんだよなア)

エアシャカール、早くも諦観。

今更着替える訳にもいかず、三人はラーメン屋に行くことにした。

「楽しみだね、すっごく美味しいって評判らしいよー」

「ラーメンラボラトリー(※日本全国のラーメン屋の評価をまとめたウェブサイト)では90点以上ついているから相当な客が来ているのは間違いないだろうな」

「私も楽しみにしているよ。やはり味も大切だが雰囲気や店員の振る舞いも中々楽しいものだからな」

実はこの三人、飲食店の楽しみ方はまるでタイプが違う。

フラインモーションはとにかく新しいもの、珍しいものを見たいという好奇心旺盛なタイプ。多少味がアレだろうと、物珍しさがあれば目を輝かせる。

箱入り娘ならではの視点。

エアシャカールは論理的かつ合理的なタイプ。味さえ良ければ余程でなければ店の綺麗さや店員の態度などは気にしない。

目的があればそれさえこなせば良いと考えているエアシャカールらしい。

そしてグレートエスケープは、実は『風情』を気にするタイプだった。無論、ラーメン屋に竹林を求めるようなことはなく、ただその店が持つ独特な雰囲気や環境を楽しんでいる。

ええ格好しいなグレートエスケープならではの感性でもあった。

そして三人が選んだラーメン屋の名前は——ラーメン『ウマジロー』。

超こつてり系ラーメンにして殺伐とした店内の雰囲気がとても飲食店とは思えないところが魅力のラーメン屋だ。

健康に対して親の仇とばかりに体の悪いものを、体に悪い量入れて食べる。

胃腸だけでなく肝臓や腎臓、心臓にも良くないであろうラーメンだが、暴力的なまでの味が依存者を多数生み出している。

結果、店には既に長蛇の列ができていた。

「すごいならんでいるな」

「わー、そんなに人気なんだあ」

「ペースを見てると15分くらいで入れそうだけ」

「私、そういうえば列に並ぶって日本に来て初めてなんだあ。段々匂いが近づいてくるのはすごいわくわくしちゃうー!」

「意外だな。姫様なら有名レストランに通っているかと」

「うーん、大抵シエフが家に来ちゃうから並ぶことはないかも……」

「そういうものなのか……すごいな」

「こんな調子で話していれば15分もあつという間で、3人は店内に入る。

「すごいなあ……あ、メニューください」

「ここは食券だ。こういう券売機で買って渡すんだよ」

「そうなんだ! おもしろーい! じゃあお腹減ってるから……ラーメン(大)で」

「私も同じものにしよかな。しかし黙々とみんな食べているな……ラーメン屋に複数人に来るものではないと思うが、随分と静かだ」

(オレも腹減ってるから同じでいいか)

「お客さん……私語はあまりしないでくれねえか」

店長が3人に声をかける。

大柄でスキンヘッドの店長の低く唸るような声に、3人は小さく返事しつつ、通された席に座った。

「マナーに厳しいお店なんだね……やっぱりスーツの人も多いし、こんな格好はまず

かったかなあ」

「姫様、よく見ろ。ラフな格好をした客は他にもいる。気にする必要はない」

「そんなこと言いつつグレはスーツじゃねエか」

小声でやり取りしていると、周囲の客が店員に食券を渡しながら注文していた。

「カタメコイメオオメヤサイアブラニンニクカラメマシマシ」

「!?」

「!?」

「!?」

突如発された謎の呪文を聞き、3人に電流走る。

エアシヤカールはスマホで慌てて店名と調べ始めるが、店長が無言で指さした「店内での携帯・スマホ禁止」のポスターを見て、そつと仕舞いつつ焦りを隠せないでいた。

グレートエスケープは店内にさりげなくポスターを探すが見つからない。答えは沈黙——グレートエスケープは黙っていればなんとかなるだろうと考えた。

そしてファインモーションは、目を輝かせていた。

「ねえねえねえ、今のなんだろう、私すごく興味あるな」

小声で隣のエアシヤカールとグレートエスケープに語りかける。

(まずい)

(やべエ)

発言を聞くに、恐らくトッピングの類だろう。

そしてこういうときのファインモーションは周囲の人間も巻き込んで興味あることに邁進することが何度かあった。

「いやあ、私はそんなに……」

「初めての店で冒険するのはロジカルじゃねえしな」

「そっか……そうだよね……三人みんなで新しいものを共有してみたけど……また一人で来たときにするね……」

シユン、と落ち込むファインモーション。

エアシャカールとグレートエスケープはそれぞれ手を挙げた。

「カタメコイメオオメヤサイアブラニンニクカラメマシマシ」

「カタメコイメオオメヤサイアブラニンニクカラメマシマシ」

「2人とも……！ わ、私も同じのください！」

友情を選択したように見える2人だが賢しいタイプだけあって、全くの無策ではなかった。

少し離れた客が大ラーメンを食べているのが見えた。

あの量であれば、ウマ娘ならば、食べられる。

ウマ娘の胃袋は強靱、一部のウマ娘は想像を絶する食事を誇っているが、並のウマ娘でも大抵はよく食べる。

そんな打算混じりの友情を見せつけた2人の前に置かれたのは、タワウのように積み上がったモヤシやにんにく、背脂——麵が見えない。

□

□

「わあ、こんなにたくさん出てくるんだあ……すごい、いい香り。いただきます」

マジかお前。

言葉を失ったグレートエスケープとエアシヤカールの驚愕の表情をよそに、ファインモーションは恐れることなく油とにんにくと暴力の真つ只中に飛び込んだ。

「おいしい！ 箸が止まらないよ！」

嘘だろ。

ファインモーションはキラキラとした笑顔で野菜を口に含み、底から麵を引きずり出してはすすっていく。

これがファインモーションか。

異国に舞い降り、どんな敵がいようと恐れず己の力が赴くままに蹂躪してみせる王者の風格。

ヤサイアブラニンニクマシマシラーメンに対してもその威風は損なわれていなかった。

姫などという可憐で無力な存在ではなく、力をもってねじ伏せる資格を持つ王、それがファインモーシヨン。

両隣に控える取り巻きと化した2人は怒りすら覚えていた。

なぜあの客の大ラーメンとこんなにも量が違うのか。注文ミスか？ レビュー最低点をつけなければいけないのか？

悩んでからそう時間が経たずに答えが出た。

少し離れた客の元に運ばれたラーメン。

「小ラーメンお待ち〜！」

馬鹿な！

大ラーメンと思っていたそれは、小ラーメンだったのだ！

小か大しかないのに……気づけるかそんなものッ！

2人は叫びたかったが確認しなかったこちらに非があるのは事実。

多少残すのはやむなし。

そう思った2人だが周囲からの話声が聞こえてきた。

「あれ、エアシャカールにファインモーシヨン、グレートエスケープじゃないか？」

「すげえ本物だ。ラーメン食べに来るんだな」

「体重増やすためとかかな。でもあんなに食うのか……やっぱりGIウマ娘は違うぜ。飯もたくさん食えるってことだな」

「お客さん、静かに」

「あつすみません」

（残せねエ……！）

（残しづらい……！）

真ん中のファイションは幸せそうな顔でラーメンを頬張っている。

いい加減早く食べなければ伸びてしまう。

（こんなラーメンなんだってんだ……！）

（たかがラーメンごときに……！）

2人は割り箸を啜えて割るやいなや、野菜と背脂とニンニクの山に猛然と飛び込んだ。
だ。

（二冠ウマ娘がビビってられるかってんだ！）

（私とてダービーウマ娘、あのときに比べれば……！）

「——いける！」

味は悪くない、それどころか美味しい！

こつてりとしていて一見胃もたれしそうだが、決して雑な味付けではなく、脂だろうと食べやすいように野菜の甘みやスープのkokを感じることが出来る。

このまま食べきつて――

「無理い……………」

「無理……………」

「美味しい……………実家のみんなにも食べさせてあげたいなあ」

エアシャカールとグレートエスケープはまだ中間だというのにペースが落ちている。

反対にファインモーションは抜群の手応えで第4コーナーへ差し掛かる勢い。

これはお残しも止む無し、2人がそう考えたとき、すぐ後ろに並ぶ2人組の客の話し声が聞こえてきた。

「ウマジローのラーメン屋のラーメンがなんで大盛りなのか知ってる？」

「聞いたことある、有名だよな！ 若い頃大将が腹を空かせて、今にも倒れそうというときに近くのラーメン屋の店主が格安で大量に飯を食わせてくれたんだよな！ それで店主になったら若いやつにたくさんラーメンを食べさせてあげたいから大盛りにするんだろ？ 赤字覚悟で！」

「お客さん、お静かに……………」

エアシャカールとグレートエスケープ、再度ラーメンの山に突入！

人情味溢れるエピソードを聞いてもなお食事を残す酷薄な真似は、2人にはできなかった。
そうだ。

トレセン学園で走るウマ娘は、簡単には諦めない。

苦しくなる時もある。泣きたくなる時も、喚きたくなる時も、当たり前散らしたくなる時もある。

それでも、何度も立ち上がり、再び走り出すのだ。

どんなに苦しくても、栄光は走らなければ掴めないのだから——！

「ごちそうさまでした！」

「ゴチソー……サン……」

「ごちそうさま……うぷ」

無事、完食！

ファイモンモーションはお腹いっぱいだと笑顔を浮かべ、残りの2人は小さく震えながら、そうだな、と小さく返すのが精一杯だった。

食べ終えたのを見計らって店長が3人に声をかける。

「嬢ちゃんたち……ウマ娘だと思うが、トレセン学園の生徒かい？」

「はい、そうなんです。仲良しの3人で来ました」

「そうか……最近はずいぶんと見ていないが昔はよく見てたっけな……トレセン学園の生徒ならこんなんじゃないだろう、デザートにはこれだ！ この店特製のバニラアイス！ 脂を口の中でさっぱりさせてくれ」

「わあ、ありがとうございます！ あ、カードでもいいですか？」

「無料だよ。そっちの2人も食べな」

「あ、ありがとうございます……」

「さ、サンキュー……」

アイスすらも手作りだとは、客へ提供する料理に対するこだわりの深さを感じられた。

バニラアイスの甘さと冷たさは口の中に残るニンクや脂を洗い流してくれるだろう。

ラーメンを食べた後に是非とも食べたいもの。

だがしかし！

(量が……)

(多い……)

バニラアイスがどんぶりに見紛う食器に入っている。とてもじゃないが胃袋に納まる量ではない。

だが気難しそうだった店主が、完食してからは表情を少し緩ませてサービスしてくれたのだ。

グレートエスケープとエアシャカールは、今度はアイスの山に飛び込んだ。

そうだ。ウマ娘の戦いは、折れぬ限り、決して終わらないのだ——！

腹をいっぱいにした3人はトレセン学園に帰ってからは、体重計に乗って戦慄したのは言うまでもなかった。

×××

天皇賞・秋を終えて、俺は喝采を浴びた。

タマモクロス以来、史上2頭目の同一年天皇賞春秋制覇——秋の天皇賞が2000m になってから、スタミナとスピード、そして勝負強さを兼ね備えていないと勝てない栄光になった。

外国産種牡馬全盛の中で輝いた内国産の血統。

競馬ファンは俺を最強だと讃えた。

それ以上に語られたのは、サイレンススズカに起きた悲劇だった。

天皇賞・秋でレースを終えることなく故障を発生、そして予後不良の診断が下り、安

楽死——スポーツ新聞は『神が嫉妬した』『王座へ手がかかった馬』『運命があるならば、なんて惨い』それぞれ残酷な結果に慟哭を上げていた。

「お前も不運だなア。俺、サイレンススズカが怪我しなくても絶対勝つと思ってたんだけど……全員がそう思ってるわけじゃないみたいだ」

調子を整えるための曳き運動をしながら、白村がぼやいた。

俺は黙って歩く。

「100回走つても100回グレ坊が勝つと思ってたんだ。少なくとも、あの天皇賞は。なのになあ、怪我しなければサイレンススズカが……なんて言うやつが多くて。嫌になる」

俺は黙って歩く。

蹄が砂をかいて、足跡を作る。

一歩ずつ、一歩ずつ。

その途中で、他の馬の足跡が上書きされていく。

ここを通ったのはどの馬だろうか。ひよっとしたら一緒に走ったことがあるやつかもしれないし、その血縁かもしれない。

後ろを振り返れば、足跡がたくさんになっていた。

「GIはこれで……5つか？ あと2つで皇帝シンボリドルフに並ぶ。ジャパンカッ

プは先生が出ないって言ったから、有馬記念か……ここ勝てばあと一つ。でもなあ……5歳だもんなあお前。引退しちゃうのかなあ。せめて8勝すれば誰もお前を疑わないんじゃないかな……うーん、来年も走らせてくれないかな、橘オーナーは」

俺は黙って歩く。

俺が歩む度に、他の馬の蹄跡が消えていく。

俺の蹄はそれほど大きかっただろうか。俺の蹄跡は、それほどまでに何かを残すものだったろうか。

きつと、俺の歩んできた跡も、このあと歩く馬たちによって消えていく。その馬たちの蹄跡も、消えていく。

本当に、そうだろうか。

もしも俺が残す蹄跡がもっともつと大きければ、蹄跡で上書きすることは難しい。

「橘オーナー、お前のごと大好きだからなあ。サイレンススズカを見てナーバスになっちゃうかもしれない……女だしな、ビビって走らせたくないとか言うんじゃないだろうか。やっぱり成金のそのまた棚ぼただしな、種牡馬にして金を稼ごうとか思ってるギヤアアアツ！」

俺は黙って歩くのをやめて白村の足を軽く踏んだ。

軽くといっても馬体重500kg以上あるのだから相当痛いだろう。

爪は割れただろうが骨まではやっていない。

白村に刻まれた最強の馬の蹄跡はしばらく残るだろう。

「おま、おまつ、いたい……ぐうぐう!! 俺だつてお前にもつと走つて活躍して欲しいんだよオ……!」

それがわかるから爪で済ましたんだ。本気だつたら蹴りくらいは入れてやったところだ。

八つ当たりの気持ちがないといえれば嘘になる——俺の中から天皇賞・秋のことはまだまだ消えていなかった。

ギロリと白村を睨むと彼は喉を鳴らして、再び歩き出した。

俺は再び黙つて歩き出す。

「けどサイレンススズカが逝つちまつた今、社来グループはお前を種牡馬につて躍起になつてゐるらしいぞ。今はトニービン、ブライアンズタイムの産駒が走りまくつてゐるが、サンデーサイレンス産駒もバシバシ出てきてゐる。ウチのスペシャルもそうだし……：そうなる外血を入れたいんだろうな。GI5勝、それもクラシックデイスタンスで活躍した馬。そしてこの前のサイレンススズカとやり合つたことでスピードもあると、確信してたんだろうな……橘オーナーにオフアーの話をしまくつてゐるだろうよ。このまま有馬記念をラストランに引退、種牡馬入り……つて筋書きで」

サイレンススズカ——あいつは小柄だったから、蹄跡は大きくないかもしれない。だが、俺の眼と脳に焼き付いた蹄跡は到底消えるものでは無かった。

だが、俺がいくらそれを訴えたところで、誰も聞きはしない。

人間はシビアだ。結果を見て判断するだろう。

それと同時にロマンチストでもある。もしも、を想像して物事を語るだろう。

(ダンスパートナーさん……あのときの走りと思いが、今でも俺にはあるよ)

ダンスインザダークやマヤノトップガン、そしてサイレンススズカ——他にもたくさんの優駿たちが消えていったが、蹄跡を残していった。

その蹄跡を大きくするには——

(——勝つこと。それしかないんだよな、ずっと)

俺が負けた馬。

俺が勝った馬。

どんな奴だろうと、決して風化させないように、俺は走り続ける。

だが、時々考える。

元は人間だった俺がなぜサラブレッドになったのだろうか、と。

最初はあるがまま受け入れていたが、多くの人や馬とかかわることで、少しずつだが考えるようになっていた。

俺が生まれた、意味について——そして、何をすべきか、と。

〇〇〇

「グレートエスケープは天皇賞・秋をレコードで走った反動を考えると、ジャパンカップを回避して有馬記念を走ります。怪我などはしてませんし、休めば充分な状態で有馬記念に出走できます——という話だけ聞きましたんやないですよ、橘オーナー」

その言葉に、橘恵那はこくりと頷いた。

黒井には嫌な予感が半分と、良い予感が半分、それぞれ脳裏に浮かんだ。

橘恵那が口を開く。

「……グレートエスケープを引退させたいんです」

「そうですね」

嫌な予感と良い予感が同時に当たってしまった。

ホースマンとしての理想を追い求める自分がそれはダメだと言う。ホースマンとして現実的なことを語る自分が当然ですなど頷いた。

「でも、どうしたらいいか……競走馬登録を抹消すれば引退というのはわかるんですけど、その後は……どうしたらいいのか、と。一昨年の姉からの指示も『黒井先生に聞け』とだけで」

黒井は言うべきか、言うべきでないか迷ったが——馬はあくまで馬主のもの。

事実だけを口にした。

「実は社来スタリオンステーションから種牡馬入りのオファーが来ています。シンジケート込みで」

「シンジケート……ですか？」

種牡馬に対するシンジケートの内容をかいつまんで説明し、続けてシンジケートの内訳についても話した。

一緒に渡された書類を読んで橘恵那は目を白黒させた。

「じゅ……じゅうおくえん……10億円ですか？」

「シンジケートを受け入れればグレートエスケープは社来スタリオンステーションで種牡馬入り、橘オーナーにはこの値段が支払われます。」

シンジケート会員であれば種付けの権利や配当を得ることもできる……もちろん橘オーナーは馬主資格を持っていないから、競走馬を持つことはできませんが……シンジケート会員になって、その分の種付けの権利を毎年余勢株として売っても可能です」

※このあたりからは読み飛ばして貰っても作中の展開を理解するのに問題ありません。

「チヨリーツス！ ウチは通りすがりのフツピなギャル！ 時代が合わないところとか

たくさんあるのマジウケる。色々調べてみたけどブラックボックス的などころもなきにしもアラブって感じでTBS。とりあえずこの条件でグレっちがシンジケート組んだ場合の想定で妹ピが貰える額とか色々話していくからよろたん！」

「10億円を60口で割ると1口約1600万円。種付け料は後の衝撃さんとか大王さんとかを見てみると大体1口あたりの15〜17%、とりあえずここは15%で計算するよ！」

すると……240万円！ は？ ウチのグレっちに種付けするなら1000万円持ってこいよそんなナシよりのナシだわ」

「ちなみにゴルシちゃんもシンジケート総額は同じくらいで種付け料300万円といわれてんぞ！ このプリチーなゴルシちゃんが300万円とか安いからギザ10万枚持ってこいよ！」

「ベツケンバウアーだから話戻すわ。」

グレっちが種付けを150頭に行つたとする。すると60口のシンジケート会員以外も種付けしてんね？ この部分は余勢株ね。黒井センサーが言つてたヤツ。150—60で90頭ぶんの種付けをしたわけね。グレっちマジやばくね？ 絶倫やん。まあなんつーかあれだね、エロい。

それで90頭に種付け料の240万円をかけるわけよ。すると240万円×90頭

分Ⅱ2億1600万円。さらに会員の数である60で割ると——360万円。

つまり諸経費引いたとして1口持つていけば300万円の収入が毎年得られるって訳。種付け料も付け足すと実質500万円以上だね！

もちろん産駒の活躍や種付け回数で金額は増減するけどグレっちの子なら全頭三冠とるから種付け料爆上げFooo！」

「いや、足んねえだろレース数的に考えて……ゴルシちゃんの明晰な頭脳働かせなくてもわかるわ」

「それな。なんつーか結構しつかりした条件で種牡馬入りしませんかって妹ピは言われているわけ！ メンデーな話でめんご。ふつピギヤルの解説おわたにえん！ ……グレっちの子供たち、見てみたかったなあ……」

※読み飛ばしゾーンここまで。

「と、いうわけです。悪い条件ではないでしょうな……決して良血ではないですが、ここまで走った頑丈さや、スピードとスタミナを兼ね備えた点、そして馬体重も500kg前後と大きすぎない馬格が馬産地で評価されたんでしょう」

「……お金は、どうでもいいんです。本来は姉が得るはずのものでしたから……でも、この前の天皇賞で……」

やっぱりか、という言葉が黒井に浮かんだ。

普通の馬主であれば、予後不良は悲劇的とはいえ起こるものと考えられるだろう。

しかし、橘恵那は競馬界限に詳しくない、一般人に近い感性の持ち主だ。

姉の忘れ形見の馬がもしも事故で亡くなったらと考えた場合、あまり走らせたくない
と考えるのは当然だ。

ましてや引退するための条件も整っていると来たら、普通の馬主でも引退させるだろ
う。

「……まあ、仕方ないですな」

グレートエスケープも5歳、ここが潮時だろうという気持ちもあった。

GIを5勝、ダービーに天皇賞……誰も文句はつけないだろう。

しかし橘恵那は、引退と断言はしなかった。

「姉だったら……どうしたかったんでしょうか。姉とはずっと一緒に生きてきました
が、競馬のことは全然わかりません。姉がどれだけ好きだったのかも、何を考えていた
のかも……姉は、こんなとき、引退して欲しいと思うんでしょうか」

あくまでオーナーは橘馬奈だというスタンスを彼女は崩さないらしい。

律儀なことだと、黒井は感心した。

10億円は決して安くない額だ。馬主は総じて金持ちだが、この金額を無視できる馬

主などほぼいない。

決して資産家、富豪の類いでは無い橘恵那にとつては目がくらんでもおかしくない金額だというのに。

黒井は、橘恵那の言葉に対して口を開きかけてから、別の言葉を口にした。

「橘オーナー……お姉さんからは何も聞いていません。預託料などについては遺されていますが。そして、私に故人の思いを代弁することはできませんよ」

「そう、ですよね。すみません……」

もし仮に、橘恵那が引退し種牡馬入りを選ぶ選択をしたとして、それを批判するホースマンはいないだろう。

競馬はスポーツであり、ビジネスだ。

黒井も種牡馬入りを選択することを軽蔑なんてしないどころか、当然とすら思っている。

そしてグレートエスケープの子供たちをまた預かりたいとも、考えていた。

だが、橘恵那はそうではないらしく、引退させましょう、と答えるためにはまだ何か引つかかっている。

「橘恵那オーナー……馬はあくまで馬主のもの。そして、グレートエスケープの今の馬主は貴方です。貴方が決めるほかありません」

「グレートエスケープの……」

種牡馬入りに関する書類に目を落とす橘恵那。

それを見ながら、黒井は席を立った。

「なにも今日決める必要はありません。また今度、電話でもいいですから……簡単には決められる話ではありませんからね」

「……いいえ。私は、決めました」

橘恵那は種牡馬入りの書類を持つと、一息に破いてしまった。

「——姉だったらどうしたか、考えたけどわかりませんでした。でも、私は……まだ、グレくんが……グレートエスケープが、走るところを見たいと思いました。だから……まだ引退はしません」

「そうですか……そうか、そうか」

黒井は再び席に腰掛けた。そして、橘馬奈から遺言として渡されていた文書の内容を思い出していた。

『グレートエスケープ号が種牡馬入りできるなら、5歳までに引退させてください。お金を望むなら、きつとそちらの方がお金は多く残してあげられるでしょう。しかし、自分から現役続行の希望を妹が言い出した場合——彼女の希望を通してください。妹がグレートエスケープを、競馬を、それだけ好きになったということでしょうから』

姉の橘馬奈は金とグレートエスケープの未来について、深く心配していた。

妹が金を望むのならば、最も利益が出るようにしてほしい、と。その代わり、グレートエスケープが苦しめられることもないように、とも。

しかし今、橘恵那はグレートエスケープの走る姿に魅せられ、高みを目指して羽ばたくことを望んでいる。

だったら、やるべきことは一つだけだと、黒井は頭を下げた。

「ありがとうございます。グレートエスケープはもう1年……見させて欲しいと思っています。まだ私に、預けて貰えないでしょうか」

「はい。是非、よろしくお願いします」

嘘偽りのない本音でいえば、グレートエスケープをまだ走らせたかった。

種牡馬としてではなく、競走馬として、まだまだ活躍できると。

「では有馬記念のあとも、現役続行ということ……来年の話になりますが、大目標は天皇賞・春の連覇としましょうか」

「……いいえ。その、私も色々調べてみて……去年行けなかった……か、海外遠征に……行つて欲しいんです」

「……！ 海外、それも欧州やアメリカのG I制覇は日本のホースマンの夢です。それでも、聞いてみたい……何故ですか」

「——グレートエスケープに世界一の馬になって欲しい。世界に知られる名馬になって……姉の名と、グレクンの名をいつまでも遺したいんです」

「海外遠征はとにかく金がかかる。輸送費、滞在費、人件費……簡単に数千万円の費用が飛びます。勝つなら欧州に長期滞在して調教し、欧州の馬場に適応できるように鍛えなおさないといけません。滞在費も、かなりかかるでしょう。それでも、行きますか」

「そこは……グレクンの賞金を使わせてもらいます。ずっと貯めていたんですけれど……」

「わかりました。社来グループには私から連絡を入れておきましょう。怒ってもう馬を回して貰えなくなるかもしれないが……グレ坊がいい子を出してくれたら気にしませんわ。どこに行くかは、有馬記念が終わったら決めましょう」

はははと笑ってから、種牡馬入りについて書かれた書類を黒井は片付けた。

そして、書面に『引退時期についてなどは話し合いを』と書かれていることに気がついた。

「……オーナー。何も破る必要はなかったかもしれない」

「えっ……ええ？」

後日、グレートエスケープは来年は海外遠征を目指し、海外で長期滞在することが発表された。

○○○

有馬記念当日——ジャパンカップは疲労があるからという理由で回避となった。

メジロマツクイーンも達成できなかった同一GI3連覇という偉業は見送られることになったが、俺に後悔はなかった。

それよりも、黒井先生や恵那ちゃんから言われた、有馬記念が恐らく国内最終レースになるということに対して気合いが入っていた。

「貴様はまだ走るのだな、グレートエスケープ」

「そういうエアグルーヴは引退か。寂しくなるな」

「ふっ、嘘をつけ。私がいけないことでGIを勝ちやすくなって嬉しかろう」

パドックでエアグルーヴと軽口を叩き合う。

前走のジャパンカップでは惜しくも2着となり、そのまま有馬記念がラストランになるようだった。

「そうだな……まあ、どこかに逝つちまうよりは、引退して道を譲って貰えた方が嬉しい」

「……貴様は、リベンジは果たせたか？」

「いいや。だが、エアグルーヴ……お前よりは……溜飲が下がったかもしれない。一緒に走れたからな」

「そうか……グレートエスケープ。今日のレースで私は、最後だが……勝ちを譲らんとぞ」
「譲られるのはもうたくさんだ。力づくで奪い取るさ」

エアグルーヴと走るのも、今日が最後だ。

また一頭、ライバルがターフを去っていき、俺が後に残っている。

このレースを終えれば海外GI制覇を目標に、外国で調教を積んでいくことになるだろう。

「エアグルーヴが引退して、スズカもいなくなった今、俺はどうすればいいんだろうな」
そう考えると、少しだけ寂しくなって、みんなと同じように引退したい弱気の虫が顔を出してくる。

エアグルーヴはそんな俺に、厳しくも、優しく諭すように言った。

「お前はお前の使命を果たせ。それしかないだろう」

「俺の……使命か」

「ああ。私は多くの人々の期待と願いを背負い、そして応えられるように走ってきた。お前はどうか、背負うものがあるのではないか？」

なぜだか、エアグルーヴが一際大きく見えた。

実際にその願いを達成出来たのかどうかはわからないが、少なくとも己の全てを尽くしたのだろう。

そんな自信の裏返しだが、こうして言動に滲み出ている。

「そうだな。それしかないな……当たり前前のことを聞いた」

「貴様がそのような体たらくでは困る。後進が続々と現れているのだから」

エアグルーヴが視線を向ける。

今年皐月賞と菊花賞の2冠を達成したセイウンスカイ。

ここまで堅実に走り続けてきたメジロブライト。

朝日杯でレコード勝ちをし、復活を期するグラスワンダー。

去年の有馬記念覇者のシルクジャスティス。

今年のエリザベス女王杯ではエアグルーヴに勝利した女王メジロドーベル。

他にもマチカネフクキタル、ステイゴールド、キングヘイローといった優勝たちが一

年の締めくくりを飾るために虎視眈々とグランプリホースの称号を狙っていた。

「ラストランを迎える私より高い人気なのだ。不甲斐ないレースを見せるなよ。私が

勝って引退するに相応しいレースにしてもらうためにな」

「言ってる、エアグルーヴ」

今年最後のG1レースが、間もなく始まる。

サイレンススズカー——お前を悲劇の最強馬にはさせない。あくまで最強馬に挑み、散った勇者として送り出してやる。

それが今の俺の、走る意味だ。

《第43回 有馬記念 上位人気馬 単勝オッズ》

1番人気	4枠7番	グレートエスケープ	2.1倍
2番人気	6枠11番	セイウンスカイ	4.0倍
3番人気	2枠3番	エアグルーヴ	5.9倍
4番人気	5枠10番	メジロブライト	13.6倍
5番人気	1枠2番	グラスワンダー	16.7倍

『第43回有馬記念、16番ゲートにエモションが収まります。各馬ゲート入り完了……今スタートしました!』

ゲートが開くと同時に飛び出していく各馬。大きな出遅れはなく、揃ってゲートに出るとそれぞれが自分のとりたいポジションをとろうとテンポを合わせていく。

『1番人気天皇賞馬グレートエスケープがいくんでしようか、外からセイウンスカイがじわじわとハナを奪いに行きます。ついていくのは6番オフサイドトラップ、秋の天皇賞2着馬。グレートエスケープが控えて3番手です。グレートエスケープ今日は控えました、鞍上梶田健二』

「お先に行っちゃようよおッ! ここでもワールドレコード叩きだしてやるもんね!」

セイウンスカイがリードをとって逃げていく。

今年の二冠馬にてスペシャルウィークを相手に逃げ切った逃げ馬——菊花賞ではワールドレコードを達成している。

気ままに逃げさせれば捉えるのは難しい、長くスパートをかけられるスタミナと二の脚を持っていると黒井先生とケンちゃんは言っていた。

「グレ、焦るな。今日の馬場は内側が荒れて楽には逃げられない。ロスを少なく、それでいて荒れていないポジションで控えていくぞ」

了解だ。

芝生は今日のレースで内側はかなりデコボコしており、走りづらそうだ。一概にロスの少ない内枠が有利とはいえない状況で、俺はケンちゃんの手綱に従って内ラチからは離れた位置を走る。

脚元の荒れた芝生と荒れていない芝生の境目に近い場所を走りながら、しっかりとポジションをキープする。

「僕の親父はハツキリ言つて零細血統だ……僕も全然期待されていなかった。でもここで証明するんだ！ 血統なんて関係ない、俺がすごい奴だつて。成功しないつて言つた奴らを、見返してやるんだ！」

セイウンスカイは自分のペースにするため、レースを引っ張ろうとしている。

気合が入っていて、良い走りだ。

スペシャルが負けたのもわかる、だが——若い。

ましてやこの馬場では内側の荒れた馬場を避けるから、楽には走れないだろう。

よほどのスローペースにならないければ、セイウンスカイはさほど恐れる必要はない。

『ビッグサンデー、マチカネフクキタルが追従してエアグルーヴは先頭から6番手と
いったところ。それを見るようにして外にメジロドーベル、中団になってステイゴール
ド、内側にサンライズフラッグ。去年の2歳王者グラスワンダー、後ろにダイワオー
シユウ、エモシオン、キングヘイロー。シルクジャスティスとメジロブライトが後方に
いてユーセイトップランが最後方です。第4コーナーを回って最初のホームストレッ
チにかかります』

スタンド前の直線を通り、歓声が大きくなる。

馬場の四分どころを走っており、内側の荒れ馬場を避けながら走っている形だ。

「内側空いてるじゃん」

俺を含めてほとんどが内側を空けている中、サンライズフラッグがポジションを押し
上げている。セイウンスカイもリズムを掴んだのか、直線でリードを大きくすべく加速
している。

俺は4番手でじっくり控えながら、前方と後方をそれぞれ気にしながら走った。

後ろから標的にされている心配がある。

だが慌てる必要はなにもない。

内ラチびつたりのカーブであればコーナリングは少し苦手だったが、全頭が内側を空けて走っている今の状況ではカーブの小回りは少しマシになっている。

状況は俺に有利に働いている。

『セインスカイが4馬身、5馬身リードをとりながら第1コーナー、第2コーナーを回っていきます。2番手にサンライズフラッグがいてオフサイドトラップ、グレートエスケープはメジロドーベルと控える展開だ』

「もう、また男の馬……!」

「久々だなお嬢ちゃん。有馬記念に出てきて牡馬がいなのは無理があるだろ」

向こう正面に入り、近付いてきたメジロドーベルに牽制替わりに声かけをひとつ。

こちらから距離をとりたいのか、ペースを上げようとするなど、鞍上の吉原騎手と折り合いを欠いている様子だった。

気合いが空回りしているのもあるだろう。

(エアグルーヴは……落ち着いているな)

ブリンカーによって姿を完全に見ることはできないが、息遣いやオーラからいいリズムで走っていることが肌で感じ取れる。

それ以上にいいリズムを感じさせているのが、グラスワンダーだ。

2歳GIをレコードタイムで勝利し、『スパーカー』マルゼンスキーの再来といわれた今年のクラシック世代の有望株のうちの1頭。

春は怪我で全休し、復帰後の毎日王冠とアルゼンチン共和国杯では凡走するなど早熟説が囁かれていたが、今日の雰囲気からは徐々に調子を取り戻していることがうかがえる。

『第3コーナーに入り徐々にセイウンスカイのリードが詰まってきました。5馬身ほどのリードをメジロドーベルが早めに捕まえようと位置を押し上げていきます。オフサイドトラップもついていきます。グレートエスケープは持ったまま、楽な手応えです。グラスワンダー、エアグルーヴも上がっていきます、間もなく第4コーナーに入る!』
———そういえば、俺はレース中、こんなに周りが見えていただろうか。

今までのように周囲を気にし過ぎているのではなく、プリンカー越しでもなんとなく展開がわかったり、様子を感じ取れるようになっていた。

(なんだ、見なくてもわかる。走りに集中しながらでも、周りの様子がわかる。セイウンスカイは一杯になりつつある。オフサイドトラップ、メジロドーベルは仕掛けが早い。俺は外目を回って……俺がここにいれば、グラスワンダーとエアグルーヴはさらに外に回すしかなくなる……ケンちゃんもそれを考えてこつちを走らせている)

ケンちゃんも間違いなく完璧な騎乗をしているだろう。

前に広がった芝生と、内側にいる先に仕掛けた馬たちがいて、外側に広がる芝生はただ誰も視界に飛び込んでこない。

直線を向いて、ケンちゃんの鞭による合図が一つ、二つ入るのに合わせてスパートをかけた。

——負ける気がしなかった。

『第4コーナーに入ってセイウンスカイが逃げる！ しかしリードがなくなってきた！ メジロドーベル、エモシオン、そしてグレートエスケープが上がってくる、グレートエスケープがくる！ グレートエスケープがセイウンスカイに並んだ！ グラスワンダー、ステイゴールド、メジロブライトも突っ込んでくる！ エアグルーヴは少し遅れている！ 200を切ってグレートエスケープ先頭！ 大外からグラスワンダー、メジロブライトが迫る！ 間を置いてステイゴールドもやってきた！ しかしグレートエスケープだ！ あと100だ、グレートエスケープ抜け出した！ グレートエスケープ先頭で今、ゴールイン!! やっぱり強かった、天皇賞春秋制覇に続いて暮れのグランプリも制覇！ まさに最強馬です！ 夢はいよいよ、世界へ飛び立つか。2着はグラスワンダー、復活の狼煙となるか。3着はメジロブライトです。2頭とも大外から良く伸びましたが役者が違いました』

レースを終えてウイニングランをケンちゃんが行う。

去年シルクジャステイスで制したケンちゃんはこれで有馬記念を2連覇ということになる。

去年の勝ち馬と負け馬、そして今年の勝ち馬と負け馬それぞれ入れ替わっているが、鞍上だけは美味しいことどりというやつだ。

結果的に上手いことになったのではないだろうか。

『ケ・ン・ジ！ ケ・ン・ジ！ ケ・ン・ジ！』

スタンドからのケンジコールにケンちゃんは腕を突き上げてこれでもかと勝利騎手の姿を見せつけている。

天皇賞・秋ではあまり喜べなかったから、今回勝ったら思い切り喜びたいと言っていたケンちゃんはとても嬉しそうだった。

「これからは海外出走だな……グレ坊」

「そうだな。今日はお互いに完璧だったな……まさに封殺だ」

「人生で最高にうまく乗ったよ。なあ、グレ坊」

「うん？」

「俺はお前に会えて……ジョッキをやっていてよかった」

「それは——俺が引退するときに言ってくれよ」

「………違うない」

………あれ？　ちよつと言葉通じてないか？

俺は少しだけ疑問に思ったが、それが不思議だとはすぐに思わなくなった。

だつて——言葉なんか交わさなくても、レースではずっと通じ合っていたからな。

そんな相棒と、次に向かうのは超一流の戦場たる、世界の名だたるGIレースになる。きつと、強敵とぶつかり合うことになるだろう。

だが、黒井厩舎のみんなと、ケンちゃんと一緒にレースに臨めば、絶対に勝てるという希望の輝きは決して毀れはしなかった。

有馬記念から数日後。

放牧に出される前になって、俺はエアグルーヴのいる加藤厩舎へお邪魔させてもらっていた。もちろんアポはない。エアグルーヴが牧場へ帰る前にやってきたのだ。

「よお、エアグルーヴ」

「貴様……なぜここにいる」

「脱走してきたからな。加藤先生は今席外してるかな？　あの先生、ちよつと俺のこ

と目の敵にしているから怖いんだよね」

管理馬に苦渋を舐めさせたライバル馬だからか、それとも愛娘に寄ってくる悪い虫と見ているのかわからないが、あまり長居したら問題になりそうだ。

「まったく。それで、何故私に会いに来た？」

「理由がないとダメか？ ……理由がないと、くだらない話に来るのはダメか？」

「……………いや」

繁殖馬入りをしてしまったら、もうエアグルーヴとは会えないかもしれない。

彼女は俺と何度も鎬を削ったライバルだ。

どうかお元気で、と簡単に別れを決められるほど、彼女に対する想いは軽いものではなくなっていた。

しばらくレースのことや、厩舎周りで起こったこととか、他愛のない世間話をしていたら、あつという間にエアグルーヴが出発する時間に近付いてしまった。

「エアグルーヴは……良い母親になると思うよ」

「なんだ、励ましか？ 似合わない真似をする。そして、随分と似合わない顔をするな、貴様は」

からかうようにエアグルーヴがくすりと笑った。

ずつとレースで顔を合わせていたから、いつもピリピリとしたイメージがあっただけ、こうしてみると結構穏やかな雰囲気だった。

まだ、彼女を知らないことがたくさんあるんだなあ、とため息をついた。

「寂しそうな顔をするな」

「……寂しいよ。もつと話してみたかったからな」

「だがそういうわけにもいかない。私にも使命がある——私に流れる偉大な血を、次代へ繋ぐという使命が。お前もいずれ、その時がくるだろう」

「そうかもな……牡馬と牝馬の違いはあるが」

「——周りが許せば、だが……貴様も、次代に血を繋ぐことになって……そのときに偉大な血統だというのなら……その……か、構わんど。私は……き、貴様と……じ、じじ、次代の結晶を紡ぐ、のは……」

エアグルーヴはこちらに背を向け、馬運車に向かう前に、そんなことを言った。

尻すぼみに小声になつていったのだが、馬の聴覚は完璧に言葉の内容を拾っていた。

「よかった。じゃあ、来年——俺はでかいレースを何個も勝つて、そしたらお嫁さんとしてエアグルーヴを迎えに行けるような馬になるよ」

「ツ……ファン！ 期待なぞ、全然してないがなッ！」

足早にエアグルーヴは馬運車へ駆けこんでいく。

乗り込む直前でピタリ、と脚を止めて、最後に一度だけ振り返った。

「——息災でな」

「……ああ。もちろんだ」

エアグルーヴが馬運車に乗り込むのを見届けると、背を向けて歩き出す。

来年からは海外でしばらく過ごすことになる——忙しくなるぞ、と自分に活を入れながら厩舎へ帰っていった。

帰り道、冬の空は雲一つない快晴で、時々身を刺すような冷たい風が吹いていた。

「そういえば……これは浮気になるのかなあ」

第31話 飛び立つための翼

昨年末、有馬記念を制したグレートエスケープ（牡6歳）を管理する黒井昭寿調教師（栗東）は今年の最大目標をイギリス、アスコットで行われるキングジョージ6世&クイーンエリザベスステークス（以下キングジョージ）とすることを発表した。

グレートエスケープは4月より出国し、イギリスで調教を積み、キングジョージを前に2〜3戦挟む長期的な海外遠征になることを強調。

黒井調教師は「グレートエスケープはパワーとスタミナに溢れた欧州向きのタイプ。それでも今は日本で走るための体になっている。勝つためには海外のレースに合わせただ体作り直さないといけない。そのための長期遠征です」と語る。

グレートエスケープはニューマーケットの国際厩舎、アビントンプレイスであるジョージ・エヴァンズ厩舎に入厩し、ここを拠点に滞在予定。

騎手については「正式なオフアーはまだだが梶田騎手に乗ってもらおうと思っっています。欧州の騎手へのオフアーも考えましたが、一番グレートエスケープを知っているのは彼なので。梶田騎手はアスコットでの騎乗経験があるし、今年からはお願いして定期的にイギリスでの一般競走にも騎乗してもらっています」と、梶田健二騎手（栗東・フ

リー」と一丸となって戦う姿勢だ。

キングジョージの結果によってはその後凱旋門賞、BCターフへの参戦を考慮に入れるとのことだった。

——3月、阪神競馬場。第7R「3歳未勝利戦」

『第4コーナーを回って馬群が一気に詰まってまいりました。4番スターライトが先頭、外から9番オコリンボウが迫ってきます、1番のユーアークールも内から抜けてこようという構え——』

梶田健二はこのレース、3番人気の2番「エクステンジ」に騎乗していた。

エクステンジの調子は良く、時計も出せている。

スタートこそ後手を踏んだが折り合いは問題なく、直線を追い出そうというところ。

(外に出したらロスが大きいが内はまだ空かない……まずったかも)

今年の競馬開催から調子が良く、また去年にGI2勝したこともあつてか良い騎乗馬を回してもらえている。

その結果、全国リーディングトップ争いを繰り広げている状態だ。

上位に入ることにはあつても滝力ナタ騎手、岡谷幸男騎手、館山典佑騎手といった騎手たちが常にトップを争っており、そこに割って入ることはなかなかできなかった。

元々乗せてもらった馬はすべて勝ちたいと思つてゐるが、リーディングというものに強いこだわりがあつたわけではなかつた。

しかし、グレートエスケープとの出会いでその想いも少しずつ変わつていった。

『リーディングトップの騎手を乗せていれば』

『外国人ジョッキーでもよかつた』

『騎手のせいで負けた』

グレートエスケープに乗つていたことで、外野のそんな声が聞こえてくるようになってきた。

騎手生活を続けていて、G Iを幾つも勝てる馬の主戦でいられるのは何回くらいあるだろうか、健二は時々考える。

岡谷騎手にはシンボリルドルフがいる。西井騎手にはナリタブライアンやタマモクロスがいて、滝騎手にはオグリキャップやエアグルーヴ、スーパークークといった様々な名馬がいる。

G Iを複数勝つ騎手はトップに近付けば近づくほど、いる。

だがG Iを複数勝つ競走馬と出会い、主戦騎手としていられる者はとても少ない。

自分はそのような幸福を噛みしめながらも、今よりもつと上手く乗れるようにならないといけない——健二はそんなふうに考えるようになっていた。

そしてそのわかりやすい指標にG Iの勝ち鞍と、リーディングジョッキーの称号がある。

これから行くのは世界最高峰の舞台——「日本のダービージョッキーにしてリーディングジョッキー」として紹介されるくらいでないかと、グレートエスケープには相応しくない——健二は今年になって、本気でリーディングを狙っていた。

(インが……少し空いている……)

健二は安全志向な騎手だ。

競馬にはフェアプレー賞というものがある。制裁点数が10点以下の騎手に贈られる賞で、梶田健二は既に8年間の現役生活で6回受賞していた。

勝ちたいと思えば、強引な騎乗になることもある。

そのときに進路を塞いでしまったり、接触してしまったり、それによって制裁点数が加えられ、過怠金あるいは騎乗停止処分となってしまうことがある。

梶田健二にそれはほとんどなかった。

あくまでルールの中で勝ちに行く、それでいてリーディング上位を争っているのだから、関係者間での騎乗技術の評判は高かった。

(幾らなんでも強引すぎるな。無理に突っ込んだら落馬モノだろ……少し遅れるが外に出すしかない)

普段の健二であれば、この場面、迷うことすらなく、外へ持ち出していただろう。

しかし、数週間前にイギリスで騎乗した際の経験を唐突に思い出した。

欧州では多少狭かろうがロスの少ない内側を突き抜けていくことが多い。

多少強引でもしつかり勝ち切る——そんな競馬のやり方だ。

今後グレートエスケープに騎乗してイギリスで戦っていくなら、時にはそんな乗り方も必要になってくるかもしれない——健二はイギリスで騎乗したとき、そう思った。

（もし、これが凱旋門賞の最後の直線だとして、俺は外へ持ち出すのか？ 最初の最後のチャンスを手放てるのか？ 騎乗停止や落馬は論外だが……それをして、俺は後悔しないのか？）

それは、悪魔のささやきだったのかもしれない。

（——後悔しないわけがねえ。大丈夫だ、少し強引ではあるが、問題はない！）

そして、健二は手綱を操り、1頭分の隙間があるかないかの馬群にエクステンジを突っ込ませた。

「梶田さん、珍しい乗り方しましたね」

「あん？ ちょっと強引だったな……戒告貰っちゃうかも」

梶田健二は検量室へ向かう前、エクステンジの担当厩務員と話していた。

内側に突っ込んだのは結果として大正解、内側の狭い進路を割って入るとエクステーションは鬨志を發揮して抜け出し、終わってみれば一馬身差で見事勝ち上がりを決めた。「いつもクリーンな騎乗をしている梶田さんがあんな風に乗るなんて。何かありましたか？」

「ないよ別に。行けると思ってたから行っただけだよ」

「それでも、よかったです。こいつ、いいところまで行くと思ってるんですけど走りが安定しない奴でして。勝ち上がったからこれである程度は目処が立ちました」

「よかった。またこいつ乗せてよ。もっと勝ち上がらせたいね」

「ええ、是非お願いします」

検量室では裁定委員会に小言を言われつつも、健二の心に曇りはなかった。

今までよりも勝ちにいく戦法をとって、いい結果に繋がったことが気持ちよかった。もちろん過怠金を支払うことになったり、制裁点数を貰うような真似は避けたうえで、ギリギリを攻める。

それを実践して、欧州でも戦える騎手になりたい。

グレートエスケープは最強の馬だ。

だからこそ、自分も最高の騎手にならないといけない——その気持ちで梶田健二は口取り式と記者の取材に向かうのだった。

○○○

「グレ様。お加減はいかがですか」

「様付けはやめてください。貴方歳上じゃないですか……」

俺、グレートエスケープはイギリスのニューマーケットに到着していた。

出発するまでにスペシャルウィークが

「やだやだやだやだ！ やです！ エスケープ先輩行っちゃやだ！ じゃなきや僕もエスケープ先輩と海外行く！」

「それは無理だ……お前も1月から復帰して走るんだから、頑張ってくださいよ」

「いやーです！ 僕はエスケープ先輩と走りたい！ エスケープ先輩も言ってくれたじゃないですか！ なのはどうして！」

「秋には帰ってくるよ……それまでにすごい戦績を引っ提げて待っていてくれよ」

「ううう……」

「スペシャルく、曳き運動の時間だぞく」

「ハイッ！ エスケープ先輩、海外で頑張ってください！ 僕、笑顔で送り出しますから！」

（相変わらず人の前では大人しいというか真面目というか、猫被りというか……）

と駄々をこねたことで色々あったが、とりあえず無事に出発。飛行機に揺られて約1

2時間でイギリスに到着した。

ニューマーケットはニューマーケット競馬場という世界最高と呼ばれる競馬場がある街で、その周囲には調教コースが豊富にある。

ニューマーケット調教場の傍には約2500頭の競走馬が入厩しているという。栗東トレセンよりも多い。

しかもニューマーケットは街の傍に競馬場と調教コースがある、というよりは調教コースや競馬場の中に街があるといつても過言ではないらしい。関係者も1万人くらい住んでおり、まさに競馬の街だ。

ぜひとも観光してみたいが、流石に海外の地で脱走はまずい。機会があることを祈るばかりだ。

「必要があればなんなりとお申し付けください。微力ながら尽くさせていただきます」「ありがとう、ハードバトラーさん……いや、まあ、今のところやつてもらうことはないと思うんだけど……そんな世話焼かなくても大丈夫ですよ」

「とんでもない。御身は黒井厩舎の看板馬、それだけでなく日本競馬界の至宝なのです。怪我でもしたら先生やオーナーが悲しむでしょう……世話役として、くれぐれも世話させていただきます」

(きまらずい……)

海外遠征するときには帯同馬といって僚馬がつくのが一般的だが、今年で10歳になるハードバトラーさん（牡・1600万クラス）が今回その役目となった。

彼が選ばれた理由には西京さんの担当馬であることのほかに、恵那ちゃんが他の馬を持っていないことによる。

帯同馬は一般的に同厩舎、同馬主の馬が多いのだが、その条件の馬がいなかったため、同厩舎かつ同じ厩務員、そして歳をとって落ちて着いた気性の彼が選ばれたのだ。

馬主は社来グループの代表の方で『今後のことを考えたら是非』とハードバトラーさんの遠征費や滞在費を負担してくれるとのことだった。

オトナノジジョウが垣間見える。

ハードバトラーさんは厩舎では大人しく、それでいて世話焼きなどころがあるジイさんともいえる馬だ。クラシックの世代でいえばミホノブルボンやライスシャワーと同じ年。今年で6歳の俺もオッサンの類だが、流石に及ばない。

以前もダンスパートナーさんのフランス遠征や香港遠征に帯同していたとか。

「初めての海外遠征でお疲れではありませんか」

「少し……」

「そんなときは馬房の中で少し歩くと良いかと。ずっと同じ姿勢でいたために血液の循環が悪くなって疲労を感じやすくなっていますから……歩いて循環を促すと変わります」

すよ」

「そうなのか……」

言われるがまま馬房をくるくると回る。あまりやりすぎると蹄鉄がすり減って怒られるから、少しだけにしておくが。

……一応元人間の俺はともかく、なぜハードバトラーさんが血液循環とか知ってるんだらう。経験則ってやつなのか、それとも人間の話すことを覚えたのか。

サラブレッドの神秘ってやつだろうか。

「調教はいつ頃からの開始になるのですか」

「一週間休んで体調に問題なければ始めていくらしいです」

「かしこまりました。それまでにこちらで下見することがあれば、僭越ながら説明させていただきます」

「あ、ありがとうございます」

今回は最大目標をキングジョージ6世&クイーンエリザベスステークスとし、そこから逆算されてローテーションが組まれている。

イギリス初戦はキングジョージと同じアスコット競馬場で開催される、プリンスオブウエールズステークス（GⅡ）に出走予定だ。

約2000mで争われる伝統ある中距離戦。ここである程度の内容と結果を見据え

なければ、早いうちに帰国する可能性すらあった。

「レースまで約2ヶ月。それまでしっかり調教を積まない」と

「欧州の馬場は日本とまるで違います。ダンスパートナー様も苦勞されておりました」
「札幌競馬場みたいにならなかつと深いらしいね。馬場に慣れてトレーニングを積みたいな。厩務員は西京さんで調教助手に白村、調教のときに長期滞在して乗ってくれる人として騎手の青山祐一って人も来ているし、万全だ」

黒井先生には他にも管理馬がいるため、常にニューマーケットにはいられない。

そのため調教助手である白村が調教の指示を行ったりする。攻め役には青山ジョッキー、普段の世話係は西京さんを筆頭に、その他の黒井厩舎のスタッフが担当してくれる。

「まずは疲れをしっかりとらないとな」

そして今日から、ニューマーケットでの本格的な追い切りが始まる。

軽い運動では特に不調も感じなかつたし、ニューマーケットの気候や水が合わなくて苦勞するということもなかつた。

「タフだな、相変わらず」

言葉が少ないながらも西京さんはホツとしていた。

アビントンプレイスから青山騎手を背に乗せて、ニューマーケットの調教場へ向かう。

草原の中にコースがある様はまさに自然の中で駆けているという感じで、ちよつと気持ちが良い。

「今日は15—15で調子を見ていきましょう」

白村の指示に従い、青山騎手が俺を促す。

今日のコースは芝の坂路。栗東トレセンとは違い、とても距離が長く、調教場の規模の違いにただ圧倒されるばかりだった。

「じゃあ、グレートエスケープ。よろしく」

「青山さん、もしかして黒井先生からグレ坊の話聞いていました?」

「うん。いっぱい語りかけてくれてね。乗ってて感じるけど、良い背中をしている。賢くて強い、理想的だね。調教とはいえ、跨れてうれしいよ」

(照れるなあ)

15—15という軽い調教とはいえ、仮にも俺は日本代表とばかりに送り出されている。

見ているがいい、ニューマーケットの、そして世界のホースマンよ。これが日本のグレートエスケープの走りだ。

俺は芝生を勢いよく蹴り上げた。

——これが、日本最強馬か。

調教を見ていた厩舎スタッフ、あるいは調教師、またあるいは騎手の誰かが、呟いた。芝生を駆けるグレートエスケープは500kgの馬体を揺らし、芝生を一完歩ずつ駆けていく。

誰かが呟いた。

「なんてことだ……」

「これはあまりにも」

「ああ、まさかここまでとは……」

その場にいたニューマーケットのホースマン全員が同じ言葉を口にした。

「なんてひどい走りだ……」

全然違うじゃん！ 誰だよ札幌競馬場と芝が似ているって言った奴は！

こっちの芝の方が滅茶苦茶深くて走りづらいし、フォームも滅茶苦茶になっちゃったわ。

「バテバテだな」

「バテバテですな」

「バテバテです」

西京さん、白村、青山騎手全員が馬房の前で言った。

「芝の高さでしょうか。坂道の傾斜は栗東の坂路ほどではありませんし」

白村が俺の馬体を色んな角度で見ながら言う。

「怪我はしていない。疲れているだけだ」

足元やトモに触れながら言うのは西京さん。

「走ってる時はフォームにも苦労しているようでした。スピードを出そうにも出せず、戸惑っていましたね」

青山騎手は俺から馬具を外しながら、意見を口にした。

調教を終えてすぐに俺の状態について意見を交換し、対策を立て始める海外遠征チームには頼もしさがあった。

俺はあれこれ悩むべきではない。

今はただ、芝に適応して走るだけのこと。

ケンちゃんが英国入りして、勝負にならないと思われたら恥ずかしくて倒れてしまいうだ。

俺にとって最高の騎手は梶田健二であり、彼に乗ってもらう以上はその実力に対応し

最強の馬でないといけない。

彼とならどんな苦難が、どんな強敵が待ち構えていようと、どこまでも飛んでいつてみせる。

「すみません、日本から連絡が……黒井先生からです」

「え？ ええ……代わります。はい、白村です。先生、どうしましたか？ ……え？」

だが——飛び立つための翼が折れた時、俺は。

どうやって飛べばいいんだろうか

「梶田騎手が落馬で大怪我——？」

×××

「はあ……」

「どうしたスベ。随分元気がないな」

「エツチャンさん……なんだか最近、体のあちこちが痛くて……ご飯も全然食べられないです」

スベはどんぶりを置いて、お腹を撫でた。

確かに今日はこれで3杯目、いつもよりペースも遅く、食べる量も少ない。

現在は秋のG1レース真つ只中、そのための調整やレースへの出走で疲労がたまっているのだろう。

斯く言う私も脚の筋肉が張っていたり、少し疲労がたまりつつある状態だ。

「またレースがあるのに……あ、でも、体重が減るからいいのかも……なんて」

「スぺ。連絡だ……トレーナーに！」

「えっ!? あ、はい……」

スぺがトレーナーに連絡を入れたのを見てから、彼女のスマートフォンを借りた。

「もしもし、どうしたんだスぺ」

「あー、スペシャルウィークのトレーナーかな。私だ、グレートエスケープだ。随分とスペシャルウィークの疲労が溜まっているみたいだね。私も同じく疲労が蓄積しているんだ。ここは二人で疲労回復のために出かけたと思うんだが、スぺにオフを与えてくれないか」

「そうか……ちようどりフレッシュしてもらおうか悩んでいたときだったんだ。わかった、休みにしよう」

「感謝する……というわけだ、スぺ。出かけるぞ」

「え、えっ!? どこにですか!? あ、もしかしてバブリー……」

「いいや、今回行くのはビッグレッド・スパだ」

「ビッグレッド・スパ……？」

首をかしげるスペを連れて学園内に作った隠しガレージへ向かう。

彼女にヘルメットをかぶせると、トライアンフTR6のエンジンを吹かしてタンデムする。

「というわけでここがビッグレッド・スパだ。言ってしまうえば健康ランドというやつだ。今日は平日だから空いてるな」

「わー、銭湯とかは聞いたことありますけど、おつきいですね……！」

「風呂の他に食事やマツサージ、リラックススペースもある。ここで湯治をして、これからのレースやトレーニングを乗り切るとしよう」

「わー……はいっ！ よろしくお願ひします！」

目を輝かせるスペシャルウィーク。

初々しい反応が楽しくて、ついつい世話を焼いてしまう。

そんな可愛い後輩を引き連れて、受付を済ませると風呂へ向かった。

「ここは源泉から運んでるんだ。効能は多種多様、関節痛や疲労、循環不全に腰痛などなど……ウマ娘にはうってつけだな」

「へー……すごいです……色々と……エッチャンさん、筋肉とかすごい……」

「スペもなかなかだと思いがあまり見るな……恥ずかしい」

「びい、めんなさい！」

まずは作法に則り掛け湯をしてから、体を洗う。

様々な種類の湯があり、何処から試そうか悩んだところでサウナの看板が目に入った。

「स्प、サウナはどうだ？ 自律神経を調えるのにすごくいいと聞く。体に溜まった良

くない汗を捨てるという意味でも、リフレッシュできそうだ」

「サウナですか……トレセン学園にもありますよね。時々減量する目的で使ってましたけど……あまり長いとクラクラしてきちゃって」

「あれは水分を排出して体重が減ってるだけで短期間で痩せるというわけではないが……今日は体の調子を良くするために入ることにしようか」

「調子を……ですか？」

首を傾げるस्पを連れてサウナへ入る。

ちようど誰も居らず、私とस्पの貸切状態だ。

中に入るとむわあつとサウナで熱せられた空気が肌を包み、息がしづらい感覚に陥る。

サウナの上段に座り、じつと待つ。

「大体10分くらい入るのがいいとされている。体から汗が出ていくのを感じるんだ」

「はい………」

1分もしないうちに肌から汗が滲み、滴り落ちていく。

サウナの中にはテレビが設置されていて、ちょうどトウインクルシリーズのニュースが放送されていた。

「期待の新星がついにデビュー戦……が、3着だったか」

「デビュー戦負けちゃったんだ……勝ちたかったんだらうな……」

「スぺはデビュー戦のときどうだった？ 勝ったのは知っているが」

「あときは阪神レース場で走りましたが、無我夢中になって気づいたら1着になってました。走るのに必死で……」

「あのとときもすごいウマ娘が出たと噂になっていたな。後のダービーウマ娘なのだからある意味当然か」

「いえいえそんな……エツチャンさんはデビュー戦負けちゃったんですよ……辛くなかったんですか？」

「辛くはないが悔しかった。だが、未勝利戦がすぐ来るはずだったからね。とにかく勝たなくてはという思いでいっぱいだったよ。今その映像を見ると、酷い走り方だなあと感じる」

「あ、なんだかわかる気がします。過去の自分を見ると、あそこがダメだなーとか気づく

「んですよね。それだけ成長してるってことなのかなあ……」

「その通りだと思うよ。過去を振り返って反省できるのは、いい事のはずだ」

なんて先輩風を吹かしていると10分はあつという間だった。

二人して暑い暑いと言いながら水風呂へ入る

「つめたあい！ つめたいですよエッチャンさん！」

「だっ……だ、い、たい、1分から2分浸ければ……いい……つめたい……」

水風呂に浸かると今度は露天風呂コーナーへ向かい、設置されていた背もたれのあるベンチに座り、外気浴にいそしむ。

熱された身体が冷やされ、血液が隅々まで行き渡る感覚。

全身が心地いい重さに包まれてウトウトすらしてくる。

「なんだか気持ちいいです……」

「だろう？ しばらくこのままのんびりする……」

全身から力を抜いたまま、空を見上げる。

雲ひとつない快晴で、きつとこんな天気の下で走ったらさぞ気持ちいいのだろう。

「いい天気……走るにはいい日ですね」

「स्पモそう思ってたか」

「エッチャンさんも？ 不思議ですね……いっぱい走ると休みたくなるのに、走るこ

から離れると走りたいと思っちゃうんです……ワガママですね」

「ヒトもウマ娘も、ままならないものだな……休むことでそんな走りたいという気持ちを溜め込むのも、いいことなんじゃないかな？」

外気浴で休息をとってから水分補給。

サウナは汗をかかないといけけないので水分補給は大切だ。そして再びサウナへ。

「……あついです」

「あついな……」

この我慢しているのが気持ちいい。

温まったら次は水風呂。

「ああああっ……」

「っ……っ……っ……」

一気に冷やしたらまた外気浴。

「ふい……」

「ふっ……」

これを三度繰り返す頃には、すっかり体はリラックスして心地よくなっていた。

サウナによって俗に言う整った状態である。

体がだいたいほぐれたら次は当然、風呂に浸かる。

「いいんですか!? ありがとうございますっ」

テーブルにつくと、店員が水を二人分置いてくれた。

冷たくて火照った体に染み渡る。

腰から伸びる銀色の尻尾を見るに、ウマ娘の店員らしいが、なんだか見覚えがあるやっだ。

「メニューがお決まりでしたらベルでお呼びください」

「わかりました……って、ゴールドシップさん!」

「ああ、やっぱりゴルシか。どうしたんだこんなところで」

「お、見覚えあると思っただらお前らか。ここでちよつくらゴルシちゃん焼きそばを委託販売するついでに色々商売ってやつを学ぼうと思っただけ、バイトしてんだ!」

「ビッグレッド・スパでゴールドシップがアルバイトか……なんだかとても似合っているな」

「そうか? まあ、ここの飯はうめえからよ。食べて行ってくれよな」

ゴールドシップはあわただしく厨房へ戻っていった。

あいつはどこにでも現れるな。

スパはメニューを見てうんうん唸っている。

アレも食べたいけどどれがいいか、とページをめくってはまた最初へ戻るを繰り返す

ていた。

「私は決めた」

「早い!?! え、えーと、どうしようどうしよう……」

「慌てるな。好きなものを頼めばいい。せつかくの休みなんだ。余裕をもつて過ごすのが一番大切なんだ」

「そ、そうですね。でもどれも美味しそうで迷っちゃいます……エツチャンさんは何を頼むんですか?」

「私は天ざるセットに決めた。重すぎず、食べ応えのあるメニューにしたかったからな」
「うーん……じゃあ、私は……鶏肉三昧丼と人参ステーキのセットで!」

「店員呼ぶか」

そして運ばれてくる料理の数々。

大きな海老やキス、ししとう、ナス、ニンジンといった海産物や野菜が煌びやかな衣を纏って皿の上でスタートを待ち構えている。

スぺの方からはあげや鶏チャーシュー、焼き鳥などがこれでもかと丼に乗せられていて、食べ応えがありそうだ。

「いただきます」

「いただきます」

まずはニンジンの天ぷらから……サクツとした歯ごたえと、人参の熱く、それでいて優しい甘みが口の中いっぱい広がる。

「美味い……」

「ふふっ」

「どうした、スぺ」

「なんだか美味しそうに食べるなあって」

「ああ、美味しい。だがスぺには負けるさ」

「そ、そうですか？」

サウナや温泉でリラックスしたことにより、副交感神経の活動が活発になる。

すると、全身がリラックスマードになるために食事や睡眠がとても快適になるので、来る前は食があまり進んでいなかったスぺも見ての通り。

「あ、おかわりいいですか……？」

恐る恐るおかわりを頼んでは平らげていく。

健啖ぶりに驚きつつも、いつものスぺが戻ってきたと思うとなんと頼もしい。

私もそばを啜りながら胃袋を満たしていくのだった。

食事を摂ってからでもマッサージチェアで筋肉をほぐし、休憩スペースでは二人してテレビで流れるウマ娘に対するインタビューと漫画を同時並行で見えたり、カラオケ

ルームではライブの練習と称してたくさん歌った。

気づけば日も暮れるタイミングで、私たちは服を着替えてビッグレッド・スパを出た。「はー、楽しかったです！ もう身体も軽くて、走ってトレセン学園まで帰れちゃいそうです！」

「気持ちわかるがな、汗かいてしまうぞ」

「エツチャンさん、今日はありがとうございました！ 疲労も回復して、またレースでけっぱれそうです！」

「そうか。よかった……さ、帰ろうか」

「はい！ ……あっ」

きゆるる……と鳴ったのはやっぱりというべきか、スペの腹の虫。

思わず笑ってしまったが、彼女にヘルメットを被せて後部座席に座らせると、提案した。

「寮の門限には間に合うし、夕食もどこかで食べようか。せっかくだから、私もこいつで走りたい」

「え……じゃ、じゃあ、お言葉に甘えて……」

「了解だ」

トライアングルのエンジンを響かせて、再び街へ繰り出す私とスペ。

結局、夕食も赴くままに平らげて、身も心も満腹になった休日をお過ごしたのだった。

第32話 Never Looking Back

丈の長い芝を踏みしめてニューマーケットの緩やかで長い坂路を駆ける。

ハミを取って鞍上の青山さんの指示に鋭く反応すれば、遠くでニューマーケットのホースマンの感嘆の声が聞こえてきた。

「状態が少しは上がってきましたかね」

「やっぱりダービー馬はダービー馬か……慣れてくると走りの良さも出ている」

手綱が緩み、ゴーサインが出る。

手前を変えて飛び出し、最高速度を出してそのままコースの最後まで走り抜けた。

調教を終えて厩舎に戻る中で青山さんが俺を撫でた。

「慣れてきたな、欧州の芝にも。いやあすごいな、すごい走りだ」

賞賛は俺の心を震えさせず、怒りにも似た虚しさが胸いっぱい広がるばかりだった。

厩舎に戻り、馬体のチェックが終わればシャワーを浴びる。

ニューマーケットはこの時期、朝は肌寒さがあるだろうが、馬の体ではあまり感じなかった。

「グレ様。本日の朝食は燕麦、トウモロコシ、小麦粉、大豆をベースにビタミン、ミネラル、食塩で味付けされたものです。黒井厩舎で食していたものを取り寄せ、ニューマーケットで出回っているものをテイストとして加えました。既にシエフに用意させています」

シエフつてか現地の厩舎スタッフな。

「ありがとう、バトラー」

「いえ……役目なれば……体調は、如何でしょうか」

「……まだ少し疲れやすいようだ。食べたなら休むよ」

「承知致しました。御用の際は何なりと……」

ハードバトラーさんが紹介してくれた飼料を食べる。普段の味付けに混じるイギリスの味。うーん、そうやって書く和不味そうに聞こえる。

だが黙々と食べ終え、馬房の中に引っ込んだ。

それからはやることなく馬房で寝藁をひっくり返したり、壁にもたれかかったり、ひたすら時間を潰すだけだった。

普段だったら脱走してアビントンプレイス、ひいてはニューマーケット観光でもしてやろうと嘯いたのだろうが、今はなにもしたくなかった。

先日日本から届いた凶報——俺の主戦騎手たる梶田健二の落馬事故が原因なのは、い

うまでもない。

ニユースを聞くと、競走で大外に持ち出したところでほかの馬が転倒。それに巻き込まれて落馬してしまったらしい。

ケンちゃんも複数の骨折や裂傷を負った重傷で、すぐに病院に搬送された。

命に別状はなかったが騎手生命が断たれるかもしれない——帯同したスタッフがそう言った。

当然、今回の海外遠征の騎手は乗り替わりということになり、誰に頼むか黒井先生や白村が話し合っている。

「はああく……神様の馬鹿野郎……運命のアホ助……なんでケンちゃんなんだよ……なんで、俺じゃねえんだ……」

ケンちゃんが落馬することは珍しいが、俺が現役中になかったわけではない。

それでも、大抵はスタート直後や返し馬のときくらいで、危険ではあるが大怪我はしてなかった。

今回は最後の直線で、トップスピードに乗った状態での落馬。

今までよりもずっと大きな怪我だ。日常生活を元のように送れるまで3ヶ月、馬に乗れるまで半年、ジョッキーとして復帰できるかどうかは……。

「なんで……俺じゃないんだ……怪我すべきは俺だろうが……」

梶田健二というジョッキーのことを考えると、吐き気すら覚えた。

まだ若い、それを感じさせない落ち着いた騎乗スタイル。それでいて勝負どころを逃さず、若いながらもGⅠ勝利を俺と積み重ね、リーディングでも上位が当たり前の騎手。

今、競馬界でトップをひた走るのは滝力ナタ騎手や、岡谷幸男騎手だが、この先、そこに梶田健二の名前が加わるであろうことは誰もが期待していただろう。

そんな彼の、騎手生命が断たれる――

(なんでケンちゃんか……おかしいだろう……本当だったら、俺の骨がぶち折れるほうが妥当だったろうが……)

ずっと考えてきた、自分が競走馬として生まれた意味。

もしかしたら、なにか使命があったのかもしれないと自惚れることもあった。

だが、現実はこちらだ。

俺がこの世にサラブレッドとして、グレートエスケープとして、産まれたから――ケンちゃんや落馬事故に巻き込まれたのかもしれない、そんな考えが浮かんでくる。

もしも俺がなにも知らない、人の心なんて持たないサラブレッドだったら、こうならなかったかもしれない。

「わかってるんだ……ケンちゃんに限らず、どんな騎手でも落馬で騎手生命や、生命その

ものすら断たれる可能性があることは。たまたま、運が悪かったただけだって。でも……だからといって……受け入れられるわけないだろ……！」

溢れ出した嗚咽を押し殺して、俺は壁に頭を押し付けた。

どれほど経つたろうか。

次第に涙が枯れて、胸に広がった悲しみが少しづつ渴いていく。

「でも——でも、やるべきことは変わらないんだ。どんなに苦しんでも、悲しくても、辛くても。俺は……俺は、グレートエスケープなんだから。ケンちゃんのことには辛い。辛い、が……飲み込まなくてはいけない。消耗するわけには、いかないッ……！」

俺はそれから、調子を落とさないように、飼料は残さず食べ、調教では張り切って走った。

そうして迎えた、プリンスオブウエルズステークスの最終追い切りの日はどんよりとしていて、雨が降り出しそうだった。

本当だったらケンちゃんが最終追い切りに乗って、プリンスオブウエルズステークスに臨む予定だったが、当然それは叶わない。

じゃあ誰が乗るのだろうか、調教場へ出るまでの時間を待っていると、聞いたことのある声が耳に届いた。

「どや、グレ坊は」

「先生……カイ食いはまあまあですが……少し無理しているようです。やっぱり水が合わないというか、環境に慣れないんでしょうか」

「ふうん……グレ坊。どや、調子は」

馬房の扉が開くと、現れたのは黒井先生だった。

最近、食が進んでいないから少し怒られるだろうか。お前ほどの馬がなにをしとるんやと言われるだろうか。

しかし。

「……馬体に異常はない。体重も減り気味やけど問題にするほどやない。今日はジョッキーに乗ってもらって追い切りをするからな」

黒井先生は俺のことを特に気にした様子はなく、厩舎スタッフと話し始めてしまった。

下手に慰められたりしても、真夏の雪のように似合わないとはいえ、やっぱりそれを期待している自分がいて、笑ってしまいそうになる。

「元気があまりないですね。もっと迫力があつたと思うんですけど」

そんな俺を見て言ったのは、ヘルメットと鞭を持ったジョッキー——滝力ナタさんだった。

どうやら、この海外遠征で乗るのは、滝さんに決まったらしい。日本が誇るトップ

ジョッキーならば誰も文句を言わないだろう。

「調教に行くで。不甲斐ない走りしたら飯抜きや。白村の」

「ええつ、なんで俺なんですか!」

「当たり前やろボケ! 調教助手つちゅーことは此処にいる間調教の中心はお前なんやから!」

滝騎手が西京さんの肩を借りて俺にまたがる。

俺はこの日の調教をそこそこのタイムで終えて、厩舎に戻った。

「カナタ、スペシャルではどうもな。上手く乗って貰えたわ」

「いえいえ。盾男と呼んでもらってますからね、スペシャルで勝てないと信用失っちゃいますよ」

厩舎の近くでカナタさんと黒井先生が話している。

話の内容はレースや今後のプランについてで、その流れで天皇賞・春のことについて話していた。

なんでも、スペシャルウィークで見事に勝利したらしい。

後輩の活躍に頬が綻ぶが、同時にまた天狗になつてやしないかと心配もしていた。

「……スペシャルはこのまま宝塚記念に行く。そこで勝てば凱旋門賞へ行かせようと思つてる。皮算用つてやつやが、カナタ、凱旋門賞だったらどつちに乗る?」

「いやあ迷いますね……でもやつぱり、スペシャルですよ。ダービーを初めて勝たせてくれた馬ですから」

「ま、せやろな。もしも被った場合はグレは欧州の騎手を乗せる」

「まだ全然わからないですけどね」

どうやらいずれはスペシャルもこちらに来る可能性があるらしい。

世界最高峰の舞台へ先輩後輩で挑むというのは、心躍るものがある。

だが——そこで乗って欲しい人がいないことが、ただ寂しい。

「しかし、グレを選ぶとも思ってたが」

「……すごい馬ですけどね。今の僕が逃げ馬に乗ったら、上手く乗れないかもしれないので」

「サイレンススズカか……」

「あ、すみません。余計なことを言いました」

「いや、実際それだけの馬やと思うで。聞いたで、あの日は初めて酔いつぶれるまで飲んだそうやないか」

「……ええ、まあ。今でも夢に見ますよ。もう少し抑えてたらどうなったか……とか」

「許してやつてもええやないか、自分を。お前はよくやつとる……自分のことだけじゃない。競馬界のために、多くのホースマンのために、ずっと考えているやないか。お前

がボロボロになったら……悲しむ人間は、もっと多いで」
「……わかつては、いるんですけどね」

黒井先生はカナタさんにそう言うのと、踵を返した。

カナタさんも辛いものをたくさん抱えている——それでも前を見て、進んでいる。

例え翼が折られてしまったとしても、俺も、脚で前に進まなくてはいけないのだろうか。

○○○

GⅡながら、アスコット競馬場に集まった競馬ファンは中々多かった。

この時期はロイヤルアスコットミーティングといわれ、イギリス王室が主催している。

プリンスオブウェールズステークスを含めて、数日間にわたって様々な重賞レースが開催されるため、観客も自然とアスコットに集まってくるというわけだ。

服装も煌びやかなドレスやスーツを纏う人も多く、イギリスやフランスではギャンプルではなく紳士淑女の社交場といわれるだけある。

パドックの周りも日本と違い、短いらしく、さらに観客と馬や騎手の距離もだいぶ近い。

カナタさんは手を伸ばすファンと握手したり、サインを書いたりしていた。

「カナタ、グレートエスケープの状態は悪くはないが、絶好調というほどでもない。だが相手も強いわけやない。頼むで」

「ええ。あの馬に勝った名馬ですから、簡単に負けさせるわけにはいきませんよ」

俺を含めてアスコットに9頭が集まった。

人気は日本からの遠征ながら一番人気は俺になっている。

他のメンバーにGI勝利馬はいるが、今のところ実績は最上位と見られているようだ。

パドックで待っていると、一頭の女の子——牝馬に声をかけられた。

「な、なあなあ！ あんた日本の馬なんだってな！」

「え……ああ、そうだけど、誰だ」

「おっと失礼、私の名前はシヴァー！ 日本出身なんだ」

日本の牧場で生まれたということか。

話を聞くと今年の5月にGIを勝利し、日本生産馬初の海外国際GI勝利を達成したのだという。

「いやあすごいなあ、なんだか嬉しいなあ！」

「同郷ってやつは嬉しいよな。少し気持ちはわかる」

「あんた歳上か？ すごく落ち着いて見える」

「もうオツサンかもな」

「ま、ここじや私が先輩だからな。ムネを借りるつもりでかかってこいよ！」

「どうやらお姉さんぶりらしい。」

「元氣いっぱい怖いもの知らず、そして俺のことは知らないらしい。」

「さすがに欧州に名前は響いていないようで、仕方のないことだ。」

「事実、欧州のレースで俺はまだ素人同然なのだから。」

「よろしくな、シヴァ」

「おうよ！　ってあんた、名前は？」

「俺は——って、時間か」

「仕方ねー。このあとで聞いてやるからな。レースを勝った、私が！」

「シヴァはそう言つて離れていった。」

「カナタさんが俺に乗る、その直前で止まった。」

「その前に挨拶してもらわないとな」

「カナタさんと黒井先生が道を開けるように後退る。」

「一体何をやるのだろうか、不思議がるのも束の間、そこには車椅子に乗ったケンちゃんがあった。後ろでは恵那ちゃんが車いすを押ししている。」

「グレ坊……お前元氣ないって本当か？」

呆れたように言うケンちゃん。

俺は、恐る恐る、一歩ずつ近付いてから、目の前で立ち止まった。

「ケンちゃん……なんでここに……ちよつと痩せたな……減量し過ぎだぞ……」

「大事な大事なお手馬の海外遠征初戦を見に来ないわけないだろ。で、調子は少し悪そうだけど……まさかこんなところで負けてられないよな」

「……うん」

ケンちゃんが車いすを漕いで俺の前に来て、額を撫でた。

「お前のことだから、俺が落ちたの聞いて凹んでるじゃないかと思ってたわ」

「ふん、へつぽこ騎手が落ちてもグレ坊は気にせんやろ」

「先生、それはあんまりですよ」

黒井先生がからかい、ケンちゃんが笑う。

まるでこれまでと変わらない、レースが始まるときのようなひと時に、心が穏やかになる。

「グレ坊。俺は今後、騎手として復帰できないかもしれないといわれている。それでも俺は、お前に乗るつもりでリハビリを続けている。キングジョージは無理だ。凱旋門賞も厳しいかもしれない。ジャパンカップや有馬記念だったら……もしかしたら、乗れるかもしれない。グレ坊。俺は諦めないぞ」

「うん……！」

「お前は俺の誇りだ。騎手生活を長年送っていても巡り会えるかわからないほどの名馬だ。そんなお前に乗れて嬉しかった。だから……もつと自慢できるように、世界でも勝つてこい……グレ坊」

「うん……うん……！」

決して健康な姿ではなかったけれど、元気そうなケンちゃんを見て、ささくれだった心が丸くなっていくのがわかる。

ずっとわかっていた。

ケンちゃんがどんなふうになると、俺は走って、勝たなくちゃいけないということ
は。

それでも、こうしてケンちゃんの姿が見られてよかった。

「グレくん」

恵那ちゃんが今度は俺を優しく撫でる。

海外遠征という、金銭的にも、精神的にも負担がかかるものを、彼女は叶えてくれた。
きつと、望んでいるのは俺が無事に走り抜き、そして勝つ姿。

「グレくん、少し元気出たかな……きつと会いたいと思って、梶田騎手と一緒に来れないか呼んだんだけど……」

ああ——もう大丈夫だ。

俺は多くの人たちに支えてもらって、こうして生きている。

馬として生まれた意味は、よくわからない。

けれど、愛情と期待を惜しみなく注いでくれる彼らに応えること——それが、今の俺の使命なんだ。

「また迷って、まごついていて、情けない……かつこ悪いよな。でも、それでも、俺はまた走り出すから……見ててくれ、みんな」

初めてのイギリスにおけるレース、プリンスオブウェールズステークス。

滝カナタ騎手を背に乗せて、俺はレース場へ蹄を進めた。

俺の名前を世界に知らしめてみせる——そして、関係者すべてに言わせてやるんだ。

『あのグレートエスケープの世話をしていた、調教をしていた、騎手をしていた——』と。

『GII、プリンスオブウェールズステークスの発走時刻が近づいてまいりました。日本を旅立った日本代表グレートエスケープは1番枠に収まる予定です。先日はエルコンドルパサーがイスパーン賞では堂々たる2着で欧州遠征に弾みをつけました。日本で生まれ、日本で育ったグレートエスケープは、競馬の本場たる欧州の馬たちにどう立ち向かうのか。ブックメーカーでは1番人気で迎えられています。出走馬には日本で

生まれたシヴァもいます。3歳馬ファンタステイックライト、他にはリアスピアなど計9頭で争われます。G I Iながらロイヤルアスコット開催であり、歴史ある重賞レースです。多くの観客が発走を待ち望んでいます。全頭ゲートに収まり——今スタートしました!』

『グレートエスケープ好スタートを切りました、やはりハナに立ちます。鞍上は滝力ナタ。日本生産馬にしてここまで無敗のシヴァは4番手あたりといったところ、外にザールとファンタステイックライト、後方にリアスピアがいます』

『アスコット競馬場2000mで行われる伝統の一戦、グレートエスケープはゆったりと走っています。黒井調教師や白村調教助手からは、来た当初は馬場に慣れていなかったが最近ようやく調子が上がってきた、とコメントがありました。日本で積み重ねたG I勝利は6勝、ここでも積み重ねてきて欲しいものです。第4コーナーに入りグレートエスケープは依然先頭』

『直線に向けてグレートエスケープが追い出しにかかる! シヴァは後退していく、内からリアスピアとファンタステイックライトが上がってくるがグレートエスケープ、差をぐんぐん広げる! 2馬身、3馬身、4馬身! グレートエスケープ強い強い、鞍上の滝騎手は追うのをやめています! グレートエスケープ圧勝でゴールイン! 5馬身ほど離れてリアスピア、ファンタステイックライトが入線しています。グレートエス

ケープ、海外でも見事な脱走劇でした』

状態は決して良くはなかったが、ベストは尽くせた。

終わってみれば5馬身差の勝利であり、見事にイギリスの重賞を制する結果となった。

「いやあ流石グレートエスケープ。よく頑張ったね。イギリスでの重賞勝利は日本の馬では初めてじゃなかったかな」

カナタさんの賞賛の声。

散々喚いて、泣き言言つてたくせにと言われてしまいそうだが、こうして勝てたんだからよかった。

「な、なあ、あんた！ 日本の！」

本馬場から去る前に、シヴァが声をかけてきた。

「すごい走りだった……私だってGI勝ってるのに、手も足も出なかった……な、名前を……教えてくれないか？」

素直に名前を教えようかと思ったが——はつきり言って、今日の俺の走りは本調子ではなく、そしてついさっきまでウジウジしていた自分がかっこ悪かった。

それ故に、年下の牝馬相手にそういうところを覚えてもらいたくなくて背を向けなが

ら彼女に答えた。

「グレートエスケープ……しがない競走馬だよ」

「グレート……エスケープ……さん……あ、あのっ！ またいつか……会えますか!？」

敬語なんて使ってしまつて、随分しおらしいじゃないかと、小さく笑つた。

そして、歩きながら答えた。

「走り続けていれば、また会えるだろう」

歓声を背に受けながらアスコット競馬場を後にする。キングジョージは同じくここで行われる予定だ。

今日走つたことで、キングジョージのときもきつと走りやすくなつただろう。

ニューマーケットの厩舎に戻ると、黒井先生とカナタさんが改めて次走について話した。

「今日の勝利は文句なしやつた。このままキングジョージへ向かう前に、1戦GIを挟むで」

「キングジョージの前に1戦、この時期ですと……」

「ああ、エクリプスSや。ここからやと車で2時間かからないサンダウン競馬場で行われる、上半期中距離最強馬決定戦。キングジョージへの箔付けにはぴつたりや。距離は2000m、グレ坊の力を見せてやらんとな」

「2000mでも充分戦える馬ですからね。楽しみです」

次走はエクリプスSか。

Eclipse first, the rest nowhere. (唯一抜きん

出て並ぶもの無し)——英語の諺の語源にもなった伝説の馬の名を冠するレース。

ここを勝つて、キングジョージへ向けた踏切にしてみせる!

「グレ坊。おめでとう」

黒井先生とカナタさんが話し終わると、関係者席から恵那ちゃんがケンちゃんが乗る車いすを押して現れた。

「ケンちゃん……とりあえず、勝てたよ」

「見た。やつぱりすげえ馬だよ、お前は……良い走りだったが、まだまだこんなもんじゃないよな」

「もちろん。少し不甲斐なかったけど……次は完全な姿を見せるから」

「ああ、楽しみだ。グレ坊——お前は、俺の誇りだ」

「……そうか。なら、もっと誇りたくなるような、馬にならないとな」

ケンちゃんは俺を撫でて、寂しそうに笑っていた。

撫でながら「いいなあ、乗れたかったな」という詰まった声は、俺の耳にだけ届いて、消えていった。

俺も悲しい。だが、それでも前に進むと決めたのだ。

次のエクリップスステークスでも、勝利を掴んでみせる——どんなことが、あろうと。

『グレートエスケープは7着、惨敗です！　これは残念な結果になりましたグレートエスケープ……英国初GIはお預けです』

「ちくしょー……ッ！　なぜじゃー……ッ！」

しかし、世界の壁は高かったのだ！

×××

学園のカフェテリアの一角で私は優雅にのどを潤す。

昼休みに悠々と一服する喜びは何物にも代えがたく、つつい相好を崩してしまうものだ。

「あ、あれグレ先輩だ……やっぱりかっこいい……」

「何飲んでるんだろう、紅茶かな、コーヒーかな」

「テーブルに置いてあるのは……え……コーラ？」

「ああつ、よく見たらカロリーのお化けみたいなホットドッグ食べてる！」

ウマイ。やはりココ・コーラに限る。ペ○シ・コーラより、○カ・コーラが優れていると私は思う。

今日のティータイムはコーラとフライデルファイア・チーズステーキだ。

ロールパンに薄切り肉をこれでもか！ と詰め込んだら、大量のチーズを溶かして挟んだホットドッグである。

お手軽にして至高、カロリーの高い料理を考えさせたらアメリカを上回る国はないと思う。

(いつかアメリカ遠征に行くか……ついでにBCターフなんかを走ってみてもいいかもしれない。うん)

「あの、失礼するね」

そんな私とテーブルを挟んで座ったのはスマートファルコン。

いつぞやのアイドル騒ぎでも相談に来たのは、こんなお昼の時間だったなあ、と思いつ出した。

「ファル子先輩、食事中で申し訳ない」

「ううん、いいの。むしろタイミングが悪くてごめんなさい」

私は残ったチーズステーキを平らげると手を紙ナプキンで拭いた。

最後に口の中に残った脂身をコーラで洗い流し、一息つくと彼女に話を窺った。

世間話をしに来たというには、少し緊張している様子が垣間見える。

「エツちゃん……お料理つてできる?」

「うん? まあ……人並みには」

父や母からは料理のひとつやふたつできないと話にならない、なんて言われてトレセン学園に来る前は度々一緒に料理をしていた。

決してキメ細やかに作るタイプではないが、基本くらいは修めているので凝ったものでもなければ作れる。

「エツちゃんお願い! ファル子のウマチューブチャンネルに出演してほしいの!」

「なぜだ……というか、料理と何の関係が?」

「実はね、ファンを増やすためにフクキタルちゃんに相談に乗ってもらったんだけど……」

「まずフクキタルに相談をするな」

「そしたら……」

『料理動画……料理動画を投稿してファンを増やすのが大吉です!』

「……それなら逃げ切りシスターズのメンバーに頼めばいいのではないか?」

「それなんだけど……スズカちゃんは料理に興味ないどころか食事に対する興味もちょっと怪しいくらいだし……」

「走ることが最優先なやつだからな」

「ブルボンちゃんはこの前オーブンとガスコンロと電子レンジと冷蔵庫を故障させちゃって……」

「バットでも振り回したのか？ マルゼン先輩は？」

「マルゼン先輩はレースがあつて都合がつかないの」

「アイネス姉さんは料理上手だぞ？ 何度かご馳走してもらつていたが」

「アルバイトでアイネスちゃんも都合が合わなくて……」

「エイシンフラッシュも料理がうまかつたと思うが」

「フラッシュちゃんは前に出てもらつて好評だったんだけど……どちらかというとしピとかそつちのほうがウケちゃつて」

g単位で細かく量を測定するエイシンフラッシュともなれば、なるほど確かにと思う。

色々と人選を重ねた結果、私にたどり着いたらしい。

「まあ……別に暇してるから、構わない。ただ、あまり凝ったものは作れないし、ファンが増やせるかは……」

「ううん、協力してもらえただけでも嬉しいから！ それに、ファンを増やすのはファル子の魅力で頑張るから！」

「じゃあ助手も欲しいな……助手というか、賑やかともいえるが」

「それなら当てがあるよ！ とりあえずキッチンを借りる許可は貰ったから……エツちゃんも助手さんが料理をして、私が料理中にお話を振ったり、食レポしたりするから！」

「……料理しないのか？」

「う、その……気の利いた話題を振りながら料理をする自信はあまりないかな……」

「——というわけで、今日のファル子のウマドルちゃんねる！ のゲストはグレートエスケーププちゃんとなイスネイチャちゃんです！」

「お、おいつす……って、本当にアタシでいいの？」

「よろしく。ネイチャが適任だと思ったからいいんだ。というわけで今日はファル子先輩に料理を作っていく」

「ちなみにどんな？」

「うーん、じゃあ、食べ応えがあるご飯がいいな！」

キッチンカウンターの前に座るファル子先輩がリクエストをあげた。

食べ応えのあるものと考えると、やはり肉だろうか。

ウマ娘はすべからくアスリートであり、筋肉を作るたんぱく質は欠かせない。

そしてそのたんぱく質を得るにはやはり肉だ。

「ネイチャ。まずはグラスを三つと氷を用意してくれ」

「ほいほい」

私は冷蔵庫の中からコーラを取り出した。

「まずコーラを人数分用意する。このとき氷は確実に入れたほうがいい。グラスが冷えていたらベストだ」

グラスにコーラを注ぐとしゅわしゅわと音を立てて炭酸が弾けた。

うーん、この音がたまらない。

「はい、乾杯」

「え？ か、乾杯」

「かんぱーい」

三人でごくごく喉を鳴らしてコーラを注ぎ込む。

「ふはー、生き返るな……」

「なんでいきなりコーラを飲んでるんですかエスケープさんや」

「まずはコーラを入れてエンジンをかけなくてはな」

「エツちゃん撮影始まつてるんですけど！　そしてコーラのペースが早い！」

「企業名とか言うのはまずいかね？」

「えっ、あつ、うん」

「とりあえず飲みながら用意しようか」

私は材料を冷蔵庫から出していく。

鶏肉、キャベツ、トマト、ニンジン。にんにく。調味料としてオリーブオイル、ヨーグルト、唐辛子、ターメリックパウダー、シナモン、塩に小麦粉に牛乳。

台所を占拠するこいつらを料理にしていこう。

「まず野菜をカットする」

「ってちよいちよいちよーい！ ストップ！ エスケープさん随分とダイナミックな包

丁の使い方をしますねえ!」

「ダメか?」

「いやあダメじゃないけど、危なくない?」

「切ればいいだろう」

「いやいや、そこはなんといいですか……料理はほら、愛情……とか、大切ですし? 丁

寧にやらないとさ……」

「愛情か。なるほど、ではネイチヤ、愛情いっぱい野菜カットを任せよう」

「はいはい、まかされましたよ」と

ネイチヤは慣れた手つきで野菜を細かに刻んでいく。

私よりも洗練されており、派手ではないが繰り返し料理を行ってきた者の包丁さばきってやつだった。

「料理は愛情、そしてこの包丁さばき。ネイチャが結婚したら良いお嫁さんになるな」「そうだよね！ ネイチャちゃんの女子力高くてすごいと思うよ！」

「あははー、アタシみたいな地味な女の子と結婚したがる物好きさんはいるんですねー」

絶対にいるだろうと、カメラに眩きつつ、コーラを三人のグラスに注いだ。

流石にネイチャに任せきりも悪いから、調味料を混ぜ合わせていく。

「視聴者のみんな。にんにくは適当に潰そう。ウマ娘なら指先の握力ですり潰せるぞ」

「エツちゃんもう少し画面映えというか、女子力を……」

「料理は楽ししたものの勝ちだと思う。鶏肉もカットする。ネイチャのように細やかではないが焼けば形は変わる。気にしなくていい」

「あつれえなんだか料理が女の子っぽくないよ！」

カットした鶏肉を混ぜ合わせた調味料に混ぜ合わせ、しばらく潰ける。

「調味料の量は？」

「レシピにまとめたからこれを見てもらうといい」

「ふむふむ……全部適当じゃん！ 大雑把すぎるよ！」

「味付けは濃くしておけば大体美味いから平気だ。コツは砂糖の量を恐れないこと。自分の思う2倍くらい入れよう」

「そんなわけないでしょ!」

その間に牛乳と小麦粉を混ぜ合わせながら生地を作っていく。

少し沈黙が流れてしまったのでカメラに一言。

「生地は厚いほどいい。応援グッズを買うときに使うお金と同じだ」

「やめなさい」

「エツちゃんそういうこというのにファン多いよね……ズバズバ言う系ウマドル……」

「？」

「真似しちゃダメでしょこれは……というわけで切り終わったよ」

「流石ナイスネイチャ仕事早い。お嫁さんに欲しいな」

「いやー、アタシはお金持ちでイケメンな彼氏募集してるんでー」

「だ、そうなのでファンのみんなは頑張ると良い」

「ちよつ、何言ってるんですかね!」

鶏肉が浸かり終わるまでしばらくコーラを飲みつつ歓談タイム。

トークということでファル子先輩が取り仕切った。

「ウマドルファル子からゲストさんへ質問コーナー! 二人はレース前の勝負メシって

ある？」

「あたしは……あたりめとかちよつと食べた。おっさんくさいでしょ」

「ううん！ お手軽に食べられて良いと思うな！ エツちゃんは？」

「私か。勝負メシはそうだな……無難に消化のいいものを食べている」

「やつぱりアスリートだもんね！ 合理的！」

「エスケープさんこんなこと言ってるけど、普段の食生活は結構ジャンク、ジャンク、ジャンクだよ」

「否定はしない。今日作るのもいわゆるファストフードだからな。ではそろそろ肉を出すか」

鶏肉を取り出すとフライパンでグリルチキンにしていく。

「ここで追加のコーラを入れる」

「ちよちよちよ、エツちゃん！ なんだかもう飲兵衛料理みたいになってる」

「ネイチャもなんだかんだ飲んでるしいいじゃないか」

「え!? あー、火のそばにいると暑くてねー」

「全然可愛さに溢れてないよお……」

「肉を焼いたらカットした野菜と一緒にさつき使った生地の上に乗せてオーブンで焼く。あとは……これ」

「またコーラ……じゃない！ それは高級なキャロットジュース！」

「今日に行くところまで行きます」

「どこに？」

女3人集まれば姦しいといったもので、お喋りしているうちにオーブンが音を鳴らして終了を知らせてくれた。

お皿に乗せれば――

「完成！ 『チキンシャワルマ』！ ケバブともいうが地域によって呼び方は変わる。

ビールに合うらしい。両親はそう言っていた」

「美味しそう！」

「結構大雑把なのに見た目は綺麗……」

「ファストフードだからな。材料さえ用意しておけばすぐ用意できるのがいいところだ」

というわけで。

「「いただきますーす！」」

「美味しいっ！ お肉の香ばしさと少しピリ辛風味で食欲が増してくるよ！ 美味しい

！ エッチちゃんすごいよ！」

「ありがとう。ネイチャは？」

「……食べて思ったよ。全国のケbab屋、潰れるね」

ネイチヤのジョークにファル子先輩と私は大笑いした。

コーラとシャルワルマを味わいながら、三人で色んな話をしていたのだった。

後日、うまチューブにアップしたところ、たちまち再生回数が増加。

『ウマドル目指してるんだ、可愛い!』『ライブも綺麗だし走りもかっこいい!』『ナイスネイチャちゃんのお媚さんに立候補したい……』『グレートエスケープがやる料理屋の常連になりたい』というコメントが多く見られ、ウマドルたるスマートファルコン、さらに逃げ切りシスターズまで人気が増した。

ファル子先輩の役に立てて良かったと安堵し、また料理を試してみようかなんて考えるのだった。

第33話 翼を広げて

アタシは男の人が苦手だ。レースの時も、見られていると思うと緊張して力を発揮できない時がある。

トレセン学園はウマ娘ばかりだから、あまり不便に感じることは無いのだけど……男の人と同じくらい、苦手なウマ娘がいる。

名前はグレートエスケープ。尊敬している、グルーヴ先輩のライバルと名高いウマ娘だ。

あまり関わりはなかったのだけれど、よくグルーヴ先輩に怒られている姿を見かけていたから、いわゆる素行の悪いウマ娘なのかと思っていた。

そして鋭い視線や雰囲気から、男性的な怖さを覚えてもいた。

そんな苦手な先輩なのだけれど——なぜか、グレ先輩が運転するバイクの後部シートに、アタシは跨っていた。

「ドーベルちゃん。大丈夫か？」

「え、ええ、大丈夫です……」

どるるん、という重低音。

バイクなんて乗ったことがなかったから、怖くてグレ先輩の胴体に腕を回して力を込めてしまおう。

事の発端は、突然だった。

スポーツ用品の他に日用品とか、必要なものがたくさんあったから買い物に出かけようとトレセン学園の校門を出た時のこと。

トレセン学園の塀の一面がぱかりと開くと、中から唸り声のようなエンジン音を響かせながら、バイクを押し人影がのそのそと現れたのだ。

明らかに不審者で、恐怖を覚えた私は、グルーヴ先輩が珍しく呟いた愚痴を思い出した。

『エスケープのヤツめ……トレセン学園に何個違法ガレージを作っているんだ。しかも中々見つからない……!』

その言葉があったから、不審者の正体がグレートエスケープ先輩であつて欲しいと願いながら、声をかけた。

「ぐ、グレートエスケープ先輩……ですよね?」

ヘルメットにライダージャケット。

スラリと伸びた手足は鋭いナイフのような雰囲気を漂わせていて、はつきり言つて怖かった。

その影は、ヘルメットを脱いだ。

見たことがある顔——グレートエスケープ先輩。

不審者じゃなかったことに安堵していたら、グレートエスケープがこちらに近づいてきた。

「見たな？」

「えっ？」

「私がバイクで出てくるところを、見たな？」

「えっ、あつ、はい……」

「……被りなさい」

「え？ な、なんで」

アタシがまごつくくと、ヘルメットを強制的に被らされ、いきなり担ぎあげられた。

「ちよ、なんですか!? や、やめ、た、たすけてライアン！ グルーヴ先輩！ たすけてー！」

……というわけで、拉致同然にバイクに乗せられて、今に至る。

「ドーベルちゃん拗ねてるのか？ 悪かったと思ってるよ。だがあのまま見逃せば、君はエアグルーヴに告げ口していただろう？」

「当たり前です！ まさか本当にバイクのガレージを作っているなんて……」

「街まで送るから黙っていてくれ。これで実質共犯だからな」

「そ、そんなあ!?! 感謝しますけど、それとは別じやないですか!」

「悪かった。パフエも付けるぞ」

「マツクイーンじやないんだから釣られませんかよ、そんなもので」

ぶおんぶおんとバイクのエンジンの鳴り響く。

バスを待つて行くよりは快適なのは、事実だった。

しかし、アタシにとってグレートエスケープ先輩は怖い先輩というのは何も変わらなかった。

初めて見たあの日から——ずっと。

例え、気を使って色々と話してくれていたとしても。

グレ先輩から振られる話題に相槌を打っていると、バスのように停留所で止まることも無く、あつというまに駅前までたどり着いた。

「とにかく……送つて貰えたことは感謝してますけど……エアグルーヴ先輩に聞かれたら秘密にはしませんよ」

「自分から言わないでいてくれるだけでも助かる。いやあ、最近生徒会室に仕掛けていた盗聴器がバレて大目玉を食らったばかりなんだ。流星に連続はまずい」

なにをしてるんだろう、この人は。

ルールは守るものであると教えられてきたアタシにとって、横紙破りを平然と行うこの先輩は苦手意識が拭えなかった。

悪い人ではない？ とは、思うのだけど……。

「付き合ってもらって悪かったな。では……この借りはいつか返すでしょう」
「はあ……わかり、ました……」

グレ先輩のバイクから降り、シヨッピングモールに向かおうとしたときだった。
パシヤ、という音と眩しいフラッシュ。

「おお、あれメジロドーベルじゃね?！」

「すげえ本物だ! 写真撮つところ!」

連続して焚かれるフラッシュ。

若い男の2人組はスマホをこちらに向けて連続してシャッターを切った。

「ちよ、ちよつと……撮影は……!」

「いいじゃんちよつとくらい。有名人なんだからさ」

「そーそー。ファンの要望に応えるのもスターウマ娘の義務つてやつだろ!」

「や、やめ……て……」

いきなり撮影された嫌悪感と、無遠慮な態度による恐怖に対して、断りたいが上手く声に出せない。

どうすればわからなくて、涙が滲んできたそのとき。

アタシの顔にサングラスがかけられた。

そして、前に背中が現れる。

「やめたまえ。彼女は今、プライベートの時間だ。断りもなく写真を撮るのは、常識外れではないかな」

「ぐ、グレ先輩……!?!」

アタシを庇うように立つのは、グレートエスケープ先輩だった。

サングラスで少し見づらかったが、一度振り向くと、優しく微笑んだように見えた。

「断りもないわけじゃないでしょ！一言言ったし。てか、別に写真くらい、いいだろ。減るもんじゃないし」

「そーだそーだ！というか、あんたグレートエスケープじゃん！」

「ああ、海外遠征して負けて帰ってきたとかいう……有名人だけど、期待を裏切っちゃったのによくでかい態度をとれるな」

グレートエスケープ先輩は有名人だ。

ついこの間、海外のレースに出走したときは多くの人々から応援されていたし、テレビ中継もされていた。

しかし、結果は残せず7着。

期待外れとか、メディアでも色々と言われていたという。

そのことについてグルーヴ先輩が怒っていたのを覚えている。

『勝利に対する執念が欠けているだろ？ アイツほど勝利に飢え、努力を怠らないウマ娘など、そうはいない。それでも負けることもあるのがレースというものだ。勝手なことを言いおつて！』

あまり、気にはしていなかったけど、アタシだって負けたくて負けることはないし、どんなレースも勝つつもりで走っている。

自分やグルーヴ先輩が、そんなふうに使われたら耐えられないだろう。

思わずアタシが言い返しそうになったところで、グレ先輩は肩を竦めた。

「まったく耳が痛い。私も、それを言われたらなにも反論できないな。勝たなければ意味がないのは、事実だ」

「自分で言うなら世話ないな！」

「反省しろ、反省」

「その点ドーベルちゃんはこの前のエリザベス女王杯では勝利してみせた。後輩ながら、私もウカウカしてられない。そこは君たちもわかっているだろう？」

「え、まあ、そりゃ……」

「すごいウマ娘だろ、当然」

グレ先輩は指を鳴らした。

「ならばこそ、彼女の写真を勝手に撮るのは許されないことではないかな？ 雑誌の記者は皆、トレセン学園を通して取材し、その上で撮影している。だというのに、プライベートで便乗するというのは、いやはや——マナーがなっていないどころか、価値を貶めているとすら言える」

「うぐ……」

「ぐつ……」

「君たちはあくまでファンなのだろう？ ドーベルちゃんを貶めたいわけではない。ならば、撮影する前に許可を確認する姿が、ファンというものではないかな」

「すみません……」

「ごめんなさい……」

「謝る相手は私ではないだろう？」

すると、二人組の若い男はアタシに向かって、深々と頭を下げた。

「わ、わ、そんな、えと……もう、やらなければ別にいいし……」

「メジロドーベルさん！ 応援してるんで！ 頑張ってください！ すみませんでした！」

「自分も！ またG I勝つところ見たいと思ってるんで……失礼しました！」

二人組の男は頭を下げるなり、逃げるように走って行ってしまった。

スピード感にポカンとしていたが、グレ先輩が機転を利かせてくれたおかげで、助かったことを思い出して、慌てて頭を下げた。

「あのつ、ありがとうございました！」

「構わないさ。時々マナーの悪いファンもいるが……まあ、全部が全部そうではないから。大目に見てやってくれ」

「でも……アタシを庇ったせいで、グレ先輩が悪く言われて……本当に、ごめんなさい……」

あの場で私のはっきりと断れていれば、グレ先輩が庇う必要はなく、そして悪しざまに罵られることもなかったはずだ。

自分が不甲斐ないせいで、先輩が傷つけられてしまった。

グレ先輩がかけてくれたサングラスの中で、涙が滲み、視界がぼやける。

「気にすることは無い。負けた者には、相応の結果が降りかかるものだ」

「そんなことは！　グレ先輩だつて負けたくて負けたくて負けたわけではないのに！　傷つかないはずなんか……傷ついていいわけじゃないじゃないですか……！」

悔しくて、声が涙に詰まる。

そんなアタシに対して、グレ先輩は困ったように笑った。

「じゃあ——ちよつとデートに付き合ってくれないか？」

「え……？」

「なに、一人では行きづらい場所についてきてくれればいいだけさ」

気づけば、グレ先輩と一緒に並んでシヨッピングモールを歩いている。

なぜかアタシはサングラスをかけたまま。

「あの、かえつて目立ってないですか、アタシ……」

「気にすることはない。みんな、私を見ているんだろう。これでも有名人だからな」

肩に手をまわされ、抱き寄せられる。

グレ先輩は背が高く、身体が密着すると鍛え抜かれた筋肉に包まれるようで、安心感と気恥ずかしさが湧いてきた。

「先にドーベルちゃん用の事を済ませるといい。私がついていくと困るなら、店の外で待たせてもらうよ」

「い、いえ、困るなんて全然……」

そして買い物が終わると、グレ先輩に耳元で囁かれた。

「今度は私に付き合ってもらおうとしよう」

「は、はい……アタシにできることなら、なんでもします……！」

「そんな肩に力入れなくても構わんよ。少し『休憩』がしたいだけさ。二人で、ね」

アタシは生睡を飲み込んだ。

笑みを浮かべるグレ先輩は、何かを楽しみにしているかのようで、まるで取って食われるような恐怖感を何故か覚えた。

そして連れてこられたのは――

「美味しい……たまにはスナック菓子と炭酸飲料ではなく、コーヒーとスイーツというのも悪くない」

シヨップینگモールの一画にある、スイーツカフェ。

グレ先輩は美味しそうにキャラットパフェを頬張り、表情を緩ませている。

「な、なんだか意外です……あまり甘いものを食べてるイメージがなかったので……」

「そうかな？ まあ、私もこう見えて欲望に弱いタチだね。競技に参加するウマ娘でなかったら、だらしない体型をしたウマ娘になっていたかもしれない」

「ええ……そんなこと……」

「私にどんなイメージがあったのか、気になるところだな……」

紅茶に口をつけると同時に、グレ先輩もコーヒーをちびちびと飲んでいた。

同時にカップを置いた。

「初めて見たとき、グレ先輩は怖いウマ娘だと……思っていました」

初めて見たのは、入学してから学園に慣れ始めたころ。

クラスで模擬レースを行ったあと、上級生が走るということでクラスメートと見学することになった。

そのレースで走っていたグルーブ先輩に憧れを覚え、そして——グレ先輩の姿に恐怖を覚えた。

模擬レースで敗戦したグレ先輩は、勝ったウマ娘を恐ろしい形相で睨んでいた。

負けた自分が許せないのか、周囲の芝生が燃え上がりそうなほどのオーラで、そのとき私は春の陽気の中、鳥肌が立ったのを覚えている。

模擬レースで敗北したことで、あそこまで恐ろしい雰囲気を感じたのか。

そして、それと同じくらい思ったことが——負けたときに、あそこまで悔しがれるものなのか、と。

それ以来、グレ先輩のことはずっとストイックかつ、勝利至上主義なウマ娘だと思っ
て近寄りたいたいと感じていた。

「でも——今日は、怖いとは思いませんでした。優しくて、お茶目で、頼れる……素敵な先輩なんだと、わかりましたから」

「ほ、褒め殺しかね。流石に照れるな……」

はにかみながら前髪を弄る姿は、大人びた普段の姿からは想像つかないあどけなさを醸
醸していて、歳の近いウマ娘であることに変わりはないんだと安心した。

このあと、グレ先輩とたくさんのお話をし、トレセン学園に帰るのにまた送ってもらってしまった。

グレ先輩のことをたくさん知れた一日だった。

ガレッジにバイクを置きに行ったグレ先輩と別れて、寮へ戻る途中で、グルーヴ先輩と偶然ばったり、会った。

「こんばんは、グルーヴ先輩。遅くまで残っていたんですね」

「お、おお、ドーベルか……生徒会の仕事で、少し、な。ところで……それはなんだ？」

「それ……あつ、預かったままだった……！」

アタシは目の前にかかったままの、グレ先輩にかけてもらったパイロットサングラスを外した。

手に取ってみると、ピカピカで大切にしていることがよくわかった。

明日、返しに行かなくては。

「ドーベル……まさかエスケープのものか、それは」

「え、ええ、そうです。お借りしたままで……」

「何もされなかったか？ 変なことを言われたりは？」

「えっ!? いえ、むしろ助けてもらって……」

「そ、そうか。……ドーベル、ルールはルールだからな。規律は守るものだぞ」

「え……？ もちろんですけど……」

グルーヴ先輩の言葉に首を傾げつつ、美浦寮に戻る。

サングラスを保管するケースを持っていないから、部屋に戻るまで額にサングラスをかけていたら、それを見たライアンとアルダンに「ドーベルがグレちやった！」と騒がれたりもしたけど——最終的には、いい一日だと思えたのだった。

×××

「カナタには言うまでもないが、グレ坊。エクリプスステークスはGⅠ、当然ラビットが出てくる」

兎か？ 兎さんが出てくるの？ なにそれカワイイ……というのは冗談だ。日本競馬は勝つ意志がないのに出走することはできないため、どこまでいっても個人戦だが、欧州はいわゆるチーム戦の傾向がある。

その一つにラビットというものがある。

早い話がペースメーカーであり、スローペースになりやすい欧州競馬で前残りを避けるため、レースを引っ張ったり、進路の確保や折り合いに専念するための壁になる役目の馬のことをいう。

もちろん、露骨に進路妨害なんてすれば失格モノだが、他の有力馬を楽に走らせないようにするのも仕事だ。

黒井先生はそれを警戒している。

「グレ坊、お前は賢い馬やが、だからこそ危険や。慣れない戦法、攪乱、展開……お前はそれになまじ対応しようとするから、ごちゃついて力を発揮できないことがある。今回、それは起こさないようにするんやで。ラビットに注意や」

了解です先生！ 俺は絶対にペースメーカーの馬のせいで自分の走りを見失う真似はしないと誓います！

「よっしゃ行つてこい！ 欧州にグレートエスケープの名前を知らしめてくるんや！」

——とかレース前に話していたなア。

ニューマーケットに帰ってくるなり、馬体の検査を終えてから黒井先生、西京さん、白村、そしてカナタさんが顔を突き合わせていた。

「カナタ、今回の敗因はなんや」

「少し控えさせたのが裏目に出ましたね。先行してもいける馬なので、2番手で窺おうとしましたが、途中からしばらく力んでいました。最後は頑張ってくれましたけど、脚が残っていませんでした」

俺に言い訳をさせてもらえるなら、未経験が故の敗戦と言いたかった。

今回は出たなりにポジションをつけてレースを進めるといふもので、カナタさんに一任されていた。

そして絶好のスタートを決めた俺はハナを立とうとスピードを出したのだが——
「いくぜエーッ、ぐえっ!?!」

——カナタさんに手綱を引かれて制される。

控えて2、3番手というところでレースを進めることになったが、先頭の馬がいわゆる他の陣営のペースメーカーだった。

俺としてはさっさとハナを奪ってしまえばよかったんじゃないのかと思つたが、カナタさんの勝負勘がそうではないと考えたのだろう。

それに従い、2番手をとるが、レースは想定よりスローペースで流れて行つた。

だがこれはこれで都合がいい。

ある程度リードをとつた状態で、直線で末脚を發揮させる。

逃げ馬の勝ち方の定番であり、俺にとつても文句なしの勝ち方のそれ。

ポジションを押し上げるために俺は脚に力を込めた。

「よっしやいグエーッ!?!」

だがしかし、再度止められてしまう。

このままじゃただのスローペースではあるが、後ろの馬と並んだ状態で直線を迎えてしまう。

スタミナとパワーがモノをいう欧州競馬といえど、末脚勝負となるとやはり分が悪い。

カナタさんも、それはよくわかっているはずだ。

天皇賞・春はスローペースで俺が逃げ切って勝ったのだから。

しかし先頭に立とうとしても、抑え込まれたまま。俺はペースを乱してしまい、直線では体力を切らして大敗してしまった。

「ラビットにかかってしまったか……？　これも競馬やから、こういうことはあると思うが」

「グレ坊は頭が良すぎて、他の馬を気にしすぎてしまうんですよ。そういう意味でも、逃がしたほうがやはりいいのでは？」

「いえ——今日の敗戦は織り込み済みです」

考え込む黒井先生と、白村にそう言ったのは、カナタさん。

「キングジョージは恐らく少頭数でのレースになります。そうなると逃げて勝つのは難しくなります」

「確かに……標的にされやすくなるし、後ろから突かれるやろな。つまり、今日はわざと

控えさせたのか?」

「少なくとも、逃げるつもりはなかったですね。控えてどこまでいけるか、その判断をするために走りました」

なんだ、この違和感は。

「……うん? まあ、それはわかるんですけど……滝騎手、それだと——」

「流石、滝カナタや。先を見据えてよくやってくれている。今のうちにもっと話したいわ!」

「え? 先生、あの、滝騎手のことなんですけど」

「白村ア! お前はトップジョッキーにアヤつけるんか!? お前にはお前の仕事があるやろ、向こうに行つとき!」

「ちよ! なんですですか! まって、西京さん引つ張らな……力強ッ!」

白村の言葉が封殺される。彼も違和感を覚えているらしいが、黒井先生の鶴の一声で反論の余地はなくなった。

それどころか、西京さんが白村の首根っこを掴んで引つ張つていった。

あいつ本当不憫だな。

「……カナタ、ここに居るのはグレ坊と、俺だけや。ここからは腹を割って話そうや」

「……本当、敵わないですね。ちなみに、控える競馬を覚えさせようとしたのは、全部が

嘘じゃないですからね」

「当たり前や。逃げ一辺倒の馬に育てた覚えはないが、欧州でも控えた競馬ができるようにすべきやと思つていたからな。馬やない、お前の話や」

——滝騎手の話？

とはいえ、レースと、その後のカナタさんの振る舞いには違和感が多くあつた。

まずレース中——もちろん、控えた競馬をするのはわかる。超ハイペースなのに逃げて逆噴射するなんてアホなことこの上ない。

実際、先行して勝つたレースもたくさんある。

だが、今日のレースは早い段階でポジションをとりに行くべきだったが、カナタさんは中々ペースを上げなかった。

そしてさっきの会話。

カナタさんは俺が逃げる、或いは早めに先頭に立つレースが合つてゐることをよく理解している。

だというのに、逃げるつもりがなく、それでいて早めに先頭に立つことはしなかつた。直線でスパートをかけるようなレースは合わないというのに。

「カナタ。単刀直入に聞く。……お前、逃げ馬に今乗れないとちゃうんか？ いや、厳密にはレースで逃げられないんじゃないのか？」

——!?

どういうことだ。

俺は驚きのあまり、馬房から身を乗り出しそうになった。

淡々と語り出すカナタさんからは、感情を押し殺した匂いがした。

「——ええ。俺は今、レースで逃げられません。厳密に言うと、レースを引つ張る馬がいなくて、自然と前に押し出されるような展開は問題ありません。ただ、意識してハナをとり、先頭でレースを進めることができなくなっています」

嘘だろ、と叫び出しそうになるが、今日のレースを考えると、一番納得いく答えだった。

その原因は、時を経ずにすぐ思い至った。

「サイレンススズカか」

「……はい」

「いつからや」

「自覚したのは——今日が初めてです。自分で気づいてから、あのとときからずっと、逃げていないことに思い至りました。僕は良い馬を回してもらえるので、勝利するのはもちろん、競馬を覚えさせるといっても多くやります。GIでもない平場では、安易に逃がさず、控えて競馬を覚えさせるといふことがありますから、今までずっと気が付きま

せんでした。思えばずっと、無意識に避けていたんですね」

カナタさんは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

ここで悲しみではなく、悔しさを浮かべる姿はまさしく勝負師が故なのだろう。

日本競馬における一番の勝負師が、苦しんでいた。

「前走では逃げていたやないか。あれはちやうのか」

「あのときは相手関係も苦しくなかつたですし、逃げ馬もいなかつたので自然と前に出れましたからね。今思うと、仕掛けにかなり余裕を持っていました」

「そうか。参つたな……ホンマに、参つた」

「……すみま——」

「謝るんやない。騎手の乗り替わりは常なのはお前もよくわかつとるはずや。そこで謝つたら、いつまでもこのことを引きずることになる」

……え。

ちよつと待って、また乗り替わり!?

それは嫌だ! 困る! 欧州の慣れない環境で走る以上、少しでも息の合った騎手に乗ってもらいたいし、連携を密にとつた上で俺は走りたい。

だというのに欧州のジョッキーカーとかに乗り替わつたら、これまでの通りのパフォーマンスを発揮できるかわからない。

綻びは、ロンシャンやアスコットの直線残り50mのような土壇場になって現れる。ケンちゃんに乗れない今、カナタさんから別の騎手に乗り替わって勝てるような世界ではないはずだ。

俺は抗議も兼ねて、カナタさんの袖を噛んで捕まえようとして、届かず未遂に終わった。

そんな俺を黒井先生は見ていた。

「カナタ、グレ坊に乗りたいか？」

「……もちろん、乗りたいです。ジョッキーの夢である、キングジョージと凱旋門賞に手が届く馬ですから」

「じゃあ決まりや。カナタでいく」

「えっ!? いえ、ありがたいことですが……いいんですか?」

「いいわけあるか! いいわけあらへんわ……カナタを下ろした方が勝率が下がる……それだけのことや」

黒井先生……!

俺は礼をするつもりで頭を下げた。

「ただし! あくまでグレ坊優先や。乗り変わる方が勝率がいいと思っただら変えるで。せやから……キングジョージまでになんとかするんや!」

「はいッ！」

そして迎えた調教の日。

土日は日本で競馬に乗り、平日はニューマーケットに来て調教に乗るというハードスケジュールでカナタさんは調教に乗りに来ていた。

エクリプスステークスからキングジョージまで3週間、つまり中2週で挑むことになる。

追い切りは一本も無駄にできない——しかし最初の追い切りでは、あっさりといいタイムで終えてしまった。

何も問題はなく、スムーズに併せ馬を行い、スパートをかけた。カナタさんの乗り方に不満もない。

……よく考えたらレースでできないことを、調教で解決できるわけなかったわ！

「滝騎手、どうでしたか？」

「白村さん……いい走りだったねえ。よくスピードがない、とか言われるけど、偏見だね。スタートからちゃんとかッシュできるし、ハナをとる先行力もある。スピードなかつたらGI勝てないしね。強いて言うなら、加速力が他より鈍いけど、相対的なものだから」

「そうなんですよ。トップスピードに乗るまで時間はかかりますけど、トップスピード

「なってからの維持はすごいんです」

「なんだかマックイーンを思い出します。毛並みや体格は違いますけど、心肺機能が優れていますし。やっぱリステイヤー気質ですよ。あと、顔がいい。強い馬はみんな良い顔してますよ。人間だったらモテたでしょうね」

「ははは、ハンサムなのは入厩したときから言われてましたから。我々も最初は菊花賞はとれるんじゃないか、と思ってたんですけど……2歳の年末に2000mで勝ったでしょう？ 三冠を意識しましたよね……」

「僕が乗ってたら三冠とれたかもしれないですよ？」

のんびり話してる場合かあーッ！ 嬉しいけど！

俺がぶるりと身を震わすと二人は少し慌てた。

「あ、梶田騎手のことが好きだから怒ったのかも」

「賢い馬ですよ、本当に」

「ええ、まったく」

ちがーう！

そんな和気藹々と話していてどうするっていうんですかあーッ！

俺はなぜかのんびりしている二人に怒りたくなかった。というか、怒った。そうしたら、白村があちやーとでも言いたげな表情を浮かべた。

「うーん、やっぱり我々の気配に感付いているのかもしれないね……焦りが伝わっているのかも」

「やっぱり馬は敏感ですからね……ごめんなグレートエスケープ……ストレスだよな」

うん？ うん……？

あつ、そういうことか。

俺は二人の態度を理解すると共に、申し訳ない思いでいっぱいになった。

二人は俺を気負わせないために、あくまで自然体で振舞っていたに過ぎなかったのだ。

すみませんでした生意気言つて……。

「あ、大人しくなった」

「甘えん坊なんですネ」

とはいえ、逃げができないとなると苦しくなるのは事実。

まずなぜ逃げられないのか、そこから考えよう。

来週は最終追い切り。そこを終えたらカナタさんが俺に乗る機会はレース当日まではない。

しかし、どうしたものか。

調教を終えるなり、バトラーが出迎えてくれた。

「グレ様。このあとはシャワーの時間でございます。その後にブラッシング、削蹄、蹄鉄の打ち替えがあります。朝食はその後となっております。午後に身体検査、マツサージを予定しています」

「ありがとうございます……ふう」

「お疲れのようですね」

「調教後だから……それと、悩みがあつて……バトラーさん、質問というか、愚痴でもあるんだけど、いいかな」

「しがない老馬でよろしければ」

俺はかいつまんでバトラーに話した。

騎手のカナタさんが上手く乗れないこと、どうしたら克服できるのかを考えていること——口にすることで情報が整理されるというのが、解決策は思いつかなかつた。

バトラーは「ふうむ」と唸つた。

「老いた競走馬の戯言と思つてくだされば……かのサイレンススズカ様と、グレ様は別の馬でございます。それを理解してもらうしかないのではありませんか？」

「その通りなんだけど、頭で理解していても、心というものは上手く操れないものだからなア……」

「いやはや、爺には難しい話題でしたな。そもそも、この老骨は逃げようにもレースにつ

いていくのが精一杯でした。前を走れませんから、羨ましい限りでございます。懐かしいですなあ……逃げて強い馬が同期にしまして。そんな馬がGIを勝つのだろうと思っていました。その馬は後に皐月賞、日本ダービー両方を制しました。グレ様やスズカ様のような、快速ぶりは爺の眼には眩しく映りますね」

「へー、そうだったんですか……ん？ スピード……スピード、かあ」

「グレ様？ なにか名案でも思いつきましたか？」

「ああ。バトラーさん、助かったよ……次の追い切りでは少し危険な賭けをするけども……」

「賭け、ですか？」

不思議そうに首をかしげるバトラーさんに、俺は笑みを浮かべるだけだった。

そして、迎えた最終追い切りの日。

この追い切りを終えれば、いよいよキングジョージ6世&クイーンエリザベスステークスを迎える。

天才ジョッキ、滝カナタはいつも通りの優しそうな表情で、俺の前にやってきた。

「しつかり走ろうか、グレートエスケープ」

いつもだったら顔を押し付けて、甘えたりするが——今日の俺はハードに行く。

優しく言うこと聞くグレートエスケープじゃないぞ。

「……………」

眼光を飛ばしてカナタさんを睨みつける。

彼はまだ、スズカのことを引きずっているからこそ、競馬で逃げる事が出来ない。だが俺は違う。

俺はサイレンススズカじゃない。

俺はグレートエスケープだ。

似ても似つかないことをよく理解してもらわないと困る。

ついでに、俺の方がイケメンだ。

「なんだかグレートエスケープはいつもと違いますね」

「……………レースが近づいてピリピリしてるんやな」

黒井先生は俺をチラ、と見ると、ため息をついた。

「体の出来は先週でほぼ万全や。今回は……………疲れすぎないことと、怪我をしないことさえ守りさえすれば、それでええわ」

そう言う表情は半ば呆れているようだった。

なんだか先生だけは、俺がやろうとしていることに気がついていらしかったが、止めはしなかった。

カナタさんが俺に跨る。

「……馬なりや。今日は馬なりにロングヒル（7ハロン）を走ってこい。カナタ、馬に任せるんやで」

「え、ええ。わかりました……行こか、グレートエスケープ」

コースへ向けて歩きながら、カナタさんは苦笑いを浮かべていた。

「調教もあんなに念入りに言われるなんて、信用されなくなっちゃったかな……」

「そういう訳では無いと思いますけど……」

白村が俺を引きながら答えた。

調教コースに着くと、そのまま走り出した。

——カナタさん。貴方がサイレンススズカとの記憶が原因で、前に踏み出せないというのなら。

俺が無理やりにも前に引つ張ってやる。

貴方には、ケンちゃんの代わりに初めてキングジョージと凱旋門賞を制した騎手になってもらわれないといけないんだから。

「ん……ッ!!? ま、待って!」

流石にトップジョッキー、こちらに気づくのが早い。手綱を思い切り引いて、俺が走り出そうとするのを止めた。

だが、無駄だ。

今日の俺は、ちょっと引っ張られて苦しいくらいじゃ、止まらない。

俺はニューマーケット調教場の長いコースを全速力で走り出した。

緩やかで長い坂路だからスピードの持続には限界があるが、5ハロンだけを全力で走ることは可能だ。

「と、止まれッ、止まれッて！」

手綱を引かれ、左右に首を向かされ、上に釣り上げられようと、構わず真っ直ぐに走る。

流石にジョッキーだけあって落馬するようなことはなさそうだ。

俺は一度ジャンプすると、手綱が緩んだすきに啞えて奪い取った。

「あッ！」

カナタさんが叫ぶが早いか、俺は坂路を、調教ではありえないスピードで駆け上がった。

「や、やめろッ！」

聞こえねえ。

「こんなスピードで走り続けていたら、故障してしまう！」

聞こえねえ！

「やめてくれッ！」

聞こえねえっての！

「ハロンを超えた頃にはまるで、あのときのアイツが前を走っている——そんな、影が見えた。」

「スズカッ……」

カナタさんがその名前を呼ぶと、俺はありったけの力を込めて、前に脚を踏み出した。「俺を見ろッ!!」

「——!?!」

俺の背中に、まるで初めて馬に乗った少年のようにしがみつくとツブジョッキーが、顔を上げたような気がした。

「俺はグレートエスケープだ！ サイレンススズカじゃねえッ！ 俺をぶっ壊すかもしれない？ 舐めんな！ 俺はサイレンススズカよりも強いんだ、スズカが怪我しても、俺は怪我しないんだよ！」

所詮は馬の戯言、否、嘶きに過ぎない。

ましてや走りながらでヴヒヴヒ息を切らしているから、言葉にすらなっていないだろう。

それでも俺は叫んだ。

「本当にサイレンススズカより強いのか、試せるのはアンタくらいじゃないのか？ 悔し

くはないのか！　もしも怪我しなかったら、グレートエスケープにサイレンスズカは勝っていたと、言いたくないのか！」

「ッ……………」

「俺を全力で走らせねえと、それすらも言えねえだろ！　走らせてみる、滝カナタッ！」
調教コースの半ばまで走ってなお、滝カナタは俺にしがみついていた。

決して離さないとしがみつき、まるで何かに祈っているかのようだった。

「……………いいのかな」

風を切る中で、声がした。

涙で滲んだ、聞き取りづらい声だったが、確かに聞こえた。

「俺……………いいのかな……………グレートエスケープ……………君を全力で走らせても……………いいのかな……………」

今にもへばって立ち止まりそうになりながら、場違いなほど、軽やかな笑いが零れた。
「いいんだよ——貴方が走らせなかったら、誰がいるんだ。もう、自分を許しても、いいじゃないか」

その瞬間、啞えていた手綱をひったくられ、手綱が引かれた。

急ブレーキではない。

この手応えは、減速し、折り合うためのもの。

ようやくか。

俺は指示に従い、スピードを緩めて走った。

そして、息を入れた。

「いこうか——グレ」

「——！ もちろん……ケンちゃんを嫉妬させてやってくれよ」

鞭は要らなかった。

再加速すると、俺は矢のように残りのコースを駆け抜けた。

鞍上で、カナタさんが眩く。

「ああ——彼とは、全然違う景色だ」

「——当たり前だろ」

最終追い切りは、最もあつという間に、終わったような気がした。

○○○

調教を終えて厩舎に戻ると、白村が飛んできた。

「グレ坊どうしちゃったんですか!?! あんなにエキサイトしちゃって……!」

「いやあ、喧嘩してました」

「喧嘩ア!?!」

カナタさんがあつけらかなに言うと、白村は目を剥いた。

男の会話、喧嘩だな。うん。

遅れて、黒井先生が来た。

「カナタ、キングジョージはどうか。勝てそうか」

「競馬に絶対はありません。ですが……負けたら、僕は騎手をやめます」

「えッ!? いや、いや、比喩ですよね!」

白村が慌てる。俺も少し慌てた。

しかし、カナタさんと黒井先生だけは身動きひとつしなかった。

「……本気やな」

「本気です。健二からこれだけの馬を託されたんです。そして、この馬には、命懸けで助けられましたから……その覚悟で挑ませてもらいます」

「スペシャルに乗ってグラスワンダーに負けたときの、飄々さとは全然ちやうな」

「あれ、かなり悔しかったんですよ?」

「当たり前や」

本気なのか。

何もそこまで焚きつけるつもりはなかったんですよ、ただ元のように走らせることができたなら、それでよかったです。

なんて言い訳しても、もう通じない。

何がなんでもキングジョージを勝たなければ。

俺に負けられない理由が、またひとつ増えたのだった。

○○○

世界の競馬で、最高峰とされる格を持つレースはいくつもある。

アメリカのブリーダーズカップ・クラシック。

これはダート世界一を決める戦いだ。

アラブのドバイワールドカップ。

これは比較的歴史の浅いレースだが、優勝賞金約700万ドル(約8億3000万円)という破格の賞金があったという間に世界最高峰のダートレースに押し上げた。

イギリスのダービー。

エプソムダービーともいわれ、ダービーの中でも更に格があるとされる、欧州のホースマンの夢だ。

そして——フランスの凱旋門賞と、イギリスのキングジョージ6世&クイーンエリザベスステークス。

共に欧州で古馬と3歳馬が、クラシックデイズタンスで激突するレースだ。

そこに俺は挑むことになる。

パドックには西洋系の顔立ちの人がたくさんいるが、その中にも日本人が多くいて、

口々に俺への応援を発していた。

「日本のファンは随分と来てますね」

「調教師冥利に尽きるわ。こりゃ、負けられんわな」

欧州の競馬はパドックが短いから好きだ。

パドックが嫌いなわけじゃなくて、変な馬に絡まれることが多いからなんだけど。

周囲を見回すと、俺を除いて8頭ではあつたが、背中が冷たくなるようなオーラを放つ馬たちがいる。

「流石に強敵が多いな」

「ええ……強いのもたくさんいますね」

まず黒井先生が指差してから、馬をそれぞれ説明していく。

「1番人氣がオース……今年のイギリスダービー馬や」

「その後ろにいるのが、ダリアプールですね。イギリスダービー、アイルランドダービーをそれぞれ2着……斤量は5kg差ですからね、実績のある3歳馬は人氣になつていますよな」

「2番人氣はデイラミヤ。ここまでGI4勝、前走のコロネーションで勝利して勢いに乗っている」

「あ、インディジェナスも出てるんですね」

「香港最強馬やな。相手に文句なしや」

「グレ坊は3番人気ですか……エクリップステークスはちよつと負け過ぎましたね」

「人気なんてどうでもええわ。1着だけやぞ、カナタ」

「もちろん」

俺は俺で、共に出走するメンバーを見ていた。

その中に二頭だけ、圧倒的な貫禄を漂わせている馬に近付いて行つた。

「……よろしくな、イギリスは慣れなくてさ」

「キミは確か……日本とかいう国の馬だったか？」

「グレートエスケープという。君は、テイラミだな」

「ああ、そうだ——日本でエリシオやピルサドスキーといった馬たちが負けた相手……」

それが君だったな」

「知つてたのか……？」

「少しだけさ。ただ、思い出はあつた方がいいだろう？」

「思い出？」

「歴史的名馬に名を覚えてもらえている、という思い出だ。日本という狭い場所で王者を気取る狗が、獅子に挑もうとしているのだから、その程度の喜びを与えてやらねば、と思ふわけだよ」

思わず、俺は笑ってしまった。

デイルミと名乗った葦毛の馬は、面白くなさそうにムツとしている。

何がおかしい、と詰られるが、俺はなんだか爽快な気分だった。

「元々いた日本では、そんな風に正面から挑発してくるやつが少なくてな。どいつもいつも、頭がおかしいんじゃないか、そう思う奴らばかりだった」

いわずもがな、サンデーサイレンス産駒どもである。

気づいたら日本からこんなに離れた土地で、あいつらを懐かしく思うことがあるうとは、予想だにできなかった。

あいつらみんなどうしているだろうか。

レースで鎬を削った奴らだが、今も走っている奴はだいぶ少なくなってしまった。

頭がおかしいのと同じくらい、おかしい脚を持っていたり、心肺機能を持っていたやつがいた。

外敵のいない島で、食物連鎖の頂点を気取る狗——そう言われて、黙ってはいられない。

「そういう、頭がおかしいやつとずっと戦ってきたんだ。

——あまり無礼るなよ、野良猫が」

「少しは、骨がありそうだ。痩せ細った狗が噛むような、寂しい骨だが」

『皆さんお待ちせいたしました。XX99年は、日本の競走馬が欧州競馬に日本旋風を巻き起こそうとしています。去年はシーキングザパールが、タイキシャトルが、マイルや短距離で見事勝利を掴んで見せました。今年は、王道たる中距離路線に飛び込んだ馬が2頭います。フランスにエルコンドルパサー。イスパーン賞で2着のあと、サンクルー大賞で見事優勝し、次はフォワ賞から、最高峰のレース、凱旋門賞へ挑もうとしています。そのエルコンドルパサーに先んじて、アスコットで開催されるキングジョージ6世&クイーンエリザベスステークスというイギリス最高峰のレースに、挑もうとする馬がいます』

流石、競馬の本場であるイギリスで開催される最高峰のレースだけあって、観客がたくさんだ。

熱気は日本には劣るが、注目度は段違いだ。

「グレ坊。世界を獲りに行くで」

黒井先生は不敵な笑みで俺を送り出した。

カナタさんはいつも通り、というには少し表情が硬い雰囲気をもとっていた。

緊張しているのかもしれない。

俺は少しだけ前脚を上げて、びっくりさせてみた。

「うわ!! ……いや、ごめん。緊張が伝わったかな。せつかくのキングジョージだもんな……楽しんで」と

ちよつとだけ雰囲気は軽くなった。

気合い入れるにはこれが一番なのは、ケンちゃんとの日本ダービーから走ってきて、よく理解していた。

カナタさんが俺を撫でた。

「……ジョッキーはあくまで馬に乗ってくれと頼まれるしかない。だからトップジョッキーであれば、いい馬は集まってくる」

ほかの馬がゲートに入る。

俺も係員の誘導に従ってゲートへ収まった。

「俺は、サイレンススズカのような馬にまた出会ってみたい。そのためにトップで居続けなければならぬんだ。だから、グレ。俺をトップジョッキーでいさせてくれ」

これほどの騎手を、ここまで惚れこませるのか。

俺は嫉妬を通り越して感嘆の念を、サイレンススズカに抱いた。

しかし、サイレンススズカのような馬——か。

このレースが終わったとき、カナタさんはこう思うだろう。

「グレートエスケープのような馬にまた出会ってみたい」と。

『最後に9番のデイラミがゲートに収まりました。3歳時はマイル路線を走り、去年からは古馬路線に参戦。今年は充実の一途を辿っています。キングジョージ6世&クイーンエリザベスステークス、今スタートしました！ 1番のグレートエスケープは好スタートを切りました！』

ゲートが開くと同時に、ぽんと飛び出してハナを奪った。

絶好のスタートだ。

あとは鞍上に任せて、走るだけ。プリンカーもつけているしな。

『日本のグレートエスケープがハナを切りました！ やはりこの馬が逃げます。次にダリアプールとネダウイ、ネダウイはドバイシーマクラシックで2着でした。4番手にデイラミです。芦毛の馬体。その後ろにオース、フルーツオブラヴが続いて、香港最強馬インディジエナスがいて、その外にシルヴァーペイトリアーク、最後尾にサンシャインストーリートとなっています』

レースは淡々と流れていく。

誰も俺を突く真似はせず、自らの仕掛けどころを待っている。

『コーナーを回ってグレートエスケープは折り合って先頭をキープしています。最終追い切りでは暴走したという噂も流れましたが、滝カナタ騎手と黒井調教師は、万全だと答えました。その答えが今日出るんでしょうか』

流石欧州の芝生だけあって、踏み出す度に力がある。でこぼこしているし、アツプダウんも激しい。

日本のコースに慣れていたら、足が絡め取られてスつ転びそうだ。

良馬場だからいいものの、重馬場、不良馬場だったらどうなっていたことか。

それ以上に、後方からのプレッシャーが桁違いだ。

プリンスオブウェールズステークスは、そこまで感じなかった。

エクリプスステークスはそれどころじゃなかった。

流石はイギリス最高峰、いや、世界最高峰。

ただ走るだけでも消耗していきそうだ。

『第4コーナーに入り、後続がペースを上げてきました。イギリスのダービー馬オースが上がつていきます。グレートエスケープは依然先頭で直線に入りました、グレートエスケープ先頭！』

ここまでのレース運びは完璧だ。

スタミナの消耗はあるが、それはほかの馬も同じで、あとは俺がどこまで溜めてきた脚をぶちかますことができるか、だ。

『滝カナタの手が動き出した、ゴーサインが出たか。グレートエスケープ先頭、後続に2馬身の差がついて、外からテイラミが上がってきた！ ティラミが上がってくる！ グ

レートエスケープが逃げる、グレートエスケープ頑張れ！」

「——やあ、随分早い再会だったね！」

来た。

今日のメンバーで1番の化け物みたいなオーラを醸し出している奴が。

「うるせえつ、どっか行け！」

「行くとも……私が前に、ね！」

「間違えるなツ、俺が前、お前は後ろだ！」

『グレートエスケープとデイラミが並んでいる、並んだまま後続に5馬身の差をつけている！ 完全に2頭のマッチレースになった！ 欧州最強か、日本最強か、日本競馬は欧州に立ち向かえるのか！ すぐに答えが出ます！』

デイラミが並んでくる。

凄まじい馬力とオーラはまさに欧州最強格といっても過言ではない。

だからこそ、こいつに勝ちさえすれば、俺が最強だと名乗れるというものだ。

『ああつ、デイラミが並んだ！ 並んで、デイラミが——いや、抜かせない！ もう一度グレートエスケープ！ もう一度グレートエスケープ！』

「……！ 早く落ちろ、痩せ狗！」

「並ばれた俺は、負けねえんだぜ、野良猫！」

「田舎モノが私に勝とうなどと——！」

「田舎モノが勝つ物語は、全世界で大人気だろ！」

ぴったりと並んだまま、残り200メートルを迎える。

馬体がびつしりと重なり、馬を追う度に、鏝迫り合いのようにジョッキー同士の体と、馬体がぶつかりあつた。

「これは進路妨害だろ野良猫！」

「君が斜行しているんだよ痩せ狗！」

既にお互いの息は限界寸前で、あとは悪態をついて闘志を燃やしているような有様だつた。

『デイラミが僅かに前に出たか、グレートエスケープも全く譲らない！ グレートエスケープが先頭か、デイラミがまた伸びる！ アスコットの死闘に大歓声が上がつています！ いけ、グレートエスケープ！ あと100だ！』

残り100mへ到達した瞬間、熱気で蕩けそうだった脳みそが急激に冷え込んだ。

戦場の数は24、そして総計55300mに及ぶ道のりを越えてきた経験が、冷酷にこの先の展望を照らし出した。

勝てない——！

弱気の中でも、謙遜でもなく、これまでの経験が導き出した、絶対の答えだつた。

このまま1000mをお互い全力で走り、ゴール板を迎えた瞬間に首の上げ下げの差で俺はデイラミに惜敗する残酷な未来が、投影されている。

ここまで走ってきたのは2400mだというのに、1m足らずの差で負けが決まる。これまで積み重ねてきたレースだって、55300mにも及び、調教も含めたらさらに多くの距離を走っているのに、1mの差で負ける――。

(いいや、その答えは断じてノーだ！俺が出すべき未来はこうだろ！)
首の上げ下げの差をひっくり返せば、俺が勝つ！

(考えるべきは、そっちのはずだろ……！)

最後まで俺は足掻いてみせる。

俺は最後に手前を変えて、力を振り絞ろうとした刹那、声が聞こえた。

「あと8完歩、我慢するんだ」

(え――?)

疑問に思っても、体の反応は思考速度を凌駕し、変えそうだった手前をそのままに走った。

1完歩、2完歩、3、4、5、6、7――

もう、ゴールは50m先に迫ったその時、鞭が肩に入った。

これは手前を変えろという合図。

俺は半ば無意識に、手前を変えた瞬間に、カナタさんの意図を理解した。

(リズムが変わった……：そういう、ことか。そういうことが……：できるのか……！)
ジョッキーは誰しも、こんなことができるのだろうか。

俺は驚きを通り越して、ため息が漏れた。

(ケンちゃん。この人を超えるのは——並大抵の努力じゃ、敵わなそうぞ)

『グレートエスケープとデイラミが並んでいる！ 首の上げ下げ、首の上げ下げ！ 内グレートエスケープ、外デイラミ、頑張れ日本、頑張れグレートエスケープ！ グレートエスケープ！ グレートエスケープ！ 抜け出した、抜け出した！ アスコットの監獄から、大脱走を決めたのは、グレートエスケープッ！ ついにやった、日本競馬が、グレートエスケープが、クビ差逃げ切りしました！ まさに大脱走！ キングジョージを制したのは、グレートエスケープです！ やった日本、やったグレートエスケープッ！』

鞍上滝カナタは何度もガッツポーズ！』
最後の最後、首の上げ下げの差で、俺はデイラミに先着した。

首の上げ下げの差を理解し、手前を変えさせることでそのタイミングをずらすという絶技——この土壇場の場面で行って、成功させるとは。

騎手が変われば、残り50mの土壇場でポロが出ると言っていたが、大当たりだ。

騎手が変わらなかったことで、残り50mの土壇場で誰にも気づかれないが、誰にも

真似できない絶技が披露されたのだ。

「勝った、勝った、勝った……！ やった……！」

鞍上で何度も拳を握る姿は、まるで子供のようだ。

そんな姿を見て、なんだか微笑ましい気分になっていると、大歓声が俺に浴びせられる。

すると、次第に沸々と喜びが湧きあがってきた。

「ふう……よっしゃーッ！」

思い切り、嘶いて、アスコット競馬場に響き渡らせる。

男として戦いの場に上がり、そしてたどり着いた世界最強の称号は、身と心を震わすほどに重く、熱いものだった。

「……ねえ。君の名前を、教えてくれないか」

つい先ほどまで、デッドヒートを繰り返していたデイラミが歩み寄ってくる。

その目に灯る光に嘲りの色はなく、純粹な戦士の眼だった。

「グレートエスケープ。日本のダービー馬だ」

「グレートエスケープ、今日は私の負けだ。文句なしの、敗北だ……次は凱旋門賞だろうか？」

「ああ。凱旋門賞だろうか」

「もし、お互いがレースに出られたら、そこでリベンジをする。必ず……！」
「望むところだ。次も負けないからな」

本馬場を出ると、黒井先生たち、厩舎スタッフが俺たちを出迎えた。

「カナタよくやった！ グレ坊もよくやった！」

俺から降りたカナタさんは先生の熱い抱擁を受け、その直後に俺も彼の抱擁を受けた。

黒井先生は俺とカナタさん以外にも、白村や、西京さん、同行していたスタッフみんなとハグしていた。

ここまで大きく喜ぶ姿は見たことがなかったが、黒井先生にとっても海外G I、それもキングジョージという欧州最高峰のレースのひとつを制することができたことが嬉しいのだろう。

「G I 7勝目、これであの皇帝、シンボリルドルフに並んだな！」

「そうですね。しかもキングジョージを勝って、並びましたから……名実ともに日本競馬最強馬じゃないですか？」

「こいつ負けも多すぎるがな！ だがここまで無事に走って、栄光を掴んでくれたことが嬉しいわ」

黒井先生が俺を撫でる。

優しい手つきに、目を細めて受け入れながら首を上下に振った。

ここまでこれたのは、厩舎のみんなと黒井先生の調教があったからこそだ。

俺が今、幸せに過ごしているのは、みんなの力無しではありえなかったのだから、こうして結果を残せたのが嬉しい。

「次は凱旋門賞や。不安もあるけどな」

「ああ、凱旋門賞の時期は雨が多いですからね。重馬場、不良馬場が苦手なんですよね、グレートエスケープは」

「せやな。まあ、多少の雨なら克服できるけどな」

その通りだ。

よっぽど柔らかい馬場になればともかく、多少湿ったくらいでは、今の俺はそう簡単に負けはしない。

ここから凱旋門賞までおよそ3か月、じっくり身体を仕上げていこう。

「ゆうて、不良馬場になるほどの雨は降らんやろ。そこまで降られたら、運がなかったということや！」

『パリでは記録的な豪雨が続いています！ 幸い凱旋門賞の日には止むそうですが、口

ンシヤン競馬場の馬場は相当柔らかいと発表がありました！」

「なんでじゃ……なんでじゃー……!!!」

ニューマーケットのアビントンプレイスで、俺の叫び声が響き渡った。

第34話 LEGEND 4 U

「オードヴルのアボカドとエビのカクテルソースでございます」

「merci（ありがとう）」

運ばれてきたオードヴルは、食欲をそそらせる、見事な色合いで飾られていた。

食前酒——は、学生たる私には飲めないのです、ノンアルコールのキャロットカクテルが振る舞われた。

気分はフランス貴族だ。

「美味しい……やはりフランスに来たら食べねばなるまい……フレンチのフルコースは」

対面の相棒は観光じゃないけど、と小言を言ってくる。

流石にフランスのGIに出走するだけあって、ちよつと緊張しているらしい。

「緊張しても仕方ないだろう。走るのは私なのだから」

「エツちゃんは緩みすぎだと思うけど」

隣からも声をかけられた。

ルームメイトのダンスパートナーさんだ。当初は相棒と私でフランスに遠征するは

ずだったが、ナーさんが心配していたため、ついてきてもらったのだ。

理事長も「友情ツ！ 慣れない国ならば、気心の知れた友といえることはレースにもいい効果があるだろう！」と許可をあつさりくれたので。

ちなみにナーさんの滞在費は理事長のポケットマネーである。

「それにしてもいいんですか、トレーナーさん。私まで食事にお邪魔してしまつて。レースの話とかもする予定だったのでは？」

「今更どうこういう事もあるまい。そうだろ、相棒。私が逃げて、先頭でゴールする。それだけのことだ」

相棒はそれはそうだけど、と難しい顔をしながらも、結局は頷いた。

オードヴルをあつさり食べ終えると、次いでポタージュが運ばれてくる。

「ナーさんは久々かな、フランスは」

「そうだね……遠征した時以来かな。このレストランは日本にも出店しているから、姉妹やお父さん、お母さんで行ったことはあるけど」

「よく考えたら、ナーさんはお嬢様だったな……」

「よく考えたら、つてなに？ あむ……おいしい……」

私はタブレットを取り出すと、テーブルの端に置いた。

少しお行儀が悪いが、凱旋門賞のためだ。

大目に見てもらおう。

「やることは変わらないとはいえ、ライバルは知っておくべきだ。そうだな、相棒」

「今見るの……？ ポワソンきちやうけど」

「食べながらになるな」

凱旋門賞の出走予定表が液晶に映し出される。

「あ、エルちゃん」

「エルコンドルパサーが日本からは出走予定だな。元気の良い後輩、フランスのG Iも既に勝利している」

「ジャパンカップも勝ってたもんね」

「私がない、ジャパンカップをな」

「嫉妬してる……」

ただ、いい走りをすることは間違いない。

末脚はもちろんのこと、抜群の先行力で好位につけて、直線で抜け出す姿は隙がない王道の競馬だ。

展開を選ばない走りはマグレが少なく、その上でこれまでのレース、トウインクルシリーズでは負けはスズカに1回だけ、フランスでは1回敗戦しているが、共に2着。それ以外は全て勝利という素晴らしい戦績を保持している。

同じ日本のウマ娘ではあるが、最有力のライバルである。

「こっちは……ブロワイエか。ジョツケクルブ賞、アイリツシユダービー、ニエユ賞と3連勝と勢いに乗っている。そして、デイラミもいる」

「エツちゃんがこの前勝った相手だね。あのあと、アイルランドチャンピオンステークスを……えっ、9馬身差で勝利!?!」

リベンジに向けて準備万端といったところか。

エルコンドルパサー、ブロワイエ、デイラミに加えて、私が本命レベルと見られているらしかった。

ワイングラスに注がれた、キャロットカクテルを揺らす。トレセン学園は今頃、夜中の2時からいだろうか。

みんなベッドで丸くなっているだろう。

エアグルーヴは、サイレンススズカは、スペシャルウィークは、アイネスフウジンは——生徒たちのことを思い出して、私は小さく笑った。

「どうしたの、エツちゃん」

「ようやく、ここまで来たか——少し感極まりそうだな」

キングジョージを制したことは、日本でも大々的に報道され、続く凱旋門賞への期待も高まっていく。

「平坦な道ではなかった。自分の力だけでたどり着くこともなかった。支えてくれる人がいて、道を示す友達がいる、競い合うライバルがいたから、ここまでたどり着いた」私／俺はキャロットカクテルの入ったグラスを掲げてみせた。

ナーさんに、相棒に、これまでに関わってきたすべての人と、ウマ娘に捧げるように。「ありがとう……みんな。そして、誓う。次の凱旋門賞で、グレートエスケープの伝説を捧げてみせると」

そして、一息に飲み干す。

爽やかでいて甘い芳香が鼻と喉の奥を通り抜けて、ロンシャンの香りが全身に染み渡った。

相棒は真面目な顔でうなずき、ナーさんは微笑んでいた。

「ここまで来たら、やることはない。すべてを出し尽くすだけだ。そして、力を付けるためにも——」

運ばれてきたのはメインディッシュ。

鹿肉のメダイヨンで、芳醇なワインから作られたソースの香りは食欲をかきたてる。

ナイフとフォークを使い、肉を切った。

「——今は食するのみ、だな」

世界レベルで知れ渡るレストランのコース料理だけあって、絶品だったが、この味を

勝利の美酒でかき消してみせると、心の中で決意したのだった。

×××

——凱旋門賞。

日本のホースマンにとって、それはたどり着かなくてはいけない、頂点にそびえる玉座といえる。

日本競馬で燦然と名を残す五冠馬シンザン——シンザンを超えろ、を合言葉に、ホースマンはそれを超えるサラブレッドの生産に注力した。

そして、ミスターシービーと、シンボリドルフがそれぞれ三冠を達成した。この2頭が激突し、勝者となったシンボリドルフは新設されたジャパンカップを制し、ついにホースマンは海外へ目を向けるようになった。

欧州で最も歴史があり、格式があるレース、凱旋門賞の制覇——日本のホースマンの夢は、今そこに注がれている。

『凱旋門賞のスタートが間もなく近づいて参りました。日本からは多くの競走馬が、凱旋門賞を目指してやってきました。しかし、今年も毛色が違います。フランスの古馬路線を走り続けてきたエルコンドルパサー、そして日本最強馬であり、英国のチャンピオ

ンレースたるキングジョージ6世&クイーンエリザベスステークスを制したグレートエスケープがそれぞれ、有力馬として凱旋門賞に臨みます。我々は、歴史的瞬間を見ることができているのか。すべての競馬ファンが、この凱旋門賞に注目しているでしょう」

——そんな、盛り上がり始めるロンシャン競馬場のスタンドをしり目に、俺は何度も蹄を芝生に押し付けた。

そして、芝生を踏むたびに、顔をしかめた。

(めちやくちや不良馬場……踏み込めないし、すべるし、あと泥も跳ねる。ちつくしよ……)

雨こそ上がっているものの、パリは当日まで雨が続いており、馬場は驚くほどに柔らかい。

「やあ、グレートエスケープ。久しぶり」

「デイラミ……出ないんじゃないのか？」

「直前まで渋っていたけど、出ることにしたさ。正直、私の脚には似合わないが……私にもプライドがある。それに、逆境を跳ね返すからこそ、名馬だろう？」

「そりゃ、そーだな」

今日の朝、黒井先生は珍しくため息ばかりだった。

白村はそんな日もあるさと言いつつ、やたら身体をあちこちにぶつけていたし、西京

さんは俺を撫でる回数がいつも以上に多かった。

有り体に言ってしまうえば、凱旋門賞を勝つのは無理だ——黒井厩舎のスタッフほとんどが、口にくそしないが、そう思っている。

それが弱気だとか、逃げの姿勢だとは思わない。

約5年間、俺をずっと見てきたのだから、それだけ不良馬場が苦手だということがわかっていただけということ。

「……俺も不良馬場は苦手だ。だが、勝つ。勝ちたいとか、勝てたらいいな、じゃなく。俺は最強のサラブレッドということを、証明してみせる」

「——それはありがてえ限りで。あつしア、あんたと走ることだけを願ってきたもんで……尋常に、勝負してもらいてえところだ」

嗅ぎ慣れた日本のサラブレッドの匂い——振り返ると、鷹の目のように鋭い眦を持った馬が近づいてきた。

「名前は？」

「あいや失礼。あつしの名はエルコンドルパサー……生国はアメリカのしがないサラブレッドでさあ」

へんてこな喋り方とは裏腹に、脚や筋肉を見るだけで、相当な強者だとわかる。

エルコンドルパサー……去年はスペシャルに完勝し、そして今年はフランスの中距離

路線で名を馳せた日本調教馬。

フランスで走り続けているために、既に凱旋門賞の有力馬として現地メディアも取り上げている。

「あんたも知ってるでしょうが……恥ずかしながら、サイレンススズカに完敗しましたね。借りを返す機会を待っていたんですがねエ……世は無常なモンだア。あの世に駆けて行つちまいりましたから、再戦の機会もねエ。あつしはしがないサラブレッド……ですがね、メンツつてもんがあつしにもあるんでさあ」

「言いたいことはわかる。サイレンススズカより強い——それを証明したいってわけだろう」

「流石でございあす、グレの旦那。話が早え……あつしは、あんたに勝たないと幻影に負けたままでして……」

「——ははは！ 誰も僕の話をしなないじゃないか！ はっはっはっ、すごく辛いぞー」
振り向くと威勢よく弱気な発言をする馬がいた。

名前はモンジュウというらしい。

確か、アイルランドのダービーとフランスのダービーであるジョツケクルブ賞を勝つた若きスターホースである。

「僕の名前はモンジュウ、フランスとアイルランドのダービーを制し、凱旋門賞も制する

ことを誰もが望むスターホースだ！ 胃が痛い！ 腹が痛い！ 期待が痛い！ とてもしんどいんだ！」

そのはずだが、声音とは裏腹に発言内容は弱気も弱気。

馬体を見るに相当な才能の持ち主ということはわかるのだが、覇気がありそうでない。

霧囲気だけははずば抜けているが。

「日本の馬たちなんて大したことないと思っていたが、去年はタイキシヤトル、シーキングザパールが勝った。今年はエルコンドルパサーにグレートエスケープ。もう吐きそうだ！」

「満面の笑みで言うことじゃないだろう……」

「おい若えの……ガキのように喚く奴がありますかい……」

「はははは！ 期待が重いし、かといって期待されないと存在価値を見失うが！ それでも僕は勝ちたいからな！ 脚ガツクガクするけど！」

俺はモンジューをじつと睨みつけた。

「……眼は本気だな。これまで戦ってきた強い馬たちの眼と同じだ。勝利を望む、気高い意志がお前にはある」

「めっちゃマークされたな！ さすがは僕だ！ 胃袋がまた悲鳴をあげそうだよ！」

「賢人こそ愚者を装おうってことですかい……若えのに、妙な真似をするもんだねエ。とにかく、あつしはこの戦いを最後に、引退することになっている……グレの旦那、よろしく頼みます」

エルコンドルパサーの眼がぎらりと光を放つ。

切れ味抜群の日本刀のように磨き上げられた鋭い肉体が翻った。

「ではまた……レース後に、お会いしやしょう……」

「僕もそろそろ失礼するでしょう！ 今にも倒れそうだが、まともには走れるかもわからないが、勝ちたいという想いは変わらないからな！」

2頭が離れてゲートへ向かった。

凱旋門賞に、俺は譲れない思いを抱いている。

しかし、エルコンドルパサーも、デイラミも、ほかの馬やジョッキー、みんな同じ思いを抱いてこのレースに挑んできた。

想いに差なんてない。

勝者と敗者を分かつものがあるのだとしたら、それは実力と運という、残酷にして絶対的なものだ。

それを最も兼ね備えているのは誰か——今ここに、証明してみせる。

伝説を、届けよう。

『グレートエスケープがゲートに入ります。日本馬の悲願か、イギリスの王者か、フランスの若き俊英か、それとも伏兵か。意地と執念渦巻く栄光のビクトリーロード、勝ち取るのはただ1頭！ 凱旋門賞が今、スタートしました——ああつと!! グレートエスケープが出遅れたアツ!』

○○○

私の生まれた家庭は裕福だった。

父は小さいながらも安定している企業の社長で、母は厳しくも優しく、それでいて自由に過ごさせてくれた。

頭が良くて、誰からも好かれる姉は私にも優しく、いつも褒めてくれていた。

大変なことや、悩んだことはたくさんあったけれど、人生は順風満帆といっても差し支えはなかった。

しかし、姉に末期癌が見つかったからは、私の人生は大きくかたちを変えた。

姉との別れ、そして、グレートエスケープとの出会い。

忘れ形見というにはあまりに大きすぎる存在に、当初は戸惑うばかりだったが、次第に絆され、彼のが好きになっていった。

「橘さん、いよいよですね」

「ええ……凱旋門賞まで、来ちゃいましたね……」

黒井先生の言葉に相槌を打った。

そんなグレートエスケープが、世界最高の舞台で勝利を望まれている。

もしも姉が生きていたら、どうなったんだろうか。

グレートエスケープが勝った時に、すごい興奮していたから、凱旋門賞が始まると同時に卒倒していたのかもしれない。

「姉もきつと喜ぶでしようか」

「そりゃあ、そうですね。不安も、感じていたでしょうが……あの人なら、子供のように目を輝かせていたでしょう」

遺影を持つてくるのは流石に場の雰囲気を考えて控えたが、姉と私のツーショットの写真を持つてきていた。

パドックでは、グレートエスケープはまじまじと写真を見つめてから、私に額を押し付けた。

彼は姉のことを愛していたのだろうと、彼の温もりからそれが伝わってきた。

こんな素敵な馬に最初に出会えた姉が、少しだけ、羨ましかった。

「……橘さん、泣くのは早いですよ」

「いいえ、今、泣くんです。グレくんを笑顔で出迎えるために……きつと、グレくんは帰ってきてくれます。素敵な結果を伴って。だって——グレートエスケープなんです

から」

「橘さん……ええ、そうですね。見届けましょう、我が子の晴れ舞台を」

○○○

ゲートを出て、全頭が、そして跨るすべてのジョッキーが、一瞬動揺した。

『グレートエスケープが出遅れたアツ!? そのまま中団やや前目、外につけました。逃げると思われたグレートエスケープが逃げませんでした! 出遅れたグレートエスケープはそのまま中団でレースを進めます』

まず最初にプランが崩れたのは、モンジューのラビットである、ジンギスカン。

あらかじめ決めていた作戦ではグレートエスケープをつつき、スローペースにさせず、モンジューの末脚を活かすはずだった。

「えっ、えっ、グレートエスケープがない!? あっ、後ろか!」

ジンギスカンがつかれてしまい、後ろに下げてしまう。

ペースメーカーになるわけでなければ、かといって進路確保や折り合いに専念させるための壁にもなれない、中途半端な位置取りをとった。

それによってモンジューは、単独でレースを進めることになる。

「わははは! やっぱり思い通りになるわけがないんだ! もういい! 僕もうラビットに頼るのやめる! このまま中団で進めて末脚勝負に賭ける」

武器をひとつ失ったモンジューだったが、実は開き直ると強いタイプだった。次に異変に気が付いたのは、デイラミ。

「……な、なぜ、グレートエスケープが……私のすぐ傍にいる……!?!」

外から蓋をするように位置取るグレートエスケープを見て、デイラミは背筋が寒くなった。

かねてより予想していたレースプランは、グレートエスケープをマークし、直線で躲すという一点集中の戦いになるはずだった。

狂いが生じたどころではなく、まんまと裏をかかれたのだ。

「ど、どうする……くっ……不良馬場で脚がとられる……!?!」

焦りを抱えたまま、デイラミはレースを進める。

不利な状況に加えて、心理的にも負担を抱えたデイラミの走りは、本来のものとは程遠いものになった。

「こりや……いけねえ……! グレの旦那がこんな後ろからだとは。計算違いでしたが……このまま逃げて勝つしかありやあせんね」

そして、エルコンドルパサー。

彼もまた、グレートエスケープの後方につけて2番手、3番手からレースを進める予定だった。

しかし、スタートが良すぎたことと、グレートエスケープが前に行かなかつたことで、エルコンドルパサーは単独で逃げる形になってしまった。

「グレの旦那……ここで裏をかいてきやしたか。まずはお見事という他、ありやあせんが……本来の走りとは違う走りをして、勝てるんですかい……？」

躊躇なくエルコンドルパサーは前を走る。

本来の脚質こそ先行だが、それはあくまで勝率が高い戦法を選択しているに過ぎない。

どこからでも競馬ができる脚質、芝ダート、マイル中距離を問わない自在こそがエルコンドルパサーの真価である。

迷いはなかつた。

凱旋門賞の勝利、それだけを目指している。

その他の馬も、殆どがグレートエスケープを警戒していた。

本来の逃げではなく、ほぼ中団といえる位置に陣取った本命馬を全頭が注目している。

不気味——全頭がグレートエスケープにその感情を抱いていた。

そして、当のグレートエスケープは——

○○○

(フツフツフツフツ……出遅れちゃった……)

発走直後、ぬかるんだ芝生に足を取られて出遅れを喫していた。

観客や実況はそのことを理解していたが、大外枠から外に膨らむように逸れたことによつて、ほかの出走馬は俺が出遅れたことを把握していなかったようだった。

『エルコンドルパサーがいいスタートを切りました、エルコンドルパサーが果敢にリードを1馬身ほどとります。出遅れたグレートエスケープは先頭からおよそ7、8番手とあったところ。これは大丈夫なんでしょうか』

2番手にジンジスカンが遅れて上がってくる。

ペースをスローにはさせないと判断したのか、後からエルコンドルパサーに鈴をつけにいった。

それを見ながら、俺は焦りに焦っていた。

(やばい、やばいやばいやばいやばい。よりもよつて凱旋門賞でやらかすかフツー!)
思い返すと、初めてのG I皐月賞でもスタートで出遅れたし、日経賞では馬場に脚を取られていた。

ある意味必然だったのだろうか。

先頭へペースをあげようとした所で、滝カナタさんが手綱をしつかり握っていたことに気がつく。

（皐月賞の時、俺は早く逃げようとして折り合いを欠き、馬群に沈んだ）

あの時は若かったなあ、と自分を笑った。

あれがもう3年前になる。

今年はテイエムオペラオーとかいう馬が豪脚を見せて皐月賞を勝利したという。

毎年、スターホースが現れては、上の世代を打倒するか、壁に跳ね返されている。

ただ、クラシックレースを走っている時は、とにかく負けてたまるかという気持ちが強くなっていた。

（ダービーは……橘ちゃんのために走っていたな。ハイペースに持ち込んでそのまま逃げ切った。馬に生まれ変わってダービーを勝つなんてな。ウマだけに……）

橘馬奈というオーナーに勝利を届けたい、その気持ちだけで走った。

その末に掴んだ栄光がダービーという唯一無二の称号だ。

恵まれている——気づけば、自分の境遇に感謝し続けていた。

（それでも菊花賞はダンスインザダークに逆転された。執念の脚だった。今も元気にしてるかな……あの訳の分からない喋り方は、牝馬にモテるのだろうか）

ライバルとの死闘、そして、俺はサラブレッドとして、勝利への執念を己の中に宿した。

ダービーでサラブレッドに成ったとしたら、菊花賞からは、競走馬として、頂点を目

指し始めるようになった。

(ジャパンカップではエリシオに、シングスピールに、バブルガムフェローに、ラファイ……ファビラスラフィン。思えば、約束は遅くなつたけど、果たしたことになつたかな。悪いなあ……一緒に走ってやれなくて。もつと一緒に走りたかつた……)

頂点へ至るための道筋——その到達点のひとつが、凱旋門賞だと具体的に意識するようになった。

そして、サラブレッドとしての頂点を取るために戦い始めた。

総決算たる春の天皇賞では、マヤノトップガン、サクラローレル、マーベラスサンデーらの古馬の壁に跳ね返され、怪我までしてしまった。

(マヤノトップガンの最後の末脚はすごかつた。ダンスインザダークを思い出す、追い込み。そして、サクラローレルは凱旋門賞へ手を伸ばし、届かなかつた。あれほどの馬でも、届かない世界に、俺は手がかかりそうになつてゐる。マーベラスサンデーは変な奴だつたけど、結局ほとんど先着できなかつたし……平成3強は、まだ敵わないイメーヂが未だにある。すごい奴らだつた)

怪我を負つた俺は、しばらくスランプに陥つた。

迎えた天皇賞・秋ではエアグルーヴが牝馬ながら、並みいる牡馬を粉砕した。

(初めて一緒に走つたのは秋の天皇賞か。そこから一年に渡る因縁……アイツは、今頃

どうしてるんだろうな。凱旋門賞を見ていてくれたら、嬉しいな)

そこで惨敗し、次のジャパンカップには暗雲が立ち込めていた。

館山騎手やダンスパートナーさんによって、立ち直ることができた。

ジャパンカップで復活を遂げた俺は有馬記念に臨んだ。

(そのレースを最後にダンスパートナーさんは引退。思えば、全力でレースをできたことはほとんどなかった……ダンスパートナーさんは……きつと、俺の勝利を願っていているんだろうな。簡単に想像できる……)

次の年の天皇賞・春は雪辱を果たすように、完勝した。

日本競馬界の現役最強馬として、いわれるようになったのがちよどここのころ。

俺は宝塚記念を勝利して、凱旋門賞へ向かうべく臨んだのだが——上には上がいるもので、ライバルが現れるものだ。

(サイレンススズカー——あいつもまた、強い馬だった。あのときの俺が勝てなかったんだ、本当に最強クラスだったのかもしれない)

そして札幌記念では、エアグルーヴと死闘を繰り広げ、サイレンススズカと勝負をつきたいと願い、凱旋門賞ではなく秋の天皇賞へ出走した。

サイレンススズカと二頭で走っているかのような時間は、苦しく、それでいて楽しくて、永遠を願ってすらいた。

（それでも、現実には残酷だった。ありふれた悲劇ではあったが、悲劇に変わりない。サイレンススズカは俺を置いて、さっさと駆け抜けてしまった）

結果的に、最強馬の称号を手に入れた俺は、その称号に恥じない走りをすべく、有馬記念を勝利してみせた。

エアグルーヴがラストランを迎えても、年下の名馬たちが現れては、彼ら彼女らと鎗を削った。

そして、海外へ飛び立ち——今も変わらず、俺はレースを走っている。

（思えば、たくさんのライバルがいた。彼らとのレースを思い返すと、唯々眩しい）
焦る気持ちは、気づけばどこかに消えてしまっていた。

ロンシャンの長いカーブを、脚がとられないように曲がりながら、ぼんやりと考えた。
（そういえば、こんなゆったりと走ったことはなかったな）

いつも集団から追われる位置にいたか、または先頭集団の中でレースを進めていた。
中団かつ外目を追走したことは、レースでほとんどなかった。

（ほとんどの馬が俺を警戒している……凱旋門賞に来る一流の馬たちが、俺の一挙手一投足に合わせて行動を変えてると思うと、すごいことだな）

ロンシャンの緩やかで長い坂、背の高い芝を踏み越えながら俺は場違いなほど、呑気に考えていた。

気づけば、フォルスストレートに入ろうとしている。

レースは淡々と流れ、佳境を迎える。

(俺は——なぜサラブレッドになったのか。ずっとわからなかった)

鞍上が少しずつ前へ行くように、促していく。

後ろから進めたからか、いつも以上に体力があまりあまっている。

ペースが上がるに併せて追走するが、急な加速が必要とする展開にはならない。

(だが、もしも役目があるのなら——俺は、色んなやつらの思いを乗せて、遠くに運んで
いってやることだったんじゃないか)

『いよいよ直線です。エルコンドルパサー先頭、3馬身ほどあつたりリードが少しずつ詰まってきました！ エルコンドルパサーはまだ楽な手応えだ！ 2番手にクロコルー
ジュ、ジンギスカン！ デイラミは少し苦しいか、モンジューは鞭が入った！ グレー
トエスケープは馬群の外、残り500と少し！』

慌てることなくレースを進めたおかげかはわからないが、レースはそれなりのハイ
ペースで進んで、直線へと至った。

慌てて前へ行こうとしたら、もつと乱ペースになってしまいか、それを避けてスロー
ペースの瞬発力勝負になってしまっただろう。

俺も成長しているんだ。

(思えば、随分サラブレッドとして、競走馬として、考えが染み付いたもんだな)

「グレ、行くぞ。泣いても、笑っても、これが最後だ」

「ああ、カナタさん。これが最後だ」

息を思い切り吐く。

長く、肺の中に溜まっていた空気をすべて出し尽くすまで、長く、長く。

歓声が、馬蹄の音が、ジョッキークーの揮う鞭が空気を切り裂く音が、少しずつ小さくなっていった。

吐ききってから、思い切り吸い込んだ。

色あせた世界が色づき、意識がレースに戻っていく。

「これが、最期になってもいいから——勝ちたい。違う、勝つんだ」

——不良馬場は苦手だ。

芝生に足が取られるから、力が伝わりづらくなってしまふ。

胴長な俺の体型では走法はストライドになるし、余計に消耗してしまふ。この走法は体型によって決まるものだから、どうしようもない。

だからこそ、不良馬場やダートコースで力を発揮する馬がいたり、良馬場や芝コースで力を発揮する馬に別れている。

しかし俺は、その事を理解している。

そして、走法を少しの脚の使い方を変えられることも、知っている。

『エルコンドルパサー先頭、400メートル地点で先頭、エルコンドルパサー先頭！ 夢まであと400！ 後ろからモンジューが来た！ モンジューが来た！ モンジューが来た！』

走法をストライドからピッチへ——競走馬では有り得ないはずの行為を行う。

長くスタミナを持たせることは出来ないが、残り400まで楽に走っていたから、たつぷり余力は残っている。

あのときは脚が折れてしまった。

結果的に綺麗な折れ方だったらしく、後遺症は残らなかった。

しかし、次折れた場合、どうなるだろうか。

良くて即引退、悪くて予後不良で安楽死。

ここで勝たなくても、俺の種牡馬入りは確実に、無理をする必要なんてどこにもない。
だが——

（それを……ダークや、スズカの前でも同じことが言えるのか？ 文字通り命を削って戦った相手に……そんなことが言えるのかッ）

言えるわけが無い！

迷いはなかった。

折れるなら折れる。砕けるなら砕ける。俺が脚を折り、倒れ、鞍上のカナタさんもターフへ叩きつけられるかもしれない。

だがそれを恐れるジョッキーなどいない。

共に、既に、腹は括っている！

「うおおおおおッ！」

叫び、脚へありったけの力を込める。

残り2ハロン、24秒に満たない最後までいい、この瞬間だけ、俺は誰よりも速く走りたい。

「な——」

「ばかな……!?!」

「獲りに来たぜ……銀色の、凱旋門を……!」

前で争う2頭へついに追いつく。

エルコンドルパサー、モンジューが俺より少しだけ前を走っている。

まだ少しだけ2頭が速く、俺は加速してもなお追い抜くには足りなかった。

そりゃあそうだ。

俺に才能なんてものは、多くない。

あくまで騎手の指示に忠実に従い、それでいて競馬というものを理解しているからこ

そ、スタミナとスピードを余すことなく使い切つて勝利してきたのだから。

しかしここは凱旋門賞。

超一流の世界で、才能と努力を兼ね備えているのは当たり前であり、運すらも持っているからこそ、ここまで走り抜いてきている。

『エルコンドルパサー先頭、モンジューがかわすか、モンジューがかわす！ あと200だ、頑張れエルコンドルパサー！ 追い抜けグレートエスケープ！ 負けるな日本、頑張れ日本！』

あと一手。あと一手上回れば、モンジューとエルコンドルパサーを差し切ることができきる。

その一手が、なにも思いつかない。

ピッチ走法で不良馬場は克服した、幸運もあつたが結果的にはレース展開を大きくずらして末脚を発揮している。

あとひとつ、なにがある？

たつた一手が果てしなく遠い。

『モンジューが先頭、半馬身ほど抜け出した！ あと100m、頑張れ！ もう一度頑張れ！』

諦める気なんてさらさらない。

どうすればいい、俺は、苦しい時、どんなふうに変転してきた——？

「——グレッチ」

聞こえるはずのない、声が聞こえた。

弱気の虫だ。

弱気になった自分が、自分を慰めるために声をかけているに過ぎない。

「グレッチ」

振り払っても、もう一度聞こえた。

もしもこれが、幻聴ではなくて、本当にどこから聞こえてくるものだとしたら。

俺は——俺は——！

「負ける、わけには……いかなえだろオオオオッ！」

『グレートエスケープが伸びる、グレートエスケープがやってきている！』

モンジューか、エルコンドルパサーか、グレートエスケープか！

残り50m、差がなくびったり並んでいる！

あと少しだ、頑張れ日本、グレートエスケープ頑張れ！ グレートエスケープきた！

グレートエスケープ抜け出した！

グレートエスケープだ、グレートエスケープです！

世界よ、これが日本が生んだ偉大なる逃亡者だ！

世界に名だたる競走馬たちの追跡を振り切つて、大脱出だ！

グレートエスケープ先頭でゴールインッ！

やった日本ッ！ ホースマンの夢が、ついに、ついに、世界へ届きました！

グレートエスケープの活躍に、誰が文句を言うでしょうか！

やりました、グレートエスケープ！

滝カナタは大きくガッツポーズ！』

——…やつた。

ゴールを駆け抜け、視界がぐにやぐにやと捻じ曲がる。

今にも倒れて、二度と起き上がれなくなりそうだ。

ここで倒れてしまったら洒落にならん。

脚に力を込めて、なんとか地面を四肢で踏みしめた。

(出し切つた。もう鼻血も出ない……歩くのもしんどい。ああ——勝つたのか)

ロンシャンに集まつた歓声が遠くに聞こえた。

鞍上が何度もぼんぼんと俺を叩く感触が、鈍く、何をされているのか、気づくのが遅れる。

「グレっち。かつこよかつたよ」

背後から声をかけられた。

俺はそれに、振り返らずに答えた。

「——そうか。初めての馬に選んで、良かったか？」

声の主は、笑っていたと思う。

「何度も言ってるでしょ？ グレッチは、最高の馬だつて」

ロンシヤンに輝く太陽が、ターフを照らす。

視界の陰で、人影が光の中に溶けていったように見えた。

これから、俺はどうするんだろうか。カナタさんや黒井先生はインタビュ―責めに遭うだろうが、俺はやることはない。

「まあ——今はとにかく、休みたいな……」

ロンシヤンに響き渡る歓声を、嘯みしめるように俺は目を閉じた。

そして、呟く。

「ありがとう、みんな」

——第78回凱旋門賞 優勝馬『グレートエスケープ』

日本競馬界に、新たな伝説が刻まれた。

最終話 Special Record!

早速記者たちは、歴史的勝利を挙げた陣営に群がった。

「勝利ジョッキークインデビューです。見事……見事、凱旋門賞を勝利したグレートエスケープ号騎乗の滝カナタ騎手です。優勝、おめでとうございます」

「ありがとうございます」

「ついに、悲願……日本のホースマンの悲願と言える、凱旋門賞の勝利を達成しました。感想をお願いします」

「健二、勝ったぞ。そして、嬉しいです。子供の頃からダービージョッキーになりたいという思いで、騎手になりました。それが去年叶って……今年は凱旋門賞ですから。多くの人に支えられたから、今があると思います」

「早速ですが、レースでグレートエスケープは控えていました。逃げるといふ前評判がある中であの戦法は、作戦でしたか」

「えっ？ ああ……まあ、あれは作戦というより、出遅れですね。スタートした時にバランス崩して、ダツシユが付かず……正直どうなるか怖かったです」

「出遅れていたんですね。それでも、中団から差し切る見事な末脚を發揮しました。最

後の直線は馬を信じて、といったところでしょうか」

「そう、ですね……中団に控える競馬はずっと得意ではないと思っていましたが、新たな一面だったと思います。彼は、グレートエスケープは、賢い馬で、我々の話すことを理解してますからね……レースもよくわかっているからこそ、できたことだと思います」

「ありがとうございます。欧州に来てからは、梶田騎手の落馬負傷からの乗り替わりでした。思いがあつたと思います」

「やっぱり考えましたね。ケンジ……梶田騎手が育ててきた馬でもありませんからね。復帰のための励みにして欲しいです」

「グレートエスケープ号ですが、同一年でキングジョージと凱旋門賞の制覇となりました。この記録はリボー、ミルリーフ、ダンシングブレーヴ、ラムタラの4頭のみが達成した大記録です。いずれも錚々たる名馬ですが、グレートエスケープ号もこの馬たちに肩を並べられたでしょうか」

「先生もケンジも、みんなそう思っていると思います。それほどの馬が日本競馬から生み出されたことは喜ばしいことですし、なにより騎乗して勝てたというのは誇らしいです」

「インタビューありがとうございます。最後に、日本のファンの皆さんへ一言、お願いします」

「ついにこの舞台を勝てたのは夢のようで、嬉しいです。グレートエスケープも人気のある馬ですしね。日本のファンの方々には、いい姿を見せられたんじゃないでしょうか。ありがとうございます」

「勝利騎手インタビューの滝力ナタジヨッキーでした。では、スタジオに戻ります」

……

俺が凱旋門賞を勝利して、それはもう忙しかった。

代わる代わるに色んな人が来て、祝福してくれたので嬉しい悲鳴だ。

とはいっても、馬体になにかあつてはということとで検査につぐ検査。もちろんレースで疲れ切っていたから、体も休めた。

黒井先生や滝騎手は競馬開催があるから、すぐ日本へ帰ったけど、俺も準備したらすぐ日本に帰った。

栗東の厩舎に帰厩、とはいかず、検疫のためにまずは競馬学校の国際厩舎で様子を見られることになった。

そこで、今後について話し合いがあった。

「本来であれば凱旋門賞を勝利した今、種牡馬として引退してもいいと思っています。社来スタリオンステーションからも、以前以上の条件で種牡馬入りを望まれていますから」

「ええ。でも、U R A (U m a R a c i n g A s s o c i a t i o n、この世界における競馬開催を行っている組織)と、社来S Sの両方からジャパンカップの出走依頼が出ているんですよね」

聞き耳を立てれば、黒井先生と恵那ちゃん、そしてU R Aの職員や社来S Sの責任者といった人達が話し合っているようだった。

聞きなれない、きっちりした雰囲気の声はU R A職員だろう。

「はい。日本のファンに最後に走るところを見せて欲しい、と考えています。検疫期間の関係で本来は3ヶ月以上は自由に移動はできないのですが、今回は特例として外国招待馬と同じように国際厩舎と、東京競馬場に留まれば出走可能なように調整します」

「ほう……特例で」

「エルコンドルパサー陣営にも同じように依頼したのですが、オーナーサイドからは断られてしまいました……断ったことを理由にペナルティなどは一切ありません。無事に種牡馬として馬産地に帰ることも、正しいことですから……」

「とのことです。橘オーナー、如何致しますか」

「く、黒井先生はいいんですか？」

「ジャパンカップにはスペシャルウィークが出走する予定です。私の判断に私情が入り交じる可能性もありますから……」

引退かあ。

凱旋門賞を勝利した今、確かに潮時だろう。

あれから、脚の調子はイマイチよくない感覚があり、どこまで走れるかもわからない。恵那ちゃんへの返答の答えがない。

めちやくちや小声になっているか、考え込んでいるのか。

しばらく待つてから、恵那ちゃんは語り出した。

「ジャパンカップに……出ます」

「本当ですか!？」

「橘オーナー、今すぐに決めなくても……」

「もちろん勝つて種牡馬として箔付けされることは喜ばしいですが、怪我の可能性だけあります。熟慮しても……」

「……グレくん、グレートエスケープのことは、黒井先生を信頼していますから、無事に牧場に帰してくれると思います。それに……日本のファンから支えられていたことも事実ですし、最後に、グレートエスケープの勇姿を見せたいんです。姉が最期に見た舞台と、同じ場所……」

その言葉に反対意見は出なかった。

ジャパンカップ出走が決まり、そこが引退レースとなることが発表された。

しかし――

「おいグレ坊、調教行くぞ！　おい！　おいって、動け、動け、動いてよ！　今週ちゃんと走らなきゃジャパンカップでともに走れないんだよ！」

最近、エヴァン○リオンを見てハマったらしい白村が俺の手綱を引く。

栗東トレセンには戻らず、東京競馬場に入厩して調教を積むことになった俺は今日も調教を拒否していた。

「動けって！　いつも調教真面目にやってただろ!?　なんで急に嫌がるんだ！」

いや、疲れてるねん。

キングジョージと凱旋門賞を勝って、引退も決まった今、どうしても走るモチベーションが上がらなかつた。

周囲に伝えるために行動で示しているが、かといって受け入れられているわけではなかつた。

「いくぞ、世間じゃスペシャルウィークとグレートエスケープ、モンジューの三つ巴の戦いになるって言われてるのに！　だらしなない戦績じゃ格好つかないだろ!?!」

……まあ、それなら。

俺がすたすた歩き出すと、引つ張っていた勢いで白村がコケそうになる。

転ぶ前に引き繩を噛んで掴み、引つ張り起こした。

「うわつとど!?! ……ふー、急にやる気出したな……お前最近、ますます人間の言葉理解してきたな……」

元から理解してるし、黒井先生や西京さんはデビユー当初から気づいていたぞ。

調教師試験を受けるために勉強を始めたという白村だが、まだまだらしい。

激励の意味を込めて、背中を押しした。

「なんだよ、今度は調教に行きたくなつたのか? んもー、わがままさんなんだから……」

やれやれ。伝わってないな、こりや。

繰り返し走るが、調教タイムは至つて平凡。単走でしか調教を積めないからというのもあるが、やっぱり気合いが入らない。

正直、無事に一周回つて帰ってくるだけでいいんじゃないか、とすら思う。

東京競馬場に逗留している間に、またイベントがあつた。

ハードバトラーさんの引退だ。

「グレ様。優勝、おめでとうございます。歴史的な瞬間に関われたことで、私のさして優れたところのない馬生が、色づきました」

「バトラーさん……ニューマーケットで常にいいコンディションでいられたのは、貴方がいてくれたからです。この勝利は俺だけのものではないです。スタッフのみんなは

もちろん、ハードバトラーさんの勝利でもあるんです」

「おお……感謝の極み……。GIは疎か、OP特別ですら遙か高みの世界と思っていました……キングジョージに凱旋門賞……。それを勝利したと思えば、なんともまあ……幸せなことです」

「どうか、お元気で……。ふふふ、バトラーさん、泣かないでください」

「失敬……。年寄りには涙脆く……。おや、グレ様も……」

「……俺も歳をとりました。またいつか、会える時を楽しみにしています」

ハードバトラーさんは俺と同じく、3ヶ月の検疫期間がある。高齢であり、その上しばらく出走して稼ぐことも出来ないからという理由で、検疫期間が明ければ、引退し、登録を抹消される。

再就職先は乗馬クラブで、そこでは障害飛越競技の競技馬として活躍する予定らしい。

落ち着いていて優しいバトラーさんなら、きつといい競技馬になるだろう。

俺は彼の幸福を祈った。

それでも世界は回っている。

俺は嫌々ながらも調教を積んでいる中で、恵那ちゃんがやってきた。

「グレくん。今日はジャパンカップに乗る騎手を連れてきたよ」

カナタさんじゃないの？

と思ったら、カナタさんはスペシャルウィークに乗るらしい。

キングジョージと凱旋門賞を勝った仲なのに薄情だ！ 若い子がいいのか！ 天眞爛漫道産子っぽいウマ娘がいいのか！ クールな現実主義ウマ娘は好きじゃないのか！

ちよつと思考が混線した。

じゃあノリさんか、また別の騎手か。

まあ誰でも構わない。あまり下手だと走りづらくてしんどくなるから嫌だけど――

「なんと、騎手は……じゃ、じゃーん……」

俺の前で珍しく明るい態度だ。ちよつと照れてるのが可愛い。

なんて感想は束の間だった。

恵那ちゃんが避けると後ろに立つ人物は手を上げた。

「ようグレ坊。調教ちゃんと走らないんだって？ 俺が乗っても……走ってくれないのか？」

思わず後ずさった。

下がった分だけ、その人物は、自分の足で前に踏み出した。

「――遅くなった。ごめんな、グレ坊」

確りと両足で地面を踏みしめ、ヘルメットとステッキを持ったその人物は紛れもなく
——梶田健二その人だった。

「ケンちゃん……ケンちゃん……ん!!!」

「えつちよつとまてうわーっ!」

流石に抱きつく勢いで体当たりはしない。

ケンちゃんの周りをぐるぐるぐる回って、帰ってきたことを祝福する。

恵那ちゃんはそんな俺たちを見てくすくす笑っていた。

「今日から調教に乗って、問題なければ来週からレースに復帰する。黒井先生は引退
レースのジャパンカップで、乗ってくれて言ってくれたんだ」

「そうか! そうなのか! 今日からか! 一番最初に乗ってくれるのか!」

「いや、昨日栗東で調教には乗ってきた」

俺はケンちゃんに背を向けた。

「待って待って待って待って! なんで帰る!」

だって俺より先に優先する子がいるんだろう。

いいもん、ドーセ選ばれることの無いオッサン馬だし。シルクジャステイスの方がい
いんでしょ! 若い子の方がいいんでしょ!

「グレくんがめんどくさくなってる……!」

「グレ坊！いきなりぶつつけ本番で乗ってなんかあったらやばいから、他の子に乗っただけなんだ！本命はお前なんだよ！」

「梶田騎手はなんか情けない人みたいになってる……！」

ほんとに？ほんとに本命は俺？他の子にも同じこと言ってるんじゃないのか？

「本当だぞ。本当にお前だけだからな。……それに、ジャパンカップが最後なんだ。お前に乗らないと……元の騎手に戻れねえよ……」

俺はケンちゃんに振り返るなり、顔をべろべろと舐めた。

冗談だ。ちよつとからかっただけだよ。

最後——ああ、本当に最後なんだ。

泣いても、笑つても、これまで走ってきたすべてが、次のジャパンカップで終焉を迎える。

「仕方ないなあ。本気で走るところ、見せてやるよ！」

ケンちゃんが乗る。

そう考えたら、だからなどしていられない。

この日の調教は、久しぶりに気合いを入れて走って見せた。

——ジャパンカップに向けて、競馬界は色めきたっていた。

キングジョージ、凱旋門賞を制した歴史的名馬となったグレートエスケープの帰還、そして引退レース。

競馬界に留まらず、日本中に知れ渡ったその名は、ジャパンカップが近づくとつれて話題に出ない日はなかった。

もちろん、グレートエスケープだけがサラブレッドではない。

XX99年の日本競馬界を牽引したスーパーホース、スペシャルウィークも満を持してジャパンカップに臨む。

同厩舎、同じダービー馬であり、グレートエスケープが世界を制した名馬として迎えらるゝのならば、スペシャルウィークは日本競馬界の総大将として立ち向かうことを期待された。

さらに、香港最強馬インディエナス、英国ダービー馬ハイライズ、フランスの強豪タイガーヒルが参戦。それらを押しつけて、海外代表と扱われているのが、フランスとアイルランドのダービーを圧勝し、凱旋門賞では激闘の末に3着だったモンジューが来日する。

世界と日本を制した王者か、世代交代を告げる日本総大将か、欧州最強を再び証明するリベンジャーか。

誰もが名勝負を予感し、ジャパンカップにはなんと20万人近い人々が集まった。

東京競馬場の最高動員数を記録したのが、グレートエスケープの父、アイネスフウジンが制した日本ダービー。

そのニュースを聞いて、往年のファンは運命めいたものを感じずにはいられなかった。

ついに、ジャパンカップ出走馬のパドック周回の時間を迎えた。

パドックはG Iレースだけあって、とても多かつたが、いつも以上に俺への声援があった。

「グレートエスケープ！ ここでも勝ってくれーっ！」

「引退しないでくれー！」

「今日も給料全部ぶちこんだからな、負けるなよお！」

横断幕が垂れ下がり、凱旋門賞馬グレートエスケープが讃えられている。

応援と同時に、別れを惜しむ言葉も聞こえてきて、寂寥感を覚えた。

(……橘ちゃん。あなたの選んだ馬は、ここまで声援を送られる馬になったぞ)

「エスケープ先輩」

一人感涙に打ちひしがれていると、声をかけられた。久しぶりの声は振り返るまでもなく、スペシャルウィークのもの。

しかし、俺の目に映るスペシャルは、去年最後に会った時と比べてまるで別馬だった。「スペシャル……でかくなつたな。体じやなく、雰囲気だ」

「はい。エスケープ先輩と走ることは夢でした。今日もすごく嬉しい……ですけど、夢より大切な目標ができました。今日、先輩を追い越して、俺は目標を達成してみせます」
鋭く、磨き抜かれた鋼のような冷たさと、力強さ。

馬体は以前より痩せたようには思えるが、痩せたというより絞られたと表現するべきだった。

なにより雰囲気と瞳だ。

甘さと子供っぽさがあったスペシャルは、気づけば戦ってきたライバルのように鋭い闘志を俺に突きつけている。

「戦いたい相手が見つかったのか」

「グラスワンダーという馬です。完敗でした。次は有馬記念で戦う予定ですが……今度は負けない」

「……そうか。だとしたら、それは思い上がりということを教えてやる。スペシャル、前座で俺に勝とうなんて100年早いってな」

ピリピリとした空気。

俺の最後の相手がスペシャルウィークで、よかった。

最後だから、きちんと仕上げてきた。

無論、もう少し若い時の方が、体の動きは良い。だが、今の俺のベストパフォーマンスは発揮出来る状態だ。

負けてひんひん泣いていた若い奴に、負けてちゃあ格好がつかない。

——旅の終着地点、ジャパンカップ。

俺は、スペシャルウィークを最後に、逃げ切りを19万人の大観衆を見せつけることを決意した。

「うおおお……！　話に混じりたいのに腹が……！　くそ、日本にもっと早く来てくれば……注目されてるけど体調悪いのが憎い……！　鬱だ……！　しんど……！」

その頃、モンジューは輸送による体調不良で一人苦しんでいた。

パドックから本馬場へ向かう俺の下へ来たのは、白村と、西京さんと、ケンちゃん、そして恵那ちゃんだった。

黒井先生はカナタさんと一緒にスペシャルウィークの元へ向かっていた。

「先生はスペシャルウィークの方に行くつて。今のグレ坊に、俺はもういらな、つてさ。本当は泣いちやうから、強がつてるだけなのに」

最後に馬体を見ながら、白村が言う。

黒井先生らしい。

「……お前は、すごい賢い馬だったな。引退つてことも、わかっているんだろう？ ……みんなは手のかからない子だと言ってるけど、俺は手を焼かされたのは忘れないからな」
確かに、やんちやする相手は白村か、生まれ故郷の牧場のあんちゃんくらいだった気がする。

気安く接していたが、そのことで助けられたことも多くあった。

「……問題ない。勝つてこい」

言葉少なく、西京さん。

寡黙ながらも俺を気遣い、怪我が少なくやってこれたのは、間違いなく厩務員として丁寧に接してきた彼のおかげだ。

今日も、西京さんは寡黙に俺を送り出す。

「グレ坊。遅くなつたが、これで最後だ。東京芝2400m……負けたことがないこの舞台で、でっかく伝説を飾ろうぜ。マックイーンですら同じGIを3連覇できなかつた。それを達成すれば、また伝説ができるってわけだ」

ケンちゃんは明るく、俺の背に跨りながら鬣を撫でた。

伝説的な……特別な記録。

ここまで来たらとことん作つてやらないと。

俺はくるりとその場では回って見せた。

「グレくん」

そして、恵那ちゃん。

「——最初は、正直怖かった。大丈夫なのかなとも思ったし、そんなに一生懸命走らせる意味があるのか、わからなかった」

ある意味、巻き込まれた人間でもあった。

しかし、決して俺を見捨てることなく、ずっと見守っていて、遂に馬主として目覚めつつある人。

「でも、グレくんが走ってるのを見て——好きになっちゃったみたい」

恵那ちゃんは少女のようににはにかんだ。

とつくにわかっていたことだけれど、言葉にされると、それがたまらなく嬉しかった。

「……グレくん。行つてらっしゃい」

——行つてくる。

パドック周回が終わり、本馬場へ向かうために地下馬道へ向かう直前、スペシャルのところから黒井先生がやってくるのが見えた。

「グレ坊……ありがとな。お前には、たくさんのものを貰ったわ」

黒井先生が俺の首に手をかける。

プリンカーがすすりと外れると、視界が広がり、東京競馬場の大きさを改めて味わっ

た。

「フアンに素顔を見せて勝つてこい。スペシャルの勝利も、お前の勝利も、両方を願つて
る」

ありがとう、黒井先生。

競走馬として力をつけたのは、間違ひなく黒井先生が俺を見てくれたからだ。

やりたいことをやらせてくれたし、常に俺の最善を目指してやつてくれていた。

俺はそれに応えたくて走つたし、応えられたと自信満々に言える。

だから、今回も応える。

俺の名前はグレートエスケープ——世界を制したサラブレッドだ。

その名前に恥じない走りを、最後に見せてやる。

《ジャパンカップ 最終単勝オッズ 上位5頭》

1番人気 9番グレートエスケープ 1. 8倍

2番人気 14番モンジュー 3. 7倍

3番人気 13番スペシャルウィーク 4. 0倍

4番人気 1番タイガーヒル 10. 4倍

5番人気 6番ラスカルスズカ 13. 5倍

5 枠9番——思えば、日本ダービーと同じ枠と馬番だ。本馬場へ入場した途端に大きくなった大歓声を聞いて、俺はそんなことを思い出した。

「ケンちゃん、ケンちゃん」

「うん? ……ああ、やらないでほしいんだけどなあ」

ダメとは言っていないからよし!

俺は大観衆に見せつけるように、前脚を高く振り上げ、大きく立ち上がった。

観衆が危険だと、驚きの声を上げるが、ケンちゃんは冷静に手綱を掴んでおり、落馬はしなかった。

「あのとぎと、一緒だな」

「まったたく……勝ってから言うんだよ、そういうのは」

最後を惜しむように、そして勝つために足元を確かめながら、返し馬を行った。

その途中で、第3コーナーと第4コーナーの中間で立ち止まった。

(サイレンススズカ……俺はお前に勝ったあとも、走り続けた。俺と走ったお前もまた、伝説として語り継がれていくのだろうか)

約一年前に起きた、ありふれた悲劇。

今でもサイレンススズカが走っていれば、そんな声を聞く時がある。

これからも、アイツは多くの人々の心で、生きていくのだろう。

「行くか。俺も、いつかは追いつくだろう」

『東京競馬場でファンファーレが鳴り響きました。第17回ジャパンカップ、今回のレースは世界と日本の最強馬の決定戦となりました。世界が注目しています。フランスからはモンジュ、日本からはスペシャルウィーク。そして、敢えて言うのなら今年の世界王者たるグレートエスケープが三つ巴でぶつかり合います。グレートエスケープはこれがラストラン。今日で27戦目、凱旋門賞でついに皇帝シンボリドルフを超えるGI8勝目を掴んでみせました。さらなる伝説を今日塗り替えるのか。モンジュは凱旋門賞のリベンジを果たすために日本まで来ました。そして日本競馬を引っ張ったスペシャルウィーク。天皇賞・秋では復活の走りを見せ、先輩馬グレートエスケープをなぞるように天皇賞春秋制覇。欧州ではなく日本が最高峰だと叩きつけるのか。ゲート入りは順調です』

いくつもの言葉が思い浮かんだ。

そのどれもが、言葉にしようとしても、上手く口から出てこなくて、切って捨てた。

もう言葉は要らない。

俺はサラブレッド——人間じゃあない。なにより語るべき言葉は持たず、見せつけるのは走り、ただそれ一つ。

『全頭ゲートに収まりました。日本総大将か、フランスの強豪か、凱旋してきた英雄か、それとも伏兵か。最強のメンバーが揃いましたジャパンカップ、今スタートしました！』

大歓声と共にゲートからするりと抜け出す。

真ん中の枠から前に出ると、そのまま加速して第1コーナーへ突入した。

『いったのはやはりグレートエスケープ！ 当然逃げます。ハナを奪います。ここでも逃げ切つてみせるのか。その後ろにアンブラスモア、3歳牝馬ステインガーが3番手、鞍上は館山典佑がしりと手綱を抑えています。そして香港のインディジェナス、さらにドイツから来たタイガーヒル、サンクルー大賞ではエルコンドルパサーの2着と日本には因縁があります。外に並ぶようにステイゴールド、天皇賞・秋では惜しい2着。オースミブライト、滝士郎がいて、イギリスのダービー馬ハイライズは中団の前！ そしてラスカルズズカ、あのサイレンスズズの弟です。フルーツオブラヴ、ここにいましたスペシャルウィーク！ 日本総大将は丁度中団。ボルジア、そしてスペシャルウィークを見るようにモンジュウです。モンジュウがどしりと睨みつけています。オークス馬ウメノファイバーがいて、少し遅れてスエヒロコマンダーです。第2コーナーを回つて向正面に入ります。先頭に戻りましょう、グレートエスケープは果敢に先頭を進んでいます。日本を世界の舞台に連れていった偉大なる逃亡者は、ラストランも

レースを引つ張ります』

競馬場がとても広く見える。

緑のターフ、隣のダートコース、晴れた空に遠くから聞こえる大歓声と、遠くで声を張り上げる競馬ファン。

そして、後ろから俺を捉えようと追いかける音。

前半はやや遅めのペースだ。

前半800mあたりから、手綱が緩んだ。

「フーっ……いくぞー」

ここまでペースは1ハロン12秒台が続く緩やかな流れ。後続はこのまま、ペースをじわりと上げた俺についてくるだろう。

ダービーと同じだ。ここからは、最後までスピードが落ちないハイペースのスタミナと根性勝負だ。

『前半の1000mを通過、タイムは60秒ちようど！ それほど速い流れではありません。ゆっくりと、ゆっくりと、噛み締めるようにグレートエスケープは先頭を進んでいきます坂を上って、下りに入ります。馬群に入れ替わりは多くありません！』

「……少し、ペースが速くなってきたか？」

「だが抑えたらポジションを下げちまう。このまま耐えるしかねえっ」

後続がペースが速いことに気がついたらしいが、もう遅い。第3コーナーで後ろに下
がれば、直線を迎えたときにポジションを確保できなくなる。

このまま得意の消耗戦に持ち込んで、競り勝つ！

『第3コーナーに入っていきます。スペシャルウィークは中団やや後ろ、モンジューは
スペシャルウィークをびったりマークしている！ 最高のメンバーが揃ったジャパン
カップ！ 日本競馬は世界に届くことを見せつけるのか、間もなく直線へ入ります！

先頭は依然グレートエスケープ！』

直線に入り、俺も消耗しているがそれ以上に後続も脚を残していない。

あとはポジションの差しか残っていない。

前にいればその分のリードをある程度保ったままゴール板を抜けられるだろう。

「だが……そうならないのが、お前らのめんどくさいところだなー」

『大外からスペシャルウィークが上がってきた！ さらにモンジューも後ろから追って
きた！ 真ん中からハイライズ、インディジェナス！ 世界からの刺客が逃亡者を捉え
ようとしている！ グレートエスケープ先頭！ グレートエスケープまだリードが1
馬身ある！』

そんな簡単に話がかかないのが、ジャパンカップという世界最強決定戦ってやつだ。
後方でたつぷり脚を溜めたモンジューとスペシャルウィークが襲いかかってくる。

3歳馬と4歳馬という若さ溢れるキレのある末脚に、高齢馬にさしかかりつつある俺ではどうしても劣る部分が出てくる。

『モンジューとスペシャルウィークがグレートエスケープに並ぶ！ スペシャルウィーク僅かに先頭だ！ モンジューが追う、モンジューが追う！ グレートエスケープは一杯になったか！』

俺の血には、歴史が流れている。

生まれた馬が走り、その中で素質を見出され、また走り出した先では同じように素質を見出された他の奴らと競走する。

勝てば、さらに上のやつと。

そして勝ち続けた末に、子孫を残すという生物が生物たり得る行為を許される。

生まれた馬は、さらに素質を見出され、走り出す。

気が遠くなるような選定の果てに、今の俺は生まれた。

魂か、精神か、異物が混じったことは否定しない。

それでも俺の体と、血には、幾多の名馬と、名前も知らぬ馬たちの屍の血が流れている。

（血脈は受け継がれていく……俺より歳上の馬たちがターフを去ったように、俺も後輩に後を託して、ターフを去る……）

知らず知らずのうちに受け取ったバトンを、引き継ぐ時が来ている。

サラブレッドでなくても、生きているならば、前の者から受け取ったものを、継承していかなくてはならない。

それが責任というやつなのだろう。

(人間として生きているときにや、考えたこともなかった)

馬になった数年の方が、よっぽどマトモに生きていようような気がする。

いや、本当に人だったのかすらも、定かではなくなってきた。

スペシャルウィークとモンジューが少し前に出て、激しいデッドヒートを繰り広げられている。

(こうして、あいつらに受け継がれていくのだろうか……)

もう充分走ってきた。俺はもうここまでだ。

——蹄が大地を抉る。

モンジューに、スペシャルウィークに、受け継いでもらい、先に進んでもらおう。

——ストライドが狭く、回転の速いものに変わる。

俺も俺で、種牡馬として、後を継ぐものたちを生み出さなくてはいけないのだから。

だから——だから、だからといって、負ける気なんてサラサラない!

「まだまだあああッ! 俺は挑み続ける、頂点に! たとえ、何度負けようとも! ナン

バーワンだとしても！俺は挑戦者でありつづける！」

「どう考えても限界だろうに！凱旋門賞も勝つてるのに！貪欲すぎて自分の器の小ささが突きつけられているようだ！それでも勝つのは、このモンジューだ！」

「エスケープ先輩……！僕は、貴方を超える！貴方を超えて、僕は僕の勝たなきやいけない相手に、勝つてみせる！」

『もう一度グレートエスケープが差し返す！内からグレートエスケープ！日欧王者が激突しているジャパンカップ、残りは200mです！』

俺だけではない。モンジューと、スペシャルウィークだけでもない。

「香港最強たる俺が負けていられない……！」

インディジェナスが。

「俺だってダービー馬だ！お前らに負けているところなんてなにもないッ！」

ハイライズが。

「兄貴のような名馬に……兄貴の強さは、俺が引き継ぐ！」

ラスカルスズカが。

「まだ勝てるときではないが、本気出さないのはかつこ悪いだろう!? 球磨ちゃんも、みんなもそう思うだろう!？」

ステイゴールドが。

「俺が……!」

「僕が……!」

「私が……!」

GIを勝っている馬も、勝っていない馬も、出走している馬すべてが、ひたすら前を目指して走っていた。

「——勝つ!!」

勝利という、たった二文字の栄光を求めて。

たとえ、レースをもう走らないとしても、今は、走っている。だから、勝利を目指さないなんて選択肢は、有り得ない。

『グレートエスケープが差し返す! 内からインデイズエナス、外からモンジュー、しかしスペシャルウィークだ、スペシャルウィークだ! スペシャルウィークが先頭だ! スペシャルウィーク先頭でゴールイン! グレートエスケープは2着、世界最強は譲らないぞスペシャルウィーク! まさに日本総大将、スペシャルウィークが勝ちました! 勝利タイムはなんとなんとご注目! あのオグリキャップとホーリックスが記録したレコードを0.1秒更新する2.22.1です! 文句なしのワールドレコード!』

走り終えて、どつと疲れが出てきた。

相変わらずレースはしんどい。走り終えたあとは、しばらく走りたくないと思うのだ

が、今日はそのままで嫌だとは思わなかった。

「エスケープ先輩！ エスケープ先輩！ 俺の勝ちです！」

スペシャルウィークが駆け寄ってきた。

鞍上のカナタさんは嬉しそうにスペシャルウィークを撫でていた。

初めてのジャパンカップ制覇といってたから、それもあろうのだから。

「エスケープ先輩……僕は、このまま有馬記念にいきます。そこで勝って……僕は僕の因縁に、決着をつけます」

「ああ、そうしろ。なんだかな、あの坊ちゃんがこんなに強くなるとは、少し驚いてる。お前の傍にいて、変化を見ていたかったかもな」

「……それは違いますよ」

「ん？」

「先輩が……遠いところに行つて、僕は追いつこうとした。凱旋門賞は行けなかったけど、先輩が遠くにいたから、僕は星に手を伸ばすように、走り続けられたんです」

「そうか……そうだったのか。どうだ、追いつけたか？」

「わかりません……でも、でも」

スペシャルウィークがぼろぼろと泣き出した。

「もつと走りたい！ 一緒に！ もつと話してみたいこともたくさんあるのに！ 引退

なんて……嫌ですよ……」

相変わらず、まだまだ甘えん坊の小僧だ。

俺は少しだけグルーミングをして、荒れた毛並みを整えた。

「しっかりしろよ。来年はお前が最強馬として、引つ張っていくんだから」

「エスケープ先輩……でも……でも……俺……！」

俺はスペシャルウィークに背中を向けた。

あいつは凄いやつだから、俺がとやかく言う必要はないだろう。

そんな俺に向けて、スペシャルウィークは泣きながら叫んだ。

「俺……次の有馬記念がラストランなんです!!」

ずっこけた。

ジャパンカップのあと、最終レースを終えて、俺の引退式が行われる。

昼休みにエルコンドルパサー、レース後に俺の引退式とは豪華なことだ。

それまで少しだけ時間があつた。

「ふー……」

周りに誰もいなかった。

2歳から走って、6歳までの5年間が今、終わった。

終わってたんだ。

「ああ……悔しいな。悔しいッ……ちくしょうっ……!」

しばらくの間、俺は敗北の悔しさに打ちひしがれていた。そして、涙を流し続けた。引退式では多くのファンが残ってくれた。

それぞれに声を上げて、別れを惜しみ、種牡馬としての活躍を祈り、グッズをたくさん出してくれと言われていた。

グッズを出すのは俺じゃないが。

「お疲れ様、グレくん」

オーナーたる恵那ちゃんが代表に、みんなが俺を労い、たくさんの人々に愛されていたことを実感した。

5年という短い時間だったのに、まるで長年勤めた会社を定年退職するときのようで、少しだけ笑った。

俺は多くの人に見送られて、ターフを去った。

「グレっち……ありがとう」

声が聞こえた。

「俺の方こそ……感謝している。ありがとう、橘ちゃん。みんな……」

ジャパンカップからしばらくして、社来スタリオンステーションで種牡馬入りすることが正式に決定し、発表された。

検査期間を終えて、一度黒井厩舎に戻ってから牧場に出発することになり、俺は約一年ぶりに自らの馬房に帰ってきた。

右隣はスペシャルウィーク、左隣はダンスパートナーさんがいた馬房だが——今は別の馬が入厩しているらしい。

小柄で若い、栗毛の馬だった。

栗毛の馬はすすすと泣いて、寂しそうに嘶いていた。

俺の存在には気づいていなかった。

「なあ……ボウズ」

「ひよえっ!? だ、だれですか……!?」

誰かと聞かれて、俺は小さく笑った。

黒井厩舎、それどころか栗東ではちよつとしたボスのような扱いになっていたのだが、時が経てば俺を知る馬はいなくなるという時の流れが予見できて、それが面白かった。

「俺は……もう引退する馬だ」

「引退しちゃうんですか……? ど、どうして」

「たくさん走ったからな。もう俺は、走る必要がなくなった」

「え、ええ〜！　ようやく優しそうな馬が声掛けてくれたのに……」

「寂しがるな、男だろう？　これからは競走馬としてやっていくしかないんだから」

「でも、でも！　ママから引き離されて、ようやく前の牧場でも仲良しの子が増えたと
思ったら、また引き離されて……寂しいよ〜！」

本来、これが正しいサラブレッドだ。

集団を好む、寂しがりや。草食動物として当たり前とも言える。

「大丈夫だ。いずれ走っていけば、色んなやつと仲良くなる」

「そうかもだけど……でも、おじさんはどこかに行っちゃうんでしょ？」

「おじっ!?　……ま、まあな」

「僕、聞いたことあるよ。勝てなくなったり、満足に走れなくなると引退させられるつて。おじさんも、勝てなくなつたの……？」

「……そうだな。もう勝てないだろうな」

間違いなく全力で走ったジャパンカップは負けた。

次のレースはもうないのだから、確かに勝てなくなつてしまった。

「でも、そういうものは受け継がれていくものなんだ。俺は先輩から受け継いできた。勝ちたいという心を。夢を、想いを。俺が誰かに受け継いでもらう時が来ただけ……そ

れだけさ」

「おじさんは、誰に受け継いでもらうの？」

スペシャルウィークが真つ先に思い浮かんだが、あいつは俺と同じ時期に引退が決まっている。

良血なだけのことはある。

それはそうと、黒井厩舎には俺の背中を見て育った奴らがたくさんいる。

特定の誰かというものではないだろうと、俺が考え込む沈黙を、誰もいないと解釈したらしい若い栗毛の馬は鼻息を鳴らした。

「……じゃあ、僕が受け継ぐよ。レースにたくさん勝つ。GIだって勝つ！　なんか、遠いところの国のGIレースを勝ったなにかつて馬みたいに、そういうところのGIも勝つからー！」

「寂しがり屋の甘えん坊が、急にどうした」

「……おじさんが、寂しそうだから。僕も寂しいから、その気持ちはわかるんだ」
「寂しい、か」

自分の心に問うてみれば、なるほどと頷いた。

俺は、ターフを去り、黒井厩舎を去ることが、寂しい。それは間違いない事実だった。栗毛の若馬には、それが見抜かれてしまったらしい。

「じゃあ……任せようかな。俺の想いを、走りをも、積み重ねてきたものを受け継いで、さらに遠くへ運んでくれることを。ボウズ、名前は？」

「僕の名前は……アグネスデジタル。世界中のGIレースを制覇する馬の名前だ」
アグネスデジタル、か。

種牡馬をしていたら、いつか名前を聞く時があつたらいいなと、俺は未来に祈つた。

「おじさんはなんていう名前なの？」

「俺か？ 俺は——」

——グレートエスケープ。ただの、サラブレッドだ。

×××

史上最高にして、唯一といわれるほどのメンバーが揃ったジャパンカップ。

スタートするなり、グレートエスケープが先頭に立った。

後ろにはサイレンススズカ、ダイワスカーレットが続いている。

後ろから追うウマ娘の名前は、誰が聞いても姿と実績が思い出されるほどのスターウマ娘ばかり。

トレーナーとして、レースが始まってしまえば何もやれることはない。

血が滲まんばかりに拳を握り込み、大歓声の中、呼吸すら忘れて担当ウマ娘の走りを見つめていた。

『残り200mでグレートエスケープが先頭です、グレートエスケープ先頭！サイレンスズカが追ってくる、さらにスペシャルウィーク、シンボリルドルフだ！ グレートエスケープが並ばれたが、粘っている！ グレートエスケープ粘っている！ ここから強いぞグレートエスケープ！ ルドルフとグレートエスケープが並ぶ！ グレートエスケープ！ シンボリルドルフ！ 並んだ、並んだところでグレートエスケープ抜け出してゴールイン！ 流石の勝負根性！ 根性勝負なら負けられない！』

そして、先頭でゴールした担当ウマ娘の姿を見て、ほっと胸を撫で下ろす。喜びよりも安堵が先に来るのは、きつと、彼女の勝利を信じているからこそなのだろう。

トレーナーとして、彼女を迎えに、走り出した。

レース中の彼女よりずっと遅いだろうが、それでも、ここまで走ってきた速度は、一緒のはずだ。

○○○

走り終えた瞬間、私は大歓声に全身を包まれた。

まさに最強ウマ娘決定戦という様相を呈していたジャパンカップで勝利した私は、間

髪入れずに拳を突き上げた。

「うおおおおおッ！」

ついに。ついに。手が届いた。

渴き、飢えるほどに焦がれた最強という称号へ。

何度も拳を突き上げながら、観客にアピールすると、その度に大歓声が上がった。

まるで子供ののように、笑いがこぼれて止まらない。

「——グレートエスケープ」

振り返れば、シンボリルドルフ会長が汗をぬぐいながら、手を差し出してきた。

「今日の君の走りはまさに獅子奮迅だった。覚えているか？ 君がデビューする前のことを」

3年前、選抜レースに出た後、イベントレースに出走し、惨敗した記憶は未だに消えていない。あのときの悔しさと、絶望感は、まだ心のうちに棲みついている。

「あのときの君は、正直言つて、私に遠く及ばなかった。でも今日は——間違いなく私を越えた。最強のウマ娘だと持て囃されてきたが、今日のレースで、それは塗り替わっただろう」

シンボリルドルフの差し出した手を掴む。

私は笑いながら、首を左右に振った。

「今日は私が勝った。だが——最強の座というものは、また変わるものだ。私が勝ったことで、今度は私を倒そうと、研鑽を積むことだろう。頂点を目指し、走り続けるのがウマ娘——そうだろうか？」

振り返ると、今日走ったウマ娘たち全員が、闘志に満ちた視線を私に向けていた。今日のレース参加者だけではない。

テレビで見ているウマ娘たちも、私が手にした最強の座を奪おうと、夢を掲げることだろう。

「ああ、違くない。ならば、その王座を奪い返すために、捲土重来を期そう。今は——おめでとう、グレートエスケープ」

握手をしてから、健闘をたたえ合うハグをすると、観客の歓声がまたひとつ大きくなった。

シンボリルドルフを越えたとしても、また別のウマ娘が私を越えようとする。ルドルフ会長も、奪還せんとまた私に挑んでくるのだろう。

そうやって、競い合って、どこまでも走っていく——憧れも、誰かも、夢も、越えていくために。

それが、特別な記録として積み重なっていく。

私の名前が呼ばれた。

こちらを大きく手を振っているのは、3年間、支えてきてくれた相棒の姿。

「相棒……これで終わりじゃないんだ。まだまだ、私の道は続いていく。果てにたどり着くまで——相棒。ずっと、一緒に走ってくれるか？」

返答は、聞くまでもなかった。

そして迎えたウイニングライブで歌うのは、Special Recordという曲。願いつつ、いつかは叶う、そんな想いが込められた歌。

「私にびつたりだな」

幕が上がる直前、眩くと、左隣のシンボルドルフ会長が小さく笑った。

「似合わないウマ娘なんていないさ」

さらに、右隣のスペシャルウィークが言った。

「次は、私が歌ってみせますから」

勝つても負けても、次々と現れるライバルたち。

華やかさで溢れるトウインクルシリーズの裏は険しく、厳しい荒野と同じだ。

走るのも難しい大地で、立ち止まってしまふ者がいる。引き返してしまふ者もいる。

それでも、その先の栄光を目指すから、どんなに脚が痛んでも、前に進むのだ。

夢は、前にしかないのだから。

少なくとも、ここまで歩んできた私は、そう断言する。

だから、諦めないで前に進んでほしい——私は、ウイニングライブを見るすべての人に、想いを伝えるように歌った。

きつと、上手に歌えたはずだ。

——たくさんの仲間であり、ライバルである、みんなに、背中を押されてきたのだから。

エピローグ グレートエスケープ（偉大なる逃亡者）

目が覚めると、知らんおじさんが馬房を開けていた。

「クロスケ、おはよう。いい天気だぞ。少し暑いけどな」

誰この人。怖い。

クロスケなんて呼ぶのは、生産牧場の人くらいのはずだが、こんなおっさんがウチの牧場にいた覚えはない。

新人にしては随分仕事も手馴れている。

「脚とか痛くないか？ よしよし、相変わらずいい体してる」

ブラッシングしてこようとするので、避けようかと思つたが、脚がなんだかふらふらする。

痛くはないが、力が入りづらい。

これじゃあレースを走れない。やばいぞ、黒井先生に怒られる。西京さんならこんなことになる前に気づいただろうに。

せめて白村は、白村はどこにいる。

しかも滅茶苦茶眠いぞ。

「もうお前も今年で25歳か……おじいちゃんだな、すっかり」

ええ？ どういうことだ？

俺は桶に入った水に映る自分の顔を見て、仰天した。

「と、歳をとってる……」

「まだまだ元気だけどな、毛並みも筋肉もしっかりしてるし」

段々と思い出してきた。

確か、数年前に種牡馬を引退して、生まれ故郷の懇備式牧場に帰ってきたんだ。

生まれた時より少しだけ広く、綺麗になったこの牧場で、余生を過ごしている。

「ほら、放牧だ。お前もすっかり大人しくなつて……助かるが、ちよつと寂しいな」

おじさんの匂いをくんくんと嗅ぐと、懐かしい匂いがした。紛れもない、牧場のあんなちゃんの匂いだ。

随分歳をとつて、それも覚えてないくらいになつてしまったのか。

思い返すと色々あった。

レースを引退して、種付けして、種付けをやってから、種付けしたり……種付けばかりだな。

それだけ子供たちが頑張ってくれたからこそなのだが、今は牧場に來るファンを相手にサービスするばかりだ。

こんなおじいちゃんをよく見に来るもんだと、感心すら覚える。

放牧地は相変わらず綺麗だが、随分広くなったように感じた。

「……いつてこい。思えば、幼駒のときにひどい肺炎を起こしたあとから、お前は元気になつたな」

そういえば、そうだ。

あの肺炎の日から、俺はグレートエスケープに憑依——いや、グレートエスケープに『成つた』んだ。

「あんな病弱なやつが、競走馬としても、種牡馬としても、大活躍するなんてな。思つてもみなかった」

俺もだ。

そもそも馬になるなんて思わなかった。

「元気に走つてこい。気ままに走るくらいで、お前はそれでいいんだから」

俺はあんちゃん、いやおっさんの言葉に従い、放牧地で走り出した。

端っこまで走つてみると、中々遠い。

きつと、すごく遅くなつたのだろう。

「はは、もうレースはできないなア……」

レコードタイムを何本か出したことが懐かしい。

今の俺を見ても、誰も信じないだろうが。

「そういえば……あの抜け道はまだ残ってるのかな」

俺は牧場のある柵の場所に行くと、頭を差し込んで柵を持ち上げた。すると、あっさり開いた。

直さなくていいのかと思ったが、俺は気にしなかった。

「——グレッチ」

懐かしい呼び声がある。

そういえば、この道を通って、橘ちゃんと草原に行つたんだっけ。

「ちよつとくらい、いいか」

林を歩く度に枝や草が音を鳴らす。

俺の蹄の音の他にも、嘶きや、他の馬蹄の音がちらほらと聞こえてきた。

少し前を、ほかの馬が歩いていた。

「……ダンスパートナーさん？」

「ああ、エツちゃん……エツちゃんも来たんだ。遅かったね……」

「なんでこんなところに。社来の牧場にいるんじゃないんですか？」

ダンスパートナーさんは答えなかった。代わりに、別の場所を指し示した。

「エアグルーヴ……？」

「なんだ、貴様か。逃げ馬だから、ずっと先に行っているかと思っていたぞ」

「なんのことやら……」

「あつ、エスケープ先輩！ 追いつきましたよ！」

「スペシャル……なんだか同窓会みたいだなあ」

林を抜けると、草原が広がっている。

あのときと、同じように。

いや、あのときよりも、ずっと綺麗に見えた。

橘ちゃんにも、こんな風に見えていたのだろうか。

「エスケープ、あいつがいるぞ。さっさと逃げた大馬鹿者が」

「あ……スズカ……」

「グレートエスケープさん……あの……いいですか？」

「ああ。なんだ？」

「僕がない天皇賞・秋を勝って最強馬名乗ってたって本当ですか？ 恥ずかしくない

んですか？」

「なんだとこのやろう」

「文句あるなら、また走りましょうよ」

「は？ 俺はもうジジイで……」

気づいたら、いつかのレースの時のように、体に力が漲っていた。

そうか、そういうことか。

そういうことなら……それでいい。

満足だ。長い夢を見続けたものだ——夢には終わりがあつた。これは現実とはいへ、本当に夢のような、幸せな馬生だった。

「スズカ。エアグルーヴ。スペシャルウィーク。ダンスパートナーさん。先に言つておくけど……俺、最強のサラブレッドなんだぜ」

「嘘はいけませんよ」

「勝手に言つていろ」

「僕が勝つたじゃないですか、最後に」

「エツちゃんは強かつたけど……まだ私と、本気で走つてないよね？」

誰も俺を認める気がなかった。

それもそうだ。GI勝利という栄光を獲得した馬が、はいそうですねって譲るわけが無い。

俺は脚に力を込めて走り出した。

ふわりと、体が浮かんだような気がした。

「俺を捕まえることができれば、撤回してやるよ！」

駆け出すと同時に、後ろから4頭が追ってきた。

4頭だけじゃない、色んな馬たちが、俺に待てだの止まれだの追い抜いてやるだの叫びながら、追ってきている。

どの顔も、見覚えがあるやつばかり。

そんなヤツらを相手にしても蹄は軽く、空を駆けて大空の果てまで、どこまでも行ける。

このまま逃げ切ったら、どうしようか……ああ、そうだ。

——橘ちゃんを探しに行くか。ライバルたちから逃げ切った、大空の向こう側で。

XX18年8月26日「グレートエスケープ号」死去。25歳、奇しくも、亡きオーナーが没した日と同日だった。

×××

「——ん、夢か……」

体を起こすと、思い切り伸びをする。

トレセン学園の芝コースの脇で寝転がりながら、レースについて考えたまま眠ってし

まったらしい。

「どんな夢を見ていたの？」

すぐ後ろから、ナーさんが覗きこんできていた。

その隣には、エアグルーヴが立っている。

「どうしたのかね、二人とも」

「エツちゃんも昼寝してるのを見つけたから。エアグルーヴちゃんも、風邪ひかないか心配だから、起こそうって」

「な、ちが、別に心配などしていません！こいつに風邪を引かれてレースを回避されては困るだけです！」

「だから心配しているんでしょ？」

「ちがいます！」

ムキになるエアグルーヴをからかいながら、ナーさんが笑う。

それを見て、ぼーっとしていると、二人は心配そうな表情を浮かべていた。

「……エツちゃん、大丈夫？本当に体調悪いの？」

「歩けるか？ 厳しいなら保健室まで連れて行くが……」

「いや、違うんだ。ただ、なんだか寂しくて」

首を傾げる二人。

私はついさつきまで見ていた夢の内容をかいつまんで話した。

「みんなが走らなくなる夢だった。怪我や病氣、衰え、色んな理由があった。決して悲しい雰囲氣じゃなかったけど、やっぱり寂しかった。それを思い出したら、いつか私達も、走らなくなる日が来るのではないか——とな」

ターフを見つめると、風が吹いて芝が小さく揺れていた。

風が止むと同時に、二人の笑い声が響き渡った。

大爆笑だった。

「なぜ笑う、笑いすぎだぞ」

「いやいやいや！　だってエツちゃんそんな心配するなんて……ふふふっ」

「何を言うかと思えば、まさかお前が私を笑わせるとは。会長のダジャレより笑ったぞ」

それはすごいな。会長のダジャレを笑わずにいるなんて、私には無理だ。

エアグルーブが目元の涙を拭う。

「貴様は、どんなときも、勝ちにこだわって、走り続けていただろう。今更なにを恐れる」

「まあ、そうだけど」

「確かにいつかは引退して、走らなくなる時は来るだろうが……少なくとも、今ではない。怪我や病氣ということもあるが、我々は、ウマ娘は、それを恐れて走ることをやめるような存在ではない」

「そうだよ、エツちゃん。走れるならいつまでも走るし、走れなくなった時のことを今から考えても仕方ないじゃん」

「……確かに、その通りだな」

私は立ち上がると、芝コースに降り立った。

「私たちはウマ娘——未来のレース結果など、誰にも分からない。だから、ゴールを目指して走り続ける……愚問だったな」

こういうことを考えるのは、雑念がある証拠。

ならばこそ、走って頭をすつきりさせよう。

私がストレッツをしていると、ナーさんとエアグルーヴがやってきた。

「せっかくだから私も走るよ。エツちゃんの先輩として、しっかり勝たないと」

「そういうことなら。エスケープ、貴様を越えねば私は理想には辿り着けん。今日も貴様を打ち破ってみせよう」

「ほう。いいとも。全力で——」

「あつ、エツチャンさーん！ 併走お願いします！ 今日こそ勝ってみせますからね！

スズカさんも早く早く！」

「ちよ、ちよつと、スペちゃん慌てないで！ 私もちゃんと行くから……！」

スペシャルウィークとサイレンススズカがやってきた。二人も併走希望らしい。

「ここまで増えると併走というより、模擬レースのようだ。」

「あ、エツちゃん！ なになに？ みんなで走るの？ 私も走っていい？」

「アイネス姉さん……もちろん。アイネス姉さんにも逃げ負けたりはしないさ」

「なんか集まってる……すげーメンツじゃねーっすか！ グレ先輩主催の模擬レースっすか!？」

「ああ、そんなところだ。ウオツカ、お前も走るか？」

「もちろんっす！ 先輩がトライアンフならオレはドウカ……なんとかみてーな！ ハーレー的な感じで、追い抜きますよー！」

「ちよつと待つデースー！ こんな面白そうなレースにこのアタシ、世界最強にして最優のウマ娘、エルコンドルパサー無しには有り得ませーん！ とうっ！」

ラチの上に立ち、そのままジャンプして着地するエルコンドルパサー。

彼女もレースに参加希望らしい。

「だいぶ集まったな……ならば距離は芝2400m、左回りでいいな？」

全員が頷く。瞳にギラギラと炎を滾らせ、写しているのはゴールだけ。

どこまで走っても、退屈しなさそうな相手ばかりだ。

スペシャルウィークが手を上げる。

「あの……スタートはどうしましょうか。これだけ多いと、大変ですよね」

「エスケープが言えばいいんじゃないのかしら」

「スズカ、別に私は構わないが、いいのか？ 私は逃げウマ娘。先に逃がしてしまうかもしれんぞ？」

「いいわ。それでも勝つのは、私だから」

スズカの言葉を皮切りに、みんなが勝つのは自分だと騒ぎ立てる。

ぱしん、と手を叩くと一斉に静かになった。

「わかった。私が合図を出そう」

全員が横一列に並ぶ。

——ウマ娘グレートエスケープが、どこまで走るかはわからない。

けれど、どこまでも走り抜いていきたい——そんなありふれた願いを抱えたまま、今日も私は勝利を目指して走り出す。

「いちについて——よい、ドン！」

エンドクレジット 夢は続いていく

登場人物紹介とその後（括弧内は初登場話数）

・グレートエスケープ（第1話）

XX93年生まれ。幼名はクロスケ。黒鹿毛のサラブレッド。幼いころはやんちゃだったが、暴れたりはしないのでタチの悪い頭の良さを持っていると思われる。競走馬引退後、社来SSで種牡馬入り。その際のシンジケートは総額36億円（一口6000万円×60株）、種付け料は1000万円でスタート。XX00年に供用が開始され、XX03年に産駒がデビュー。その後も活躍馬を出したが、XX15年の種付けを最後に、体調不良を理由に種牡馬を引退し、余生を懇備式牧場で過ごす。XX18年8月26日死没（25歳）。

・ゴールドシップⅡアズナブル（第1話）

通称『赤い流星』のウマ娘スーツのパイロット。シャダイ公国軍の大尉であり、宇宙を面白おかしくするために地球の人間とウマ娘を全員ブリに変える兵器で一掃しようとしていた。メジロマックイーンⅡレイによって返り討ちに遭い、宇宙ブリとして元気にやっている。

・メジロマックイーンIIレイ（第1話）

トレセン学園連邦軍のパイロット。民間人だったが戦争中にウマ娘スーツに乗り込み、活躍したことで臨時で軍属となっている。生まれ故郷に伝わる天皇賞・春の盾の継承者であり、ゴールドシップからの攻撃を防いだ。その際の余波が遠い別次元の地球に降り注ぎ、一頭の運命を大きく変えたことで、世界の運命さえも変わったが、そのことは知らずに戦闘後にスイーツを味わっていた。

・牧場のあんちゃん（第1話）

グレートエスケープに散々振り回された結果、彼に負けない頭の回転と技術を取得した。縄抜け、ピッキング、サラブレッドの言うことがなんとなくわかる、半径1km圏内のサラブレッドの位置などなど。グレートエスケープが種牡馬生活を引退してからも世話をしていた。その頃の年齢はおっさんに差し掛かっていた。

・天長働郎（第1話）

懇備式牧場の場長。古くから受け継いできた日本古来の牝系が花開き、グレートエスケープが活躍してからは度々インタビューを受けていた。その結果少し調子に乗りすぎてしまい、牧場の牝馬にサンデーサイレンスや、デーブインパクトといった大種牡馬を種付けしてしまい、経営が傾いたのは別の話。

・シルバーパート（登場無し）

名前だけの登場。グレートエスケープの母。産駒にはブレイヴステップ、イリーガルバイト、ニゲルガカチ、レジウチマシーンといった馬がいる。しかしGIを勝利したのは、グレートエスケープのみだった。

・橘馬奈（第1話）

グレートエスケープの名付け親にして初代オーナー。父親から継いだ会社の事業を拡大させた。そして馬主資格を取得すると、グレートエスケープに一目惚れをして購入。ちなみに庭先取引の際に場長は経営が苦しいのもあり、500万円で購入されてほしいところをふっかけるつもりで800万円を提示するつもりでいたが、橘馬奈はその倍近い1500万円を提示。それ以来、懇備式牧場の女神と崇められていた。グレートエスケープが重賞に出走すると、美人すぎる馬主として人気になる。その後末期癌が判明。グレートエスケープのダービー制覇を見届けると、この世を去った。享年29歳。

・ダンスパートナー（第3話）

グレートエスケープの1歳年上の牝馬。引退後は繁殖牝馬として過ごす。グレートエスケープの種牡馬デビューの際に、交配相手としてグレートエスケープが選択され、種付けする。その際にひと悶着あったのは別の話。産駒は最終的に3頭おり、GIにこそ手が届かなかったものの、最初の産駒である牡馬『ブレイクダンス』はGI2着2回、3着2回と善戦した。最終的に重賞は5勝するなど、活躍し、種牡馬入りした。

・ラツキーパンチ（第4話）

引退後は乗馬クラブで、優しい顔立ちと雰囲気から人気乗馬となる。グレートエスケープが活躍する度に「一緒に走ったことがある」と語って嬉しそうにしていたという。

・ダンスインザダーク（第6話）

社来SSでグレートエスケープと再会する機会があった。その頃には普通の口調となっており、グレートエスケープにそこを触れられると突如暴れだした。社来SSの従業員の間で語られる『ダンスインザダーク、昔のライバルに闘志剥き出し事件』である。

・ロイヤルタッチ（第6話）

再会の機会こそなかったが、種牡馬として生活。引退後はのんびり余生を過ごした。時々出会うグレートエスケープの産駒に対して強気に出て、ライバルだったと語っては尊敬を集めていた。

・イシノサンデー（第6話）

種牡馬をひっそりとやりつつ、余生を過ごした。後に現れたディープリンパクトを見て、夢の正体は彼だったことに気がついた。グレートエスケープ産駒がディープリンパクトに負ける度に、「所詮はあの程度……」と笑っていたが、必ずレースを見るか、ラジオで聞いていた。

・サクラスピードオー（第8話）

ダービー以降はマイル路線に進んだため、戦うことはなかった。しかし、ダービーで見たグレートエスケープのスピードに追いつくため、走り続けた。いつか、スピードオーと胸を張って名乗るために。

・グレートエスケープ単勝おっちゃん（第8話）

グレートエスケープの単勝馬券を毎回給料全額つき込んだおっちゃん。妻と子に逃げられてヤケになった皐月賞で全額給料をグレートエスケープに賭けるが外す。しかし、かえって吹っ切れてしまいグレートエスケープと心中しようと決めてそれから給料ひと月分で単勝馬券を買うようになっていた。ざっと計算すると30倍以上は余裕で儲けていたが、最後のジャパンカップで儲けたぶんをすべてグレートエスケープの単勝にあてた。馬券は外したが、とても晴れやかな顔をしていたという。

・滝カナタ（第10話）

言わずと知れたトップジョッキー。凱旋門賞やキングジョージを制した日本人ジョッキーとしてますます評判も高まっている。トップをひた走りながら、競馬界の普及のためにも活動し続ける。時には怪我で苦しんだ時もあったが、それでも馬に乗り続けている。特別な理由はない、馬に乗ることが好きだから。そして、またサイレンスズカやグレートエスケープのような名馬に出会いたいがために。彼は今日も馬に騎乗する。その姿は、紛れもないトップジョッキーだ。たとえ、勝利数が少なく成ろうとも、

それは変わらない。

・バブルガムフェロー（第15話）

引退後は種牡馬として活躍。子供たちにラップ口調やエセアメリカン口調が感染し、グレートエスケープの子供にも伝播したと聞いてグレートエスケープは馬産地でとても嘆いた。

・ファビラスラフィン（第15話）

引退後は繁殖牝馬として過ごす。グレートエスケープが種牡馬デビューの年に配合相手としてグレートエスケープが選ばれ、種付けを行う。そのときに色々あったのは別の話。ちなみに日付の関係でダンスパートナーより早かった。産駒のファビラスガールは良血と馬体から注目されたが脚元が弱く、デビューできなかった。しかし牝馬だったため繁殖入り。後にその産駒、つまりグレートエスケープとファビラスラフィンの孫にあたるマキシマムパンチ（牡・父キングガメハメハ）がダート戦線で活躍、さらにトライデント（牝・父ハーツクライ）が芝GIを制した。

・カネツククロス（第15話）

引退してからは種牡馬にならず、生まれ故郷の牧場で余生を過ごす。「ごっつい後輩がおつてな。スタートでババアツていくとそのままドビューンと進んでな

、ゴールまでバーンやねん。えっぐいやろこいつ！」と牧場の若い馬に伝えるがさつ

ぱり伝わらなかつたため、G Iで走つたことを信じられていなかった。

・エリシオ(第15話)

社来グループによって購入され、種牡馬になったためグレートエスケープと再会する機会があつた。凱旋門賞勝利したと聞いて、「なぜ私が現役の時に来ない」と少し怒つていたとか。

・シングスピール(第15話)

出会う機会こそなかつたものの、日本に輸出された産駒のアサクサデンエンやローエングリンはグレートエスケープの産駒と勝利を争つた。シングスピールには産駒の活躍は届かなかつたが、グレートエスケープへのリベンジを産駒が果たしてくれるよう祈つてもいた。

・ブレイヴステップ(第16話)

グレートエスケープの1つ年下の半弟(父ダンシングブレーヴ)、度々好走していたが重賞は中々手が届かなかつた。しかし、ついにG I Iを制覇し、兄弟重賞制覇を達成した。良血が買われて代替種牡馬として種牡馬入り。種付け数も少なく、それほど成績が伸びなかつたが、産駒のクロスステップが皐月賞を、大本命だったグレートエスケープ産駒のジョイエロを差し切つて12番人気で勝利。種牡馬として兄に一矢報いた。

・ローゼンカバリー(第17話)

中山得意な変なプリンカーをつけた馬。プリンカーをいじったりいじられたりの動画はネットで密かな人気がある。グレートエスケープが引退した翌年、目黒記念を勝利し2年ぶりの勝利を挙げた。伊達に長く一緒に走っていないといわんばかりの、根性の勝利だった。彼にもまた、グレートエスケープの走りが受け継がれていた。

・サクラローレル（第18話）

後にグレートエスケープが凱旋門賞を勝利してから、俺の方がすごいんだと種牡馬生活を頑張ったが、それもグレートエスケープに負けてしまった。いつかりベンジするために体を鍛えているという。

・マーベラスサンデー（第18話）

引退後は種牡馬として生活。グレートエスケープを上回る種牡馬としての活躍はできなかったが、現役時代先着されたことがないので良しとしている。

・マヤノトップガン（第18話）

天皇賞・春では鬼脚を見せてグレートエスケープを撃破。その後に大活躍するグレートエスケープを見ても、驚くことは無かった。彼が活躍することは、わかっていたからだ。

・スペシャルウィーク（第20話）

ジャパンカップ後の有馬記念では宿命のライバル、グラスワンダーと激突。数センチ

の差で勝利を逃した。彼はレース後、たくさん泣いた。そして、牧場に旅立つ合間にグレートエスケープに泣きつき、そして一緒に社来SSに向かった。社来SSでも仲良しで、毛色が一緒なのもあり兄弟みたいだと牧場スタッフに評されていた。厩舎ひいては栗東トレセンではグレートエスケープがボスとして君臨していたが、スペシャルウィークはコバンザメのようにくつついて調子に乗っていたと、後に黒井調教師の著書で暴露されたりもした。

・シルクジャステイス（第21話）

被害集中1号。ちゃんとGIこそ勝てたが、梶田健二が主戦から奪われたり、走るレースごとごとくグレートエスケープにかっさらわれたりするなど、敗北が多かった。史実でも有馬記念勝利以降は中々勝利を挙げられなかった。

・館山典佑（第22話）

美浦のジョッキ。ジャパンカップをテン乗りで勝利に導いた手腕はまさに面目躍如といったところ。グレートエスケープ産駒に騎乗し、度々GIで波乱を起こした。もちろん、いい意味と悪い意味、両方で。

・エアグルーヴ（第22話）

4歳から5歳にかけて覇を競い合ったライバル。牝馬ながら牡馬の一線級と互角以上に戦った女帝。引退後は初年度にサンデーサイレンスとの間に産まれたアドマイヤ

グループが活躍。翌年から2年連続でグレートエスケープが交配相手に選ばれた。その2頭のうち、産駒のプリズンブレイク（牝）はオークスを勝利。ダイナカールから数えて親子3代オークス制覇を達成した。種付けのときに騒ぎがあったのは別の話。

・ピルサドスキー（第22話）

勃起ッ！ 引退後は日本で種牡馬に。メタ的な話をするともつとコメデイ路線で絡ませる予定だったが上手く行かなかった。種牡馬として活躍はできなかったが、ムスコは元気いっぱい、大活躍。ピルサドニシパ……これが、勃起……！

・メジロドーベル（第23話）

度々グレートエスケープとレースを走った牝馬。引退後、グレートエスケープが交配相手になれば、種付け。産まれた産駒、メジロエスケープ（牝）は勝ち上がりこそしたものの、500万クラスからは上がれず。その後繁殖入り。メジロの血脈を次繋いで、子孫でついにGIに手が届くが、それは遠い先のお話。

・メジロブライト（第24話）

被害集中2号。唯一のGIを奪われてしまった。申し訳ないと思っただけなら早くウマ娘に実装してください！ それはそうと度々グレートエスケープに肉薄した牡馬。いつか末脚が届くと信じて追い続けていたが、ついに先着することはできなかつた。ただ、大きな背中を追い続けた日々は、悪いものじゃないと思っただけ。

・ステイゴールド(第26話)

なんか変な奴。後に香港ヴァーズを勝利したことは語るまでもない偉業だが、種牡馬としても活躍。社来SSではグレートエスケープに絡みに行つて追い返される動画がひそかにウケていた。

・サイレンススズカ(第27話)

天皇賞・秋ではグレートエスケープと激闘を繰り広げた。GI勝、されど魅せた走りは未だに語り継がれている。この世界ではグレートエスケープ、サイレンススズカ論争が頻発し、ここにデーブインパクトやアーモンドアイ、ウオッカなどが参戦しているなど、平和に掲示板で喧嘩するネット民は多い。最強馬は個人個人に最強馬がいる。しかし最終的に黒井最強で締めくくられるのがお約束。

・ハードバトラー(第31話)

グレートエスケープの帯同馬の役目を終えると、引退。競技馬として活躍する。早く走るのはもう難しくなったが、大人しく、従順な気性から後に総合馬術の競技や障害馬術などで活躍。オリンピックに出場もした。いつか金メダルをとり、KG6&QESと凱旋門賞を制した偉大な馬に相応しい実績を目指して、今日も彼は飛ぶ。ちなみに引退後も世話焼きなのは変わらず。

・青山祐一(第31話)

ニューマーケット滞在中、グレートエスケープの調教つけていた。騎手として華々しい活躍はできなかったが、こういった確かな技術を持つ騎手が影で競走馬や厩舎を支えている。数年後、調教師試験に合格したため、引退。調教師になってから10年後、GI勝利を管理馬で達成した。グレートエスケープのような名馬を育てることが、目標。

・シーヴァ (第32話)

のちに繁殖牝馬として日本に來日し、種付けする。産駒はGIこそ勝てなかったものの、善戦し、種牡馬入りする。ほそぼそとした血脈は、後に欧州を席卷するサイアラーインを築き上げるのだが、それもまた、遠い先の話。ちなみに、すぐくデレデレで社來の繁殖牝馬は怖い顔をしていたという、出処のわからない噂がネットにひそかに流れている。

・デイラミ (第33話)

凱旋門賞後はBCターフを勝利し引退。欧州の古馬最強馬として面目を保った。種牡馬として活躍しきれなかったが、後に半弟のダラカニが凱旋門賞を勝利。いつかグレートエスケープの子供が欧州に來ないか、ひそかに楽しみにしている。

・モンジュー (第34話)

凱旋門賞、ジャパンカップを走った次の年も現役続行。キングジョージを制すなど、最強馬として活躍を見せつけた。後に産駒のハリケーンランが、エレクトロキューショ

ニスト、日本から遠征したハーツクライ、グレートエスケープ産駒のエスペラがキングジョージで激突。見事に勝利するなど、産駒同士でも激突した。

・エルコンドルパサー（第34話）

ジャパンカップ当日、昼休みに引退式を行う。最終レース後にはグレートエスケープの引退式もあり、ちよつとしたお祭りデーだった。グレートエスケープと言葉を交わし、種牡馬としてもGI勝利、凱旋門賞勝利を先にとることを誓った。しかし、夭折してしまい、それは叶わなかった。後に父グレートエスケープ、母父エルコンドルパサーの牡馬が活躍。出走した凱旋門賞では……いえるのは、種牡馬入りして、グレートエスケープ、そしてエルコンドルパサーの血を繋いでいったということ。

・アグネスデジタル（第35話）

「僕は——アグネスデジタル！ 受け継いだ意志を叶えてみせる。例え、世紀末霸王が相手だとしても。勝負だ、テイエムオペラオーツ！」

後に芝、ダート、そして世界の至るところでGI勝利を挙げてみせた。場所を選ばず、勝利を目指す姿は多くのファンに勇気を与え、語り継がれていく。そしてその意志もまた、受け継がれていく……。

——XX19年、5月26日。東京競馬場。東京優駿、日本ダービー当日。

パドックには世代の頂点を決める戦いに参戦する、18頭の馬たちと、それぞれの陣営が集まっていた。

そのうちの1頭、1枠1番の黒鹿毛の馬に、一人の男が跨った。

少し童顔ながらも、顔にはしわが刻まれ、酸いも甘いも噛み分けた彼は、騎手として堂々たる振る舞いを見せつける。

「ありがとうございます。グレートエスケープの子供に、ダービーで乗せてくれて。臯月賞には間に合いませんでしたけど、今日のこいつは気合が漲っていますよ」

・梶田健二(第4話)

グレートエスケープの主戦騎手。グレートエスケープ引退後も騎手として活躍。時に不振で勝てず、落馬による怪我、外国人ジョッキの参戦などでG1レースの勝利が遠のくこともあった。しかし、彼は諦めず、地道にできることをこなしていった。そして、今日の日本ダービーに挑むのだった。天に旅立った相棒以来の栄光を、再び掴むために。

調教師が、不敵に笑う。

若いころの頼りなさげな振る舞いは鳴りを潜め、かつての師匠のように、豪快に構えていた。

「ここを勝つために調整してきました。あとは一番に入線するだけです。こいつでダービーを勝てなかつたら、もう一生縁がないと思うくらい。まだグレ坊の子供はダービーを勝っていませんからね、ラストチャンスですから、勝ちたいですよ」

・白村駿輔（第4話）

黒井調教師の調教助手として活動していたが、3度の挑戦の末、調教師免許に合格。黒井厩舎から独立した。開業から12年、度々日本ダービーに管理馬を送り出していたが、最高が4着と勝利できなかった。それでも諦めることなく、13年目の今日、日本ダービーに管理馬を送り出す。奇しくも、その馬は、グレートエスケープのラストクロップの牡馬だった。

寡黙な厩務員は出走する管理馬の馬体を隅々までチェックする。

もしも不調があれば、例え唯一のチャンスだろうと、出走取り消しを進言することも厭わない思いで。

だが、それは杞憂に終わる。2年間見続けてきた管理馬は、ホースマンすべてが唸るほどの絶好調だった。

「……問題なし。大丈夫です」

・西京白哉（第4話）

グレートエスケープの担当厩務員。引退後も黒井厩舎で働いていたが、白村が調教師

となるタイミングで白村厩舎へ移籍する。新人で頼りない白村調教師を、寡黙に働きなから、支え続けた。そして、グレートエスケープ産駒の担当になると、ダービー制覇を目標にしながら、世話をし続けてきた。寡黙に、こつこつと。その成果は、今日の日本ダービーに表れるだろう。

調教師を引退し、競馬評論家となった男は、かつての管理馬の面影を残す黒鹿毛の馬を見て、感嘆の声を漏らす。

思い出深いあの馬を思い出すと、つい涙腺が緩くなる——密かに目元を拭った。

「それにしてもこいつ、グレ坊にそっくりやな。一回り小柄なくらいやが……あとは全部瓜二つや。コラムでちゃんと二重丸を打ってよかったわ」

・黒井昭寿（第3話）

栗東に開業している調教師。懇備式牧場へ訪れた際に、橘馬奈と出会い、管理を頼まれる。最初は血統を聞いてもあまり走らないと思ったが、グレートエスケープを見てこれは走ると思い、預託を決めた。

引退後も名馬を送り出し、後に調教師を引退。その後は競馬評論家として活躍している。時々本を出してはたくさん売れており、競馬ファンの間ではエピソード豊富な調教師として知られている。

「しかし……ありがとうございます。わざわざ関係者として招待してくださって。——

橘オーナー」

黒井調教師——黒井は振り返る。

馬主記章をつけたスーツ姿の女性は、懐かしむように微笑んだ。

「わがままを聞いていただいたのはこちらの方です。初めて所有した競走馬なら、この方々と一緒にレースに臨みたいと思っていましたので……まさか日本ダービーに出走できるとは思ってもみませんでしたけど」

「違いますよ。初めての馬じゃないです」

「え?」

「我々の誰もが思っていますよ。貴方は、グレートエスケープの馬主だった。そこは、自信を持って言うてください。お姉さまと、橘オーナーの二人が、あいつの馬主だったんです」

「……ありがとうございます」

橘恵那は小さく笑って、頭を下げた。

丁度20年経っていても、あのときとよく似た、優しい笑顔だった。

・橘恵那（第12話）

グレートエスケープ引退後は馬主資格がなくなり、元の生活に戻った。その後は獣医に関わる医療器具メーカーを設立。0からスタートし、瞬く間に会社を大きくしてみせ

た。そして、ついに馬主資格を自力で取得した。最初は懇備式牧場で生まれたグレートエスケープ産駒（母父サンデーサイレンス）を購入。体調不良で種牡馬を引退していたため、ラストクロップだった。グレートエスケープが死去した翌年、その牡馬で日本ダービーへ挑む。

橘恵那は所有馬を撫でた。

手触りもそっくりで、懐かしさに身がぶるりと震える。

その黒鹿毛の牡馬は嬉しいのか、自らのオーナーに身体を押し付け、甘えた。

「それじゃあ、頑張つてね——グレチャン……」

「ひひいんッ！」

・グレートチャンプ（エンドクレジット）

父グレートエスケープ。母父サンデーサイレンス。グレートエスケープのラストクロップ世代たるXX16年生まれ。天長牧場長がチャレンジしてサンデーサイレンスを種付けし、生まれた牝馬にグレートエスケープを付けたことで生まれた、懇備式牧場生産の牡馬。2歳にデビューするが勝ち上がりが少し遅れ、弥生賞では優先出走権を獲得できず、皐月賞は諦めた。その後京都新聞杯を勝利し、日本ダービーへ臨む。

——サラブレッドの血脈、輝かしい栄光と希望。そして、ホースマンの願い、意志、祈

りは受け継がれていく。
これからも、ずっと。

名バ列伝

名バ列伝 その1

「ウマムスキー粒子が俺を呼んでいる……ウツス、仕事やめます……」

「は、はあッ!?!」

ある日、私は仕事をやめて、必死に制止の説得をする上司に背を向けて会社を去った。仕事に不満があったわけではなく、私もなぜ辞めたのかわからなかった。ただ、ウマムスキー粒子が溢れ出し、仕事をやめなくてはと心の中の黄金が輝いていたのだ。

職場には悪いとは思いますが、入社して15年無遅刻無欠勤を貫き、仕事ぶりも問題なかった。それと相殺させてもらおうことにしよう。

「何をしようか……」

とはいえ、趣味らしいものはゲームくらい。最近ハマっている、ウマ娘プリティダービーでもやろうかとしたところで、今日はゲームの新情報が生放送で公開されることを思い出した。

時間に合わせて、動画配信サイトを開き、情報を確認する。

「そして、ゲームの最新情報〜!」

「ガチャ石解放の時間だああああああ」

「日本競馬界最強馬実装とかウツソだろお前www」

「よう許可降りたわ」

「おい……なんで……また給料を吐き出すことになってる……？」

「フアツ!!」

「イクゾオオオオ!!」

「どうやら想像以上にビッグネームだったらしい。」

(スペちゃんのことを調べていたら、何度か名前を見たことがあるような)

ついでにツイッターを開いてみると、競馬を知らないウマ娘ユーザーも聞いたことがあると反応するアカウントが多数あり、さらに競馬に詳しいアカウントはグレートエスケープの実装に奇声を発していた。

「なになに……グレートエスケープはこんなウマ娘……『アニメ1期のエルコンドルパサーに凱旋門賞で勝ち、ジャパンカップでラスボスだったウマ娘の元ネタ』って……ああ、この強そうなウマ娘がグレートエスケープだったんだ」

アニメではグレイテストランという名前のウマ娘だったが、生放送で公開されたビデオリアルはだいぶ違った。

(許諾とれたんだな……でもどんな馬なんだろ)

さらにツイッターでグレートエスケープの情報を探ってみる。

「種牡馬としても活躍して、産駒は……もうかなり少なくなってるのか。XX15年生まれの産駒が最後で……もう数えるくらいしかないじゃん。うーん残念」

ツイッターではお祭り騒ぎと同時に、オタクの妄想、グレートエスケープの性能予想、奇声をあげながらのたうち回るアカウント、現役時代の動画などなど、情報が氾濫していた。

生放送での情報によると、まずサポートカードが明日からガチャに実装されるらしい。

ランクはSSRで、性能は実装されてから攻略wikiなどがすぐに挙げるだろう。

「……イケメン系ウマ娘なんだな。なんかかっこいいし……可愛い」

フジキセキやエアシャカールを推していた私の性癖には合っている。

まずは彼女を知るところから始めることにして、まずは定番のwikipediaを見ることにした。

○○○

グレートエスケープ（英：Great Escape）は日本の競走馬、種牡馬。XX99年に日本生産馬、日本調教馬として初となる、キングジョージ6世&クイーンエ

リザベスステークス（以下K G 6 & Q E S）と凱旋門賞を優勝し、同年に欧州年度代表馬であるカルティエ賞を受賞した競走馬。芝重賞14勝は日本歴代1位、そのうち芝G Iを8勝しており、芝G I勝利数はアーモンドアイに抜かれるまで日本歴代1位だった。獲得賞金もテイエムオペラオーに抜かれるまで世界歴代1位。X X 0 0年に現在までで唯一となる満票でU R A 顕彰馬に選出された。

種牡馬としてはX X 0 3年にファーストシーズンリーディングサイアーを獲得。X X 0 9年にリーディングサイアーを獲得するなど活躍した。

グレートエスケープ

現役期間：X X 9 5年～X X 9 9年

欧米字：G r e a t E s c a p e

香港表記：大脱走

品種：サラブレッド

性別：牡

毛色：黒鹿毛

生誕：X X 9 3 . 4 . 1

死没：X X 1 8 . 8 . 2 6 （25歳没）

父：アイネスフウジン

母：シルバーパート

母の父：シンボリルドルフ

生国：日本（北海道・浦河町）

生産：懇備式（コンビニ）牧場

馬主：橘馬奈（タチバナ・マナ）↓橘恵那（タチバナ・エナ）

調教師：黒井昭寿（クロイ・アキトシ）

調教助手：白村駿輔（ハクムラ・シユンスケ）

厩務員：西京白哉（サイキョウ・ビヤクヤ）

【競走成績】

タイトル

・ URA賞年度代表馬（XX96年・XX99年）

・ 最優秀3歳牡馬（XX96年）

・ 最優秀4歳以上牡馬（XX99年）

・ 最優秀父内国産馬（XX96年・XX98年・XX99年）

・ カルティエ賞年度代表馬（XX99年）※欧州年度代表馬

・ カルティエ賞最優秀古馬（XX99年）※欧州最優秀古馬

・ 顕彰馬

生涯戦績 27戦16勝

(中央競馬) 23戦13勝

(イギリス) 3戦2勝

(フランス) 1戦1勝

獲得賞金 16億4416万7000円

(中央競馬) 14億2458万4000円

(イギリス) 64万4200ポンド ↓約1億2180万円

(フランス) 498万7500フラン ↓約9778万3000円

I C

120L (1996年)

119L (1997年)

122L (1998年)

136L (1999年)

勝ち鞍

GI 東京優駿 XX96年

GI ジャパンカップ XX96年・XX97年

- G I 天皇賞(春) XX98年
- G I 天皇賞(秋) XX98年
- G I 有馬記念 XX98年
- G I KG6&QES XX99年
- G I 凱旋門賞 XX99年
- G II 弥生賞 XX96年
- G II 神戸新聞杯 XX96年
- G II 日経賞 XX97年
- G II 阪神大賞典 XX98年
- G II プリンスオブウェールズS XX99年
- G III ラジオたんぱ杯2歳S

【競走馬時代】

○生い立ち

XX93年4月1日、北海道浦河郡浦河町の懇備式牧場で誕生。懇備式牧場は年間10頭前後を生産する中小の牧場で、生まれた当初のグレートエスケープは病弱だった。牧場長の天長働郎は競走馬になれるかどうかを心配し、牧場の経営が傾くことを覚悟し

たという。

1歳のときに重度の肺炎にかかり、生死の境を彷徨う。しかし奇跡的に回復、それ以降は病気や怪我をせず、みるみる馬体が成長し、1歳後半ではバランスのとれた馬体になった。

そしてサマーセールに上場させる予定だったところ、馬主になったばかりの橘馬奈が「二目ぼれした」と場長の天長に交渉。若く、女性だった橘に対して天長はセリで500万円で売れるだろうと踏んでいたところ、800万円を提示。それに対して「安すぎる」と3倍の1500万円を橘に提示され、庭先取引にその場で応じたという。

庭先取引の価格の通り、父アイネスフウジンこそ新種牡馬として比較的期待はされていたものの、牝系は古来から日本で紡がれてきたといえれば聞こえがいいが、悪く言えば古臭い血統だった。母父シンボリドルフも高い評価はされていないことから、あくまで良い馬体をしている、という評価にとどまっていた。

しかしその後、懇備式牧場を訪れた黒井昭寿調教師がグレートエスケープを高く評価。黒井自らオーナーに依頼するなどして、栗東の黒井厩舎に入厩することが決まった。

育成牧場を経て入厩を間近に控えたころには胴はすらりと伸び、クラシックディスプレイスタンスから長距離向きだという評価を関係者からされていた。その際の育成担当スタッ

フや、黒井厩舎の白村駿輔調教助手（現調教師）は「もしかしたら菊花賞を狙えるかも」と願望混じりの期待をしていた。

・馬名の由来

馬名は1963年に公開された映画「大脱走（原題：The Great Escape）」に由来している。橘が懇備式牧場へ購入する1歳馬を見に行った際に、グレートエスケープは放牧地から脱走して彼女の前に姿を現した。その際に橘は馬名を「グレートエスケープ」に決定したという。

○2歳（XX95年）

XX95年6月4日、京都競馬場芝・内回り2000mでデビュー。鞍上は梶田健二。1番人気に推されるが道中かかってしまい、前半1000mを58.2秒という2歳馬ということ抜きにしても超ハイペースで逃げてしまう。結果として3着だったが、レース後の消耗は軽度であり、前述の超ハイペースでも3着に残ったことから調教師の黒井は「ひよつとして大きいところを勝てるかもしれない」と感じたという。休養を挟んだ未勝利戦（阪神競馬場芝1600m）では持ったままで2着に5馬身差で圧勝し、未勝利を脱した。

3戦目は自己条件ではなく、格上となるOP特別の芙蓉ステークス（中山競馬場・芝2000m）を選択。栗東所属にもかかわらず、中山で行われる芙蓉ステークスに出走

したことについて、黒井は「グレートエスケープの輸送に対する耐久性を見る。体重があまり減らないのであれば、皐月賞、ダービーを狙える」と記者に答えていた。

芙蓉ステークスは1番人気こそシーズグレイスに譲り、2番人気となる。しかしレースでは逃げて直線で後続を突き放す、強い勝ち方で勝利。OP馬となった。体重も減らず、中山の小回りも苦にできなかったことから、黒井は密かに三冠を意識し始めた。厩舎スタッフも、ダービーを狙えるのではないかと期待が徐々に高まっていた。

休養を挟みつつ、次走は有馬記念前日に行われるラジオたんぱ杯2歳ステークスが選ばれた。GⅢながらも、阪神芝2000mという距離から関西の素質馬が集まる重賞であり、事実上の関西2歳馬最強決定戦の様相を呈していた。

また、1週前の朝日杯ではサンデーサイレンス産駒のバブルガムフローが勝利しており、同じ父サンデーサイレンスであるロイヤルタツチ、イシノサンデー、ダンスインザダークと合わせてサンデー四天王と呼ばれていた。来年のクラシックでの活躍はサンデーサイレンス四天王を中心に回っていくと思われる。当日、グレートエスケープは上記の3頭に加え、後にNHKマイルカップを勝利するタイキフォーチュンに次ぐ5番人気に推される。

レースではゲートを出ると、スムーズに逃げを打ち、直線でも脚は衰えず、サンデー産駒たちの瞬発力に対して粘り込んで勝利した。3連勝で重賞初制覇を決め、2歳シー

ズンを終えた。

○3歳（XX96年）

クラシックで有力視されていたサンデーサイレンス産駒に対して正面から勝ち切ったことで、クラシックはバブルガムフェローとグレートエスケープの2強という評価をされていた。そして皐月賞トライアル、弥生賞へ臨む。

レースでは逃げず、道中を3、4番手で進み、直線で先頭に立つと追ってくるダンスインザダークを抑え、勝利。危なげない勝利に逃げ以外でも競馬ができる優等生ぶりから、周囲から三冠の期待がかかりはじめたという。

皐月賞では有力なライバル候補であるバブルガムフェローは骨折で春は全休、ダンスインザダークも熱発で皐月賞を回避するなど、皐月賞制覇の障害はほとんどない状態だった。枠も逃げ馬に有利な1枠1番を引き、それもあつて単勝オッズ1・8倍の圧倒的1番人気に推される。しかしゲートを出た際につまずく不利があり、後方からの競馬を余儀なくされる。そして直線で伸びを欠き、10着に終わった。

次走の日本ダービーでの1番人気は皐月賞を回避し、プリンシパルステークスを勝利してきたダンスインザダークだった。グレートエスケープは前走の敗北が響き、4番人気でレースを迎えた。返し馬では立ち上がるほど入れ込んでいたグレートエスケープだが、レース後鞍上の梶田がインタビュで「頭をぶつけるかと思った。それくらいギ

リギリのタイミングでスタートが決まった」と回顧するほど抜群のスタートを決めると、最初の1000mを59.4秒で通過するハイペースでレースを進める。途中で12秒台のラップを挟むが、残り1000m地点からは再びペースを上げた。直線、猛追するダンスインザダークが肉薄するが追い付かせず、最終的に1馬身差で逃げ切り、1位入線を果たした。タイムは2.25.0で父アイネスフウジンがXX90年に記録したダービーのレースレコードを0.3秒更新した。

この記録は東京競馬場が改修されたあとのXX04年のダービーをキングカメラメハが勝利するまで、破られることはなかった。父アイネスフウジン以来の逃げ切り勝ちであり、またXX91年トウカイテイオー以来5年ぶりの父内国産馬のダービー制覇だった。

鞍上の梶田は戦後2番目の若さとなる、24歳でのダービー制覇を達成した。

この年の8月、馬主の橘馬奈が死去し、実妹の橘恵那が名義を受け継いだ。橘恵那は馬主資格を持っていなかったため、相続限定馬主という扱いだった。

日本ダービー制覇後、黒井は凱旋門賞挑戦を示唆していたが、馬主の橘が死去したことで、レース後の疲労が大きいため海外遠征は取りやめ、菊花賞を目指すことを明らかにした。

長期休養明けの神戸新聞杯（阪神競馬場・芝2000m）は他に重賞制覇した馬が1

頭だけと手薄なこともあり、1. 2倍の圧倒的人気に応え、5馬身差で勝利する。

続く菊花賞では単勝オッズ1. 6倍の1番人気に支持されるが、直線残り50mで猛然と突っ込んできたダンスインザダークに交わされ、2着に敗れる。

菊花賞後、陣営はジャパンカップか有馬記念に出走するか検討し、ストライドの長いグレートエスケープには東京競馬場が合っていると、ジャパンカップ出走を表明した。

ジャパンカップは古馬最強格のサクラローレル、マヤノトップガンが回避したものの、3歳で天皇賞(秋)を優勝したバブルガムフェロー、凱旋門賞を勝利したエリシオ、KG6&QESを制したペンタイアなどが参戦するなど豪華メンバーが揃った。その中でグレートエスケープはエリシオと人気を分け合いつつも1番人気に支持される。

レースではグレートエスケープはハナを奪い、緩みないペースでレースを進める。最後の直線でもスピードは落ちず、追いつがるシングスピールを2馬身突き放して勝利を飾った。タイムは2. 23. 4と自らが記録したダービーレコードより1. 6秒も速かった。内国産の3歳馬のジャパンカップ制覇は史上初、また日本ダービーとジャパンカップの同一年制覇を記録した。これは、グレートエスケープの他に現在までジャングルポケットと産駒のグレートチャンプが達成したのみの記録である。

古馬相手に引けをとらないことを見せつけ、グレートエスケープは3歳シーズンを終えた。GI2勝が評価され、この年、最優秀3歳牡馬と年度代表馬を受賞。

○4歳（XX97年）

XX97年のURA授賞式で黒井は改めて海外遠征、ひいては凱旋門賞挑戦を表明。初戦は阪神大賞典か日経賞が候補にあったが、「今年の凱旋門賞を終えたあとはジャパソカップか有馬記念を走る予定。中山の芝2500mはトリツキーだから、ここでいけるかどうかを判断する。輸送はあまり苦にしないからコース適性が気になりますね」と述べ、初戦は日経賞となる。

日経賞当日、雨の影響で初めて重馬場でレースに臨むことになったが、唯一のGI馬として単勝オッズ1.5倍の圧倒的1番人氣に推された。スタート直後、馬場に足をとられて躓き、中団に近い6番手でレースを進めた。最後の直線ではしぶとく伸びてローゼンカバリーをクビ差抑えて勝利。不利もあつたが、前哨戦を勝利し、次走は天皇賞（春）となった。

天皇賞（春）は前年の覇者にして有馬記念も制したサクラローレル、GIを3勝している一昨年の年度代表馬マヤノトップガン、その2頭に加えてGIで好走を続けるマーベラスサンデーの新平成三強を抑えて、1番人氣に推される。

レースは2番手で進め、直線では一時先頭に立つも粘り切れず、4着に敗戦。レース後、右前脚の骨折が判明した。この敗戦と長期離脱により、凱旋門賞挑戦プランは白紙となった。天皇賞（春）後に手術を行い、回復が良好だったため、本来冬に復帰するは

ずだったが、秋の緒戦であるGⅡ京都大賞典で復帰することが発表された。

・スランプの秋

GⅡ京都大賞典ではこれまでデビューからすべてで手綱をとってきた梶田がシルクジャステイスに騎乗するため、滝カナタに乗り替わりとなる。先頭でレースを進めたが、直線では伸びを全く見せず、最下位の11着と惨敗した。レース後、滝は「第4コーナーまでは他が相手にならないくらいの手応えでした。どこまで千切るのかすら思っただけ、直線では馬が走ることをやめてしまいました。怪我か長期休養明けのせいかわかりませんが、ちよつと分からない負け方ですね」とレース後振り返った。調教師の黒井も「状態は良かったから、ここまで負けたのはちよつと信じられないです。叩いたことで変わるとは思いますが」と首をかしげていた。

次の天皇賞（秋）では鞍上は梶田に戻る。レースは3番手で進むが、直線でまたも勢いを見せず、13着の惨敗を喫した。梶田は「手ごたえは抜群なのに、直線で失速してしまう。馬がレースを嫌がっているのかもしれない」と述べた。

・復活のジャパンカップ

このときには早熟馬だったのでは、という評価が出始めていた。次走のジャパンカップでは梶田から美浦の館山典佑に乗り替わる。欧州でGⅠ5勝のピルサドスキー、牝馬ながら天皇賞（秋）を制したエアグルーヴ、前哨戦の毎日王冠を快勝したバブルガムフェ

ローが人気になり、グレートエスケープは5番人気だった。

スタート後、鞍上の館山は出ムチを入れると、後続に一時は10馬身近い差をつけて大逃げを打った。直線でも差は詰まらず、2着に6馬身差をつけて圧勝した。

ジャパンカップは前年に続き、連覇を達成。ジャパンカップ連覇は史上初（後にXX12年・XX13年にジェンティルドナが達成）の記録だった。

次走の有馬記念は引き続き館山が騎乗する。8枠16番の不利な大外枠だったが果敢に先頭を奪う。しかし直線ではシルクジャステイス、マーベラスサンデー、エアグルーヴに交わされ、4着。いずれもアタマ差、ハナ差で固まってゴールしており、復調の兆しは見せていた。

○5歳（XX98年）

5歳シーズンの目標は再び凱旋門賞となる。しかし黒井は「あくまで目の前のレースを走った上で挑戦するか決める。今年は挑戦者、一戦を大事に戦っていく」と流動的な目標であることを強調した。

春の初戦は阪神大賞典（阪神競馬場・芝3000m）が選ばれた。また、鞍上は滝力ナタに乗り替わり、天皇賞（春）も含めて騎乗することが決定した。人気は2連勝中の4歳馬、メジロブライトが1番人気、前年の有馬記念覇者シルクジャステイスが2番人気でグレートエスケープは昨年末の不調、長距離の折り合いが不安視され、3番人気に。

レースではギガトンが単騎で逃げ、グレートエスケープは離れた2番手で集団の先頭に立つ。直線では鞭を一発、滝が入れるだけで後続を突き放し、残りは流して2着の馬に1と1/2馬身の差をつけて勝利した。

・プリンカー

天皇賞（春）からは黒いプリンカーを装着することが決まった。理由として「レースを理解するくらい、賢すぎるため他馬を気にしやさい。その矯正のため」と調教助手の白村は語った。このプリンカーはラストランのジャパンカップで外すまで、着け続けた。

黒鹿毛に黒いプリンカーを装着したことで見た目にもさらに人気が起こり、いしだみほ作の漫画「馬なり3ハロン劇場」ではパイロットサンングラスとして表現され、それ以降作中ではトレードマークとなった。

天皇賞（春）は単勝1番人気に推されると、レースでは後続を離して逃げる2頭を見る形の3番手でレースを進める。第4コーナー手前からスパートをかけるとそのまま先頭に立ち、追い込んでくるメジロブライトを抑えて1と3/4馬身差で優勝した。

鞍上の滝カナタはXX92年メジロマックイーン以来の天皇賞（春）の勝利で、5勝目を挙げた。

滝は「メジロマックイーンを思い出しますね。スタミナがあつて、先行したまま押し

切れるタフな馬。長距離ならそう簡単に負けないと思います」とグレートエスケープがステイヤー向きであることを述べた。

次走の宝塚記念では鞍上が滝から梶田に戻り、ファン投票1位、単勝1番人気に推された。レースでは逃げるサイレンススズカの2番手につけるが、1/2馬身差の2着に敗れる。

レース後、「今回は完敗だった」と黒井は述べた。数日後、札幌記念を前哨戦に凱旋門賞へ挑むプランが明らかとなった。

続く札幌記念は59kgを背負い、エアグルーヴと対決する。レースでは第3コーナーで併せたまま先頭に立つと、直線で激しい叩き合いを演じた末、ハナ差で敗戦した。この敗北後、陣営は疲労が抜けないことを理由に凱旋門賞は回避。国内で天皇賞(秋)から始動することを明らかにした。

天皇賞(秋)ではサイレンススズカとの一騎打ちが期待された。レースでは二頭が後続を大きく離して大逃げを打った。第3コーナーと第4コーナーの間地点でサイレンススズカに故障発生、競走中止となるがグレートエスケープはそのまま逃げ切り、レースレコードで勝利を収めた。この勝利によってタマモクロス以来の史上二頭目の天皇賞春秋連覇を達成した。

ジャパンカップは3連覇がかかっていたが、間隔が短く疲労がとりきれないことを考

慮し、回避して有馬記念へ向かう。

有馬記念では単勝1番人気に支持されると、好位につけて最後は直線で抜け出し、2着のグラスワンダーに1馬身差をつけて勝利。梶田は前年のシルクジャステイスに続いて有馬記念2連覇を達成した。

この年、天皇賞春秋制覇と有馬記念勝利など、重賞4勝、GI3勝、6戦全連対を達成し、最優秀父内国産馬を獲得するも、最優秀4歳以上牡馬、年度代表馬はジャック・ル・マロワ賞含むGIを3勝したタイキシャトルに譲った。

・種牡馬入りオフアー

社来スタリオンステーション（以下社来SS）より5歳シーズンで引退し、種牡馬入りするオフアーがあった。シンジケートは10億円とも言われていたが、陣営は海外GI勝利を目標に、オフアーを断り、翌年も現役続行が決定した。

○6歳

・海外遠征

XX99年は海外遠征することが発表された。外国の馬場で戦えるよう、調教を海外で積む長期遠征となることが強調された。発表当時は目標レースは未定だったが、イギリスのKG6&QESを最大目標とすることを決定。それまでにイギリスで2戦し、KG6&QESの結果次第では凱旋門賞やBCターフへ向かうことが明らかになった。

また、結果にかかわらず、6歳シーズンを最後に引退することも発表された。

4月、グレートエスケープは牧場から栗東に戻ると、僚馬のハードバトラーを帯同馬としてイギリスのニューマーケットのアビントンプレイスに入厩した。

イギリス初戦は6月15日に行われるプリンスオブウェールズステークス（GⅡ）に正式に決定した。現地の調教は調教助手の白村が管理し、厩務員は西京白哉を筆頭に、現地と日本のスタッフでグレートエスケープの管理を行った。

調教開始してから、グレートエスケープは輸送の疲れと馬場の対応に苦しみ、ニューマーケットの調教師やスタッフは「あれが日本最強馬か」と馬鹿にしていた。しかし、調教を積んで馬場に慣れてくると、調子を取り戻し、気づけばニューマーケットの調教師たちはグレートエスケープの実力を疑わなくなつたという。

・主戦騎手の落馬事故による乗り替わり

欧州でのレースで騎乗予定だった梶田が、5月に落馬事故に巻き込まれ、複数箇所の骨折を負つてしまい、グレートエスケープの騎乗が困難になつた。そのため、陣営は急遽、滝力ナタに騎乗依頼を出し、滝が騎乗することが決まつた。

・イギリスでのレース

6月15日、イギリス初戦のプリンスオブウェールズステークスは1番人気で迎える。スタートから先頭に立つと、直線を持ったまままで後続を突き放し、5馬身差で勝利。

海外遠征初戦を見事勝利で飾った。

次走はサンダウン競馬場で行われるエクリップステークスが選択された。ここでも1番人気でG I勝利が期待されたが折り合いを欠き7着に惨敗した。

・KG6&QES

最終追い切りではほぼ暴走といえる速度でニューマーケットの調教場を走り、マスコミヤホースマンを驚愕させた。追い切りに乗っていた滝カナタが危うく振り落とされるほど暴れたが、その後は落ち着きを取り戻した。「馬と喧嘩しちゃいましたね」と調教後、滝は語った。

調教内容が不安視されたものの、実績を考慮され3番人気に推される。

レースでは果敢にハナを奪うと、緩みないペースで進む。最終直線では追ってきたデイラミと激しい叩き合いの末に首の上げ下げの差で先着、日本生産馬、日本調教馬として史上初のKG6&QESを優勝した。

3着まで6馬身離れており、騎手同士がぶつかり合うほどの激しい叩き合いは「アスコットの死闘」と語られている。

この勝利に滝は「間違いなく日本最強クラス。このレースのグレートエスケープに、この距離で敵う相手はいないと思います」と賞賛し、黒井は「日本生産馬を両親に持ち、日本古来の牝系を引いた主流とは言えない血統の馬が世界を相手に制覇したことは、調

教とこの馬自身のレースセンスがずば抜けている証拠。文句なしに最高の馬です」と喜んだ。

主戦騎手だった梶田も応援にかけており、人目を憚らず号泣していた。

馬主の橘恵那が先代馬主の写真をグレートエスケープに近づけると、グレートエスケープはしばらく眺めていたという。

・凱旋門賞

K G 6 & Q E S を制覇し、次走は凱旋門賞に決定する。K G 6 & Q E S で2着だったデイラミはアイルランドチャンピオンステークスを9馬身差で勝利。モンジューはニエユ賞を、ダルヤバがヴェルメイユ賞を、エルコンドルパサーがフオワ賞を、それぞれ前哨戦を勝利していた。

この年のパリは悪天候が続き、当日は不良馬場になる。デイラミ陣営が出走を悩むほど馬場が柔らかくなり、グレートエスケープ陣営も柔らかい馬場が苦手なグレートエスケープを考え、凱旋門賞を回避しジャパンカップかBCターフに向かう案も出たが、最終的に出走を決めた。

人気は1番人気がモンジューの2.4倍、次いでエルコンドルパサーの4.6倍、3番人気にグレートエスケープが5.0倍、デイラミが8.6倍、ダルヤバが9.9倍で続いた。

戦前からグレートエスケープが逃げると思われていたが、スタート直後、グレートエスケープは大外枠からさらに外へ膨れるように脚を滑らせ、出遅れてしまう。

滝は慌てることなく中団でレースを進めると、直線では猛然と追い込み、残り50mでエルコンドルパサーとモンジューをかわし、半馬身差でゴール。K G 6 & Q E S に続き、凱旋門賞を日本馬として史上初めて勝利。2着にはエルコンドルパサーが入り、日本馬ワンツーフイニッシュを達成した。

歴史的偉業にロンシャン競馬場から大きな喝采が送られた。

出遅れながらも中団から鋭い差し脚を見せたグレートエスケープに滝は「どこからでもレースが出来る馬だとは思っていたけど、ここまでとは思わなかった。デビューから乗れた健二が羨ましい」と述べ、「出遅れた瞬間はある意味この馬らしくて笑ってしまつた。最後の直線では思わず涙が出てきたが、今はまた、笑いが止まらないほど嬉しい。日本競馬史に残るスーパーホースです」と黒井は労った。馬主の橘恵那は「彼がここまですべてを連れてきたことを誇りに思います。姉も、きつと喜んでいることでしょう」と死去した姉に報告したいと述べた。

2着のエルコンドルパサーに騎乗していた海老原は「いいレースをしたけど、悔しい。でも悔いはありません。この馬と戦えたことは誇りに思うし、グレートエスケープの走りはずいことだと思います」と語った。エルコンドルパサーを管理する三村調教師は

「グレートエスケープは賢くて、勝負根性に溢れた素晴らしい馬。エルコンドルパサーも最高の馬だとは思ったけど、力で上回られた。世界最強と言っても誰も文句は言わないと思います。今はエルコンドルパサーが無事に走り終えたことに安堵しています」と評するとともに、エルコンドルパサーを労った。

・ジャパンカップ引退式

凱旋門賞を最後に引退する予定だったが、UR Aと種牡馬入りのオフアーを出した社来SSからジャパンカップ出走の要望が送られた。検疫の関係で本来ジャパンカップには出走できないが、海外招待馬と同じように国際厩舎と東京競馬場で過ごすのであれば可能という、特別措置がとられた。

ジャパンカップにはモンジュー、ボルジア、ハイライズ、タイガーヒルが参戦。国内からは同厩舎のスペシャルウィークが代表格として迎え撃つかたちになった。

ジャパンカップが正式に引退レースとして決定、当日はグレートエスケープの最後の勇姿を見ようと多くのファンが詰めかけ、20万人近い観客が集まった。

当日の単勝オッズはグレートエスケープが1.8倍の1番人気に推され、モンジュー、スペシャルウィーク、タイガーヒルと続いた。

スタート後ハナをとると、前半は60秒台と平均ペースで逃げる。そこから11秒台のラップが続く厳しい流れを演出すると、直線で満を持して追い出した。しかし残り1

00mでスペシャルウィーク、モンジュー、イデイジエナス、ハイライズに交わされるがもう一度差し返す。しかし最後は及ばず、アタマ差でスペシャルウィークの2着に終わった。

レースタイムは2.22.1であり、オグリキャップとホーリックスが記録した2400mのワールドレコードを0.1秒上回るレースタイムを演出した上で2着に粘り込んだ。敗北こそしたものの、最強馬としてレース後は大歓声を送られた。

最終レース後、グレートエスケープの引退式が行われた。ゼツケンは大ダービーを制し、当日のジャパンカップでも同じだった5枠9番のゼツケンを着用し、ファンに別れを告げた。

12月、正式に社来SSで種牡馬入ることが発表され、当時ラムタラに次ぐ史上2位、国内生産馬、調教馬では当時史上最高額となる総額36億円でシンジケートが組まれた。

翌年1月、URA賞年度代表馬、最優秀4歳以上牡馬、最優秀父内国産馬を獲得。カルティエ賞年度代表馬、最優秀古馬を獲得し、史上初の日欧年度代表馬に輝いた。

さらに現在まで唯一となる満票での顕彰馬に選ばれ、殿堂入りを果たした。

JPNクラフィシケーションでは日本生産馬、調教馬として史上最高となる136ポンドを古馬Lコラム(2200×2799m)で獲得する。これは当時歴代3位の記録

だった。

【競走成績】

Rはレコード勝利

年月日	競馬場	レース名	着順	騎手	距離	馬場	着馬
95/6	京都	2歳新馬	3着	梶田	芝2000		ゼニナ
95/9	阪神	2歳未勝利	1着	梶田	芝1600		(パクパク)
95/9	中山	芙蓉S	1着	梶田	芝2000		(シーズグレ)
95/12	阪神	たんぱ杯2歳S	1着	梶田	芝2000		(ロイヤル)
96/3	中山	弥生賞	1着	梶田	芝2000		(ダンスインザダー)
96/4	中山	皐月賞	10着	梶田	芝2000		イシノサン

デー

9 6 / 6	東京	東京優駿	1着	梶田	芝2400	(フサイチコンコ
ルド) R						
9 6 / 9	阪神	神戸新聞杯	1着	梶田	芝2000	(シロキタクロ
ス)						
9 6 / 1 1	京都	菊花賞	2着	梶田	芝3000	ダンスイ
ンザダーク						
9 6 / 1 1	東京	ジャパンC	1着	梶田	芝2400	(シングス
ピール)						
9 7 / 3	中山	日経賞	1着	梶田	芝2500	(ローゼン
カバリー)						
9 7 / 4	京都	天皇賞(春)	4着	梶田	芝3200	マヤ
ノトツプガン						
9 7 / 1 0	京都	京都大賞典	11着	滝	芝2400	シル
クジャステイス						
9 7 / 1 0	東京	天皇賞(秋)	13着	梶田	芝2000	エア
グルーヴ						
9 7 / 1 1	東京	ジャパンC	1着	館山	芝2400	(ピール

99/7 サンダウン Eclipse 7着 滝 芝2000 コ
 プトンアドミラル

99/7 アス KG6&QES 1着 滝 芝2400 (デ
 イラミ)

99/10 ロンシャン 凱旋門賞 1着 滝 芝2400 (エルコンド
 ルパサー)

99/11 東京 ジャパンC 2着 梶田 芝2400 スペ
 シャルウイーク

【種牡馬時代】

引退後は北海道勇払郡安平町の社来スタリオンステーションで繋養され、XX00年より供用が開始される。サンデーサイレンスの他、トニービンやブライアンズタイム、ノーザンダンサーといった主流血統の血を持たないため、当時あふれつつあったトニービンやサンデーサイレンスの血を持つ繁殖牝馬などと交配できることが大きなメリッ
 トであった。

また、グレートエスケープは従順な気性なため、気性の良さも産駒に期待されていた。

初年度の種付け料は1000万円、当時の種付け料として国内で繋養される種牡馬として最高額（当時サンデーサイレンス、トニービン、ブライアンズタイムはPrivat

teやBOOK FULLのため公開されず)だった。

初年度から144頭の繁殖牝馬に種付けし、最高で250頭を超えるシーズンもあった。

翌XX01年には産駒がセレクトセール01に総勢29頭が参加し、27頭が落札された。最高額はエアグルーヴ01の牝馬で3億円で成田金雄(ナリタ・カネオ)に落札された。後にプリズンブレイクと名付けられ、XX04年のオークスを勝利した。

○産駒デビュー後

・XX03年

初年度産駒がデビューし、7月19日に函館競馬場で行われた2歳新馬戦でプリテンダーが勝利。URA初出走初勝利を挙げた。その後、札幌2歳Sをブラックストリームが勝利し、産駒初重賞勝利を挙げた。初年度から活躍馬を出し、URAファーストシズンサイアーを達成した。

・XX04年

プリズンブレイクがオークスを優勝し、初年度産駒からGI初勝利及び初クラシック勝利を達成。12月にはキューティースターが阪神ジュベナイルフィリーズを制し、産駒初のURA賞の最優秀2歳牝馬を受賞した。

・XX05年

ダート戦線で活躍していたノーザンシヨットが川崎記念（JpnI）、かしわ記念（JpnI）を勝利し、ダートでも活躍馬を出した。

・XX06年

前年に続き、ノーザンシヨットがフェブラリーステークスを勝利。さらにサファリレインボーが桜花賞を勝利した。メジロレックスが菊花賞を勝利したことで牡馬クラシック初制覇、さらに年末の香港ヴァーズではプリズンブレイクが制し、産駒初の海外GI勝利も達成するなど、GI4勝、重賞10勝など全国種牡馬リーディングでは2位まで浮上した。

・XX07年

フェブラリーステークスをノーザンシヨットが連覇すると、さらに帝王賞（JpnI）も制覇するなど好調なスタートをきる。さらにネイビークコスモスがヴィクトリアマイルを制覇、2着にサファリレインボーが入り、GIで初めて産駒によるワンツーフィニッシュを達成。クラシック路線ではドリームアンサーがオークスを制覇、その後も同期のウオッカ、ダイワスカレットといった名牝と名勝負を度々繰り広げた。ドリームアンサーは年末の香港カップも勝利。年末にはジョイエロが朝日杯を勝利し、2歳GI牡牝制覇を達成した。前年を上回るGI5勝（地方ダートグレード競走を含めると6勝）を挙げ、サンデーサイレンスに続く種牡馬リーディング2位をキープした。

・ X X 0 8 年

ハチミソングが天皇賞（春）を勝利し、親子制覇を達成。さらにジョイエロが菊花賞を勝利。ドリームアンサーはエリザベス女王杯を制し、年末の有馬記念でもダイワスカレットの2着に入るなど活躍した。また、ハナノビルが全日本2歳優駿を勝利した。リーディングサイアーはアグネスタキオンに僅かに及ばず、2位に。有馬記念の1着と2着が逆であれば、種牡馬リーディングも入れ替わるという他に類を見ない接戦だった。

この年は最多となる259頭に種付けを行った。

・ X X 0 9 年

クラシック戦線ではアドマイヤグレートが皐月賞、菊花賞の2冠を達成。その年の最優秀3歳牡馬を受賞。ラビットホールはNHKマイルカップを勝利。さらにジョイエロが天皇賞（春）を制覇し、グレートエスケープ産駒の連覇を達成した。ダート戦線ではハナノビルがジャパントダートダービーを勝利した。GI4勝、重賞13勝と産駒が活躍し、ついに全国種牡馬リーディング1位に輝いた。

・ X X 1 0 年

この年、ジョイエロが天皇賞（春）をテイエムオペラオー以来史上3頭目の連覇を達成。クラシックではシーザリオとの産駒であるセヴァスチャンが菊花賞を勝利し、菊花

賞史上初の同一種牡馬産駒による3連覇を達成した。アドマイヤグレートはドバイシーマクラシックを勝利、グレートエスケープ産駒としてドバイミーティング初勝利を飾った。この後、グレートエスケープ産駒として初めて凱旋門賞に出走、しかし5着に終わった。全国種牡馬リーディングでは牝馬3冠馬のアパネやジャパンカップを制覇したローズキングダムを送り出したキングカメハメハに1位を奪われた。

・XXI1年

クラシックではハイドランジアがオークス、秋華賞の2冠を達成。しかし牡馬クラシックはオルフェーヴルが三冠を達成、古馬戦線でもGI勝利は叶わなかった。

・XXI2年

URAのGIではXXO5年以来の勝利無しに終わった。しかし地方交流GIではカヤノブリッツが帝王賞、JBCクラシック、東京大賞典を勝利。これにより、地方リーディングサイアーを初めて獲得した。

・XXI3年

この年、体調不良により前年種付け数194頭から52頭まで数を減らす。URAサイアーランキングは7位と順位は落としたものの、カヤノブリッツがドバイワールドカップで2着、BCクラシックで3着と世界を舞台に活躍。グランデフェゴがマイルチャンピオンシップを勝利。牝牡混合古馬GIで、マイル以下の勝ち鞍は初めてだつ

た。

・XXI4年

体調は回復しきらないまま、種付け数を絞り、種牡馬生活を続行。しかし47頭の種付けにとどまった。前年に引き続き、グランデフエゴが天皇賞（秋）を勝利し、親子制覇を達成。ダート戦線ではカンピオーネが帝王賞を制覇した。

・XXI5年

体調が悪化し、治療が続けられたが種牡馬生活の続行は難しいと判断され、社来スタリオンステーションから種牡馬を引退することが発表された。種付け数は22頭で、この世代がラストクロップとなった。引退後は生まれ故郷である懇備式牧場で余生を過ごすことが決まった。

この年にはラストエスケープがジャパンカップを制覇。親子2代制覇を達成した。ジャパンカップの親子制覇はシンボリドルフ・トウカイテイオー、スペシャルウィーク・ブエナビスタ、ディープリンパクト・ジエンティルドンナ以来4組目の達成となった。ラストエスケープは続く有馬記念も勝利し、有馬記念でも親子制覇を達成した。

・XXI6年

ラストエスケープはこの年、凱旋門賞へ出走。アタマ差の2着で敗北し、凱旋門賞の親子制覇は惜しくも叶わなかった。

・X X 17年

年末にジャストフィットがホープフルステークスを優勝。新設された2歳GIを勝利し、2歳GIを改めて完全制覇した。

・X X 18年

8月26日、繋養されていた懇備式牧場の放牧地内で死亡しているところを発見される。牧場の柵の傍で眠るように倒れており、発見した牧場スタッフは当初眠っているのではないか、と思ったという。25歳没。

晩年は体調を崩していたが、懇備式牧場に戻ってから体調は回復し、前日まで観光客に壮健な姿を見せていた。

訃報を受け、URAは9月1日、9月2日に新潟、札幌、小倉で行われるメインレースを追悼競走とし、「グレートエスケープ追悼競走」の副題が冠されることになった。追悼行事として、9月1日から9月15日まで、全国の競馬場に献花台と記帳台が、全国の場合外馬券場に記帳台が設置され、多数のファンの記帳と献花が集まった。

これらは馬主の桶へ届けられた。

グレートエスケープの死に、梶田は「騎手として苦しいことも、嬉しいことも、全部を教えてくださいました名馬。若い頃に出会えたことで今の自分があると思います。世界に名を轟かす名馬の主戦騎手だったことは、僕の誇りです」と語った。

欧州で主戦だった滝は「僕の中で馬の名前を挙げろといわれたら、必ず最初の3頭に出てるくらい思い出深い馬。世界最高のレースを2つも勝たせてくれた偉大な馬ですし、その子供たちでも勝たせてもらいました。残念ですが、子供たちもよく走りますから、その血統はずっと続いていくと思います」とインタビュアーに答えた。

調教師の黒井は「心肺機能が優れていたが、それ以上に賢くて、勝負根性溢れる人間臭い馬でした。今でもこちらの言葉が通じていたと信じて疑いません。競走馬としてはもちろん、種牡馬としてこれだけの活躍をしてくれたのですから、私が関わった中で最高のサラブレッドです」と賞賛した。

当時調教助手だった白村調教師も「若いころにあの馬を見たことで、あんな馬を育てる、という明確な目標ができました。これから、彼に負けない馬を育てていきたいですね」と述べた。

相続馬主を終えてから馬主資格を取得した橘恵那は「姉から引き継いだ馬でしたが、ここまですきな存在になるとは思ってもみませんでした。心にほっかり穴が開いたような気分です。それだけ愛した馬ですし、ファンの方々からも愛してもらえた馬です。とても悲しいですが、彼の栄光を伝えていきたいと思います」と涙ながらに語った。

フランス、イギリスでもグレートエスケープ死亡の訃報は一面で報道された。そして「極東から来たスーパーホース。我々の歴史と伝統からも逃げ切った偉大なる逃亡者」

と評した。

9月1日の追悼競走となった札幌2歳Sではグレートエスケープ産駒のグレートチャンプが優勝。亡き父に捧げる勝利となった。グレートチャンプは生産が懇備式牧場、馬主は橘恵那、調教師は当時調教助手だった白村駿輔、厩務員は担当だった西京、そしてこの日手綱をとったのは主戦騎手を務めていた梶田というチームグレートエスケープともいえるメンバーだった。

・XX19年

前述したラストクロップであるグレートチャンプが東京優駿で優勝。これにより、種牡馬としてクラシック完全制覇と八大競走完全制覇を達成した。

グレートチャンプはその後、凱旋門賞へ出走し、凱旋門賞を勝利。親子制覇を達成。帰国後のジャパンカップも勝利し、年末に屈腱炎を発症、引退した。

グレートエスケープ産駒最後のGI勝利となった。

【種牡馬成績】

成績はXX20年終了時点

XX03年 38位

XX04年 7位

XX05年 5位

- ・ X X 0 1 年産
- プリズンブレイク (X X 0 4 年オークス X X 0 6 年香港ヴァーズ)
- ノーザンシヨット (X X 0 5 年川崎記念、かしわ記念 X X 0 6 年・X X 0 7 年フェ
ブラリーステークス X X 0 6 年帝王賞)
- ネイビーコスモス (X X 0 7 年ヴィクトリアマイル)
- ・ X X 0 2 年産
- キユーティースター (X X 0 4 年阪神ジュベナイルフィリーズ)
- ハチミソング (X X 0 8 年天皇賞 (春))
- ・ X X 0 3 年産
- サファリレインボー (X X 0 6 年桜花賞)
- メジロレックス (X X 0 6 年菊花賞)
- ・ X X 0 4 年産
- ドリームアンサー (X X 0 7 年オークス・香港カップ、X X 0 8 年エリザベス女王杯)
- ・ X X 0 5 年産
- ジョイエロ (X X 0 7 年朝日杯フューチュリティステークス X X 0 8 年菊花賞 X
X 0 9 年・X X 1 0 年天皇賞 (春))
- ・ X X 0 6 年産

ハナノビール（XX08年全日本2歳優駿 XX09年ジャパンダートダービー）
 アドマイヤグレート（XX09年皐月賞・菊花賞 XX10年ドバイシーマクラシッ
 ク）

ラビットホール（XX09年NHKマイルカップ）

・XX07年産

セヴァスチャン（XX10年菊花賞）

・XX08年産

ハイドランジア（XX11年オークス・秋華賞）

カヤノブリッツ（XX12年帝王賞・JBCクラシック・東京大賞典 XX13年ド

バイワールドカップ2着、BCクラシック3着）

グランデフェゴ（XX14年マイルチャンピオンシップ XX15年天皇賞（秋））

・XX09年産

カンピオーネ（XX14年帝王賞）

・XX11年産

ラストエスケープ（XX15年ジャパンカップ・有馬記念 XX16年凱旋門賞2着）

・XX15年産

ジャストフィット（XX17年ホープフルステークス）

・16年産

グレートチャンプ（XX19年東京優駿・凱旋門賞・ジャパンカップ）

GI31勝（地方JpnI9勝）重賞98勝（地方交流重賞20勝）

【特徴】

○競走馬としての特徴

・レーススタイル

名前や大逃げで勝利したジャパンカップから逃げ戦法がクローズアップされがちだが、XX98年天皇賞（春）、有馬記念では先行策で勝利し、XX99年の凱旋門賞では中団から直線一気で差し切るなど、逃げにこだわらない脚質を持っていた。

これについて主戦騎手だった梶田健二は著書で「スタートが抜群に上手いため、出遅れがなければ基本的にハナにたつか、2番手、3番手でレースを進められた。極端に後ろでなければ、どこからでも折り合いをつけて、レースができる馬だった。逃げや先行が多かったのは、それだけグレートエスケープのスタートが上手かった証拠」と述べている。

しかし差し戦法について、調教師だった黒井は著書で「加速力、瞬発力は当時隆盛を誇っていたサンデーサイレンス産駒に比べると劣っており、後方から進めて直線で戦うには分が悪かった」と述べている反面、「あくまでGIレベルのスペシャルウイークやダ

ンスインザダークといった比喩の場合であり、その他の馬であれば中団や後方からレースを進めても問題はなかった。一番勝率がいいから逃げまたは好位抜け出しのレースを選択することが多かった」とも述べていた。

・グレートエスケープの武器

調教師の黒井はグレートエスケープの武器について、優れた心肺機能やトップスピードだけではないとし、後にこう語っている。「グレートエスケープの心肺機能やスピード、パワーが優れているのはいうまでもないですが、それ以上にレースを理解する賢さと、併せても絶対に抜かせまいとする勝負根性が勝利の要因だった」と。

かねてよりグレートエスケープは知能が高いが、高すぎて利口ではなかったと厩務員の西京は後に語っていた。「強い馬は頭がいいことが多く、ダメだと思ったらすぐに覚える。しかしグレートエスケープは、ダメだと言ったことを、今度は見ていないところでやろうとする。ダメなことだとわかっていながらやるから、タチが悪かった」と。

厩舎スタッフの赤川はインタビュで「飼料で食べたくないとき、それを隣のスペシャルウィークに食べさせようとバケツを押し付けようとしていました。それを叱ると、黙々と食べ始めたかと思うと、目を離れた隙にスペシャルウィークに飼料を上げてしまったんです。食べるフリをして隙を伺っていたんでしょね。それをたまたま別のスタッフが見ていて、それからはグレートエスケープだけバケツが固定になりました

た」と知能は高いが、悪さしていたことが明らかになった。

滝カナタは賢さと勝負根性について「非常に賢くて、レースをよく理解している。そしてびつくりするほど負けん気が強い。調教でも先着しようとするけど、あくまでコースのゴールで抜くことをわかっていた感じ。ゴール前を2回走ることもあるレースでも、1周目はリラククスして、2週目でちゃんと反応するから大した馬ですよ」と後の自身の競馬番組滝カナタTVで話した。

梶田健二は著書で「厩舎やレース前は落ち着かなかつたり、いたずらすることが多くあった。でも調教やレースでは堂々としているし、集中していた。オンオフがわかりやすいくらいハッキリしていた馬」と述べた。

・ストライドの大きさ

引退後のURR競走馬総合研究所がグレートエスケープが制した日本ダービーの走り进行研究したところ、最後の直線の加速時のストライドはかなり大きく、サラブレッドの平均完歩が約7メートル弱のところ、グレートエスケープは8メートル40センチで走っていたと検証結果が露わになった。

跳びが大きいため、東京競馬場のようなコーナーが大きく、直線が長いコースかつ、2200m以上の長距離レースで特に好成绩を残したのは、これが大きいのではないかと考察していた。

その代わり、中山などコーナーがきつい競馬場では走りづらそうにしていた、と梶田は後にインタビューで答えていた。

・活躍期間について

グレートエスケープは2歳から6歳まで、長く活躍を続けた。この活躍期間の長さを白村は「元々調教やレースでは真面目に走る馬だったが、力を入れるタイミングをよく理解していた。だから余計な消耗は少なく、長くやれたのではないか」と分析している。しかし成長が早く、衰えがなかったというわけではなく、黒井は著書で「そもその地力がほかの馬より優れるところはあった」とした上で「4歳春のときが一番出来がよく、上がりそうな部分があったから、天皇賞（春）の前までは少なくとも秋のGIは全勝できると思っていた。しかし骨折してしまったことで一時的に馬も走りを見失ってしまい、思ったより成績を残せなかった」と述べ、「5歳は馬体以上に精神状態が完成していた。怪我がなければどこまでの成績を残せたのか、楽しみで仕方なかった」と締めくくっていた。

実際、5歳シーズンはすべてのレースで連対し、GIを3勝するなど最も好成績を残したシーズンだった。

○種牡馬として

・産駒傾向

本馬は長く活躍し、芝の中距離から長距離で活躍していた。産駒はやや晩成傾向だが、2歳から重賞を勝利する馬も送り出しており、2歳GIはすべて勝利している。馬場は芝が多いがダートにも産駒を送り出しており、ダートGIは地方GI級競走を含めて11勝を挙げている。父、アイネスフウジンも帝王賞、東京大賞典を制したファストフレンドを送り出しており、ダートにも対応出来るパワーが産駒に伝達されていたと考えられる。

実際、グレートエスケープのダート適性を確かめる目的で一時はフェブラリーステークスの出走案もあったという。また、6歳の海外遠征時はドバイワールドカップへの出走、凱旋門賞後はBCターフの他に、BCクラシックの出走も検討されているなど、ダートも走れると思われていた。

距離では総じて2000m以上の距離で勝ち鞍が多く、GIでは特に菊花賞と天皇賞(春)のような超長距離レースで産駒が多く活躍している。

反対にマイル以下では不振であり、世代限定戦を除けばグランデフェゴがマイルチャンピオンシップを勝利したのみである。

スピードが求められるマイル以下のレースではサンデーサイレンス系統の種牡馬や、キングマンボ系に劣る面があるのではないかと血統評論家の鶴岡敬善(ツルオカ・タカヨシ)は述べている。

滝カナタも「毛並みや馬体、顔は全然違うけど、メジロマックイーンにレース適性やレースぶりが似ている」と述べており、黒井も「2400を超えるような距離が得意なステイヤー型」と評していた。

距離が長い方が、産駒も好成績を残すことが多かった。

・種牡馬生活

社来SSに来てからも落ち着いており、堂々とした振る舞いは流石スーパーホースだと担当者やスタッフを驚嘆させた。

種付けをするようになってうるさくなる馬が多い中で、グレートエスケープは変わらず、むしろ威厳のある佇まいを保っていたという。

種付けは常にスムーズで淡々と仕事をこなしていた。牝馬がグレートエスケープを嫌がることはほぼなく、関係者は安心して見ていられたという。ただ、人が多いと少し落ち着かなくなる場面があり、あまり人が多く見ることがないように配慮された。

好みもあつたとされ、社来SSのスタッフはインタビュウに対して「あまり待たせず、牝馬に優しいです。ただ、小柄な牝馬や、若い牝馬の方が好きらしく、その時は臨戦態勢に入るのもすぐですね」と語っていた。また、種付けが好きだったらしく「種付け後もケロツとしていますし、好みの牝馬を見かけると近づこうとしていました。絶倫です」「種付けのタイミングがわかるんでしょう、時期が近づいてくると放牧地で走る量が

明らかに増えるなど、テンションが上がってしまいましたね」とも述べた。

受胎率は平均して90%以上を記録していた。晩年は体調不良があり、種付け数、受胎率共に低下していたが、基本的に種牡馬としての役目を全うしていた。

【エピソード】

・病弱

元々病弱で、生死を彷徨うほどの重症の肺炎に罹患したこともあった。しかし、その後は病気なくすくすく育った。牧場スタッフはあまりの変わりぶりに、「頭の中身が変わってしまったのかと思った」とコメントするほどだった。

・気性

利口で素直な馬で、馬体もすつきりとした胴長の姿勢だったことから評価されていた。しかし、一部のスタッフはあまり利口な馬ではないと語っており、厩舎スタッフは当初、やっかみの類だろうと思っていた。

しかし入厩すると、人によっては悪さをしたり、見ていないところでイタズラするなど、人の目を気にするところが明らかに、関係者を驚かせたという。

その代わり調教では真面目かつ、仕掛けにも鋭く反応するなど、素質の高さを見せつけた。黒井は当初オーナーに「ダービーを勝てる」と語ったが、後に「リップサービスだが、重賞を勝つくらいの期待はしていた」と著書で述べた。

・食事のこだわり

基本的になんでも食べていたが、人参や果物などは皮を剥いたものしか食べなかった。また、全部を混ぜたものはあまり好まず、定食のようにそれぞれ分けた方が食いがよかったという。

好まない食事のときはあまり食べようとしないのが普通のサラブレッドだが、グレートエスケープは食べるフリをして、隣の馬房のスペシャルウィークや、別の馬に分けようとしていたという。それを叱ると、やらなくなつたと思いきや、厩務員が見ていないところでまた試みていたなど、食事に対するこだわりや、ルールに対する理解も深かったエピソードがある。

・橘オーナー

元々先代である橘馬奈オーナーに指名されて購入されたが、グレートエスケープは非常にオーナーに懐いていた。橘もよく厩舎や牧場を訪れており、グレートエスケープは彼女が近づくとテンションが上がるため、馬房から出してやらないといけなかつたと厩舎スタッフは語っている。

パドックでは必ず橘に顔を押し付けるルーティンがあった。実際、パドックの映像では度々その光景が確認されている。橘が死去し、妹の橘恵那が相続してからもあつたという。

橘が死去したことが伝えられた日は、グレートエスケープは放牧地でずっと寂しそうに鳴き続けていたと牧場スタッフだった紅林は著書（世界に届いた馬の素顔）で述べていた。

グレートエスケープが死亡した日は先代の橘オーナーの命日だった。

・脱走名人

牧場にいたころから脱走名人として有名だった。柵を飛び越えるのはもちろんのこと、扉が空いた隙に抜け出したり、一説には南京錠を噛み壊して脱走したこともあるという。ちなみに、牧場の馬房では門を蹴りで破壊して脱出したことが複数のスタッフからの証言で明らかになっている。

ダンスインザダークやエアグルーブが引退し、牧場へ戻る際はグレートエスケープが脱走してやってきたという逸話がある。真偽は定かではなく、前述の脱走癖から出現した噂でしかないと思われる。実際、黒井厩舎から離れており、誰にも見つからずに訪れるなど不可能である。ファンによる創作や噂に尾ひれがついたものの可能性が高い。

ちなみに、黒井厩舎では脱走しても道路など危険な場所には行かないことから、比較的放していることが多かったという。そのとき、グレートエスケープは勝手に厩舎から離れず、どこか行こうとする時は自ら引縄をスタッフに渡すなど行動していた。

人間のルールを理解したうえで破るといいうのも、こういったエピソードによると思われる。

・栗東厩舎のボス

馬は群れ社会であり、サラブレッドも例外ではなく、群れにはボスがいる。グレートエスケープは堂々とした振る舞いをしており、黒井厩舎にとどまらず栗東トレセン全体のボスであったという。

基本的に列の先頭を歩き、血気盛んな他馬に噛みつかれようものなら、猛烈に反撃するなど、基本的に穏やかな馬だったが序列争いにおいては激しい気性を見せていた。

これについて紅林は著書で「超がつくほど負けず嫌いで、レースや調教はもちろん、他馬に舐められるのも気に入らなかつたらしい」と述べていた。牧場でも、幼い頃はいじめられっ子だったが、次第にいじめっ子を追い回すようになったという。

しかし、決して気性が荒いことはなく、喧嘩を売ることはなく、基本的に優しいタイプだったという。

・ダンスパートナー

馬房が隣で1つ年上のダンスパートナーと非常に仲がよかつたことで、厩舎スタッフによると「相思相愛」だったという。

馬房から頭を出している時はいつも寄り添い、調教場でも互いを見つけると走って寄

ろうとすることもあった。しかし、調教で併せるとグレートエスケープは決して抜かせようとはしなかった。これについて白村は「いいところを見せたかったんだと思う」と冗談交じりに話していたという。

種牡馬となつてからダンスパートナーに種付けする機会があつた。基本的に手早く終わるグレートエスケープだが、ダンスパートナーに寄り添い、しばらく何もせずにしたという。発情期になつたとはいえ、本来牝馬は牡馬に対して繊細であり、種付け中の事故は存在する。そのため関係者はヒヤヒヤしていたが、グレートエスケープは気にせずグルーミングなどをしていたという。

・ スペシャルウィーク

ダンスパートナーが恋人なら、スペシャルウィークは兄弟のようだと評された。

スペシャルウィークは生い立ちから人に慣れているがあまり他馬に対しては親密ではなかつたという。そんなスペシャルウィークだが、不思議とグレートエスケープには懐いており、曳き運動などではいつもグレートエスケープの後ろを歩いていた。

馬房が隣であり、グレートエスケープの飼料を横からスペシャルウィークが頭を伸ばして食べようとしていたことが度々あり、グレートエスケープもそれを食べさせようとしていたことがあつたという。しかし、なんでも食べさせていた訳ではなく、自分の好みの食事のときはグレートエスケープは譲らず、食べようとしていたスペシャルウィー

クに怒ることもあったという。

黒井は著書で「グレートエスケープは厩舎全体のボスだったが、スペシャルウィークはそれにいつもついているので、自分もボスだと勘違いしているフシがあった。なので、グレートエスケープがいないうちに他馬に絡まれるととても驚いていた」と述べていた。

・種牡馬時代

種牡馬となっても落ち着いた振る舞いは変わらなかつた。隣に放牧されていたステイゴールドがうるさいときには一喝して追い払うなど、社来SSでもボスのように振る舞っていたという。基本的に他馬を嫌うことはなかつたが、ステイゴールドが近づくと喧嘩してしまうため、放牧地を離された。後にやってくるオルフェーヴルに対しても当たりが強く、よく威嚇していたと担当スタッフは話していた。

・シンボリルドルフ

母父であるシンボリルドルフの主戦騎手だった岡谷幸男は、グレートエスケープに対して「ルドルフによく似ていた。脚質を選ばない戦法や賢さなど、レースしていてそう感じることも多く、一度乗ってみたかった」と後に語っている。

放牧地でもシンボリルドルフがカメラを理解し、ポーズを決めていたように、グレートエスケープもカメラというものを理解していたらしく、カメラを向けると立ち止まっ

てポーズを決めていたという。

【血統】

○○○

Wikipediaを読むだけで内容がとても濃かった。

「調べるだけでこんな……関連書籍の欄もめっちゃ多いし」

総合すると日本近代競馬の最高の成績を残した馬として評価されているようだった。勝利だけでなく敗北も多くあることから、最強かといわれるとネットでは賛否両論だが、人気という面ではあのオグリキャップやデーブインパクトに並ぶ人気を誇っていたらしい。

近年だとそれに並ぶのはゴールドシップかキタサンブラックくらいのもだろう。

「しかし……興味出てきたな。うん、ウマ娘としても、競走馬としても……ドラマチックな馬だからかな」

もっと調べようかと思い、ブラウザバックをすると、その下には某動画サイトの大百

科などのページが検索結果に表示されていた。

既に時間は夜遅いものになっており、ページを開くのを躊躇したが、仕事はやめていたので気にする必要がないことを思い出す。

「このために仕事をやめたのかもしれないな」

ページをクリックしてから、麦茶を用意して席を立った。

私の心は、すっかりグレートエスケープによってワクワクさせられていた。

名バ列伝 その2

ニヤニヤ大百科

グレートエスケープ

『偉大なる逃亡者（URAヒーロー列伝のキャッチコピーより）』

グレートエスケープ（競走馬）とは日本の元競走馬・元種牡馬である。馬主は橘馬奈↓橘恵那、調教師は黒井昭寿、生産は懇備式牧場。日本生産馬として初めてキングジョージ6世&クイーンエリザベスステークス、凱旋門賞を制覇した馬として知られる。

【概要】

○誕生

XX93年4月1日生まれ。父はダービーをレコードで逃げ切ったアイネスフウジン、母はシルバーパート、母父は無敗の三冠を達成した皇帝シンボリドルフ。これらを聞くと超良血に思えるが、当時はトニービン、ブライアンズタイムを初めとした外国

産種牡馬全盛期時代。サクラユタカオーやトウシヨウボーイ（92年没）が内国産種牡馬の代表格だったが、それでもクラシック路線では父が外国産種牡馬の馬がとりまくっており、血統はそれほど評価されていなかった。父アイネスフウジンはまだ新種牡馬となつたばかり、内国産種牡馬の代表として先程挙げた2頭の父、テスコボーイが母父であり、期待されていなかった訳では無いし、生年時にはトウカイテイオーがまだいたため、母父シンボリドルフもそこまでマイナスに見られていたわけではなかったが、牝系が古臭すぎてね……。

生産の懇備式牧場も中小の牧場。経歴で見たら下級戦で走つてゐる姿を見かけることがあるくらいの馬だった。

だが、この時は誰も知らなかった……この馬が、日本競馬の歴史を塗り替えることを予想できるか。

幼少期は病弱なときがあつたものの、次第に逞しくなつていき、馬体が見事に育つてからは評価も上がってきたが、あくまで牧場内の話であり、オープンまで上がったらいなくくらいのものであった。オープンまで上り詰めるのもかなり難しいのだが、後の成績を考慮するとあまりにささやかな期待だった。

○入厩、2歳デビュー

デビューはXX95年6月の新馬戦。京都芝2000m。この頃には調教でもタイ

ムを出しており、厩舎では「こいつはやるかもしれない」と徐々に期待が大きくなっていった。黒井調教師は「ダービーを狙える馬」と自信満々。

黒井 最強

そんなコメントや調教時計が評価されて1番人気に。この年のアイネスフウジンもまだ種牡馬として2年目産駒がデビューしたばかり、決してダメな種牡馬と見切られてはいなかったのだろう。

レースではグレートエスケープがハナを決める。見事なスタート、加速。そしてそれが止まらない。前半1000mを58.2とかいう超ハイペースで逃がっている。どう見ても暴走です。本当にありがたいとございました。

終わってみれば3着。よく3着に残ったな……かかってしまうなど折り合いに不安が残ったが、黒井調教師は「このペースで逃げて3着は素晴らしい。ここからこの馬は強くなる」と自信満々の笑みは崩さず。

黒井 最強

続く未勝利戦は折り合いをつけて持ったまま5馬身差の圧勝。続く芙蓉ステークスは逃げずに好位につけ、後ろを突き放し連勝。

4戦目はラジオたんぱ杯2歳ステークス。有馬記念前日に阪神競馬場芝2000mで行われるGIIで、来年のクラシックを狙う関西馬はここに集まるため2歳王者決

定戦を呈することもある重賞だった。

そこにはいずれも期待馬、素質馬とされていたロイヤルタッチ、イシノサンデー、ダンスインザダークが参戦した。

挙げた3頭と、このレースの1週間前に行われた2歳GI、朝日杯2歳ステークスで勝利したバブルガムフェローを合わせた4頭でサンデーサイレンス四天王と呼ばれていた。前年は皐月賞とダービーをサンデーサイレンス産駒が勝利しており、サンデーサイレンスフィーバーが起こっていた。来年もクラシックはサンデーサイレンス産駒のこいつらで決まり！ という雰囲気であり、グレートエスケープは強い勝ち方で2連勝していたにもかかわらず5番人気にとどまった。

レースでは例のごとく上手にスタートを決めると、猛然と突っ込んでくるサンデーサイレンス産駒を振り切って勝利。重賞初制覇を挙げた。

3連勝、それも期待馬相手に完封してみせたことでようやく注目され始める。

○クラシックシーズン

年明け初戦は弥生賞。この時には既にバブルガムフェローと並んで東西の横綱扱いをされていた。実際、弥生賞でも好位先行抜け出しの危なげない競馬でダンスインザダーク以下を完封。これで4連勝となり、皐月賞へ。

さあバブルガムフェローと一騎打ち！

と、思いきやバブルガムフェローは骨折で春は全休。
じやあライバルはダンスインザダーク!

これも熱発で回避。まるで世界がグレートエスケープを勝たせようとしているかの如き有様に、誰もがグレートエスケープの完勝を疑わなかった。

父はダービー馬、母父は三冠馬、日本内国産血統が三冠をとって世界へ……! そんな風潮すら漂い始めていた。

粹順は絶好の1枠1番。

Vやねん! グレートエスケープ!

……それらすべてがフラグだった。スタート直後、グレートエスケープがコケる。それはもう、吉○新喜劇のような鮮やかなコケっぷり。

最後方に置いていかれると、そのまま見せ場なく大敗。誰もが思った。

「一体なぜあんな馬の応援を……!」

どこぞの元不良バスケット部員のように凹むファンたち。

俺はもう夢から覚めた。

次走の日本ダービー。ここはプリンシパルステークスを完勝したダンスインザダークか、対抗格は同じサンデーサイレンス産駒のロイヤルタッチかイシノサンデーだけだ。

グレートエスケープはしよせん早熟な一発屋でしかなかった、といわんばかりにファンは一転してグレートエスケープを軽視し、4番人気となる。

それこそがフラグだった。

そして臨んだ日本ダービー。グレートエスケープは騎手の梶田が「頭ぶつけるかと思つた」と回顧するほどのスタートを決めるとノンストップで逃げ始める。

前半1000mを60秒を切るハイペースで逃げるグレートエスケープ。馬群もすべてそれを追いかけている。

先行集団総崩れになると思いきや、直線に入つてもグレートエスケープの脚色は衰えない。それどころか、後続がバテはじめている。

そう、あまりのペースに後続馬も脚を溜められず、凄まじい泥仕合に巻き込まれたのである！

ダンスインザダーク、フサイチコンコルドが追い込むがグレートエスケープは逃げて切つて勝利。父アイネスフウジンと親子でダービー制覇を達成した。

しかもタイムは2.25.0のレコードと、父が記録したレースレコードを更新してみせた。

この勝利は、馬主になって2年目の橘馬奈氏にとって当然初のGI勝利。しかも唯一の所有馬がダービー馬だなんて、幸せなことな限りなし。

しかし、橘氏はこの時既に末期癌に侵されており、この年の8月にこの世を去っている。グレートエスケープは放牧中、この報せを聞いてからずっと鳴き続けていたという。

○秋シーズン、そしてジャパンカップ

夏は放牧に出されてリフレッシュ。黒井調教師はグレートエスケープのダービー後には凱旋門賞挑戦を表明していたが、疲労が抜けないことから白紙に。

秋初戦は神戸新聞杯に決定。GI馬は疎か、重賞勝利馬も1頭だけという薄いメンバー相手には負けられないグレートエスケープは文句無しに勝利。菊花賞に弾みをつけた。

そして1番人氣に推された菊花賞。スタート、位置取り、折り合い、騎手の梶田が「勝ったと思った」というほど完璧な走りをするがダンスインザダークの執念の鬼脚に屈して2着。

この後ダンスインザダークは怪我で引退してしまうが、あれほどの走りをしたなら……と納得してしまいそうなほどだった。

次走はセオリーの有馬記念、ではなくジャパンカップ。東京の方が合うだろうということ、そちらに決まった。

サクラローレル、マーベラスサンデー、マヤノトップガンという新平成三強こそ回避

したものの、クラシックを棒に振った代わりに天皇賞（秋）で3歳馬ながら勝利させてバブルガムフェロー、秋華賞でエアグルーヴに勝利したファビラスラフィン、エリザベス女王杯から中1週という強気のローテで挑んできた同厩舎のダンスパートナーなど、有力馬が出走。そして海外からは凱旋門賞馬のエリシオ、キングジョージを勝利したペンタイア、BCターフ2着のシングスピールなど、豪華な顔ぶれが揃った。

その中でグレートエスケープはエリシオと人気を分け合いつつ、1番人気に。

ダービー馬ならここは勝ってもらいたいという願望もあつただろうか。シンボリルドルフやオグリキャップ、ウイニングチケットでも3歳時のジャパンカップを勝利することはできなかった。

果たしてグレートエスケープは——これがまたあつさり勝つてしまうのである。ゲートを出てすんなりハナをとると、緩みないペースで逃げていく。最後の直線では楽な手ごたえでスピードを上げるグレートエスケープ。感動も何もないくらいに、先頭をキープして逃げ切ってしまった。シングスピールには2馬身差、しかもダービーレコードより速い2.23.4で逃げ切ってしまった。日本馬として初めて3歳時にジャパンカップ勝利を達成したがあまりにもあつさりしたのでなんだかあまり語られていない。すごいことやってるんだけどね……。とにかくこれで3歳シーズンを終える。GI2勝、史上初の日本の3歳馬のジャパンカップ勝利が評価されてURA年度代表

馬、最優秀3歳牡馬を獲得。この世代の顔として君臨した。

○激動の4歳シーズン

年明け初戦は日経賞から始動。ついでに黒井調教師は凱旋門賞挑戦を表明し、凱旋門賞を終えたあとは有馬記念かジャパンカップにするかの判断材料にするため、とわざわざ関東まで遠征してきた。

唯一のGI馬として断然人気に。しかし当日は雨の影響で重馬場に。初めての重馬場、そして大敗した皐月賞と同じ中山競馬場と不安要素はあった。嫌な予感の中、スタートからいきなりグレートエスケープがコケる。出足が付かず中団に。あーあ、フラグでしたねと思いきや直線では馬場が重い中でもじわじわ伸びて中山巧者のローゼンカバリーを差し切って勝利。ヒヤヒヤさせるダービー馬である。

次走は天皇賞(春)。多少のトラブルにも負けずに勝ち切る姿に「Vやねん！」とファンも本命を打つ。対戦相手は新平成の三強サクラローレル、マーベラスサンデー、マヤノトップガン。しかし去年、グレートエスケープが倒したバブルガムフェローに負けている。しかも陣営も距離は一番合っていると自信満々。

この戦い……我々の勝利だ……!

そういうフラグを立てるときつちり負けるのが、グレートエスケープというフラグ回収馬である。

直線激しい叩き合いを演じるが僅かに遅れて4着。しかも骨折という嫌なおまけつき。

宝塚記念、そして凱旋門賞は当然白紙に。

牧場に戻って手術を行い、復帰は冬になると思いきや、フラグを回収して負けたくせに怪我はあっさり治してしまう。そのため予定を早めて京都大賞典で復帰。その結果、デビューから手綱をとってきた梶田が主戦から降りる羽目に。

乗り替わったのはレジェンド滝カナタ。ダービーではダンスインザダークに騎乗し、念願の勝利まであと少しだったがとらえきれなかった彼は、グレートエスケープに乗ると絶賛しまくりである。

そして迎えた秋初戦。当時の牝馬ながら牡馬にぶつかりまくっては負けていたダンスパートナー、3歳馬ながら積極的に古馬に挑戦したシルクジャステイスと主戦を下ろされた梶田のコンビが相手だった。しかし結果はなんと最下位。

まあ怪我明けだし、前哨戦だし、乗り替わりもあつたし。次走は梶田に手綱が戻ると、……なんてファンは気にしなかったが、天皇賞（秋）でも13着に敗北するのを見ると、流石に顔を青くした。

ひよつとしてただの早熟馬だったのか、ナリタブライアンのように故障して上手く走れなくなってしまったのか……そんな中でジャパンカップでは2 getでお馴染み館

山典佑が騎乗することに。

エアグルーヴ、バブルガムフェロー、立派なモノをぶらぶらさせていたGI5勝の欧州馬ピルサドスキーらが相手となった。グレートエスケープ鞍上館山はスタートするなり、彼に気合いを入れさせるかのように出ムチを入れた。いきなり10馬身近いリードをとって逃げるグレートエスケープ。こんな馬名の癖して何気に初めての大逃げである。

「あーあ、とうとう大逃げまでやって……あとは沈んでおしまいな……」

と馬券を買ったファンは頭を抱え、買ってないファンは失笑すら浮かべていたが、直線に入ってもグレートエスケープの脚色が衰えない。気づけば楽々サーフテイリッドをとったグレートエスケープは6馬身差で圧勝。史上初のジャパンカップ2連覇を達成。終わってみればダービー馬はやっぱり強かった。

完全復活グレートエスケープ！ 有馬記念も勝利して日本競馬界を背負って立つ！ という雰囲気の中で最悪の大外枠を引いてしまう。有馬記念、果敢に逃げるがやはり中山芝2500mの大外枠はきつかったのか、4着に敗れる。しかし1く4着がアタマ差、ハナ差で固まっており、決して無様な敗北というわけではなかった。コケなかったし。少なくとも復活はしたことをアピールして、4歳シーズンを終える。

○充実の5歳シーズン

黒井調教師は三度目の正直とばかりによせばいいものを、懲りずに凱旋門賞挑戦を表明。しかし今度はあくまで最大目標であり、1戦ずつ勝つていくことを強調。というわけで鞍上に滝カナタを迎え、まずは阪神大賞典から5歳シーズンは始まった。

この相手は昨年のグランプリホースのシルクジャステイス、そして父アイネスフウジンとクラシックを争ったメジロライアンの子供、メジロブライト。若造にはまだ負けてられないとばかりに、3強という風潮の中でグレートエスケープは後続を完封して勝利。

続く天皇賞（春）は前走は強かったけどこいつは本番でやらかすからな……と思われたのか、1番人気だが差がないオッズだった。レースでは3番手につけると坂の下りから進出開始、第4コーナーで先頭に立つとそのまま後続を寄せ付けずに天皇賞（春）を勝利。王道にして強い勝ち方を見せつけたことで、現役最強と呼ばれ始める。

しかし待ったをかけた馬がいた。そう、稀代の快速逃げ馬、サイレンススズカである。グレートエスケープがペースやレース展開に合わせて逃げる、いわば巧者だとしたらサイレンススズカはスピードにモノをいわせて逃げるスピード強者。このとき4連勝中、前走の金鯱賞では重賞なのに大差勝ちという伝説的なレースを見せていた。

まさに究極の逃げ馬バトル。鞍上は梶田に戻り、万全の状態で挑んだ宝塚記念。予想通り飛ばすサイレンススズカの2番手でレースを進めるグレートエスケープ。直線を

迎えてじわじわ差が詰まり出す。後続とは差が開いていく、しかし前との差が詰まらない。ちよつとずつ差を詰めるが半馬身及ばずゴール。サイレンススズカの逃げ切り勝ちだった。鞍上の梶田と黒井調教師が「完敗です」と言ってしまうほどだった。

しかし面目は保たれた負け方ではあった。

凱旋門賞前の前哨戦として、今でこそ時々見かけるが当時としては異例の札幌記念を前哨戦として凱旋門賞へ向かうプランが黒井調教師から明かされた。

「札幌競馬場は洋芝だし、馬に負担をかけずに前哨戦が行える。ここで勝てる馬は欧州の馬場にも対応できる。これからは札幌記念がよく使われるようになるだろう」

黒井 最強

壮行レースにはさせないとばかりにエアグルーヴも参戦しており、牡馬・牝馬の最強決定戦が繰り広げられた。札幌記念では爆走するサイレントハンターを見ながらグレートエスケープ、それをさらに見るようにエアグルーヴがつける展開。第3コーナーからグレートエスケープが進出すると、エアグルーヴも追いかける。既にマツチレースの様相を呈しており、直線では2頭の激しい叩き合いとなった。しかしハナ差及ばず2着。まあでも2頭が強かったということで、グレートエスケープの凱旋門賞が楽しみだな。なんて言ってる束の間にグレートエスケープは疲労が抜けきらないため凱旋門賞回避となった。思わず競馬ファンはずっこけた。

結果的に次走は天皇賞（秋）へ。一部ではサイレンススズカにリベンジするため、という噂も流れた。そして迎えた秋の天皇賞。毎日王冠でエルコンドルパサー、グラスワンダーといった強豪を破り、6連勝を飾ったサイレンススズカに譲ったものの、当日は一騎打ちだとマスコミもファンも世紀の対決に心を躍らせた。

当時、マル外と呼ばれる外国産馬が日本競馬界を席卷していた。クラシックこそ規定により出走できないが、マル外が出走可能なGIレースで多くのマル外が勝利していた。毎日王冠ではサイレンススズカが当時のマル外最強格のエルコンドルパサー、グラスワンダーに完勝。

日本内国産馬でも勝てる——そして次にファンが注目したのは、血統だった。

サイレンススズカの父は当時隆盛を極めつつあったサンデーサイレンス。母父も *M i s w a k i* と外国産馬の血統だった。

対するグレートエスケープは父アイネスフウジン、母父シンボリルドルフ、牝系に至っては由緒ある日本産馬の血統というものだった。

結果として、日本内国産馬 *V S* 外国産馬という図式だった毎日王冠から一転。今度は日本内国産馬血統 *V S* 外国産馬血統というかたちで注目された。

世紀の一戦の火蓋が切られると、1枠に入った2頭が絶好のスタートを切る。戦前はサイレンススズカが逃げてグレートエスケープが追いかける形になると競馬ファンは

予想していた。しかし、2頭がほとんど並んだまま後続をぐんぐん引き離していく。3番手のサイレントハンターも個性的な大逃げ馬だったが、それが置いていかれるとほどのハイペース。

カメラが限界まで引かないと馬群全てを映すことができないほど後続を引き離す。中継していたマジテレビは途中から諦めて2頭だけを映していた。

スタートから最後までマツチレースになる、こんなレースもう一生見られないであろう——ファンが期待と興奮にどよめく中、2頭が大櫓に隠れた。そしてすぐに、サイレンスズカがペースを緩めたかと思われた。実際に緩めたのではなく、失速したのだと気づいたのはテレビカメラでレースを見ていた者と、実況者くらいだろうか。遅れて東京競馬場に押しかけたファンから悲鳴が上がった。サイレンスズカの故障発生——しかしグレートエスケープはペースをまるで緩めずに直線に入る。

結果的に、グレートエスケープは後続に7馬身差をつけて圧勝した。だが、王者の圧勝劇というには、東京競馬場の雰囲気は異常だった。

それでも勝利は勝利である。サイレンスズカの陰に隠れていたがタマモクロス以来、史上2頭目の天皇賞春秋連覇を達成した。ついでに府中芝2400m専用機という噂も破壊した。

続くは3連覇がかかるジャパンカップ——ではなく有馬記念。陣営はレコードで駆

けた反動を中3週間では回復しきれないと考え、万全の状態では有馬記念へ向かう姿勢を見せた。

有馬記念ではラストランを迎えるエアグルーヴ、この年の二冠馬セイウンスカイ、古馬戦線を走り抜いてきたメジロブライトとシルクジャステイス、昨年の菊花賞馬マチカネフクキタルに加えて、復活を期すグラスワンダーが参戦するなど、豪華なメンバーが揃う。

ジャパンカップ3連覇を捨ててまで挑んだ有馬記念、状態は万全だということで一番人気に推される。こういうときに負けるのが定番な気もするが。

現役最強馬として負けられないこの戦い、グレートエスケープは好位に控える。逃げるセイウンスカイは荒れた馬場を嫌って外を回りながら逃げていたが、第4コーナーでは捕まえて一気に加速すると、そのまま後続を突き放して有馬記念を勝利した。なんだかんだこの年6戦走って4勝、残る2走も2着と、最終的にGI3勝の好成績を挙げたが、年度代表馬や最優秀4歳以上牡馬はタイキシャトルに拐われた。

○ついに海外遠征

5歳でシンジケートが組まれており、引退の話もまともりかけていたが、陣営は現役続行を決定。さらに海外遠征することを発表した。今度こそ行くという気持ちの表れか、普通の1レース使って帰るのではなく、半年間海外に遠征して過ごすという長期的

なプランを選択した。

昨年ジャパンカップを勝利したエルコンドルパサー陣営も長期遠征を決定。陣営からは「国内での勝負付けは済んだ」と発言があり、一部のファンの間で物議を醸したが、「国内での勝負付けは済んだ」海外GIの舞台で決着をつける」という意味ともとれるとされていたし、実際にエルコンドルパサー陣営は同じ日本から遠征するグレートエスケープのことを意識していたという。

なにはともあれ、グレートエスケープはイギリスのキングジョージを最大目標とし、結果次第で凱旋門賞やブリーダーズカップ、ジャパンカップに出走するプランが明かされた。その前にイギリスで2戦走るとも。

そして1戦目はプリンスオブウェールズステークス（G2）が選ばれた。しかしレース直前に主戦騎手の梶田が日本のレース中の落馬により長期離脱、天皇賞（春）を共に制したレジェンド、滝力ナタと欧州のレースに臨むことが決まった。

プリンスオブウェールズはあっさり逃げ切つて勝利。英国でも「日本最強馬來訪」「極東からやってきた偉大なる逃亡者」「イギリス馬は勝てるのか」と異国からの来訪者に興奮するマスコミが多くいた。日本のマスコミも「エルコンドルパサーに続け!」「欧州を席卷する日本競馬!」「Vやねん!グレートエスケープ!」とイギリスGIの勝利を期待していた。

次走はエクリプスステークス。イギリス上半期の最強中距離馬決定戦である。ここで1番人氣に推されるとグレートエスケープは折り合いを欠き、7着に敗れる。ああ、こいつそういう馬だった……。

誰もが彼の姿を思い出しつつ次走はキングジョージに予定通り進む。本当に大丈夫か？

相手は古馬路線に進んでから本格化し、後に1990年代の欧州最強古馬といわれるほどになるデイラミ。

本当に大丈夫か???

最終追い切りでは滝カナタを振り落とさんばかりの大暴走をやつてのける。

本当に本当に大丈夫か?????

不安しかない過程を披露してしまったグレートエスケープは3番人氣でレースを迎える。レースでは上手く逃げると直線で一気に後続を突き放す。しかしデイラミもとんでもない脚で追ってくる。完全に2頭のマッチレースになると、騎手同士がぶつかりあうほどみっちり併せた状態で「アスコットの死闘」と評される叩き合いを繰り広げる。最後の最後、人馬一体となつてクビを伸ばしきつた地点がゴール。まさに首の上げ下げの差で勝利を達成した。日本馬がキングジョージ制覇。歴史的偉業に日本は大騒ぎ、英国でもアジアの競走馬による初勝利を絶賛した。

そして次走で凱旋門賞を走り、引退することが発表された。

当日はアイルランドとフランスのダービー二冠を達成した3歳馬モンジュー、フランスの古馬中距離路線で戦ってきたエルコンドルパサー、キングジョージで激闘を繰り広げた後にコロネーションカップで圧勝したデイラミらも並んで人気の一角に推された。

当時、日本競馬界は競馬後進国だった。その中で欧州最高峰のレースで2頭も人気馬として出走するということは、まさに有り得ないことだった。誰もが勝てるかもしれないと期待を膨らませながら凱旋門賞がスタートする。

そしてグレートエスケープは足を滑らせたのか大外に膨らむほど出遅れた。ここまできるとフアンは笑ったらしい。対照的に好スタートを切ったエルコンドルパサーが逃げるのを見ると、全員グレートエスケープのことは忘れてエルコンドルパサーのことを応援した。

直線ではエルコンドルパサーの手応え抜群で後続を引き離していく。勝った！と誰もが思ったがモンジューが猛追する。残り50mで並ばれて限界かと思いきや、グレートエスケープがさらに外から襲いかかった。中団から伸びてきたグレートエスケープは最後の最後で差し切り勝利。エルコンドルパサーもハナ差残しきって、凱旋門賞の舞台で日本馬ワンツーを見事に達成した。

欧州メデアはこの2頭を絶賛し、世界から注目された。特にグレートエスケープは

ラムタラ、ダンシングブレエヴなどが達成した同一年連続キングジョージ、凱旋門賞勝利を達成。この年のワールド・サラブレッド・レースホース・ランキング長距離部門において136ポンドの破格の評価を受けた。まさに世界的名馬と知れ渡ったのだ。

凱旋門賞後、引退するエルコンドルパサーとは逆に、グレートエスケープはジャパンカップを走り、そこをラストランの舞台に決定。史上初の同一GI3勝がかかっていた舞台で同厩にして年下のダービー馬、スペシャルウィークやモンジューなどを抑えて一番人気に推された。

例のごとくスタートを決めると緩やかにグレートエスケープは逃げていく。しかし途中から1秒のラップを連発し、直線では抜け出してみせる。だれもが最強馬の凱旋と思ったが、後方に待機していたスペシャルウィークの直線一気の追い込みに差され、2着に終わる。当日の最終レース後に引退式を行い、グレートエスケープはターフを去った。昼休みにはエルコンドルパサーの引退式が行われており、豪華な一日だった。

○引退後

社来スタリオンステーションで種牡馬入りすると、アウトブリード血統かつ、当時主流のノーザンダンサーやサンデーサイレンスの血がないことから多くの牝馬を集めた。大きな期待をされたグレートエスケープは初年度からライバル、エアグルーヴとの産駒

プリズンブレイクを送り出し、オークスを勝利。その後もダート、芝問わずG I馬をコンスタントに出し続けた。XXI5年に種牡馬を引退。その後も勝ち星を増やし、XX21年現在、G I勝利数はサンデーサイレンス、デイープインパクトの3位、重賞勝利数もサンデーサイレンス、デイープインパクト、キングカメハメハに次ぐ4位と日本ではグレートエスケープ系が確立されそうなほど種牡馬成績を残せてみせた。また、産駒による八大競走制覇や、ラストクロップのグレートチャンプは親子ダービー制覇、凱旋門賞制覇を達成している。

競走馬として、種牡馬としても大成功を収めたグレートエスケープは今も日本競馬界の歴史に名前を刻まれている。

○エピソード

それで終わるにはグレートエスケープを語るには足りないのがすごいところ。有名馬というのもあるが、それを抜きにしてもエピソードが多い馬である。真偽定かではないものもあるが、様々なエピソードを挙げていく。

・蛇嫌い

調教は真面目に走る馬だった。しかし坂路コースに現れた蛇を見て驚き、途中で走るのをやめてしまった。騎手が蛇を避けてやったが、その日一日は蛇を恐れてそのコースは走ろうとしなかったという。

・スタート

関係者も口を揃えてスタートが上手いと評価しているが、皐月賞、日経賞、凱旋門賞と3回もスタートしてコケている。主戦騎手の梶田によると速く出ようとする意思が強すぎて、失敗するとコケるのだという。それだけレースを理解しているともいえるが、もしかしたらドジキャラなのかもしれない。

・ボス

栗東では厩舎全体の馬たちのボスだったという。喧嘩を売するようなタイプではなく、威厳ある立場で仕切るボスマだった。ちなみに同厩舎のスペシャルウィークは黒井調教師から「コバンザメみたい」といわれるほどグレートエスケープにべったりしており、グレートエスケープの次に偉いと勘違いしていたフシがあると語られている。日本総大将エ……

・モテモテ

黒鹿毛でグッドルッキングホースなのだが、牝馬にとってもそれは同じらしく、とてもモテたらしい。現役時代から発情期以外は牡馬を跳ね除けるはずの牝馬に嫌われることは少なく、また種牡馬時代も牝馬に嫌がられることなくスムーズに種付けをしたという。

・テクニシャン

種牡馬として活躍したが、種付けの速さ、牝馬に嫌がられない、受胎率の高さなどが評価を高める一因にもなった。そして種付けが大好きだったらしい。基本的に拒否はしないが若い牝馬や小柄な牝馬の方が張り切っていたとスタツフから語られていた。

・オーナー

橘オーナーは現役時代に死去しており、妹が後をついでいる。オーナーとの絆の物語はテレビでも放映され、涙無しには見られない。グレートエスケープもオーナーが大好きだったらしく、パドックではオーナーに甘える姿がよく見られていた。

・脱走

厩舎でも有名な脱走名人で、しょっちゅう馬房や放牧地から抜け出していたという。色んな手法が有名だが、一番驚かせたのは門を蹴り壊して脱走したことで、厩舎スタツフを騙して扉を開けさせて抜け出したことだろう。パワーと賢さ、共に兼ね備えた馬だったという。

・等速ストライド

URA競走馬総合研究所はストライドの大きさに注目した。その中でグレートエスケープが凱旋門賞では走法を使い分けていたことが明らかになった。本来サラブレッドは体格によつて走法が変わる。スピードは出るがスタミナを使うピッチ走法、加速力にかけるがスタミナを保つのに向いているストライド走法の2つとされている。これ

は胴の長さや足の長さで変わるため、スプリンターやステイヤーが馬体で区別されるのは、これを判断基準にしているからである。しかしグレートエスケープは凱旋門賞では最後の直線のみ、ピッチ走法に切り替えていたことが研究で明らかになった。

その後のジャパンカップでそれは見られなかったが、もしもそれを早くに身につけ、自由に切り替えていたら……これ以上の成績を残していたかもしれない。

・ダンスパートナー

オークスを制した、同厩舎にして一つ年上の牝馬だが、相思相愛の仲だったといわれている。種付けのときもグルーミングをするほどイチャついており、厩舎や栗東トレセンでは有名だった。引退後、2頭は無事結ばれる。産駒のブレイクダンスはGIこそ勝てなかったものの、重賞を5勝。両親の丈夫さを受け継いで、長く活躍した。

・スペシャルウィーク

これまた同厩舎にして年下のダービー馬。兄弟のようだと評されるほどで、スペシャルウィークはいつもグレートエスケープにくっついていた。グレートエスケープも食事をスペシャルウィークにあげることがあったが、好物を食べようとするとスペシャルウィークに怒っていたらしい。スペシャルウィークはその度に驚いていたという。

・嫌いな馬

サラブレッドには珍しく嫌いな馬が明らかになっている。その馬はステイゴールド。

栗東トレセンで顔を出せばステイゴールドを追い払おうとし、社来スタリオンステーションでも放牧地が近ければグレートエスケープは威嚇していた。流石のステイゴールドも500kgほどあるグレートエスケープに威嚇されては引き下がるが多かった。しかし、懲りずにちよっかいかけていたため、ステイゴールドはグレートエスケープが好きなのは、という噂がファンの間で囁かれている。

……などなど、強いだけでなく、頭の良さもあつたことがわかつている。エピソードが豊富であり、関係者が彼を語る時はいつも笑顔を浮かべている。

最強馬議論となると話は変わってくるが、人気と実力を兼ね備えたスターホースということは、変わらないはずだ。

○○○

気づいたら夜中になってしまった。

流石に眠くなってきたが、私は明日から実装されるグレートエスケープというウマ娘が本当に楽しみになってきた。

ゴールドシツプなみにエピソードが豊富な競走馬がモチーフなのだから。

とりあえず眠ろうとして、リンクに気になる文言を見つけた。

「……黒井最強？」

とりあえず明日見てみるか。

黒井調教師のことだろうが、最強とはどういうことか、とても気になった。

名バ列伝 その3

目が覚めると時刻は既に12時を回ろうとしていた。

これは大遅刻だと飛び起きたが、先日仕事はやめていたことを思い出し、安心して安ベッドにもう一度寝転んだ。

我ながらよく眠ったものだと感じしながら、半ば反射的にスマホを手に持ち、ツイッターのアプリアイコンを指で触れる。

いつからか、タイムラインはウマ娘一色になっていたが故に、今何が起きているかすぐにわかった。

「グレートエスケープのサポカ実装じゃないか！ 石貯まってるだけじゃあないなあ」

PC版で日課と化したチーム競技場、デイリーレースを回しつつ、ツイッターでの予想を流し見る。まだ勝負服のビジュアルと声優、そしてサポートカードのイラストが発表されただけで、どんなウマ娘かという発表すらも公式サイトに上がっていない。

そのため、属性から性能まで、誰も根拠のある予想は挙げられていなかった。

「二つ名は……『トレセン学園の空に』グレートエスケープ……これ『シヨウシヤンクの空に』のポスターの構図とよく似てるな。脱獄モノだからか？ しかしイケメンだ

……」

肩まで伸ばされた黒い髪。自信の溢れた表情と鋭く、凛々しい顔つき、黒いスーツとワインレッドのシャツはマフィアを思わせる危険な魅力を醸し出している。額にかけてティアドロップサングラスは何か理由があるのだろうか。

「勝負服も見れば見るほど好みだ。性能次第では……多少アレでも引きたいな……」

ある程度のデイリーミッションをこなしても、ガチャの更新までもう少し時間があつた。

そこで昨日、ニヤニヤ動画大百科にあつた『黒井最強』のページを思い出した。

どのくらいあるかわからないが、とりあえずそれを読んで時間をつぶそうと考え、ページを開いた。

黒井最強、というのはグレートエスケープやスペシャルウィーク、アグネスデジタルを管理した黒井調教師を崇め奉る言葉らしい。

由来を調べると、グラスワンダー、エルコンドルパサー、スペシャルウィーク、そしてグレートエスケープの強さ議論スレから生まれたものらしい。

まとめると、グレートエスケープがイギリス、フランスの最高峰のG1を制したことを受けて最強はグレートエスケープであると主張するグレスケ基地、そのグレートエスケープに勝ったスペシャルウィークが強いとするスペシャル基地、ジャパンカップでス

ペシャルを破ったこともあるエルコンドルパサーや宝塚記念、有馬記念で同じく勝利したグラスワンダーらが最強と主張するエルコン基地、グラス基地などが最終的に管理していた黒井調教師が最強と締めくくったことが始まりらしい。

その点ト○ポはすげえよな、と同じ平和的に議論を終わらせるスラングとして流行っているとか。

スクロールして見ていくと、中々波乱に満ちた調教師生活、いやホースマン生活を送っていたらしい。

半生から、見ていくと、グレートエスケープの項目が現れた。私はじっくり文章を読んでいくことにした。

○○○

・グレートエスケープのデビュー前、当時若手ながら関西リーディング上位につけるなど活躍している梶田健二騎手に騎乗依頼を入れる。最終追い切りに来た梶田に対して厩舎の玄関を掃除しろと命令。困惑する彼に「ダービージョッキーになりたきや掃除しろ」

黒井最強

・新馬戦の出走コメントで番記者に対して「来年のダービー馬や」と自信满满。デビュー戦で3着に敗れても「あれだけのタイムで走れるなら、こいつは大物になるよ」

黒井最強

・後年オナーナーに対するリップサービスもあつたと言いつつ「男として退路を断つための発言」と自ら背水の陣を構える男気

黒井最強

・ダービーでは見事に勝利。ダービートレーナーとなつても「言つた通りやろ」とはしやぐ真似は見せない。しかし祝勝会ではペロペロになるまで飲み、泥酔するほど喜んでた。

黒井最強

・3歳馬ながら果敢に凱旋門賞挑戦を表明。「斤量差を考えたなら3歳馬のときに挑んだほうがいい」後にヴィクトワールピサやキズナが3歳時に凱旋門賞へ。先見の明がある黒井調教師。

黒井最強

・4歳シーズンで凱旋門賞遠征を表明するもグレートエスケープの骨折で白紙に。5歳シーズンも再び表明。現状に満足しないチャレンジ精神。

黒井最強

・グレートエスケープの凱旋門賞の前哨戦に敢えて札幌記念を選択。「洋芝で欧州の馬場に近い。輸送もせず、夏の暑さも避けた場所で競馬ができるから前哨戦に使いやす

い。これからは札幌記念が凱旋門賞の前哨戦になるだろう。↓後にXXI4年にハープスター、ゴールドシップ、XXI9年にフィエールマン、ブラストワンピースが前哨戦に札幌記念を選択。15年前から予言していた素晴らしい先見の明。

黒井最強

・札幌記念ではレコード決着の影響で疲労が抜けず回避。その後天皇賞(秋)へ向かうとされたが、調教再開後からいきなり坂路で一杯に追いまくる。思わず尋ねた記者。

「調子が悪かったんじゃないですか？」

「どこも悪くないのが悪いんや」

と意味不明な回答。

黒井最強

・天皇賞(秋)では故障したサイレンススズカを偲ぶ。しかし無事でも絶対にグレートエスケープが勝っていたと発言。愛馬のために火種に油を注ぐ。

黒井最強

・現役最強と散々フラグを立てたところで臨んだ有馬記念、グレートエスケープの出来について「まあまあ。問題なく走れば勝てるでしょう」と余裕を見せる。フラグ回収馬グレートエスケープは見事有馬記念勝利。フラグなど通用しない。

黒井最強

・X X 9 8年グレートエスケープは6戦4勝、天皇賞春秋連覇などを達成。しかし年度代表馬はタイキシヤトルが選出された。黒井最強は「日本の競馬で一番素晴らしい馬を選ぶのが年度代表馬。だというのに海外G1を勝ったからといってそっちを選ぶのは海外の競馬より日本の競馬を下に見ている証拠。そんなんで日本競馬界が盛り上がるのか」とコメント。

黒井最強

・キングジョージの最終追い切りでグレートエスケープは騎手を振り落とさんばかりの暴走。不安に思うメディアに対して「持ち味が出た。騎手と喧嘩してたが」と何故か満足げな黒井最強。

黒井最強

・キングジョージ勝利後のコメント「日本生産馬を両親に持ち、日本古来の牝系を引いた主流とは言えない血統の馬が世界を相手に制覇したことは、調教とこの馬自身のレースセンスがずば抜けている証拠。文句なしに最高の馬です」グレートエスケープのレースセンスを絶賛するとともに自分の調教の腕を自画自賛

黒井最強

・種牡馬入り直前のグレートエスケープが一番に気をかけ続けていた馬が居たと「黒

井昭寿 勝利の方程式」に記述。『彼のお陰で当時育成牧場から離されたばかりで精神的に不安定だったその馬は落ち着きを取り戻した。その馬の名はアグネスデジタル、後に世界を制する馬に対する黒井の相馬眼に、グレートエスケープが太鼓判を押ししたのである』

黒井 最強

・X X O 5年最大のヒット作「黒井昭寿 勝利の方程式」より

「世界にひとつしかない、スペシャルウィーク&アグネスデジタルの蹄鉄で作られた灰皿は、フランスのエルメスに発注したもの。ジッポライターはイギリスのポール・スミスに発注し、グレートエスケープの蹄鉄から作ったもの」

イギリス、フランスの高級ブランドものを愛馬の蹄鉄で作り、身に着ける世界を制した馬を作るホースマン。

黒井 最強

・担当スタッフ「グレートエスケープは人間に対して逆らうことはしないけど、何でも言うことを聞くタイプではなかった。しかし黒井先生のことは恐れていて、どんなに落ち着かなくても黒井先生を見るとピタッと静かになった」世界を制した馬にも上下関係を教え込んでいる敏腕さ。

黒井 最強

・インタビューにて「グレートエスケープは賢い。言葉も多分理解している。私が言えばできることはやろうとしますよ」直後に「カメラに挨拶しなさい」と言うとお辞儀するグレートエスケープ。真のホースマンは馬に言葉すら理解させる。

黒井 最強

・後年、管理馬のグレートエスケープとダンスパートナーの間に生まれたブレイクダンスにはそっぽを向かれる。「親父より気高い」さくらつと世界最高の馬を *dis*る。

黒井 最強

○○○

改めて見ても調教師も、馬自身もキャラと情報が濃い。

ゴールドシツプでも量が少なくなかったと思うが、こんなに情報があるなんて、ウマ娘になったらどんなキャラクターになるのか想像もつかなかった。

ツイッターを開くと、公式サイトにグレートエスケープのページが増えたことが知らされていた。

「お、見なきや」

キララクターページの一番最後に、彼女のページがあった。

グレートエスケープ (Great Escape) CV. ○○
××

『目指すのは最強のウマ娘——理由？ 面白いから、だ』

・誕生日……………4月1日

・身長……………172cm

・体重……………微減（しつかり絞ってきた）

・スリーサイズ…B81・W58・H84

ニヒルな笑みがワイルドさを感じさせる、クールさとノリの良さを併せ持ったウマ娘。走ることそのものよりも、レースで勝利することに喜びを見出す勝利至上主義者。ストイックに自分を追い込むかと思えば、ルールを無視して羽目を外すこともある遊びの達人でもある。夢はすべてのウマ娘の頂点に立つこと。

サンプルボイスも上がっており、声は低いのだろうかと思っただが、意外と高めだ。これはこれで、イイ。キリつとした声に加えて絶妙な色気がある。

調べてみたら声優も聞いたことがあるキャラクターをたくさん演じている人気声優だった。

「これは……Chai Games（チャイゲームス）、気合を入れてきたな」

ツイッターもおおむね同じ反応を見せていた。

「性能間違いなくいいはずだろ」

「日本競馬で最強っていわれるくらいだからな。人権サポカ待ったなし」

「絶対完凸させたほうがいいわ」

「タマモクロス、すまん……貯金はまた今度だ……!」

「おじいちゃん、タマモクロスはこの前実装されたでしょ」

「サポカがな」

「スピードかな？」

「スタミナ人権かもしれない」

「ステイヤーって言われてたみたいだしスタミナありそう」

性能予想はやはりというべきか、強力なサポートカードになると思っていた。

私もそう思う。

待つこと数分、ついに公式アカウントからツイートされた。

そして次の瞬間、タイムラインに棲むアカウントたちの心は一つになった。

「根性サポカ……」

「根性サポカ……」

「根性サポカ……」

「根性サポカ……」

「根性サポカ……」

「根性サポだあああああ!!」

「根性育成教徒だ! 宗教裁判にかけろ!」

根性……それはXX21年10月現在では一番重要度が低いステータスであり、正直
いらないうんじゃね? と言われている。

一部には根性育成教徒というものがいるらしいが、攻略サイトではあまり根性を積極
的に上げるようには記載されていない。

「はあ……うーん、サポ力はやめておくかあ。あ、無料チケット5枚あるじゃん。これだ
け引いておこう。すり抜けで他のSSR来たらいいなあ」

というわけで。

「来ちゃったよ……5枚でグレートエスケープ完凸しちゃったよ……嘘だろ……」

ツイッターに上げたらバズるかなー、なんて思いながら、とりあえずカードを重ねて
レベルマックスまで上げて性能を確認した。もちろん、サポカエピソードを確認するこ
とも忘れない。

○SSR【トレセン学園の空】グレートエスケープ（根性）

・エピソード

「希望はいいものだ。多分、最高のものだ。素晴らしいものは決して滅びない」

雲ひとつない青空の下で、彼女は両手を広げる。

「私よりも強いウマ娘はたくさん現れるだろう。だが、諦めて日常を過ごすことが正しいのか？ それではきつと、トレセン学園の時間はゆっくり流れる」

青空とは真逆の漆黒のジャケットトにワインレッドのワイシャツが風に靡く。

そんな彼女の心に広がるのは、どこまでも続く青い空と同じ、無限大の希望だ。

「必死に勝つか、必死に負けるか。足掻いた末に栄光は両手に降りてくる」

だから――

「格好悪いかもしれないがね。見ていてくれたまえ。これまでも、これからも」

グレートエスケープはどこかに繋がっている空に向けて、希望を高らかに歌い上げた。

「やっぱり『ショーシャンクの空に』じゃないか。名作だけでも！ 脱獄繋がりなんだろうけどー！」

ツイッターを見るとウマ娘怪文書で有名なアカウントが奇声を発していた。文字なので音には聞こえないが、まさしく奇声だった。

「ピーーーーーッ！ なにこれエモオーツ！ え、まって、誓うってこれ……もしかしてこれオーナーネタ拾ってんの？ いやナマモノだからあまり言及とかはしないけどさ、はーーーーー！ チャイゲームスおまえそういうところだぞグツジョブ!! もういい

！ あたしやるもん！ みんなにリボ払いできるってところ見せてやるんだ！ ウオオオーツ、リボルゲインフォルムーツ!!! あ、キタサン5枚目出たわ」

エピソードを見るに、誰かに対する誓いでもあった。

グレートエスケープはダービー後に、オーナーが亡くなっている。オーナーが大好きなグレートエスケープが、もしもオーナーに誓って、それ以降も走り続けていたとしたら。

なんて、なんて美しいのだろう。

——まあ、あくまで馬だし、それは有り得ないと思うけれど。

トレーナーに対する宣言がそうともとれる風にしただけ、なのだろう。

私は性能の確認を始めた。

・所持スキル

東京レース場○

直線回復

前途洋々

逃げ直線○

急ぎ足

末脚

集中力

・イベントスキル

脱出術

危険回避

・固有ボーナス「トレセン学園の空に」

トレーニング効果アップと初期絆ゲージアップ

・サポート効果

得意率75

友情ボーナス20

やる気効果40

トレーニング効果20+固有(5)

ヒントレベル3

ヒント発生率30

初期キズナゲージ20+固有(20)

初期根性20

レースボーナス10

ファン数ボーナス10

パワーボーナスイ

「根性属性抜きにしても結構強くない……？」

育成シナリオ次第では根性カードを入れるのも良さそうだ。というかトレーニング効果がかなり高い。

完凸性能は根性サポカの中でもかなりのものだ。

とりあえず。

「無料チケ5枚でグレートエスケープ完凸しました……つと、ツイート。はい、無料で出したSSRの自慢は気持ちいいなあ」

私はベッドに寝転ぶと、早速グレートエスケープを編成して育成を開始した。

まずはアオハル杯でライブの映像でも見ることに決めた。

結局この日はチーム『ファースト』に8連敗したので、気づけばファーストを倒すことだけを考えてプレイし続けたのだった。

名バ列伝 その4

グレスケを入れて育成すると、中々面白い。性能としては得意率さえなければという思いは強いが、適当に根性を叩いてるだけでスピードやパワーももりもり上がっていく。フレンドのSSRアイネスフウジンと組むとあとはスタミナと賢さをなんとかすれば結構いいステータスが作れていた。

「まあキタサンとかクリーク積んでもいいんだけど、そっちは完凸するほど持ってないんですよ……」

「へー。課金してやるほどじゃないみたいだな」

私は夜になると、インターネットで知り合った同じウマ娘オタクの『ダラカニ』さんと通話でグレスケの性能を話していた。

元々は別ジャンルのゲームやアニメから知り合い、オフ会を経て仲良くなったのだが、彼は競馬ファンであり、ウマ娘はアニメ1期で知ったという。私は2期とアプリリリースがきっかけだったので、多くの知識を持つ彼の話を楽しく聞いていた。

「競馬ファンのダラカニさんのグレスケ実装ってどうなの？」

「マンデーレーシングや社来サウザーファーム系じゃないし、実装はあり得ると思って

ました。むしろアニメ1期の頃に出てこなかったのか不思議なくらいですよ」

「え、Twitterでは出てたって言ってましたけど、違うんですか?」

「あー、グレイテストランちゃん? あれはあくまでグレートエスケープをモチーフにしただけのキャラクター。本当はスペシャルウィークの先輩ポジ……それこそサイレンスズカの立ち位置に来ててもいいくらいなんだけど、出せなかったからアニメでは凱旋門賞とジャパンカップのときに急にできただけなんだよね」

「ちよつとWikipeedia読んだけど、やっぱり先輩って感じなんですね」

「オーナーも割とメディアに出てくるくらいで、決してそういうの拒否する人じゃないんですが。結構意外なんですよ。それか遠慮してたのかな、制作陣が」

「遠慮ですか? 最強クラスだから、とか?」

「多分だけど、アニメ1期の前くらい、制作し始めてくるくらいの時期はグレートエスケープは体調不良で種牡馬生活引退してるんですよ。高齢なのもあって、その時に許諾を取りに行くのはちよつと……ってなったのかもしれないです」

「そういえばWikipeediaにもありましたね……」

私は2缶目の缶ビールに手を伸ばし、喉を潤した。

飲んだビールはぬるくて、随分話し込んでいたことに気がついた。

「話は戻すんですけど、グレスケの性能はなんか難しいですね。根性でさえなければ

ぶっ壊れつてすごい言われてますよ」

「むしろ根性にしてバランスとつてる感じですけどね。最強なんじゃなくて、抜けがある感じがまた、グレ坊っぽくて面白いですけど」

やはりぬるいビールはダメだ。

このペースではビールはぬるくなるばかりで、美味しく味わえない。

席を外してウイスキーの水割りを用意して、再び飲み始めた。

「デザインにはどうなんですか？」

「わかりやすいくらいに勝負服モチーフだね。サングラスも多分プリンカーをモチーフにしてるんじゃないかな？」

「そうなんですか……グレートエスケープってプリンカー……あの仮面みたいなやつ、してたんですね」

「してたよ。結構長い間つけていたから、ファンの間でも馴染みだったと思います。ゴールドシップとかも黒いのつけてましたけど、あんな感じ」

「あれがサングラスに……色々考えてるんですね。流石チャイゲ……」

「伊達に副業のチャイ販売で巨万の富を稼いでるわけじゃないよね」

「親会社の本業でしょう……」

チャイゲームスは元々、チャイの販売をしていたチャイバーエージェントが業務拡大

してから生まれた子会社だ。

コラボカフェなどで出されるチャイはとても美味しい。

「それはそうと色々調べてるとグレスケ推しちやいそうです。サポカのイベントとかも結構優秀ですし、面白いキャラクターですよ。レンタルできるように設定してるのでは非ご覧になってみてください」

「私はもう既に天井まで回して完凸したから……」

「あっはい」

廃人怖い。いや、この人そんなに課金する人だったか？ 私はグレスケ推しなのではないかと思う、聞いてみることにした。

すると、ダラカニさんは小さく笑った。

「そんなんじゃないよ。ただ……気に入っただけだよ」

それは推しになったというのでは？

私はそう指摘するのをやめて、そうですか、と納得した。

「ところで、グレートエスケープのことをもつと知りたいんですけど、いい動画や本はないですか？」

「じゃあ20世紀の名馬シリーズなんてどうですか。ファンが選んだ20世紀に走った名馬が投票でランキングに挙がっているんだけど、グレートエスケープも選ばれている

んですよ」

「へえー、何位なんですか？」

「1位です」

「やつぱり……オグリキャップとかディープリンパクト並に聞いたことがある馬ですかね。それだけすごかったんですね」

「そうなんですよ、グレ坊はまず生い立ちからなんですけどね？ 懇備式牧場という大きいとはお世辞にも言えない牧場で生まれて——」

ノンストップで語られるグレートエスケープのすごさについて、1割だけ覚えていた私は、次の日に20世紀の名馬グレートエスケープ編を試みるのだった。

○○○

※本編では馬齢は現年齢表記でしたが、雰囲気のため、旧馬齢表記にてお送りいたします。

【20世紀の名馬100】 ×

Rankingl (得票数 ×)

グレートエスケープ XX83年4月1日生 牡/黒鹿毛

父 アイネスフウジン

母 シルバーパート

(母の父 シンボリドルフ)

通算成績

27戦16勝 2着4回

海外 4戦3勝 2着0回

主な勝ち鞍

H8 日本ダービー

ジャパンカップ

H9 ジャパンカップ

H10 天皇賞・春

天皇賞・秋

有馬記念

H11 キングジョージ6世&クイーンエリザベスステークス

凱旋門賞

——イギリス、フランス。共に古くからの競馬の歴史を持ち、近代競馬発祥の舞台として多くのホースマンが、頂点を目指してきた。キングジョージ6世&クイーンエリザベスステークスと凱旋門賞が、その世界最高の舞台とされる、レース名だった。

日本からも、多くのサラブレッドが、ホースマンの夢を乗せて挑んでは、分厚い壁に

跳ね返されてきた。

鎖された檻のように、強固で、困難な道のりをついに踏破したサラブレッドの名は、グレートエスケープ。

世界最高の舞台を制した、20世紀における最も輝かしい戦績を残した馬である。生まれたのは北海道浦河町の懇備式牧場。

年間約10頭前後のサラブレッドを生産する、小さな牧場で生まれた。

父は日本ダービーをレコードタイムで逃げ切ったアイネスフウジン。母は皇帝シンボリルドルフの血を引くシルバーパートという、外国産種牡馬全盛の時代ではあまり注目されていない血統だった。

グレートエスケープはデビュー戦こそ3着になるも、その後は未勝利、OP特別を2連勝。そして迎えた重賞初挑戦となる、ラジオたんば杯3歳ステークス。ここには大種牡馬サンデーサイレンスの期待産駒としてロイヤルタッチ、イシノサンデー、ダンスインザダークが参戦していた。

この年の皐月賞、ダービーはサンデーサイレンス産駒が制しており、来年のクラシックもサンデーサイレンスに違いないという前評判の中で、グレートエスケープは意地を見せた。

XX95年 第12回ラジオたんぱ杯3歳ステークス（GⅢ）

阪神／良 芝2，000m

「直線に入って先頭はグレートエスケープ！」

イシノサンデー、ロイヤルタッチが追ってくる！ ダンスインザダークは少し遅れている、グレートエスケープが逃げる逃げる、外からロイヤルタッチ、イシノサンデー内から！

ダンスインザダークはようやく伸びてくるがまだ届かない！ グレートエスケープ先頭！ グレートエスケープ先頭で逃げ切りゴールイン！

グレートエスケープこれは見事です。3連勝で重賞初制覇です」

1着グレートエスケープ（梶田）

2着ロイヤルタッチ（P・オスカー）

3着イシノサンデー（三井）

期待のサンデーサイレンス産駒相手に堂々の逃げ切り勝ち。年明け初戦の弥生賞は好位抜け出しの横綱競馬で完勝することで一躍クラシック戦線の大本命に挙げられた。

クラシック初戦、皐月賞。ライバルのバブルガムフェローは骨折で春は全休、ダンスインザダークは熱発で回避と、有力馬が他に居ないことでグレートエスケープは単勝オッズ1・8倍の圧倒的な人気で皐月賞を迎えた。

しかし――

XX96年 第56回皐月賞（GI）

中山／良 芝2，000m

「第56回今スタートしました！」

おおっと1枠1番グレートエスケープ出遅れました！ つまづいてしまったか、ハナに行くと思われたグレートエスケープは後方からとなつています。

イシノサンデー好スタート、内から前を狙うのがトピカルコレクター、外からサクラスピードオーが先頭を狙って加速しています」

「さあ直線に入りました！」

先頭はサクラスピードオー、ダンディコマンドが先頭に変わるか！

外からイシノサンデー！ イシノサンデーが上がってきている！

後ろからはロイヤルタッチが4番手まで上がってきている！ イシノサンデー追い込んだ！

グレートエスケープは後方でもがいている！ 残り100メートル、イシノサンデー先頭！ ロイヤルタッチが追い込んでくるがイシノサンデー！ イシノサンデー！

やっぱりイシノサンデー！ サンデーだ！

バブルガムフェローとダンスインザダークが消えてもやっぱりサンデーサイレンス！ イシノサンデー優勝ゴールイン！」

グレートエスケープはスタート直後につまずいて後方からの競馬となってしまう。終始折り合いを欠き、結果は人気を裏切る10着。

陣営は日本ダービーで必勝を期した。

XX96年 第63回日本ダービー（GI）

東京／良 芝2，400m

父、アイネスフウジンがレコードを記録した日本ダービーを迎える。

当日はサンデーサイレンス産駒たちが人気となり、4番人気に。しかしここでグレートエスケープの本来の能力が爆発する。

「第4コーナーを回って直線に入る！」

18万の大歓声が迎えている！

先頭はグレートエスケープ！ グレートエスケープが先頭！

そして3番のダンスインザダークが追ってきている！ ダンスインザダークが迫っている！ 外からフサイチコンコルド、フサイチコンコルド！

外目について皐月賞馬イシノサンデーもやってきた！ しかし先頭はグレートエス

ケープだ、グレートエスケープだ！

内の方からメイシヨウジュエニエ！ しかしグレートエスケープだ、グレートエスケープだ！ ダンスインザダークは届かない！

サンデー旋風切り裂いて！ 海外血統の檻から大脱出したのは、グレートエスケープだアアアアッ！

1着グレートエスケープ（梶田）

2着フサイチコンコルド（藤川）

3着ダンスインザダーク（滝）

後続を2馬身離して、なんと父アイネスフウジンの記録を更新し、日本ダービーのレコードタイムを記録。

外国産種牡馬全盛の時代の中で、日本の血統も負けてはいないとホースマンたちを勇気づける、見事なダービー制覇だった。

しかしグレートエスケープの逃走劇は終わらない。彼の伝説は、ここから始まったのだ。

夏は故郷で休養を挟み、育成牧場で秋へ向けて牙を研いだ。グレートエスケープの風格は夏を越えたことで逞しく、王者のオーラを纏うようになっていた。

しかし、クラシック最終戦、菊花賞ではライバルであるダンスインザダークの凄まじ

い切れ味に屈して2着。

惜しくも敗れてしまったが、ダンスインザダークはこの後屈腱炎で引退してしまう。グレートエスケープはライバルたちの想いを背に、世界からやってきた強豪が集うジャパンカップに駒を進めた。

XX96年 第16回ジャパンカップ (GI)

東京／良 芝2, 400m

ここに出陣してきたのは凱旋門賞馬エリシオ、キングジョージ6世&クイーンエリザベスステークスを勝利したペンタイア、BCターフ2着のシングスピール、さらに4歳馬ながら天皇賞(秋)を勝利してきたバブルガムフェローなどライバルたちがいる中で、グレートエスケープは1番人気に推された。

ダービーと同じ舞台で、世界の名馬に敵うのか、果たして——
「グレートエスケープが先頭！」

白い帽子ストラテジックチョイスがきている！ 内からファビラスラフィン、シングスピールも伸びてこうとしている！

しかし関係ありません！ グレートエスケープだ！

バブルは伸びない！ エリシオは届かない！ ファビラスは追いつかない！ シン

グスピールは捉えられない！ 見たか世界！ これが偉大なる逃亡者だーッ！」

1着グレートエスケープ（梶田）

2着シングスピール（L・ベットーリ）

3着フェアピラスラフィン（松村）

ジャパンカップを見事に勝利。日本内産の4歳馬がジャパンカップを勝利するのは、初めてのことだった。世界の強豪にも劣らない實力を見せつけ、現役最強の声すら挙がるようになっていたグレートエスケープ。このあとは古馬戦線のため、休養に入ることが決まった。

翌年の春、5歳になったグレートエスケープは前哨戦を勝利すると、天皇賞（春）へ向かう。しかしレース中の骨折というアクシデントに見舞われ4着。春は全休となり、迎えた秋の復帰戦、グレートエスケープの走りは精細を欠いていた。

XX97年 第32回京都大賞典（GII）

京都／良 芝2，400m

「ダンスパートナー来た！ 外からインターユニーク、大外からポレールも来ているぞ！

グレートエスケープは苦しい、後退していく！

先頭はダンスパートナー、内からシルクジャステイス!

ダンスパートナーかシルクジャステイスか! 外からインターユニーク、シルクシルク!
ダンスかシルクか、シルクジャステイスー!」

1着シルクジャステイス(梶田)

2着ダンスパートナー(海津)

3着インターユニーク(大野)

11着グレートエスケープ(滝)

XX97年 第116回天皇賞(秋)(GI)

東京/良 芝2,000m

「残り200、バブルをかわした!

エアグルーヴ先頭、エアグルーヴ先頭!

内からバブル! 内からバブル! バブルか、エアか、バブルか、エアか、エアグルー

ヴ!!

恐ろしい馬です! 並みいる男馬をエアグルーヴが蹴散らしました!」

1着エアグルーヴ(滝)

2着バブルガムフェロー（岡谷）

3着ジエニユイン（佐藤勝）

13着グレートエスケープ（梶田）

京都大賞典、天皇賞（秋）と共に大敗。

かつて府中を沸かせた粘り強さは影を潜めていた。早熟馬だったのか、故障による限界か。しかし、グレートエスケープ陣営は諦めていなかった。グレートエスケープ自身も、闘志を決して絶やしてはいなかった。

連覇がかかった次走のジャパンカップ、得意の舞台でグレートエスケープは再び府中を駆け抜けた。

XX97年 第17回ジャパンカップ（GI）

東京／良 芝2，400m

「グレートエスケープが大きくりードを保ったまま第4コーナーに差し掛かります！馬群からエアグルーヴが抜け出した！

エアグルーヴ頑張った！ 外からバブルも来ている！ 赤い帽子ピルサドスキーも伸び始めているがリードが縮まりません！

グレートエスケープ先頭！ グレートエスケープの脚色は衰えない！ 先頭はグレートエスケープ！

これは逃げ切る逃げ切る！ 復活の逃亡者、グレートエスケープ！ 栄光の舞台に返り咲いたのは逃亡者グレートエスケープだーッ！ 後続を完封です！」

1着グレートエスケープ（館山）

2着ピルサドスキー（M・メモリアル）

3着エアグルーヴ（滝）

ジャパンカップで大逃げという奇襲が成功し、見事復活を遂げる。また、この勝利で史上初のジャパンカップ連覇を達成した。続く有馬記念こそ4着だったものの、差がない4番手。ここにダービー馬復活の狼煙が上がったことを、誰もが確信していた。

6歳になったグレートエスケープは年明け初戦の阪神大賞典を勝利すると、昨年は怪我で泣いた雪辱を晴らすため、天皇賞（春）に出走した。

ライバルは年下のグランプリホース、シルクジャステイスと、GIで惜しい戦いが続いているメジロブライト。しかし、復活したグレートエスケープは2頭に対して完封と、いい走りを見せた。

XX98年 第117回天皇賞（春）（GI）

京都／良 芝3，200m

「フアンドリ逃げた、フアンドリが逃げた逃げた逃げた！」

グレートエスケープがかわしたか、かわしたー！ グレートエスケープ先頭！

後ろからはシルクジャステイスが真ん中割ってやってくる、外からメジロブライト、そしてなんとステイゴールドも突っ込んでくる！

グレートエスケープだ、グレートエスケープです！ 去年の雪辱を晴らしてグレートエスケープゴールイン！

見事去年の忘れ物をとりにきましたグレートエスケープ！ 天皇賞（春）を制しましたー！」

1着グレートエスケープ（滝）

2着メジロブライト（海津）

3着ステイゴールド（球磨川）

春の天皇賞を完勝し、6歳になってますます充実のシーズンを迎えたグレートエスケープ。陣営は海外遠征も視野に、現役最強馬の称号を引っ提げて宝塚記念に向かった。

XX98年 第39回宝塚記念（GI）

阪神／良 芝2，200m

宝塚記念では現役最強牝馬エアグルーヴ、そして重賞を連勝中のサイレンススズカが立ちほだかった。ファン投票、単勝人気共に1番に推されたグレートエスケープだった
が……

「サイレンススズカ先頭！ サイレンススズカ先頭！ それを追ってグレートエスケープ！ 梶田の左ムチがとんでいる！ ステイゴールド来た！ ステイゴールドが差を詰めてきた！」

そしてサンライズフラッグを追ってきている！ 外からシルクジャステイスとエアグルーヴが並んで上がってきた！

サイレンススズカまだ先頭、グレートエスケープが追いかけるがまだサイレンス粘っている、グレートエスケープが追う！

外からエアグルーヴ、エアグルーヴ、ステイゴールド！ しかしサイレンスだサイレンス！ グレートエスケープが襲い掛かるがやつぱりサイレンスだー！ サイレンススズカ結局逃げ切った！ グレートエスケープは2着！」

1着サイレンススズカ（西井）

2着グレートエスケープ（梶田）

3着ステイゴールド（球磨川）

惜しくもサイレンススズカに逃げ切りを許し、現役最強の名を完全にモノにすることはできなかつた。

次走の札幌記念を2着に終わると、天皇賞（秋）への出走を敢行。

そこに当然、サイレンススズカも参戦していた。

前哨戦の毎日王冠ではエルコンドルパサーとグラスワンダー相手に貫禄の逃げ切り勝ち。

まさに世紀の対決として、当時は頭文字をとってSG対決と謳われた。

しかし――

XX98年 第118回天皇賞（秋）（GI）

「サイレンススズカに故障発生です！　なんとということだ！　4コーナーを迎えることなく、レースを終えた滝カナタ！　沈黙の日曜日！

先頭はグレートエスケープ、まだ後続に10馬身以上の差がある！

グレートエスケープ先頭、オフサイドトラップが抜け出してくる、ステイゴールドが迫っているがグレートエスケープにはちよつと届きそうもない！

グレートエスケープ先頭、圧勝で今ゴールイン！　勝ったのはグレートエスケープ、やはり現役最強！　他馬をまるで相手にしていませんでした！」

1着グレートエスケープ（梶田）

2着オフサイドトラップ（柴畑吉）

3着ステイゴールド（球磨川）

サイレンススズカと他馬を置き去りにしながらの逃げ対決。その最中に襲ったサイレンススズカの故障発生という悲劇に対して、グレートエスケープは7馬身差の圧勝劇を見せつけた。

長距離だけではなく、中距離でも類い稀なスピードを披露してみせたグレートエスケープ。レコード決着の影響を考慮し、陣営は3連覇のかかるジャパンカップではなく、万全を期して有馬記念出走を選択。

古馬の王者として、一年の締めくくり、有馬記念を出走したグレートエスケープは、王者に恥じない走りを見せた。

XX98年 第43回有馬記念

中山／良 芝2, 500m

「さあ中山の直線に入りました！ 中山の直線は短いぞ！

セイウンスカイ、セイウンスカイ、グレートエスケープ上がってきた！

グレートエスケープが上がってきた！ エアグルーヴ、メジロブライト、グラスワン

ダー、グラスワンダー伸びる！

グラスワンダーが伸びてきてかわすか!? 届かない! グレートエスケープだ、グレートエスケープ先頭だ!

もう日本に敵は無し! 世界に飛び立つ逃亡者、グレートエスケープ先頭でゴールイン!

グレートエスケープです。これは来年が楽しみになりました。海外遠征へ夢が膨らむ完勝です。

2着はグラスワンダー、ここで復活の兆しを見せました」

先行して4コーナーで先頭に立つと、そのまま押し切りゴール。

まさに横綱相撲という危なげない競馬でこの年G I 3勝を飾った。

翌年、ついに陣営は海外遠征へ動き出す。イギリス、ニューマーケットの地に降り立ったグレートエスケープ。

初戦のG I 1レースでは完勝するが、次走のエクリプステークスでは大敗してしま

う。
そして迎えたイギリスの最高峰レースのひとつ、キングジョージ6世&クイーンエリザベステークスに駒を進めた。

X X 9 9 年 キングジョージ6世&クイーンエリザベステークス

アスコット／良 芝2，400m

相對するのは当時欧州最強とされたデイラミ。

グレートエスケープは日本からの実績馬だが、前走の敗戦で実力不足とされたか、少し離れた3番人気となった。

日本から多くの観光客が押し寄せ、アウエーでありながら大歓声がグレートエスケープに注がれた。

声援を背に受けて、伝統の最強決定戦、キングジョージ6世&クイーンエリザベスでグレートエスケープはさらに開花した。

「直線に入って滝カナタが追い出しました！ グレートエスケープにムチが入る！」

グレートエスケープ先頭、グレートエスケープ先頭！ デイラミが抜け出してくる！

デイラミ凄いい脚だ！

グレートエスケープに並んだ、グレートエスケープ頑張れ！ グレートエスケープ頑

張れ！

並んだまま、抜かせない、抜かせない！

グレートエスケープが粘っている！ グレートエスケープとデイラミが粘っている

！ 残り200、栄光まで200、グレートエスケープがもう一度伸びている！

欧州最強か、日本最強か！

首の上げ下げ、首の上げ下げ！ 内グレートエスケープ、外デイラミ！

抜け出せるか、抜ける、抜け出せ！

グレートエスケープ抜け出した！

僅かにグレートエスケープかーッ！

やった!! やった日本、やったグレートエスケープ！

ついに、ついに欧州最高峰レースに手が届きましたグレートエスケープ！ 歴史的快

挙です！

日本最強は欧州でも最強だ！」

1着 グレートエスケープ（滝）

2着 デイラミ（L・ベットーリ）

3着 ネダウイ（G・セガール）

ついに掴んだ世界一の栄光。

日本馬として世界最高峰のレースを制したことで、陣営はもう一つの最高峰レース、凱旋門賞への出走を決断。

4年近く走り続けてきた不屈のスーパーホースは、ここでさらなる真価を発揮しようとしていた。

XX99年 凱旋門賞(GI)

ロンシャン／不良 芝2, 400m

ついに迎えた大一番でグレートエスケープは3番人気で出走することとなる。

モンジュー、デイラミ、そして日本から同じく遠征し、フランスで好成績を残してきたエルコンドルパサー。

いずれも世界的名馬だが、凱旋門賞の栄光を掴むのは、ただ一頭。

調教過程も、気合も、6歳馬でありながら過去最高の状態となっていたグレートエスケープ。

焦がれ続けた世界最強の称号まで、あと一歩だった。

「——グレートエスケープが大外枠に収まります。最内枠にはエルコンドルパサー。夢は彼方フランスへ、さあ凱旋門賞スターああつとグレートエスケープつまずいた!

グレートエスケープは大きく外に膨らんでから中団へ取りつきます。

エルコンドルパサーは好スタート、2番手にジングスカンがつかまりました。エルコンドルパサー鞍上海老原は先行策を選択しました。

3番手にタイガーヒル、内に入るのはモンジュー。登り坂に差し掛かりつつ、エルコンドルパサーは4馬身ほど差をつけて逃げています。好位につくと思われましたが逃げています。

レゲラが外を上がって、そのうちにダルヤバ、モンジューは内で溜めています。

デイラミは中団やや後ろ、グレートエスケープはその外について第3コーナーにつき
ます。

馬群がつまってきた、第4コーナーを前にフォルスストレートに入ります。

エルコンドルパサー溜めている、良い手ごたえだ！ グレートエスケープはちよつと
後ろの方というところ！

タイガーヒルが上がって2番手、さあ、さあ、残り500mで直線を迎えました！

世界まで500、エルコンドルパサー先頭！ クリークダンスが突っ込んでくるがエ
ルコンドルパサー先頭だ！ 凱旋門賞まであと少し、頑張れエルコンドルパサー！

しかし後ろからモンジューだ、モンジューがきた！ モンジューがきた！ モン
ジューがきた！

さらに外から、外からグレートエスケープ突っ込んできた！

これはすごい脚だ！ 残り200、エルコンドルパサー差し返す！ モンジュー、グ
レートエスケープ！

グレートエスケープ抜け出した！ 日本ワンツになるか、グレートエスケープ先頭！
グレートエスケープだ、グレートエスケープです！

世界よ、これが日本が生んだ偉大なる逃亡者だ！

世界に名だたる競走馬たちの追跡を振り切って、大脱出だ！

グレートエスケープ先頭でゴールインッ！

やった日本ッ！ ホースマンの夢が、ついに、ついに、世界へ届きました！

グレートエスケープの活躍に、誰が文句を言うでしょうか！

やりました、グレートエスケープ！

滝カナタは大きくガッツポーズ！

1着 グレートエスケープ（滝）

2着 エルコンドルパサー（海老原）

3着 モンジュー（M・メモリアル）

ついに世界の頂点に、日本の努力の結晶が実った。

日本ではスターホースの快挙が連日報道され、誰もがこの偉業に酔いしれた。

この戦いで引退の予定だったが、JRAの要請に従い、ジャパンカップへ出走が決まる。

かつて栄光を掴んだ地で、グレートエスケープはファンに最後の勇姿を見せつけた。

相手は、凱旋門賞で争ったモンジュー。

そして、同厩舎の後輩、スペシャルウィークが最後のライバルとして立ちはだかった。

XX99年 ジャパンカップ（GI）

東京／良 芝2，400m

「先頭はグレートエスケープ！ 残り400でまだ2馬身のリードがある！

外から上がってくるのはスペシャルウィーク、モンジューもきた！ そしてハイライズ、インディージェナス！

先頭はグレートエスケープ、まだ粘って、スペシャルウィークかわしたかわした！
スペシャルウィーク先頭、グレートエスケープがもう一度差し返す！

内からインディージェナス、外からモンジュー、しかしスペシャルウィークだ、スペシャルウィークだ！ スペシャルウィークが先頭だ！

スペシャルウィーク先頭でゴールイン！

グレートエスケープは2着、世界最強は譲らないぞスペシャルウィーク！

まさに日本総大将、スペシャルウィークが勝ちました！ 勝利タイムはなんと
ご注目！

あのオグリキャップとホーリックスが記録したレコードを0.1秒更新する2.2
2.1です！ 文句なしの世界記録！

ワールドレコードを演出する高速逃げを見せながら、僅差の2着。

このレースを最後にグレートエスケープは4年にわたる長い競走生活に幕を閉じた。

日本のホースマンが描いた夢を現実に手繰り寄せた名馬、グレートエスケープ。

彼は種牡馬となった今でも、更なる名馬が送り出されることを、期待されている。

○○○

DVDの映像は短くまとめられていたが、それでも見終えたところには、映画を一本見終えたような感想を抱いた。

「はえー、すつごい……本当に長かったな……一本見ただけなのに半年くらいかかった気分だ……」

私はPCのそばに置いておいたポテチを食べながら、マウスを操作した。

関連動画にはグレートエスケープが関わる様々な動画が表示されていた。

「何から見ようかな……動画……うーんどうしようか悩むな……」

仕事はやめて暇なのだから、しばらくグレートエスケープを追いかけよう。

私はマウスを忙しく動かすのだった。

名バ列伝 その5

私は動画欄のリンクに気になるタイトルを見つけた。

「滝カナタTV……グレートエスケープ特集?」

滝カナタTVとは、インターネットでのみ放送されている、競馬番組のこと。

競馬の開催が終わるごとに放送され、滝カナタが競馬の内容やGIレースを振り返ったり、ゲストのジョッキーや調教師とトークする。

ウマ娘の元になった競走馬がピックアップされた動画のアーカイブは再生数がやたら多いらしい。

「見てみるか……あ、会員登録が必要なのね。まあ、いいか。月のお金くらい……」

会員登録を済ませると、早速グレートエスケープ特集回を再生する。

SP回らしく内容盛りだくさんのようで、オープニングの間に飲み物を持ってこるとこした。

××
○オープニング

——日本のホースマンにとって、凱旋門賞は長らく悲願だった。

多くのサラブレッドが挑んでは、届かなかったその舞台に、初めて到達した馬がいた。その馬の名前は、グレートエスケープ。

滝力ナタを鞍上に、世界最高峰の舞台へ届いたスターホースは8月26日にこの世を去った。

そんなスターホースを偲び、今回はグレートエスケープスペシャルとして、滝力ナタとゲストの二人で振り返る。

「——カナタさん、こんにちは」

「こんにちは。お疲れ様です。なんだかちよつと緊張してる？」

「少しだけ。今回はスペシャルですから。本日の滝力ナタTVは先日この世を去った名馬グレートエスケープ特集ということで、やっていきます。」

司会は私、マジテレビアナウンサーの飯原直樹でお送りさせていただきます」

「今日はゲストも来ているんだよね」

「そうですね、早速こちらに来ていただきましょう。今回のゲストはこちらの方です。」

通算GI勝利数25勝、そしてグレートエスケープに騎乗してGIを4勝した主戦騎手、梶田健二さんです！」

「どうも。よろしくお願います」

通算GI勝利数25勝、グレートエスケープの主戦騎手としてGIを4勝し、初めて

のダービー制覇もグレートエスケープと達成したトップジョッキー、梶田健二。

今回の滝力カナタTVは梶田騎手と共に、名馬グレートエスケープを振り返る。

「早速ですが……カナタさん、梶田騎手、両名共に馴染み深い馬、グレートエスケープ号が先日亡くなられたということ……まずは、カナタさんから。」

知らせはどのように……？」

「そうですね。ちょうど夏の開催で北海道にいて、亡くなる1週間くらい前に健二と一緒に会いに行ってるんですよ。歳の割にすごい元気で……なあ？」

「すごい元気でしたよ。俺とカナタさんを見つけると走ってきて、筋肉もムキムキでしたから。まさか1週間で亡くなるとは……」

「牧場関係者によると老衰、ということ放牧地で亡くなっているところを発見されたようです。」

その後の競馬開催では追悼競走となり、梶田騎手は札幌2歳Sを勝利。

そしてその馬がグレートエスケープのラストクロップにあたるグレートチャンプだったと」

先日の札幌2歳ステークス他、メインレースは副題にグレートエスケープ追悼競走が冠された。

そこで梶田騎手が騎乗したグレートエスケープ産駒のグレートチャンプが見事勝利。

初重賞勝利を飾ると共に、父への手向けとした。

「まず……グレートチャンプはどんな馬でしょうか。梶田騎手、いかがでしょう」

「見た目はグレートエスケープを一回り小さくしたような、よく似ているんですけど性格やレースの適性は全然似てないですね。

父親はレースに対する理解も高かったんですけど、ちよつとレースを覚えきつてないね。

集中力がないからすぐあつち向いてこつち向いて……」

「新馬戦は同じレースに乗ってたけど、健二は返し馬であつちこつち行つてたもんな」

「はははは。言うことあんま聞かないっすね。

でもポテンシャルはあります。競馬を覚えてきたら来年のクラシックが楽しみになるかな。

正直グレートチャンプとクラシックに挑みたい気持ちはあります」

「ええ、ええ。そうですね。グレートチャンプはグレートエスケープと同じ牧場、同じオーナー、そして調教師は黒井厩舎で調教助手だった白村調教師と」

「チーム『グレートエスケープ』って感じだよな」

「そうっすね……いいんですか、グレートエスケープの話しなくて」

「あ、失礼しました。後々グレートチャンプのこともお話するとして、まずグレートエス

ケープのデビューから」

○デビュー前

「梶田騎手は黒井先生から依頼を受けてとうかたちでグレートエスケープに？」

「そうです。期待してる馬がいるから最終追い切りから乗ってくれって……当日黒井厩舎に行ったら、ホウキとチリトリを渡されたんですけど」

「え、なんでまた」

「ダービージョッキーになりたかつたら掃除しておけ、って言われて……」

「黒井先生も独特やからな」

「それは黒井先生の癖のようなものなんですか？」

「後から聞いたらちよつと調教の準備が遅れてたから時間潰せってことだったらしいっすね。なんで掃き掃除なのかわかんないけど」

「それで……当時グレートエスケープのデビュー前の評判というのは、いかがでしたか？」

「黒井厩舎では2歳で一番期待されてたよ。実際良い馬だったし。ただGIまではいけそう、って雰囲気でもなかったかな。」

カナタさんはダンスパートナーの追い切りに乗ってたから、知ってますよね」

「そうだね、ただ丁度オークスの追い切りのときに乗ってたんやけど、そこでグレートエ

スケープで併せたんだよね。

GI狙える馬と新馬を併せるから『えっ!?』ってなったけど、グレートエスケープは負けないくらい走ったからね……そこでこの馬はすごいかな、とは思った」

「デビュー前から大器の片鱗は見せていたんですね。そして新馬戦は3着、未勝利戦で勝ち上がり、と」

「ちよつと新馬戦は競馬に慣れてなかったね。でも未勝利戦では落ち着いていて、あつさり勝った。

そこから加速的に馬が良くなっていったかな」

○クラシック

グレートエスケープは未勝利戦を勝利すると、GIII、GIIと連勝し、皐月賞へ駒を進めた。

このときには1番人気に推されるなど、実力は認められていた。

「皐月賞では1番人気も大敗……これはやはりゲートを出て躓いたのが敗因ですか？」

「そうだねー。馬も競馬を理解してたから、やばい！ っつのがわかったのかな。そこからもうかかりっぱなしで……この皐月賞は本当に勿体なかった」

「梶田騎手もそう感じるんですね」

「ダンスインザダークもバブルガムフェローも回避しましたからね。これはもう勝たな

きやなって気持ちがありましたよ……カナタさんはダンスインザダークだったから乗ってなかったですよね」

「その日は阪神乗ってた。ちようどジョッキールームにいて、阪神競馬場でも『ああ』って声出てた」

「はははは、まあ一番人気でしたからね」

「そこでは大敗してしまいましたが……次の日本ダービーに対してはどのような思いが？」

「そりゃあ勝つしかないって思ってたよ」

次走の日本ダービーでは皐月賞を回避した滝カナタが騎乗するダンスインザダークが1番人気。

グレートエスケープは4番人気に推された。

グレートエスケープはハナを切ると快走。直線ではフサイチコンコルドとダンスインザダークが猛追するが、振り切ってレコードタイムでダービー制覇を決めた。

これが初めてのG1制覇だった。

「映像にも出ましたが……父アイネスフウジンノタイムを更新するダービーレコードと。」

梶田騎手、如何でしたか」

「安堵しましたね。デビュー時には重賞は勝てると評判でしたけど、次第に馬がすごい成長を見せてくれたので。」

これはGⅠ取らなくちゃと思いましたがね。このダービー制覇でグレートエスケープも一皮剥けた感じがありました。

ある意味覚醒のポイントでもありましたね」

「カナタさんはこの時ダンスインザダークに騎乗し、3着。初のダービー制覇に期待がかかっていたと思いますが、如何でしたか」

「我ながら完璧なレースをしたと思うんですよね。」

勝ち馬のグレートエスケープを見ながら、直線では仕掛けて……そこからさらに伸びましたから。

この時は……このレースで勝てないなら勝てる馬はいないんじゃないかな？ っと思いましたよ」

「フサイチコンコルドに差されちゃいましたね」

「そのこと頭に入らんかったわ」

「カナタさんも、驚きの強い勝ち方だったんですね。梶田騎手も仰っていましたけど、グレートエスケープはここでさらに一皮剥けたんですね」

「普通はダービーがピークなんですけどね。ダービーを勝ったことで馬が勝利というこ

とを理解するようになりました。

あの馬はすごい賢かったですから」

「確かに賢かったよな。デイープとか、キタサンブラックみたいに賢い馬はいるけど、ちよつと一線を画した賢さがあつたよね」

「普通のこと言つたら変なんですけど、賢い馬つていうのは悪いことを注意したらすぐやめるんですよ。」

でもグレートエスケープは注意したらその場ではやめるんですけど、見ていないところでやるんですよ。

人のルールがわかつてるんでしょうね」

「それはまたすごいですね！ 競馬サークルでも有名ではありましたが、本当だったんですね」

「レースでは真面目ですけどね」

ダービー勝利、これはただのダービーだけでなく、陣営には特別な想いがあつた。

オーナーの橘馬奈氏は若い身でありながら末期ガンにより余命幾ばくもない状態だった。

愛馬のためにも負けられないと、陣営の気合いは満点だった。

「この勝利はオーナーの橘氏にも捧げる勝利でしたね」

「そうですね、この時もう……かなり、体調を崩されていた時ですから。

グレートエスケープは橘オーナーに凄く懐いていましたし、勝てて嬉しいと思いますよ。オーナーが亡くなってから寂しそうにしていましたから……」

「ふらつくオーナーを支えるグレートエスケープの写真は有名ですもんね。テレビで何度も放送されていましたし……」

「本当にいい馬ですよ。僕も負けたあとは正直、仕方ないのかなとも思いました。流石に口に出したら怒られるので、当時は言いませんでしたけどね」

日本ダービーを勝利した後、グレートエスケープは休養に入る。

その後、復帰戦の神戸新聞杯を快勝すると菊花賞へ駒を進め、一番人気に推された。

しかし菊花賞では滝カナタが騎乗するダンスインザダークの猛烈な末脚に屈して惜しくも2着に終わった。

「この時のダンスインザダークは強かったですね……映像に出てるカナタさんもめっちゃ喜んでる」

「いやー、ダービー勝てなかったし、クラシックは勝たなきゃって思いが強かったからね。

グレートエスケープに真つ向勝負を挑んで勝てたのは嬉しかったよ。

その後脚を悪くして引退しちゃったけど……」

「正直、黒井厩舎では一番チャンスがあるのは菊花賞って話でしたから。負けたのは悔しかったです」

「梶田騎手は直線で、グレートエスケープの手応えは如何でしたか？」

「『勝ったわこれ！』でしたよ」

「はははは……それだけ手応えがよかつたんですね？」

「完璧に乗って、グレートエスケープも応えてくれましたから」

「ダービーでダンスインザダークに乗ってるとき、それは俺が思ったわ」

「完全に逆になりましたね。でも……これ言って怒られないかな」

「どうした？」

「ダンスインザダークが怪我しなくても、古馬になってからは負けなかつたと思いますよ」

「まあそうやね。菊花賞では勝てたけど、やっぱり正面きつて戦うにはグレートエスケープの方が強いと思うよ。古馬になってからの方がグレートエスケープは強かつたもんな」

「度々負けちゃいましたけどね」

「御二方の間でもグレートエスケープの方が強い、という見解なんですな」

「やつぱりね……ダンスインザダークもいい馬ですけどね」

「3歳春はなんだかんだ勝てなかったからね」

○ジャパンカップ

このあとグレートエスケープは有馬記念ではなくジャパンカップを選択。

1番人気に推されると凱旋門賞馬エリシオ、キングジョージ勝利馬のペンタイア、後にドバイWCを制覇するキングスピールなどの海外の強豪馬を退け勝利。

内国産馬として史上初めて、3歳馬がジャパンカップを勝利した歴史的なレースとなった。

「ジャパンカップでは見事逃げ切り勝ちでG12勝目。このときのメンバーがエリシオにキングスピール、ペンタイアと、錚々たる顔ぶれですね」

「凱旋門賞馬にキングジョージに……これだけのメンバーはジャパンカップに中々来ませんからね。カナタさんはこのレース乗ってないですよね」

「このときは多分……京都にいたんじゃないかな。このレースも一緒に走ってなかったわ」

「ははは……梶田騎手、このときは錚々たるメンバーの中で1番人気でしたけど、いかがでしたか」

「正直ダービーの時よりは気が楽でしたね。グレートエスケープも調子が良かったので、スタートが問題なければいつものレースをすればいいだけだったから」

「最後の100メートルくらいから追ってないもんな」

「この馬の持ち味が発揮されましたね。折り合いについて、自分のペースで前を走つたら勝てる馬はそんなにいないですね。」

特に東京競馬場みたいな大きなコーナーで、直線が長いと力が発揮しやすかったです」

「やっぱり、グレートエスケープは成績も東京競馬場の成績がいいですけど、梶田騎手も感じるころがありましたか？」

グレートエスケープの東京競馬場成績「4—1—0—1」

「ウオッカとか東京競馬場得意だったのは有名ですけど、グレートエスケープもそうでしたね。やっぱり気合いが入ったんでしょう。」

馬って本来繊細で怖がりのはずなんですけど、大歓声とか聞くと気合いが入るタイプだったんですよ。」

そのせいでかかるときもありましたけど」

「レースをよく理解している馬……だったね。強い馬は総じて賢いですね」

○4歳シーズン

グレートエスケープは翌年、天皇賞・春でマヤノトップガンなどに敗北。さらに骨折で春のシーズンを棒に振ってしまう。

復帰は京都大賞典となったが、ここで滝カナタが初騎乗となった。

「4歳時の京都大賞典ではカナタさんはグレートエスケープに、梶田騎手はシルクジャステイスに騎乗していましたが……まずカナタさん。」

グレートエスケープと初コンタクトというのは、如何でしたか」

「そうですね……イメージとしては結構ガツンとかかる馬なのかな？　と思っていましたけど、健二からは大人しくて言うことをしっかり聞いてくれる馬と聞いたから。」

調教では最終追い切りで初めて乗りましたけど『これはすごいな』って思いました」

「カナタさんにとって、すごくいい感触？」

「その年のダービーでスペシャルウィークで勝たせてもらって、さらに夏には札幌記念でエアグルーヴに乗ってたんですよ。」

その2頭と比べても『ちよっとこれに勝てないかもな』と思ったからね……」

「カナタさんが言うから相当でしょうね。俺は年内シルクジャステイスの先約があったて、そっちを優先したんですけど、京都大賞典の本馬場入場やパドックでは『やばい』と
思いましたね」

「それは、勝てないという意味で？」

「カナタさんに盗られるって思ってた」

「あははは」

絶好の状態で臨んだレース。

しかし直線では持ち味の粘りは見られず、結果は最下位の12着に終わった。

これに対して勝ち馬であるシルクジャステイスに騎乗していた梶田健二と、グレートエスケープ鞍上の滝カナタは。

「結果的にはまさかの最下位でしたが、グレートエスケープはこのとき、どういう状態で」

「脚とか故障はなかったですね。ただ直線に入ったら手応えが急に悪くなって……粘るところを全く粘れなかったから、なんだろうなってみんな首傾げてましたね」

「僕はシルクジャステイスであっさり躲して勝ちはしましたけど、終わったあとすぐカナタさんに聞きに行っちゃいましたからね」

「ケンジはインタビュール終わったらすぐ『グレートエスケープは故障じゃないですよね？』って聞きに来たもんな」

「二回目じゃないかと心配してましたよ」

このあとグレートエスケープはジャパンカップを勝利。翌年は滝カナタとのコンビで阪神大賞典から始動した。

阪神大賞典を勝利すると天皇賞・春へ。

そこで後続を完封する横綱相撲で、グレートエスケープは4つ目のGIタイトルを奪

取した。

○5歳シーズン

「天皇賞・春は見事に先行押し切り。梶田騎手は引き続きシルクジャステイスに騎乗していましたがどうでしたか」

「やっぱり強かったですね。シルクジャステイスは最後は一杯になってしまったけど、グレートエスケープは引き離していききましたから。メジロライトやステイゴールドも相手にしていませんでしたね」

「カナタさんは前走に引き続き騎乗していました。前年と比べて乗り味といますか、変化はありましたか？」

「やっぱり馬が直線でもスピードが落ちなかったですよ。この時は先行して、もう坂の下りに合わせて手綱を緩めたら自分から行って……本当の実力を初めて知った感じですね。」

阪神大賞典はまだ余裕を残していたし」

「レースでは先行して、そのまま後続を振り切るといって強い勝ち方ですよ。このレースの後、カナタさんはメジロマックイーンの名前を出しましたね」

「そうそう。体格とかはあまり似てないけど、適性が似てるなあって。メジロマックイーンよりはステイヤーと言うより、スピードに対応できる方でしたけど」

「この時はメジロマックイーンに比肩するような名馬だと、カナタさんは感じたんですね」

次走は宝塚記念。

鞍上は梶田騎手に戻り、エアグルーヴやサイレンススズカらと三強を形成した。

結果はアタマ差の2着。稀代の逃亡者に対して、グレートエスケープは惜しくも届かなかった。

「宝塚記念。ここでやはり名前が出てくるのは、サイレンススズカ。カナタさんも思い出深い馬だと思いますが、この時鞍上は西井克洋騎手で。カナタさんはエアグルーヴ、梶田騎手は再びグレートエスケープと。」

今こうしてみるとすごい豪華なメンバーですね。

さらにはステイゴールドやメジロドーベルなんかもいて」

「まあ、面白いときでしたよね。グレートエスケープが1番人気でしたけど、サイレンススズカやエアグルーヴも変わらないくらい人気でしたよね」

「梶田騎手は人気こそ分け合ったとのことでしたが、この時の自信のほどは」

「負けられないって思っていましたよ。いやほんと……黒井先生（※グレートエスケープの管理調教師）から『結果残せなければ腹を斬れ』と言われましたから」

「はははっ。ケンジは乗せてくださいってお願いしに行っただっけ？」

「お願ひしますつて恥を忍んで言つたらそう言つて……でも優しい人ですよ。普通乗せないですからね」

「シルクジャステイス選んだんだもんな、一度は」

「ああ、やつぱり一度ほかの馬に乗つてしまうと、ちよつと難しいことがあるんですね」
「普通はないけど、グレートエスケープほどの馬でしたからね。怪我でちよつと依頼とか予定が合わなくなつてしまつたのもあるんですけど」

「負けられない思いで臨んだ宝塚記念ですが、グレートエスケープは2着」

「やつぱりサイレンススズカが強かつたですね。最後は届くかなと思ひましたけど、捉えきれませんでした」

「カナタさんは如何でしたか、宝塚記念は」

「僕はもう……エアグルーヴの手応えがあまりよくなくて、最後は少し苦しくなつてたから……早めに捉えようとして動いたのに、前の方がいい脚使つてるんですから、そりゃ勝てないですよ」

「結果的にサイレンススズカが初GI制覇……すごいレースでした」

グレートエスケープは札幌記念でエアグルーヴと衝突。レコード決着となつたレースではハナ差で惜しくも敗れる。

次走は天皇賞・秋となり、再びサイレンススズカとの激闘が期待された。

しかしサイレンススズカは競争を中止。

グレートエスケープはそのまま逃げ切り、史上2頭目の天皇賞春秋連覇を達成したが、涙無しには語れないレースだった。

「まずは梶田騎手ですが……レース前、やはりサイレンススズカは意識していましたか？」

「そうですね、東京2000mでグレートエスケープに勝てる馬は当時はサイレンススズカくらいだと思っていましたから。

自分のペースで逃げると思っていたぶん、グレートエスケープもそのペースについていかせようと思いました」

「結果的にはサイレンススズカに故障が発生し、中止する中でそのまま着で入線しました。レース後はやっぱり異様な雰囲気だったように感じましたけど……」

「やっぱり、どよめいていましたよ。僕もどうなったのかすごく気になりました……グレートエスケープも、やっぱり勝ったときの雰囲気とは違ったんでしょね。」

「普段は勝ったあとは堂々としているんですけど、すごいキョロキョロしてました」「カナタさんとしては、やっぱり語りづらいく所もあると思うんですけど……」

「まあ、いい馬でしたし、思い出の馬でもありますから。この時は本当に絶好調でね……グレートエスケープも千切れると思いました」

「展開予想としては如何でしたか」

「予想も何もなかったですよ。もう、スズカのペースで逃げるだけでしたから。付いてきた時は『おっ?』と思いましたけどね」

グレイトエスケープは天皇賞・秋を勝利すると、ジャパンカップを回避して有馬記念へ。

ここでは1番人気に推され、ラストランの予定のエアグルーヴや、古馬戦線で戦ってきたメジロブライト、この年の二冠馬セイウンスカイや2歳王者グラスワンダーを相手に先行して押し切る競馬で勝利した。

「では梶田騎手……有馬記念は前年のシルクジャステイスに続いて2連覇。

このときは強い相手も多くいましたが、1番人気。レース前からは黒井調教師の自信を持った発言が多くありましたが、梶田騎手としては如何でしたか」

「中山芝2500mがトリツキーなコースですから、正直ジャパンカップの方がよかったですかね、とは思いました。

ただ、この時は心身共に充実していましたし、小回りの中山でもやれるという自信はありました。

黒井先生の自信満々な発言には『大丈夫ですか!?』ってプレッシャー感じていましたけどね」

「すごい自信満々だったよな……俺はエアグルーヴに乗ってたけど、実際強かったよな。ディープリンパクトみたいなわかりやすいタイプではなかったけど、すごく安定感があつた。」

わかりやすく王道の競馬ができる馬でしたからね……」

「映像では内側の芝は避けて……このとき中山競馬場の芝コースは内側がすごい荒れていたとお聞きしていますが、セイウンスカイもかなり内側から離れて逃げていますね。グレートエスケープのレースプランなどはあつたんですか？」

「そうですね、これでもいいんじゃないですか。もつとスルスル逃げるならしつかり付いていこうと思いましたが、セイウンスカイも楽に逃げられないですから。」

いいポジションをとって、折り合いをつけたらあとはグレートエスケープに頑張ってもらった形ですね。」

かからない馬なので、本当に楽ですよ。ちよつと正面スタンド前の歓声では行きたくない素振りがありましたけど、自分でこらえてましたから。」

正直、ずっと乗ってきてこのときのグレートエスケープが一番良かったかもしれないですね」

「5歳の年末で最高の状態と……カナタさんはエアグルーヴに騎乗していましたが、グレートエスケープに対しては」

「マークしようとしていましたけど、ちよつとエアグルーヴも途中で落鉄してしまったのでついていけなかったですね。

早めに仕掛けたのもあって、最後は苦しくなりましたし……不運ではありましたがね。ただ、これだけ勝つ馬と真つ向勝負し続けた牝馬なんてずつといまませんでしたから……グレートエスケープが活躍した分だけ、エアグルーヴの凄さが伝わるんじゃないかな」

「直線ではセイウンスカイを躲し、グラスワンダーとメジロプライトが追い込んできますが寄せ付けず勝利。

グラスワンダーもよく復活しましたが、抑え切りましたね」

「グラスワンダーも強かったですけどね、グレートエスケープも前に付けてあれだけの上がりを使っていましたから。

後ろの馬には苦しい展開でしたよね。正直道中は楽に走れたので、後ろはあまり気にしませんでした」

「これでグレートエスケープはG I 6勝、翌年は凱旋門賞へ進むことになりました」

○海外遠征

グレートエスケープは6歳シーズンも現役を続行。

陣営は欧州長期遠征を決定した。

初戦のプリンス・オブ・ウェールズSを快勝したが2戦目のエクリプスSでは7着と大敗。

不安を残しながら、イギリス最高峰のGIレース、キングジョージ6世&クイーンエリザベスSに出走した。

「海外遠征は本来梶田騎手が騎乗する予定でしたが、直前に落馬して大怪我、そのため滝カナタさんが騎乗することになりました」

「健二ほんと持つてないよな」

「ちよ、やめてくださいよ……元々欧州のジョッキに乗ってもらう予定もあつたらしいですけどね」

「メモリアルとか、フランキー……ベツトリーですね。バリエも乗りたいとか言つてたかな」

「その中でオフアーを頂いたので本当に光栄なことだったので嬉しいんですけど、落ちました」

「馬からね」

「陣営もやはり一番馬をよく知る梶田騎手で、というところだったんでしようが……そこからカナタさんへオフアーがありましたけど、欧州の騎手より優先で、ですか」

「馬主の橘オーナー……亡くなったオーナーの妹さんなんですけどね。『グレートエス

「ケープはフランス語とか英語わからなさそう」ってことで、日本人で騎乗経験がある僕にオファーが来ました」

「あ、そういう……とてもユニークなオーナーで……」

「ちよつと天然なところがある方でした。でもグレートエスケープのことをすごい大事に思っていて……勝った時はすごい喜んでいましたからね。」

「欧州でもぜひお願いします、と」

「そこで迎えた当時GIIのプリンス・オブ・ウェールズSは快勝したものの、エクリプスSで敗北と……カナタさん、これはやはり欧州の馬場が合わないとか、そういうところでしょうか」

「いやー……そんなに馬場は苦にしてなかったんじゃないかな。」

黒井先生や当時調教助手の白村くん……今は調教師になりましたが、白村さんはイギリスに来たばかりのときはすごい苦労しながら走っていた、と言っていましたけど、そのときは楽に走っていましたからね。」

「エクリプスSでは結構引つかかってしまつて……僕も控えた競馬をしようと思つていたのもあつて……ちよつとチグハグになつてしまつた結果、直線では脚が残つてなかつたですね」

「控えて、というのは逃げるよりも先行した方が、といったところでしょうか」

「無理にハナを取ろうとは思ってなかったの……他にいく馬がいたから控えようと思いましたが、グレートエスケープが行きたがってしまいましたね……まあ僕もちよつと逃がすか逃がさないか中途半端になりました……下手に乗っちゃいましたね」

「梶田騎手としては、このレースいかがですか」

「いや……あまり言えないですよ、カナタさんが乗ってるのに」

「内心、下手くそって思ってるんじゃない？」

「いやいやいや！ やつぱり実際に乗らないとわからないですから……テレビで見ましたけど、直線で『あー』って言ったのは覚えてます」

「やつぱり落ち込みましたか」

「イギリスの……それも中距離のGIですからね。やつぱり偉業達成の瞬間を見たかったですよ」

「いやあ……ごめんなさい」

「あはははは！」

○キングジョージ6世&クイーンエリザベスステークス

「そして迎えたキングジョージですが、グレートエスケープは3番人気」

「前走あれだけ負けた後にしては評価してもらえてますよね。調教もちよつと暴走したりと、珍しいところを見せましたけど……状態はそんなに悪くないですよ？」

「僕もスポーツ新聞で知りましたけど2面か3面かな? 『グレートエスケープ、ニューマーケットで爆走! カナタ落ちかける!』なんて見出しでしたから、エスケープはアカンちやうかなとか思いましたよ」

「でもカナタさんや黒井調教師の間では悪くはなかったと」

「そうですね……グレートエスケープもイギリスの馬場の走り方を理解してきましたし、レースを使ったことでやっぱり闘志とかもあるんでしょうね、興奮しすぎず、かといって静かになりすぎず、いい塩梅でレースに入れました」

「キングジョージは映像とともに振り返っていきましよう。スタートはどうですか、良いように見えますが」

「ロケットスタートでした。やっぱりグレート上手いよな?」

「グレートエスケープはグレート上手いですよ。ただ大事なところでコケたりするだけで、タイミングとって出ようとしていますから。常に100%のスタートを狙った結果、馬場が悪いと足を滑らせたりするんでしょうけど」

「グレートエスケープは非常にグレートが上手いと……それもあつて逃げ、あるいは先行で結果を残しているんですね」

「前に行けるなら前にいた方がいい馬ですから」

「道中は緩まず、早過ぎず、平均ラップですね。カナタさんは道中どのように気をつけて

乗っていましたか?」

「時計が速くなるとテイラミがいましたから、それだけを気をつけていましたね。瞬発力勝負にならないよう、ポジションは早くに上げられると思ってましたし」

「なるほど。梶田騎手でしたら如何ですか、このキングジョージでは」

「当時の僕なら少し後ろを離して逃げたかもしれないですね。付いてくるかどうかにもよりますけど。後ろの馬がね」

「ああ、なるほど」

「梶田先生の御眼鏡に適う騎乗ができたかどうか」

「変なことと言うと番組の後呼び出されるからノーコメントで」

「ははは……」

「でも今の僕だったら……逆にテイラミにびったり合わせちゃうかもしれないね。日本の馬場では前でやった方が確実だったのでそれをしましたけど、欧州ではそこまで切れる脚は繰り出せないのでから」

「今の梶田騎手ならマークする形で進めて、差し切る戦法を取るんですね。」

最後の直線ですが、テイラミとの一騎打ちでした」

「最後の直線は気合い入りましたよ……併せる中でフランキーとぶつかるくらいでしたし、何度かお互いの肘とか腕が当たって追いながら『フランキーごめん!』『カナタご

めーん!』って言い合っていました」

「ぶつかり合うほど激しいスパートだったんですね。最後の直線ではどうでしたか、手応えは」

「いやあ、勝ったなと思いましたよ。クビ差出てるのはわかってましたし、クビだけ前に出るようなタイミングでしたから」

「あー、そこまでわかるものなんですね」

「こんなこと言ってますけど、カナタさんはレースの後『首の上げ下げのタイミングを上手く合わせられたわ』って誇ってましたから」

「やめろ健二。たまたまですよ。たまたま……ただ、グレートエスケープはそれだけ強い馬でしたから。やらないとね、これグレー（これぐらい）、と」

「ははは」

「わはは」

○凱旋門賞へ

「凱旋門賞は不良馬場で行われました。相手には先程のデイラミに加えてエルコンドルパサー、モンジュール、クロコルージュといった名馬がずらりと並んでいます……流石の凱旋門賞ですね。」

人気を背負っての出走ですが……カナタさんとしては、ホワイトマズル以来で日本調

教馬に騎乗して初の凱旋門賞でした」

「いやー、勝っちゃいましたね」

「いきなりそんな……このときの心情としては如何でしたか」

「緊張とかはあまりなかったですね。むしろキングジョージの方が緊張してましたし、馬に気づかれたくらいですから。」

「前走勝って、もしかしたら勝てるかもっていうワクワクの方が強かったですねー……スタートした瞬間は『ええっ!?』って思いましたけどね」

「カナタさんとグレートエスケープが出遅れた時すごかったですよ、日本では日曜の競馬開催終わったから後輩呼んで家でレースを見てたんですけど……全員が『あぁーっ！』って叫びましたから」

「日本中が叫んだやろなあ……」

「それだけ期待を背負ってましたし、逃げ馬としてみんな考えていますから出遅れとこののは、かなりきついですよね」

「俺たちはすぐにエルコンドルパサーの応援に切り替えました」

「薄情な後輩ですよ」

「結果的に中団から……これはもう末脚にかける、という判断ですか」

「あまりスローにはなっていないませんでしたし、ちよつとスタート後にかかりそうになり

ましたけど、すぐに落ち着きを取り戻しましたから……これなら脚を溜めよう、と思って追走しました」

「グレートエスケープは逃げ、或いは先行で結果を残してきましたけど、中団での競馬とというのは如何でしょうか」

「賢いし、馬群も苦にはしないですからね。全然ダメってことは無いです」

「ただ当時のサンデーサイレンス産駒みたいな瞬発力……最高速度までの加速力はちよつと負けてしまう場面がありましたね。」

「やっぱり前で進めた方がいいんですけど、このときの凱旋門賞みたいに捲っていくレースもできますよ。最高速度はちやんとあるので」

「では勝算がないわけではなかった、というわけですね。レースはエルコンドルパサーが単独で逃げて、モンジューは内側、デイラミはグレートエスケープのすぐ内側で控える展開です。このまま直線に向かつて……フォルスストレートでするする上がってますね、グレートエスケープは」

「軽く促すだけでじつくり加速してくれましたよね。大抵の馬はがっんと引つかかるのを抑え続けるか、全然行こうとしない馬に何回もゴーサインを出すかのどちらかなんです。グレートエスケープは合図を出すとスツと前に出てくれますね」

「テレビで見ても『手応えいいけどいけるんじゃないか!』って僕らもまた盛り上がり

ましたよ。

直線ではエルコンドルパサーが粘っていたし、日本馬が勝てる！ と思いましたが……」

「最後はモンジューがすごい脚を使ってくれましたね。不良馬場であるにも関わらずこの走り……しかしさらに外からグレートエスケープが伸びてきました。

そして最後はクビ差捉えきって勝利、エルコンドルパサーも差し返して2着と日本調教馬がワンツーを達成しました。

カナタさん、凱旋門賞の最後はどうでしたか」

「嬉しかったですねー。本当にもう、最後はグレートエスケープが頑張ってくれたって感じでした。

「これまで逃げと先行でやってきた中で差した訳ですから、本当にすごい馬ですよ」

「当日はもうお祭り騒ぎだったんじゃないですか？」

「いやあ、グレートエスケープが完全に疲れきったので、ささやかな食事会をしたらすぐ解散になりましたね。

世界一になった割にはこじんまりとしましたけど、僕は好きでした。

その日のワインは美味しかったです」

「カナタさんこんなこと言ってますけど、この日はベロベロになって次の日の飛行機を

寝過ごしてますからね」

「あつ、そうだったんですか!？」

「まあ……朝起きないのはよくあるんですけど、次の日もすごい気持ち悪かったですから、あんなに飲んで気分悪くなったのは……サイレンススズカの天皇賞・秋と、デイープリンパクトが負けた有馬記念くらいですよ」

「じゃあこの日は勝利の美酒ということ……盛り上がりましたか」

「凱旋門賞に出ていたエルコンドルパサーに乗っていた海老原くん……同級生だけあつてね、彼は優しいですよ。二日酔いでダウンしてる僕と一緒に残って帰ってきてくれましたから」

「競馬学校時代からの同期ですけど……助けられてしまいましたね」

「海老原くんからは『潰れたいのはこっちだよ』と怒られました」

「梶田騎手はご自宅でのことでしたが、後輩の騎手たちと盛り上がりましたか」

「それはもう。次の日オフなものもあってどんちゃん騒ぎしました」

「誰が来てたの？ 遊四郎（滝力ナタの弟）がいつてたのは覚えてるけど」

「確か……勝山星樹、前川浩児、御幸英美……あたりだったかな？ 本当に若い後輩連中がメインだったですね」

「遊四郎がケンジの奥さんにすげえ怒られたって言っていました。全員怒られたらしい」

「騒ぎすぎましたね。テキより怖かったです」

「でもそうなるくらいは快挙ですからね……グレートエスケープはこの凱旋門賞勝利でラムタラ以来の凱旋門賞とキングジョージの同一年制覇。これも話題になりましたね。

カナタさんはどんな感想ですか」

「日本の馬がイギリスとフランスの最高峰のレースをダブルで制覇するわけですからね。本当に幸せなことだなと思いますよ。

それでもあれからまだグレートエスケープに続いて凱旋門賞を勝つ馬は出てきていませんから。」

デイーピンパクト、メイショウサムソンに乗ったけど勝てませんでしたし、オルフェーヴルなんかも勝てなかった。

またグレートエスケープみたいな馬に出会いたいです」

「梶田騎手は如何でしょうか」

「騎手をやっていて、未だにグレートエスケープに乗れなかったのは心残りですね。

正直、数年前とかは騎手やめようと思う時もあったんですけど……また凱旋門賞に挑む時まで、と思って頑張っています。

早くグレートエスケープよりもすごい馬に乗りたいです」

「ありがとうございます。御二方からとても熱いコメントを頂いたんですが……まだ、

引退レースのジャパンカップが残っているんですよ」

「あつ、そっか」

「完全に終わりの流れでしたよね」

「ちゃんと最後までやらせていただきます。ラストランとなったジャパンカップでは、スぺシャルウィークと激突しました——」

×× シヤパンカップのことを最後に語られてから、滝カナタTVはグレートエスケープの紹介を終えた。

きつと、全てを語った訳では無いのだろうが、二人はグレートエスケープが好きだったことは間違いないのだろう。

グレートエスケープを語る時は、なんだか楽しそうな表情に見えたから。

「うーん……種牡馬としては死んじやったんだもん……グレートチャンプは……あつ、一昨年にそのまま凱旋門賞まで勝っちゃったんだ。」

「すげえな……」

私はウマ娘として実装されたグレートエスケープのファンアートが投稿されているSNSを見て回った。

見る度に、グレートエスケープに興味が惹かれていくのを感じた。

「……次はどんなものを調べようか」

「いつそのことグレートエスケープの故郷まで行ってみようか、と北海道行きの経路を調べてみるのだった。」

「仕事なんていつでもできる。」

「ジョッキーたちがグレートエスケープと出会ったときのように、私もグレートエスケープを知ったのだから——今この時が、大切だろう。」

「私は躊躇することなく、宿の予約をするのだった。」

名バ列伝 その6

冬の北海道は流石に大変だ。また、春は馬産の時期で牧場は慌ただしいとも聞いた。来年の夏に行くことを決めて、私は短期バイトを繰り返して当面の生活費を稼いだ。貯金を使えば一年程度、楽に生活できるだけの蓄えがあるとはいえ、やはり仕事をしないと暇な時間が出てくる。

その間に競馬にもハマリ、試しに買った馬券が凄まじい配当を叩き出すこともあったりして、あつという間に夏が来た。

目的地は当然、グレートエスケープの生まれ故郷である懇備式牧場。場所は浦河町なので、飛行機で北海道に行ったらレンタカーで向かう予定だ。

ついでに、インターネット仲間のダラカニさんもグレートエスケープのお墓参りに行く予定があるそうで、それに合わせてオフ会もすることになった。

飛行機を待つ間に、ツイッターを開く。

ちょうど、明日からのガチャ更新予告ツイートがあるはずだと思い、公式アカウントのページを開いた私は目を疑った。

「グ……グレート……エスケープ……だと……!?」

スレではアニバーサリーのときにガチャ実装濃厚とされていたグレートエスケープが、何故かこのタイミングで実装された。

馬鹿な、そんなことがあるのか。

いや、あるに決まっているが……それにしても何故かと考えて、直ぐに思い当たった。グレートエスケープの命日——もうすぐその日だ。今回も、命日に近い日にお墓参りに訪れる予定だ。

「それでグレートエスケープかあ……」

ツイッターやまとめサイトの反応も概ね同じ反応が多かった。

スレでは

「ついに……来たか……」

「やめてくれチャイゲ。その実装は財布に効く。やめてくれ」

「頑張れオタク頑張れ！ 俺は今まで頑張ってきた！ そして今回も！ これからも！

俺は決してガチャで折れない！」

「これはタマモのためのガチャ石だからスルーだな」

「減つとるで」

等々、悲喜こもこもといった有様だった。

ついでに、絵師がパロディで書いたイラストも次々乗せられている。

「スペエ！ お前は私にとつての新たな光だ！」

「なぜこんなにも親和性が高いのか」

「サポカイベがわりとそれに近いからじゃないですかね……」

「スペエ！ ↓言つた」

「お前は私にとつての新たな光だ！ ↓それに近い内容は言つた」

「つまり……どういうことだつてばよ？」

「幻術か……？ 幻術なのか……？ また幻術か……？」

「許さん……幻術だと……絶対に許さんぞ……メジロマックイーン……！」

「なんでですの!!？」

ツイッターやスレは早くもお祭り状態だ。

「夢女ステークス一番人気来ちやう？」

「シリウスシンボリが強くない？」

「そこまで露骨に夢女ステークスの強みは出ていなかったけど節々から雰囲気出てるよな……」

「女トレーナーが重馬場になってしまう……なる……なつたわ……」

「ルール破り常習犯（原作で脱走とか悪さをよくしていた）、後輩の面倒見がいい（種牡馬として好成绩、厩舎でも歯向かわない相手には優しい）、遊びを色々と教えてくれる

……完全にちよっぴりキケンな先輩枠で私の性癖には合っていますね!」

「何が横紙破りか……! スペちゃん先輩に相応しくありません」

「グラスが負け惜しみ言つてマース!」

「エル。」

「私の方が速いですよ……?」

「必ずしもそうとは言いきれないのがこいつのやばさ」

「は? 速さはスズカの方が上だろ」

「お? グレートエスケープは秋天もレコードなんだが?」

「なんだとこの野郎スズカが怪我しなきや2着だったろうが」

「そんなもんあとからなんとも言えるわ」

「でもディープリンパクトの方が強いんだよね」

「凱旋門賞勝つてから出直せ」

「三冠とれねーくせになんだよこのハゲ」

「誰がピカピカ千直番長だコラアツ!」

スレの流れが怪しくなってきたので私はタブを閉じた。

強さ議論は他人に任せるとして、グレートエスケープ実装には心が躍った。

ついで、ツイートが追加でされた。

『週間パンクジャンプ、略してパンジャンにてウマ娘完全新作コミック連載開始!!』

タイトルは「THE GREAT TEST RUN」

主人公はグレートエスケープ!』

「な、なんだって……?!?」

新作漫画連載開始だど。

普通、ぱかちゅーぶとか特番を組んで発表するようなものじゃないのだろうか。

再びスレやツイッターを見ると、やはり反応は祭りを通り越して狂乱の様相を呈していた。

「待ってくれたまえ! いきなり言葉の洪水をワツと一気に浴びせかけるのは!」

「クソツ、寝る前だつてのに重大なものを見せやがって!」

「寝るの速すぎだろまだ昼やぞ」

「うおおお嬉しい……! アニメ1期ではグレートエスケープ出なかつたし、漫画版とはいえ時系列的に1期の別世界線みたいな感じでやってくれるだろうしな」

「今週の競馬はグレートエスケープ産駒買うしかねえな!」

「いるのか?」

「今年5歳世代がラストクロップだからそれなりには」

「それにしてもすげータイトルだ」

「それだけの馬だったからなあ……最強馬論争は未だに終わらないけど、時代を切り開いたって意味ならやっぱりこの馬になるのかな」

「勝ったり負けたりすることが好まれたし、最強馬以上に人気馬だった……オグリとかゴルシとかそんな感じの」

連載決定イラストにはグレートエスケープの他、ウマ娘ではない美女二人が描かれている。

「トレーナーの人かな」

「二人いるのか……？」

「これは梶田騎手と滝騎手の二人が主戦級騎手だったから、トレーナーも二人とか？」

「やだ、三角関係……！」

続々と溢れてくる情報に興奮冷めやらぬ中、飛行機への搭乗が始まった。

ここから北海道まで飛んだあとは新千歳空港からレンタカーで札幌まで移動し、休む。

明日、札幌で観光したら明後日に浦河町の懇備武牧場へ向かい、『ダラカニ』さんと牧場見学かつグレートエスケープのお墓参りをする予定だ。

「明日は観光じゃなくてグレートエスケープのガチャやることになりそうだな……旅行費使つてガチャか……まあ天井まで回せばいいか」

×ひとまず、飛行機に乗ってから考えに耽るのだった。

×翌日の昼過ぎ、早速攻略サイトがグレートエスケープの性能などを明らかにした。シナリオに対する反応はまだだが、それも直ぐに出るだろう。

私は札幌の寿司屋でスマホを操作し、アプリを起動した。

「先にガチャを回そう」

貯めておいた育成ガチャチケットを使用。

「お」

激熱！と書かれたセンスを広げた理事長の姿が現れる。まさか、と思うより速く、演出が始まった。

「——遙か遠く、栄光の彼方。どんな嵐も切り裂いて、私は辿り着いてみせる」

NEW！【ネヴァー・セイ・インポッシブル】グレートエスケープ ☆☆☆

あらやだいきなり引けちゃった……！

固有スキルの演出も凝っていてかつこい。やはりチャイゲームス、気合いが入っている。

肝心の性能だがどうだろうか。

アオハル杯である程度予測はできるものだが。

○攻略サイト

グレートエスケープの評価

育成難易度：難しい

ステ補正：根性20% スタミナ10%

初期レア：星3

名称：ネヴァー・セイ・インポッシブル

固有二つ名：偉大なる逃亡者

【評価】

・終盤で前の方にいると加速する固有スキル

・覚醒スキルにチャンミでは逃げタイプに必須級の地固め持ち

・育成難易度はやや高め

↓後半のレース目標はイベントの選択肢で難易度とレースが変化

【初期適性】

芝：A ダ：C

短：G マ：D 中：A 長：A

逃：A 先：A 差：B 追：C

【固有二つ名の獲得方法】

日本ダービー、ジャパンカップ（クラシック級）、ジャパンカップ（シニア級）を勝利し、基礎能力「根性」が1200以上、ファン数が480000人以上になる

【固有スキル】

「グレート・アンビシャス」

レースで出遅れるかつ最終コーナーで我慢している状態か、レース終盤に先頭にいる状態で後ろに迫られると、栄光を目指してすごく加速する。

【初期スキル】

東京レース場○

末脚

急ぎ足

【覚醒スキル】

直線回復（Lv2）

全身全霊（Lv3）

地固め（Lv4）

脱出術（Lv5）

【育成ポイント】

・恵まれたスキルから育てづらいステータス補正

スキル構成はチャンピオンミーティングの中長距離の逃げ戦法に欠かせないものばかりで、優秀の一言。しかしステータス補正が根性20%、スタミナ10%と非常にステータスを上げづらいものになっている。

・イベントで難易度が変化する

シニア級1月のイベント『頂きに向けて逃亡?』の選択肢で難易度と目標レースが変化する。上の選択肢の『君は天才じゃない』を選択するとライバルが強力になり、最終目標がジャパンカップになる。下の選択肢を選ぶと最終レースはライバルの能力は変わらず、有馬記念となる。レース後のイベントも少しだけテキストが違う。

・イベント発生条件

検証したところ、クラシック級で日本ダービーとジャパンカップを優勝するとイベントが発生する模様。難易度は高くなるが、レース後の能力値は多くもらえるため、より強いウマ娘育成を考えるならば、上の選択肢を選ぶべき。

目標一覧

目標1 メイクデビューに出走

目標2 皐月賞で5着以内

目標3 日本ダービーで5着以内

目標4 菊花賞で5着以内

目標5 日経賞で2着以内

選択肢『君は天才じゃない』を選んだ場合

目標6 天皇賞・春で1着

目標7 宝塚記念で1着

目標8 天皇賞・秋で1着

目標9 ジャパンカップで1着

選択肢『君は才能あふれるウマ娘だ』を選んだ場合

目標6 天皇賞・春で3着以内

目標7 宝塚記念で3着以内

目標8 天皇賞・秋で1着

目標9 有馬記念で1着

・育成のポイント

日本競馬史上初の凱旋門賞を制覇した馬、グレートエスケープがついに実装。アニメ一期では実装されていなかったため、モブと変わらないポツと出のラスボスだったが、スキル構成は流石の一言。

しかしその分ステータス補正は非常に育てづらく、サポカが揃っていないとスピード

と。パワーが全然伸びない。さらに育成シナリオでは高難易度ルートもあるため、容易に育成途中終了が起こりうる。ライスシャワーを超える高難易度シナリオと実装されてからすぐ言われるようになった。

ところがどっこい、固有スキルの発動のしやすさと上昇率の高さで意外となんとかなってしまう。出遅れても挽回できそうな条件も含まれているが、その場合、逃げでは位置取りが前になりすぎて発動ができない。

ちなみに我慢している、は『全体順位の上位40%以下』であり、18人のレースだと7位以下、9人のレースでは4位以下となる。だが発動するのは最終コーナーのため、条件が厳しい。そこに出遅れというバッドスキルが発動しないといけないため、素直に逃げ育成で良いだろう。逃げでは先頭さえキープしていれば大抵のレースで後続をガンガン引き離していく。

目標レースはわかりやすい王道路線。クラシック級で日本ダービーとジャパンカップを制しているとイベントが発生し、上の選択肢を選ぶと一部の対戦相手と最終レースが変化する。

壁は天皇賞・春。通常ルートではマヤノトップガンがライバルだが、通常ルートでも充分強敵。強敵ルートになるとここにマヤノトップガンの能力が強化されるだけでなく、それに近い能力値のメジロブライトも追加される。

最低でもスピ・スタ500、回復スキルが欲しいところ。

宝塚記念と天皇賞・秋のライバルはエアグルーヴとサイレンススズカが共通して出現する。通常ルートの最終レースは有馬記念で黄金世代を相手どる必要があり、単純に難易度が高い。

強敵ルートのジャパンカップではルドルフ会長、エルコンドルパサー、スペシャルウィーク、オグリ、ナリブなどなど、夢の11Rの様相を呈し、ちよつとしたレジエンドレース並に難易度が高くなる。

【ボイス】

○ホーム画面

親愛度1以上「レースでは一人だが……一人で挑めるように、助けてくれるんだろう、相棒」

親愛度3以上「寮で過ごすのは窮屈に感じるものだ。相棒、脱走するのに手を貸してくれないか？」

親愛度5以上「本当は、私は大したウマ娘じゃないんだけど……それでも、勝利を諦めたりはしない。どこまでも、走り続けるよ」

七夕にログイン「短冊？ いいや書いていないよ。願いは自分で叶えるものだ」

ハロウインにログイン「トリックオアトリート! ハロウインは大好きだ。お菓子をたくさん食べられるからな。なんだ相棒、その目は。やらんぞ」

誕生日にログイン「相棒、誕生日おめでとう。君が産まれてきてくれたから、私もこうして……今のは無しだ。恥ずかしいことを言った気がする……!」

誕生日にログイン2「プレゼントはとっておきのものを用意してきた。もちろん昨晩に無断外出してな。フジ寮長には秘密にしてくれるよな」

ウマ娘の誕生日(4/1)にログイン「ダンスパートナーさん、スペ、スズカ、アイネス姉さん、エアグルーヴ……ルドルフ会長にまで、祝われてしまった。興味ないつもりだったが、嬉しいものだな」

ウマ娘の誕生日(4/1)にログイン2「相棒、プレゼントは……いや、一つ欲しいものがあつた。その……一緒に、ディナー……とか……ダメか?」

未読のお知らせ「知らせが届いているようだ。また生徒会からの呼び出し状か?」

プレゼントがあるとき「何かプレゼントがあるようだ。早く開けないか?」

ミッション達成「ミッション達成だそうだ。ま、私たちにとつては簡単なことだったな」

イベント予告「イベントが準備中か。また今回も、面白いことになるといいな」

イベント開催中「イベント開催中だぞ。羽目を外して楽しまなくては。早く見に行く

としよう」

朝「朝練は気持ちがいい。まず一日の始まりを充実させなくては、目標に近づけないからな」

朝2「授業に出るのは面倒だが、私も学生。ほどほどにやらなくてはな……」

昼「ここからがトレーニングの本番だな。質も量も、こだわって鍛えていこう。頼むぞ、相棒」

昼2「昼食はハンバーガーにラーメンにフライドポテトも……あ、相棒！ いや、これは、栄養管理の……というか、別のものにするよ……」

夜「相棒、疲れていないか？ いつもお疲れ様。君が頑張るからこそ、私も努力していられるんだ」

夜2「夜こそ本番！ 脱走してトレーニング、或いは愛車のバイクで走り出す！ 暗い夜の帳の中を！」

春「春はクラシックの季節だな。トレセン学園のウマ娘にとって、熱く緊張感溢れる季節かもしれない」

夏「暑い……こんなに暑いと夜には部屋を脱走したくなってしまふな……」

秋「何故かほかのウマ娘の体調や怪我がすごく気になるんだ。ライバルが怪我でいなくなる、なんてことはつまらないことだからかな」

冬「雪が積もればそれを利用して脱走ルートを確保できそうだな……雪を集めてそれを足場に……フフフ、悪くない」

ウマ娘と会話「スペはよく世話を焼く後輩だ。素直に憧れを向けられると照れるが、いい刺激になる」

ウマ娘と会話2「このお弁当か？ アイネス姉さんが作ってくれたんだ。栄養が偏ってるからと……私に姉はいないが、思わずそう呼んでしまう何かがある……！」

ウマ娘と会話3「ルドルフ会長は何故私を笑わせてくるんだ……つ、思い出しただけで……笑いが……んふっ……！」

ウマ娘と会話4「己を知り、敵を知れば、百戦危うからず。情報は大切だからな。そのため禁止されたデータ保管室に忍び込むのも、仕方ないことだ」

ウマ娘と会話5「エアグルーヴが来たら教えてくれ。また私を探し回っているらしい。まったく……少し生徒会室を改造、いやリフォームしたただけなのに。蛇口からオレンジジュースが出るように」

○育成

体力低下「疲労は確かに大きい。だが、そんなときこそ限界を越えるチャンスともいえる……か？」

体力低下「きついな……脚が上がらない……休暇を所望する。相棒、休ませてくれ」

絶好調 「闘志が漲っている！ 栄光へ向けて、早くトレーニングを始めよう！」

絶好調 「頂点へ至るため、時間は無駄にはできない。フルスロットルでトレーニングしていこう」

好調 「相棒とのトレーニングが未来への栄光と繋がっている。私はそう信じて、走るだけだ」

好調 「今日も一日……なんだ？ 何か言つて欲しいのか？」

普通 「トレーニングの時間だ。どんなメニューから始めるんだ？」

普通 「ストレッチは済ませてきた。何事も準備は大切だな」

不調 「コンディションが悪い……そんなときもある。不調のときでも体と上手く付き合う方法を覚えなければな」

不調 「集中しなければいけないのだが、気合いが入らない……いや、トレーニングはきつちりやるぞ？」

絶不調 「体が重いな。体調管理がなつてなかったのか……？」

絶不調 「やる気がない訳では無いんだが……なぜか思い通りに体が動かせない」

3ターン連続出走時の会話 「実戦を続けるのは良い事だと思うが……基礎を疎かにしては本末転倒じゃないか？」

4ターン連続出走時の会話 「またレースか……流石に……いや、何も言うまい。それ

が最善というのなら、信じるさ」

目標レース：絶好調 「レースに絶対はない。どんなに良いコンディションでも負けることはある。だが敢えて言おう。『勝ってくる』」

目標レース：絶好調 「調子も準備も万全ってやつだな。相棒、見ておけ。『いいレース』をしてくる」

目標レース：絶好調 「相棒のおかげで絶好調だ。あとは私が勝ってくるだけだな」

目標レース：好調 「ジャンクフード断ちの影響か、体の調子がいい。栄養管理は大切だな」

目標レース：好調 「トレーニングも充実していた。こちらの用意は万全だぞ、相棒」

目標レース：好調 「脚の調子はとても良い。なら、負ける訳にはいかないな」

目標レース：普通 「レースだな。行ってくるとするよ」

目標レース：普通 「平常心でいつもの力を発揮する。私たちならそれで充分だろう？」

目標レース：普通 「気負わず冷静に。かからず、出遅れず……一番難しいかもな」

目標レース：不調 「不調だろうと私の走りに陰りはない。心配するな」

目標レース：不調 「いつも上手くいくわけではないからな……そういうときを突破してこそ、だろう？」

目標レース：不調 「トレーニングで追い込み過ぎたか？　だが、それでも私の勝利が

揺らぐには遠い！」

目標レース・絶不調「良い状態ではないが、レースの結果に直結するとも限らない。いくらでもひっくり返して見せる……！」

目標レース・絶不調「こう見えて、絶望的な状況を吹き飛ばす方が得意でね。相棒、任せておけ……私は最後まであきらめない！」

目標レース：絶不調「例えどんな状態だろうと、勝利は諦めない。最後に勝利をもたらずものは、勝ちたいという執念だ」

チームレースの掛け合い 1

グレートエスケープ「お前に追いかけられると速く走れるな」

エアグルーヴ「やかましい。レースに集中しろ」

掛け合い 2

スペシャルウィーク「エツチャンさん！一緒に頑張りましょう！」

グレートエスケープ「しっかりついて来るんだぞ」

掛け合い 3

サイレンススズカ「エスケープ、いきましよう」

グレートエスケープ「ああ、どこまでも！」

掛け合い 4

ダンスパートナー「エツちゃん、ゲート任せた！」

グレートエスケープ「どのように!？」

【プロフィール】

キャッチコピー：あらゆるものから逃げ切る稀代の“脱走王”

自己紹介：私の名前はグレートエスケープ。目指す場所は頂点、唯一つ。そのためにも相棒、よろしく頼むぞ

学年：高等部

所属寮：栗東寮

身長：172 cm

体重：微減（調整に抜かりなし）

誕生日：4月1日

得意なこと：ピッキング

苦手なこと：蛇

耳のこと：情報を逃さぬよう常に聞き耳を立てている

尻尾のこと：よく小物を隠している

靴のサイズ：右25.0 cm 左25.5 cm

家族のこと：母は姉と間違えられるほど若々しい

グレートエスケープのヒミツ その①

・穴を掘ると心が安らぐ。

グレートエスケープの一コマ

・画像読み込み中……

×××

○ニヤニヤ大百科

「勝ったレースだけがいいレースだ」

グレートエスケープ（ウマ娘）とはChai gamesのメディアミックスプロジェクト『ウマ娘プリティーダービー』の登場キャラクター。

現在の競走馬、グレートエスケープをモチーフとしたウマ娘である。

CV：○○
××

【概要】

誕生日：4月1日 身長：172cm 体重：微減（調整に抜かりなし） 3サイズ：

B81・W58・H84

ニヒルな笑みがワイルドさを感じさせる、クールさとノリの良さを併せ持ったウマ娘。 走ることにそのものよりも、レースで勝利することに喜びを見出す勝利至上主義者。 ストイックに自分を追い込むかと思えば、ルールを無視して羽目を外すこともある遊びの達人でもある。 夢はすべてのウマ娘の頂点に立つこと。

肩まで伸びるクセのついた黒い髪と右耳に耳飾りをつけたウマ娘。

勝負服はワインレッドのシャツに黒いパンツスーツスタイルでジャケットは羽織るだけのマフィアちっくなもの。

【アニメでの活躍】

アニメ1期、2期共に放送時は実装されていなかった。 1期は同厩舎で後輩たるスペシャルウィークが主人公だったが、特にその要素はなく、憧れの先輩も終始サイレンススズカが担っていた。

9話の凱旋門賞でライバルとしてグレイテストランが恐らくグレートエスケープをモチーフにしていたのは間違いないが、最終話でスペシャルウィークと会っても特段仲がいいと言った描写はなく、終始ライバル、あるいはラスボスとしての出番にとどまっていた。

しかし、シーズン2の最終話ではグレートエスケープらしきウマ娘が映っていたが、

当時は誰もそのことに気が付かなかつた。

【ゲームでの扱い】

※性能省略

○概要

初期ステータスではスピードとスタミナが高め。成長率補正は苦行と評判の根性20%スタミナ10%。だが史実や、育成シナリオの内容を見れば納得しかない。

固有スキルは終盤に加速するか最終コーナード加速するタイプのもの。後者は出遅れかつ、一定以下の順位にいることが条件というシビアなもの。かなりロマンスキルになっっている。

前者は先頭に立っていれば発動するので、作戦は逃げで使うのがベストだろう。数少ない固有スキル「すぐく」勢であり、発動条件も比較的緩いため、シンボリルドルフやオグリキャップと並ぶ固有スキルtier上位とされている。

逃げウマ娘には是非継承させたいスキルだ。

覚醒スキルや初期スキルには加速スキル、回復スキル、パッシブスキルなどバランス良く、さらに逃げウマ娘にチャンピオンミーティングでは必須級とされる地固めを実装された現在、唯一自前で持っている。

チャンピオンミーティングのためにも、ある意味必須のウマ娘。

【関連ウマ娘】

○ダンスパートナー

ルームメイトであり、史実でも同厩舎かつ一つ違いで度々同じレースを走った仲。グレートエスケープが種牡馬入り後、2回種付けし、産駒は重賞を勝利した。

シナリオやイベントなどで一緒に出番があることが多い。

彼女とは良き友人関係であり、互いのことを深く理解し合っている仲。トレセン学園入学前から親交があつたと思しき描写がある。

幼いころは庶民的で大人しいウマ娘だったグレートエスケープと、良家の生まれながらやんちゃだったダンスパートナーが互いに影響し合い、現在の関係になった。

○アイネスフウジン

史実では親子の関係。ウマ娘としてもその縁は続いているようで、アイネスフウジンはそのお姉ちゃん力でグレートエスケープに世話を焼いている。

ストイックかつルールを破る破天荒なグレートエスケープもアイネスフウジンには強く出られないらしく、シナリオでも「めっ！」されて大人しくなるグレートエスケープが見られる。

○スペシャルウィーク

悪いことを教える先輩と素直に言うことを聞いてしまう純朴な後輩という関係。史

実の関係からアニメ1期では師弟関係になるのでは、と噂されていたが実装されなかったためお流れに。

先輩ポジにはサイレンススズカがついたが、実装されてからはちよつと悪い憧れの先輩というダークな要素をちよつぱり持つことになった。

○エアグルーヴ

追って追われる関係でさながらトムとジェリー。

育成シナリオ内イベントではエアグルーヴが「問題児の中でもゴールドシツプとグレートエスケープは相当なもの」と発言しており、かなり頭を悩ませている模様。

しかしお互いに困ったことがあれば手伝うように、良きライバル、友人の関係が根底にはある。

○シンボリルドルフ

史実では母父、祖父にあたる関係。そのせいなのか、テイオー同様、ルドルフがエスケープに構うシーンがある。テイオーがルドルフに甘えるのに対して、エスケープの方はルドルフから話しかけることが多い。

基本的に孫に構う祖父と反抗期の孫という感じだが、ダジャレで笑う数少ない相手でもある様子。エアグルーヴのやる気が下がった！

【連載作品】

グレートエスケープが育成ウマ娘として実装されてから間もなく、週間パンクジャンプ（略称パンジャン）でグレートエスケープが主人公の『THE GREATS TRUN』が連載開始される。

内容はグレートエスケープが歩んできた史実と同じ流れだが、それを上手くウマ娘の世界観に落とし込んだものとなっている。

いつてしまえば、アニメの構成と近いもの。

○あらずじ

国民的エンターテインメント、トウインクルシリーズ。華やかな舞台とは裏腹に、夢敗れて去っていくウマ娘が数多くいる、過酷な世界。

トレセン学園は、そんな選ばれしウマ娘たちが切磋琢磨する学び舎である。

そのトレセン学園に所属する新人トレナー、サクラバ・ユウナはウマ娘をスカウトするが、新人であることを理由にどの娘にも断られていた。

新人誰もがぶつかかる壁の前に、心が折れかけていたサクラバだったが、そんなある日、トレセン学園の壁を乗り越えて目の前にウマ娘が現れる。

そのウマ娘の名前はグレートエスケープ。

出会いをきっかけに、グレートエスケープとサクラバはトレナー契約を結ぶ。

溢れる野心を胸に戦う彼女の奔放さに振り回されながら、サクラバも彼女を支えるた

めに、トレーナーとして成長していく。

登場人物など詳細は個別記事を参照。

【関連動画】

読み込み中……

【関連項目】

……

×××

○グレートエスケープの育成シナリオに対する反応

「夢女ステークス一番人気まさかの馬券外」

「逆に湿度四天王に突っ込む勢いで大穴開けてきやがった」

「ウソでしょ……グレちゃんそんなに湿度高いの……？」

「スポ根が根底にあるけどちよくちよく湿る。王道だけど重い。本人の心が重い」

「あんな『イケない子猫ちゃんだ』みたいなこと言いそうなのに!？」

「むしろ子猫ちゃんなんだよなあ」

「ほいスクシヨ」

『これでダメだったら私は地獄行きだな……』

『地獄だろうとついて行くよ』

「え……なにこれは……」

「育成シナリオはナリブみたいに条件が合えば選べるけど、高難易度じゃない方だと春天のあとは怪我の下りが入る」

「どうしてそうなるのよ!!」

「怪我してしまっただけ走りたい↓もし負けたらトレーナーの責任と言われてしまうのをわかってるのに走ろうとしているなんて最低なことだ↓上記画像」

「やだ、トレーナーもグラビティ……」

「基本的にスポ根で、才能豊かで大胆不敵な雰囲気があるのは周りを見せている姿であり、辛い時にはただの女の子であることをトレーナーにだけ見せちゃうなんて……凄まじい湿度……」

「基本的にライオンとか虎みたいな振る舞いするけど何かあると子猫になる」

「ヘタレウマ娘ステークス一番人気」

「凱旋門賞ウマ娘の姿か……？　これが……？」

「今北産業」

「・夢女ステークスには参加できそうだがヘタレ要素が強い」

・シナリオが重い、シンプルに苦悩が重い

・勝利以外無駄だと言いつけてしまうストイックな熱いシナリオ

「なんか……人気馬が大穴を2着に連れてきたみたいだな……」

「スぺちゃんじゃん……」

「確かに」

「そしてセイちゃんに並ぶレベルの恋愛よわよわ勢」

「嘘みたいだろ？ ウマ娘に実装された種牡馬の中では現時点で一番種牡馬成績すごいんだぜ？ なのによわよわだなんて……」

「ちなみにどのくらいすごいの？」

「SS、ディープ、キンカメには負けるけどその下にはつけるくらいの種牡馬成績」

「さぞモテるんやろなあ」

「モブウマ娘や後輩にはモテモテだったから……」

「なんでトレーナーに対してはよわよわなの？」

「ちよつと横になりますね。先輩も一緒に」

「実質セイちゃんとグレちゃんの百合じゃん？」

「傷の舐め合い百合かよ」

「一戦しかやりあつてないけど、逃げ脚質やキャラクターの策士っぷりは結構似てるポ

イント多いよね」

「恋愛クソ雑魚っぷりまで似なくても」

○新連載について

「全然プリティーじゃねえ!!」

「プリティーダービーはタイトルにないだろ!!」

「案の定シングレと同じ圧倒的画力とプリティ要素を欠片も感じないスポ根物語」

「トレーニング風景や理論、描写がガチで面白い上にテンポも早くていいな」

「半年くらいで連載終わらない?」

「流石にないだろ」

「新人女トレーナーは梶田さんなのか滝さんなのか」

「トレーナーの妹として医療担当みたいなのがでてきたんだけど」

「ノリのいい明るいねーちゃんとかちょっと内気だけど献身的な妹か……」

「オーナーを思い出すな」

「死別ネタは鬱すぎるのでNG」

「さすがにやらないだろうけど、そういう要素はありそう」

「……姉妹と担当ウマ娘でトライアングラー?」

「悲しみの向こうへと？」

「中に誰もいませんよ」

「外からゴールドシツプウ!!」

「育成シナリオでマヤノもブライトも来ないと思つたらゴルシに負けるのやめて？」

「時々やたら距離が近いのはなんなん？ エ○なん？」

「我々にエ○は禁止しておいて公式作品ではエ○を出すなんて……!」

「みんな禁止のせいでピユア度がとんでもないことになつとるな」

「ダンスパートナーは実装されたけどこの流れでダンスインザダークも……？」

「どうじやろ、古馬と走つてないからな……絡ませづらいのもあるかも」

「ただクラシツクの時ライバルと言えるのはダンスインザダークくらいなものだし……」

あとはバブルガムフェロー？」

「グレートエスケープのライバルは

・クラシツク ダンスインザダーク

・クラシツク終了後から4歳 バブルガムフェロー、マヤノトップガン

・5歳以降 エアグルーヴ、サイレンススズカ、そして最強世代」

「毎回言われてるけどグレートエスケープに負けて最強世代は違和感あるよな」

「・エルコンドルパサー↓凱旋門賞で敗北

・グラスワンダー、セイウンスカイ↓有馬記念で敗北

・スペシャルウィーク↓ジャパンカップで勝利

スペシャルウィークが最強なのは明らか

「そのあとグラスワンダーはスペシャルウィークに勝ってるんですが」

「つまり……どういふことだつてばよ？」

「グラスワンダー、エルコンドルパサーはスペシャルウィークに強い。スペシャルウィークはグレートエスケープに強い。グレートエスケープはグラスワンダー、エルコンドルパサーに強い。」

つまり……黒井最強

「黒井最強」

「黒井最強」

「黒井最強」

「黒井最強」

「熱くて面白いのでみんなも読んでくれよな」

×××

ハンドルネームで呼ばれるのは、なんだか面映ゆい。背徳感すら覚える。

私は緊張しながら、青年……いや、壮年の男性に言葉を返した。

「はい……えっと、ダラカニさん？」

「そうです。初めまして……何回も会話はしてるから違和感ありますね」

「ええ、ホントに……」

初めて会ったのだが、見たことある気がしてくる。

というか、本当にどこかで見たことがある。テレビや、動画で。

私は失礼を承知で尋ねた。

「あの……もしかして……間違えていたら失礼なんですけど、白村……調教師？」

「バレました？ 意外とテキの顔は覚えられないと思ってましたから」

「ちやうど先週の競馬サイトのニュースで写真が載ってましたので、それを見ていて」

「札幌記念のインタビューですかね。今週、管理馬が出走するので……今は札幌で滞在

競馬してる馬が多くいるから、北海道にいるですよ」

「そうだったんですか……今週も頑張ってください。それはそうと、懇備武牧場にはよ

く来るんですか？」

「此処に限らず、牧場を回ることはよくありますよ。良い馬がいたらぜひ預けてくださ

いとお願ひしますし、馬主に良い馬がいますよと薦めたりします」

「懇備式牧場にも期待の馬はいますか？ グレートエスケープのような」

「あんな馬、そうそういませんよ。社来グループみたいな大きいところですから、グレートエスケープのような馬を生み出そうとしているくらいなのに。だからこそ、馬産、ひいては競馬は面白いんだらうけどね」

「そうなんですか……でもグレートチャンプとか産まりましたよね」

「そうですね。種牡馬として、グレ坊……グレートエスケープが頑張ったからでしょう。あそこにいる牝馬はグレートエスケープの娘ですね。母父はスペシャルウィーク。お母さんとしても頑張っています」

グレートエスケープという稀代の名馬も、すべて名前があり、大切に育てられてきたサラブレッドの血によって生み出された。

受け継がれてきた血脈は、これからもグレートエスケープから、受け継がれていくのだろう。

まるで大河ドラマのような果てしない世界に、胸が高鳴った。

「向こうの1歳馬は？」

「あれはディープインパクトのラストクロップになる、キャッシュユレスのXX20です。牝馬だし、中央でも勝ち負けできるんじゃないかと思っています」

「あれは？」

「シニスターミニスター産駒です。もう一頭はゴールドシップ産駒で、向こうにいるのはハチミソソングの産駒です」

「じゃあこっちは？」

「こっちはロードカナロアやグレートチャンプを種付けしてしまい、牧場の資金難に頭を抱える天長場長」

「俺の馬鹿野郎……！ なぜ……何故俺は……あのような配合を……！」

色んな姿があるんだなあ。

私はのほほんと蹲る牧場長を見ていると、彼がこちらに気が付いた。

「うん……？ あ、白村先生じゃないですか。お久しぶりです。クロスケのお墓参りですか。そちらの方はご友人で？」

「はい。命日なのでお墓参りに」

「そうですか……とところで……そこの方、牧場で馬の世話することに興味ない？」

「あります」

「マジで!? 牧場スタッフにならない!？」

「仕事ないんですけれど、いや、いいんですか？ 素人をホイホイ入れてしまっていいですよ。私、見る目はあるつもりなので。グレートエスケープを見出したのも私ですから……それにいま給料余り出せなくてみんなやめちゃうし」

「天長場長の決定なので別にいいですが、散々そう言つて牧場の経営傾けていませんでしたか……?」

「白村先生は黙つててください。とにかく墓参りに行きましょう」

「はあ……本当に大丈夫ですか?　というか給料……」

「天長場長は割とこういう人だから……オーナーの希望とはいえ、ダービー馬で乗馬させるのを許しちゃうくらいだし」

「ええっ……どういふことですか……」

話しながら牧場長の後についていくと、馬の嘶きが近くで聞こえた。

振り返ると、まだ仔馬くらいの体格のサラブレッドが、切なそうに鳴き声を上げながら私の傍にすりよってくる。

ダラカニさん、いや白村先生が驚く。

「こいつ、グレートチャンプの子の……1歳馬。なんでこんなところに」

「あつ、デルタ!　また脱走したのか!」

「デルタ……?」

黒鹿毛の仔馬は、額に三角の流星を浮かべており、これが名前の由来になっているらしかった。

グレートチャンプ——グレートエスケープの子供にして、親子2代でダービーや凱

旋門賞を制覇した産駒。その初年度産駒という、グレートエスケープから見て孫になる仔馬だという。

「デルタは寂しがり屋で、牧場の柵を飛び越えて脱走することがあるんですよ」

「へえ……グレ坊もよくやってたなあ」

「グレチャンもしていましたからね。遺伝でしょうか。脱走癖の」

「それなら、こいつもすごい馬になるかもしれませんね」

「いやあ、どうだろうか。見栄えは良くないな」

「健康に走ってくれば、それでいいですよ」

場長は他のスタッフを呼びに、白村先生はデルタがどこかに行かないように宥めていく。

二人が期待しないというのだから、強い馬になるポイントはあまりないのかもしれない。

だが、私には、将来すごい馬になるんじゃないか——そんな予感がしていた。

突然牧場スタッフとして初めて関わったサラブレッドが、三冠馬という栄光を掴むそのときまで——その予感が本当かどうか、知る由もなかった。

名種牡バ列伝『グレートエスケープ』

第1話 喪失、それでも前へ

種牡馬——それは、繁殖用の牡馬である。豚や牛は精子を凍結保存し、使用することが許されるが、サラブレッドは直接交配しなければ、サラブレッドとして認められない。つまり、種牡馬はいずれ死ぬものであり、またこの世のどの馬につけられる訳でもないため、種牡馬市場というものは流動的だ。

馬産に関わる人間は、常に最高の種牡馬、リーディングサイアーを求めている。

ただ血統がいいというだけで、種牡馬になれることもある。GIを制しても種牡馬になれないことがある。

そして、種牡馬になっても結果を残せなければ、行方知れずになることも。

サラブレッドとしてレースで輝かしい戦績を残しても、必ずしも輝かしい未来が待っている訳では無い。

生き残りたくば、結果を残すしかない。

それは、日本競馬界では初となる凱旋門賞を制したグレートエスケープも同じだった。

期待は大きければ大きいほど、応えられなかったときの反動は大きくなる。

××グレートエスケープは戦い続けなければならぬ未来に対して、苦悩していた――

××――ムラムラします。

社来スタリオンステーションの放牧地に出された俺は、どこまでも広がる青空と、そこを漂う雲を数えながら、俺は何度目かになるかわからないため息をついた。

引退した俺は、社来スタリオンステーション（SS）に繋養された。

健康診断では問題なしと太鼓判を押され、社来SSのスタッフたちもみんなが褒めてくれた。

しかし俺は元々人間だった。

馬たちに種付け、つまりセックスできるのか不安だったが、種付けシーズンが近づいて、かえって困ったことがあった。

――ムラムラします。

そう、性欲がすごいことになっているのである！

サラブレッドの牝は春のシーズンが繁殖シーズンとされているが、牝は基本的に通年オツケー。

そのためシャトル種牡馬なんてのもいるくらいだ。

だからなのか、子孫を残したい欲望が凄まじいことになっているのだ。

人間だった感性でいうと、馬でしかないはずなのに、過去に見てきた牝馬が言葉を濁すと、『とても魅力的』に見えてしまう。

「だが待つていればその場面は来るはず……大丈夫。まだあわてるような時間じゃない」

なんて、俺は社来SSの馬房の中あるいは放牧地で日々を過ごしていた。

ただ雌伏の時を耐える——それだけでいいと思っていた俺に、衝撃を与える事件が起きる。

種牡馬としてファンや関係者にお披露目する種牡馬展示会に参加したときのことだ。

俺はスタッフにひかれて俺を見に来た関係者やマスコミ、ファンの前に姿を現した。

「グレートエスケープです。今年から種付けを開始し、来年に産駒が生まれる予定です」カメラを持った人々が俺を見るなり、感嘆の声を上げた。

多くのファンが見に来てくれることは嬉しい。

肉体美を誇るようにビシッと立ち姿を決めている時、社来SSの担当スタッフ——紺野さんが語った。

そして俺は衝撃を受けた。

「穏やかな気性と頭の良さ、そして雄大なストライドを活かすバネを産駒に伝えてくれることでしょう。」

こちらに來た時と比べて『お腹もふつくらしてきました』ね
ちよつと待て。今、なんて言った？

思わず紺野さんに振り向くが、当然言い直してくれるわけではない。

だが、本当はちゃんと聞こえている。

——太った。

俺は自分の馬体を見た。

ライバルたちと切磋琢磨した肉体は穏やかな海原を思わせるようになだからで、そして中身が詰まったようにポヨンとしている。

はつきり言おう。

現役の時より太っている。

俺は想像した。

前世はおいといで、今世では当然童貞である（馬に童貞とか当てはまるのか？）。

どんなコがお相手になるのかはともかく、もしも初体験のときに、「あら？ 凱旋門賞馬だつて聞いたけど……ふふ、お腹、随分出ちやつてる」なんて笑われたら俺は……！

かといつて馬体重を減らし過ぎれば怒られてしまう。

ならば体重はそのままに、筋骨隆々のバキバキボデイになるツツツ！
俺は決意した。

そんなこともあつて、放牧地に出るなり、黒井厩舎でやっていた調教の真似事をして
いた。

まずは放牧地をぐるりと歩いて準備運動をすれば、徐々にスピードを上げる。

栗東のような坂路はないとはいえ、放牧地は広く、一周もそれなりに距離がある。

大体600mから800mくらいか？

そこを一度ぐるりと走った。

軽い運動、コースを確かめるくらいのもり、のはずだったが。

「はあつ……はあつ……3ハロンつてこんな長かったか……う！」

体が重くて脚も重い。

そして息が上がっている。

「グレスケ、やけに息が上がってるな……放牧地ではしやぎすぎじやないか？」

見回りに来ていたスタッフの声も無視して、もう一度走り出す。

現役の頃はここをトップスピードで走るだけでなく、坂を走ったり、もつと長い距離
をもつと速く走っていたのか。

「サラブレッドは化け物か……!」

俺もサラブレッドだったわ。

しかし、一度意識してトレーニングを積むと、徐々に肉体は引き締まって行つた。

これなら誰に会つても恥ずかしくない。

そしてトレーニングすると気持ちがいい。

今日も、これから放牧地に向かうために紺野さんに引かれていると、すれ違う馬がいた。

どうやら黒鹿毛の種牡馬らしいと気づいた瞬間、お互いに顔を認識した。

「……! お前は……グレートエ……!」

「+闇に舞い踊る閃光+! +闇に舞い踊る閃光+じゃないか!」

闇に舞い踊る閃光——俺がクラシックレースを走る際に一番のライバルとして立ちはだかった相手、またの名をダンスインザダーク。

社来SSで種牡馬になっているとは知っていたが、まさか再会できるとは。

俺はたたらを踏む紺野さんに構わず、再会を喜んだ。

「懐かしいな、元氣してたか?」

「ああ、まあ……!」

「昔は何言つてるかわからなかったあの口調も、聞かなくなると寂しいもんだな……ま

た言ってくれよ、ええつと……あの不思議な喋り方」

「いや、今は」

「正直なぜあんな喋り方をするのかよくわからなかったが……ダンスインザダークといえばあの語りだったよな。」

「またやってくれよ、久々に聞きたい！」

「つ……………！」

「どうしたんだ震えて。感動してるのか、再会に。」

「俺も嬉しいぞ。↑闇に舞い踊る閃光↑と再会できて。なあ、↑闇に舞い踊る閃光↑

！」

「う……………」

「う??」

「うがー……………!!!!」

「うわあつ！ 急にダンスインザダークが暴れだした！」

そしてしばらく、ダンスインザダークは暴れに暴れまくり、社来SSのスタッフたちの間では「ダンスインザダーク、昔のライバルに闘志剥き出し事件」として語られることになった。

「で、お前は元気にしていたのか？」

「うん、まあ、大きな病気とかはせずに過ごしてるよ」

放牧地で柵を挟みながら、俺とダンスインザダークは世間話に興じていた。

俺より何年か早くに種牡馬入りした彼は、今年から産駒がデビューするらしい。

「俺も種付けとかするんだろうな」

「きみは実績がすごいから、たくさんやらないといけないんじゃないか。それにしても……すごい体だな。まだ衰え知らずということか」

「まあ、そんなところだ。それでそのう……ダークや。種付けつてさあ……どんな風に……やればいい……とか、ある？」

俺は目を逸らしながら、さりげなく、しかし上手く言う方法がわからず、そのままの言葉で尋ねた。

ダークは笑った。

「童貞乙」

「どどどど童貞ちゃうわ!! 黒井厩舎とかにいた頃からバリバリやってたわ!! GI牝馬とかよく知らないけど多分全員抱いたぜ」

「それは逆にまずいんじゃないのか」

「てかさー、あれだろ。ぶっちゃけ……可愛い子とかいんの？」

「そりゃあ、まあ」

ダークは少し言いづらそうにしつつも、答えた。

今の俺は馬だ。馬の間にも可愛い可愛くないがある。そして、やるなら当然可愛い子としたい。

それが生物として当然の欲望だろう！

俺はそう力説すると、ダークは頷いた。

「うん。きみは種付け数が多いだろう。結果的に美ウマもたくさんいるはずだ。まあちよつと年上だったり、ちよつとグラマラスすぎたり、ちよつとユニークな顔をしてるかもしれないが大丈夫だ。安心してくれ。多分。きつと」

「そっかー。可愛い子かー。うへへ、そっかあ……うへへえ」

「そのネチャついた笑みはやめたほうがいい。だが呑気すぎないか？」

ダンスインザダークの表情が変わる。

競走馬時代と同じような、いや、年月を重ねた分、さらに風格を纏った様子に浮ついた気分が霧散した。

「種牡馬というものは結果を残さなくてはいけない。当然、三冠馬だろうと、凱旋門賞馬だろうと、結果を残せなければ追放される。

それどころか、どこにも行けなくなれば……」

「行けなくなると、どうなる……?」

「僕にはわからないが……いいものではないだろうね」

生唾を飲み込んだ。

忘れていたが、競走生活を引退して種牡馬になるのはゴールではなく、新たなスタートに過ぎない。

それどころか、さらに過酷な戦いが始まるということですらある。

とはいえ俺が頑張ったところで、産駒が如何に走るか次第であつて、やりようがないのだが……

と、いうわけで。

俺は気合を入れて放牧地を走り回り、そしてまだ見ぬ美しいお嬢さんにハッスルしていた。

社来SSに取材に来たマスコミに対して、紺野さんは「数々の良血の牝馬との種付けを予定しています」と言っていた。

馬になってからの感覚で言うくと、やっぱり良血で期待される娘は美しかったり、可愛らしかったりと期待は尽きない。

もう人間だったころの名残はない。

美しい人間より美しい馬! それに俺の中で一番美しい人はもう決まってしまった

し。

そして迎えた種牡馬の初仕事！

マスコミに注目されるのは恥ずかしいが、肉体から溢れ出す本能がそれらを振り切つて楽しみという気持ちで大部分を占めていた。

いよいよ御対面だ。

才色兼備の美しいサラブレッドを相手に、俺は今、オトナになります——！

「どうも初めまして！ この私こそが、日本競馬の歴史に燦然と輝く功績を残したサラブレッド——グレートエスケープです!!」

「あんらあ、詳しくないおばちゃんでも知ってるわあ。頑張ったんですってねえ……ふふふ、若くてカワイイわね」

——そこにいたのは、美しいサラブレッドではなく、小柄ながらもずんぐりむつくりとしたポニーを思わせる馬でした。

そして漂う雰囲気からは、田舎の（ここも立派な田舎だが）おっかさん、或いは赤ちゃんの頃におむつを変えたことがあるのよとか言ってるような近所のおばちゃんを感じさせる年齢——いわば熟女の雰囲気を振りまく馬が、私を待っていました。

「あ……え……?」

「初めてで張り切ってるの? きつとこれから大変だと思うけど、おばちゃんですまず練

習してもらって……頑張つてほしいわア」

「な……なんで……こつ、こんの、紺野さアん……う？」

俺は種付け場まで引いてきた紺野さんに振り返った。

紺野さんは優しそうな笑顔を浮かべて、マスコミに対応していた。

「グレートエスケープの最初の種付け相手はサラブレッドではなく、ハフリンガー種というホースパークで乗馬に使われている種類の馬です。年齢は……我々でいう、人生経験豊富な熟女——ででしょうか」

なんで？

凱旋門賞馬に対する激熱ハーレム生活は？

ぬきゲーみたいな牧場に繋養されている種牡馬（わたし）はどうすりやいいですか、つてはずが……ええ？

「何故他の種の馬を？」

「種付けは蹴られる可能性など、牝牝共に危険がたくさんあります。なので最初は練習も兼ねて、大人しい馬が選ばれます。経験を積んだ牝馬ですなね。」

あとはもし母馬が亡くなった場合の乳母を用意するという目的もあります。高い可能性で受胎、出産する馬でないとサラブレッドの出産シーズンに間に合いませんし、交配相手をサラブレッドにした場合、生れる時期の問題で遅く生まれてしまうので。

なので、サラブレッドではない、人生経験豊富な彼女が選ばれたわけです。とても大
人しいですよ」

オーケーわかった把握した。

事情があるんだな。わかった。でも紺野さん。あんた昨日俺に「美人が来るから
な」って言ったよな。

このっ……！

でも、「違うじゃん！」なんて失礼なことには言えない！

しばらくすると、彼女——ラベンダーというらしい——は、困ったように笑った。

「貴方もこれから大変なのに、初めてがこんなおぼちゃんでごめんなさいね？」

「いえ、そんなことはありません。とつても……セクシーです」

ほぼ反射的に答えていた。

確かに年はかなり上のようなのだが、何故だろう——馬の本能か、若さ故か、その、正直

……

「すぐく——ムラムラします」

※突然ですがグレートエスケープがトレセン学園にダンスの特別講師としてやって
きたラベンダーさんと、うまびよい伝説を練習するシーンをご覧ください。

「そう！ グレさん、いいわよ！ もっと腰を使って……いいわよオ！」

「くっ、こう、ですか……！」

「その表情素晴らしいわ！ もっとよ！ もっと楽しませることを意識して！」

「ハイッ！ 3・2・1 ファイツ!!!」

——橘ちゃん。恵那ちゃん。

貴方の馬は、階段をひとつ登りました。

競走馬として登ってきた階段とは、少し違った大変さがありますが——俺は頑張っていると思います。

それが役目なのならば——

「なあ、ダーク」

「なんだい、エスケープ」

「……小柄な子って、いいな」

「……は？」

——例え初体験が性癖として刻まれようと。

○ウマ娘編 小ネタ

——ビューティー安心沢とグレートエスケープとオトナノジジヨウ

「私、グレートエスケープも立候補させてもらおう！」

「ほう。貴様が興味を持つのは意外だが……立ちはだかるというのなら、容赦はせん！」
「それなんだけど、グレートエスケープちゃんは参加は無しで」

「なぜ？」

「スタイルがエアグルーヴちゃんと被るから、ちよつと消費者側にアピールしづらくなっちゃうし……」

「経済的な理由！」

○今日の幻覚——グレスケ世界のウマ娘のとあるスレ

「自分、漫画版の『THE GREATS RUN』からウマ娘入ったんで、アプリシナリオの敗北時の歯ぎしりシーンに物足りなさを感じてしまう……」

反応

「プリティじゃないからな」

「本当にいいんですか？ あんな人を○しそうな表情でいいんですか？」

「アプリ↓スポ根 漫画↓美少女擬人化コンテンツでする顔じゃない」

「基本的に絵柄は可愛いのにシリアスなシーンでは表情がギラつきすぎてるのよ。シングレもだけど……」

「プリティとはいったいなんなのか」

「いうほど危険な笑みか？」 【画像】

「進撃の巨人とかハンターとかで見たことあるんだけど」

「コラだろ？」

「本物です」

「アプリも3Dモデルが可愛いだけで血がにじむほど拳を握りしめてただろ!!」

○今日の幻覚——ホープフルステークス

「今日はゴールドシップ産駒で母父がグレートエスケープのミスイベイジョンが出走するぞー！」

「ホープフルS、ミスイベイジョンの鞍上は引き続き館山さんか。新馬戦で最高のスタート決めて逃げ切り勝ちしたのに、札幌2歳Sは出遅れ後方待機からの直線一気とか、どう動くか全く読めないんだよなあ……父ゴルシ母父グレスケだからって、出遅れとか走りまで真似せんで良いの……だから両方乗った事がある館山さんなんだろうけど」

「とりあえず今回は3番人気。2戦2勝、でも調教で全然言うこと聞かないってノリさ
ん言ってたからかな……」

「動画ではまともに走ってなかった？」

「今回の最終追い切りではふわふわ走ったり、しゃかしゃか走ったり、走り方を変えて遊
んでるってコメントが」

「タイムまあまあよくない？」

「いい脚はあると思うんだが……」

（レース後）

「オイ……なんで……ミスイベイジョンが走り回ってる……」

「ゲート出るなり急ブレーキ↓ノリさん落馬↓空馬で1着↓そのまま2周目」

「馬鹿やろうそれやったのはステゴだろ!!! 血が帰りすぎ!!!」

「ノリさんは無事そうでよかった」

「息子の剛史（ツヨシ）が見事に勝利したっていうのに」

「カナタさんは2着で完全制覇はできずかあ……」

「ミスイベイジョンはいつまで走るん？」

「スタミナすげえなあ……」

「ゴルシでもグレスケでもやらなかったことをやる、それがミスイベイジョン」

「※祖父のステイゴールドはやっています」

「とんでもない馬だあ……」

「俺の……俺のボーンナス……え？ おい……え？」

「馬券はほどほどにね!!」

第2話 調子乗ってすみませんでした。

今日は一年に一度の種付けの日。

人間の都合で、私にとつて興味もない牡と引き合わされ、無理やり子供を作らされる。屈辱的で、私は当然言うことなんて聞きたくなくて、やってくる牡馬を尽く蹴って追ひ払おうとした。

「こんな蹴り癖があつたらいい種牡馬は付けられないなあ……」

「断られちゃいますよね……」

「良血だからきつといい子が出ると思うんだけど」

牧場の人間がボヤクが、だとしたら良いぎまだ。

これまで何回もやられていたが、もう言うことは聞かない。

私はこれからは自由気ままに草原を走って、たんぽぽを齧り、ゴロゴロしながら生きていくんだ。

そう思っているでも、やっぱり種付けのために大きくて怖いモノの中に入って、ガタガタ暫く揺られて連れてこられてしまった。

人參は困だったのかもしれない。汚い奴らだ。

「今日とはびきりのイケメンだぞお」

「良血ではないけど、いわば叩き上げてやつだな」

誰だろうと関係ない。

第一、去年はイケメンとか言いながら連れてきたのはオジサンだったじゃないか。

私は蹴って追い払おうとするが、牧場の人達は慣れたもので蹴られないところにする逃げていく。

「グレートエスケープが到着しました」

私はそっぽを向いた。

どうせいけ好かない勘違い牡馬なのだろう。

「やあ、初めまして。僕の名前はグレートエスケープ。今日はよろしく」

「……」

無視だ無視。

どいつもこいつも人間の言うことを聞いて乱暴に迫ってくる奴らばかり。

この牡も同じなのだろう。

近づいてきたら蹴ってやる。

「あー……大変だよねえ。僕もたくさんやるように言われて……正直しんどいよ。愚痴吐く相手もないしさ……君はどう？」

「……さあね。仕事なら仕方ないんじゃない？」

「でも好きな子とこういうことはしたいだろう？ 僕はまだそういう子がいないだけ

ど……苦しいものだよね」

「え——あなたも、なの？」

思わず振り返る。

そこにいたのは、筋骨隆々でありながら、荒々しい雰囲気はまったくなく、困ったように笑う若い牡馬で。

不覚にも、カッコイイ顔だな、なんて。

「くっつー！」

そんなことを考えた自分を振り払うように頭を振った。

私は人間なんかの言いなりにならない。

私は私が望むことだけをやるんだから！ しかし彼の声は、驚くほど耳にするりと流れ込んできて、それが不快ではなかった。

「名前、聞いてもいいかな」

「つ……ジャコビニア……です」

「素敵な名前だね」

「べ、べつにつ。大した名前じゃないから……あ、貴方の名前！」

「うん？」

「こつちが名前を教えたんだから、貴方も名前……を……」

「僕の名前はグレートエスケープ。もう一度名乗らせてもらおうよ」

「そ、そう。貴方も、素敵な名前なんじゃない？」

「ありがとう」

彼——グレートエスケープが名乗ると同時に浮かべた微笑みに、私の心臓は爆発したみたいの高鳴った。

今まで感じたことのない感情に、私は行き場を持たず余した。

しかし、周りの人間たちは急かすように私の後ろに彼を誘導する。

「こらっ、やめないか！ 彼女も望んでいないだろう！」

グレートエスケープが周りの人間たちを追い払おうとしている。

しかし、彼にも役目というものがある。

このまま拒否されては彼が叱責を受けてしまうかもしれない。

気づけば、言葉は口をついて出ていた。

「——いいわよ」

「え？」

「っ……別に、その……私に……そういうことシても……いいって言ってるの！ 恥ず

かしいから早くしてっ。それと……優しくしてよね……」

「ジャコビニア……」

「今は……サニー、って呼んで……子供のころは、そう呼んでもらってたから……」

グレートエスケープはたくましい馬体を揺らし、私の背後に回る。

視界の端に見える彼の姿は、言葉ではこちらをいたわっていても、滾った情欲がにじみ出ているのがわかった。

それが、なんだか嬉しくて、私は彼に体を任せた――

※突然ですがトレセン学園高等部のグレートエスケープと、同じくクラスメイトのジャコビニアがウイニングライブで踊るうまびよい伝説の練習風景をご覧ください。

「うまびよいうまびよい！」

「グ、グレさん、体力がすごいつ……私もうだめで……！」

「ただだけ作戦をこねくり回そうと、結局最後にものを言うのは基礎能力だ。そしてこの基礎能力というのは、地道で苦しい反復練習でしか得られない」

「はあ……はあ……私、もっとグレさんは努力とか……嫌いだと思ってた……」

「私ほど最高のウマには努力は必要ないがな！　ただ、まあ……やらねーと勝てない可能性がほんの少しだけ、あるからな。業腹だが……」

「努力……」

「ニア……練習を再開するぞ。せっかく僕にトレーニングを指導するように依頼したんだ。無駄な時間にはしたくない」

「は、はい！ わ、私も頑張るからっ」

「そうだな。先ほどのダンスの振付だが、この瞬間に脚をこう——」

「わ、す、すごいテクニックと体力……！」

ハイ、というわけで終わり。

お疲れさまでした。フー、気持ちえがっだー。なにが？ 詳しく聞くんじゃあないッ。

「貴方……ぐ……グレ様……次、また逢える、かな……？」

「ああ、きつとまた。貴方が望むなら」

気怠い体を揺らしつつ、笑顔を浮かべるとジャコビニアは蕩けたように笑った。

今日のお勤めはこれで最後。

疲れるが、彼女も中々美ウマであり、つい楽しんでしまった。

種牡馬場を去りながら紺野さんの後をついていく。

「あー、お疲れお疲れ。うむうむ、くるしゅうないぞ」

スタッフたちによる馬体検査を簡易的に受けてから馬房へ帰っていく。

今日の相手全員、俺のムキムキな肉体に見とれていた。

やっぱり怠けた体になってはいけないな、モテ具合的に考えて。

「グレスケ、お疲れ様ー。今日4回やったのにケロっとしてるなお前」

支度を整えると最後は屋内運動場で軽い運動の時間だ。

種付けの後の運動は格別だぜ。こう、男として磨かれているような……自分に酔える感じがたまらない。

紺野さんが以前、種牡馬として大切なのは能力を遺伝させることはもちろん、種付けを何回もこなせる性欲だと言っていた。そして、グレートエスケープはぴったりとも。

エロ魔人みたいな言い方が気になるが、実際好きである。

「く〜♪ けどなー、またもつと走りたいなあ」

紺野さんに引かれつつ、ぐるぐると歩いているが、やっぱり物足りない。

騎手を乗せて、ターフの上を全力で走り、大歓声を一身に浴びたい。

レースから離れて、レースが大好きということを改めて実感するのは、やっぱり世の中そういうものなのだろう。

馬房に戻って飯を食っていると、何やら騒がしい。

空いていた隣の馬房に入る馬が今日来るらしいので、そいつだろうか。耳をすませる

と、聞きなじみのある声をキヤツチした。

「ヤダーツ！ ヤダヤダヤダーツ！ もう種付けやだーツ！」

「もう終わりだから！ 暴れるなって、帰るから！ おうち帰るから！ 大人しくしろ

！」

「帰る！ 種付け行くのもうやだあーツ！」

この声は聞き間違えるはずもない。

長年俺の隣の馬房で生活していた後輩馬だ。

思わずため息を吐きながら呼び止めた。

「静かにしろ、スペシャルウィーク。もう夜になるぞ」

「ああん!? 誰だ僕に意見垂れるのは！ 僕はあの栗東トレセンのボスのグレートエスケープの弟分であああああーエスケープ先輩だアアーツ！」

ばたばたと寄ってくるスペシャル。

さつきまで引き縄を掴んでいたスタツフはずると引きずられているが、まるで構う気配がない。ストレスたまってるんだな。

「うわああああー寂しかったですよおおお！」

「わかったわかった。一回落ち着いてやれ。厩務員が引きずられてるぞ」

築地のマグロのように。

牧場の夜を満月が照らす。

落ち着いたスペシャルウィークは隣の馬房に入れられた。スタッフの人が怒っていたからスペシャルは少しシユンとしていたが、あれだけ引きずられてあのくらいで済むあたり、寛大というほかない。

「エスケープ先輩……ぼくもうだめです」

聞けば種付けが大変で嫌になっているらしい。

まだ種牡馬生活は始まったばかり、今からそんなでは参ってしまうのではと心配だ。

「僕は引退したら人間さんと遊んだり、牧場で一人でかけっこするつもりだったんです」
「そうか。一人でかけっこか？」

「かけっこするときはなんとというか救われてなきやあダメなんですよ。独りで豊かで……」

話を聞くと種付けが苦痛だという。

元々人間によく懐いていたスペシャルにとって馬との関わりが多い今は大変なのだろう。

上手いことやってる俺としては、なにか助けてやりたいができるアドバイスが思いつ

かない。

「まあ、仕事と違って頑張るしかないんじゃないか？」

「エスケープ先輩も大変なんですか……？」

「え？ 大変。ウン、スゴク、タイヘン」

嬉しい悲鳴とは言わない。

「先輩も頑張ってるんですもんね……僕も頑張ります」

ぐすぐす言いながらも気を取り直したスペシャル。

楽しんでいることを申し訳なく思う気持ちもあるが、俺が神妙にしたらスペシャルが楽になるわけではない。

「それで、スペシャルは馬房が変わったが、どうだ。居心地悪くはないか」

「はい！ むしろ先輩が隣にいたので黒井先生のところを思い出します!!」

にこにこ表情を変えるスペシャル。

馬でなくとも、新天地というのはストレスがかかるもの。俺は元々新しい場所は好きだったが、スペシャルはそういう気質じゃないのだろう。

再び隣になったのだから、こいつのことは弟分として守ってやらなきゃな——そう思い、気にかけることにした。

と、いうわけで、なにかとスペシヤルと一緒に過ごすようになった俺は、種付けの合間に放牧地に出されると、のんびりと過ごしていた。

わーつと適当に走ったり草を食むスペシヤルを見る気持ちは兄貴分通り越してお父さんだ。

じつとしていると、スペシヤルに突つかかるほかの種牡馬がいた。

なにやらいびられているようだ。スペシヤルも反論しているが、数と風格に押され気味。

なんだが生まれ故郷の牧場にいた頃を思い出す。

あんちゃんはいじめられっ子だったと言うが、それは本当に子供のときであり、今の俺になってからは我関せずだったと思う。それでもちよっかいかけられたらボコボコにしていたが。

とにかく見過ごせないので彼らに近づいた。

「こらこらきみたち。亀をいじめてはいけないよ」

「亀え？」

「なんだい君は、あっちに行っているといい」

「ああ、彼、新入りじゃないか。この子と同じ」

「こいつが……フン、まあ悪くないんじゃないか？」

「せ、せんばああああい!! こいつらやっちゃっててくださいいよ!!」

「スベ、お前そんなことしてるとファンが泣くぞ。……なんでだろう、俺がファンに怒られそうな気がしてきた」

スペシャルウィークに絡んでいた種牡馬たちはいずれも結構な歳上の馬たちだった。いずれも落ち着きを払いつつも、こちらを値踏みするような視線を向けている。

1頭、少しぼーっとしたようにも見えるが。

「初めまして。グレートエスケープです。よろしく」

「君の噂は聞いているよ。私の名前はフジキセキ。この社来SSで種牡馬をやらせてもらっている」

「……サクラバクシンオー。以後お見知り置きを」

ハキハキとしている青鹿毛がフジキセキ、ぼーっとした鹿毛の馬がサクラバクシンオーだった。

「トウカイテイオーだ。ボクほどじゃないが見込みはありそうだ」

偉そうなのがトウカイテイオー。クールだが見下してる雰囲気のマシマシだ。

舐められては負けだと思ひ、俺は睨み返した。

「そうですね。先輩の去年のサイアーランキングは越えられると思いますよ」

去年（XX99年）38位のトウカイテイオーはわかりやすく青筋を立てた。

「へ、へえ……ボクに対していきなりそんな口を利いたのは君が初めてだよ……！ 皇帝の息子たる帝王に……」

「まあまあ、抑えてくださいテイオーさん。私たちはまだ子供がデビューして2年目だったから仕方ないですよ。私は31位でしたが」

「悪くはないんじゃないですか？ 私は33位でしたけど」

「よしわかった。お前ら全員並べ。走りでわからせてやる」

「……で、お宅らはなんでスベに絡んでいたんですか」

「君は誰なのか、それを聞こうとしたら『僕の名前を知らないんですか！ はーっ、これだから田舎モンは……』って言われてね……そしたらこっちのテイオーが興奮しちゃって」

「このボクに無礼な口を叩く新入りを教育しようとしたただけだが？」

フジキセキが疑問に答えた。

合点がいった。俺は後脚で立ち上がると、前脚でスペシャルの頭に振り下ろす——いわばゲンコツをかました。

「わアっ!? 痛い……！ いたあーい……」

「お前が悪い。謝りなさい」

「ええ……だって僕、エスケープ先輩の次に偉いのに！」

俺はもう一度前脚をそつと浮かした。

「調子に乗ってすみませんでした！」

「俺からも謝罪する……すまなかつた」

「つたく……ボクは寛大だから許してあげよう。まずはボクの子分としてせいぜい励む
といい」

「嫌だけど」

「なつ、なにーっ!? ちよつと話が分かるやつだと思っていたらつけ上がりやがつて
……喰らえ、テイオーキック!!」

「……トウカイテイオーくん? このグレートエスケープに何か言うことがあるんじゃないか?」

「すみませんでじだ……」

暴力には暴力で。怪我しない程度にしこたまシバいてやったらだいたいぶ従順になった。

瞳は『コノヤロウ、次はボコボコにしてやる』と雄弁に語っていたが。

「さて、親睦を深めることができたわけだし！」

「この流れで? こいつ無敵か?」

「今夜、この社来SSの種牡馬たちの集会があるんだ。そこで君たちも自分のことを

知ってもらおうといい」

フジキセキの説明に俺は首を傾げた。

夜は全頭馬房にいるはずで、放牧はされない。

そもそもひとつの放牧地に種馬たちが一同に集まることなんてないのではないか
……。

そのことを彼に聞くと、意味深な笑みを浮かべた。

「ふふふ、人間さんにバレなきやあいんだよ」

「無理だろ……鍵を開けるとかそういうの含めて」

「細かいことはいいのさ！ この牧場には3頭のボスがいるから、ちゃんと挨拶をするんだよ？」

「ボスう？ これまためんどくさそーな……」

「ハイハイ！ それボク！ それボクがなる！」

「静かに」

「ハイ」

「……フジ」

「お、なんだいバクシンオー」

「そろそろ……人間さんが来る……集牧（放牧地から馬を馬房に戻すこと）の時間だ」

「そっか！　じゃあみんな自分の放牧地に戻ってね！」

「やいグレートエスケープ！　次はボクがボコボコにしてやるからな、首を洗って待つてろ！」

言うやいなや、フジキセキ、サクラバクシンオー、トウカイテイオーの3頭はそれぞれ自分の放牧地の方へ戻るとどんな手段を使ったのか、柵を越えていった。

「……先輩。みんな当たり前のように放牧地を乗り越えているんですけど、いいんですか？　人間さんに怒られますよね」

「まあ、そうだな」

「とういかどうやってるんですか!?　あれみんなできて普通なんですか？」

「いや……普通でできないはずだけど……なんだ、人間の見てないところでサラブレッド（俺たち）は色々やってるのかもな」

「ええ……やりませんよお」

「俺もそう思う。じゃ、俺も帰るから」

よっこいせ。

柵の1番上に前脚を乗せて、その力で柵の上に立ち、通路を挟んで反対側の放牧地にジャンプする。柵が鉄製でよかった。

「エスケープ先輩も普通にできてるじゃないですか!？」

スペシャルの悲鳴が聞こえた気がするが、よく聞こえなかった。気づけば厩務員が放牧地にやってきて、馬たちを呼んでいた。

「テイオー、帰るよ」

「この帝王たる僕に向かって呼び捨て？ ふつ、これだから下々の民は……まあいいだろう。早く食事の準備をしたまえ」

「ほんと悪さをしない馬だなあ……気分を害さなければ大人しい……」

「フジキセキ。馬房に帰るよー」

「えー、せつかくなら遊ぼうよ！ ほらこつちで！」

「やめなさい、シャツの袖を引っ張らないの。やめ、ちよ、すごいちからだ！ アツ!？」

「パルフ・ローレンのシャツがツ!!」

「バクシンオー。……寝てる？ あ、起きてるか。じゃあ帰るよー。……寝てる？」

「……ちよわー」

さきほどの3頭はそれぞれ、馬房に帰っていく。

俺たちの前で見せた姿とはまた違うキャラだったが、人間でも相手によつて振る舞いは変わるもの。馬たちも意外とそういうところがあるのかもしれない。

「エスケープも帰りますよおー。君も大人しいね……」

夜になった。

「集会の時間だ！ コラア！」

!?

「というわけで迎えに来たよエスケープくん」

「ああ、フジキセキか……いったいどうやって鍵を……まあいいか。おい、スペシャル、行くぞ」

「むにやむにや……まだ食べられるよお」

寝ているスペシャルウィークを叩き起こして放牧地に行く。満月に照らされ、真夜中でありながらたくさんさんの馬たちが過ごしているのが見えた。

周囲の馬たちが値踏みするぶしつけな視線を俺とスペシャルに向ける。

重く淀んだ空気が滞留していた。

少なくとも歓迎会をやる雰囲気ではなさそうだ。

その集団の中で、中心ともいえる位置に2頭の馬がいた。

「おい、フジ……そいつが例の新入りか」

「そうだよ。お父さん」

お父さん？

青鹿毛と呼ばれる、混じりけのない美しい黒い身体を誇る鋭い眼光を持つ馬。

ミルクを垂らしたかのように伸びた流星が月夜に輝いていた。その馬は気だるげに名乗った。

「オレの名はサンデーサイレンス……大人しくしてろよ、新入り。オレがこの社来SSのトップだ。あと……おい、マックちゃん。マックちゃんも自己紹介してやれ」

「どうも。メジロマックイーンです。一応、ボスということにされています。とにかく、私の邪魔をしなければそれで構いません」

言葉の節々に、マウントをとるような心配。

別に序列なんてものに興味はないが、舐められるのは気に食わない。

ジャブひとつでも打ってやろうと、口を開いた。

「俺はグレートエスケープ。辛気臭い場所のボスとよろしくするつもりはあまりないが。お通夜みてーだ」

挑発を口にした途端、空気がぴり付く。

ボスを名乗る2頭だけでなく、周囲にいた馬たちの視線も警戒から敵意に移り変わったような気がした。

怖いのか、スペシャルが後ろからつんつんと突いてくる。

「ビビってんじゃねーよ、スペシャル。ただのアイサツだろ、こんくらいは」

「いや……あの……お通夜です」

「なにが」

「今夜のこの集まり……マジでお通夜なんですよ。ほら、あそこ」

スペシャルの指示する方向には、1頭の馬が遺影を抱えていた。周囲を、その馬を慰めるように他の馬が囲んでいる。

「おじいさん……せつかく会えると思ったのに……」

「辛かったねアドマイヤバガくん……トニービンさんは君のことをとても誇りに思っていた……」

「泣いてもいい。そのあと、彼のぶんまで頑張るんだ……」

思わず表情が固まる。その傍には何をどうやって取り付けたか知らないが「名馬トニービンを偲ぶ会」という文字が書かれた垂れ幕があった。

「あ……え……？ えっと……」

よく見たら周囲の馬たちは睨むというより、涙を目に浮かべている。

ああ、これ、完全に告別式とか、そういう場面だ。

俺は耐え切れなくなって叫んだ。

「調子乗ってすみませんでした!!」

「凱旋門賞シナリオから半月……やはり来たな。グレートエスケープ凱旋門賞衣装が……！」

俺はウマ娘の運営アカウントからの告知に胸を躍らせていた。

先日実装された凱旋門賞シナリオ。そこで先にお披露目されたグレートエスケープの新衣装が、ファンたちの予想通りに実装されたのだ。

「衣装は……和風のお姫様スタイルなんだな。ちよつと忍者？　みたいな要素があつて……まさかこれ、総大将スぺと対になる衣装つてことか!!」

鎧武者とドレスを重ねあわせた衣装の、通称『総大将スぺシャルウィーク』と同じような赤を基調とした和風ドレスは丁度隣に立つと見栄えがよかつた。

ちよつとアウトローでニヒルな身長172cmのキレイ系お姉さんと天真爛漫真面目系つぱり少女（身長158cm）な後輩つて……たまんねえーッ！

俺は思わずPCの前で拳を握つて声を上げた。

リビドーが溢れて止まらない。

その前に性能も確認しなくては。

「というわけでここに天井まで回したガチャ履歴がありますクソが！」

「世界の誰にも止められない、捕まえられない——私こそが世界最高のウマ娘だ」
【見参・花之都！】グレートエスケープ

得意率 パワー8% 根性8% 賢さ14%

適性 芝：A ダート：C

短距離：G マイル：D 中距離：A 長距離：A

逃げ：A 先行：G 差し：A 追い込み：G

・固有スキル

『波濤を越えて』

スタート時に出遅れた状態で、レースを冷静に運び、終盤の最終コーナーに中団にいると速度がすぐく上がる。ロンシャンレース場の場合、加速力が上がる。

・覚醒スキル

『会心の一步』

『コーナー回復』

『差し切り体勢』

Lv2 『垂れウマ回避』

Lv3 『乗り換え上手』

Lv4 『中距離コーナー○』

L v 5 『王手』

・進化スキル

L v 3 『逃亡者の乗り換え』

レース終盤始めの方に中団以降にいと加速力が上がり、前のウマ娘を動揺させる。ロンシャンレース場のなら、効果が増加するが、出遅れやすくなる（差し）

L v 5 『偉大なるチエツクメイト』

終盤の最終コーナーで中団以降にいる時、ゴールまで遠いと加速力が上がり、速度も上昇する。中距離レースの場合、効果が増える。（差し）

「あれっ、脚質が変わってる……逃げ先行タイプだったのに、まさかの逃げと差しというアンバランスな構成になってるじゃん！ ……これはアレか。普段の逃げグレと凱旋門賞で差した差しグレを表しているのか……ってか自前で加速ゴリゴリのスキルがあるあたり、完全にロンシャン仕様なのな」

そんなことを言いながら、早速育成を始める俺。

俺のチャンミ育成苦行は始まったばかりだ!!